日本プロレタリア文学大系

7

三一書房

責任編集　平野謙　藏原惟人
小田切秀雄　野間宏　竹内好

日本プロレタリア文学大系

7

弾圧と解体の時代　下

文化連盟の成立から中日戦争の開始

三一書房

第七巻

「弾圧と解体の時代」（下）

凡例

一、収載作品はできるかぎり初出の新聞・雑誌によって校合した。ただし仮名づかいはすべて新カナに改め、伏字はおおむねもとのままとした。

二、収載作品の配列は、小説・戯曲、評論、詩・詩論、短歌、俳句の各文学ジャンル別にしたがった。無署名のアッピールなどは資料として評論の部に編入した。

三、各ジャンル内の収載作品は、原則として発表年月順によったが、ときに執筆年月によって配列した場合もある。

四、短歌・俳句の作品選定は、各巻をとおして、渡辺順三、栗林一石路の両氏に協力をあおいだ。

第七巻目次

I 小説

II　評　論

III　詩・短歌・俳句

詩

短歌

朝霧

俳句

I 小説

釜ガ崎

武田麟太郎

カツテ、幾人カノ外来者ガ、案内者ナクシテ、コノ密集地域ノ奥深ク迷イ込ミ、ソノママ行先不明トナリシ事ノアリシト聞ク——このように、ある大阪地誌に下手な文章で結論されている釜ガ崎は「ガード下」の通称があるようにいるのであるが、さすがその表通は、紀州街道に沿っているので、恵美須町市電車庫の南、関西線のガードを起点として皮肉にも住吉堺あたりの物持が自動車で往き来するので、幅広く整理され、今はアスファルトさえ敷かれている。それでも矢張り他の町通と区別されるのは五十何軒もある木賃宿が、その間に煮込屋、安酒場、めし屋、古道具屋、紹介屋なぞを織込んで、陰欝に立列んでいるのと、一帯に強烈な臭気が——人間の臓物が腐敗して行く臭気が流れていることであろう。

一九三二年の冬の夜、小さな和服姿の「外来者」が唯一人でこの表通を南の方へ歩いていた。冷い雨が降って、彼のコーモリ傘を握った指先も凍って痺れているのに、別にここで宿を求めるでもなく、人を訪ねるけしきもなく、ゆっくりとした足どりであったが——その様子を、家の軒端に立って、今まで首巻代りにしていた手拭で頬被りし、腕組んでいる宿なしたちも別に注意しなかったし、交番所の年とった巡査も怪しまなかったところを見ると、その外来者は、この土地に適した顔かたちをしているのだろう。そう云えば、実は彼は東京に住む小説家であるが、批評家たちがいつでも口癖のように「彼にはルンペン性があって、どうもよくない」と眉をしかめているのも思い当るふしがないでもない。——しかし、彼はこの寒さに何の気紛れからして、あんなに物思いに沈んだ表情でこの地帯を行くのかと、人は問うかも知れぬ。それは過去をなつかしむ感情に駆られた結果である。と云うのは、彼はこの街で生れ十二まで育ったのであるが、ほんの三日前、ここで彼を手塩にかけて大きくした母親が急死し、その追憶の念が彼の足を知らぬうちに、こちらへと向けさせたわけである。もとより彼はまだ年少で、自分の激情を制するすべもわきまえぬ男故、要もないかうした夜歩きや感傷癖を許してやってもよいだろう。

すでに、街から醱酵する特殊な臭いは聯想作用を起して、彼の胸に種々な過去の情景を浮びあがらせ、彼はそれに簡単に陶酔して了っていたので、その尖っている眼もいつに似ず柔和に光り、何も見ていないに近かったのであ

る。唯、去来する思いが——たとえば、袋物工場に通っていた母親が、夜も休まず石油の空箱を合にして（その箱の隅には小さな蜘蛛が綿屑みたいな巣をかけていた！）セルロイド櫛に、小さな金具の飾をピンセットで挟み、アラビヤゴムと云う西洋の糊でつける仕事をしている横に、新聞紙にくるんだ芋が置かれてある有様や、そして、その芋は彼女の夕飯代りなのだが、夜更けると子供たちが腹をすかせるので、彼女は大半を残して置き、子供たちがせびると「何云うねん、こらおかんのや」と云いながらも分けてやり、または、その飾附けの出来あがった櫛を十歳の少年である彼と共に大きな重い風呂敷包にして、大国町の問屋に運ぶ時の手だるさやら、そんな稼ぎものの彼女にも係らず、ある夜は鴉金屋の親爺に罵られて（彼が今にいたるまで鴉金の名称を忘れずにいるとは何と云う因果なことであろう。それは朝貸出した金が夕方には利子をくわえて元の巣へ飛戻って来る——鴉のように、と云うので、そう呼ばれていた。一円を借入れると、先ず十銭は天引、手取は九十銭であるが、その後一円の五歩の利息を加えて、八日間に返済しなければならぬ）彼女はしかたなく、片隅に積んであった小便臭い家族たちの蒲団を頭にかついで外へ出て行くと、その頃流通していた十銭紙幣の油じみたのを持って帰って来たが、その夜の明け方の寒さやら、或はぐうたらな遊び好きの少年であった彼が、尾上松之助の侠客物が見たくて、彼女に嘘をつき金をねだり、すると彼女はまた思い余って、巻いていた帯を解いて絆の前掛だけになり、——帯は彼の入場料になって、彼は活動写真に感激した余り、二階の上りっぱなの壁に、墨で以て、眇眼の尾上松之助の似顔絵を大きく書いたり——

妙なもので、遠い以前の習慣を、足は忘れずにいて思い出したものか、無意識にふと立ちどまり、そこで小説家がはっとして眼を転じるならば、ちょうど彼が生れて育った家の、路地先まで来ているのであった。雨にベタベタに濡れて光る浪花節のポスターが、床屋の表にぶらさがっているが、その横を折れて二軒目がそうである。——この床屋も代が変ったであろう、彼はいつも小僧のために「虎刈」にされていた。今夜はもはや客がないと見え、ガラス戸を閉めて、白いカーテンを張りめぐらしてあるので、内らは覗けぬ。

路地に入ると暗がりで、軒並みの家々の影も、永い年月が経っている故、古びて歪んでいるように思われ、しかもどこもしんとして静かなのが、少し小説家にはよそよそしく感じられないでもなかったが、懐しい場所に再び立入ったことで、彼の気持はすっかり満足していた。——自分が十二年もいた家に、今は如何云う人が住み、如何云う生活がなされているかと、想像するのは、甘い楽しみであったから。

すると、彼はその家の戸口に女が出て来たのを認めたのである。それは恐らく、そこのお神さんで、外出しようと

するのだが、雨はまだ止まぬかと模様を見ているのだろうと、察した彼は、迂濶に佇んでいたりして、不審がられるのを恐れ、わざと、もちろん軒灯もないから見えるはずもないが、それは隣家の表札に眼を近づけたりするのであった。だが、それは無効であったと云える。女は片足を踏出すと、突然、彼の袂を――それから身体全体を抱えるように掴えて了ったのである。そこには必死な抵抗すべからざるものがあった。小説家は身をもがいたが、とすぐに慣れた――たしかにそうすることに慣れた、特殊な技巧のある女の両腕は強くて離れず、それではこの女は、まだ半信半疑のうち彼は気がつかぬでもなかったものの、もはや土間にひきずり込まれていて――そこに、昔の彼が顔を洗い水を飲んだ場所がちらと見えたかと思うと、どんと揚板の上へあげられ、更にむりやりに尻を押されて、よろけそうになりながら階段に足がかかる時には、やっと一切を理解し得たので、少しの落ちつきも取りもどし「おい、そう押すなよ、危い」と、女の方を――化粧した吹出物のある顔を振りかえって云い、それからひょいと正面に向き直ると――彼の眼には、二階への昇り下りにしめっぽい手垢ですっかり黒く汚れた壁の上に、まぎれもなく彼の筆になる尾上松之助の似顔絵がはっきりと残っているのが、うつったのである。うつると同時に一種の感慨に胸をせめつけられ、急に酸っぱい気持がこみあげて来て、不覚にも尾上松之助はぼうっとぼやけて了い、女に抗っていた身体の力もそのまま抜けて了ったような気がした。

女は、まだ雨しずくの垂れそうなコーモリ傘と泥を歯の間に挟んだ下駄とを敷居の上に寝かせてから、高くつった黄色い電灯の光を裏から受けているので埃の浮いて見える歪つな日本髪の頭を傾け、彼の様子を――今にも泣出さんばかりのその表情を、けげんそうに、打守るのであった。もちろん彼女には訳はわからず、この何と云う気弱な男であろう、淫売婦に有無を云わさず乱暴に引張りあげられたのを、どぎもを抜かれ、後悔しているのかと、考えたかも知れぬ。そこで彼女も少し呆気にとられ、ぼかんとした顔で、寒さに歯をガチガチと打鳴らしながら、

「すんまへん」と、云った。――それから、気の毒そうに彼の方へ掌を差出したのである。

小説家は、彼がこの家で生れたこと、あすこに見えるあの落書こそは彼の手になるものであること、しかも、思い出の積っているその建物は、今は淫売婦の仕事場になっていること――それらを、彼女の前に語り出したくなったほど、感傷に溺れきっていた故、女の請求をはねつけるだけの勇気もなく、一体何ほど与えればよいか、と細い声で質問するのであった。

「すんまへん」と、また彼女はあやまるように云い、――「五十銭やっとくなはれ」と態度は優しく嘆願するのであるが、その精神には、今にも彼の懐中に手をさし入れるばかりの執念深さがあった。

彼が、どうかして母や弟妹をこの窮乏から救い出したいものと、来る日も来る日も考えつめていたこの六畳の部屋は、薄い雨戸を真中に立てて、二つに区切られてい、あちら側にも人の動く気配があったが、ちょうどその時、その中から口争いをはじめた男と女の声が聞えて来たのである。

――女の声がののしるには「そんなあほらしいことできるかいな――そんなことはなア、十銭淫売のとこでも云うとくなはれ、うちはちとちがふ!」と云い、見そこなっては困る、あほたんめと、附け加えるのであった。――小説家は、その言葉に気をとられながら、それでは隣りにいる女も五十銭の口なのであろう、だから、十銭のものよりも格式を以て客に臨んでいると云うわけであろうと考え、妙なところに、――人はどん底まで来ても、まだこれより卑しい下のものが存在するのだと自分を慰めて、高い心を失わないでいることに、――感心していた。――しかし、相手の客は、嗄れた声から察するとかなり年配らしいが、なかなか承知しないと見え、争いは益々烈しくなって、果は彼らの身体が雨戸にぶっつかり、今にもその頼りなく、がたつくしきりは倒れそうに動くのであった。――それをこちらの女は、実に無関心な表情で見ていたが、暫くすると、お前はどうしても暴れる気か、それならば、ちょっとこちらへ来てくれと、別の男のへんに調子の低いおどかし声がして、ぐずねていたのは「よし、帰ったる、帰ったら文句ないやろ、五十銭かえせ」と喚きちらし、女は女で息をはずませて癇高く――「一旦もろたもんが返せるもんか」なぞと叫びつつ、やがて、彼らはガタガタと階段をころがるように下りて行く音がした。――いや、階段は小説家の坐っている側にあるし、そしてこの小さな家にそれが二つもあったはずはないと、彼は怪しんで背延びをし、雨戸越しに、何やら取り散らけた喧嘩の現場を見るのであった。すると、あちらの壁が無惨にくり抜かれてあって、洗い晒しの浴衣地をカーテンみたいにしたのが、汚く垂れさがってい、隣家の二階と通じているのが分ったのである。では、隣りも同様かうした宿になっているのかと、彼は、そこに住んでいた荒木と云う葬式人夫の一家や、恐しく出っ歯であったが秀才で、今宮の職工学校に通っていた息子のことを思い浮べるのであった。

それから、女は小説家の顔をちらとのぞき、そこに敷きっぱなしになっている薄く細長い、浅黄の蒲団の上に倒れて見せた。――彼はそれには及ばぬと、幾度も繰りかえして説明しなければならなかった。しかし、女はなかなか承知せず、執拗に誘いの言葉をかけるのである。彼女は、男とはそんなものではないと十分悟っているようにふるまっていたので、無為に金を払うのを想像できなかったのであろう。

「それではすんまへん――銭もろといて遊んでもらわなんだら」と、またも云うのであった。それは労なくして賃銀

を受取ることを恥しく思うけなげな心持からと云うよりは、むしろ、彼が遊ばないのを口実に全額でなくとも、五十銭の何割かの払戻しを請求しはしまいかと、恐れたが故であったようだ。
「ほんまに、えらいすんまへんな」と、やっと彼女は納得して云ったが、それでもまだ――「ほんまにかましまへんか」と、尚も云いながら、そこに坐り直すと、バットの箱から吸いさしの煙草を出し、ちょうど彼が点けた燐寸の火に、頭をかがめて、吸いつけるのであった。赤っぽい髪の毛や、垢ずんだ首の皺や襦袢の襟が近づき――しかし、その時、彼は何か発見したような眼つきになり、じっと彼女の身体つきを検べ、眺め廻したのである。
女の煙草は短かかったので、すぐになくなった。小説家は自分の箱を荒れた畳の上に置いて、一本つけては如何かとすすめるのであった。だが、女は女らしく遠慮して「五十銭ただもろて、その上、煙草のませてもろたりしては――それこそ、冥加につきます」と、辞退して手を出さなかった。それ位いいじゃないかと、尚も彼が云うと強情に身を引かんばかりにして、
「いいえ、いけまへん」と、しほらしい表情をして見せたが、急に彼は自分の観察が誤っているか如何かをためしたくなって、何の悪い気もなく、
「あんたは、女とちがうな」と云ったのである。それを相手は随分と意地悪くきいたかも知れなかった。どうして、そんなこと云い出したのだろうと、暫くの間、女は彼の顔を見つめていた。それから、両手を揉むようにして、下うつむいて、嘆息した。
「やっぱり――分りまっか」と云って黙り込み、それでもまた勇気を取戻したのか、
「そやけど、今までに一ぺんも見現されたことはおまへなんだ、ほんまだっせ――兄さんにかかってはじめて――わやくやな」と、てれ臭そうに、力を入れて云った。
思った通り男だったのかと、小説家はうなずいたが、何とも分らぬ変な気持になって――「ほう、そいで」と云い出すと、相手はその顔色を読んで、すぐ答えた。
「ええ、ちゃんと、そいで商売してますねん、おなごとしてな」と奇妙な陳述をするのであった。小説家は飽かず、この相手を見ていると、そいつは、女でないと云うことが明白になってから今までと著しく態度を変えた。すぼめるようにしていた肩も張り、
「ほんなら、一本いただきまっさ」と、遠慮を打捨て、手を出して煙草の箱を取ったが、その指も骨ばって来たようにさえ思えたのである。そして、
「もうとしですよってに、身体が堅うなってしもて――」と云い、問いに応じて、二十歳であると云った。
「まだ子供の時は、これでも綺麗や云うて、お客がたんとつきましてな――なんにも知らんとな」と、女のように口へ手をやって笑ったが、急に煙草を揉み消すと、

「あんまり、ゆっくり、ここにおられまへん――何やったら、わてのホースにおいでやすな」と、彼(女)は小説家が奇怪な話に興味を持ち出したのを知ってそう誘い、ここでは部屋代をとられる故、散財をかけては済まぬ、自分のところへ来い、と云うのである。「ホース」と云うは、「ハウス」か「ホーム」の訛りであるらしかった。――

「すぐ、そこだす、第二愛知屋だす」

そこで、小説家は偶然なことから、彼の懐古心を満足させ得たことを思い起し、今更のように、感慨深く部屋を見廻し、玩味し、剝げた壁や畳に、もはやこうした宿らしく人間の汁液が浸込み饐えた臭いがこもっているのや、天井の薄い板もところどころ外れて垂れさがっているのを、認めるのであった。そして、再びその部屋を、楽書を見ることはなかろう、と思った。

れいの女装の男は階下へ、彼のために傘と下駄とを持って行き、破れた障子の中へ首を突込むと、中の者に何やら云い、それから大きな声で、「おほきに」と、挨拶して彼を促して、外へ出た。

表通の方へは行かず「こっちから」と、路地の奥を突抜けると、木柵があって南海鉄道のレールが走ってい、ずっと遠く天王寺公園に当って、エッフェル塔のイルミネションが、暗い空に光を投げている。――その黒い木柵の間を、彼(女)は着物も長襦袢もたくしあげて跨ぎ、危うおまっせ、と彼のために傘を持ってやって、案内するように云うのであるが、もとより、小説家は子供の時に、そのレールの上に針金を寝かせ、電車の車輪にしかせてペチャンコにしたり(彼はそれでナイフを作ろうとしたのである)石を積みあげて、食物や道具を一ぱい載せているにちがいない貨物車の顚覆を企てたことがある位だから、必ずしも見知らぬ場所であるとは云えなかった。北の方から電車が進んで来、警笛を鳴らし、蒼白く烈しいヘッドライトはそれを避ける彼らの影を、雨に濡れた軌道の小石の上に大きく振廻すのであった。越えると空地があり――その暗い中に、何やら人のざわめきがし、群れ集っている気配があった。

「轢死人があったんか知らん」と、女装の男は云った。

――。

(ここで、もう一度、小説家の煩しい回想を許してやりたいと思う。かつて、このあたりではよく人が轢き殺された。彼らの生命が安かったせいかも知れぬ。夜更けてけたたましい警笛が長く尾を引いて鳴り、急停車する地響きがあると、仕事をしている手を休めて、彼の母親は「また誰ぞ死んだ」と云ったものである。その時は身に迫るような寂しさを子供は感じた。そして、朝になると、今彼らの眼の前にある広場に蓆のかけられた血のしたたる屍骸が横たわって、検死の済むのを待っていた。多くは無一物で、生きても死んでいる者たちであったが、ある冬の朝、近所のお神さんたちは、昨夜の轢死人は懐中に十円もの金を持っ

ていたと噂し、そんな大金を持っていながら、どうしてまた死ぬ気になったのであろうと語っていたので、それを聞いていた子供たちは大急ぎで柵をくぐり抜け、もしや、その不要な金を子供たちに分けてくれはせぬかと、一散に走って行ったことである。）——

処々高低のある、雨で歃くなった土をごぼごぼと踏んで、彼らは、人だかりの方へ近づいた。外套をすっぽり着た巡査が懐中電灯を照して色々と命令し、人夫風の男が、ぐったりした老人の大きな身体を、寝台車に担ぎ込まうとしていた。それはトルストイのような顔をし、白い髯を長く延ばした爺さんであったが、なかなか重いと見え、人夫は白い息をふうふうと吐いて少し手古ずり、すると、人々の間から、白けた絆纏の浮浪者が出て——「爺さん、しっかりせえよ」と声をかけて片足をかつぎ、黒い布被いのある車へ載せるのであった。そして、力なくだらりと垂れた老人の足からは、竹の皮の冷飯草履がぬげて落ち、垢ぎれでひび割れた大きなその足裏が気味悪く、懐中電灯の光にうつし出されるのであったが、れいの浮浪者は逸早く、草履を自分の足に——彼ははだしだったので、ひっかけた。すると、巡査は癪にさわったように、「おい、おい」と顋を振って注意し、——「そら、病院のや、いれとけ、いれとけ」と叱った。浮浪者はすなおに、その病院の名らしく焼印の押されてある草履をぬぐと、肘で拭うのであった。何故なら、すでに彼の足の泥がつき、濡れて了っていたのである。少しして、それを老人の足指にはめようとしたが、すぐ落ちてダメなので、人夫は黙ってひったくり、車の底へ押込んだ。

「兵隊辰やな」と、女装の男は、癖で歯をガチガチ寒そうにならしながら、小説家に説明して云った。その声に、巡査はちらと、こちらを見たが、人夫が寝台車の梶棒を握って立ち上ると、「爺さん、もう戻ってくれるな」と云った。さっきの浮浪者はそれに応じて、「旦那、兵隊辰はもう二度とここへ帰ってけえしまへん——今さき、触ったらもう冷とうおました」と低く云ったが、巡査は苦々しい顔をした。——「困ったやっちゃ——わしの責任になるがな」そして、今まで、爺さんの寝臥していた蓆を靴の先で蹴り飛ばした。

車はゆっくりと去って了い、人々も散るのであった。あとには、雨が再び寒く降りはじめ、女装は、「おお寒むやこと、すっかり冷えこんでしもたわ」と、云った。広場はもとの静けさに戻り、あちらこちらに火が燃え、雨の中に明るさが溶けて見えるのである。それは浮浪者たちが、大きな穴を掘り、その中で物を——塵芥を燃しながら、その白っぽいむせかえるような煙の横に、うずくまって、眠りをとっているのであった。

「今晩は」などと、その穴の側を通りながら、小説家の同伴者は声をかけ、

「降って困りまんな」と云うのである。

兵隊辰とは——歩きつつ、彼（女）が語ったところによると、以前は軍人で、日清日露も両方とも出征して勲章を貰ったが、心臓を患い、子供身寄もなくて、ここまで零落したのである。最近は殊に衰え、寝込んでいたので附近の宿なしたちが心配して、慈善病院に入れるよう「旦那」に交渉し、そして入れたのであったが、すぐと、不自由な身体をひきずって、この空地へ立ち戻って来た、驚いて連れて行くと、また、ひょろひょろと帰って来、それを再三再四繰りかえしていたと、云う。

「なんでや」と、小説家はたずねた。彼は、そうした慈善病院の官僚的な冷い有様や、堅い寝心地の悪い木のベッドよりも、弱った神経のうちから馴れた野宿を思い出すあの浮浪者魂のことを、考えていたにちがいない。

しかし、相手は、

「なんでだっしゃろな」と無関心に答え——「寒い、寒い——兄さん、お酒はどうだす」と、云うのであった、なるほど、広場を過ぎたところに、焼酎屋があったが、彼は、

「さあ、金があるか知らん」と心配すると、

「いや、大丈夫」と、女装は力を入れて「おます」と、勝ち誇った。先程、小説家が彼に五十銭与えた時、その財布の中を、のぞいて数えて了ったのだと云った。それは商売からして、無意識に行うのである。

——油障子を半分だけ閉めた中の、二すじの長いテーブルには、人々が——ボタンのない外套の上から縄をしめたのや、羽織もなく寒々とした黄色い顔の男や、絆纏にゲートルを巻いて、何か知らぬが大きな風呂敷包を腰にくくりつけたのや、眼脂で眼蓋のくっつきそうになり、着物の黒襟が汚れてピカピカに光っている女やら、——みんなすでに酔払っていて、頭を重く垂れ、時々あげてあたりを睨むと訳の分らぬ叫びをあげて会話し——一切が不健康に濁り、空気は淀んで腐っているように見えた。小説家と女装の男とは、あいたところに腰をかけ、値段書のぶらさげてある背後の羽目板にもたれ急に冷くなった足先を土間で踏みならしながら、店のものが大きなコップに焼酎をつぐ手許をじっと見るのであった。透明な液体は溢れて、木目のはっきりした汚いテーブルの上に流れると、女装は口を近づけて吸込み、舌なめずりするのである。更に彼は媚びるように小説家を見てから、艶っぽい声で店員に註文を発すると、豚の臀臓をそのまま薄く切ったのが塩を副えて持って来られ、彼（女）は指でそのべろべろした血のかたまりみたいなものを、つまみあげて、彼に、

「どうだす、ひとつ」と云うのであった。——「ちょっと臭がしますけど、通人の食べものだっせ」

そうかも知れぬ。しかし、小説家は手を出すことをしなかった。

やがて、簡単に酔いが身体に廻ると、昂奮して女装は、多弁になり、ハンカチを出して胸にあてたりして、口惜しがるのであった。それは、またしても、彼（女）が今まで

本当は男であるのを発見されたこともなく、――また真実女であって、その他の何ものでもないと、自分自身も永い間信じきっていたと云うことで、縷々としてつきなかった。彼（女）はその日常生活の末々端々にいたるまで女子として行動し――そして売春婦として存在することによって、一家三人が第二愛知屋（木賃宿）に一部屋を借り受けてこの数年暮しを立てて来、もちろん、その弟で十四歳になるのも昨年あたりから女になって、客をとることを覚え彼らの母親はかなり楽になったが、――

「やっぱり歳のすけないのは、骨がやわらかいし、肉もしまってまへんよってに、もうわてらと較べもんにならん位、よう売れます」と、感心して、彼は云った。その弟が先日警察の手入れであげられ――そこで、肉体を発見され、釈放される時には、折角延ばして結ってあった髪の毛を短く刈取られて了った。――「早う生えてくれんと、商売でけしまへん、ほんまに無茶しよる」と、彼は憤慨して抗議した。「そんなことする罰は法律にはないそうだす」と、彼は知合の――同じく第二愛知屋に宿泊している弁護士（！）に聞いたと云った。色々と話の末、彼（女）は今後も完全な「女」として生きる決心を告げ、（そうした女としての暮し、その衣裳、殊に下着や腰にまとうものを身体につける時の悦びを昂奮した調子で彼は語ったが、妙な商売の思いつきから、すでに救うべからざる倒錯症にかかっていることを証拠立てた）――最後に、

「こうなったからには、意地でも、どうかして子供を産んで見せます！」と、断言したのである。小説家は、その言葉が単に彼（女）の酔いから無責任に放たれたものではなく、本当にそう信じているらしいのを見て驚いた。

「なに、子供を産む――何ぬかしてんね、ど淫売の癖に、ふん、父無し子か！」と叫んだものがあった。奥の方にいてボタンの一つもない外套を着た男であるが、とっくに酔い倒れて、テーブルに両手を投出して眠っていたのに、そう呶鳴ると立ちあがり、彼らの方へ危げにやって来た。

皮膚の上にもう一枚皮膚ができたように、垢と脂とで汚れきっているが、眼蓋や唇のぐるりだけ、黒ん坊みたいに隈どって生地の肌色が現れていた。――彼はたしかに、そう声をかけたのを機会に、小説家の方へ来て、焼酎をせびろうとしたのである。それは、すぐ「産むなら、なァ、この旦那の子供を産めよ――ほんまやぞ、なァ、旦那」と云って歯を出してお世辞笑いしたのでも分った。ところが、彼は今一ぱいの焼酎が咽喉をよく通らないほどになっていて、酒はだらしなく、口から涎のように流れ、コップはぽんとテーブルの上に投げられ、ころがるのであった。

「あア」と、彼は聯想するように云った。「なァ、ほかのやつの子を産むな、間男の子なんか産んでくれるな」――

それから、彼は急に泣き出して了い、「わいの嬶は、間男しやがって、そいつの子を産みやがって」と嗚咽したが、やがて濡れた顔をあげると、

「何もそんなこと、最初から分ってたんや、わいは、大体、女の癖に新聞読んだりするやつは好かん」と、そむかれた彼のお神さんのことを罵った。

その云うことは前後取りちがえてい、呂律も廻らず、そのまま文字にうつすこともならぬが、彼が若い時、郷里へ帰って貰った女房を連れ、大阪へ戻る途中、花嫁である彼女が姫路のステーションで新聞を買って、読んだと云うのである。「わいさえ新聞みたいなもん読んだことあれへんのに」——そこで、実に彼は癪にさわり、生意気に思えたので、すぐにそのまま引返して、離縁しようかと一時は考えたが、せっかく人手を煩わし、世話して貰ったのにと、胸を撫でて我慢した——それがいけなかった、やはり、新聞の一つも読もうかと云う女は「学問」を鼻にかけ、他に男をこしらえて出奔して了い、自分の観測に誤りなかったことを思い知らねばならぬような始末になったのである。

——

「ああ、やけじゃ」と、彼は結んだ。

「兄さん、大分廻ってる、苦しそうや」と、女装は云った。すると、

「あたりまえや」と、何故か彼は「女」には荒々しく云い、もう二日も前から飯を食っていないことを告白して、青い顔をした。小説家は、もしそうなら、如何に酒好きであるにしろ、焼酎なぞ飲む金で何故腹をこしらえなかったか、と責めるのである。ひょっとすると、これは昔このあたりによく見かけたアルコール中毒かも知れぬ、と彼は考えた。

すると、外套の男は腰紐代りの縄に手を入れ、しごきながら、

「ほんまのこと云うたろか」と云うのであった。小説家は云ってくれと云う顔をした。

「そりゃそうや、そうや、旦那の云う通りや、誰が銭持ってたら、空き腹に酒なんかあふるもんか、米のめしがほんまに恋しうてならんわ——おとついも飯食うたんやあらしまへん、観照寺で接待ある云うよってに、伊原つれて出かけたら、それが、うどんの接待だす、伊原にお前わいに半分残しとけ云うたのに、あの狸め、ちょっとも余さんと食うて了いよる——なァ旦那、大体伊原に、観照寺で接待あるよってに行こか云うて誘うたのはわいだっせ、知らんといたらうどん一すじも口に入らんとこや、なァ、そやのに恩知らずめが、どうだす、礼儀の知らんこと、後蹕の癖にわいより先にお汁をかけて、ちょっと残しといてと頼んどいたのに、どんぶり鉢のはしも嚙る位綺麗に食うて了いやがんね、——それからと云うものは、まる二日、仕事もないし！」

彼の後蹕である伊原が何ものであるかも、また彼の仕事がどんなものであるかも、酔払いは説明しなかったが、そのたどたどしい独白に、この店の中で、強い焼酎に痺れた頭をかかえたものたちは、ひそかに白い吐息をして、耳を

傾けたのである。
「わいは何のはなししてたんやったかいな、——そやそや、旦那は酒飲む金で飯食えと説教してくれはったんやったな。どうも、おおきに」と皮肉に口を歪め、「そやけど、ほんまのことを云うとやな」と、語り出した。——彼らはどんなに空き腹を抱えていても、人にめしを食わせてくれ、とは云えないのであった。何故ならば、誰も彼も自分だけが食うのが精一ぱいで余裕は更にないので、しかも頼まれたら、すぐに足りないものも半分は分けてやらねばならず、——だから、そんな人の予定を狂わし迷惑かけるような依頼心を起すのは道徳的ではないと、されている。そして、もしも誰かが景気よくて（景気よくて！）すっかり気が大きくなり、おい、酒のませたろかと誘われた時にも「酒の代りに飯をおごってくれ」とは云えないものだ、と外套はしみじみ述懐した。それは一つには、虚栄心もあったし、また折角相手が酒で愉快になっている気分をぶちこわすに忍びないからであった。だから、今夜のように酒だけで腹をこしらえている時もある！
「兄貴、酒おごらんか、は云えます、そやけど、云えまっか、めし一ぱい頼むとは」と彼が云えば、夜更けの酔払いたちは口々に、「そうは云えん、云えんもんじゃ」と、首を振るのであった。——小説家は、そこに浮浪者につきもののの、さような貴族精神を見て、悲しく思い——そう云うはなしを俺にするからには、俺にめしをねだっているのだろう、と云うと、
「あたりました」と答え、なんでや、見栄があるやろ、とからかうと、「あんたは、旦那やよってに、かめへん」と尚も小説家を悲しませるのである。
それから雨中に、のれんを排して出た女装の男は、頰に雨滴をあてて、
「おお、冷こ、ええ気持やこと！」と叫び、酒にまかせて外套の浮浪者にしなだれかかると——「ちっ！　わいは女はきらいや」と、彼は忌々しげに舌打ちし、その手を払って、どんどん先に立って行くのであった。
「上等の店、おごって貰いまっせ」と、彼は云って木賃宿の裏手の狭い道を——そこから薄暗い部屋に親子夫婦たちがくるまるようにして寝ているのが煤けた格子窓越しにのぞかれ、また戸締りのしてない裏木戸からは、列んだ便所の戸がどれも開いているのが、陰気臭く見えるのであった。
めざす店はまだ起きていた。
「芋粥くれ、おっさん」と、外套は呶鳴った。吹きながら、人々の手垢で黒くなり、塗りの剝げた箸で、煮込のような粥を咽喉に通しながら——「なんやて、明日八十五日ニッキ　アズキガイ二銭モチ入アズキガイ三銭——よし来た、おっさん、今晩は旦那がついている、餅入小豆粥一つ呉れ」と、壁に張った紙ぎれを読んで云うのであった。
絣の筒袖を着、汚れてはいるが白の前掛をかけ、茶っぽ

い首巻をした主人は、煤の垂れさがっている、釜の側で、煙管をくわえていたが、
「こら、あしたや、きょうはあかん」と、ぶっきら棒に返事した。
「あしたやて、ふん、あしたと云う日があるならば」と浮浪者は節をつけて応酬をして、「こら、見い、もうじき、十二時やぞ、そしたら、あしたや、待ってたろ」と、箸をあげて、棚に置かれてある、アラビヤ数字のいやに大きいニッケルの眼ざまし時計を、指すのであった。主人は冷く、相手にしなかったので、彼はまた呶鳴りちらした。
「こら、わいの云うことが分らんか、こら、人殺しめ！」
「なに云いなはんねん、そんなこと」と、女装が驚いて制止すると、
「うるさい、女は黙っとれ」と、彼は邪慳に唸った。それでも、主人は身動きもせず、白い眼で見るだけで、――その眼が「このルンペンめ、そんなこと云うと、もう、うちの粥食わさんぞ」と云っているように見えたので、外套はがくりと首を垂れ、
「いや、ほんなら、芋粥お代り」とおとなしく云って、うまそうに、かぶりつくのであった。――
彼が粥屋の主人に向って、人殺しと罵ったのは、何も理由のないことではなかった。その店を出ると、そんなことを云うなと止めたくせに女装の男が先に立って、問いもせぬに小説家に語った所によると、――もう二年前にもなるが、その秋のちょうど夕飯頃、あの店が粥を食う零落者で混んでいた時、ある男が（外套は、あら、田辺音松や、やっぱりわいの友だちや、と云った）――その田辺が二銭払って出ようとすると、主人は三銭置いて行けと請求し、何故かと聞けば、一銭の漬物を食ったから、と云うので、田辺は驚き、いや、そんな覚えはない、と云い張り、この漬物皿は横にいたやつが平げたのやと述べたが、主人は更に聞き入れず「食った」「食わぬ」と争いになり、果は、田辺がどんと胸をつかれると、悪いことに空き腹がつづいて、力の抜けていた彼は、そのまま仰向けに倒れて敷石で頭を打ち――そして、もう二度と動かなかったのである。調べた結果、頭蓋骨が折れたのが死因と分った。もちろん傷害致死で主人は行ったが、それも三四ヵ月すると、もう店を開いていたと云う。――外套は力んで、「今に仇をとったる」と云い、「そやけど、あすこの芋粥はほんまにうまい」とほめて、そんな店を潰すに忍びないと云うような顔をした。
話が終ると、突然、外套は「おほきに、御馳走さん」と云うなり、眠った低い家々の間を、そこには雨の中に傘をさして淫売婦たちが辻々に立っているのであったが――駈出しだしたのである。
「待て！」と、小説家は呶鳴った。寝るところがあるか、と心配したのである。
「今夜は、腹も張ったし、酒ものんで、ええ塩梅やよって

に、その勢いで野宿する」と、相手は答え、尚も走りつづけようとした。
「待て！」と再び小説家は云って、幸いこの「女」がすすめるから、一しょに第二愛知屋に泊ろう、と誘うのであった。
すると、不思議なことが起った。――今まで、いやに辛く女装に当っていた外套は急に叮嚀な言葉づかいになり、「姉ちゃん、えらいすんまへんな、屋根代なしに、厄介になったりしまして」と挨拶するのである。――思うに彼は彼の逃げた細君以来、女にはよからぬ感情を抱いていたので、自然、女装に対しても冷かな態度を取っていたが、今は彼（女）は部屋主になったので、その点から礼儀をつくしたのである。
その証拠には、彼が彼女の「ホース」に行きついてからは――大戸をガラリとあけて女装が帳場に坐っているキナ臭い中年の男に「頼んまっせ」と申入れた時も、うしろについて彼はぺこぺこと頭をさげたし、また広い階段の途中ですれちがい、彼（女）から、「今晩は」と、呼びかけた、赤い顔に髭を蓄えた、しかし、口のあたりに何やら卑しい腫物の出ている、袴をはいた男にも、外套は腰を折らんばかりにお辞儀するのであった。その袴の男を、あれが弁護士だす、と女装は云ってきかせた。――
彼（女）の部屋では、浮浪者は益々小さくなって隅の方に坐り、しきりとボタンのない破れ外套の前を合せ、巻いた藁縄をはずかしそうに触って見るのである。そしてすでに寝ている弟や（なるほどその髪の毛は最近に散切りにされたあとがあったが、少し延びかかってい、ちゃんと女風の長襦袢の肩を見せて眠り、日頃のたしなみを見せていた）また母親に（彼女は二人の外来者を無言のままじろじろと観察した）――突然夜半に訪れたことを、幾度も繰りかえして謝するのであった。――
それほどだったから、朝になり、みんなが眼ざめた時、すでに遠慮深い彼の姿は消えて、見られなかったが、誰も不思議にも思わず、眠っている者たちを驚かさないようにと、跫音を忍んで、部屋を出、ようやく白んで来た空を仰ぎながら、その「仕事」に出かけた彼を想像するのであった。
――それは三畳に足らぬ部屋であった。押入はなく、埃で白い二三の風呂敷包、バスケット、土釜、鍋鉢の炊事道具の類、それに小さな置鏡、化粧水の瓶などが棚を吊って載せられてあり、壁にはりつけられ、一方の隅の破れている新聞附録ものらしい美人画は、彼ら兄弟の扮装のモデルであろう。
彼らと雖も労働者の子供たちであった。「田舎から来た鍛冶屋だす」と、小説家の問いに対して答え、父親の働いていた日の出鋳物工場は今でもこの近くにあるが、彼は早く火傷で倒れ、母親も白粉工場に永年つとめ、そのために中毒を起して片手はまるきり動かぬ、と云う。――地方か

ら都会に出て来た労働者が、すでにその二代目に於て、貧窮と不衛生と無知とによって腐って了い、こうした人間の破産状態のうちに生活しているわけである。

朝になると、小説家は、もはや彼らと別れを告ぐべきであると思い、猫みたいに荒い銀色のヒゲの二三本生えている老婆の顔を見ながら、女装の男に、昨夜の部屋代の一部を負担しようと申出た。すると、彼女は手を振り、口を押えて笑いながら、

「それは、もうちゃんと、兄さんがお寝みのうちに、もろときました」と、云った。ひょっとして、小説家がそのことに気が附かずに帰られては、と彼（女）は恐れたのであろう。

「いくら抜いた」ときけば、「五十銭」と返事した。

母親は「御飯でも食べて行っとくなはれ」と、お世辞を云ったが、それは嘘であろう。

雨はあがった、しかし、陽の光は射さなかった。――小説家は表へ出ると、昨夜の出来事や、逢った人々を思い出そうとしたのだが、何だか、ぼんやりとしか浮びあがらなかった。電車の狭いガード下で、そこは誰彼となしに小便すると見え、コンクリートは湿気で壊れ、白い黴ようのものがひろがっているが、烈しい臭気に彼も亦、そのことに気がついて、小口貸金手軽に御用立てます、と云う広告を読みながら、排泄するのであった。そこを抜けると無料宿泊所があり、そのあたりには、午前中からもう夜の宿の心配をしなければならぬ浮浪者たちが、いつでも事務員が出て来て受附けるならば、すぐ列を作ってならべるように支度をして――蹲って考えたり、立話をわいわいやっていた。小説家は、そのあたりが葱畑であった時のことを、思い出していた。――

それらの浮浪者相手に僅かの商売をする露店が立っていた――魚の骨や頭を、野菜の切れ屑などと一しょに塩で煮込んだのやら――それは暖かそうに泡を立て、また、すし屋の塵芥箱から、集めて来たらしい、赤い生薑の色がどぎつく染まったのを鍋の表面に浮かべていたし、灰汁ようのもしかしその臭いが宿なしたちには誘惑である食べ物を一銭二銭で売っているのである。それらにまじって、古道具屋が二三軒、店を――店と云うならば、小さな薄べりを敷いて、庖丁、釘抜、茶碗、ズボン下などをならべ、浮浪者の拾得物なども買入れていた。中には一昨年の運勢暦が講談の雑誌と一しょに立てかけてあるのもあった。そうした古道具屋の一軒では、主人が仔細らしく老眼鏡をかけて、脊の低い女が持って来た風呂敷包を開いて、品物の値ぶみをはじめたので、要もない浮浪者たちはその店先をかこんで、何や彼やと品物の批評をしたり、おっさん、もっと出したれ、などと云って、女は少し上気し、両掌を頰にあてるのであった。――風呂敷の中からは、仏壇の掛軸やら、浮浪者はそれについては「こら、真宗のもんには持って来

いや」と云ったが、道具屋はふんと鼻であしらい、それから男物の着物、さらし木綿の肌襦袢、軍手などが出、最後に、使いかけの石鹸や褐色のハトロン紙の封筒が十枚ばかり出た時には、無一物の浮浪者たちも——「こんなもんまで売らんならんとは、よくよくや」と、さすが低声で囁きあったのである。家にあるもの、金になると思われるもの残らず、総ざらえして、女は持って来たのであろう。——
彼女が金を受取って帰ると、道具屋はもう一度、今の品物を一つ一つ手に取って調べていたが、満足して、それを、すぐ陳列するのであった。それから、まだ立っている小説家の方を、めがね越しに見て、少し考えた後、
「その傘はもういらん、きょうは天気になる、どや、買うたろか」と、云った。小説家は、この親爺がコーモリ傘だけを売れと云い、高歯の下駄のことについては言及しなかったことに、雨はあがったが、このあたりの深い泥濘を顧て、苦笑せざるを得なかった。何か返事をしてやろうとした時に、ふいに、また彼を引張るものが——女であったが、煮込屋の前まで連れて行くのであった。——
見ると、それは大きな肩掛をし、片一方の眼のいやに小さな、萎びた女であった。小声で——「兄さん電車に乗りはりますやろ」と云うのである。小説家は、その質問の真意を捉えかねね、横で煮込屋の釜の下の火にあたっている宿なしたちがこちらを見ているのを意識しながら——「そりゃ、乗らんこともない」と云う風な返事をした。と、その言葉の終らぬうちに、荒れた皮膚の女は、短い指の中に握っていた電車の切符を、彼に押しつけて、六銭で買うとく、なはれ、と云うのであった。
小説家はどうしたものかと思ったが、取りあえず、あすこの古道具屋に売っては如何かと云う旨を彼女に伝えると、
「あいつら、無茶苦茶に値切りよりますがな」と云って、きかなかった。そこで、彼は仕方なく十銭白銅を出すと、彼女は少しもじもじとして困った様子であったが、相手が面倒臭くなって、全部呉れはせぬか、と期待しているようでもあった。——だが邪魔者が入った——「両替したろか赤銭やったら、なんぼでもあるわ、重うてならん」と云う声が——れいの煮込鍋の下に身体を暖め、時々いい気持にそこへ坐ったまま居眠していた、髪の毛の薄い少年であったが、腹巻の中から、新聞に包んだ銅貨を出すのである。もちろん、彼は重いほど持合わせているわけでもなかった。
肩掛の女は六銭握ると、おおきにと礼を云い、考えて、少し離れた、屑のすし屋で買物をし、小説家の方をちらと見てから、小走にガードのあちらへ、駈走るのであった。
少年も亦、それを見送り、小説家の手に残った、よれよれの市電切符を指して、
「ガゼビリめ、パス一枚でヤチギリやがったな、——ほんまに不景気なはなしや」と、説明するのであった。

「ふむ」と、小説家は咽喉をつまらせて、今の女の一生を思い、それから、少年を――その顔は、腫れあがって赤味を帯び、眼も細く、破れた着物の下には襯衣があるが身体中の瘡蓋のつぶれから出る血や膿にところどころ堅く皮膚にくっついていた、銅銭の紙包と一しょにボール紙を持っていて、――それには、この子は両親も身寄もなく、しかも遺伝の病気で困っているからどうかめぐんでやってほしいと云う意味の文句が、同県人より、お客さま(!)と書き副えて記されてあったのを見ると、彼は繁華な通に出て号泣し、前に置いた箱の中へ、一銭の喜捨を乞う少年にちがいなかった。

彼は今の女に、不景気なと罵った手前、自分が如何に景気がよいかを、誇り出すのであった。――

「こないだもなアイノリ(二円)になった日があったんやぞ――みんなオッチョコチョイで、オケテしもたけどな」

オッチョコチョイとは、あすこで、ラッコの襟巻をし、金縁めがねをかけた冷い眼の男が開いているような、路上の賭博であると、彼はつけ加えた。

「へえ」と、小説家は感心してやらねばならなかった。

「五十円もウネッテたまったら、病院に入ってこまそと思うんやけど」

「どこが病気や」

「どこが、悪いのかなアと」他人事のように少年は云うと

「ほんまに、はよ、治しときや、手おくれになってしもたら、あかんさかいな」と、気がよさそうな煮込屋の主人は、横から忠告するのである。

「うん、そう思うてんねけどな」と、少年は、一銭ばくちで五十円を勝ち貯める日がなかなか来ぬことを考えているような眼つきをし、それから――「おっさん、モヤ一本頼む」と云うと、

「おいな」と、主人は胃散の大きな罐の中から、吸口をちゃんとつけたバットを取出して、一銭で売ってやるのであった。

小説家はその夜、難波で、新聞記者某氏に出逢い、釜ガ崎のはなしをすると、某氏は先日もこんなことがあった、と語るのであった。――夜更けて、あすこの側にある警察へ、女の行路病者が担込まれて来た、医者に見せると重い肋膜で、すでに手おくれになってい、遂に死亡して了ったが、その次の日、彼女を扶けて連れて来た男が来て、一度面会させてくれと云うので、すでに、こと切れたと云うと、わっと男泣きに泣き、余りの愁嘆に、どうしてそんなに悲しむか怪しまれ、それでは何か知合のものででもあったかとの訊問に対して、実は、それは彼の女房であった、と告白したのである、彼は釜ガ崎の木賃宿に住んで磨き砂売りをやっているが、もちろん、稼ぎは思うようには行かず、それに女房が病気になって寝て了い、日に日に重ることが眼に見えつつも、施す手がなく医者も相手にしてくれ

ず、瀕死の彼女は苦悶するし――遂に思い余って、女房を行路病者にしたてたと云うわけであった。

新聞記者某氏は「ルンペンの夫は悲し、と云う物語や、どや、小説にならんか」と云った。

小説家は狡猾に笑って何とも答えず、家へ戻ったが、それと彼の昨夜来の経験とを織りまぜ、小説に作りあげて見ようと、決心した。そこで、手許を探して、市役所から出ている「大阪市不良住宅地区沿革」と云うのを参考に読みはじめたのである。

――現在の釜ガ崎密集地域も明治三十五年頃までは、僅かに紀州街道に沿うて、旅人相手の八軒長屋が存在したるに過ぎない。

その後、東区の野田某氏が始めて、労働者向きの低廉なる住宅を建設して、労働者を収容したるが、尚当時に於ても依然として、百軒足らずの一寒村に過ぎなかった。

以後、大阪市の発展に伴いて、下寺町広田町方面に巣食っていた細民は次第に追い出されて南下し、安住の地を求め、期せずして、集団したるが、現在の釜ガ崎にして、そこに純長町細民部落を形成するに到り、下級労働者、無頼の徒、無職者は激増し、街道筋に存在する木賃宿は各地より集まる各種の行商人遊芸人等の巣窟となり、附近一帯の住民の生活に甚だしい悪影響を与えつつある。

児童の大半は就学せず、すでに就学せるものも、三四年の課程を終えれば登校せず、金銭を賭して遊ぶ子供を所々に見受ける。

下水の施設なく不潔なること言語を絶するものがある。表側に於ては左程にも思われぬとも、裏側に於ては、甚だしいものがある。上水の施設もないところ多く、井戸水を使用している。――云々

（一九三三年三月「中央公論」）

今日様

葉山嘉樹

「今夜は、どうしても話をつけて貰う」
　と、藤蔵は、店からいきなり、茶の間へ上り込んで、そこでチビリチビリ晩酌をやっていた父に酒臭い息を吹っかけた。
「又、お前は酒を飲んだんだな。酒で失敗ってばかりいる癖に、未だ止められないのか」
　と、これも大分廻って来た、おやじが、眼をいからして云った。
「酒はお前さんだって飲んでるじゃないかい。俺にだけ飲むなったって、こいつあ親譲りの癖だから、仕方があるまい。親に似ぬ子は、鬼子だって云うからな。親に似てりゃあ、文句はあるまい」
「俺は飲んだって、お前見たいに管を捲いたり、人から後ろ指を指されるようなことはしやしないよ」
「人から後ろ指をさされないって？　ふん、子供からよく思われないような、親爺が、よくそんな口を利けるね」
「よく思われようったって、お前みたいな子に、よく思われようもんなら、一日で身代を潰しちまうだろうよ。身代を潰してまで、俺はお前方に、よく思って貰いたくは無いよ。人並の苦労で拵らえた身代じゃ無いんだからな」
　親爺と云うのは、もう六十の坂を越して、すっかり頭が白くなった、平凡な老人であった。その育った時代が、その老人の気持を、「金丈けがものを云う世の中だ」と決定してしまっていた。
　そして、その老人が、そう考え込んで終うのは、その老人の時代としては、当り前な事であった。
　老人は、月一円の新聞をも、冗費だとして、取らなかった。人のを借りても読まなかった。読む時間が浪費である、と云うのであった。
　その親爺に食ってかかっている、息子と云うのが、その息子自身で、うまく云ったように、顔から容子から、親によく似ていた。ただ、その年を三十年引き戻した、と云った風な息子であった。
「お前さんは、今になって、一人で儲けたような事許り云うが、わしがどの位儲けてやったか、と云う事はケロリと忘れているね。貨車三合、足袋を注文した時は、どうだったね。『家中足袋だらけにして、それで商売が出来ると思うか。これが半分も売れたらお目にかからない』なんて、叱言を云ったお前さんじゃなかったか。それが、一と月と

経たない中に捌けちまって、後又二貨車を注文する時、何と云ったね。

『何と云ったって、商売ってもなあ、バクチみたいなもんだから、当ると思ったら、大きく賭らなきゃいけない』なんて云ってさ。わしが注文した事なんざ、知ってる癖に忘れた振りをして、来る人来る人に自慢してたじゃないかね。あれだけだって、どの位儲かってると思うね」

藤蔵は、親爺のチビリチビリやっている、銚子から勝手に、茶碗に注ぎ飲みしながら、まくし立てた。

「フン、足袋、足袋って云うが、それだって、俺の信用が無かったら、一足だって会社から送って来るかい。それによくそんな利いた風な事が云えたもんだね、朝鮮くんだりまで出かけて行って、乞食みたいになってたのを、高い利子のついた借金を払って、旅費から何まで出して連れて帰った。と思うと、家へ帰って来りゃあ、女狂い許りしている。そいつで首が廻らなくなると、今度は樺太で『一旗上げる』とか何とか云って、飛び出しちまう。それも一旗上げるんなら兎も角、半年もしてるうちに、三千円もする旗を捲くどころか、引っちゃぶいて逃げ戻って来たじゃないか。猫の赤ん坊じゃあるまいし、そうそういつまで、親に尻拭いばかり、させる積りだい。

何をやらしても駄目だと思うからこそ、こうして、田地をやって、百姓をさせてあるじゃないか。それもだ、毎日、七十にもう間もあるまいと云う、俺が、荷車に肥料を乗っけて、ひどい山坂道を、馬糞を拾い拾い、運んでいるんじゃないか。ちったあ、親の身になって、ものを考えて見ろ、罰当り奴！」

「へん、何云ってやがんだい。親の身になって考えて貰いたけりゃ、子供の身になっても考えて見たらどうだね。家で商売を手伝ってりゃあ、親子だ、親子だって云うんで、一文も給料は寄越さないで、使いっ放しじゃないか。儲かった中から、五分や一割使ったって、それがどうしたって云うんだ。儲けは自分のせいにしちまう、損は伜のせいにしちまって、親不孝だって云うが、親の冥利って云えるかね。二言目にゃ、親不孝だ親不孝だって云うが、支店を出してやるって、どうするんだと思ったら、自分の家作を貸しつけて、家賃まで取ろうとしたじゃないか。その上、品物は卸し並よりゃ高く卸そうって魂胆じゃ無かったのかい。そんな親ってのがあるだろうか。

百姓をやらせるったって、やけに恩着せがましく云うが、ありゃ田圃じゃ無いじゃ無いか。磧の河原じゃないか。いくら水を引いたって、旅見たいに、ズッ、ズッ、と漏っちまって、お前さんだって、自分で知ってるだろう。去年幾粒米がとれたかね。

おたねでも云ってらあ、こんな田圃で苦労するよか、小作でも平地で作った方が、どの位いいか分らないって。全っ切り米の出来ない田を、年貢が要らないからって、毎年作る気にゃ、阿呆だってならないよ。

こやしを運んでやる、やるって云うが、こやしをやらなきゃ、飯米を取りに来られるからって了簡だろう。いくら、こやしを入れたって、下の田に流れて行って、俺んとこじゃ、旅の底に砂が溜ったんと、同じじゃあねえか。砂と山清水だけで育つなあ、山葵だけだよ」
「いい加減にしないか。それじゃあ一体、どうしろって云うんだ。十八や十九の子供じゃあ、あるまいし、幾つになったんだい。ちったあ、年の事も考えて、独り立ちの出来るようにしたらどうだ」
「どうしろったって、おらあ、今夜これから満州へ行くんだ。日本も狭いが、魚の背鰭見てえな山のてっぺんの田あ作るなあ、もう沢山だ。足の踏ん張り場も無ぇような処へ、稲だって、育ちたがりゃしねえや。満州へ行くから旅費をくれ。片路の旅費でいいんだ。『儲けて帰って来よう』なんて吝な了簡じゃねえんだ。今度こさ、行きっきりだ」
「又始ったな。満州へ行くもいいだろうが、おたねや、坊はどうする心算なんだ」
「御心配はいらねえ。もう夙っくに離縁しちゃった。山の小屋もあらかた片付けといて来た。もう行く丈けなんだ。もう一刻も猶予はならないんだ。うんこが撥んだ見たいなんだよ。旅費をくれよ。旅費を」
当年三十五歳、筋骨逞しい藤蔵は、四つになる子供見たいに、便所の中から「紙を持って来てよう」と怒鳴るように、旅費を急き立てた。
「何だって？ おたねを夙くに離縁しちまったって？ たった今、一時間も終たない前に、一緒に帰って行ったじゃあないのか。出鱈目もいい加減にしろ。この年寄を馬鹿にして、満州へ行くなんて云って、どっかで、又一パイ引っかけようってんだろう。今朝っから、競馬見に皆で、一緒に出かけて、つい今し方帰った許りじゃないか。競馬場じゃあ、満州のマの字も噯にも出さなかったじゃないか。冗談じゃないぞ。俺はもう寝るんだ。帰れ、帰れ」
「冗談じゃないよ。本気だ、俺だって男だ。行くってったからにゃ、誰が何てったって、行くんだ。おたねなんてあまあ、離縁するのに一時間も三十分もかかって堪るかい。電光石火………、………、『離縁だ！』って云や、それで決心じゃねえか」
「何だってまた、そんなに急に離縁したんだい。今日は一日、仲良く競馬を見てたじゃないか。たったさっき帰る時、おたねは『お父さん、今年は、新田には石灰を撒かないようにしないと。新田に石灰を撒いたら、ぜったいに米はとれないって、惣造さんが云っていたから。お金をかけたり、米が取れなかったり、草臥れ損だったりじゃ、いくら百姓でも、苦労過ぎる』なんて云って、一緒に帰ってったんじゃなかったのかい」
「それだから、俺は叩き出しちゃったんだよ。焦れってえなあ。それじゃ、俺は、此処で、おたねを叩き出した訳

を、今話さなきゃならねえのかい」
「当り前じゃないか。犬や猫の子を放り出したんじゃあるまいし、お前見たいな極道でも、俺の気がかりになるように、おたねみたいな極道女でも、矢っ張り、向うの親の身になって見ろ、心配の種だろうじゃないか」
一杯飲むと、気は張り切っている積りでも、猪介の足は六十年も使い古した、という事実を現わした。庭へ下りるのに転んだり、山からの帰りに堤から落っこちたりした。
その上、いくら極道だとは云っても、長男の藤蔵に、今満州くんだりまで行ってしまわれては、猪介にとっては堪らない淋しさであった。
そして、二日目には、「極道、極道」と、藤蔵の事を罵りはするが、それは過去からの総決算であって、現在の藤蔵を「極道」にしてしまう訳には、行かない、と云う事をも、猪介は知っていた。
朝の三時から、夜の十時までも、胸をつくような峻険な、山に作られた田で働いている。ここ四五年の長男の姿。その妻のたね。
その上に六十を越して、農繁期には日毎に肥料や、種子や、副食物や、酒までも、運んで行く自分自身。
そこには何の愉楽もなければ、利益さえも無く、電灯代、税金、何もかも滞るのみであった。
日日に、身を粉にして、稼げば稼ぐ程、没落し、食い込み、重なり行く負債。その原因がどこにあるかは、彼等にとって、
「兎に角、俺達が悪いのではない」
と云う以上には解らないのであった。
猪介にとって、藤蔵がその馴れ合いの女房、おたねを離縁するという事は、飛んでもない話であった。
そんな事になれば、おたねの父に用立てて貰っている、五百円の金をどうして返せばいいか。
「お前さん。考えても見なさい。あんな女房ってものがあるかね。今夜、帰りに、わしは畝村の路地を入って、帰ろうとすると、あいつは、家の横丁からあべこべの方に、どんどん、行っちまうじゃないかね。『おい、どこへ行く』ってえと、『こっちから帰る』って云って、わしがあいつの亭主だった事も、一度も無かったってな調子なんだ。『そっちじゃ遠くなるから、こっちへ来い』って云っても駄目だ。どんどん、行っちまいやがった。それじゃあお供します、って、桃太郎の猿じゃあるまいし、女房のケツにくっついて帰れるかね。
『勝手にしやがれ』と思って、わしはどんどん家へ帰って、待ってたが帰って来ねえんだ。いくら待っても、帰って来ないんだ。
だから、おらあ迎いに行ったんだ。迎いに行って。『どうしたんだ?』と云うと、奥の畳の敷いてある間から、顔丈け覗けやがって、
『何を云いがかりを、つけに来やがった』

と、こうぬかしやがった。
お前さん。迎えに行った亭主に、『云いがかりをつけ』に来たかって、頬げたを叩く女房ってものが、一体全体、どこにあるかね。『何を！』ってんで、余り癪だから、打ん殴ってやろうと思ったら、爺さんと婆さんが、泣いて止めるんだ。
『何とでも話をつけるから、今夜だけは辛抱して帰ってくれ、おたねは家で、存分に折檻するから』
と、爺さんが云うんだ。爺さんの顔を見りゃ、強い事は云えないしね。こんないい爺さんと云うものはこいつあ又、世間広しと雖、たんとは無い。おたねのひねた見たいな婆さんだ。ああいう婆さんなればこそ、よくも、おたねを産み居った。と、つくづくわしは思ったよ。
で、わしは、爺さんに云ったんだ。
おたねは『云いがかりをつけに来た』と云うが、おとっつあん、いつ、わしが云いがかりをつけに来たかね。わしは云いがかりをつけに来たんじゃない。実家へ泊るなら泊る、と何故云って泊らないんだ、黙ってちゃ、困るじゃないか。それとも、晩くなったんで、坊を連れて、山道を一人じゃ帰れないし、と云って、実家には、爺さんと婆さんと、足の不自由な老人が二人っ切りだから、帰りたくても帰れなくて困ってる、と云うんなら、連れて帰ろう、と思って、こうして、坊を背負うねんねこまで、持って来てるんだ。

と云うと、爺さんは、
『済まん、済まん。ほんとに済まん。おたねの事についいちゃ、わしも随分長い間苦労しました。ほんとに済まんことじゃ。どうかまあ、今度だけ、もう一度我慢して下され。よくわしが、云い聞かせときますから』
と爺さんが云うのに、婆さんは
『夫婦喧嘩と云うものは、一方だけが悪くって起るもんじゃないから、そうそう、おたねばっかり悪くも云えん。今まで一度や二度の喧嘩では無いのだからなあ。まあ、暇を出すと云うのなら今度はよく考えて、きっぱり暇を貰わにゃ、こういつもかつも、喧嘩した、やれ殴った、と云うんじゃ、わしゃ夜もおちおち眠れんしのう』
と云やがるんだ」
「だが、そりゃ、婆さんの云い分にも理窟があるじゃないか。一度や二度の喧嘩で無いと云うのもほんとだし、第一お前たち同士が、好き好んで一緒になったんじゃないか。くっつく時丈け勝手にくっついといて、別れる時に、大騒ぎをされたんじゃ、向うの親たちだって、俺だって堪ったもんじゃないじゃないか」
と、猪介は、眠そうな眼をとろんと、見開いて迷惑そうに云った。
「そんなら聞かなきゃいいじゃないか。どうして離縁したか？って訊くから、わしもいやなんだけど、話したんじゃないかね。旅費をくれって、云ってるんだよ。わしはもう

辛抱が出来なくなったんだよ」
　藤蔵は、茶碗に酒を注ごうとしたが、カン瓶には、もう酒は一滴も無かった。それが「辛抱出来ない」ように猪介には受取られた。「辛抱が出来ん、辛抱が出来ん。とお前は云うが、何が一体、そんなに辛抱が出来ないんだ。食うに困ると云うんじゃなし、家賃を払わにゃならん訳ではなし、税金まで俺が払ってるのに、何が辛抱出来んのか、俺には分らん」
「お前さんにはそりゃ分らんかも知れない。が、考えても見なさい。何の為にわしは生きてるのかね。猪見たいな婢あの、尻尾を引き止める為にだけ、わしは生きてるのかね。それとも、お前さんの口癖の『食うに困ると云うんじゃなし、税金を払う訳じゃなし、家賃を払う訳じゃなし』結構なお身分じゃないか、と云う皮肉を聞く為に、生きているのかね。それとも、気の荒い山の田の土鼠もちと、一生根気較べをする為にかね。何の為に、わしは楽しみのない日を、毎日毎日いやだいやだと思いながら、暮して行かねばならないのかね。わしは、こんなことなら、生れなきゃよかった、と、鍬を杖にして腰を延すたんびに思うことがあるよ。
　ところが、お前さんは、無責任にわしを生んでしまった。そこんとこを、お前さんは、じっくり考えたことがあるかね。わしの身になって考えもしないで、このわしを生んでしまったってことを。そいつを、わしはこの年になって思いついたんだ。
　危く、お前さんと同じような、失敗をする時分になって考えついたんだ。いいかね、わしに子種があって、おたねに、若しかして子供が出来たとする。と、どうなるんだね。
　わしは、長男だから、お前さんのガラクタだの、石ころだらけの田地だの、紙屑みたいな株券だの、借金だのを引受けなきゃならない。そいつを後生大切にしといて、わしはわしが、お前さん位の年聟になった時、わしの息子に、『何がお前は辛抱が出来んのじゃ。食うに困ると云うんじゃなし、家賃を払うと云う訳じゃなし税金までわしが払ってやっとるのに、何がお前は辛抱が出来んのじゃ』と、云うためにだけ、わしは今の毎日毎日を、土鼠見たいに眼を瞑って、土の中を這いずり廻るのかね。そいつをお前さんに、わしは聞き度いんだ」
「お前は、楽しみと云うものを見落しているんだ。お前は遠方ばかり見ていて、どっか向うの山の上や、海の向うの方にでも、楽しみがあるとでも思ってる。それだから百姓が辛いのじゃ。楽しみは峠の向う側にも、海の向う岸にもあるものじゃない。お前の手の中にある。足の下にある。
　いいかね。お前が牛蒡の種を蒔く。そいつに水をやり肥料をやる。芽が出る。延びる。そしてだんだん大きくなって、お前たちの身になってくれる。それは楽しみじゃないのか。楽しみと云うものは、牛蒡を食う時だけじゃないの

じゃ。畑をうなって種を蒔く時から、食う時までの間、いつでもが楽しみなのじゃ。

俺に云わせりゃ、お前が苦労だ、苦労だ、と云ってるその苦労が、取りも直さず楽しみなのじゃ、今日様なのじゃ。お前は今日様を軽く見るから、楽しみが苦労になるのじゃ。

牛蒡も、大根も、米も、麦も、鶏も、小鳥も、みんな楽しみを授けてくれるのに、お前はそれを苦労だと云ってる。

わしの子供からお前ぐらいの年頃には、お前なんかとは、較べものにならない、辛苦を尽したものじゃ。だが、わしはそいつを、苦労とは思わなんだ。楽しみに思うとった。

生きとる事の楽しみと云うものは、今日様を大切に思う者にだけあるのじゃ。くれぐれも、峠の向うや、海の向う岸にあるものじゃないのじゃ。」

「そんなら、お前さんは、お前さんから三十年の間、身の皮を引ん剝くようにして、……………、……××さんが、ありがたくて堪らないかね。この店の品物は、みんな押えられているじゃないのかね。そして、その押えた××さんを、実費よりも安く、お前さんは下宿させている。その事でどうにか大目に見て貰おうとしている。だが、××さんは、職務には忠実だあね。押えるものは押える。払うものはチビチビ払う。

××さんは止めると恩給がつく。お前さんにゃ何がつくかね。取り立てる側は、どこまで行ってもとりたてるってえ、事柄だけで楽に暮せる。

取り立てられる側は、どこまで行ったって取り立てられる丈けの話だ。日曜日もなけりゃ、土曜日もない。晦日ばっかりが続いている。それがお前さんの云う『今日様』だ。

お前さんは、鶏だって楽しみだって云うが、月に五円しか卵を産まない鶏が、七月餌を食う。つぶしたって買い手はない。

肥料は金肥はかけられないので、柴を刈って踏み込むと、足の裏は踏み抜きだらけだ。そいつが膿んだって、お前さんに云わせりゃ、水の中で怪我をしたのは水の中、田の中でしたのは田の中でなけりゃ癒らない。その通りやって見ると、傷が癒ったんじゃなくて、毎日、新らしく怪我をしてるんだ。飛んでもない『今日野郎』だ。

いくら百姓でも、足の裏に踏み抜きすりゃあ、痛くもあろうじゃないか。それで、地下足袋を履きゃあ、ぜい沢だって云う。地下足袋を履くのがぜい沢なら、靴を履くなあもっとぜい沢じゃないのかね。

裸足で歩いたって怪我をしない駅長は、靴を履いている。長靴を履いていても怪我をする百姓は、裸足でいなけりゃいけない。そんな理窟があるかね。若し、ぜい沢ってものがいけないんなら、人間である限り、誰にだっていけ

ない筈だ。百姓に丈けぜい沢がいけないって法は無い。一体、百姓にぜい沢をしちゃいけない、なんて、どんな倹約な乞食野郎が云い出したんだ。おらあ、もう辛抱が出来ねえよ」

「まあ、明日にしろ、明日に。今夜行くのには満州は遠過ぎる。明日になってから、よく相談しても分ることった。なら今夜は帰って明日の朝、相談しよう。」

猪介は、翌朝、裏二階に転げ込んでいる、娘婿の山田に、

「藤蔵が、満州に行くと云って、駄々をこね出した。それは、満州に行き度い為ではなくて、おたねに拗ねられたからだ。で、君は一つ、これからおたねの家に行って、おたねを、藤蔵の山の小屋へ連れて行って貰いたい。何と云っても、山の小屋に、たった一人で居たんでは、百姓も猟師も手につくものじゃない。狂になるか、満州に行きたくなるかに決っている。あいつは狂よりも満州の方を摘み上げた訳なんだ。

ところで、おたねの家に行くについちゃあ、よく事情を呑み込んどいて貰わんと、仲々一通りの話では、うまく行かないと思う。

第一、この春の銀行の取つけの時に、わしは、おたねの親爺に五百両の金を、藤蔵に借りさせた。その金は、すっかり銀行の方に済してしまって、今は一文も手許にはない。で、おたねを本式に女房にして籍を入れてやろうとして、おたねの叔父の方に、今、内密で話を進めている処なのだ。それがうまく行けば、借金の方も独りでに、籍が入ったようなものだ。

それを今、藤蔵のように『満洲に行く』なんてことを云い出したら、満洲行きの旅費どころではない、わしは五百両の金を返さねばならない。五百はおろか今は、逆さにして振られたって、鼻血も出ない時世だ。何のこたあない。ぬるま湯に飛び込んだようなもんだ。首を縮めてじっと辛抱している外に、法はないのだ。動けば動く程寒いんだからなあ。」

「じゃ何だね。うまく、おたねさんを山の小屋へ連れて行きさえすりゃ、それでいいんだね。それで万事うまく納るってえ訳だね。」

娘婿の山田が、そう云った。

「そうなんだ。うまくだ。うまくやるって事あ、何に限らず大切なこった。下手をやるよかうまくやった方が、いいに決ってるからなあ。今の若い者は、そこんとこを、あべこべにやっつけちまう。下手ばかりもやらんがね。うまく立ち廻ってばかりいる、と云う訳にも行かないようだね。まあ、君は大して下手ばかりもやらんがね。君が、いや、まあ、それは今は余分な話だ。一つ、これから行っておたねを山の小屋へ連れて行って貰いたいんだ。夕方までに連れて行ってくれればいい。

暗くならないうちがいいね。わしは馬肉の百匁も買っ

て、酒の二升も背負って、君が連れて帰る時分に、山の小屋に行くからね。そして、そこでよく二人に仲直りをさせて、そうそう、ごたごたを起さないように、君を証人にして、固めの一杯をやる。と、こう云う段取りにして貰いたいんだ。」
「犬の子を抱いて帰るように、うまく行くかしら。どうも、こう云う事には、余り嵌り役じゃないんだが。」
「そこんところをうまく、一つやって貰いたいんだ。わしが行くと云うと、それこそ本式になっちまうんでね。『親が息子の嫁を貰いに来た』と云う形になっちまっちゃ、後で悪く行った時に、取り返しがつかん事になっちまうんでね。何でも、物事は少しずつゆとりのあるやり方でうまくやらんといかんのじゃ。六十年余り苦労して来た揚句なんだから、こいつ丈けは間違いはしない。そこで、君も一つうまくやって来て貰いたい。うまく行かんでも『キッパリ頼むよ。『じゃ勝手にしゃがれ』なんて事には、絶対にしないように頼むよ。分ったね。行ってくれるだろうね。」
「じゃあ、行って見ましょうよ。うまく行くかどうか分らないが。」
と、山田は答えた。
山村の初夏、五・一五事件の号外は、この山村にも、その翌日は報道された。
山田は、その号外の内容と、農民の家庭争議との中間に挟まっていた。
――老人は単に生きている、と云う事だけに、全生命の歓をかけている。若い時代は、よりよく生きる、と云う為には、死をもいとわない。が、今はより悪くさえも、生きて行けない時代になって来ている。生活に恐怖を感じる事なしには、生きて居られない時代なのだ。――
と、山田は考えながら、高原の山道を歩いた。木々の緑は黄色に近かった。花や木の芽の複雑な芳香が、とりどりな濃淡さで、風に涼しく流れて行った。
路傍の農家の庭には、水が引き入れられて、鯉が赤や白や黒のふに彩られて、泳いでいたし、その水の上には、おはちや、杓子などが、長閑に浮んでいた。
れんげの咲き乱れた田圃では、繋がれた母馬の傍で、子馬が、かげろうを思わせる長い足で、ひょうきんに駆け廻ったり、母馬の乳房に吸いついて、母から叱られて、慌てて飛びのいたりしていた。
全く平和な、美しい景色であった。
――人間は世界を征服してしまうなどと云う事をも考え出す。飛行機も殺人光線も考え出す。だが、この仔馬のように、無邪気に生きて行く事を、考えているだろうか――
山田は、れんげの花束を作ったり、田の堤に小さく、可愛いらしく咲いた木瓜の花を、れんげに添えたりして、平和に見える山村の道を歩いた。
――もっともっと狂え！――

——静かな平和な生活が欲しい——
と云う、二つの考えは、一歩毎に、山田の頭の中を、丁度歩調のように、交互に位置を置き代えた。
——これは、全で相反した別なものであるだろうか。一つものの二つの面だろうか。俺は人類の理想と云うことを考えている。人間が必然的に踏んで行かねばならない、社会の歴史というものを考えている。人間が正しい方向に進む為には、俺の一身を犠牲にしても、厭わない、と云う決心を持っている。だが、同時に、俺は、俺自身や俺の家族の事を、最も、身近かに感じ、その利害の為に、目先の仕事を追っかけている。
俺は、あの頭固親爺の娘を連れて、駆け落ちした時、土地の新聞で、「田舎廻りの三文文士」として取扱われた。そして、それに対して腹を立てた事さえあった。が、今はどうだ。三文にもならないでは無いか。慾張りの我利我利と罵っていた、女房の親の処に、親子四人で転げ込んで、食客になっているではないか。
俺は、物慾一点張りの親爺や、その長男たちよりも、自分を優れたものと思っている。そしてその理由は、俺が、人類の理想という呪文を知ってる、と云う丈けの理由からだ。そして、その呪文を知ってる俺は、何の通力も持たないで、軽く見ている人間の処へ、恥知らずにも転げ込んでいる。
そして俺は、内心、藤蔵夫婦の喧嘩の仲裁役を、鼻先で扱って いる。利息や借金に摑んでの結婚や、その仲裁を、厭わしいものと思っている。それは小さい事だ。取るにも足らぬ事だ。卑俗な事だ。と思っている。
が、そうだろうか。俺が優れていて、親爺たちが劣っているのだろうか。考え方が違っている丈けで、人間の値打に高下をつけて、俺は居たんでは無かったか。
俺は、呪文のように決ってしまった、考え方の上に立って、人を単純に片付けていたのじゃなかったか。
そうだ！　人間としては、誰でも同じだったんだ。これが大切なことだったんだ。考え方が違うと云う丈けで、人間の値打にまで差異はないんだ。だが、そうだろうか。——
山田は、自然の美しさと、うららかさとの中で、ひどく憂欝に考え込んで歩いた。
それ等の考えの間に、
「ここで、青草の上で、媾曳をしたっけ」
とか云う、思い出が、時々浮んだ。
「あの山の向うで、俺の悲劇が、かつては行われたんだ」
おたねの実家と云うのは、山の行者とかを祭った、欝蒼とした森林に取り囲まれた祠の下にあった。
山田が入ろうとするのと、入れちがいに、行李を担いだのと、チゲに釜だのバケツだのを載っけた、土方らしい二人の労働者が出て行った。
「今日は、御免下さい。」
と云って、山田は暫く土間に立っていた。

「此処でも、矢っ張り、馬と人間が同居しているな。」
と思いながら、左手の壁越しに、馬の秣を食う音を聞きながら、暫く待っていると、囲炉裏の処から、土間にブラ下っていた足が、水平に持ち上ると、はねつるべみたいに、それが下ると同時に、顔と上半身が起き上った。
「へえ。」
「今日は。」
「へえ。」
山田は、とっつき端がなかった。
と答えたのは、痩せた老人であったが、「へえ」から先きに、何もつけ加えなかった。
「あのう」
と、口籠りながら、山田は何と云う不調法な口の利き方だろうと思った。
すると、又、「あのう。」と云う意味のない言葉に、老人は「へえ」と返事をしたのである。
山田はいよいよまごついた。で、自分はどう云う者であり、何の為に、お邪魔に上ったか、と云う、自分を先ず明瞭にして置いてから要件にかかる定石から、踏み外してしまった。
「あのう、おたねさんは、いらっしゃいますでしょうか。」
と、薄暗い土間で、顔を真赤にして、ようやく口を切った。
「へえ。」
と、今度は二つの返事が、一つは右手の居間らしい辺から、一つは炉の奥の方から、聞えて、二人の女が顔を出した。
「山田さん。まあ、お父さん、ほらよく話した山田さんですよ。」
と、おたねが、居間から出て来たので、山田はほっとした。
戸外は初夏の、水蒸気も埃もない空気を透して、暑い程の日射しであったが、家の中では炉に火を燃しても、暑くはなかった。
「どう云うんだか、よく私は知らないんですが、おたねさんに一緒に帰って戴き度いと思いまして、上ったんですけれど。」
と、山田はおたねの方を向いて、炉の火に手を焙りながら云った。
「その事でなあ、幸い、あんたさんが来て下されたんで、云うんだけれど、わしの方も、とてもこんな風ではいつまで経っても果てしがつかんし、何とか、はっきりした話をつけて貰わんと、第一、おたねがおたねで、何もかもやりっ放しの極道女でして。」
と、おたねの母親が、立膝をして、云い出した。主人の老人は黙って、炉の火を、眺めていた。
「一年に一度とか、半年に一度とか、夫婦喧嘩をすると云

うのなら、珍らしいこともありませんけんど、こう一日に一度、ひどい時は朝と晩に一度ずつ、そんも口喧嘩だけなら未だしも、殴り合いでござんしょう。そのたんびに、逃げて帰る。怒鳴り込む。殺す、さあ殺せ、でござんしょう。わし等、もう年をとって元気も無いし、止めるのでも骨が折れます。若い者は、それでよければそれもよござい ましょうが、年寄は堪りません。

それもで御座います。あんた様。娘がいやがるのを、無理に貰って貰ったとでも云うんなら格別の事、親が止めるのも構わず、一緒になったんでござんしょう。

近所の者はあなた、『似たもの夫婦だ』なんかと云っとんでござんす。そりゃあ、おたねも極道で御座んすが、藤蔵さんは又藤蔵さんで御座んす。わしゃおそろしくて、こうやって、おたねが帰って居ると、夜もおちおち寝られません。藤蔵さんは、つき合って見れば、そりゃいい人で御座んす。自分の子でも無い坊を、祭の時には、町から買って来た新らしい洋服を着せて、自分の子みたいにして抱いて、連れて行ってくれます。もう、どの位わたししたちは、ありがた涙にくれる事かわかりません。

おたねが、それを『済まん事』だとでも思って、おとなしく云う事を聞いてくれれば、何もあんた様起りはしません。それをこのあまは、連れ子を大切にして貰うとるのを、普り前の事見たいにして、しゃあしゃあと気の利いた口を叩きます。それがいけないんで御座います。

おたねには、もうわたしたちも、何も云う事もする事も出来ません。家に帰って来れば、わしやおじいさんを喧嘩の相手にしてしまいますし、金があれば見つけ次第持って飛び出しますし、死んでしまえと云えば、ほんとに毒を呑みました。どんなにまあ難儀をしました事やら。わしは爺さんと仇の性で、だから仇を生んだのじゃないか、と爺さんに云うのでござんす。

爺さんが又、樹見たいな人間で御座いまして、生えたから育って立っている、と云うだけの話でございましょう。只馬が好きなだけで、馬の事なら目の色を変えますが、自分の娘の事や女房のこのわしの事など、全く考えてもくれません。それで、わしは爺さんに云うのでございます。お前のように、黙って許りいて、世話をするのは馬の事だけなら、わしはもう頼り無うていけんから、離縁してくれと、云うのでございます。それでも矢っ張り、この爺さんは黙っているのでございますよ、あんた様。口が利けんのかと云うと、自分の用事だけは立派に喋舌るので御座いましょう。これで三十何年かの間、どの位わしは苦労しました事やら。わしは、三十何年かの間、『もう少し早ければ』と、思い続けながら、到頭この家に居坐ってしまいました。『今度こそ暇を貰おう』と思います時に、あんた、『ああこの前、こう思った時ならよかったのに、今度では晩すぎた』と、こう思い直しては、辛抱して来たので御座います。又その次に『今度こそは』と考えますと、やっぱ

り『未だ此の前の時ならよかったのに』と思うので御座んす。そのうちに、あんた様、わしはとうとう五十六になってしまいました。それでもやっぱりおたねが帰って来て、云いがかりをつけ始めますと、わしは『今度こそは』と思うのでございますよ。おたねは、わしが産んだ子に相違ござんせんが、そのわしの生んだ子と、わしから生れた子とどうしてこんなに仲が悪うて、一つ屋根の下に住めんのでござんしょう。

わしはもう、おたねの顔を見ると身ぶるいが出て来るのでござんす」

「わたしだってそうだよ、お母」

と、今度は、母親と寸分違わないおたねが云い出した。

山田は、「これは、とてもうまく行かない」と観念の臍を決めて、沈黙の戦術を、そのお爺さんと同じように、とる以外に道の無い事を知った。

お爺さんは時々、立って、裏庭に、刈って山積みにしてある青草を、馬に投げ与えては黙然と元の処へ腰をかけるのであった。

「おっ母は、わしが坊を連れて行った事で、遠慮しなけりゃならんように云うけど、そんなこたあ無いよ。一緒になる時に、未だ腹ん中に入っていたとでも云うんなら、見損うこともあろうが、もうちゃんと出て、乳を吸うとる子を見落す、と云う事はあるまいさ、見落さないとすれば、藤さんは始めっから承知の助だったんだろうよ。そんなら、わしが何をビクビクする事があるかね。

山田さんの前だから、わしは云いますけれど、ねえ、山田さん。わしはこの家にもいられない体だし、とても一緒に暮して行けませんよ。うちではこの通り、長くなればなるほど、おっ母あと反りが合わなくなるのでしてね。これは今に始った事ではありません、わしが生れるとすぐ、始った事なのです。さっきも、おっ母あが『仇を産んだ』と云いましたが、その通りなのです。このおっ母あの感じが、乳呑児の時から、わしに響いたものでしょうね。わしは真実の母が好きになれませんのです。どう云う訳でしょうね。ことに女学校を出てから、私はこの家の中が息苦しくて堪らないのですよ。わしは男に生れる筈だったのを、間違って女に生まれたんですよ。きっと。眼は吊り上ってるし、口の利き方は男よりもガサツだし、わしだって、わしがどんな女か、と云う事を知っているんです。知れば知るほど、わしは口惜しくなるのです。

おっ母あがそうです。山田さんだから、何もかもすっかり打ち明けてお話ししますが、うちのおっ母あは、私と同じなんです。これも生れ損なったんです。御覧なさい。お父さんは黙っていますが、わし見たいな娘でも、娘だと思って心配してくれるのです。ですから、わしは父親には憎しみを持ちません。どっちかと云えば、世間で、普通なら娘が母を慕うのと同じものを、わしは父親に持って居ります。

ですが母は違います。私がわしを憎むように、わしは母が憎いのです。生れ損ったことまで似てるからでしょう。男のくせに女に生まれた、と思うと、わしがわしを憎むよりもっと強く、母の方が憎いのです。それは、母がわしを生んだからです。わしは、なまじいに女学校なんかに行ったものだから、悪かったのです。『俺見たいな人間は、生れた事その事が不運だ』と云う事が分ったからです。すると、母の憎いわけが分って来ました。『こいつが不幸を生みつけたのだ』と、云う事が。

山田さんは、金で、望みと云うものを持たない人間が、生きて行く上には、どんなに惨酷な絶望と一緒に居なければならないか、分って下さるかしら。

山田さん。一口で云えば、私の生きている事は、『面当て』なのです。『いやがらせ』なのです。私の逃れ切れない絶望の暗黒の淵に、誰か一人でも多く引っ張り込んでやる事なのです。

そうまでして、私は生きていたくはありませんでした。が、さっき母も云ったように、死に損ねました。一度自殺し損ねてから、私は『骨を折って死ぬにも及ぶまい』と思って、匙を投げて生きているのです。

自分と自分の母を呪いながら、生きているのです。生きていれば、人間の持っている本能丈けは、私も要求するのです。

どうしたらいいんでしょう、山田さん。

こう云う女があると云う事は、あなた方には、想像も出来ないでしょうね。

藤さんも、その犠牲になったんですよ。あの人は、善良なだけの人間で、わしの腹の中なんか読めっこはないのです。だから私の云う、目の先だけのことに、引っかかっては、憤ったり、慨いたりしているのです。

そして、あの人の家は商家です。その上あの人は男です。だから変化があるのです。だが、わしはどうでしょう。ずうっと昔から蚯蚓と同じように百姓です。

百姓が、どう云うものだか、山田さんはお分りになりますか。わしが、詰り百姓の犠牲なのです。永久に圧しつけられる為の生業の中に、湧いて来る蛆虫なのです」

「又始ったよ。狂が始ったよ。山田さん。これなんですよ。何を云ってるのか分りゃしません。こんな訳の分らん事を云っては、わしに食ってかかるんじゃもの、山田さんわしはどう返事したらよござんしょう。

これの兄たちは、どう云うもんか、二人とも頭がいいちうて、学資もいらんで、大学を出ました。そしてもう、それぞれ、いい処へ勤めとりますのじゃが、これだけが、こんな風な人で御座んす。これじゃ、あんた様、藤さんの処だって、どこだって穏かに、今日様が暮せる筈がありません。

それにおたねが、こんなにして、出たり入ったりして、終いに、もう五年も十年もして、今度こそ、ほんとうに離

縁と云う事にでもなったら、あんた様、どうしましょう。その時になって、藤さんの方から、『そんなら坊の養育料を出せ』なんぞ云われたら、わしたちは首を吊って終わねばなりません。

今ならば、養育料を出せ、と云われれば、未だ一年やそこいらの事でござんすから、何とか工面がつかんこともござんせん。だけど、五年となり六年となれば、養育料などと云うもんは、どんどん嵩んで行きます。

藤さんは、そんな事を云う人じゃござんせん。ふだんは虫も殺さんような、いい人でござんすが、酔うといけないんです。酔うと人が変ります。それでござんす。あんた様、こんな風で五年も六年も経って、その揚句に、おたねが飛び出した、と云う事にでもなれば、藤さんもむしゃくしゃして、一杯やるに決っとります。一杯やってから先が、わしは怖いのでござんす。

おとなしい、おとなしい、と云って、おたねは馬鹿にしとりますが、男のことでござんす。馬鹿にはなりません。一杯飲んだところで、『あんまり人を馬鹿にするな、坊の養育料はどうしてくれるんだ。おたねが俺と一緒ならこそ、俺は黙って可愛がって育てたんだ。おたねと別れたとなりゃあ、坊とは他人だ。養育料は貰おう』

と云われても、仕方のない話でござんす。それを云いがかりにして、暴れられても、仕方はござんせん。なあ、あんた様。こんな事はちょっとも、おたねは考えんのでござんす。そして、何が何だか訳の分らんことばっかり、喋舌りまくるのです。

お願いでござんすが、わしは藤さんに限らず、誰にしても、おたね見たいな極道女と添い遂げることなんか出来やしません。でござんすから、あんた様に口を利いて戴けるのを幸い、一つこの際、はっきり話をつけて戴き度いと思うので御座ります」

「どうも、初めてのあなたに、お恥しい話ばかり、お耳に入れまして。こんな風なので、私もどうも、意気地が無いようでござんすが」

と、聞きとれない位低い声で、お爺さんが云い出した。それは、丁度、女房と娘とを前に置いて、山田にひそひそ話をしているような調子であった。

「どんなに考えて見ましても、私には分別がつかんのでござります。申し上げにくい話でござんすが、誰が、どこをどう直せば、それですっかりよくなる、と云う話では無いものでござんすから

あなたが、話をまとめに来て下さったちうことは、ありがたい事で、お礼の申し上げようもないのですが、御承知の通り、おたねが、こう云う性分で御座んすから、木に竹を接ごうとするようなことに、なりはしないかとそれが、気がかりになるのでして。

おたね、御飯を上げなきゃ」

「いや、どうぞお構いなく。ほんとに未だちっともお腹が

空いていませんから」
と、山田は云った。喫しつづけたバットの為に、胸がむかむかしていた。
その上、何と云う困難な、解決のつかない問題の中に、飛び込んだんだろう、と、後悔に似た気持の中に、沈み込んでいた。
親たちの言葉も、おたねの言葉も、どれもこれも、尤も至極な話ではないか。その尤も至極な話同士が正面衝突をしているのである。
長い間、小作農として、苦労の総てを舐め尽し、知り尽した、この老いた農民の短い言葉、「木に竹を接ごうとする」事実。
おたねは、食事の仕度をする為であろう、その場から離れた。
「実は、いろいろ複雑な事情も、お有りになるだろうとは、存じて居りましたが」
と、山田は、主として、お爺さんの方に話しかけた。
「私としましては、鋏を持って来た訳ではないのでして、いもちを持って来た心算なのですが、どうも話が、鋏の方に外れたがるので困って居ります。お母さんは、坊やの養育料の事を気にしていらっしゃいますが、若しそう云う事を云い出すとしたら、藤さんが怪しからん話で、男らしくも無いと思います」
「いいえ、あんた様、持ち出すどころでござんせん。おたねが逃げて帰るたんびに、藤さんは、酔っ払っては、『それじゃ坊の養育料をどうしてくれる』と捩じ込んで来るのでござんす」
山田は二の句がつげなかった。
「どういうつもりなんでしょうねえ」
と云って、もう吐き気の来ているのに、仕方なく、バットに又火をつけた。
「云いがかりなんで、ござんすよ。あんた様。藤さんは百姓じゃござんせんでしょう。おたねは生れながらの百姓でござんしょう。三十過ぎて百姓を始めたのでござんす。百姓でもむずかしい山の田でござんしょう。藤さん一人でどうにもなるものじゃござんせん。
藤さんは、だから、おたねに百姓をして貰わんと困るんでござんす。ところが、それ丈けでもいけんのでござんすよ。商屋のおかみさんのように、月給取りの女房のようにも、おたねにやって貰いたいのでござんす。
野良から上って来れば、風呂も沸いていようし、御飯の仕度も出来ていようし、お銚子も食卓台の上に欲しい、と云うのでござんすよ。ところが、おたねは藤さんよりも、もっと暗くなるまで野良に働いていて、藤さんが腹ペコペコになって帰っても、おまんまも炊いて無い、と云うのが不足なんでございます。それがおたねには、出来ないので、ございます。
つまり、藤さんが世間が広過ぎるんでござんす。商も

やったし、外交もやったし、北海道にも行ったたし、東京で暮したこともある、と云うのが、おたねでは賄い切れんところでござんしょう。

おたねも、だから可哀想なところが、わしの口から云っては、何でござんすが、有るのでござります。あんな性分でござんすから、百姓の女房から月給取りの女房に早変りする、と云うような芸当は、出来ないのでござんすよ。どうしても、百姓は百姓、商人は商人でござんす。傍目には、のんきそうに見えても、百姓ってものは、苦労なもんでござんすで。

藤さんも、百姓が苦労だなんて、口に出しては云えませんし、おたねの方が百姓では巧者でござんすから、何かと蕊が辛いんだろうとは、察しるんでござんすが」

と、母親が云った。

「御尤です」

と云ったっ切り、山田は口をつぐんだ。

この老いた母は、「仇を生んだ」などと娘の目の前では云っているが、娘が居なくなると、こんなにも、娘の身になって考えているのだ。その上、娘婿の事まで、こんなにも委しく解剖しているのだった。

そこへ、おたねが、膳を運んで来た。

藤さんが、おたねさんに期待するであろうように、膳の上にはお銚子が二本載って居り、塩鮭の焼いたのと、生卵が丼に、十位も山盛りに盛ってあった。

「山田さん、何もありませんが、どうぞ一杯やって下さいな」

と、おたねが、炉と山田との間に、膳を置いて去った。

「どうぞ、口汚しですが」

と、お爺さんも云った。

「ありがとう御座います。どうも、折角ですが喉に入りません」

「山田さんは、東京でうまいもの許り食べているからでしょう」

と、おたねが云った。

「どういたしまして。東京で拾う餌が無くなったので、都落ちして、居候になっているんですがおたねさんが、私と一緒に、山の小屋に帰って下さらないと、私は、大好きな酒で、喉が、ほらこんなにグルグル鳩見たいに鳴いているんですが、戴けないんですよ。私は縁切り地蔵になるのは御免ですからねえ。一つ、何とか、今日の処だけは、私に免じて帰って戴けないでしょうか。いろいろ、御話も承りましたが、『勘弁相ならん』と云う程の事も無さそうに思えますが」

「私はどうせ一生涯、この家に居られるって云う訳でもないし、藤さんが気持をかえてさえくれれば、どっちみち死んだ積りなんだから、帰りますけれど、死んだ積りでも一つだけ、どうしても辛抱の出来ない事があります。それさえなければと思うんですけれど、それは、育ちの違いだか

ら、むずかしいんじゃないかしら」
と、おたねは云った。
「何ですか、それは、承って、私からよく藤蔵君に談じ込んで見ましょう」
「何でもない事のようなんだけど、それは去年の夏祭りの時でしたが、ほら、吊橋の傍のお宮があるでしょう。あそこで、村中の者が集って飲んだのです。その時、あの人が何かの事で喧嘩を始めたのです。相手は一人でした。それが、藤さんのお父さんの田を作っている人だったのです。相手の人は始めはおとなしく黙っていましたが、余り、藤さんがうるさいので、とうとう喧嘩になっちまいました。けれど、酒の上の喧嘩だから、皆で留めたので、摑み合いは直ぐに止みました。その時、引き離された藤さんは、肌脱ぎになって、大見得を切って、
『作人のくせに生意気だ』
と云ったのです。だもんだから、止めていた人たちも、止めるのをよしちまって、あべこべに藤さんはみんなに袋叩きにされちまいました。それはいいのです。それでいいとわしは思っています。いけないのは
『作人のくせに生意気な』
と云う、藤さんの気持です。私の家も小作人です。私に云わせれば、作人が田を投げ出しちまったら、地主はどうするんでしょう。
いくら夫婦でも、私は小作人の家に生れて、小作の子で育ったのです。その時も、
『作人のくせに生意気だ』と云う言葉を聞いた時、私は何とも云えない程悲しく、辛かったのです。袋叩きに会っているのは、私の亭主です。亭主が袋叩きにされてると思えば、私は飛びついて行って、殴ってる者を引っ掻いてやりたいとも思いました。
けれども、『作人のくせに』などと云ったのは、女房の私にも、出刃でも喉につきつけられたように、ぐっと来ました。そんな事を私に云ったのだったら、私は、藤さんを、矢っ張り、外の人たちがやったように、殴るか……、してやります。
そんな時の、私の辛さというものを、山田さん、考えて見て下さい。これは私が間違っているのでしょうか。藤さんが、『作人のくせに』などと考えるのを止める事が出来るでしょうか。あの人は地主の子に育ったんですものね。私は小作人の子に生れた上に、生れ損っているんです。これでうまく行くでしょうか。たとえ、地主の家に行ったからって、私には、小作人を軽蔑する、と云う事は許せないのです」
おたねは、息を撥ませて、そう云い切った。
山田は、又、打たれた。
おたねの親たちは、ハラハラしているようだった。山田は藤さんの妹婿であった。
地主側の人間に向って、小作人の立場を説く、おたねの

言葉に、同感はしていても、山田の意中を忖りかねて、ハラハラしていた。
「おたね、お前は又、何と云う事を」
と、爺さんは止めかけた。おたねの母親は膝を立てたり、下したりしていた。
「御尤です。そんな事があったのですか。よく解りました。そいつは、養育料とか、打ん殴るとか、酔っ払うとか云う問題とは較べものにならない、大きな問題です。
私にも、始めてよく分りました。そいじゃあ、うまく行く筈が無い。木に竹どころではありません。鉄と木です。水と油です。
じゃあ、その点を一つ、談判しましょう。その次です。酒に酔っ払うことや、養育料の問題は。それから話をつけなけりゃあ、どんな話だってつきっこありませんよ」
「分るでしょうか、藤さんに」
「それは、おたねさんと私とが行ってから、みっしりと話さなければ、駄目でしょう。その上、こいつあ一朝一夕に分らせちまうって訳にゃ行きませんね。
大分骨の折れる仕事ですよ。おたねさん。
私はもう、もちでも鉄でもありませんよ。私と一緒に談判には行って、下さるでしょうね」
「そりゃ行きます」
「それじゃあ、一杯、いただきましょう。どうも、酒飲みって奴あ、例外なしに意地が汚ないんでしてね」
山田は、何か、金鉱探検者が、露頭でも発見したような歓を、胸に感じて、飲み始めた。
「どうも、困った娘を持ったんで、骨の休まる暇がありません」
と、おたねの父が、馬に、草をやる為に立ち上る時に云った。
「いや、お父さん。ちっともお困りになる事はありませんよ。御馳走になります」
「どうぞ、何にもなくて。けれど、あんた様、うまく行きますでござりましょうか。わしは案じられて、なりませんのじゃが」
と、母親が膝を立て直して、藁束と変りのないような髪毛をぼりぼり掻きながら、山田に訊いた。
「無理にうまくやろうとは、お母さん、私は思いません。無理ってものは、終いまで押し通す訳には行きませんからねえ。兎もかくおたねさんに御一緒に行って戴いて、よく得心の行くように話して見ましょう。その上で又、直ぐ様子をお知らせに上ります。それはそれとして、来る道で仔馬を見たのですが、馬の仔と云うものは、何とも云えない可愛いいものですね」
「うちにも、二つ居ります。この厩に一つと、外のに一つ、二つ居ますが。今じゃ、馬の値が下って、お父さんの道楽になってしまいました。だんだんひどくなって行く世の中でござんす」

「いろんなゴタゴタも、煎じ詰めると、暮しの苦しいところから来るのじゃありませんかねえ。たっぷり出る乳なら子供に吸わせるのが楽しみだが、凋れた乳では子供に吸わせるのが苦労見たいなものでねえ」
「あんた様は、苦労なさったんでござりましょうなあ。女の気持まで分っておいでになるんじゃから。その通りでござります。子供も大きうなるにつれて、可愛いいの一本槍では始末がつき切れませんで」
と、母親は、安心していいのか悪いのかに、未だ迷っているようであった。
おたねは坊を背負って、風呂敷包みを一つ手に提げて、山田と戸外に出た。
「何分よろしくお願いします」
と、老いた父母たちは云った。
「どうも御馳走様でした。よく話していろんな取り決めは、明日にでもお知らせに上ります。では御免下さい」
山田はそう云って頭を下げた。
山の田や畑には、初夏の清々しい空気が、サラサラと吹き渡って行った。
「こんなにいい景色の処で、どうして、あんなにいろんなゴタゴタが起るか、不思議なような気が、私にはしますがね、おたねさん。見たところ、何もかも綺麗で澄み透って居ますのにねえ」

と山田が云うと、おたねが答えた。
「田舎では、ゴタゴタより外に、何もありゃしません。暮しが苦しいばっかりですから。釣りをしてる人が、二三人も並んでいて見なさい。釣れ出した人のところへ、きっと鉤を投げます。そうすると、釣れていた人の鉤と後から投げ込んだ鉤とが、もつれついてしまって、魚を釣るどころじゃありません。もつれた鉤を外すので、日が暮れます。わしなんか、何か考える事をしようとすると、考える前に目の前が真っ暗になって、くらくらっと目がまわって終います。何の為に生きているのやら、さっぱり分りません。こうして山田さんと、山の小屋へ帰るのですが、帰ったら又、直ぐに喧嘩です。どうする事も出来はしません」
「何とか、うまく行かんものですかねえ。藤君は、単なる駄駄っ子見たいなもんだが」
「わしは、人から可愛がられた、と云う覚えが無いから、誰も可愛いいと思う事も出来ないんです。性分でしょうね」
一生涯、さっぱりと解決する機会がないであろう、山の小屋に二人は、夕陽を浴びて歩いて行った。

（一九三三・一〇）

劇場

村山知義

一

初めてその男を見たとき、このように切ぱつまった状態だったのに、杉森は可笑しくなった。なるほどC劇団執行委員であり、大きな立派な男であった。だが、何と妙な男だろう！　この男は決して相手の顔を見ないで、一尺ぐらいソッポに向って話しかけている。杉森の顔の右横に向って話していると思うと、頭の上に、次に左横に、と云った具合だ。平たい鼻をはさんで上唇とせり合って大きな円い眼が突き出している。

「佐上さんの紹介状見ました。家の方も経済的な方面も本当に大丈夫なんですね、そいから才能の点については、佐上さんも初めて一ぺん会って話して見たきりだから全然わからんからと書いてるんだが、何しろ演出の方の仕事というのは、第一、素質があるのかないのかが、いろんな事を暫くやってみてからでないと解らないっていう厄介なことなんだから、まあ、役者の方なら、セリフでも読んで貰やあ一応は、と云ってもむろん程度の問題だが、わかるんだけど、何しろ厄介だから、まあ暫く小道具係りの手伝いでもして、そいから効果の手伝いをして、プロムプタアをして、舞台裏のことを何から何までやって見て、そいで自分の素質を磨きながらためすっていうようなことより仕方ないんだが、そいでもいいですか？」

そいでもいいですか？　を急に調子を張って云ってギョロリギョロリと杉森の顔だけをよけて動き廻っていた眼を、そこで、じっと左上の方に据えて返事を待った。恐ろしく底響きのする声だった。杉森は自分の熱意をこの男に眼から打ち込もうとすることは無駄だのに、一所懸命でその眼を見上げながら、

「へえ、みんな、すっかり、決心しています。大丈夫です。おたのみします。」

「ええッと、そいじゃあね——おや、明日だったかな、明後日だったかな？」

そう云ってその男は不意に羞恥に充ちた顔をしてチラと杉森の眼を初めて掠めて、驚くような大股で暗い楽屋の奥へ這入って行ったが、すぐに出て来て

「明日だ、明日執行委員会があるから、そこで推せんしときますからね、明後日朝十時にまたここへ来て下さい。稽古が丁度明後日から始まるんでね。」

「そんなら、入れて貰えるんですか?」
「始めは準劇団員、そいから劇団員です。アドレスは履歴書にあったかな。(手に握っていた履歴書を拡げた) ある、ある。ほう、十七歳か。いいなあ、僕なんかもう二十八だ。一ジェネレエション違うんだなあ。」
「じゃ、おたのみします。どうでもこうでも入れてもらうつもりで出て来たんやから、是非ともおたのみします。」
杉森は我にもあらずペコリと深く腰を折り、この男に別れた。
この男――プロレタリア演劇の草創時代からの有名な役者千葉健三――は初めて真直な視線を帰ってゆく少年の後姿に投げた。田舎の人らしく骨太でずんぐりした身体にかすりの単衣とよれよれの小倉の袴、ざんぎりが一寸あまり伸びた頭に、今、茶色の鳥打をのせようとしている。しかし視線のはじで千葉はもう充分にこの少年の容貌を見て取っていた。下すぼまりの三角形に黝ずんだ顔の中央に可成り立派な鼻、葡萄のように丸くふくらんだまぶたの下の小さな執拗な眼、殆んどない顎と下唇の上に覆いかかった上唇。手に持っている「プロレタリア科学」の今月号――というのは一九三一年九月号なのだが。
だがそれらが特別な印象を千葉に与えたわけではない。杉森の姿が表通りへ曲らないうちに千葉は手に持っていた煙草の吸殻をポイと投げ棄てて、楽屋の中へ引っ込んで行った。吸殻は劇場の漆喰壁と隣の貸事務所のコンクリ壁の間の楽屋口の日の当らぬ細い地面に落ちて、僅かに頭を出した丸い石に当って、その横で暫くの間煙を出していた

――

「どうだったんな?」
「ん、まあ、うまいこと行きそうや。おかしげな男が出て来たぜ。まるでオットセイか鰐のような大けな男や。あいでも役者かのう。」
「オットセイと鰐となら大ぶん違うぜ、感じが。」
「あの人を見たらすぐわかるわ、おらの感じが当っとるちうことが。せが高うて、とっても煙草くさいんや。あいでえらい役者かもわからんぜ。ええ声しとったぞ。ところで諸君(彼は不意に畳をバンバンと叩いた) 私はC劇団小道具係り助手杉森勉であります。」
そうしてペコンとお辞儀をして涙を流し流し笑い初めた。そのきっかけでゴロリとあおむけになり、手足を反り返るほど伸して、
「おらも傑作書くぞ!」
と呻ったもう一人の男は上村信雄と云い、香川県の師範学校の杉森の同級生である。両方とも同じ村の貧乏な自作農の子で、どうしても上級の学校に這入りたいと頑張ったので月謝のいらぬ師範へ入れられたものだが、或るプロレタリア文化雑誌の支局を学内に作ったために停学にされたのを機会に、経済的には上村の叔父を、思想的には二人の尊敬するプロレタリア作家佐上をあてに、無理な上京を決

行したのだ。二人ともしかし決して軽率な男ではない。自分達の才能や耐久力や肉体的条件や経済的条件やをいろいろと熟慮した揚句のことで、二人連名の手紙を何通も受け取った佐上は二人のたんねんさ、しつこさにむしろ呆れ返ったから、上村を作家の団体に、杉森をO劇団に紹介することを承諾したのだ。

上村の叔父からの扶助月額十五円、二人で佐上の原稿の浄書をしたり、材料を蒐集したりして十五円見当。杉森は稽古中や公演中の交通費や飯は劇場で支弁してもらえる。これだけの定まった基礎があれば、あとは何か内職するなりして精力的に掻き集めた金で二人が暮せぬ筈はない。一食五銭乃至十五銭だから二人で十七八円を越すことはない。部屋代が六円、煙草も酒も呑まない。二人が借りた部屋は月島だが（月島にした理由は三つある。1、劇場に近い。2、労働者の生活に近い。3、安い。）そこから新宿ぐらい迄だったら歩いて行く。バランスは合う筈なのだ。だが実際にやって見ると予測できぬ支出もあったが、また一方、便宜もあった。殊に劇団員は一日の大部分を一緒に暮しているので、家から仕送りのある仲間に不自然でなく飯をおごってもらうことも度々だったし、女優達は楽屋風呂の湯で、劇団員のよごれものを一点五銭で洗濯してくれた。本を買う金はなかったが、仲間から借りて、ちゃんとハトロン紙でカバアをつけかんじんよりを作ってしおりにした。

一九三一年はプロレタリア芸術運動の急激な全般的上昇の時期だった。草創時代以来六年の苦労の実が熟して来て、公演の度毎に一万人近くの労働者観客が劇場に押しかけ、毎晩のように入口には長い列が出来た。作家団体の出版物も鰻上りに部数が殖え、同じような上へのカーヴは、美術、音楽、映画、写真、科学、哲学等の各部分においても描かれて、その年の暮には、とうとう各文化部門の団体の綜合的組織が出来るというところまでのぼりつめた。だからどこの隅へ行っても才能と精力と人手のあまるということはなかった。

田舎から出て来た二人の十七歳の少年は、この大きな興奮の渦の中で、誰の眼にもつかなかった。小道具係りは塚本という主任の下に、杉森を入れて三人いたが、この狭いグループの中でさえ、口の重い、解りの遅い、田舎者の彼は今度の公演じゃあ、君の受持は第一幕第一場で舞台にミカン箱二つとズックの袋一つを出し、第二場では毛布を二枚と鍋一つを出し、云々、云々、と云い渡され、手帳にこまかく書きとめ、何度も開いて見てはおぼえ、間違いなく実行するだけのことで、誰の注意を惹きようもなかった。見掛けによらず手先は器用だったので、あれこれと小さな持道具などを作らされた。こうして役立たずでもなく、大したヘマもせずということがますます彼を目立たなくした。

――公演の初日でゴッタ返している。幕開き前十五分。客席はもう超満員だのに門の前は山のような人だ、経営部

の人達は声を振りしぼって謝ったり呶鳴ったりしている。千葉県からわざわざ見に来た百姓の婆さんがある。待っている人みんなの総意で、彼女だけは中へ入れられる。主役の千葉は上海の労働者の扮装で、舞台上手のドアを開けて部屋の中に踏み込む動作を大きく首をひねりながら繰り返しやって見ている。彼はさっき小道具を持って来た杉森を見たが、あれっきり忘れて、まだ彼の顔を覚えていない。三号の女優部屋はあまり下らぬおしゃべりが多すぎるので最近問題にせねばならぬと教育部から執行委員会に提案されているが、そんなこととは知らず、一人残らず口を動かしてしゃべりあっている。電気の者は昨日の舞台稽古でダメを出されたスポットの配置がまだ思うように出来ないので、スノコをガタガタ走っている。演出助手がもうドラをひっさげて舞台に現れた。で、杉森はどこにいるだろう？自分の割りあてられた仕事をすますと、便所に這入って、第一ドラ迄の十数分を「史的唯物論大系」の「総論の部」を勉強しているのだ。半分も解らないので、二度目を読んでいる。こうして姿を消すので時々カスを食うことがある。芝居には突発的なことが多いのだから、割りあてられた仕事がすんだって、ほかにどんな用が起るかもわからない、というのだ。やむを得ない突発事もあるだろう、しかしたいがいは、準備の不注意からきている、そのために大事な時間を無駄にはできんというのがそれに対する杉森の気持だ。しかし口には出せないで、いくらかわざとウロウロしたのち姿を消し、少し早目に現れるようにしているのだ。

小道具部の主任の塚本は、油紙のような皮膚が鋭い鼻梁にへばりついて両側に流れ、頰で深い凹みを作っている男で年も杉森とは十近くちがっていたろう、古参者の一人だが、杉森を近寄せぬ威厳を持っていた。感情的な男だった。骨も皮膚もその感情を外に現わすことを決して許さなかった。奥の方でその感情は強情に坐っていて、落度があって、演出者などからカスを食うと必ず言い訳を云い、それを自分以外の原因に転化しなければ納らなかった。

「俺が、そいだから、必要かと聞いたら、いらねえと云ったから、出さなかったんじゃねえか。何しろ、小道具にゃあついてねえんだから、仕様がねえ。」

相手がいなくなってからも、同じ小道具部で非常に気の合っている小島という、始終額をしかめている小さな男に向って、そのようにつぶやいている。

「千葉君はここで杖がいるんですか。いらないんですか。じゃ、いるんですね。よろしい！　わかりました！」

時とすると、切口上でヒステリックに叫んで、頰へ向って凹もうとする骨の縁にわずかに着いている眼の下の筋肉をヒリヒリと動かした。そばにいて杉森はその野太さに驚き、これは強い確信から生じるものであろうと感心した。

「あいつァなかなか職人気質だよ。」と誰かが批評した。

塚本と小島がいつもくっつき合っていることは明かだった

が、どういう生活をしているのか誰も知らなかった。杉森の観察によれば、小島は塚本の影響下にあるのであった。小島は会議の席で、時とすると、非常に興奮して切口上で抗弁することがあったが、それは彼が塚本の骨と皮膚の下に感情を読み取ったからであり、塚本の感情はこの代弁を得て鎮まるのである。塚本はそういう席ではわざとうしろの方にすわり、一切口を開かなかった。杉森は知らず知らずのうちに、そういう席で、二人の表情を自分の顔の上に移そうと努力していた。

間もなく杉森は俳優の中に、必ず二人を支持する男のいるのに気が附いた。「異議なし。異議なし。」と彼は小島の発言を可愛がりいたわるように迎えた。そして小島が下手糞に感情的に反感をそそるように表現したことを、指の先端の太い腕を振り、非常に巧みな云いまわしで、如何にも根本的な方針から根生いした当然の結論のように云いなすのであったが、それは服部忠一郎と云って、三十を越した古参者で、千葉と同様に重要な役者だった。杉森はいつもこの討論の経過から多くのものを学び取ったように思った。専門家を尊重しなくてはいけない、技術者は職人でなくてはいけない、そういう命題のまわりを、服部の述べるところはひらりひらりと飛ぶ鳶のように飛んでいた。

自分もあのような「専門家」になりたい、ということが杉森の希望となった。だから、充分な専門家として認められている効果部の主任のカンちゃんと友達になれたことはうれしかった。だがカンちゃんは杉森とさえすぐに友達になるほど誰にもわけへだてをしなかったのだというべきだろう。杉森はよく、クッペルホリゾントの下手うしろにある効果部の部屋を覗き込んで、音を出す道具の使い道を見習った。カンちゃんと一緒に道を歩くのは面白かった。或る芝居で隅田川の河口の月島のはずれの石垣の場があって、そこを通る東京湾汽船の汽笛と対岸の東京港の雑音を聞かせる必要があったとき、杉森は案内役で、始めてカンちゃんと一緒に歩いた、杉森はよくひとりでそこへ行ってぼんやり考え込むのが好きだったのである。カンちゃんの顔は月のように丸く（きたない月だが）胴にくらべて脛が短く、小さいコンパスを早く動かした。あだ名はどこから来たのか杉森には想像もつかなかったが、その力は大きく、総会で点呼するような時ですらカンちゃんだけはカンちゃんと呼ばれ、本名を知らないのは杉森だけではないらしかった。カンちゃんは道を歩きながら短い足を挙げてしきりにいろいろの物を蹴った。月島の裏通りに落ちているいろいろの物は急に動かされていろいろな音を立てた。空罐詰の新しいのと古いのとは別の音を立てた。鉄管は石垣と烈しく出遇っても響かない音だった。彼はまた大根おろしをひろいあげて太い釘でしきりに振るようにしてこすって見てポケットにしまい込んだ。二人はとっぱなの石垣に腰かけて耳を澄ました。東京湾は一面のもやもやと澱んだものに覆われ、音の通過は困難と思われた。そのもやもやも

と澱んだものは、大都会の一日の神秘を洗いざらい包み含めて、今や海のあなたへ持って行って、波の高い所で水の中へ溶かし込んで、永劫に人の眼から消滅させてしまうかに思われた。杉森は三ヵ月前に大都会そのものが、田舎にはない何か生命力を芸術的な力を持っているものと考えて上京したのだが、上村と一緒に一ぺん浅草へ行き、日本映画を見、寿司を食ったきりで、あとはまるで歩いたことのないままに、いつの間にかそのような想像が消え去りつつあるのを悟った。あるのは大都会そのものではなくて、大都会が可能にする自分の仕事だけだった。ところが今ここに、十一月の夕暮の大都会を右手にまとめ、左手に海を置いていると、やはり何か巨大なうごめきが、自分をちりあくたのように押しひしいでしまうのではないかという心細さがひっしと身に来た。満ちて来る潮がチャブチャブと足元にだぶつき、遠く去った夏の脱衣所のよしず張の中から紙屑が砂と戯れてかすかな音を立てながら転び出る。

不意に、よどんだ空気のカルメラがプーッと膨れてはぜて、その裂目から海面すれすれにわたって底深い汽笛がとどろき、それを追いかけて大小高低千差万別の汽笛がひびき出す。カンちゃんは眼を円くして芝浦の方へ顔を突き出している、その余韻が横須賀の方の空にこだまして消え残る頃、早くも灯の窓から洩れる白塗りの真新しい汽船が視線をブチ切るようなまぎわを、舳にくずれる波や機関やデッキの上の足や管から棄てる水やの複雑な音の塊となって右手から乗り出して来た。カンちゃんは「よッ」というような叫びを挙げ、杉森を引っ張り「よく聞いてくれッ！」と早口に云う。驚いてその顔を見ると、溺死した人間のように白眼を一杯出して黒眼は上の隅に押し込まれている。突然その音の塊はチンチンと澄んだ鐘の音をさせ、次いで筒抜けの大きな汽笛を放って一面を震撼させた。

「まずまず、聞いたねえ。」

と、汽船が薄暗のあちらに呑まれてゆくのを見送ってカンちゃんは立ち上った。

杉森の部屋へ友達が来たのは、その日の帰りにカンちゃんが寄ったのが始めてである。

「おれ、音楽をやったことないんで、致命的なんだがね」

彼は手帳へ、数字にダッシュをつけたり、マルをつけたりする独特な記号で、さきの河口の音響状態を記録した。

「君ァときどきニヒリスチックになることないかい？」

カンちゃんはいくらか斜視の眼をそばめて、不意に問いかけた。

「――」

「世の中が結局、何のためにも作られたもんでない、宇宙ってものが全然無意味だっていう感じだね。僕ァあるんだがね。」

社会主義的な意識を持った田舎の叔父の感化で、物を読むようになっては「文戦」「前衛」「戦旗」のようなものばかり読んで育って来た杉森は、同じ文化団体内の人間が

このような非階級的なことを云うのに愕かされた。
「ないわ」
「うむ、そうかなあ。君ア自分自身に矛盾を感じないかい? 例えばさ、世の中が理論一点張りで済むように思えるときや、そいからまたは性慾の処分なんかでさ。僕ァその時に突然ニヒリスチックになることがあるんだがね。」
「ないわ。」
「そうかなあ。」
そのしかめられたいくらか斜視の眼は疑わしげな色を見せたが、杉森の顔に明かな不快な様子を見ると急に話題を変えた。
「ま、ないに越したことはないよ。」
そしてマイクロフォンが目下大きな問題であること、これを征服すると劇場音響の分野に大革新が来ること、そのために効果部一同が照明部の者に頼んで電気研究会をやっていること、また最近は円盤レコードの代りに針金にレコードする方法が発明され、これによれば長さに限度がなく、スペースを必要としない、また回転装置も簡単で済むから、蓄音機の劇場における効用も増すわけだということ、更には、金さえかけていいなら、トーキーのシステムで、フィルムによって暴風なり波濤なり飛行機なりどんな特殊な音でも屁でもないことなどを話した。
「要するにエフェクトの問題は解決されてるんだがね、どんなにちっとの費用でごまかすかっちうところに今度は無限の問題があるわけさ。今日んだってあすこんところへ機械を持ってってスウイッチ一ついれりゃあもう済んでるんだが、そういかんからコレだ。」
カンちゃんは不思議な記号だらけの帳面を投げ出した。
「これから半月苦労してそいで演出者のカス聞くんじゃ助からんよ。だがね(彼はわざと真面目臭って)われわれの問題は常に現実的に提出され取扱われねばならん。だから、これこれの費用で、これこれの音をなんとかしてこねくり出すということ以外にわれわれの問題はないんである、さ。」
上村のほかにはカンちゃんが唯一の友達だったが、杉森は彼が自分に対してすべてを披瀝しているのではないことを知っていた。たとえば女優の噂だとか猥談だとかをカンちゃんはしきりにやるのだが、杉森を見ると話題を転じてしまうのだ。
——上村と杉森は市営食堂の雑煮で、東京で最初の年を迎えた。
「一九三二年! 多幸なる闘争の年を!」
と二人は上京する時に高松から宇野への連絡船のデッキで手を握って何かそのような式辞めいたことをお互いに云いあったことを思い出して、元旦の朝、手を握りあった。
上村は最近何かイライラして快活さを失っていたが、杉森は、それはきっと三つ書いた小説が一つも作家団体の雑誌に採用されなかったためだろうと考えて、わざと気のつ

かぬようなふりをしていたのだ。だが上村はその元旦から非常な決意で新しい小説に取りかかった。最近知り合った近所の鉄工所の年老った労働者が組合に這入る過程を取扱ったもので四十五枚を十日かかって書き上げた。水鉢巻をし「傑作んなったのう！　ほんまに傑作や！」と時々呶鳴って陶酔していた。徹夜して出来上った朝、彼は佐上さん所へ「その場ですぐに読んで貰わんと、預けたままにしといたらいつ迄ほっとかれるかわからせんわ」と出掛けて行ったが、夜十一時過ぎて劇場から杉森が、帰って見ると、上村は枕元にその原稿を投げ出したまま、上唇に薄髭がまばらに生えた口を開け、疲れきったようないびきを立てて眠っていた。

「うまげにならなんだな」と思ったが、翌朝眼がさめて「どうや？」と聞くと果して「観念的で、おあつらえ向きに出来すぎとる、拵えものや云うんやが」と云うことだった。

「もう、おらァ続かんわ！」

「情ないことを云うな。まだ年はとっとらんわ。十八歳ぜ。前途洋々ちうとこや。この小説やとてええテーマしとるわ。」

「テーマや才能の問題とはちょとちがうんや。問題は経験ちうこっちゃ。どんな創造にしたってみんな経験の『順列組合せ』にほかならんのやけんのう。」

「経験」というオール・マイティーが出れば杉森ももう頭が上らなかったが、

「しゃあから、まず自分のことを書けばええんや。自分のことは自分が一番よう経験してわかっとるんやから。」

「阿呆いうな。今迄の経験と云うたとて何にも変ったことなかったんやからのう。それに芸術ちうもんは独特でないといかんのやからな。それに経験が狭かったら自分が経験したことのなかでどれが価値があって、どれが独特やいうことさい解らんだろが。」

「そんなら年をとるまで阿呆みたいな顔して待っとるのか？」

「独特の経験をしてきたもんはええのう。お前やおらのような平凡な自作農の息子で、月謝なしの師範学校へ這入ったようなもんは不幸の極致や。親がのうて孤児院に育ったんでもええ。人掠いにさらわれたんでもええ。日本人と台湾人の合の子でもええ。生附きの遺伝梅毒でもええ。メリケンジャップの子でもええ。刑務所で生れた子でもええわ。」

　その投げ棄てるような云い方の烈しさに杉森は言葉なくて天井を見つめた。

「第一お前、おなごと云うもんでさえ書けやせんのや。人類の半分はおなごやもんのう。そのおなごを一つも知らんのやから。おなごときたら書こうと思っても何が何やら見当が附かんわ。」

　女は知らなかった。二人とも姉妹もなくまた従姉妹と云

ったようなものもなかった。上村は夜、寝床の中で、衝動に身を噛まれつつ、その事実を取り返しのつかぬ損害だと思った。もし姉妹があったら、そして自然に女の肉的及び心的構造について知ることが出来ていたら、このように奇怪な形に増殖する好奇心から解放されたろう。男女共学でないこともこの不幸の原因の一つだ。こういうことの結果、女に対して自然な自由な態度で近附けないので、結局女を知ることのできる機会から愈々縁が遠くなる。それならば亀井戸なり玉の井なりへ行くべきだろうか？　金もないし、それにまずそういうことは階級的に許さるべきことだろうか？　杉森は答えた。

「そうやのう。おらにも解らんわ。ああいう制度がいかんちうことはハッキリしとるけど。そういう制度全体とはたたかわんならん。しゃあけど、おらやお前が一度や二度行ったからというて、それが全体にどうなるちうこともないんやけどな、お前にとっては行くことは大いに積極的な意義がある。」

「芸術家としてのおらにとってや。」

「病気の危険がある。」

「割合にうつらんもんやそうな。それに、病気になって見たとてわるうないわ。そんなことでも書く必要があるかもわからんからのう。」

「なおす金がないぜ。それにジヒリスやったらまずく行ったら廃人になるからなあ。子孫にも遺伝するし。」

杉森にとってはしかし女は神秘的な高尚な存在である。女の近所に自分を見出すというだけで、女に対して自分の冒瀆的に感じられるので、多くの距離を置いた。そして自分のこの気持をさげすまれるのを恐れて、女については一ト言も意見を述べまいとした。二月の芝居では、だが彼は舞台の上手の袖に控えていて、千葉の妻の加那子に「第一景」「第二景」と書いた三尺角の張物を順々に渡さなければならなかった。

「生きた新聞」という新発明のアギット・プロップのレビュウで、千葉加那子は各景の初まり毎に舞台をその張物を持って横切るのだ。幕があがる。舞台も客席も暗い。拍手が闇の底から湧く。杉森は「第一景」の張物を加那子に渡す。スウイッチがはいって、スポットが上手にカーッと照りつける。腕と脚をむき出しにし、インジゴ色のシャツとパンツを穿き、赤い布で頭を包み、赤いネクタイをした彼女の姿が、杉森の鼻の先でその光の丸の中へ身をまかせて踏み込む。そしてゆっくりと脚を踏みしめて、舞台鼻を向うのはしまで歩いて行く。第一景が演じられている間に彼女はホリゾントのうしろをまわって上手へ来る。大きな袖の張物の陰影の中で舞台に顔を向けながら杉森は彼女のびっしりと身のいった薄着の身体からの体温に襲われて身震いした。

「それで八人いるしょ。」

不意に耳元で声がしたので彼は振向いた。しかし彼女は

彼に背中を向けて、凶作地の老婆に扮した根岸みち子と話していたのだ。
「そいでカンちゃんは子供を幾人さがしてきたの？」
根岸みち子が皺を一杯描いた口元から答えた。
「二人よ。」
「カンちゃんに二人しかさがせないなんてことないよ。もう二人さがしてこなきゃ洗濯物おことわりっておどかしてやろうよ。Yのセッツルだって、Kのセッツルだって、まだきっと行ってないんだから。」
「カンちゃんはね。とても当りがよくてさも尽力してるように表現することはうまいけど、何しろ要領がいいからね、私達みたいな人のいい連中はすぐにごまかされちゃうわ。」
世話焼の茂森まさ子がその老婆の孫娘の桃割れ姿で
「あんた寒くない？　何か持って来てあげようか？」
加那子は脚をたたいて、
「感じないわ。」
みち子が
「血で一杯なんだね。」
まさ子が、
「熱き血潮か。素敵！」
こういう会話は杉森には耐え難い。プロムプター・ボックスから暗転のしらせのジイーという電鈴が響いた。加那子はスタートの位置につき、杉森から張物を受け取り、舞台の方をきっと見た。杉森はまだ消えぬ舞台の電気の反映で浮び上っている美しい横顔を見た。舞台に出たときの微笑がもうその口元に用意されている。眼が離れ過ぎ、そのために子供子供した印象だった顔は、横顔では大人びた威厳をもって彼を驚かした。眼をそらすと、胸のインジコ色のシャツは一ト握りほどに盛り上った乳房の上にぴったりと緊張していた。とたんに暗黒になり、スポットがカッとまともに来て、彼女は舞台へ歩き出した。その瞬間、燃えるような光の中に、彼は彼女の拡大された微笑を浮べた上唇に薄い生毛を見、そして乳房が小さく跳ねたのを見た。
芝居の続く間毎晩、彼はその位置でそういう加那子を見、また女達の話を立ち聞きしなければならなかった。そしてそれらの話から次のような事が彼の頭に這入って来た。
この間総会で決定された少年劇団を作ることを責任者の加那子が一所懸命にやっている。劇団員の家族や知り合いの子供（中には劇団員自身の子供もいた。例えば服部の子のかづ子）を中心にセッツルメント関係の子供を合せて十二人集まった。半ば学校的な訓練機関が作られねばならぬ。
「私には子供って怪物みたいな気がする。こわいのよ。要するに理解できないの。」
とみち子が云った。
「何云ってんの。自分が子供のくせに。」

とまさ子が肱でみち子をつついた。加那子が云った。
「世の中には二いろの人間があるね。子供の気持のわかる、人とどうしてもわかんない人と。このちがいは可成り本質的なもんよ。子供の気持のわかる人とわかんない人とはほかのとこでもまるで型がちがうわよ。わたしはわかる。その代りそういう人間はどこか抜けてるけどね。」
それからまた或る時は、
「私はね、朝あいつが私を早く起すのが一番しゃくにさわんの。それにあいつはまた馬鹿に早いんだもん。」
加那子は千葉健三のことをあいつと呼んでいる。出っ歯のために「明眸馬鹿」と呼ばれているみち子が、文句なしに大きく澄んで美しい眼を、好奇心をかくすためにしかめながら、
「で、夜はどうなの？　どっちが先に寝るの？」
「そりゃあいつの方が遅く迄なんかかんかやってるわ。だってあいつは六時間寝りゃたくさんだっていうんだから。だけど女ってもんは誰だって男よりたくさん寝ないと生理的に疲労が恢復しないもんなのよ。そいだのに私が寝てるとまるで罪悪でも犯してるように考えるんだもん。あんたんとこは？」
と加那子はまさ子に訊いた。
「全然逆さ。ああいうのが言葉の厳格なる意味における善良なる小市民てんでしょ。どんな場合にでも、あらそいと云うことを避けるんだからね。あんな会社なんかに勤めてよくいやにならないもんだと、私ときどきつくづく顔を眺めるわ。」
この芝居以後、杉森は、じっと遠くから加那子の顔をみつめていたり、彼女の声に耳を立てたりしている自分に気がついて驚くのであった。しかし丁度そういうように作られたゼンマイ人形が永久に笑顔でコックリコックリうなずいているように、彼女の姿が現われその声が聞えれば彼の眼や耳は忽ち或る大きな力の支配の下に一定の動作をするために奪い去られるのであった。
一九三一年暮から一九三二年の初めにかけて、日本の左翼文化、演劇運動は世界的な大きな転換期の波の中に投げ込まれた。出版とか公演とかに依るイデオロギー上だけの運動の形から、経営内に於けるその効果の定着のための大衆組織の形へ、運動の主体から切り離されたインテリゲンチャ専門芸術家だけのグループから、主体の直接的指導による労農文化人の大衆的形態へと急進展した。そしてすべての急激な進展がそうであるように、いろいろの面、あらゆる隅、それぞれの人において、無数の古いものとの矛盾と軋轢が起った。その古いもののうちには、今まで眠っていて不意に揺り動かされて立ち上ったものもあった。またこれ迄は積極的な要素として認められていたものが一挙にその反対物であることを曝露したものもあった。
杉森はまだこの大きな転期の意義を掴むことが出来なかったが、絶え間なく動き、指導されてゆくことの緊張に、

何の矛盾もなくよろこびを感じていた。誰も彼に注意しないことは彼にとって不満なことではないかということにすら気づかなかった。

　三月の半ばに、彼と上村との月島での共同生活は解散した。原因は小さな石炭のブローカーで雑司ガ谷に住んで、何の道楽も持たず、五十を越えても子供のない上村の叔父が、恐ろしい熱情でもって持ちかけてきた上村に押しこくられて、芸術は全然解らぬながら、ちょっと変った甥のパトロンという気持を楽しんでいたが、何カ月たっても一度も小説は活字にならぬばかりか、たまに遊びに来ても支那ソヴェートの賞讃やガンジーの悪口を云うだけの甥に好意を失ってきた所へ、炭価が底知らずに崩れて来たので、もう金を出さぬと申し渡したことと、作家団体の方で、もし上村が事務所にとまり込むなら書記局の仕事をさせるという話があったことである。しかしそのことが無くてもこの共同生活はそう長続き出来なかったろう。二人の性格は全く異っていたのだ。身体は裸になっても見分けのつかぬほど、中背のガッシリした田舎の青年の肉附で、顔はむしろ上村の方が四角く、頬骨と顎が出て、頑丈に出来ていたが、性格は神経質で、物解りが早く、いつも女性的に静かに口をきいたが、激情に駆られると手風琴のように、咽喉の奥でかすれた呼吸の音を立てながら、切目なく言葉を吐き立てた。そして眼は相手を怨むような暗い光をたたえてきらめいた。彼は自分の才能の承認されないことに不満を持ち、また自分の才能それ自身に不満を持ち、他人と完全に即座に了解し合えないことに不満を持った。田舎にいたときは殆んど感じられなかったこれらの相異は運動の急激な盛れ上りの中で拡大された。この頃はもう小説はやめて、毎日事務所に通っていた上村は忽ち運動の全般について広汎な、そして詳細な知識を獲てしまったらしかった。今迄、読むテンポに違いこそあれ、同じ本から得られていた二人の知識は突然に大きなひらきを現わしてきた。友達がこのように急速に進歩して来、以前の快活を取り戻したことは杉森にとって、矢張りうれしいことだった。彼は上村の落とす片言をも聞き洩らすまいとし、質問を続けた。小説を書くことも結構だ。しかしもっと基本的な仕事がある。その仕事にかかっている自分には、もう小説など書いているひまはない、と上村は云った。このことは杉森の心を乱した。小説を書くことにさえ価値を大きく置かぬ上村が、小道具係りの助手などという仕事に大きな意義を認めることが出来ようか？　杉森は安パイプを加工して喜劇的に誇張されたものを作るとか、ステッキの頭に注文通りのブルドックの握りをつけるとか云う少し手のこんだ小さい細工物は家へ持って帰ってやっていたのだが、それも劇場に居残ってやることにした。

「小説書かんでもええんなら、もう女の問題は片附いたんか？」

　と杉森は皮肉というわけでもなく云ったが、上村は明か

に不快な眼色で、
「何いいよんや。」
と横を向いてしまった。
　上村の進歩は二月半ばから、また一段とめざましいものとなった。彼は運動の基本的方針を忽ち了解するばかりでなくその基本的方針の演劇の方面への具体的適用の問題にさえ、明確な判断を加えた。杉森は驚嘆して上村を見上げたが、時には、同じスタートに立った二人だったのにと自分の無力を思って一層本にかじりつき、集会の討論に耳を傾けたが、到底及ばぬことだった。立てられた方針をあとからやっと理解してゆくことと、上村のように先立って方針を切り開いて行くのとの間には莫大な距離があると思われた。上村の忙しさは一ト通りでなかったし、杉森も進んでそうしたので、掃除も布団のあげさげも洗濯物の始末も一切杉森の受持になった。杉森は運動全体の上に立って、上村のような有能な男が出たことをよろこび、それが自分の親友であることを誇らないわけではなかった。いや、杉森ほどその点で無私な男はなかったろう。ただ杉森はだんだんと苦しくなってきたのだ。杉森の中には塚本や小島や服部に育てられた一種の職人気質が成長しつつあったが、それが上村の素晴しさとはげしく矛盾したことが苦しかったのだ。上村はだんだんと精悍になり、烈しく緊張し、杉森を無視しはじめたのが、そのことや、絶えず対照をつきつけられての自分の無力の回顧やは、小さなものに過ぎなかった。彼は上村をもっと運動に有能なものとするためなら、この上にも自分を棄てたろうから。叔父に補助をことわられたとき、杉森は劇場の風呂焚きと小使いをして二人の生活を支えようと云ったのだが、上村の仕事は書記局に這入ることを要求したらしく、東京のはじとはじの落合の事務所へ移って行った。劇団員のために安く焚き出しをしてくれている消費組合の人から杉森は、静岡の刑務所に服役中の犠牲者の細君と子供が戸塚の或る家の二階（三畳と二畳）を借りていたが目下失業して困っているので、その二畳を借りて少し高いが月五円ずつ出してくれる人を探しているという話を聞いた。その犠牲者が幼い自分が田舎にいたとき大阪で活動していた噂を知っている人だったこともあったが、上村と遠くへだたることが何としても耐えられなかったので、杉森は早速そこへ行くことにきめ、楽屋の風呂焚きになった。
　その部屋は目白の高台と戸塚との間にくぼんだ卑湿な低地にある屑屋の二階だった。隣の汚い濠に臨んだ染物屋から屑屋が借りて二階を貸し、その二階の一ト間をまた杉森が借りたのだ、岸本しげ子というその犠牲者の細君は左の眼が白くつぶれているがもとは可成り可愛いい顔だったろう、無邪気に小さい鼻と口がちょぼんと附いていたが、栄養不良のために、土のような色に瘠せていた。小さい唇は黒かった。特徴的なのは左の眼がつぶれていることではなくて、その開いた方の眼でまばたきもせずにじっと相手の

眼を見るその見方だった。その見方には非常に確信的なものと一緒にいくらか莫迦げた無邪気なものがこの女の中にはあると思わせるものがあった。話をしている相手がフトその眼に出遇うと、黒眼がポカリと開いた穴で、そこから直接に頭の中の脳髄がのぞけてしまうような気がして、不思議な驚きからあわてて眼をそらすのである。彼女は十三歳で九州で糸繰女工になって以来の労働者だった。こういう女の年を推察することは杉森などにむろん出来ることではない。彼女は普通は三十四五に見え、何かの具合で頰に血が上ったりすると二十位に見えることもあったが二十七だった。子供は八つの、陰気な虫歯だらけの女の子だった。感じの悪い、子供らしくない低い声で稀に物を云うのだった。杉森としげ子は容易に打ちとけなかった。女の子が低い太い声でしきりに食物を要求するとしげ子は隣の二畳の杉森をはばかって鋭く制止した。

戸塚から歩いて落合の作家団体の事務所へ行き、台所口から首を突き込むと、いつもその取っつきの部屋で上村は脚の取れそうなテーブルに二三人の仲間とかがみ込んで仕事をしていた。

「どうじゃ劇場の方は。うまいこと行っきよるか？」

身体ごとこちらへ向けることもあり、顔だけでちょっと振り向くこともあり、上村はいつもまずこう云った。他の者と話しているのを聞くと彼の言葉はもう滑かな東京弁だった。自分と話す時だけ国の言葉だったのだと杉森は気附いた。話はいつも具合よく運ぶとは行かなかった。この事務所の人達と杉森との間には可成りの距離があった。

杉森の中の職人気質はこれらの人々に対してピクピクと反撥を感じた。しかし職人気質そのものが杉森の場合は矛盾を含んでいた。「俺は世界一の小道具係り助手になる！」と突然彼の頭が熱くなったが、一体小道具係り助手などというものが何か特別の専門家として存在権を主張出来るものであろうか？　歌舞伎などであったなら故実秘伝もあろうけれど、こういう芝居では、職業的小道具屋と親しくなって物を借りる時にいくらか特別な便宜をはかって貰えるとか、手先が器用で絵心があり思い附きがきくということさえあれば誰にでも出来ることではないか。効果部や照明部では技術的研究会をやっていたが塚本や小島はそのようなことを全く問題にしなかった。芝居の小道具の歴史というような専門的な研究をしようか。そういうような歴史でも自分達の側からでなければ正しい歴史は書けない筈なのだから、そう思って彼は小さな手帳をそのためのノートを書き溜めるために用意したのだか、文化主義との闘争ということが強く一般に主張されはじめたので、その熱意もくじけた。大きな機械の小さな歯車の一つであることはもちろんだが、あってもなくてもよい歯車ではないだろうかということは彼を苦しめた。

その間に、彼のなかの彼の意志ではどうにもならないものは千葉加那子のあとを追っていた。加那子の身の上につ

いてのいろいろのことを人の口から寄せ集めた。それによると彼女はもとS市の小さな株屋の何でもない娘だったのだが、その地方の労働者劇団へどういう拍子からか顔を出していたところへ、東京からオルグになって派遣され来たしく、いろいろのエピソードが劇団内に語り伝えられてい千葉に恋され（千葉のその恋は余程烈しいものであったらるが）家出をして東京へ来て千葉と一緒になった。彼女はS市の劇団でも姿を現わしたその日からもうセンセエションだったので、彼女が突然東京からのオルグに伴れ去られたことは大変な騒ぎを起した。

「優秀な女優の多い東京の劇団が、女優飢饉の――飢饉どころか一人もいないのだ――S市の劇団から女優を引っこぬいて行くということは、果して同じ組織内の強い劇団が弱い劇団に対して取るべき階級的態度であろうか？　否、断じてそうでない。千万遍も否！　である。C劇団は速かにその誤謬を改めるべきである。」

という意味の正式の抗議文が、劇団の執行部から執行部へと通達された。これに対しC劇団から

「同じ陣営の一劇団から他劇団へ移ることの得失から、個人の愛情や結婚の問題に容喙する権利をわれわれは持たない。S市の劇団がC劇団から同じ事情によって女優を連れ去ろうともわれわれはそれに対して抗議を申し込むなどということはせぬであろう。」

という意味の抗議文が返された。問題がこんぐらかってきた。「彼女はまず、その属するS市の劇団の同意を求めたのちに東京へ行くべきであった。何故に夜逃げ同様なことをしたか？」それに対して「否！　正式の同意を与えるなどという可能性がS市の劇団には全く見出しがたかったからああいう方法を取ったのだ。それに、彼女の家の同意を得るためにもまず彼女が東京に来てしまうということが、戦術的に大事な、否、正しいことだったのだ。」

「それならばC劇団は、S市の劇団という階級的組織と、彼女の家とを混同して考えているのか？　それにS市でもC劇団から女優を取って行ってよいなどというが、S市から東京へオルグを派遣するなどということはあり得ないことではないか？」「それならば何故研究生をよこすのではいけないのか？　それともオルグという名義なしには手が出せぬというのか？」云々、云々。

そこで演劇の全国的組織が乗り出して、何度か両劇団及び当人達の主張を聞き、真相を調査したのち「この問題を単に一女優の劇団から劇団への移動として理解するのは根本的に誤謬である。二人は相愛しており、結婚しようとしている。この結婚は二人の向上のためにも役立つものであり、従ってわれわれは二人の結婚、及びそのために必要な条件である東京在住をさまたげるわけには行かない。しかしS市の劇団が打撃を受けることは事実であるから、C劇団はS市が彼女にまさる女優を獲得養成するのを助けるために、代り代り女優を派遣するなり、その他の援助をすべ

きである。」という決定を与えて納まった。ところが衝突が生じたのは同じ演劇部門内だけのことではなく、展覧会をS市でやるために派遣されていた美術団体に属する某もまた彼女に熱烈に恋した。そして事実、演劇よりも美術の方が出足が早くて、一週間前に彼女に或る川岸でその恋を打ちあけ、その某は川岸につないであった小舟を指さしながら（まさかそれに乗ってという意味じゃないんだろうと思うんだけど、とその後彼女は或る人に語った、という噂もある）一緒にすぐに支那へ逃げ出そうと云った。そこで、演劇の組織と美術の組織の間にも、尤もこれは同じ文化団体に属するとは云え、同じ演劇部門内の劇団同士という関係とは違うので、公然たる問題にはなり得なかったが、それだけデリケエトな妙なものが生じた。「やっぱり役者商売の奴等にはかなわないよ。」「支那へ逃げるとは何事だ？　支那で二人で一体何をしようと云うのか？」云々云々。

当時は文化運動の波が大きく高まり、団体内の協力の熱情も燃えさかっていた時なので、もう一年以上も前のこのような小さな事にいくらかの誇張を附け加えたり、又はたとえ出鱈目を担造したりしたところで、むしろ親友同士の間のほほえましいふざけっこのような作用しか持たず、更には、主としてこの話を杉森の耳に入れたのがカンちゃんであるし、カンちゃんは当時ゴーゴリを熱愛して、しきりに「検察官」や「結婚」のセリフをしゃべり散らしていたので、そういうような点を綜合して考えると、上述のエピソードが、当然、事実から遠いものである事は推定出来るのであった。

杉森にとっては、いずれにせよ、このエピソードはどんなに加那子が素晴しいかを語るものでしかなかった。

突然、杉森は加那子と親しい関係に這入ることになった。風さえ少しもぬるまないのにもう三月も末であった。公演はしていないが四月興業の準備で劇場のざわめいている暮方である。杉森は穴蔵のような大道具部屋で膠を溶かす火鉢に足をのせて、脂っぽく澱んだ空気の底で雑誌「プロレタリア文化」の三月号を読んでいた。

「杉森さん」

不意に声が頭の上から落ちて、入口に、日本着物を着た加那子が立っていた。加那子の態度はぶっきら棒で自然でまるで古くから彼をそう云って呼び慣れているかのようだった。彼はこの大事件の意味を知ることが出来ず。絵具鉢や膠鍋の真中に突っ立って彼女の顔を見たが、初めて彼女とまともに顔を見合わすという今迄知らなかった感情に忽ち溺れ込んで、まじろぎもせずにみつめた。強い凝視に出遇い、彼の感情にフト気附いて彼女は眼をシバシバとまぶしそうにまたたいたが、急にそれらを払いのけようとするように、一層ガサツな調子で

「杉森さん、あんた子供好きでしょう？　どう？」

思いがけない質問にあわてながらも、彼は、杉森よ、お

前は今、貴重極まりない瞬間を経験しつつあるのだぞ、と叫んでいた。
「ああ、好きやけど――」
「ほおら。どうもそうらしいと思った。そうだとするとたのみが一つあんの。あんた、少年劇団手伝ってくんない？私一人っきりで困ってんだから。」
「だけど、小道具の方があるんで。」
「大丈夫。私のあいつに相談してあるんだから、あんたが承知さえすりゃあいつが塚本君に交渉するから。それに両方だってやれないことないんでしょ。私の方、そう無暗に時間をびっしり取りやしないわよ。そんなことより問題は、あんたが子供が好きかどうかにあんのよ。子供が好きな人って本当に少いもんだわね。あんたはだけど顔にそう書いてあるんだもん。」
そう早口に云って彼女は静かに笑った。わなわなと興奮しながらも、彼女は俺に好意を持っているのか知らんと、一心に彼女の眼からさぐろうとしたが、それはずっと後まで彼を苦しめる疑問として残ることになっていた。
少年劇団の仕事は杉森にとって全く新しい一つの重大な経験であった。加那子という中心人物がありはしたが、彼女と二人切りなので、彼は、小さいながらも他の組織と緊密な連関に立った一つの組織体の運動を自分の肩に背負わなければならなくなったのである。彼の課題は、どういう風にして少年少女達を集めて訓練するか？　どういう芝居をやるべきであるか？　どういう形でその芝居を何処で誰に提供すべきか？　であった。しかしそれを考えるとその前にもっと根本的な問題があることが解った。少年劇団とピオニール組織とはどういう関係に立つべきであるか？ということだ。加那子と二人で討論を重ねた。これらの事を考え始めると杉森は全くほかの事を考えることが出来ず、明けても暮れてもその思いに没頭してしまった。少年少女の組織や教育の問題については稀に「インター」などに断片的な飜訳が載るだけでさがしまわっても寄るべき文献はなかった。加那子はちょっと見は面白そうで、やって見ると厄介至極なこの仕事を誰もやるものがないので、劇場の中で、一番テンポがのろくて、人がよさそうで、他の人のように幾つもの役割を負わされていないという理由からだけで彼を選んだのだったが、たのんで見て彼の執拗さに呆れ、重荷にさえ感じ始めた。
「そりゃ解決しなきゃなんない問題だけど、実際に当って見て困るか困らないか解んない問題に初めから気を揉むなんて、あんた見掛けに寄らない苦労性ね。」
彼女はいくらか気にさわったように眉をしかめ、忽ちからかうように彼の眼を覗き込んだ。彼は日陰のない陽光の中にころがりまわるように感じながら、
「しかし根本的な問題じゃけん――」
なまりをなおさなければ演出者になれないと皆が云ったが、彼のなまりは容易に改善されなかった。なまりが女に

対して却って魅力になるようなことがあるだろうか？　彼は読んだ小説を思い出して見たがそのような例はなかった。

そのように云いながらも加那子はその次か次に会う時までに、一応彼を満足させるような解決を持って来た。

「私、あの問題考えて見たんだけどねえ――」

そう前置をして疑問を解決して行く彼女を杉森は無条件の尊敬で見上げた。彼女がこのように偉いと云うことは誇らしいことであった。自分より僅か一つ年上の女が、というう気持よりも彼女に軽蔑されまいために、彼は一層力を籠めて勉強したし考えもしたが及ばなかった。不思議なことは、彼女は何の疑問も持たないと想像されることであった。杉森が或る疑問にぶつかると、彼女はそんなことは解り切ったことだのに、というように意外のような、ぼんやりした顔で彼を眺める。問い詰められると、彼女は眉をしかめる、そしてそれは解決せねばならぬ疑問だったのである。彼女に近づくといつも彼女からは、石鹼のような、新しい枯草のようなにおいがした。何という清潔な女だろうと杉森は考えた。身なりにも動作にも垢じみた感じは少しもなかった。

地域的に子供を集めたピオニール的な組織も二三出来ていた。争議団の子供達が学校と対立して自分達の学校を作る例も出始めていた。託児所もいくつかあった。しかしそれも言葉の正確な意味でのピオニールではなかった。少年劇団も一方、それに類似した訓練娯楽組織だったが、また同時に演劇的なものによるアジプロ隊だった。主に託児所や争議団の家族慰安会や消費組合のピクニックなどに出動し、そういう活動の盛り上りとして公演もやる。出来るだけ子供達の自発的意志による自治。観衆と一緒になってやれる遊戯や歌や芝居が一番望ましい。しかし問題は絶え間なく起った。インテリの子供と労働者の子供の、こまごました点から起る軋轢（あの子、臭いからいやさ。あの託児所の子きたないからいやだ。ミッちゃんのような着物がきたい）学校との関係（芝居の稽古が始まると疲れて学校で眠い。宿題がやれない）芝居の上のもんちゃく（あの役がやりたい。綺麗な衣裳が着たい。セリフが云いたい）子供達の能力や性質の調和、経済的問題等々。杉森は初めて実践によって問題が生じ、実践によって解決されてゆくことを知った。

子供達の積極性は、しかし、非常なものであった。そして子供達になまりを指摘されてへこたれる杉森は「なまりのおじさん」というあだ名で子供達の間で人気者となっている自分を、そして同時に、この初めての小さな団体をいろいろな意味で希望をもって眺める人達からは「少年劇団の専門家」として認められている自分を発見した。

彼の胸はふくらみ始めた。彼は最早あってもなくてもいい歯車ではなくなろうとしている。その上、加那子と協力している。その欠けることのない……に大きな変動が襲

いかかった。五月の初めに文化団体の多勢の人達が奪い去られた。劇団からも千葉やカンちゃんやを含めて十二三人が持って行かれた。

二三日して上村も同時に連れて行かれたことが解った。千葉が捕えられると加那子はすぐにもぐったが、四日目に芝の方の或る家で発見され連れ去られた。

その……を埋めるための力の集結が要求された。運動の順調の時よりも一層大きな力が必要であったが、それが若い未経験の人達の肩にのしかかって来た。「なまりのおじさん」の肩もその肩の一つであった。

その検挙の全貌がはっきりしてくるにつれて、どういうわけで上村が、また加那子があのように素晴しく問題を解決してゆくことが出来たのかが解ってきた。服部や塚本や小島は残ったが、彼等古参者が職人気質のとりでに閉じ籠ることはいいことであれ悪いことであれ、もはや問題なく許されなかった。塚本が集会で口を開かねばならず、小島が熟考せねばならず、服部が彼等と討論せねばならぬ姿はむしろ悲愴であった。

二

「母ちゃん、起きようよ、起きようよ。」

「もうちっと寝といで。いい子だから。こうやって寝てればあったかいじゃないか。」

「母ちゃん、起きようよ。」

杉森は今日も隣の岸本母子の云い争いで眼がさめた。何故あの子はああ早くから起きたがるのであろう? 毎日毎日失望させられながらも、子供はやはり夜が明けると、新しい希望を取り戻すのであろう。だが困憊した母親は一刻も永く現実を忘れ、空腹を忘れて眠っていたいのであろう。

一九三四年の十月末の或る朝である。昨夜階下の屑屋は五六人を集めて屑屋仲間の懇親会を開いていた。その騒ぎにさまたげられて、杉森は寝足りず、まぶたは何か悪液が溜ったようにうずいた。腕を伸ばして時計を見るとまだ六時半である。この二階に隣り合せて住むようになってから の二年半あまり杉森は隣の部屋の飢餓を見て暮して来た。岸本しげ子は、その或る瞬間の顔附や、右の眼で相手をまじろぎもせず見つめる見方やで推察されるように、もともとの性質は快活で楽天的であったに相違ない。獄中の夫から一ト月に一度来る封緘に、全く大丈夫だから安心しろ、とあれば、それを杉森に見せて、まるで獄中の彼が筋肉隆々として日光浴でもしているかのように信じて安心し、「のんきでいいわね」と少女のように笑うのである。洋服屋の外交、本屋の店員、焼鳥屋、セルロイド工場の女工、女紙芝居と彼女は仕事が見付かるたびに万事解決されたように安心して始めるのだが、それらの仕事はただ一層彼女をいためつけ、困憊させ、失敗させるだけのものであっ

た。その間隙に長い失業の期間が続いた。そういう時、杉森はよく突然真夜中に彼女が初めは声を押えながら泣き、やがて「ヒーッ」というような鋭い泣声に変り「残酷だ！残酷だ！」と叫びながら、何かをビリビリと破く音を聞いた。

杉森もむろん出来るだけのことをしたが自分自身が飢えていた。劇場も一昨年の……、はかばかしくは公演が持てず、楽屋風呂の必要は稀だったし、上村もあの時暫くではあったが捕えられ、出てきてからはどういうわけか殆んど原稿を書かなくなった。彼もまた飢に責められて布団の中で身体を動かさずにいた時、隣の部屋で、さっきから来ている見知らぬ男が、四日絶食している彼女に、ね、天どん取って上げようか、秋ちゃんにも一つ取っといて上げようね、それから暫くすると今度は強く押えた声で、もう一時間で秋ちゃん学校から帰ってくるぜ、それなら僕ァもう二度と来ないぜ、と云い、やがて嘲笑的に、そうか、それほど僕を嫌いだとは知らなかったよ、いや有難う、と荒々しく降りて行く跫音を聞いたこともあった。

だが飢餓を堪え難くするものは、張り切った、明確な任務のないことであった。全力を尽した……の約一年があった。しかし……は決定的な態度を取ることを迫られていた。あの高揚から僅か一年でこのような頽勢へ追いこまれた現実は恐しかったが、しかし暫くして人々は更に恐しい現実の姿を独逸で見なければならなかった。

まず少年劇団が困難に陥り、遂に不活動状態に追い込まれた。労働者の組織が崩れてゆくと共に出動の注文がなくなり、子供達の親の中にもそのようなグループから身を引かせる者もあり、少年劇団の公演を見に行くことを劇場附近の小学校は禁止した。芝居をやらぬ迄もせめて時々集まっていようと杉森は苦心したが、劇場に集まることとそのことすら困難な状勢となり、ほかに適当な場所はなかった。こうして全く集まらなくなって暫くした頃、杉森は或る日扉のしまった劇場の前でしょんぼり立っている以前の少年劇団員の一人に出遇った。浅草の夜店の焼鳥屋の子である首筋に大きなおできのあるその少年は、

「おじさん、いつ芝居やんの？」

「うん、じっきにしよう、おらもやりとうてたまらんのやから。すぐやろうのう。そんな時は知らせるけんのう。」

少年は角を曲る時に振り返ってニヤリと淋しく笑った。人々の中から何をなすべきかということについての確信が徐々に消失して行った。こういう時期を通じて一番杉森を悩ましまた驚かしたものは服部忠一郎であった。六七年前、左翼演劇の草創時代には彼は立派な理論家で、無条件に信頼された指導者であった。それが三四年前からいつの間にかその座をすべり落ち、執行委員ですらない、ただ熟達した俳優となってしまった。昔の癖で総会などでよく発言したが、それは云わでもの事の繰り返しか、それでなければ若い人々が聞いてさえ妙な愚かしい主張であった。初

めのうちはその主張が反駁されるとありありと顔に苦痛を現わして争ったが、その後は反駁されるや否や、卑屈な笑いを浮べて、そうだそうだ、その通りだ、自分の思い違いだ、とわざと全くフランクに誤りを承認することに依って自分の立場をいくらかでも恢復しようとした。眼が深く凹み、鼻が鈎型で蒼白な額が広く、劇団切ってのメーク・アップの大家で、この恵まれた材料を縦横に料理して無尽蔵の扮装を作り出す、その深い思慮を示すと思われた顔も、今では、何処と云って変ったところもないようだのに、不思議にも卑俗さをありありとみなぎらせた顔となった。何が彼をこのような所へ落ち込ませたかは誰にも解らなかった。時に生活が悪いということもないし、平凡な女ではあったが、細君は真面目に託児所や救援会の仕事をしていたし、女の子は素直な無邪気な子であった。生活には困っていたらしく、細君の実家から無理をしてせびり取り、また屢々夜逃げをしていたが、単に生活の困難がこのように変化を与えてしまうことがあり得るだろうか？　それとも彼は性来このような人間で、嘗ての高潔な指導者時代こそが変態であったのか。人が頽勢において深い弱点を曝露してくることは多いが、彼の場合は、まさに運動が高揚したその上向の最中に忽然としてみじめな変質をしたのだ。このことは杉森に、今でも考えると何か現実の恐ろしさ気味悪さと云ったようなものを感じさせる疑問として残っている。

最古参者でありながらたった一人捕えられなかった彼は引き続いた……の期間、今迄の彼を思えば全く意外な果敢さで陣頭に立った。そうやって働きながら彼は、自分だけ捕えられなかったことを恥じてか、或る人々に暗示的に、実は俺にも線がついたんだがね、どうも方針がうなずけない点があったんで断わったんだ、とか、俺は合法場面で働くように指令されたんだ、とか囁いた。果敢なよそおいで陣頭に立ちはしたが、何の指導的な理論が彼から出ることもあり得なかった。そして相手の態度が更に決断性を示した瞬間に、彼は忽然として態度を一変して、嘗ての指導者を（今の今迄自身その道をともあれ押し進んで来たのに）烈しくこきおろし始めた。彼等の誤った指導がこのような頽勢を招いた。われわれの演劇は彼等の指導の故に全く芸術性を擦りへらされてしまった、今こそわれわれは彼等の置いた鉄鎖を打ち切って自由の芸術の野にわれわれの演劇を育てねばならぬ――

塚本と小島は双生児のように手を握り合ったまま、服部のあとに従って行った。しかし、服部が態度を一変した時に、突然、相ひきいて商業劇団へ這入ってしまった。そして二度ともとの同志達に顔を見せなかった。ここでまた杉森は大きな疑問にぶつかった。服部は同じ商業劇団から可成りの高給で口がかかったにも拘らず、そして又もや夜逃げせねばならぬ瞬間に立ち至っていたにも拘らず、断わってしまったのである。杉森はその後長くこの疑問を解くこ

とが出来なかった。最後に彼の到達した推察は、恐らく古くからの闘士である服部には商業演劇にはどうあっても屈服し得ないだけの良心があったのであろう、ただ彼の卑俗性が（その素性は引続き謎である！）彼を誤ちから誤ちへと引きずりまわすのであろうということであった。

　この期間に杉森の嘗めた経験はまことに大きなものだった。こういう運動の進んでゆく道の複雑さ、それに対する心構えというようなものについても、人間の性質の恐ろしさ、底深く隠れて熟れていたものが或るモメントに出遇って突然に全人格の変質を引き起す物凄さ、肉体と闘う精神の力、絶えようとして絶えぬ耐久力、人間の想像を絶した強さ、美しさ、崇高さ、というようなものについても、彼は一日一日と頭に叩き込まれて行った。

　岸本しげ子の夫は一九三五年の一月に四年の刑期を終ることになっている。しげ子から彼の噂を聞くことは杉森にとってこころよいことであった。それは夫にどんなに彼女が信頼を置いているかということの告白であり、そのとき彼女は全く晴れやかになるからである。

「あんた驚くわよ。あの人を見たら。とても貧相なの。そうよ、貧相なの。小さくてね、瘠せててね、深アい皺が寄ってるの。演説なんか拙くてね、私いつもヒヤヒヤするの。私がどんな事云ってもあの人は決して怒ったりしない。あとで静かに教えてくれるの。それだから皆に親しまれたわ。私は本当にあの人を逞しい労働者だと思うわ。だけどとても貧相なのよ。私よくあんたは路ばたに死んでいる鼠みたいだと云ってやるの。見るとあんたきっと可笑しがると思うわ。」

　彼女は二人が一緒に運動をしていた頃のエピソードを話した。うち解けて行くに従って彼女は他の人には話さぬようなことにまで触れた。夫の最大の失望は留守の間に妻である自分が組織からの線が附かなかったことであろう、最近になってはその線は附きようもなく連絡は絶たれている。しかし二年前迄はそのような機会にぶつかった。しかし自分の中の妙な労働者意識がそれを妨害した。今となっては誤っていたその気持は、小さい時から惨めな境遇の中で培われた一種の偏見であった。自分はどこまでも下積みの石ころでいたい、一番苦しい下っぱでいたい、しかし労働者である以上インテリなどのように間違いはしっこない。このままで結構だ、労働者はインテリとは根本的に違ってすぐれている、そのすぐれている点、インテリと異る点を磨滅させてはならぬ、強調しなくてはならぬ、それは理屈を云わずに実行することだ、経験に物を云わせることだ、役などに就かずにランクアンドファイルでやり通すことだ、という気持だった。夫は屢々この偏見の誤りを説いたが彼女は強情に固執した。夫がいなくなり、ひとりきりになり、情勢が激変し、そういう場合に立ち至って、やはり自分がどんなに夫を通じて指導されていたかを悟り、自分の無力を知ったときには時機は遅く、自分は切り離され

投げ出されていたのである。——

この話を聞きながら杉森は自分にも何か思い当るような気がして、忘れていた事のなかを覗き込んだ。カンちゃんの丸い顔と、いつもは眠そうに半ば閉じられ、音を聞くときに白眼を一杯に出す眼とが浮び出た。塚本や小島とカンちゃんとは職人気質という点では共通していた。しかし塚本達のが封建的なそれであり、他の専門のものには容啄させない、他の専門のものに対して同業者を守る、その代り自分達も他の専門のものに容啄せぬ、というものであったのに、カンちゃんのは一切そのような障壁はなかったが、非専門家がカンちゃんの苦心の仕事にズバズバと下す批判に対する抜き難い反撥があったのだ。小学校も終らない給仕あがりのカンちゃんは理屈がうまく云えなかった。懸命に太刀打ちをしても上の学校を出た連中が、あそこでああいう音を出した理論的根拠は？　とか、あそこであの音楽を使ったのは卑俗的であるとか、唯物弁証法的でないとか、小市民的傾向であるとか、一も二もなくのしかかり始めると黙ってしまうほかはない。尤もだと思われる節があったにしろ、理論そのものに対する反撥が深く育てられてしまったのだ。そして無邪気で朗らかだったカンちゃんが、捕えられる二三カ月前から眼に見えて無口になり、深刻になり、しかつめらしくなり、理論家達に対立して労働者派とも云うべき型の仲間を作り出し、組織部の下の方で直接労働者観客と接触している若い人達と結び合って、反幹部派的な態度を取り始めていた。その人達は殊更に悪い言葉を使い、殊更に理論的集会をサボり、殊更に感情的になり、殊更に極左的になり、至るところで幹部の悪口を云って組織の信用を低下させ、活動を阻害した。杉森は当時はそういう現象すらハッキリとは気附かず、ただ漠然とそういう空気を感じ、塚本的職人気質からカンちゃん的傾向へと移行して行きつつあったと、今になって振り返って考えるのである。そしてその事が自分に取って大きな結果を齎らしたのではなかったろうか、と考えられるのである。カンちゃんだけは別の線のことでつかまって、なかで立ち直った、なかなか出てこられまいということであったが、そのグループのほかの人達はガックリ折れて失望するとそのまま一人残らず行方知れずに散ってしまった。

気質や仕事のためもあり、期間の短かかったためもあり、殆んど劇団の幹部の人達を充分に知る機会を持たない内に、その人達は杉森から引き離され閉じ籠められてしまった。その人達の個人的な仕事や性質はもちろん、その人達のした仕事についてさえ杉森は僅かしか知らなかった。

加那子が捕えられたことは杉森にとって大きな打撃だった。その打撃の大きさを通じて彼は彼女が自分にとってどんなに大きなものを意味していたかをしみじみと知らされた。暗黒の布団の中で恥じもなく声を立てて泣きながら、彼女が耐えている苦しみを思い、また彼女がどんなに自分にとって指導者であり協同者であり希望であり慰安であり

夢であったかを噛みしめるのである。四つで母を失った彼は母の愛を知らず、姉妹のない彼は姉妹の愛を知らず、また恋を知らなかった。加那子は彼にとってただ恋人という如きものではなく、彼の世界観の権化であり、彼の理性と感情を完全に調和させ綜合するものであった。加那子に対するとき彼は何の焦躁をも、満たされぬものをも感じなかった。彼女が千葉の妻であることも、初めのうちこそ、屢々彼を刺激し胸を歪めさせたが、のちにはそのような事は問題でなくなった。彼女が或る人の妻であるということが却って彼を安心させゆったりさせた。彼の知らぬ或る秘事を彼女が既に知っていてくれるということは彼に押し包まれるような安堵の感じを与えた。彼の性慾は彼女の前でプラトニックに昇華してしまったのだろうか？　そうではなく、彼女と一緒に仕事をしていると、そういう衝動はいらだちをでなくて満足を得て力強い調和だけがあるのである。

このような状態は何か特別なことで、条件のちょっとした変化なり、時間の長さなりで破れたかも知れない。しかし彼が少年劇団を手伝い、彼女と親しい交渉に居たのは僅か二ヵ月程のことだったのである。彼女がつかまってからの彼のよろこびは、彼女の実家がS市にあり、この「道を踏みはずした娘」に好意を持っていないので、差入れの本を捜したりなどの事が彼の肩に落ちかかった来たことであった。月五円ずつの金が書物差入用として彼女の指定によってS市の実家から彼の所へ送って来られた。彼は彼女が午前はドイツ語午後は日本演劇史とヘーゲルの勉強という根本方針で、手紙で立てて来るコースをもとにして、一冊一冊読む順序にも心をくばり、しかも月五円なので、古本屋を漁ったり本のありそうな家を訪問したりした。千葉の両親がこの家出娘との結婚に初めから反対で、別居して顔を合せたこともなく、千葉の差入れは他人に手を触れさせぬ代り、加那子には何一つしてくれなかったことは杉森にとっては有難いことであったが、同時に、千葉の読んだ本を加那子の方へ融通することが出来ないという不便を忍ばねばならなかった。上村やカンちゃんやその他への差入れもある。それがすべて……の忙しさの中である。経験が少く、人手がなく、……の続く中で、今迄のような文化的活動が困難となり不可能となるに従って、新しい状勢の現実に根ざした新しい文化的活動を始めることではなく、文化的活動そのものを放棄して政治的活動へとハミ込む道をたどって行った。演劇的活動はもはや殆んどなくなり、杉森の仕事は、あれやこれやの……のレポや、……への宿所の心配や、救援の活動やであった。これではならぬと思っても、明確な方針を掴み得ないままに、不活動になり、離れ去って行くものもあった。生一本の良心から歯を食いしばってついてゆく者もあったが、その人達も疑問や矛盾に苦しんでいた。やがて「転向」という現象が生じて、保釈や執行猶予で出てくる者が相継いだ。急に加那子からの

手紙がぱったりととだえ、杉森は盲滅法に本を差入れるより仕方なかった。こうして二三カ月たった頃、本を持って差入屋に行くと、その方は五日前に出獄しましたという。千葉の家へ問い合せても、S市の家へ手紙を出しても返事がない。こうして彼女の消息は全く途絶えてしまった。一九三四年の初夏のことであった。

劇団の重だった人達も転向して次々に出て来た。杉森は今迄殆んど知らず、ただ格段にすぐれた人として尊敬し、その業績に驚嘆していた人達が、泥まみれで苦しんでいるいろいろの姿を見なければならなかった。その人達はまた消し難い烙印を負った自分達を見るばかりか、これ程とは思わないまでに荒らされた自分達の仕事の跡を見た。そのってくずおれた膝を泥の中から持ち上げようとした時……の跡をしらべ、……す道をさがしまわり、手を取り合に、駆け寄って突き倒し、踏みにじろうとした者の中に、以前の同志の顔がまじっていたことは殆んど信じ難い事実であった。彼等は例えばその中に凹んだ眼、鉤形の鼻の服部忠一郎の蒼白な顔を見た。これは服部の三度目の変質であった。第一の変質は、一九三二年の五月に、古参者で自分一人が捕らずに残ったときに、職人気質の俳優から果敢な闘士へという形で起った。第二の変質は一九三三年の中頃に、相手の……が全く決定的なものであることがハッキリした際に、今迄の道は芸術を縛った鉄鎖だと宣言して突如として仲間を見棄てて家に閉じ籠るという形を取った。

そして今、第三の変質が、一年あまりの閉居ののちに急に現われてきて、転向者に対する十字軍士となるという形で起ったのである。

「……になりさがった転向インテリ諸君の云うことが信じられるか。」

「現実の状勢を知らぬあいつ等は俺達をまた誤った鎖の下に置こうとしている。」

そして服部のまわりには、困難な時期に何処かへ行ってしまっていた連中が不意に現われて来た。

この三度の変質を見た杉森は、最早や自分がいずれにつくべきかに迷わなかった。ばかりか服部達がやがて第四の変質をするだろうこと、そしてそれは状勢がいくらかでもよくなったときに、自分達こそは左翼的演劇の正道を踏んできたしまた踏みつつあるものだと宣言するという形を取るだろうことが推察できさえしたし、更に、それらは決して変質ではなくて、動かぬ本質的なものの一貫した現れであることもわかった。

千葉健三もまた出て来た。迎えに行った杉森は彼の平たい鼻が蠟のように透き通りそうに見え、彼の眼が一層定めなく動き廻るのに胸を打たれた。三年あまり前に劇場の楽屋口で杉森を威圧した彼は、今は、その動き廻る眼でチラチラと杉森の感情を読み取ろうとするように窺った。彼が出たらば、加那子について知ることが出来るだろう、と杉森はジリジリしてこの日を待っていたのだが、年齢も位置

も違い過ぎる二人は殆んど加那子を通してしか知り合っていなかったし、今はまた千葉を深く傷けている転向の問題もあり、千葉の家人は彼などが訪ねるのを好まないし、こういうハメになって初めて、ああ「夫」というものは矢張り第三者には越え難い優越権を「妻」に対して持っているのだと慣ろしい絶望に襲われていると、三日目に千葉は突然に杉森の二畳の部屋を訪れて驚かした。杉森は今迄千葉というものの存在を加那子から抽象して来ていたので、今こうして間近に相対して居ると、彼は加那子に対する自分の感情を知ってるのだろうか？　加那子と千葉はどの程度に結ばれた夫婦なのだろうか？　自分はいったい千葉の妻である加那子に対して窮極に於て何を望んだのだろうか？というようなことが一時に頭に来て混乱に陥った。

「差入れをどうもいろいろ有難う。加那子の本の差入れは君が一人で骨を折ってくれていたそうで有難う。」

　そう云ってから千葉も混乱しているらしく暫く黙っていたが、やがて留守の間の演劇運動の様子についていろいろと質問し始めた。二時間もそのようなことを話し合ったのち、千葉は不意に、

「君、加那子のアドレスを知らんだろうか？」

　と云った。杉森は期待を裏切られて呆然としたが、同時に、ではこの「夫」もまた自分と同じに加那子について知らないのかと思うと、親しみが増して来た。「夫」が杉森よりも知っていたことは、加那子が予審が始まると突然転向し、仲間と一切の交渉を絶ち、S市の実家の管理の下に立ち、保釈で出獄するとすぐにS市へ引取られたが、今はそこにも居らず、K市の或る撮影所の主任カメラマンをしている従兄の所にいるらしいということだけだった。

「その撮影所に問い合せたら解るのに。」

　千葉はしかしためらった顔色で、

「手紙じゃ仕様がないんでなあ。」

　と呟いたのち、やがてポケットから一通の手紙を取り出して、見てくれと云った。それは加那子からのもので、原稿紙一枚に、

「理由については何も申し上げますまい。ただ私は異常な体験の中でいろいろと考えに考えた末、あなたとはお別れすることに決心いたしました。これまでお世話になったことを深く御礼申します。あなたは私などなしで立派にやって行くことの出来る方です。どうぞ私など忘れて、あなたはあなたの道をお進み下さい。私の決心はかたいので、変えることは出来ません。お会いすることも、お手紙を書くことも絶対に致しません。これでお別れいたします。どうぞ御元気で。」

　と書いてあるきりで、アドレスもなく、消印はK市になっていた。杉森は手紙から眼を挙げて、千葉の眼が涙で一杯になっているのを見てハッとした。杉森が彼女を通じて知る限りでは、千葉の夫婦間の愛情というようなものについて、恬淡で、家庭的には可成り暴君で、理性的過ぎる人

間だったのだ。杉森は千葉が恐らく自分の加那子に対する感情を察知していまいと思うのでこの驚くべき事実について何も云えなかった。やがて千葉は、どうもまだ足がフラフラしてね、と云いながら、たどたどしい後姿を残して帰って行った。その夜、杉森はその撮影所の主任カメラマンという男気付けで彼女に手紙を書いた。書いてしまうと、文中、その日の千葉の様子を述べ、それを利用して彼女から何かの音信を得ようとする自分の態度が恥ずべきもののように顧みられたが、或いは彼女から音信が得られはせぬかという希望に圧倒されて投函した。返事は来なかった。千葉ももう彼を訪問しなかった。新しい方針を立てて、非難や罵詈の中で芝居の仕事を第一歩からやり始めている人達は全く顔も見せぬ千葉について不満の気持を隠さなかったが、加那子とのことを知っている杉森は、彼がそのように大きな打撃を受けたことに深く驚きながら、初めて加那子が誰の妻でもなくなったことに気づいて満足をさえおぼえたのである。

　上村は出るとすぐに、石炭のブローカーをしている雑司ガ谷の叔父の紹介で或る石炭会社に這入った。時世が違ったんだ、ジックリとやらなくちゃ駄目だよ、退却する時はうんと深く退却すべきだと大戦術家クラウゼウィッツ将軍も云った、と彼は杉森を煙に捲いた。そしてその次に会った時は、俺は今、事業慾に燃えている、石炭に関する研究で非常に忙しい、と昂然とした。杉森は彼が常に昂然としていたことを思い出し、不思議な性格だと驚いた。

　十一月になり、岸本しげ子は或る通俗小説家の口述筆記の口が出来て、やっと飢餓からだけは救われた。

「もうデパートまわりもしなくてすむわ。」

　と彼女はすっかり晴れわたった顔をして笑った。子供が餓に迫られると彼女は近くの新宿へ連れて行って、食料品のある所を避けて、一日中各デパートをあるきまわり、子供の気持をたぶらかし、あらあら、水があるわ、ね、呑みましょう！　と云って上に向ってムクムクと溢れている水呑場で水を呑ませていたのである。

　或る朝、新聞を開いて杉森は愕然とした。「懸賞！」と太い字で出ていた。二つのハート形がその字をはさんでいて「僕の恋人と妻をお当て下さい」という字が或る有名な男優の写真の口から出ていた。その字の端にほほえんでいる二人の女優の顔の一つは疑いもなく加那子なのである。ただ束ねられいた髪は顔のまわりに踊るような、また燃えるような縮れ毛の断髪となり、寒い風の中で時にカサカサと乾割れていた唇はネットリといろどられて、それ自身で動き出しそうであった。婦人雑誌に連載中の通俗小説の映画化に当っての新手の宣伝方法で、二人の女優のうち、どちらが主人公の妻に扮し、どちらが恋人に扮するか当った人には抽籤で、一等がラジオ兼用蓄音機、二等が腕時計で、三等が双眼鏡だとある。もう一人の女優は丸髷だからすぐに妻と恋人の区別が出来る仕組になっている。「時に

この映画のために抜擢された新進、三枝鉄子」と彼女の顔の下に書いてあった。
眼のくらむようなつかしさと一緒に、遂にここまで落ちたか、何故ここまで落ちてくれたのかという絶望のようなもの、恨みのようなもの、惨ましさのようなものが、枯葉のように彼をころがしまくった。彼はその写真に頬を押しつけ、身を起して見詰め、また倒れて涙を流しながら、可哀そうにのう、とか、阿呆やのう、とかうわ言のように呟くのであった。ガサで舞台裏の絵葉書までなくしてしまった彼は二年半目に彼女の顔を見たのである。
いや、このように落ちたのは決して彼女の本心ではあるまい、彼はそう思い始めた。この暫くの間に、彼は、文化団体の中にのみ限らず、深く尊敬し信頼していた先輩達が、想像もつかぬような姿に落ちてゆく恐ろしさを幾度も幾度も見せられたが、加那子が本心から落ちたとは信じ得ないことである。生活のためか？ それにしてもブルジョア映画社に這入って人に顔をさらす道を選ぶ必要がどうしてあったのだろうか？
「あら、私この人見たことがあるわ。劇場にいた人じゃなかったかしら。」
そう云って岸本しげ子はその新聞を見て考えるような顔をした。
「そうよ、確かに、T消費組合のピクニックで少年劇団の世話をしていた人だわ。あら、あんたも居たんじゃない？あの時。」
「うん、何だかよく似てるけど――」
杉森は胸のすくむような思いをしながら眼をそらした。
その映画はなお数回の新聞広告ののち封切られた。早く見たかったが金がなかったので、セカンド・ランになってから新宿の裏通りの小さな小屋で見た。澄ましている時はメーク・アップのために別人のような感じもしたが、顔をしかめて苦しげな表情をしたり、驚いて口を開けたりする所では、昔のままの彼女が大きく眼の前に動いて、杉森は大声で泣きたいような衝動を感じた。設備が悪いのか声は金属的に響いたが、流石に舞台の経験のある彼女は、何の訓練もないサイレント時代からの俳優とはくらべものにならぬしっかりしたセリフを云っていた。ああ、これで彼女は人気が出てしまうのであろうか？ 動きのとれぬスターになってしまうのであろうか？ と思うと彼は自分がこの映画館に這入るまで彼女の失敗を願っていたことに気がついた。しかしそのような希望も失われたのだ。
果して新進三枝鉄子は可成りな好評であった。理知的で、深みがあって、などとあちらこちらの批評に見えた。好評で会社は乗気になったのか、彼女が立て続けに次の作品で重要なパートを撮影しているという広告が出た。
その年の暮から一九三五年の正月にかけて次の映画は新宿と浅草の一流館で封切られたが、アトラクションとして主役の男優と彼女とが舞台でボレロを踊るという広告が杉

森を動顚させた。遠いK市にいて映画に顔をさらすだけで足りなくて、彼女はその上に東京へ出て来て実際に舞台の上に乗っかろうと云うのか？ 彼女は何という女だろう？ どういう感情を持っているのだろう？

しかしそういう気持を圧倒して、いよいよ彼女を面と向って見、彼女の間近にいることが出来るばかりか、或いは彼女に会って話をすることが出来るかも知れぬという希望が彼の胸を突き上げた。セカンド・ランではアトラクションはないかも知れないので、彼はやっと工面した金を握って最初の日に出掛けて行った。十二月三十日の、山のような、押し合う観客である。これならば彼女が彼を見附けることは絶対にないと思われたが、黒い布のマスクを取る気にはなれず、その上帽子を深く引下げ、満員で坐る席はなく、横の方に立って、前の人の肩からやっと舞台を眺めた。廻転の速い時代物が終ると緞帳がさがり、ああ、いよいよだと思うと、彼は下を向いて歯を食いしばり、いそいで他の事を考えようとあせった。「岸本しげ子の夫は一月末に刑期を終えて出てくるという。一体何か職を得るめあてがあるのかしら？ 文化運動はまだしもだが、転向しない彼のような実際運動家は何をしようとするのかしら？」

しかし突然そこいらが明るくなったように思って眼をあげると、フット・ライトがカッと点いて、緞張が一面に華かに輝いてユラユラと揺れ、反対に場内は溶暗しつつあった。オーケストラ・ボックスからジャズが轟き、遂に緞帳は上ったが舞台の上は空虚だった。モーニングを着た司会者が紹介の辞を述べると羽織袴のどこからどこまで作り上げられたような男優が上手から出て来て、眼尻にも肩にも肱にも微笑をたたえて卑屈な挨拶を述べた。あの陰に彼女はもう出を待っているのだろうと杉森は上手を見やったが、バックと同じ黝ずんだ緑色の布がそこをかくしている。次に時代映画に出ている有名な女優が出、そういう風にして四人目に彼女はうつむきながら深紅色のドレスを着て出て来た。彼女を知っている観客は少く拍手は稀であったが、うつむいていた彼女は舞台の中央に立ちどまるとキッとして真正面に顔を上げ、紋切型の口上をまじろぎもせずに述べ立てた。スポットに当って眼がキラキラと輝き、その眼の上は何か銀色めいたもので塗られ、頬は黄色味を帯びた不思議な色に燃えていた。何という美しさ、そして何たる無恥――

それからまた二人出て来て引っ込んでしまうと、空虚な舞台にジャズばかりが轟き、やがてそれがボレロに変ると、暗くなり、スポットがあたり、その中に全身真白なスペイン風の服を着たさっきの男優と、銀一色の、裾の長くひろがった服を着た加那子が立って、踊り始めた。そのヌラヌラと輝く衣裳にピッタリと覆われながら、傾斜のはじを時々覗かせている彼女の乳房は何と大きくなっていたことだろう。彼の眼の奥から消えぬ舞台の袖で第一景第二景と書いた張物を持って出ていた時のインジコ色の粗末な服

をふくらませていたつつましやかなものの姿はもうなかった。彼女がうしろへ反り返ると、男の両手は背後から蛇のようなテンポで彼女の両脇腹からその豊かなものに向って撫であげるようなしぐさをした。杉森を苦しめたものはしかし踊っている彼女の顔の厳粛さであった。鉄線のように剃りあげられた眉を鋭く跳ね、唇のはじをキュッと釣りあげ、唇を歯で噛みさえした。

　踊が終ると突然にまっぴかりとなり、スノコから日の丸の旗がたくさんにさがり、マーチ風の音楽につれて、さっきの俳優達がみんなズラリと並び、紹介者も現われて、映画報告についての会社の抱負を述べ、一同はお辞儀をして退場し、すぐに映画が始まった。ブルジョアの家庭の淑かな封建的な姉と、近代的な「目覚めた」その妹と、娘達を理解する父としない母と、気の弱い美男の会社員とそれだけの道具立てで、その美男を一緒に恋し、一度彼に身を捧げながらも犠牲となって妹は姉に恋を譲り、家を出てタイピストとなって身を立てるという筋で、加那子の三枝鉄子はむろんその妹で、気の弱い男を「今は非常時なのよ。男じゃないの。しっかりしなくちゃ駄目じゃないの。あなたと別れても私はいつもあなたを見守っているわよ。」と鼓舞し、顔をそむけてソッと涙をぬぐうのであった。

　その夜彼は興奮のために転輾反側して眠ることが出来なかった。何とでもして彼女を救い出さねばならぬという考えと一緒に、彼は初めて彼女に対して烈しい……を感じたのである。あの弾力をもって揺れ動いた乳房と、チラチラ見えた銀色の脛と、うねり滑った引き緊った臀と――

　正月の五日に、また不意に千葉が訪ねて来た。

「見たかい？」

「うん、見たんやけど――」

　と杉森は言葉を濁した。

「僕はあいつに会って来た。」

「ほう！」

　杉森は眼の輝くのを隠すことが出来なかった。

「居るとこ解ったんな？」

「あの連中のとまっている宿屋に押しかけて行ったんだがね二三日うちに四谷のSアパートに引っ越すんだそうだ。続映で御挨拶も延びるし、撮影所が東京へ移転するんだそうでね。」

「そいで、どなな具合な？」

「どうって事もないがね、全く望みはないらしい。」

　何のために訪ねて来たのかも解らぬ放心したような様子で読んだ小説の批評などをしていたが、やがて、もし獄中から君の所へよこした彼女の手紙があったら見せてほしい、と云った。数十通の手紙は、皆元気のよい言葉をつらね、仲間の近況を尋ねたり、芝居のことを心配したり、読んだ本についての感想を述べたり、読みたい本の注文をしたりしたものであった。壁に倚りかかり、丁寧に読み終り、彼は帰って行ったが、その後姿はこの前よりもまた淋

しげなものであった。
四五日たって杉森は四谷のSアパートの前まで行って見た。道路の高さが二階になって、崖の下に一階が建っていた。ポーチのようになった入口の左側に名札掛けがあり、栗杉加那子という彼女の本名が黒い板に新しい白い字で書いてあった。三日間その前まで行き、彼女を救わねば、救わねば、と心を鞭うつのだが、その心は、昔の加那子ではなくいよいよ一人になった女、ブル映画のスターになった女を、それであるからこそ訪ねて行くのではないかという反省に責められた。また、自分に会うことは彼女に取ってどんなに辛いことだろうという気持ちも、万一彼女の部屋で千葉に出遇いはしないかという懸念もそれに加わった。
だがとうとう四日目の朝、真直に這入って行って、二階の、果して彼女の名前の出ている戸口を耳で掃くようにして通り過ぎたが、中では何の話声も物音もしない。誰も来てはいない。それとも眠っているのか。廊下の突き当りの便所に這入ると、左手の窓の三間ばかり先に、彼女の部屋の窓が斜に見えそれが三寸ばかり開いていて、あの縮れ毛に櫛を入れている横顔が動いている。そこに彼女はいる。だが彼は自分と彼女の距離が不意にパーッと拡大されたのを感じて動けなくなった。彼女は、髪をすき終って消えた。彼の中に憤りが燃え立った。何というだらしのない女だ、ここからあの窓の隙間を通して誰が覗くかも知れないではないか――暫く時間がたった。誰かが訪ねて来るかも知れぬ。彼女が出掛けてしまうかも知れぬ。杉森はドアに忍び寄ってノックした。
「誰方？」
「僕。」
「え？」
「僕――杉森。」
返事はなかった。しかし会わぬと云うことはない。彼女は驚き、また恥じているのだろう。物音もなくずいぶん時間が過ぎたようであった。不意にスリッパの音がしてドアが開いた。何か昔と同じような着物に帯を捲きつけた加那子が
「まあ、ずいぶん久し振りね、どうぞ。」
「いいんですか？」
「ええ。」
彼は中へ這入りながら、彼女から眼をそらすために、部屋の中を執拗に見廻した。桃色のカーテンが一方に引かれ、薄日が部屋の中に落ち込んでいた。小綺麗な六畳程の広さの中に、くすんだ色のテーブルと化粧台と衣裳戸棚の三つが三方の壁に沿って置かれ、戸棚のように凹んだ所に赤い布に覆われたベッドがあった。人工でチリチリにちぢくれさせ皺だらけに咲かせられた名の知れぬ小さな花の鉢と中央公論と改造とがテーブルの上に、なめし皮の顔のフランス人形が二つ化粧台の上にあった。映画女優の部屋のなまめかしさが曖昧な熱っぽい感情で彼を椅子に引きずり

込んだが、だんだんと索漠たる普通のアパートの部屋になって行った。
加那子は玩具のような小さな瓦斯ストーヴに火をつけ、彼に向き合って腰掛け、昔は一ぺんもそのようにしては見なかった妙な媚びるような、しかし彼の気持ちを早く読みとりたいと熱烈にあせっていることの解る鋭いまなざしで、彼の眼の中を覗き込んだ。
「ずいぶん暫くねえ。私変ったわよ。」
バリトンのように響く声を静かに引っ張って、その短い言葉の中に何か深い意味を含めたように云った。杉森は物を云うほどに考えをまとめることが出来ず、彼女の顔を見て曖昧に薄笑いしながら、
「うん、二年半余りや。心配しとったんやけど。ようけいろんなことがあったわ。」
急に彼女は杉森の口調から彼が自分を侮蔑していないと信じたらしく、あの人この人の消息を尋ね始めた。
「ふうん、カンちゃんまだ出ないの？　頑張ってんの？あんなに要領よさそうな人だったのに。」
彼女は信じられないようにそう云いながらも額に暗い皺を寄せて、立ち上って紅茶を淹れにかかった。
「僕、千葉君に会ったんや。」
「そう？　いつ？　何か云ってた？」
紅茶を持ったまま立ちどまって、眼の奥から暗い火のような疑わしげな光を射出した。

「ううん、何ともいよらなんだんやけど、とても参っとったようや。」
すると彼女は不意に唇のはじに軽蔑の色を浮べ椅子に腰かけて膝を組んで「そう」と云った。一体この女は何を考えているのだろうと彼は急に憤りがこみあげて、千葉のことをどう思うのか、どういうつもりでブル映画会社などへ這入ったのか、いつ迄もそんなことをしているつもりなのか、自分達ともう一度一緒に芝居をやる気はないのか、とそう一ぺんせきを切ると遠慮もなく訊きただした。彼女は以前自分が指導していた杉森にこのように云われると反抗の色をかくし切れず、逆に、
「そう、で、あんた達は何やってんの？」
杉森は自分達が今やり始めている劇団の意義、進歩的な発展的なリアリズムとは何か？　その演劇活動の主観的客観的諸条件などを、興奮でどもりどもり、彼女の頭に叩き込もうとした。彼女はこの間中、何度も冷やかな疑問や反駁を投げ出したが、それが結局説明され説き伏せられると、紅ばみ痙攣していた顔を急に一変させて、窓の外に眼をやり、顎を手で支え言外すべからざる大きな秘密を抱いているような声で、
「そう、あんたは何故私がこういう気持になったんか知らないんだわね。」
と独言のように呟いた。果して秘密があるならば彼はどうあっても聞かねばならない。彼女は杉森の追及をおびき

寄せるかのようにその物語を少しずつ落とした。
――あんたは知らないだろうが、私ははっきり千葉とは別れた。何故と云えば、私がこのような気持になった原因は千葉にあるからだ、あんたはあの……のあった五月のことを覚えているだろう、われわれは漠然とだが予想していたのでアジトを準備して置いた、千葉がつかまるとすぐにそこに私はもぐった、すると四日目にそこへ踏みこまれて私は連れて行かれた、ざまを見ろ、いい旦那さんを持ったな、三日間忘れていたが昨夜遅く思い出して君んとこを教えてくれたよ、と連れて行かれるみちみち私は聞かされた、そのアジトは絶対安全であいつと二人しか知らない所だったのでいろいろの物が置いてあった、それも皆取られて被害はずいぶん大きかった、このことは私にとっては彼がただに仲間を裏切っただけではない、夫が妻を裏切ったことなのだ、私は夫が妻を売るということを彼の中に置いていろいろと想像し、彼の愛について、また二人の間の愛について云いようのない疑惑に落ちた、しかし私は彼の身体が耐えられなかったためと考え、その疑惑を自分の方から打ち消すことに努めていた、そうして獄中で二年たった或る日私は取り調べの時に検事からあいつが転向したという話を聞かされた、この打撃はあまりに大き過ぎた、ガラガラとすべてが崩れ落ちた、そうして私はこうなった――
「だが君は千葉君を愛しとったんやないか？　どうして彼を立て直そうと考えへんのや？」
いや、私は考えて見れば、あいつを愛してなどはいなかった、彼がS市に来、自分は運動の上で或る秘密な重要な地位についている、そしてハウス・キーパー的役目をするために私が必要だというので東京へつれて来られ、強奪的に妻にされたのだ、私はあいつを嘗て尊敬こそして居たれ、決して愛しはしなかった――
だんだんと興奮して彼女は小さく叫ぶようにそう云った。彼女は千葉を愛していなかった。それは杉森にとって何か「当然なこと」のような感じを与えたが、彼女の言葉の矛盾に気附いてハッとした。もし彼女が千葉を愛していなかったのなら、千葉が彼女のアジトを裏切ったとて、彼女が云うようにそのために「彼の愛について、また二人の間の愛について云いようのない疑惑に落ちる」ということがあり得ようか？
その点を突こうと彼が口を開きかけると、それを忽ち察知してか、彼女は突然身を伸ばして立ち上ると、横を向いて椅子から二三歩遠ざかりながら、
「あんたは知らないんだわよ。何しろ私はあいつに瓦斯で殺されかかったんだから。」
と口惜しそうに、泣き出しそうに、またあざ笑うように云った。そして愕然とした杉森をチラリと見やって、
「この部屋で。あの瓦斯の線で。」
と云って小さく赤く燃えている瓦斯ストーヴを指さしたまま窓に歩み寄り、初めて気附いて三寸程開いていた窓を

パタンと閉めた。
「どっちだっていいわよ、そんなこと。」
これが杉森を全く愕然とさせたことを知ると彼女は拗ねるように、それ以上云うことを避けたが、結局その顛末を打ち開けた。
――一週間前の夜の八時頃だった、アトラクションから帰ってくるとあいつが戸口に立っていた、（するとそれは一月の八日で、千葉が二度目に自分の所へ訪ねて来て、獄中の彼女からの手紙を見せてくれと云った日の翌々日ぐらいだ、と杉森は考えた）私は会わないと云ったが彼はいつ迄も立ちつくして帰らないので、見っともないので中へ入れた、彼は恐ろしい熱で、もう一度結婚してくれと迫り、やがて文字通り膝まずいて嘆願した、彼が涙を流したのを私は初めて見た、私は動かされたろうか、確かに私は崩れ落ちようとした。しかし彼がこの床に手を突いて、自分はどうにでも君の云う通りになる、将来絶対に進歩的演劇などにも関係しないでサラリーマンになれと云うなら親父の関係で這入れるところもある、と云い出したのを見ているとムラムラと彼の再度の裏切りを思い出し、絶対的に拒絶した、彼の哀願は止め度がないので、もう帰って下さいとドアを開けたが、気がつくともう二時近かった、このアパートは十二時で玄関が閉まってしまうので、彼をとまらせるよりほかなかった、朝まで起きていようかとも思ったが、あいつのためにそれほどでも犠牲になるのが莫迦らしく、私はベッドに寝てカーテンをしめ、彼は床の上に布団を敷いて寝た、朝眼がさめたら彼はもう居なかった、その次の日彼から手紙が来て、あの夜は一睡もせず思いなやみ、どうにもならぬ絶望に襲われて、君と一緒に死んでしまおうと思ってストーヴの瓦斯の栓をひねった、瓦斯は部屋に充満したが君は何も知らずに寝ていた、呼吸が苦しくなると突然ハッと思って栓を閉め窓を開けて籠った瓦斯を逃がして家に帰った、帰って思えば自分ながら恐ろしい、これ程までに君を思っているかと考えると自分が哀しく顧みられる、自分ももっと考えるから君も考えてくれ、と書いてあった――
「私はあいつのために殺されるところだったんだわ。もうたくさんだ。」
杉森は混迷した頭で加那子に別れようとした。すると加那子は追いかけるように、
「あんた私が好きで映画女優なんかになったと思ってんの？」
「そんな筈はないと思うて迷っとるんやけど。」
「迷ってんの？　そう？　むろん好きでなんかなりやしないわ。」
「生活するためなんな？　それともカムフラージな？」
「どっちもあるわ。私一ぺんでも自分で独立して生活して見たかったし、家の連中もこういうことでもやれば安心してるし、お上の方の関係もあるし。それだけじゃないけ

ど。そりゃまたあとで解るわ、きっと。」
アパートから遠ざかりながら、杉森は考えつづけた。彼女の話は真実だろうか？　真実だとすれば千葉はなんという情ない男に成り下ったことだろう、プロレタリア演劇に十年を捧げ尽したあの千葉にそんなことがあり得ようか？だが真実でないとすれば加那子は何と軽蔑すべき女だろう。むろん真実の点もあろうが、何故に千葉をその最も尊厳な点で傷け、自分自身の価値をさえ引きさげるようなことを云うのだろうか？　何にせよ、千葉に会わねば、と彼は考えた。恐らく千葉に遇えると思われる或る新劇団の招待日まであせりながら待ち、加那子の心を分析し分析しているうちに、彼はあの彼女の部屋での二時間ほどの間、自分が彼女を心の隅でどんなに性慾的に眺めていたかに気がついて胸のうずくような気味悪さと淋しさに襲われた。いずれにせよ、昔のあの尊敬すべき愛すべき立派な彼女は消え失せてしまったのか――

その招待日に芝居がはねてから、千葉も杉森に是非話したいことがあるというので、杉森の部屋へ来た。千葉のような先輩に、しかもその一番傷いた所に触れることは、いかに、これはもはや個人的な問題ではなく、たとえ大きくつまずいたとは云え、それだけ大きな共通の課題を眼の前に控えている同志の間の大事な問題であるにしても、杉森にとっては困難なことであったが、千葉はむしろ自分から打ち開け、相談しかけることを選んだ。その率直さ、問題を同志の間の問題として解決しようとする態度は杉森を打ち、彼は尊敬と歓喜の情に耐えられなかった。しかも驚くべきことには、その夜の千葉には、眼を一尺ばかり上下左右にそらせるくせこそあれ、出獄以来の悄然とした傷ましげな姿はなくなっていた。彼は静かに、落着いて、自分を抉って、若い同志の批判にそなえた。

――自分は耐えられなくて、遂に二日目に加那子のアジトを吐いた、彼女がつかまったのは全く自分のためだ、また、アジトを吐いたために陣営に打撃を与えたことも事実である、この大きな誤謬が、そのうちに……を自分から奪い去った、加那子の敗北が私の敗北のためであるということもまた事実であろう、ただ、それがひとえに私の敗北だけから惹き起されたものであるとは、たとえ私の感情がそうであることを望もうとも、考えられぬ。ただ考慮しなければならぬのは、彼女が非常に強く感情的な女だということだ。（このことは杉森を驚かした、彼は彼女を典型的に理性的な女だと考えていたのだ）このように感情的な彼女が極端に理性的な印象を与えたのは、いな印象を与えただけではなく、理性的に考察し行動し得たのは、その感情が異常に強かったこともあるが、根本的には、感情が実践と完全に伴い得たということのためだ、あの当時の状態は彼女の感情するところをグングンと実践に移す事を許した、実践がまた感情を裏付け促進させたのだ、彼女が取調べに際してどのように……と思うようなことを忍び、

頭強な態度を取り続けたかを私は或るところから聞いている、こういう性質の女がキャタストロフに出遇うと激しい感情の奔走が起る、私は彼女が可成りの積極性を以って映画女優になったものと考える、迫害され、踏みにじられ、虫けらのように惨めな生活を数年に亘って強制された彼女は、自分に自信のある容貌と肉体と芸を武器として、人気の絶頂に立って人々を見下してやりたい、嘗て嘲ったものを、全く別の武器によってへいつくばらせてやりたいという感情に押しこめられてしまったのだ、彼女は概して行動してから考察するという性質だ、彼女とごく僅かの期間にしろ一緒に仕事をした君は、彼女が行動するに当って殆んど疑問を持たなかったことに気附いた筈だと思う、私は彼女が映画女優として一応成功したら、その次にどこへ奔走するかと心配だ、彼女が長く映画女優になどとどまっていられないことは明かなことなのだ、瓦斯心中については私はまだそのような気になった自分に呆然としている、しかしともあれ、その大きな部分が自分の醜い弱さからだということは確かだ、出来るだけの反省をして見ると、私は自分がもう一度立ち直り得る自信を失っていた、妻からさえ捨てられたということは、私を参らせた一つの大き力だった、彼女は感情の奔走から私を憎むのであった、私はあの夜の前、二度彼女に会い、もう一度一緒に立ち直ろうと提議し、相談し、懇願した、彼女は不意に、自分には別に男があるがそれでもよいか、と云った、その男というのは彼女の云うところでは何か映画会社の脚本部かにいる「頭のない、不道徳な、ナイス・ボーイ」だということで、軽蔑しているが、ただ好きなのだということだった、それが私に対する反抗心からの拵え事であるにしろ、また本当に一時何か関係があったにしろ、大したことではないに違いないと思い、そんなものがあっても構わぬというと、今度は彼女は、その男の問題はいずれにせよ、私はもうあんたを尊敬出来ぬし従って別れる以外にないと云った、私は遂にそれでは仕方がない、ただ自分は君を相変らず愛しているから、よい友達になってはくれぬかと云ったが、彼女はそれも断った、では私も仕方がないからあきらめよう、ただ君は感情で行動する人だ、どうかよく考えて行動してくれ、私が尊敬出来るような人とつき合い、また結婚してくれと云い、遅くなって帰れなくなったのでとまった、しかし考えると、かくまで彼女に見下げられたかと思うと自信はますますなくなり、また、彼女が生きていたところで、これではよくなれようがないと考えると、陣営の汚点である二人を消してしまえという気にフトなって瓦斯の栓をひねろうと思った、しかし理性にもどってその部屋から逃げ出し、自分の気持を正直に告げ、詫びるべきは詫び、忠告したいことは忠告した手紙を書いたのだ、だが安心してほしい、私はこれらすべての打撃から立ち直ることが出来そうだ、私は私のまわりに昔の仲間達が、私に劣らぬ泥の中から起き上りかける姿を見た、それが私の自信を取りもど

しかけてくれている、加那子については、やがて彼女のこのような生活にまたキャタストロフが来たときに――きっと来るに違いないのだが――私は進んでよい相談相手であろうと常に用意しているつもりである。

朝になって帰りがけに、千葉は何かちょっと恥ずかしげに眼をうろつかせたのち、梯子段を降りぎわに

「変に思うかも知れないがね、僕は君に大分はげまされているんだよ、君は気が附かないだろうけどね（そして階段を降りながら）君たちのような若い、土つかずの人達が、この暗い時期をスタートにして生きて行っているということだね。君達みたいな生れながらのマルキストがだね。これ確かに素敵なことだよ。新しいヤンガア・ジェネレエションがスタートしてるんじゃないかね。そんな気がしてね。」

杉森は思いがけぬ言葉に赤くなって部屋の中で考えた。自分は果してそんなものだろうか？「土つかず」などということにどんな意味があるのだろう？　それは偶然なことではないか？　上村は自分と同い年ではないか？　一方には自分が鈍かったこと、偏向にさらされたことと、一方には丁度その頃に主体的条件の弱まりがあったこととが偶然に生んだことではないか？　しかし、それがどうであったにしろ、基本的誤謬がまだ犯されていないということは一つの動かし難い事実であろう、それを誇る理由は何もないにしろ。自分は何とでもしてそれを犯すまい！　彼はしかし千葉が自分の加那子に対する感情を知ったらどう思うだろうかと考えて胸をちぢめた。だが自分においても千葉と同じく加那子に関しては、一応終ったのだ。彼女の方では彼の愛情に気附きさえしなかったろうが。そしてまたこれが初恋であったとしたら、憐れに終った初恋であろうが。

「ヤンガア・ジェネレーションちょっと。」

と岸本しげ子が隣から声をかけた。

「何な、聞いとったんか？　やんなるなあ。」

「だってひとりでに聞えたんだもん。ただし、それっきりしか聞えなかった。今眼がさめたばっかしだもん。」

「開けてもいいんか。」

「うん。」

襖を開けると彼女はまだ布団の中にいた、秋ちゃんは珍らしくまだ眠っている。杉森は三年半前に初めて劇場におずおずと訪ねたときに千葉が「十七歳か、いいなあ、僕なんかもう二十八だ、一ジェネレーション違うんだなあ」

と云ったことをフト思い出した。

「何ニコニコひとりで笑っとんな？」

「あの人が、だって、もう一週間で帰ってくんじゃないの。鼠のような先生がさ。あの人こそ本当の土つかずだわよ。どう？　参った」

丁度昨日出た岸本が東京に着くという日の朝だった。それはまた杉森達の作った新しい劇団の最初の公演の舞台稽古の日の朝だった。杉森は又もや新聞に驚かされねばなら

なかった。
「彗星の如く現われたる銀幕のスター、三枝鉄子嬢結婚へと転向す。」
彼女は或る簡便電気治療器を発明して一挙にして数十万円の財産を作り上げた白須商会のあととり息子と結婚することになったそうなのである。彼女は嘗て左翼演劇の闘士であり、捕われて獄にいたこともあるが、それを清算して映画女優となり、僅か二本の作品で忽ち人気を湧かし、新時代的タイプの女優として洋々たる前途を約束されていたが、突如弊履のようにそれをなげうって結婚生活へと転向した、新郎は彼女の暗い過去に充分の理解を持ち、彼女の更生のために努力することを誓っている云々。そして三枝鉄子嬢の談として、まだ公けに発表は致せませんけれど、私はよき妻として更生したいと願っております、あの方は私のよき理解者です、云々。

果して千葉が云った通りだった、と杉森は考えた。自分がアパートで彼女に会ったとき、「またあとで解るわ、きっと」と謎のように云ったのはこのことを指していたのだろう。だが心の底でドシンと大きな失望があった。

劇場では熱心な舞台稽古の興奮の中に、あちこちで今朝のニュースが噂されていた。一ト場ごとに新聞社の写真班が舞台写真をとっている。小道具係主任の杉森は同時に演出助手をもつとめているので、新聞の人達とも交渉しなければならなかった。杉森君、杉森君と、顔馴染の新聞記者が彼をクッペルホリゾントの裏の暗い隅につれて行って囁いた。
「あんた三枝鉄子をよく知ってるんでしょう？」
「そりゃ昔一緒に仕事してたんやから――」
「いや、最近もですよ。あんた三枝鉄子の差入れを一人でやってたそうじゃないですか？」
「それがどうしたんや？」
「だったらあんた忠告してやったらいいと思うんだけどねえ。あんまり可哀そうだよ、彼女が。僕ア全く驚きましたよ、実はね、あの新聞に抜かれたんでね、あんまり気は乗らなかったんだが、まあ歩いて見ろと思って、今朝あの新聞見るなり白須商会の主人の私宅へ乗りつけたんさ。向島の三囲りのうしろのしゃれた家ですよ。まだ眠ってるってのを叩き起してあの新聞を突きつけて御感想は、と聞いたんさ。するとあの成金のインチキ親爺奴、うしろの唐紙を開けて、おうい、婆さん、うちのドラ息子、また女子拵えたんかいや、って呶鳴るんだ。すると婆が、あの子の女子のことなんぞ一々気いつけておられるかい、何しろお前さん譲りなんだから、阿呆らしい、とこうなんです。どうもあいつには閉口ですよ、お手柔かに、へい、と親爺平気で頭をかいてるって仕末じゃないですか。僕ア君、おったまげたよ。」
それから不意に声をひそめて、
「千葉君だって気の毒じゃないですか？ え？ 千葉君は

どこにいるんですか？」
　千葉は今度の公演の準備には間に合わなくて、第二回公演から働くことになっているのだが、あたり前なら今日は舞台稽古だから見に来ている筈だ。出て来ないのはああ云いながらもこの出来事は矢張り彼にとって打撃だったのだろうか？
「千葉君は来とらんようやな。僕ア三枝鉄子の最近のことはさっぱり知らんのや。だけどそのことが本当とすれば気の毒なことや。」
「演出助手ウ！」
　と演出者が舞台で呶鳴った。おうい、と答えて杉森は首から胸へと掛けた自転車のランプにスウィッチを入れて、パッと灯をともした。じゃ失敬、と云って舞台へ出ると、
「第二幕行こう。」
　と演出者が云う。上手の袖に置いてあるドラを取り上げて、照明部の様子はどうかと天井を見上げると、そこにポッカリと開いている照明室の窓に機関銃のように三台並んだスポット・ライトの間から、千葉が蒼白い顔をニコニコさせて舞台を見ていた。あんな所から見物していたのか。杉森は両手でメガホンを拵えて、押しつぶした声を彼に送った。
「あとで――はなしが――ある。」
　千葉はウンウンと二度、静かにうなずいた。
「じゃ、第二幕行きまァす！」
　杉森は叫んで、第一ドラを叩き続けた。底響きのする音がホリゾンとぶつかってはね返り、劇場の隅々へ沁み込んで行った。
　俳優達が楽屋から、維新直前の或る山の中の宿駅の人々の扮装で現われて来た。第二ドラを入れようとしたときに、杉森の頭に、おや、今頃は鼠のような先生が妙な恰好で東京駅へ着いて、岸本しげ子と秋ちゃんが駈け寄っているかなという考えが走った。

（一九三四年五月「中央公論」）

風　雲

窪川鶴次郎

一

一九三二年三月二十四日の朝の、就業の汽笛が一斉にあちこちに鳴り出した。工場地帯に接した住宅地の通りは、それとなく春先らしい朝の薄陽の色をみせて、一時人通りがまばらになっていた。

汽笛はみんなそれぞれ異った鳴り方で、朝家々の中いっぱいに響き渡った。竹造の家は小高い丘の端に立っていて、汽笛は彼の坐っている二階の机の上にじかに響いてくるようであった。

竹造は漸く何枚かの罫紙に写しとったコッピーを読み返えすのも早々に、机の上を片づけて、いかにも仕事が出来あがったというような高い足音を立てて階下へ降りて行った。そして障子を開けるなりせき立てるようにゆき子に言った。

「俺もうご飯たべない。一緒に行こう。」

彼女は子供にご飯を食べさせながら、自分は竹造を待って新聞を見ていた。

「そうしよう。」と即座に答えておいて、ゆき子は姫婦らしくちょっと思案するように舌なめずりをして、ぺったりと坐ったまま竹造を見上げていた。

「ほら、池袋の東京パン、」と彼は、四五日前の温い夜、珍らしく二人で散歩に行ったときのことをゆき子に思い出させるつもりで言った。「朝九時までは牛乳とパンで十銭だったね。」そこで彼は自分の思いつきを二人のために喜ぶように声をあらためた。

「あれで一緒に朝飯を食べよう。」

「ああそうね。じゃ急がないと。」そう言ってゆき子はゆったりと支度に立ち上がった。

彼女の顔に、竹造の思いつきを特別の意味で賛成するような表情もみられなかったので、彼は繰り返した。

「そうだ、そうしようよ。」

ね、とやさしくつけ加えて、竹造は満足したように、すぐインバネスを着、帽子をかぶった。小さな瀬戸の手あぶりの所へ行って中腰にしゃがんだままでゆき子を待った。

竹造は始めて子供に言葉をかけた。

「敏坊、お早う。」

母親の立った後をちっとも意に介しないで、黙りこくって匙でご飯を食べていた敏夫は、頭の大きな顔をあげ、わ

ざわざ匙を左手に持ちかえて、
「たま、たま。」と右の方の指で手許の卵の殻を指してみせた。
「うん、うん。」竹造は自分でも知らぬ間に、急がねばならぬことなど忘れたように落ち着き始めていた。が、父親らしく子供の対手になるのにはそぐわないものがあった。
とにかく、お茶だけ飲んでゆこうと思い、結局坐り込んで茶餉台の上のものをつまみ出した。それは全く彼らしいやり方だったので、支度が終ってハンドバッグに塵紙をそそくさと入れていたゆき子は困るように言った。
「あなたまたゆっくりしているとわたしお母さんたちに悪いわ。」そして竹造が十分承知の筈のことを言って聞かせた。
「大学の正門前で会うことになってるんですもの。この寒いのに待たしちゃ気の毒でしょ。」
「あ、そうか、九時だったね。」
ゆき子が井戸端の子守に声をかけて出て行く後を、竹造は急いで立って、敷居ぎわまで行ったが、敏夫は振りかえり「はいちゃ」と首をかしげてみせた。
二日前に大雪があったりして、まだ寒かった。竹造は徹夜の疲労のために、外気が殊更に冷めたく顔に沁みるのを覚え、ちょっと心もとなく感じた。深く懐ろ手をした身体をゆき子に寄り添えて歩いた。
彼の指先の、腹巻の中には、朝までかかってやっと書いた重要な文書が小さく折りたたんで入れてあった。見たところ何でもない人間のように装いながら、彼は決して虚心にはなれなかった。彼にとってはこの警戒心が、仕事に対する自分の確信を楽しませるほどの大胆さをその中に含んでいないように思われ、彼はこんな時いつも努力する。徹夜の肉体的な疲労が、そういう彼の努力に対して心もとなさを感じさせたのであった。だから彼は徹夜などして朝早く出かけることを好まなかった。
駅のブリッジを昇っていた時、二人はいつの間にか離れていた。後になってゆき子を見て、竹造は自分だけの気持でいたことに気づき、彼女を待って一緒に歩き出しながら出産の間ぢかな彼女を労らねばならないと思った。
春先らしい東京パンの店は開けはなしてあった。もうストーヴもなかった。朝のパンを食べに来る勤人も少なくなっていた。竹造はゆき子と向い合っていて何か満足したようなしないような気持で、あたりがうそ寒く落ちつかなかった。彼は今朝のような時に、彼女と一緒に朝飯を食べないで出かけて、万一のことがあった場合、後でそんなことに気づいたりするのは損だと思っていた。だから二人の間の気持を少しでも深く味わっておきたかった。
「コーヒーを飲まない？」と彼は言った。
ゆき子はただ首を横に振った。彼はそれを、未だに残っている悪阻の嫌悪のためだとは考えてみなかった。急いでいるのだろうと思って時計を見上げた。

「じゃおれ急いで飲むからね。とても眠くって。」竹造のまぶしそうにした眼が、眼鏡の奥で相手の不満をなだめるようにゆき子に向って忙しくまばたいた。

竹造はゆき子が出産を間近に控えた物憂い身体をしているので、別れる前の衝動的な愛情の暗示をその眼で一度も彼女に伝えることができなかった。

東京パシを出ると、竹造のこれ迄の気持の方向が、おのずから一変していた。二人が駅の地下道の別れる所へ来た時、彼はゆき子を引き止めるように立ち止って、きっぱり言った。

「朝の会合が済んでから、ずっと晩まで麹町の事務所にいて、夜は他所へ廻わるから十二時過ぎになるかも知れない。心配ないから。」

無口なゆき子はただ点頭いた。

二人はプラットフォームで線路を隔てて互にじっと顔を見合った。彼らにとっては特別の意義を持った暗黙の習慣であった。

竹造はゆき子には知る要のない会合へいそいそと、用心深げに出かけて行った。彼には電車の乗り降りも無意識で、ただ人の姿だけが首を動かさないで眼に入った。

ゆき子はその日、竹造が一週間前から奔走して便宜を得た大学病院へ、狂人になった実家の父を入院させるために出かけたのである。

二人はこのようにして別れたのであった。そしてゆき子が竹造とその仲間たちの捕まったことを知ったのはそれから四時間とたっていなかった。

竹造たちの事件を手始めとして、文化団体における被害は、その度に不安と緊張を呼び起しつつ拡大してゆくばかりだった。

一年前から文化活動は基本的な組織との関係が一層密接になって飛躍的な発展の段階に入っていた。竹造は文化運動に対するこの組織の任務のために働いていたのであった。

竹造は遂に帰って来なかった。

二

独房の扉が閉まって内側に向いて立った時、竹造は次に取るべき行動を差し当り失ってしまった。まず畳の真ん中へんに行って、青い紐のような帯の間に筒袖になった両手を突っこんでポッンと膝を揃えて坐った。

房の広さは、一枚の畳と鍵形に残った板の間と併わせて二畳半敷き位である。竹造は、長い留置場生活をして来ているにもかかわらず、鼻をつくような変な狭さを感じた。高い所に斜にかかっている三尺四方の曇り硝子の窓は、上と下が僅かに透いているだけで、開いていたとは違って空さえ見えない。外側の鉄格子の影をうつしたこの窓と、ピッタリと閉された厚い板扉の他は、何の変哲もない、コン

クリートの棺桶そのままである。変に狭く窮屈なのは、房の広さから来るのではなくて、この棺桶みたいな構造のためだなと竹造は考えた。
　留置場では、三畳に二人位の人数は珍らしくない。ここではたった一人でいる。そのことがかえって、一層狭く感じさせるのであった。
　いつ迄たっても、ここでは、眼に映ってくる物の動きというものがない。箱の中の静かさ。もしもこの空間を絶対にのがれることの出来ない、息苦しいものに思い出したら、そういう人間はそれだけでもたまらなくなるであろうと竹造は想像せずにはいられなかった。そうして彼はその瞬間思わず狭さをおし拡げるように一息深く呼吸していた。
　竹造が入所したのはもう昼食の済んだ後であった。それで特別に運んでもらった飯を食った。それから「理髪」に呼び出された。その次には「入浴」に呼び出された。その度に彼は何の説明も予告もなしに突然扉を開けられては出されるのであった。この房へ入る前に「中央」という所で看守部長と管区長は、詳しいことは担当の看守から聞けと言った。しかし担当の看守は竹造を房へ入れた時、扉を二三尺だけ開けたところに立ち塞がって二、三の注意はしたが、これからの生活についての具体的な知識のたしになるようなことは何もしゃべったのではなかった。
　こうして竹造は何事が起るかも分らないで、呼び出されて行ってみると健康診断であったり、そうかと思うと運動に出されたりした。
　竹造は今度こそ看守がやって来たら何か聞こうとかまえる。竹造の聞こうとしていることは目前に迫った用事ではないので、何か話しかけてゆくより他に仕方ない。しかし突然扉が開くともう彼は看守の先に立ってどんどん歩いてゆかねばならなくなる。房に戻って来た時は、脱いで手にもった草履をまだ下におくかおかぬうちに押し込むようにうしろでガチャンと鍵の音がして看守は去ってゆく。彼には話しかけるなどという機会をつかむことが出来ないのであった。その度に対人関係における自分の気の弱さをみせつけられることから、竹造はフッとそっぽを向いた。……扉はぴったりとしまっている。自分の方から用事のある時などは、どうすればよいのだろう。
　――竹造は板扉の横の壁に一寸角位の木の棒の先がのぞいているのにさわってみた。壁にはめこんだ木の枠の中でカタカタと音がして少し動いた。棒の先をひっぱってみたが、動かなかった。そうっと押してみると棒の先が穴の中にはまりこんで外の方でカタンと音がした。何かさわってならないものにさわったのではないかと思って、座に戻って坐っていた。微かに草履の音が近づいて来る。竹造は扉の方を見上げていた。
「何か用か。」扉は開かないで扉の上の方についているのぞき穴のところから声がした。

竹造は、いいえ、と言いながら急いで起って行った。
「報知機を下ろしたろう。」
「ああそうですか。うっかりさわったんですが。」
竹造はいじってみたとは言えなかったのだ。しかし房の中と外との関係が、自分の方からはこの報知機によって保たれていることを知ってよかったと思ったのである。報知機は、内側から棒の先を押すと、自分の房の番号を書いた細長い板が廊下にむかって水平に下りるようになっていた。
独房に入って、外の世界から自分が全く遮断されたという感銘を竹造に最も強く与えたものは、コンクリートの壁、高い窓、ガチャンと音をたてる錠、というような物的なものではなかった。予め説明したり、教えたりすることをしないで、その言葉にも決して感情を現わさない官僚的な無関心に基く扱い方であった。竹造にとっては、このような扱い方の与える感情的な影響を無視してかかって、直ちにこの官僚性にたち向えるだけの自己を、き然と心の中に意識するということは大きな努力を要するのであった。
竹造が入房した後から、便器や屑籠や流しや、見台みたいな小机などを雑役が運び込んでいた時、傍らに看守が蹤いて来ていない隙をすばやくぬすんで、雑役は竹造に口早に話しかけた。
「一昨年の夏新聞に出た殺人事件があったろう。あれが俺だよ。」
魚屋風のてきぱきした、年輩の雑役は気負いこんでまだ何か説明した。あの有名な事件を覚えてるだろう、と当然誰でも知ってるように思いこんだ調子だ。竹造には何が何だかわからなかったが、彼はただただ心を弾ませてにこにこうなずいた。
竹造はたち上って、ゆっくりと房内を歩いた。立ち止ってはしばらく壁にもたれた。彼の視線は決して一つ処に長くは止まらなかった。……じっと一つ処をみつめていると胸が詰まるように堪え難くなってくるような気がする。入口のところに立って房内を見渡した時に殊はひどかった。こんな密閉された箱の中をこうして歩いたり壁に凭れたりしている姿を、全然予備知識をもたないで誰かがのぞいてみたら、自分が狂人にみえはしないか。事実急いで歩いたりすると、ふっと自分でも何か変な感じが湧きはしないかという気がする。歩くのにもいつか糸を引かれているようにそっと身体を動かしている。彼は時々耳を澄ました。何か音がすると聞耳をたてた。ここへ入った時からずっと、同じ屋根の下に自分の仲間が一杯いるという考えを彼はもっていながら、それが実感として彼の心になかなか迫って来ない。彼は物音や何かの気配の中にその実感を求めようとした。
彼は幾度か窓のところへ行って、縁にぶら下って外をみた。そこは建物の間になっている。すぐ前に土間廊下がある。彼が今居る建物に入って来る時通った廊下であった。

彼は思いついて、机を台にして地面までみた。彼が少しでも多く知りたかったのは、自分の房が周囲とどんな関係にあるかであった。
彼の想像は、自分の家との距離や方角のことであったりした。
彼は窓を見上げては、坐っていて空さえみることが出来ないなんて、と考えた。二三日後遂に窓枠をはずし、それを二度も発見されて、あんまり暑苦しかったからとか、自分は身体が悪いからとかいい訳して、馬鹿をいうなと呆れたように一蹴され、坐っていても空が四五寸の巾にみえるように窓枠をずらしてかけておくことを知ったのは、入所してから半月後のことであった。
彼はこの箱そのものを少しでも早く自分の物としようとした。自分が今この箱の中に自分自身の生活をしているということ、自分がここにいる多くの仲間の一人であるということ、そのような現実感をえようとした。箱の中をいろんな足どりで歩く。立ち止まっては耳を澄ます。壁にもたれる。扉や壁の上の、削られた落書の後を丹念に調べる。
新らたな生活の特殊な形式が与える影響などには打ち克って免疫になろうとして、竹造は新らたな経験の一つ一つを嘗め味うのであった。
「僕の現在の生活も、お前及び我々すべての人たちの生活と何等変わりないと思う。」と竹造はゆき子への最初の手紙に書いた。
「僕は本を読みながらも、窓ガラスのわずかな隙を通して青空に眼をやり、僕の眼を休ませることを忘れない。眼瞼をおさえてぐりぐりとやる。時々立ち上って伸びをする。時間の惜しみなく物を噛む。全く溶けてしまうまでは呑み下さない。そのような些細な、保健のための注意を払っている。」
ゆき子から差入れのある日が来た。竹造は朝からいそいそとしていた。時間がたつにつれて今か今かと待つような気持になり、本を読んでいながら時々聞耳をたてて、雑役のはいている下駄の音と看守の草履の音とがまじって廊下を近づいて来るのを聞こうとした。
彼はゆき子に、面会が月に三回、差入れが土曜日毎に一回という風に約束しておいたのである。食べ物の差入れについては、竹造の方から、自分の病気や中での健康保持法から割り出して、特に具体的な希望が出されていた。いよいよ送られると決まった時、彼が特別に栄養的な意義を痛感していた食べ物の、思いついた名前を一々あげて、その費用の捻出方法をも指示した紙片を子守に持たして既にゆき子に渡してあった。
いつか昼飯も済む。竹造は本を読んでいても落ち着かなくなった。まだはっきりと不安という程の気持にならなかったが、彼は時々本に書いてあることに蹤いてゆけなくなり、窓を見上げた。いつかいろいろなことを考えていた。
今の場合、竹造にとっては差入れそのものが問題なので

はなかった。月三回の面会と週一回の差入れ、それを併せると彼はとにかく、すくなくとも月に七回はゆき子の無事を確めることが出来る。若しも彼女の身の上に何か変ったことがあった場合、少くとも四日目にはそれを知ることが出来る。彼はこう考えていたのである。手紙などは十日以上、時には四十日もかかるので、このような連絡の使い途にはならない。いわば面会、差入れの意義は、彼にとっては決して今日明日の問題ではなかった。今後どの位長く続くかも知れない彼の獄中生活の、肉身でなければ十分してもらえない世話をしてくれるものとしての、彼女の時々刻々の安否を知るための手段でもあったのである。金の工面が出来なくて来れないのか、忙しくて来れないのか、それとも……。

ゆき子は竹造と共に同じ文学団体に属していた。彼女が困難な家庭的条件にもかかわらず進んで仕事についていることは明らかだ。被害の拡大、仕事の進展に変わりのあろう筈がない。竹造はゆき子の上に何事か起ったかのように顔を上げて壁を見た。全然階級的な仕事に携っていない、何等危険のない女房を持っている場合を想像することは、それだけでも自分の態度にとって怖しいことだ。彼は他人事のようにそう考えた。

……しかし、面会、差入れの回数を折角このように定めておいた自分の意図が——あからさまには伝えることの不可能な——この意図が殊によると彼女には分っていないのかも知れない、と竹造は考えるのであった。

晩飯近くになって運動の番が廻わって来た。竹造は建物を出て編笠の縁に手をやって空を仰いだ時、展けた空間にありありと自分の姿を見出し、彼は自分が予想さえしなかった気持に捉えられていることを知った。彼はいつものようにシャツ一枚になって駆けた。塀の上に遠く五月らしい霧がかった暗い曇りを帯びた青葉がみえる。が、やはり足を鈍らすものがあった。彼は心の中の不安に似たものに眼をやりながら、その沈んだ青葉の上に沈潜して行った。沈潜することによってその気持を味わいつくし、なくしてしまおうとした。

竹造が落ちついた気持をとり返えして戻って来て房の扉を開けると、つい入口の板の間にパンの袋が一つある。

「やはり来たのか。」彼はすぐには笑い顔になれない表情で呟いた。たったパン一袋だけの差入れは思いがけないことだった。その瞬間、彼は一袋のパンの上に、言いたいことがあるのを黙っているゆき子の顔を見た。手に取って、座りこんでパンを出したり入れたりしていると、差入れ物について彼女に過重な要求をしているのではないかという考えが、彼の軽くなった心の底に生れて消えた。彼は手紙の中に、あのパンは、もしかすると池袋の東京パンのものではないかとしきりに考えた、とだけ書いた。

三

ゆき子からの最初の手紙が届いたのは竹造がここへ来て十二三日たってからであった。竹造はそれを昼の配食の時うけとった。

彼はまず膳を机の上に据え、手紙は膝において、急いで皿のかんぴょうに味の素を混ぜて一箸飯を口に入れてからそれを読みはじめた。

「昨日あなたに面会に行き、帰りに吉祥寺へ貸家を探して貰いに寄ったりして大分疲れたので、今日は一日二階に赤ん坊と二人でいます。

今度は最後まで、あなたは帰ってくるものと信じていました。このようになろうとは思いがけませんでした。どうして帰えれなかったのかと今でも何か不思議な気がします。

それに警察からそちらに廻わる時にも不意に廻わってしまい、どう考えても心残りな別れ方をしたし、初めの時も私たちは不本意な、せめて東京パンで一緒に牛乳を飲んだことを記念にするより他ない状態でした。」

「まだ逢うつもりでいて、だからいよいよ廻わされる時のこまごました世話なども考えていて、ぷすっとすかされる。私の経験したこの気持を想像して下さい。それはどうにもやり場のないものです。胸に欝積した感情を自分でも持て余し、うろうろしてしまう。たった一人で送られて行ったあなたの気持にも入り込んだり引き立てて行ったものに対するどうにもならない憎悪に胸をかきたてたりする。

赤ん坊をおぶって、折角こしらえた弁当を空しく下げて、しとしとと降る雨が新芽の柳をぬらしている濠端を心に泣きながら面会許可証をもらいに裁判所へ急ぐ私の姿を想像して、あなたはただ可哀想とばかりはお思いにならないでしょう。私は勿論今度の事件だけが何か特別に起ったものとは思っていません。」

「私は今度少し身体を無理したようです。自分の身体を無理するより他にいたし方がなかった。この二日ばかりびっしょり寝汗をかいて寝衣がぬれてしまうほどです。その前の夜は、乳が痛んで痛んで、熱がその乳の痛みのためらしく八度八分も出た。その熱を押して、一と晩かかって、あなたへの差入れの品へ名札を貼ったり、縫いつけたり、揃えたりした。」

竹造はだんだん悩むのを止めていった。

「乳が痛んだのは、赤児を抱えどおしで、それに重いものをさげて歩き廻わった故らしいのです。赤児を抱え、走るように急ぎ足で歩きながら赤児のために子守唄をうたっていると、子守唄をうたう声が我にもなく逆戻りするようにぐっと咽喉につかえたりして困ったこともあります。子守唄などは感情的にするものです。」

竹造の唇は込み上げてくるもののために硬ばってふるえ

た。彼は口の中のものを呑み込んで涙を流していた。
「こういう手紙を不自由なあなたへ書くということはいけないことでしょうかと、思うけれど、誰に話すことでもないし、あなたへ書くより他にやり場がないのです。私のこのような苦しみを、助けるものはあなたの元気さです。」
「このことを忘れないで下さい。私のこの苦しみをふみこえてゆく我々のこの力を忘れないで下さい。私たちは苦しくともみじめにはなりたくない。(以下一行ばかり消されている。)私は赤児を背中にくくりつけてテクテクと元気に歩いてあなたへ差入れその他に通うでしょう。」
「手紙がやがてくるのを楽しみにしています。面会をした時のお互いの話はまるで、会社に社用で行って面会する人間どうしのような話しぶりです。あなたは自分の差入れのことばかりいうし、私はあまり楽しくない顔でそれを聞いているばかりだし。
今度手紙が来て、初めて話を聞くような気がするでしょう。」
「私は今夜も寝汗が出るだろうかしら。布団はまだあなたの所へ届いていないでしょう。身体を大切にして下さい。身体が元気でないと、気分も元気でいないものだから。くれぐれも身体を元気でいらっしゃい。せいぜい滋養のものを差入れするようにしますから。今は夜十時過ぎです。」
竹造は夢中で飯を食べてしまってから、また繰りかえし読んだ。そして長い沈黙に捉えられた。それはあらゆる考えや感情の凝り固まった沈黙であった。
ゆき子は一生懸命やっている。竹造はなすべきことをなした人間としてここへ来ている。ここ特有な索莫と緊張の生活の中で彼女のために涙を流すことが出来た。発作的に、竹造の心に二人が一緒になった頃の記憶がよみがえった。その五月が六度めぐって来ている。
二人はポンポン蒸汽にのって出かけた。その音が初夏らしい川風の中に、二人だけになってこれから東京を離れてゆくうれしさを思わせる。彼は今、その時海辺の家で、静かな夕方しきりに行々子が鳴きあっていたのを聞く。二人が眼を覚ましていた夜中に、庭の池で間をおいて鯉のはねるひそかな音がする——。
竹造は喜びにあふれる歎息をついた。
しかし竹造が心の中で抱こうとするゆき子の肩には何か考え深そうな躊躇がある。それは口に出して言わない不満や異見のある時の彼女の常であった。彼は始めから彼女の手紙の中に、歯に嚙みあてたようなものを感じていたのである。起ち上って伸びをした時や、本の頁をめくる時など、ふとした拍子に不安な上目づかいをする。
元気でいよ? ……繰りかえされ強調されたこの言葉が浮かんでくる。今の自分は、何もあんな風に元気づけられる必要のある人間では決してない。それとも自分がそんな風にみえるのか。竹造にはどうしても、これが単なる階級的な激励の言葉とか、困難な状勢に対するゆき子の緊張が言

わせる言葉とばかりは思われないのであった。
彼はその晩、寝る前に、もう一度手紙を読んで、それを懐ろに入れて寝た。あくる朝眼が覚めたとき、その手紙をすぐ思い出した。が、はだけた懐ろには無かった。腹の方にもない。背に手をやってみたがない。急いで掛布団をめくってふるってみると、手紙はその折れ重なった間にはさまっていた。
彼は返事の中に書いた。——僕はいつも、お前のどんな気持をも、すべて聞きたいと望んでいる。それが聞かれないことこそ、僕を心配せしめる。………どんなことでもよい。お前の考え、気持、僕に対する希望、すべてを僕は聞きたい。——
竹造はゆき子の身体のことを心配して、大学病院にいる彼の友達に至急診てもらうように書きそえて、同時にその友達へも依頼の手紙を書いた。
それから二日後の手紙に彼はまた書いた。
——僕は夢中になって本を読んでいる。しかしここへ来たために僕の生活気分の上に変化が来たのだろうなどと思う必要はない。——
また約束の日に差入物が届かなかった。もしかすると来るのが遅くなったために品物が明日に廻わされたのかも知れないと思って、竹造は次の日の日曜を待ってみた。月曜には、土曜日に来なかったのだから今日こそきっと来るだろう、そしてそれは夕方になれば分るのだから、と竹造は自分に言いきかせるようにして、朝から、夕方になるのを待っていた。しかし遂にゆき子は来なかった。
差入れの食べ物も金もすっかり無くなっていた。本もきれかかっていた。

四

膳の上にはもう、ゆき子が自分の手で入れてくれたものは何もなかった。味噌汁だけの晩飯に箸をつける時、竹造はふっと佗びしい気持に襲われるのであった。彼は差入れの夕食弁当を配っているらしい扉の開け閉ての音が、近づいて遠のいてゆくのにいつか嚙むのを止めて耳を傾けている。外にはまだ陽がかんかん照っている。彼は物欲しげな心理を自分に意識して、疚しい心の持ち主のように悪びれた。
晩飯も済んでしまうと、彼はしみじみとした気持になっていないというような気安さを覚えた。暮れゆく房の中に、食器を洗い、掃除をし、冷水摩擦をしたりして、寝ることは何ていいことだろうと思って床につくのであった。そして彼は一度寝たのをまた起き出して、暗闇の中で、誰に恥ずるともなく入口に背を向けてそそくさと、手探りで本に挟んであったゆき子の手紙を取り出して床の中に入れた。

ゆき子を待っている竹造は、彼女が捕ったのではないかという不安に幾度か捉えられそうになるのを、それから身を躱し、彼女を恋しく思っていることも事実だと思った。彼はこのことをその時の手紙に書き、次のようにも言った。

「僕のお前に対する気持などというものも、自分の属する階級との正しい関係を保たれていての上のことだ。そうであるから、たとえ僕が昔のようにお前のことを思おうと、僕は決してそれで自分の生活を慰めようとしているのではない。………………………………にも属していないかの如き精神状態から生れるのである。」

「一日坐り通しの生活では、どんな題目でも、ひとたびそれを捉えると、実に丹念に時間をかけてそれについて考えをめぐらす。頭の中だけの生活だから、箱のような天地では勢い細かなことにこだわりやすくそれが誇張されてみえるらしい。僕の手紙にもそれが現われているのではないかと考える。……」

ゆき子は引っ越しを済まして、その翌日面会に来た。彼女は、実家のものが、狂人になった父を連れて田舎へ帰った後の家へ移ったのである。

房の扉が開いて、

「面会」喜ぶであろう相手の気持を認めてはならぬような低い押し殺した調子で言った。

竹造は瞬間、いろいろな焦慮や不安が洗い流されたようにサバサバとした気持になって起ち上った。

彼はゆき子の顔をみているうちに考えついて、面会を二十日に一回位、差入れを十日に一度位に減らすように、それも余り厳格にではなく、自分から約束しなおした。

「……あれはやっぱりこれ迄どおり？」ゆき子は話の切れ目にふっとこう言った。

始終考えていたことが思わず自然に口をついて出たような調子であった。竹造はすぐ、ああ、そうか、とすっかり分って、

「そりゃそうだよ……」と言った。

ゆき子の言葉は、弁当や牛乳などの差入れを継続しなければならないのかという意味なのである。面会の仕方にも慣れて、傍わらに人がいながら、計画しておいた通りの二人だけの甘い気持になって、竹造がそれを彼女にさとらせようとして眼顔にまで出して話をしていた時だ。彼は少しあわててすぐ他のことを話しつづけた。

房に帰って机の前に坐った竹造は短かい時間に圧縮された面会の内容を詳しく思い出していた。

やっぱりこれ迄どおり？　その言葉がその調子のまま頭をはなれなかった。竹造はその言葉に対して湧いてくる感情を押えた。その気持を荒らだてて、二人の結合が少しでも縺れるようになることは、二人の生活を現在のような境遇にさせたものに対して、敗北を感じさせて情けなく腹立たしい。彼女は赤ん坊を抱えて走るように歩きまわって仕

事をしている。不自由な自分の生活を一生懸命に守っていてくれる。そういう彼女に対して不満を抱くということは苦しい。まして彼女に対する不満に跳びついてこの房の中でひとり格闘するなどということには堪えられない不安であった。

竹造は紙石盤をとり出して、前に彼女に希望してあった差入物を、その後の経験に照らして整理し、その価格を綿密に計算した。翌日の手紙にその費用の捻出方法を書き、それに対する意見を求めてやった。

どんなに自分が彼女の生活にとって過大の要求をしたところで、彼女が自身の……　……に差し支えを来たしてまで無理をするようなことはあるまい。そう考える竹造は、やはりこちらの要求を彼女が承認しさえすれば、いくらでも自分の要求をみたしたいと思わずにはいられないのであった。

竹造はその後の手紙にもまた、自分の考え方や見方に対してもどしどし意見を聞かしてくれと希望した。「もっと僕に対して積極的になってくれたら、恐らく僕は同時に恋愛的な満足をもより多く与えられるのに違いない。……」とつけ加えた。

五

竹造が自分の家を出たときはまだ寒かった。

それから二ヵ月近くたった。ここの生活にも慣れて来た。彼は本を読んでいておもしろいことがあると、わざと声を立てて笑ってみた。筋肉がゆるんで、ほぐれた気持が身体中に伝わるようである。それが外での日常生活の気持を味わせるのであった。

竹造が毎夜寝てから聞いていた蛙の声は、梅雨になるとぱったり聞えなくなった。今年の梅雨は全く梅雨らしく毎日降った。竹造は心ゆくまで雨の音を聞いた。

或る夕方であった。一度止んだ雨が今にもまた降り出そうとしているようで、全舎房は深い静けさが満ちていた。寝る少し前のことで、建物の中には物の動きの気配すら無かった。

何か叫ぶ声がした。竹造は叫びの中に、…………万才という言葉を聞いた。記念日でもなんでもない。今頃何だろう。房の中に籠った声ではない、窓に昇って叫んでいるらしい、どこだろう。竹造は入口のところへ行ってみたり、窓の下へ行ってみたりした。たしかに階上だ。訳のわからぬ叫びが続いて、万才万才という言葉だけが聞き分けられる。

……………………。物のぶっつかり合う音や押えるような人声が聞え始めた。その中に口籠った声がしている。それが止むと前よりもっと静かになって暗くなって来た。竹造は机の前に坐って、息をはずませてじっと耳を澄ましていた。身体が震えるようになる。

二三人らしいかすかな草履の音が「中央」辺に聞えたので、ふと思いついて机を窓のところへ持ってゆき、それに乗ってそっと外をうかがっていた。紺絣の着物を着た、色の黒い、ガッシリした四角な顔立の同志が、…………、…………、…………………………。竹造は机を元へ戻すと、前から隣の房が仲間ではないと見当ついていながらそんなことには構っていられないで、壁をいくつかコンコンと叩いた。向うからも叩いた。遠くの方から「就寝――就寝」という声が独言のように聞えて来た。

翌朝竹造は眼を覚ますとすぐ前夜のことを思い出した。しとしとと雨が降っていた。

二三日たってゆき子から二度目の手紙が来た。

この前の手紙と同じような納得出来ないものがあった。元気でいよということを、前よりも一層強く書いてある。自分に対する好意に解釈しようとしてもそんな余裕を与えない。各行が耳に響くように鳴っている。彼は自分の中に不安を感じて読み返えすことがすぐには出来なかった。

まず、差入れの食べ物などとぎれさせて、捕まったのではないかと案じさせていたことを悔いて詫びている。「このような時にあなたがどんな風な心配をするかということはよく分っていながら、今度のようなことをし出かしました。」と言ってその後に次のように書いてある。

「あなたが身体を悪くするほど心配したことは尤もなことです。今後私の元気な便りとして、必ずとぎれることのないようにします。あなたもどうぞあくまでも元気でいなければいけません。気持と身体との関係は相互に作用しあいますから、そのどちらにも気をつけて下さい。くりかえし申しますが、私の外での困難な生活を勢いづけるものとして、あなたの元気如何は大きな役割をもっています。またあなたの内での生活を元気づけるのも私の役目です。私たちはお互に元気づけ合わねばなりません。」

「あなたがそちらへ廻わったあとは、まだ少しも変りません。みんな元気でいる。福井民子がそう言っていました。この元気さは美談になって伝わっています。私の家でも赤ん坊も元気です。敏坊も元気です。みんなみんな元気です。お互いが元気でいるということは、お互いの心に何という信頼と喜びを呼び起すものでしょう。我々のこの感情、我々だけの持つこの感情をうちこわし、我々を引き離すことは、…………………………………………出来難いことでしょう。」

この前の面会の時に竹造は、とても心配していたことを言いそれではまだ言い足りなくて、

「それに身体が弱っているものだから。」と言った。

しかし竹造には、それを口にする時の自分から、ゆき子が少しも甘えた心持を汲んでいないことが意外であった。

ゆき子は自分が彼女について心配することを非階級的だと考えているようだ。竹造はそう思った。彼には、自分た

ちのいなくなった後、それまでは合法的だった仕事の多くの部分が急激に合法性を失いつつあることが想像出来た。彼はゆき子がそのような仕事のためにあぶない目に逢い易い場面をしばしば考える。そして自分の神経がここにいても常に外の神経と同じ生活をしていることを誇りにさえ思っていたのであった。

竹造が家にいた頃のゆき子の印象は、どこか竹造という夫のかげに妻らしく坐って世間を観ているというつつましさと気安さがあった。しかし今、竹造の眼の前には、彼の蔭から離れてはっきりと一独立人として、身体一杯に力を入れたゆき子の姿が立っている。その姿は彼に対して決して十分な満足を表明していない。しかもその理由を真っ向からは言おうとしていないのだ。

竹造の興奮は燃え上れないでじきに弱々しく醒めてしまった。もう何もせずにじっと受けた気持を追求してはおれないで、すぐに本を読んだ。竹造は美談を民子の夫の福井だけの事に釈った。自分だけが取り残された心細さの中に、みせびらかされたような福井の美談に対する寂しいひがみのまじっていることが自分でも分った。

竹造は返事の手紙の中に書いた。

「お前は僕について少し心配し過ぎる傾きがないともいえない。……もしも元気ということが階級的な態度を指すものとすれば、僕はこの不自由な生活の第一歩以来、変ることなく元気だったと確信している。この元気とお前についての心配と矛盾するものではない。生活の基準が個人にない限り、僕は時に何を心配しようと、憂えようと自由であろう。」

「僕の病気はやはり余りよくないが、胃腸はここへ来てからずっと、細心の注意によって全くつつがない。僕はお前からの差入れの食べものを余すところなく血となし肉となしている。いつも便器を仔細にのぞいてみて、消化状況を調べる。よくないと、折角一生県命に差し入れをしてくれているお前に対して不徳をしたようで寂しくなる。」

本や壁や窓をみる竹造の眼は、いつか刺戟のない生活の中でだんだん鈍くなって来ていた。窓から落ちてくる陰気な光りに浮ぶいつも死面のような顔に、その眼は殆んど何の変化も与えることが出来なかった、が、彼の心は彼女との関係において明暗錯雑の世界であった。

竹造は手紙を通して知ったゆき子の成長のことを思い出して、自分はそれを喜ばねばならないのだと考えることがあった。すると何故彼女の手紙を読んでそのことを知った時すぐに自然に湧き上ってくる喜びを感じなかったのだろうと自分を疑ってみる。そして自分がゆき子に不満をもたれているという心のわだかまりをもっていたからだと考える。彼女が現実の真ッ只中に働いているということが、自然に彼の生活の目安を彼女の態度におかせていた。したがって彼女の差入物一つ、ちょっとした言葉づかいさえ彼の心を烈しくゆすぶるのであった。しかもゆき子の成長を素

直に喜ぶ気持でいる時には、彼女の成長の背後にある彼女たちの生活の有様を想像してみるのであった。そして差入れのことなどをめぐって何か自分について考える必要があるのだなと批判的になる。

しかし、竹造はやはり現在の自分をそっとしておきたかった。

彼女は外の情勢を悪く反映して変な力み方をしているのではないか、肩を張っているので自分の愛情など受けつけることがなかなか出来ないのではないか、そんな感じをも彼女の手紙から彼は受けとった。しかしそのことを一つの明らかな疑問として考えたくはなかった。自分にはそれだけの自信がない、却って自分を傷つけることだと思った。

竹造には、ゆき子に不満をもたれているのではないかという不安を抱きつづけて生活してゆくことは出来なかった。彼女がいつかずっと成長していて、現在の自分の愛情のもち方が相応しなくなっているとすれば、自分に恥ずべきことだ、などと思うともう彼女が夫婦生活の体温から離れて自分とは他人になってしまうような気がする。

結局彼が最後のよりどころとしているのは、自分の階級的な態度に対する確信であった。

六

最後の取調べのあった日のことであった。

取調べは長びいたが、要点は簡単だった。竹造が否認するのを押して追求するのでもなかった。

火鉢の火は白々と灰になっていた。暮れ残る冷たい色に透きとおったガラス窓の中の、ガランとした講習室らしい大きな部屋の片隅に腰かけている二人をめぐって、夕闇が迫って来た頃、二人は取調室を出た。特高室にはもう電灯をついていた。

「君が承認しなくたって俺の方はちっとも困らないさ。起訴するだけの材料はすっかり揃えてるんだからなあ。」

ぶらぶらネクタイやズボンを直したりして帰り支度をしながらそう言った。

「君たちが口癖のように言ってることだから、鉄の戦士もいいだろう。その代わり、…………………意見書の中に俺は俺の考えをうんと書いてやるんだ。」アハハと顔を上向けて竹造を揶揄うように含み笑いをした。

なお、どこまでも否認していると裁判所の心証を害して絶対に保釈にはならないということ、もし予審でも否認しつづけていると、否認してる間は未決通算のないということを、個人的な親切のように言った。

留置場へ戻って来た時には、もう足の踏み場もなく寝ていた。

彼はその間に割りこんで横になって始めて興奮し出した。ふわふわとよりどころのなかった身体がしゃんとした。彼はぶっちがいに寝ている身体の間に挟った足の先

を毛布の中から抜き出して、みんなの寝ている上にひとり膝を高く重ねていつ迄も眠らないでいた。
　どうしても事態は確定的に思えた。竹造にとって当面の問題は、もしも承認しなければ保釈にならぬというあの言葉についての法律上の疑問であった。彼には、…………原則としてあくまでも否認しなければならないという自覚がないのではなかった。が、彼は自分の疑問と、もしそれが事実であった場合、承認すべきか否かということとについて、外の人たちの意見をきき、すべてそれに従おうと思った。そして日が経つにつれて、無意識のうちにも、一段落ついたのだから承認してもいいという返事を期待しているのだった。
　それに対するゆき子の返事はこうだった。
「元気で行ってらっしゃい。Aさんも昨日送られたそうです。安心していらっしゃい。」
　ぽつんと言った。物柔わかな声であった。竹造は自分が彼女からやさしく慰撫されているのを感じ、その言葉の意味を承認してもいいととって少しも疑うところがなかった。
　翌日、待っていた検事が来た。そして竹造はその翌々日廻わされたのである。
　しかし彼は文字どおりの意味で承認したのではなかった。検事の取調べにおいても、やはり、自分が………………………　…………れなかった。ただ連盟の中心的なメンバーの会合に出席することをすすめられて出席したという事実を承認したのであった。
　ゆき子が十分な方法をとれなかったために、承認するなという意味を、遂に竹造に徹底させることの出来なかった責任を感じて、そのことをいろいろな言葉に託して手紙に書いてる意味を、竹造は理解することが出来なかった。
「私たちはこん度別れる前にいろいろともっと話をしておきたかった。私たちは二人とも幾分気弱ですね。あなたの手紙にもあったように、あなたは誰と面会したのかと思うほど、他の者とばかり話をしていた。私は話下手であり、気が弱すぎた。高村秋子の突拍子もない仕草を、私が幾分でも持っていたら、また福井民子のズバズバとした太さを私が持っていたら、このように残念に思うこともなかったろうに、この私の心残りは、誰にも話してない。私一人の心残りになっています。だから、外の人たちは、あなたはまだいよいよと確定したのではないだろうとも言っています。」
　竹造は、彼女一人の心残りというのが、お互に愛情を十分に伝えあうことの出来なかったことを言っているのではないかという気がしたのであった。彼はその返事の中に書いた。「お前は福井さんの太さや秋子さんの果敢についての書いてよこした。僕も同感する。しかしそれらのものは、いうまでもなく、…………………意志と、最も肝腎なことは、周密な思慮とを俟つことなくしては、発展せしめら

れないと思う。」
竹造がいなくなる一年ばかり前に、一部指導分子の排撃のための反対派運動が、半年にわたって行われたことがあった。彼はその矢面に立った。竹造はその解決の衝に当りながら、気持の上で釈然としないものがあった。決定された解決方法の中に、彼らの不平や不満をただなだめるといったやり方のあるのが、竹造には感じられ、決定に対しては従いながら、どう努力しても、反対派の人間に対する承認出来ない感情を、組織の仕事の中で捨てきることができなかった。彼はこのときほど自分の性格や気質の弱点を容赦なく感じさせられたことはなかった。自分というものをこんなにまで知らないでいたのか驚いた。気短かな、尻の穴の小さい、相手の人間的な低級さに我慢できない、人を博く抱擁することの出来ない、その癖相手を見下ろしたりすることは出来なくて、どんな相手でも真正面から同等の気持でぶつかってゆく、一口にいえば、古臭い文学者的な狷介さが、彼らに対する鼻持ちのならなさと二重になって、身をねじるように彼を苦しめた。
ここへ来てから或る日、竹造は運動に出て初夏の青々とした空を仰いだ時、つくづく空の広さを感じ、ふと反対派運動の渦中にあった当時の自分を思い出したのである。何て小さな世界に跼蹐していたのだろう。思索を深め、視野を限りなく広めてくれるところの、精神の力強い発展の過程が、現在の自分の境遇に対する感動の高まる中にまざまざと見えるようであった。人間の性格というものが個人的には正しく解決されないものであることがはっきり分るのであった。
その時の印象がいつまでも深く残っていた。それで竹造はゆき子が人間の性格というものを一義的に考えているらしい点を批判したかった。彼は続けて書いた。
「――僕もお前も全く気が弱い。僕はねばり強いがお前は我慢強い。僕たちのよりよき進展は、常に実践の注意深い検討の上にのみ評価されねばならない。やがて再会の日、相まみゆるのとき、互いの進展の跡をはかってみることにしようではないか。」

七

就寝時間が早くて、この頃は寝てからも暫らく空がぼんやりと蚊帳をすかしてみえる位であった。巡廻の度に、カチッと電灯をつけられては眼をまぶしがらせることが何度も重って、もうよほど時間がたったと思う時分に、階上の向いあたりから竹造の房へ欠伸が聞えて来たりする。
出をぐっと大きくやって、段々をつけて声を落してゆく調子は、欠伸ででもなければ声など合法的に出せない、という考えが手にとるように分る。微熱のために足がだるくほてっておきどころがなく、顔にくっつきそうな低い蚊帳の下をごろごろしている竹造は、思わずにやりとして、あ

の調子は仲間だなと思う。丁度夕方の静まり返えった時刻に、竹造は思うさま力を入れて嚏をしたことがあった。余韻を長く引っぱって、ああ気持がよかったと思い、せいせいして雑巾がけをまた続けていると、

「今、何をしたのか。」と覗き穴から声をかけられた。

刑務協会発行の「人」という週刊新聞に、非常時とか、自力更生運動とかいう、耳新しい言葉が現われ始め、航空機献納の美挙が毎号報ぜられるようになった。竹造は社会情勢の特色を示すような写真や記事を切り抜いておくことを思い立った。中から観た社会状勢についての感想を、「人」の切抜きを材料にして、自分たちの………………、………………………………ことにした。この時ゆき子からも、竹造たちが居なくなってから後の文化運動の様子が、全体的にそれと察しられるような事柄を書いた手紙が来た。始めての事だった。

この手紙はすでに、前に一度彼がちらっと姿だけ見たものので、六銭貼ってあるのに倘不足であったため、六銭払って受取るか、それとも返却するかとわざわざその手紙を持って尋ねに来られ、その質問に彼はびっくりしたのであった。郵税が九銭もかかる程沢山書いた手紙なのに、もしも不許になったらどうしようと気を揉んだことだった。受取った時掌に重みがこたえた。無事に届いたのだ。竹造は机の前に戻りながら穴へ獲物を喰わえこんだように雀躍りした。

東京プロレタリア劇団は犠牲者の家族慰安の夕をやっていた。機関紙の六月号では巻頭言の中に、犠牲者のことを一人一人書いているという。家族慰安の夕といい、自分たちが努力してきた責任感が、大衆の中で償われている有様が眼にみえるようだ。

ゆき子はたしかに、連盟出版所から出ている「勤労婦人」の仕事をやっているらしい。連盟中央部の提唱で八月一日を目ざして………………を行っていることを報じ、「勤労婦人」は「勤労者の友」を相手にするのです、と書いている。慰安の夕のことの後には、東京劇団はなかなかえらい、と一言つけ加えている。一定の部署についているゆき子の態度がよく出ていると竹造は思った。

ゆき子の手紙の調子は、これ迄とはすっかり変っていた。竹造の膝の上でさえ、面とむかっているために却ってなかなか出せない調子が含まれていた。竹造は外の情勢についての報告から、彼女の甘えかかってくる気持だけを抜き出して心をときめかせるのであった。

ゆき子は自分からはっきり言っている。

「私は今日たいへんに元気でこの手紙を書いています。この前の二通ともくたびれて元気をなくした時、あなたへその感情をもってゆき、あの手紙を書いたのです。それで二通ともあまりいい手紙ではなかったのです。」

竹造に不満をもっているような調子が彼女の手紙にあったのは、そのためであったのかと、竹造は思いなおす気持

になった。

——ゆき子はここ二カ月、お産のために家に引つ込んでいて、子供や年寄たちとだけの陰欝な生活をしていた。仕事から離れて、赤ん坊の世話や、経済のやりくりや、女手だけの引越しや、竹造の用事など気苦労ばかり多い雑用に追われていた。同じ仕事をやっている、親しく話のできる女友だちも身近にいなかった。

しかしゆき子は今、…………ついている。竹造を元気づけるのには、元気にするような具体的な方法が必要だと思うようになった。

彼女はお産をした身体も恢復しだしていた。——

「いつも十五分の面会の短かいこと、何一つ新しい感情を動かす間もなく、あとからあとから話しつづけることに追いたてられ、あの室を出てくるとポカンとしてしまいます。これまでもしも今日のような時が来たら必ず毎日一本は端書でも書くことを考えていましたが……全く手紙を書く間がなかなかない。あなたの今日の手紙に、やがて再会日相まみゆるとき、互いの進展の跡をはかってみることにしようではないか、とのことは私を元気づけました。」

それから敏夫のことも、成長してゆく様が可愛くてたまらないように書いてあった。

赤ん坊はいたって丈夫なせいで樂な子です。夜も一二度しか起きません。私についてどこまでも行きます。私の肩は負ぶい紐で固くなり、足は丈夫になることでしょう。赤ん坊は大分重くなって来ました。雨風の日、赤ん坊を背中にくくりつけて足駄をはいて、アスファルトの上にバスを待っていると私の身体は自然に、一定の間隔をおいて、タタッタタッと後へすざります。」

「私はこの夏は洋服を着ようかと思っていますが、それでは負ぶえなくなるから困ると思い、迷っています。洋服を着るなら髪を半分位切らねばならぬから、断髪の件につき、面会を許可して貰わねばならぬと言って、この間民子さんと笑いました。一昨年の秋、あなたが病気の時、私に日本髪に結わせたが、私も刑務所への面会に、日本髪に結って行くことを考えた時代もありましたが、今は、断髪の件につき考えています。」

手紙の中のゆき子は、受け口になった唇の上に大きな歯並を白く光らせて、二人だけの親しみで樂しそうに語っている。全身の肌が生々とした光沢をもっているようである。竹造は満足した余裕のある気持になり、彼女から少し離れて話を聞いていた。

そのうちに竹造は、自分が今どういう処にいるのかを、彼女が忘れてしまって話をしているような空虚を感じ出した。全く自由のきかない生活をしている人間としての自分を、彼女が少しも考慮していないように思うのであった。

しかし竹造は返事の中に、その朝ゆき子の夢をみたことを書き、「樂しい夢はここでは生活の歓喜だ。」よろしく、と二人だけに通じる意味をもった挨拶を送った。

ゆき子は珍らしく前の手紙を書いた次の日もまた書いている。…………が無事に済むものとは考えられなかったので、竹造は前便を読んだ時、折角こんなにいい手紙を読んだ後から、彼女が…………………まりはしないかと心配しなければならないのを心惜しくさえ思っていたのであった。「今日は…………………………がある日です。私は行かなかった。」と書いてある。彼女が行かなかったことは、計画的であるらしいのが、その調子で察しられた。が、同時に竹造は、気持がホッとしたのを否むことができなかった。それだけに手紙の終りに、「今日のデモはどうなったやら、夕刊に出るでしょう。」と書いてあったので外の勢力の盛り上りに驚ろかされた。

手紙によると、ゆき子たちが引越して行った五反田は、二日前から春日神社のお祭りである。三味線や獅子舞が何人も家へ入ってくる。遠くの方で絶えず太鼓の音がしている。ラジオがカルメンを放送しはじめた。敏夫は次の部屋のラジオの前で、竹造の家に泊って竹造と一緒にずっと仕事をしていた戸川と、二人で煎餅を食べながら調子を合わせている。肥って可愛らしくなってゆくばかりの赤ん坊は子守に負ぶわれて眠っている。おばあさんは奥の間で針仕事。

まぶしく陽の輝いている庭には、竹造に差入れる単物が張板に貼ってある。あずき色の葵の花が美しく咲いている。敏夫が小さな指でさして、「チィチィこわいの」と首をかしげて尋ねる蜥蜴が、その下をちょろちょろしている。

ゆき子は玄関で籐椅子に腰かけて竹造への手紙を書いている。

「今日はいいお天気で心楽しい日です、何となく。それで昨日長い手紙を書いたばかりだが、今日も書きたくなり、しかし明日の朝までに書かねばならぬ原稿があるからと一応思ってみたりしたがやはり書きたいから書きます。今朝がた見た夢のつづきで、起きてからずっと私の心はあなたと共にいます。おとといもあなたの夢をみました。いつも夢ばかりみている私の夜はあなたといることが多い。おとといの夢は私とあなたと二人で、どこかの喫茶店でトーストを食べていた。そして私があのことについて話すと、あなたが何か拗ねていた。大変楽しい夢だったのです。起きたら十日附のあなたの手紙が来ました。」

「私はこの頃になって、忘れていたあのことを思い出す。そしてハッと驚きます。私に楽しみが一つ残っていたことを思って嬉しくなります。」

竹造は自分の空想を一層現実的にするために、眼を瞑って、机の上に輪にした両腕の間に顔を伏せた。足の裏がほてってくるのを感じながら、長い間そうしていた。

七月に入ってサークルからの通信が来始めた。しかしその多くは不許の通知だけに接したのであった。竹造は、居

ながらにしてこの箱の中の自分が工場農村の中から注目されているると感じて嬉しかった。
ゆき子もまた面会の時、家の方へもとてもたくさん来ていると話していた。

八

竹造は本を読まないで、自分の右の手を前に出してじっとみていた。薬指だけが発育しないで、一本きり小さく萎びたまま残っている様を頭に描いた。彼は薬指を掌の中に折り曲げて拇指で押え、手の甲の方から眺めて指の三本きり並んだ不気味さを試したりした。竹造は自分に責任があると思った。

面会から戻って来たところだった。敏夫の指の腫れがいよいよカリエスと決まり、レントゲン療法をやっても発育が止まるかも知れないというのであった。

房の中は風通しどころか、空気の流動すらないので、気持を静かに持ってたえず団扇を使っていても、その風の下から、汗が手や足の甲にまで粒になって出る位だ。団扇を使うのも忘れている竹造の額からは、汗が流れるように出ていた。

軽い熱のあった敏夫は、ゆき子が竹造と話している間中ずっと、腰をかけている彼女の膝の上に、立ったまま頭をのせてうつ伏せになっていた。ズボン吊りをかけたパンツの腰が伸び上がるように片足を真っすぐに立て、他の足を軽く踏み、小さな身体で一生懸命のようである。まだ産毛の名残りのある柔かな髪の毛が、伸びてほほけ立ち、ぼんの窪あたりに汗さえかいていないのが、眼のせいか一層ひ弱にみえる。

時々、突っぱった足がガクッとしては立ちなおる。眠りに落ちるらしい。――

自分を安心させるために、ゆき子が暑いところをわざわざ連れてきてくれたのが、竹造は敏夫に気の毒でならなかった。

竹造の耳はここへ来てから時々、壁の中にひとり坐っていて、敏夫が梯子段を上ってくる音を聞くのであった。

たまに竹造が、昼間机に向っていると、身体いっぱいに力を入れ、手と足を使って、むきになって匐い上ってくる息みがかすかに聞えてくる。のぼりきると、危険を冒して大きな手柄をたてたように嬉しそうな声を上げて、緊張から解放された威勢のよさで廊下を走ってきて竹造の部屋にかけこみ、よたよたと部屋中を飛び廻わる。窓の縁にのぼろうとする。机の上にあがって、筆皿や原稿用紙を片っ端から下へ払い落す。竹造はじきに、少しいらいらした大声でゆき子や子守を呼んで階下へ連れてゆかせた。

当時の生活を離れたところから考えてみるのに、いつも危険にさらされている緊張した生活の中にあって、階級人としての自分がそこまで成長していないために、危険や緊

張に克って、敏夫を十分にゆったりと愛するだけの力と余裕をもち得なかったのにちがいないと思うのであった。

赤ん坊のことは自分がいなくなってから生れたせいか、不思議なほど関心をもたなかった。が敏夫のことは、ここの生活が始ってからしばしば頭に浮ぶようになっていた。

——竹造が居なくなってからのことであった。

ゆき子が赤ん坊を連れて出かけた留守の時、敏夫は竹造の妹が針仕事をしている傍で、ひとり寝転がって

「トウチャン電車のって行っちゃったアーンアーン。」

「カアサンとアカチャンと電車のって行っちゃったアーンアーン。」

そう言って泣き真似をして遊んでいた。

竹造はゆき子の手紙でそれを読み、幼い世界にも、親たちの生活は力強く作用しているのだ、親として子供に対しても、階級的に恥ずかしい真似など出来ないと思う傍ら、親たちにいつもどんなことがあっても、後のことを安心できるように、子供は身体の丈夫な、しっかりした人間に育てたいと願うのであった。

半月くらいたった或る日、面会に呼び出され、竹造が腰かけて一寸待っていると、ゆき子ではなく、妹が入って来た。ハッと思ったが、瞬間、ゆき子はすぐ後から続いて来るのかと思った。しかし妹が腰かけてもゆき子は入ってこない。竹造は妹の顔つきを見守りながら、

「ゆき子は？」と訊ねた。自信のない弱く低い声だった。

「病気なの。面疔だって。」

竹造はフーンと息を抜くと詰問するように云った。「どうして？」

彼は房に戻ってから、一体どうしたんだろうと、再び舌打ちするように考えた。

おおいかかろうとする重なる不幸の負担を感ぜざるを得なくて、厭なことは起ってもらいたくないという欲望が自分の生活の中にあるのを意識する時、竹造は寧ろいらいらさせられ、ゆき子のそんな外科的な病気に対して落後を非難したい気持になるのであった。そしてゆき子に対して持っている些細な不満も、無意識のうちに現われてくる。二カ月も取り更えない寝巻のじっとりした肌ざわりや、まだ作って来ない運動用の襦袢のことが思いだされ、彼はそのことを手紙にかいた。

暑さが急にひどくなってから竹造は、一度中止していた薬をまた取り始めた。冷水摩擦でこすりとってしまった積りの咽喉の痛みが再発していて、それがひどくなってきた。声のかすれたのがなかなかなおらない。看守と口をきく時、しゃべった声が出ていないのに気づいて慌てて言い直すことがあった。喉頭結核になるのではないかと神経に病んだ。痰がひどくなるばかりで、飯を食べていると咽喉の筋肉の運動につれてひっきりなしに奥の方から痰がせり出してくる。嚙んでる物と一緒に何度も吐き出さなければならない。まるっきり食欲のないのは、虫歯の痛みがひど

くなったことや、暑さのためのみではないように思えた。

　ゆき子も病気で、竹造は自分の重い気持のよりどころがなく、中ぶらりんであった。箱の中には熱気が立ちこめているにもかかわらず、頭の中が冷えていて、身のまわりが索莫としていた。

　竹造は医者に診てもらった。その後から妹が面会に来た。竹造が一足々々草履をひきずって戻ってくると、扉を閉めに来た看守が、彼の後ろから、

「病舎へ行くんだからすぐ支度をするように。」

　ただそれだけ言って、支度を急がすように錠をかけないで立ち去った。――ゆき子にも会わない、手紙も来ない。竹造は誰にも見守られないで知らない所へ行くような思いであった。

九

　病舎は普通の建物と同じように窓が低くて、涼しい風がよく入った。本の頁が押えていないとひとりでにぱらぱらとめくられた。窓近く、かすかに松風の音が起っては消えてゆく。本に読み耽っていると、竹造はふとその音に呼びさまされる。思わず、ああ自分はここにいるんだな、と考えて本を読むことを止めるのであった。松風の音は、高くなっては近々と、低くなっては遠く遠く、ひそかに囁くように鳴る。子供の頃、生れた家のひっそりとした昼過ぎに、その音を聞いていつか立っていた庭の縁光。遊び帰りにその音を聞いて一人しみじみと夏の寂しさに襲われた村の山道。自分に思い出したことも、誰にも語ったこともない古い記憶そのままの、松風の音であった。

　独房の三四倍はある大きな病室は、壁が真っ白で、南向きの窓から入る光がぱあっと満ちていた。北側の廊下に面したドアは、半分から上が白い華奢な鉄格子になっていて、ガラスの扉が外側についている。下半分も外から開け閉ての出来る鉄格子になっている。陰険な眼のような覗き穴もない。ベッドがあり、衝立のかげになった片隅に洗掃便所があり、他方の隅には栓をひねって自分で自由に水の使える西洋風の流しがある。

　竹造は自由に歩けるだけの広さのある板の間を歩いてみる。窓は鉄格子がはまってはいるが、縁が低いのでかなり眺めが上下左右にきく。窓に立って公然と、いつまでも外をみていることが出来る。ここは松や山茶花や檜が、普通の庭のように、丈が高く、しかも窓の近くまで植わっていて、その木蔭に雀が降りて来て啼きながら餌をあさっている地面から、頂きの空まで親しく見ることが出来た。

　竹造は瞬間的に、外の生活と同じ欲求の自由を意識した。そして、さて、話相手もなく、外へ出てゆくことも叶わない手持無沙汰になるのであった。

　起床も就寝も命令なしであった。朝のラジオ体操がないので、それまでに部屋を掃除し、顔を洗い、冷水摩擦をや

るために、あわてる必要もなかった。
朝早く竹造は窓のところに立って、水を打ったようにしっとりとした朝の外気を呼吸していた。窓の左手の、まだ陽の色もみえない東寄りの空に、白くうっすりと棚びいている一沫の雲をみていると、空はその雲の彼方に限りなく遠く感じられ、深く澄みきった一点に、肌寒い秋の冷厳を啓示しているかのようであった。そこからはまだ秋風は吹いて来ない。

庭を隔てた病舎の、真向いにあたる房には、今朝もまだ電灯がついている。竹造は自分が病人らしくみえるのを憚りながら、一人でラジオ体操をやった。

庭に陽がカンカンあたり出して、露が乾ききった頃になると、二人の「看護」が、どこからか、ベッドの藁蒲団を庭に持ち出して来て、竹造の房の窓の丁度前あたりにおく、一人は頭のテカテカに禿げた、面高(おもだか)で色白のこぎれいな男で、も一人は額の禿げ上った、小皺が多くて色の浅黒い四角な顔の実直そうな男で、長い柄(え)のついた床掃除用のブラシをバケツの水につけては、二人とも同じ小柄の身体を逃げ出しそうな恰好に構えて、その藁蒲団を掃除するのであった。竹造は鼻をひくひくさせてみたが何も臭ってこなかった。看護たちはこの暑いのに顔半分も蔽うほどの大きな白いマスクをかけていて、それが青い囚人服から際(きわ)立ってみえた。

土の上に流れ出た水が乾いてしまう頃には、その蒲団は運び去られている。もう干してあった跡さえなくなっていて、庭いちめん、干割れそうに白く乾いた土の上に陽の光が眩しく輝いているだけであった。

看護の話によると、その蒲団は、主として重病人たちが収容されている向いの病舎の、一番左の房にいる既決囚の肺病患者のものであった。

「もう垂れ流し、し流しなんですよ。」と看護は言った。
「やってやらないの？」
「だって夜中には仕様がない。」

早い夕飯が済んで間もない頃には、向いの屋根に二羽の鳩が来た。場所が丁度その肺患者の房の上あたりに定(き)まっている。一日どこかで遊んだ後をそこへやって来るのらしい。二羽並んで静かに立っていた。毛色の黒っぽい少し大きい方が雄で、灰色がかったのが雌であった。

二羽とも決してこちらを向いて止まっていることはなかった。竹造にはみえない、街の方を遠くみていた。夕凪の時刻で、窓に立っている竹造の顔には風が当らない。が、屋根にいる鳩の胸毛は時々そよいだ。

かたみに身を寄せているその優しい撫で肩の姿は、見えないところで陰欝にごろんごろんと鳴いている声や、空の地図を知りつくしたあの俊敏な飛翔を思い出させた。

屋根の上の鳩は、そのうちに、互の嘴を軽くちょんちょんと擦り合わせ、それを二三度やった。みている自分の唇がおのずからすぼまってゆくように愛情深くみえた。それ

から黒っぽい方が灰色がかった方の上にひょいと乗って、ちょいと尾を下げるとすぐ降りた。すると灰色がかった方はぶるっと総身をふるわせて、もう軒の方を向いて立っている黒っぽい方の傍らにひたりと寄って身体を小さくかがめた。

しばらくすると、二羽の鳩はつれ立って竹造の病舎の屋根を越えてどこかへ飛んでゆく。竹造は一人とり残されたようにベッドに帰って机に向った。真向いの房では、いつしかベッドの上に蚊帳を吊って寝ている。

竹造は毎日鳩の来るのを待った。或る時、雌だけが来ていつ迄たっても雄が来ないことがあった。だんだん夕闇が迫ってきてもまだ雄は帰って来ない。雌もそこを去らないでいる。竹造は気持が沈んで行った。雌はもう殆んど暗くなってから一羽きりで帰って行った。

竹造が病舎へ来てから四五日目の夕方であった。羽織袴の医務長と、まだ白い上っぱりを着ている宿直らしい医者が、こちらの病舎から向いの病舎へ通じる廊下を大急ぎで渡って左へ曲って行くのが見えた。竹造は時刻はずれにみた医者たちの姿にただならぬものを感じた。

次の日は、庭に陽がカンカンあたってきても、いつもの藁蒲団は干されなかった。変ったことが起りはしないかという慌しい気を起させた。竹造は落ちつけないで自然と度々窓に立った。

昼過ぎになって窓に立っていた時、庭のずっと左端の、高いコンクリートの塀の下を、赤い囚人服の二人の男が行くのをちらっとみた。横に細長い、灰色のペンキ塗りらしい箱を前後から提げていた。竹造は鉄格子に頬をぴったりとくっつけて、わずかに右の眼でその後を追った。それは竹造の病舎と同じ並びの建物の陰に入って行った。竹造は後からついて行く一人の看守がみえなくなってからも、通ったあとの塀の下をみていた。

病舎はいつもと同じで、変った空気は感じられなかった。竹造は何か考えようとしたが、自分の頭がしんと固くなっていることを知った。彼はしばらく本を読まないでうろうろしていた。そして自分のことでなくてよかったことに気づいた。

後になってもその時のことが思い出され、病舎全体に葬式の済んだ後のような空虚が残っているのを感じた。竹造にはその空虚が自分の生活の中にあるように思われた。

竹造は独房にいた時、自分の頭が時々、瞬間的に空虚になることがあった。頭の中を何かがスッとかすめさるようだ。竹造は打たれたように不審の眼を上げる。そして自分が余り緊張しているためだと考えて安心するのだった。病舎へ来てからはこんな経験はしなかった。箱のようなあの独房の中で、圧迫的な壁といつも力一杯に押しあっている緊張が薄らいでいた。一途な主観の烈しさから自由になった、日常的な余裕があった。

八月半ばになってからは風のよく入る日など、シャツ一

枚では凉しすぎる位である。しかし、竹造はどんなに凉しい風が吹いても仕方がないという気がしてくる。夕方は、いかにも夏の暑い一日が終った後らしく、空が蒼く澄みわたって星が一つ二つきらめきだす。地上には和やかな夕闇が次第に濃くなってゆく。外にいた時と同じように窓にたってそういう夕方を過すことは出来ても、しまいにはそれが虚偽のように思われて来た。

日がたつにつれて竹造は、白昼の明るい光の中にもひそんでいる空虚を感じるようになった。

妹はあれきり来なかった。ゆき子からの手紙はもう一カ月も見ない。

夕食弁当や、牛乳、卵の差入れ予約は、すでにきれていた。差入れの金は期限がとうに過ぎていた。

竹造は今こそ、自分が誰からも援助されていないという意味で、たった一人きりで生活していると思った。竹造は未決へ廻った当時、病気が悪化して病舎にでも入ったらゆき子はどんなに心配して面倒をみてくれるだろうと空想したものだった。しかし今の状態に関してはゆき子に対して不満が起って来なかった。手元にまだ金があるということが、竹造に余裕を与えていることも事実であった。

ここへ来た当時、ゆき子が約束の日に来なくて、それまでに想像したことさえなかった心配をした時の経験から、それ以来、竹造はゆき子が居なくなってもすぐには自分の生活にさし支えないように、差入れてもらった金の中から計画的にできるだけ使い残しておいて「貯金」していた。それが五円以上になっている。

ゆき子の消息がわからなくても、竹造は安心していた。病気のためにゆき子が捕まる気づかいのないことを承知しているからではないか、と自分の心理を探ってみることもあった。

だがそういうこととはまた別に、たしかに竹造は気持の上でゆき子から離れて立っている自分を感じていた。もうせきつく気持にはならなかった。手紙のことなど、どうでもいいではないか、という多少な反撥的な、なげやりな考え方をしてみるのが彼の気に入るのであった。竹造は手紙の来ないその日数が増えてゆくのを楽しむように、何度も勘定する。

こうして竹造は、ゆき子からの音沙汰がなければないほど、自分一人の生活の独立性を気強く思うのであった。

ゆき子と一緒に仕事をしている、彼女の女友達の中田から長い手紙が届いた。

「あなたがおゆきさんの健康について、いつもあのように心配していられるのに、この病気の報告はさぞ心痛の種となるでしょう。しかし、安心して居てよいと思います。悪くなればどんなにでもします。われらの大切な愛するものを一人たりとも手を束ねて犬死させることはしないのです。時にわたし達二人はこの度の経験によって実に固く結ばれています。」と、中田は言っている。

妻として許りでなく、一人の同志としての、ゆき子の前に竹造を立たせる言葉であった。そこには、ゆき子の病気について真剣な態度があった。その真剣さには、竹造をして、自分が到底外の運動の実際を、それに携わっている人たちと同じように、実感的に意識することが無能力になりつつあるのではないかと考えさせるものがあった。

彼はゆき子の病気を夫婦関係からだけ考えていたことに思い当った。しかしそう思いながらも、気持の上でゆき子から離れて立っている今の竹造は、中田と比較したゆき子に慊らなく、中田の性格に強く牽かれるのであった。

「わたしたちは出来るかぎりの外からの風をひろく、たっぷりそちらへ吹き送ります。」と中田は言っているのである。

竹造はすぐ、ゆき子が何か聞きたいことがあったら聞いてくれと言った言葉を思い出した。

中田の手紙で、竹造は敏夫が健康な子供と同じように元気になっていることをも知ることが出来た。

葡萄棚から、青葡萄の房が下っている。敏坊が日向にへソを出して、大人の女下駄をはき、棒をもってしきりに上を眺めている。中田は「閑静な光景でした」と書き、「尤もおゆきさんが、湿布と冷やしとの繃帯で、床の中から上目でそっちをみてはいたが」と続けていた。竹造はゆき子への手紙に、ゆき子と比較させた中田の言葉を書き、長い間消息が絶えていたことをただ次のように書いた。

「――僕は六月十九日付の手紙を受けとったのが、お前からの手紙の最後であることを思い出した。しかし、最近はずっと病気だったね。僕はお前に対する信頼の念をもって、お前が僕のために『出来るだけ』の事はしてくれるであろうことを確信している。病気の具合はその後どうか。もう心配の期間もすぎた頃と思う。」

竹造は本を読む時刻が独房にいた時よりも少なくなっていた。それだけよりどころなくぶらぶらしている時間があった。どこか自分の生活に緊まりのないことを感じた。朝の体操のラジオも聞えて来ない。運動にも出ない。そういう病人らしい生活でなく、思う存分に生活したかった。病舎から独房の生活をふり返えってみると、自分はその積りでもなかったのに、いつもよくよした、手も足も出ない生活をしていたように思われる。張り切ってぐっと自由に身体を伸ばすのではなく、反対に神経質に縮こまった、虫のような自分の姿――。しかし竹造は今、あの、壁と押し合っているような張りのある生活がしたかった。今こそ房の中の生活を自由に支配してのびのびと生活が出来る。そこで新規まきなおしの生活をやってみたいと思った。

運動場の花壇には、白や赤のお女郎花が茎をしなわせて幾株も咲きさかっていた。ダリヤや、真紅のカンナや、茎の先に朱色の釣鐘形の小さな花を稲穂のようにつけた、名も知らぬ花が咲いていた。コスモスはもう二尺位になり、日除けの屋根に匂わせたへちまも花が咲きはじめていた。

もう桔梗さえ咲いていた。
そこではみんながてんでに、外に向って煉瓦の壁にたった一つの窓を持ち、それが余りに小さいために、一人ずつ住んでいるとは思えないのに、そこに仲間がみんな生活している。二年でも三年でもそこに入ったままでいる。建物の中に入ってみると、十文字になったコンクリートの広い廊下、階上の両側に棚のように造りつけた廊下、その両側の固く閉ざされた扉の上の黒い錠がずらりと廊下の果まで一直線に並んで対い合っている各房。その中に一人坐って仲間のことを思えば、自分の前後に向い合っている鏡をみるように、コンクリートの厚い壁に隔てられた各房の内部が、鏡面に層々として遠くまで透けて重なってみえる。外に出る時は一々…………………ても、廊下を歩きながら左右の各房に対して働く……………、朝のラジオ体操や給排水や三度の配食の時の舎内全体の一致した行動から起る賑やかな音、夜寝てから聞えて来る静かな欠伸や咳にも注意を牽かれる……………。──
竹造はそこへ戻って行き、健康な仲間たちと一緒に生活したかった。そして病舎の方が比較にならぬほど健康によいことが分っていながら、病舎を出される日を待ちのぞんでいた。

十

竹造は十九日目に元の舎房へ戻った。
「重病人ができたから君は出ることにしてくれ。」
医者が突然来て、扉も開けないで外からそれだけ言ってさっさと行ってしまった。重病人は仲間かしら、この暑さにとうとうやられたのにちがいない。自分はちょうど避暑をしたようなものだ、竹造はそう思った。
竹造の身体は元のままだった。しかし独房に来ても、もう身体が楽だった。心ゆくまで味わうように落ちついて本を読んだ。
くたびれると石鹸で手を洗った。今後いつ終るかわからない長い過程をゆっくりと歩いてゆく気持だった。六七年前の文学青年時代に、文学の上で行き詰ってしまい、心境的な情緒の世界が、青年の文学的欲望を少しも起さなくなり、新らたに眼をむけた人道主義的精神が余りに空漠としていた。結婚後一年して知った生活の荒々しさの中に、そのことが無意味な自分の姿を曝け出した。身近には到底芸術としては信ずることの出来ない新興階級の文学運動が起っていた。竹造はまず生々しい生活の中に入って行きたいと考えた。そして浅草の下層社会に入ることを思いたち、職を求めて桂庵の暖簾を出入りした。或る日夜おそく、車坂の暗い停留所に立っていた時、彼の親しい友達は優しく

言った。

「疲れた時に物を考えるのはつまらないよ。——石鹼で手を洗うととても気持がよくて疲れがなおるね。」

竹造は、東京人らしく怜悧で人に優しい友達が懐かしかった。その言葉が今も竹造を慰めていた。

まだドイツ語の勉強が少しも手についていなかった。しかし他のプランを捨ててその方にかかりきることは、自分の毎日の生活を思想や感情の上で浅くする。講座が入ったら、復習の意味で、その方は飯を食いながら読むことにする。ドイツ語の本当の勉強は、……競争の形式でやることにした。十一月七日までにはまだ二ヵ月ある。外でやられるのと並行してやるように、始める期日を定めることにした。

昼なかはまだ、むし暑くはなかったが可なり暑かった。毎日用便を済ました後必ず糞蠅が窓から入りこんで来る。少し油臭いに敏感なのに笑い出しながら竹造は見ている。団扇をもって立ち上ると、すぐ便器のあるところに近づく。彼は自分たちが居なくなった頃、襲って来て追い廻わす。彼は自分たちが居なくなった頃、襲って来た手から脱れたMのことを思い出すのであった。二人はきた手から脱れたMのことを思い出すのであった。二人はMの家の二階で徹夜して一緒に机を並べて原稿を書いた。夜中に鼠がちょろちょろ出て来た。二人はてんでに箒とはたきを持って本立や積み重ねた本のかげから追い出しては叩く。畳の上に大きな音を立てながら仕事はそっちのけになっていた。

竹造は房の入口に立って、蠅がとうとう出口をみつけて窓から出て行った空をみていたが、その眼を房の中にうつし、自分がこうして平気で房の中をみていられるようになったことに気づいた。

竹造の今度の房は二階で北東に向き、入口が南西に当っていた。二百十日の前ぶれのような風が吹き出した。ドワドワと音をたてて廊下に吹きこんだ。入口の横の、外が覗けないように壁の中で一段曲っているポストほどの風穴からもどんどん吹きこんで来て、竹造の身体にあたった。涼しくもなく、暑くもない、季節の荒々しい進行を孕んだ生ぬるい重い風だった。外に出ると陽がさしていながら、空はむらに白い雲がいっぱいだった。花壇には季節の変り目で夏の花も終っていて、へちまの葉っぱがもうかさかさと乾いた音をたてていた。

竹造は西式強健術を始め、湯に入ったように汗を流した。力仕事をしないために身体から力のぬけてゆくことや、心臓の弱くなることを防ぐために、入口の横に、柱のように出ている煉瓦の角と、相撲の練習のように身体一杯に力を入れて押しっこをやりだした。

独房へ戻ってきた翌々日、久しぶりでゆき子が面会に来た。二人はまず病気の事をききあった。

話は湧き出るようには進まなかった。面疔をやった痕は、大きな机を隔ててはみえなかった。そしてその顔には、人前に出た時のお愛想の表情が消えていた。

「お弁当を切らしてしまって――」下唇を斜に引き下げて一寸笑顔をつくり、後は悶えたように切った。
「お金持って来た？」
「いいえ。」
「どうしても都合出来ないんなら、差入屋に頼んで、弁当を差入れてもらったらどう？」
ゆき子は賛成とも反対ともつかない顔つきで背をかがめて黙っていた。竹造の顔をまともにみながら眼をみていなかった。竹造も返事を促さなかった。
「やっぱり作品を書かなきゃだめね、経済のためにも。」
「だって。」
面会室を出て行く時のゆき子の後ろ姿は、その「だって」の気持が歩きつきに出ていることがわかるようだった。彼女は後ろ姿を振り向かないですぐ出口から左へ曲って消えた。
まるで差入れの出来ないことを断りにだけ来たようなものだ。竹造はずっと差入れのなかった事実の背後に感じられたゆき子の気持を確めたように思った。
面会した後の竹造の気持はどことなく白けていた。いつもの甘い味は少しも無かった。ゆき子と接触するうちに個人的な我儘な欲望が起ってきて、自分の中に階級的に言ってよくない感情を人知れず抱いているのを感じた。彼女に対しても気まずくなるのであった。彼は、さて、と朗かな気持でもってそれらの感情を洗い流すように自分に元気をつけた。
ゆき子は竹造が居なくなってから、まだ作品を一つも書いていない。どんな事情があっても作品を書かないことは正しくないと竹造は信じていた。組織や機関の仕事のために作品を書かないでいるのは、そういう仕事にたずさわりながらも作品を書こうと努力するところにも、自分たちの運動の異常な困難さがあることを知らない人間だと考えていた。その上に彼は、自分の仕事のやり方をまちがっていたとは思わなかったが、いつか忙しさにひきずられて原稿を書く努力を少ししかしなかったことに痛いような後悔を感じて憧憬れていた。そしてその後悔と憧憬の念をゆき子において満たそうとしていた。彼はこれまで幾度か作品を書くことを手紙で注意していたのであった。
ゆき子の場合、作品を書けば経済の助けにもなる。竹造は自分の勧めが、自分の差入れに対する不満の表示になることを虞れた。しかし現在のゆき子の態度に対して決して虚心ではいられない時に当り、作品のことは言いだすまいと思っていた。それを会った時言いだしただけで、もう喧嘩をした後のような情ない気持になった。ゆき子もそう感じはしなかったか。後を追っかけるように面会した翌々日の手紙に実は言うつもりでなかったことを書いた。
「――ともかく、僕としてはお前の仕事にここからとやかくいう資格はないと思っている。これまでのように傍で口出しする僕が現在お前と共にいないということは、お前の

仕事において、お前を一層力づけるであろう。」
――ここには外からの世話の全然ない、いわば天涯孤独の仲間が沢山いるにちがいない。彼らは一緒に仕事をしていた人たち以外には、誰にもその存在を知られないで黙々として工場街を歩き廻わり、誰にも知られないで着のみ着のままでここへ来て、いつも青い囚人服を着、夜は青い夜具にねる。ここの食事以外には食べるものもない。通信費さえない。本は官本以外に読めない。坐っている傍らには所持品もない。救援会からの差入れが唯一である。竹造は今自身にそういう境遇を当てはめて考えることができた。自分から頼んだ弁当まで、早く来なくなればよいとさえ思うのであった。

二ヵ月目毎の拘留更新の決定書が来た。生々とした気持になって、竹造はそのわかりきった文章を読んでみた。こうして何年か送らねばならないことを思うと、これから先の年月が長ければ長いほど、自分の現在の気持が満たされるような気がした。彼はゆき子への手紙の終りに杜甫の詩を書いた。――崢嶸たり赤雲の西、日脚平地に下る。柴門鳥雀噪ぎ、帰客千里より至る。妻孥我が在ることを怪み、驚き定まりて還って涙を拭う。世乱れて飄蕩に遭い、生きて還ること偶然に遂ぐ。隣人牆頭に満ち、感歎して亦た歔欷す。夜闌にして更に燭を秉り、相対して夢寝の如し。――竹造はこの詩を読む毎に、いつも最後の句をくり返えすのであった。

蟋蟀が毎夜よく鳴いた。竹造の房の、窓の高さあたりの空中で鳴いているように聞えて来る。竹造は夜中に一度必ず小便に起きた。寝心地よくて、眼を開いても醒めきらない。うとうとしながら、木製のおまるに腰をおろしてしまっていると、真夜中になってザッザッと急調子になった蟋蟀の鳴く音に耳を傾けているのが毎夜のこの上ない楽しみであった。身体がとろけてゆくようだ。小便が溜った便器を提げるのも重い。便器入れの穴の蓋が下の溝になかなかうまく入らないのもそこそこにして床に匐い込み、いつ眠ったか分らない。

一度は、板の間に踏んばっている足の裏が冷たくなって、始めて便器の蓋をとっていなかったことに気づいた。暗がりを手探りで、両手を小便でびしょびしょに濡らしながら雑巾に吸いとらせては絞り捨てるのであった。蒲団のはみ出ている畳の下まで流れ込んでいた。

ある夜はこんな夢をみた。ゆき子と中田が大きな部屋の縁側近くに二つの頭をこちらに向けて並んで寝ている。二人は急ぎの……………のために徹夜したのであった。中田が寝過して、時間におくれたのか寝不足の眼をびっくりさせてとび起きた。はね上った掛蒲団の下から、継ぎ合わせて並べた坐蒲団の幾つかがずれてみえた。醒めてからも竹造は、いつまでも、坐蒲団を敷布団代わりにして寝ていたことが、外の生活の緊張そのものとして竹造の心に強く残った。

掛蒲団一枚では肌寒い位になった。竹造は寝ながら、今からセーターを作る準備をしなければならないと思った。ゆき子にそれを望むことは過重であった。彼の頭には二人の女が浮んでいた。自分の頼みを聞き入れてくれるとすればゆき子の負担を軽くなるわけである。そういう仕事によって、自分たちの生活と思想に近づくようになれば一層い い。ゆき子に一度は相談してみようと思った。二人のうちどちらに頼むかをきめなければならなかった。

——わたしは長い結婚生活の中で、精神と肉体とを区別して感じとる芸当を会得しました。わたしは毎日相手の男にわたしの身体をあてがいましたが、わたしは胸のあたりをさし上げて反りかえっていた。わたしはそれを機械的にちゃんとやってのけていた。そして夢現のけじめもなくあなたにお会いする日を念じておりました。この山陰の果の、暗い船宿の格子戸のかげに、来る日も来る日も重たい日本髪の頭をさしうつむけて涙を指先でおさえつけていた。わたしは考えました。自分はいま無実の罪でここに捕えられている一人の少女であるという風に、無実の罪はやがて疑晴れて日向へ出る時が必ず来るのだという風に。そして私は春の大阪の街中に消えて行ったあなたにお目にかかれるのだ。私はそんな子供らしい考えを持ちつづけてじっとしていた。——一人の女はそういう手紙をくれた。

も一人は彼が中学を出て、上級の学生生活に入った時、後になって、始めて手紙をくれた。彼女は彼が下宿の玄関を荷物を持って出て行く時、玄関横の暗い部屋にひとり人目を憚って、口の中で、「御入学をお祝いします」と呟いた。

彼女は十七であった。

二人の女は竹造の空想の世界では、今も差し出す腕に寄りかかろうとしている。肌をふれあったこともない二人の女との恋を、ここを出たら完結させたいというような思いに駆られながら竹造は疲れて眠った。

八月末になってゆき子から二ヵ月振りで手紙が届いた。

——

戸川がこの春以来、三度目の不自由な生活から昨夜おそく帰って来た。竹造の弟は、重なる詐欺罪で食った一ヵ年の刑を終えてゆき子の家へ帰って来てからもう一ヵ月もいる。ゆき子は義弟のことについては一言もふれていない。ただこの二人が今玄関に寝ていると書いてあった。別のところでは、「私の家は全く今のところ、三度食べているこども、この大勢の家族でどうして食べているか不思議なほどです。」と言っている。玄関の情景とこの言葉とは、竹造にゆき子の家の中を見透すようにみせた。他にまだ、職のみつからない竹造の妹がいる。ゆき子の祖母がいる。子供が二人に子守もいる。八人の家族だ。竹造を加えれば九人である。それをゆき子が一人で支えている。

外のゆき子の生活にかけかまいなく昂まっていた竹造のヒロイックな気持ちは叩きのめされた。

ゆき子は機関紙と新聞の編集長の名前を漸く知らせては来たが住所が書いてなかった。

「土井は刑務所の中から新聞の通信員になることを申し出ました。」それを読んで竹造は彼に向って微笑を催した。が、その後に、「何と愉快なことでしょう。このような愉快なことがなければ我々はやってゆけない。私たちの生活のひどさはこの愉快さによって支えられている。中田の何と元気であることか。」自分が通信を書くために、二人の編集長について問合わせたことを、一体彼女は何と思っているのか。彼女はまるで自分をそっちのけにして一人で好い気持になっているようだ。

「あなたはさらしの襦袢のことを少しおこってよこした。」

自分はおこりはしなかった。ただ気を悪くしていると言っただけだ。それにしても、その後につづけて、三度食べていることも不思議なほどだとまで言わなくてもよいではないか。――

これが二カ月ぶりで受けとった手紙である。竹造は、こんな気まずいものなら貰わない方がましだと思った。竹造は素直にこの家族の中にあって階級的な生活をたたかっているゆき子の現実の中に入ってゆくことは出来なかった。竹造は眼をそむけた。

十一

四五日おいて、四百字詰原稿用紙六枚に、字数がその三倍もある程書きこんだ手紙が来た。竹造が丁度昼飯を始めていると扉の下の格子をあけて入れて行った。板の間に重そうな音がしたので飛び上がる思いで拾った。

「八月十五日付のあなたの手紙今朝私の手に入りました。中田さんからの手紙についてあなたは私が手紙を書かぬことに触れていました。私は全く非常に数少くしか手紙を書いていない。私はその点では、つまり、外の風を吹き送る努力の過少について責任を感じています。同志として、妻として、このようなことは如何なる理由もなりたたないと思っています。私たちの今もっている自由の限度では通信によってお互いに元気づけ合うことは全く最大の我々の手段でなければならないのです。殊にあなたの手紙は、それが妻としての私にあてられる手紙であるとはいえ、……………のあなたの居なくなったあとのプロレタリア文化運動への関心の幾分の過少が認められないだろうかという私の懸念の起る毎に自分自身を責めていました。」読むにつれて覚えず竹造は飯を口に放りこんで烈しく噛んだ。彼の眼は繁くまたたきした。反駁するために落ちついて坐っていられなかった。

それなら、何故、もっと早くそのことを言わなかったのか。第一他の人たちに書いた手紙の内容を知っているのか。外の様子などはきかなくっても想像はつく。大体、指導者ぶってそんなことがきかれるか。お前についてはわざ

と運動のことにふれまいとする気持が分らないのか。――
「そして私はこの自分の責任について最も効果的にやらねばならないという自覚の前に、あなたの手紙に対する不満が、いつか私の手紙の、『何でも外のことを聞いてくれ』というような、しだらない消極的なものとなって現われたのでした。私は自分を笑っています。」
やっぱり彼女は自身の態度に気がついたのだ。――彼はかえって自分が恥ずかしくなってゆく。が、――よくもそんな薄情ないい方をしてこれまで平気でいられたものだ。
――
「そしてまた私の未だこれまでの『妻』という気持が、外でのはりきった生活からあなたへ向き変える時、甘えた、幾分辛さを訴える無意識的な感情となって現われてさえいたのです。しかしあなたは私のこの気持を察することは出来なかったし、今のあなたの生活ではそれは無理だったでしょう。もちろん私の妻としてのあなたに対する甘えた感情というものも、私の仕事についてあなたの指導以外のものを要求しているものではありません。私の現在の生活がそれ以外にないからです。」
おれには、いやここにいる仲間には、外の運動を指導する資格などは絶対にないのだ。――
「私の面疔についてもあなたはただ私の不仕末の故ではないかと書いてよこした。私があなたとのキソク的な生活から、私一人の不キソクな生活に入り、そしてそのことはまた私たちの文化運動のいわゆる「非常時」を現出していることについて、それが何によってなされているかということについてあなたは考え、私の苦しい中に面疔にまでなったことに対して、そこからまた新らたな励ましを私に与えて欲しかったのです。」竹造にはもう、二人のキソク的な生活とか、ゆき子一人の不キソクな生活とかが、何を意味するか分らなかった。
……………………、……………………
……………………。……………………。
――
「批判はどんなに厳しくされていても、それが的確にされている時は、非常に元気づけられます。」と言って、ゆき子は連盟機関紙八月号に載った、日和見主義に対する批判の一文を例にとり、「一応承認しながらもどこか読む者に不満を与えるものだったことを思い出します。それは注意されねばならないことですね。私のこのあなたへの批判、希望も、そういうものにならないように。(呵々)」
呵々？ 外の気分が変に歪められて出ているのではないか。少し生意気なのだ。――
ゆき子は日和見主義的傾向として、この困難な時期に現われた小ブルジョア性に根ざす種々な現われについて述べている。
「あなたがいろいろの人から差入れを受けた話は私をどんなに元気づけるでしょう。私の差入れに対する始終ハラハ

ラした気持が他からの差入れの話を聞くとホッと息のぬき場をみつけたようです。」

だからこそおれは貰った手紙や差入れを詳しく紙石盤に書き留めておいてはお前に知らせてきたではないか。——

「私は息のぬけ場を求めようとは思わない。私は今や、一人の社会人であり、公人であるのですから、私が他の人の堪えがたい困難をつっきってゆく力が、私自身を成長さすものであることを知っていますから。どうぞあなたは同志として夫として、…………、私に力をつけて下さい。」

では、どうすればいいというのか。——

「そして私が、子供や老人を抱えた私が、如何にして百パーセントに仕事をしてゆくかについてあなたの意見を聞かして下さい。そして私は、あなたの意見が、現在あなたの生活の中で「机上空論」的にならないように努力しましょう、外の風をたっぷり吹きおくることによって。」

「あなたはこの間私が久しぶりで面会に行った時、私が経済困難に陥っている話の末に、私のこの困難を招来したことが小説を書かないことにも原因していると言って、可成り劇しく責めた。」

嘘を言え。おれは劇しくも、責めもしない。打開策を言ったまでだ、後から書いた手紙を読めば分るのだ。——

「私が小説を書かないことのよくないことは百パーセントに認めます。あなたは私がウザウザとおばあさんや、妹や赤ん坊に取り交ってつい小説を書かないとまでは思っていないでしょうけれど、私の意見をここで書いてみましょう。」

続けて文化運動の非常時的な困難が述べてある。「あなたは内田ゆき子が、その状勢の外に、連盟機関紙の『日和見主義批判』の外にいていいと思うでしょうか。」そしてゆき子の小説の書けぬ大きな原因として、組織活動と創作活動の弁証法的統一がまだ地につきはじめたばかりで、非常に具体化していないということを挙げている。片方ではこれに対して右翼的な傾向を持った作品がはびこりつつある。「それだから、早く私はいい小説を書かねばならない。私が小説を書かぬことの悪いことは百パーセントに認める所以です。」といってはいるが、「私は作家として、文学運動における自分の任務を自覚する時、今発表する作品に責任を感じます。」

そういうだけで、いつまでたっても誤ったものに対抗してそれを克服する作品を書かないで、誤った傾向の尻を追い廻わしているだけでは、——それこそ外にいた頃もいったように、芸術至上主義の左翼的一変種にすぎないではないか。——

「私はあなたの、私の小説を書かぬことについての批判が、現象的であることについて、一応私の意見を述べた上で、私はいい小説を書くことに努力します。」そしてゆき子は文学運動の現状や誤った傾向を示す諸種の見解を述べている。

竹造はいつもの時間の三分の一もかからないで飯を食べてしまった。食べてしまってもまだ手紙を読み終らなかった。

彼は読みながら一々反駁して来た。読み終っても固くなった身体は弛まなかった。反駁の言葉が止むと同時に沈黙したきり、何も考えることが出来なかった。一階級人の家庭生活における同じ気持で交渉をもってきたつもりの自分が、裏切られてしまった寂しさが身を包んだ。竹造は自分が今、何のために、どんな目にあって、どこにいるかを考える時、若しその自分がゆき子のいうように外の運動に関心をもっていなかったとなれば、敵の手中にあるこの現在の生活は自分にとってなかったと同じことになる。同時に自分が属する階級を守ってきた努力もなかったことになる。

運動に出て空を見上げた竹造の眼は、人間に見詰められた犬が外らした眼のようにおどおどとしていた。

竹造は夜寝るまで、遂に本を読まなかった。起ち上ることもしなかった。ただ坐ったきりで、背を壁に凭せもせず、両手を膝において、うつろな眼で前の壁を見ていた。身体をふるわせるような驚愕と怒りの消え失せた後の身体には何も残っていなかった。

自分に、頼ったり甘えたりする気持のあるうちは、ほんとうに自分を知ることは出来ない。最近の心の昂まりを意識していた竹造は、とにかく一人きりになって考えてみようと思った。考えがつく迄は手紙を一切書かない。場合によっては、面会に来ても会わない。ただそう考えただけであった。感覚を失ったようにいつまでも沈黙している口は、動かすと舌の上に病気の時のような甘ったるい味がする。

竹造は眼を瞑っても、尚暗い中で一点を見つめたまま眠ってしまった。

（一九三四年一一月「中央公論」）

乳房

宮本百合子

一

何か物音がする……何か音がしている……目ざめかけた意識をそこへ力の限り縋りかけて、ひろ子はくたびれた深い眠りの底から段々苦しく浮きあがって来た。

真暗闇の中に目をあけたが頭のうしろが痺れたようで、仰向きに寝た枕ごと体が急にグルリと一廻転したような気がした。寝馴れた自分の部屋の中だのに、ひろ子は自分の頭がどっちを向いているか、咄嗟（とっさ）にはっきりしなかった。

眼をあけたまま耳を澄していると、音がしたのは夢ではなかった。時々猫がトタンの庇の上を歩いて大きい音を立てることがある、それとも違う、低い力のこもった物音が階下の台所のあたりでしている。

ひろ子は音を立てずに布団を撥ねのけ、裾の方にかけてある羽織へ手をとおしながら立ち上った。染絣の夜着の袖が重なるぐらいのところに、もう一人の同僚の保姆タミノが寝ている。足さぐりで部屋の外へ出ようとして、ひろ子は思わずよろけた。

「なに？……あかりつけようか？」

タミノは半醒の若々しい眠さで舌の縺れるような声である。

「……待って……」

泥棒とも思えなかったが、ひろ子の気はゆるまなかった。九月に市電の争議がはじまってから、この託児所も応援に参加し、古参の沢崎キンがつれて行かれてからは時ならぬ時に私服が来た。何だ、返事がないから、空巣かと思ったよなどと、ぬけぬけ上り込まれてはかなわない。ひろ子にはまた別の不安もあった。家賃滞納で家主との間に悶着が起っていた。御嶽お百草。そういう看板の横へ近頃新しく忠誠会第二支部という看板を下げた藤井は、こまかい家作をこの辺に持っていて、滞納のとれる見込みなしと見ると、ごろつきを雇って殴りこみをさせるので評判であった。脅しでなく、本当に畳をはいで、借家人をたたき出した。

四五日前にもその藤井がここへやって来た。藤井は角刈の素頭で、まがいもののラッコの衿をつけたインバネスの片袖を肩へはねあげ、絣目のたつ繻子足袋の足を片組みにして、

「女ばっかりだって、そうそうつけ上って貰っちゃ、こっ

ちの口が干上るからね。――のかれないというんなら、のけるようにしてのかす。洋服なんぞ着た女に、ろくなのはありゃしねえ」

いかつい口を利きながら、眼は好色らしく光らせた。スカートと柔かいジャケッの上から割烹着をつけ、そこに膝ついているひろ子の体や、あっち向で何かしているタミノの無頓着な後つきをじろり、じろり眺めて、ねばって行った。いやがらせでも始めたか、畜生！　という気もあって、ひろ子は六畳の小窓を急に荒っぽくあけて外を見おろした。

夜露に濡れたトタンが月に照されている。平らに沈んだその光のひろがりが、ひろ子の目をとらえた。見えないところで既に高く高くのぼっている月の隈ない光は、夜霧にこめられたむこうの原ッぱの先まで水っぽく細かく燦めかせ、その煙るような軽い遠景をつい目の先に澱ませて、こわれた竹垣の端に歪んで立っている街灯が、その下にころがっている太い土管をボンヤリと照し出している。夜霧にとけまじった月光の、赤黄く濁った電灯の色とは、そこで陰気な影を錯雑させている。

貧しく棟の低い界隈の夜は寝しずまっている。ひろ子はそのまま雨戸をしめようとしたら、こっちの庇の下からいそいで男が姿を現わした。足より先にまず顔をと云いたげに体を斜っかいに運んで二階の窓を振仰ぎながら、手をふった。細面の顔半面と着流しの肩に深夜の月は寒そうで、

ひろ子は窓の奥から眼を見はったが、

「なアんだ！」

お前さんだったのか、という声を出した。それを合図に待っていたらしく、寝床に起き上っていたタミノが手をのばして、電灯をひねった。俄の明りで、タミノは眠たい丸顔を一層くしゃくしゃさせた。

「大谷さん？――何サ今ごろんなって」

寝間着の前をはだけ、むっちりしたつやのいい膝小僧を出したまんま腹立たしそうに呟いた。

「用事だったらまた起すから寝てなさい、よ、風邪ひくわ」

片隅によせあつめものの古くさいテーブルなどが置いてある三畳の方から、急な階子段がむき出しに下の六畳へついている。ひろ子は暗がりの中を手さぐりでそこの十燭をつけ、間じきりの唐紙ははずしてある四畳半をぬけ、流しの前へ下りた。節約で、台所の灯はつけてない。水口の雨戸の建てつけが腐っているところをコトコトやっていると外から少しじれったそうに、

「――どれ」

と戸をひくようにした。

「駄目、駄目。こっちを先へもち上げなけりゃ」

戸があくと同時に一またぎで大谷が土間に入った。

「なるほど、これじゃ骨が折れる。却って用心がいいようなもんだね」

そして、持ち前の毒のない調子で目をしばたたきながら

ふ、ふ、と笑った。
「どうしたの、今時分」
「急に頼みが出来たんだがね」
「何だか音がしたと思って見てるのに、すぐ顔を出さないんだもの」
「失敬、失敬」
大谷は首をすくめるような形恰をして笑いながら、
「しょんべんしてたんだ」
低い声で云って舌を出した。

大谷の用事は、ここから明朝誰か柳島の組会へ出てくれというのであった。強制調停に不服なところへ馘首公表で、各車庫は再び動揺しはじめているのであった。
「八時に、山岸って、支部長ですがね、その男を訪ねて事務所の方へ行けばいいことになっているんだ。突然ですまないけれど――頼む、ね！」
ひろ子は、髪を編下げにし、自分に合わせては派手な貰いものの銘仙羽織を着て揚板のところにしゃがんでいるのであったが、
「――困ったナ」
と、バットに火をつけている大谷を見上げた。
「――亀戸の方から誰かないかしら。こっちは飯田さんが広尾へ出るんです」
「あっちは臼井君にきいて貰ったんだ。錦糸堀があるんだそうだ」
「――あのひと……ききに行ったのかしら……」
妙な工合ににやつきながら、大谷を見つめるひろ子の視線をまともに受け、大谷は煙草を深く吸いこみながら何か前後の事情を考え会わせる風であったが、
「いや、行ってるだろう。……行ってるよ」
確信のある言勢で云った。
臼井時雄については、当人の口から元九州辺で運動に関係していたことがあると云われているばかりで、誰も確実な身元や経歴を知らなかった。いつの間にか、診療所へ出入しはじめ、組合の活動に人手が足りなくなって来たら、これもまたいつの間にか、書記局の手伝いのようになった。二十四五の、後姿を見ると肩の落ちたような感じの小柄な男であった。
ひろ子は、あんまり人嫌いしない性質であったが、この臼井がニュースなど持って来て、喋るでもなく、子供らと遊ぶでもなく、その辺を愚図々々して自分たちの立居振舞を見ていられると、背中がむずついて来るような居心地わるさを感じた。いつになっても本能的に馴染むことの出来ないところがあって、ひろ子に一種の苦しい気分を起させるのであった。臼井の云うことにはちぐはぐなこともあった。
或る席で、ひろ子が臼井に対してもっている否定的な印象を述べたときも、大谷は例によって目を盛んにしばたた

き、口を尖らすようにして、あぐらをかいた膝の前でパットの空箱を細かく裂きながら注意ぶかく傾聴はしたが、決定的な意見は云わなかった。最後に頭を上げ、
「――調査する必要はあるね」
と云った。市電のことが起ってから、大谷は応援活動の方面での責任者となり、忙しさにまぎれて調査もおそらくそのままなのだろう。臼井のことを云うひろ子と大谷との心持の間にはそれだけのたまって来ているものがあるのであった。
大谷は、土間に落した吸い殼を穿き減らした下駄のうしろで踏み消しながら、
「――じゃ頼みました、八時に、山岸、ね」
「…………」
ひろ子は、片腕を高く頭の上へまわして、左手でその手の先を引ぱるような困惑の表情をした。
「子供のものもらいのことがあるし――、弱ったわ、本当に」
「ん――。ひる前ですむよ。それからだっていいだろう？もし何なら夜だっていいさ、診療所はどうせ十時までだもの」
ひろ子は、そういうやりかたでなく、もっと親たちの心持にも響いてゆくように、託児所の手不足からひろがったものもらいの始末をしたいのであった。夕方、迎えに立ちよるおっかさんの顔を見るなり、

「おっかちゃん！　六坊、きょう先生んとこへ行ったよ、目洗ったんだよ！　ちっとも痛くなんかないや！」
ぴんつくしながら子供の口からきかされれば、同じことながら、母親たちが感じるあたたかみはどんなに違うだろう。
沢崎がつかまえられているからばかりでなく、特に今そういう心くばりは母親たちの託児所に対する気持の傾きに対しても大切だ。ひろ子にはその必要が見えていた。大谷がいそがしい活動の間で、そこへ迄気がつかないのは無理ないし、大体、今度の応援につれて託児所として起って来ている毎日の様々の困難は、個人的な立話で解決されることでもないのであった。
「じゃ、とにかく何とかしますから」
ひろ子は、やがて両手を膝に突ぱるようにしてゆっくり立ち上りながら云った。
「――今頃ふらふらして、あなた、大丈夫かしら」
「マアいいだろう、第三日曜だから。――じゃ失敬。せっかく寝たところを起してすみませんでした」
元気よく外へ出かけて、大谷は、
「ホウ」
敷居をまたぎかけたなり、ひろ子の方へ首を廻らして、
「もうこんなだよ」
フーと夜気に向って白く息を吐いて見せた。夜霧に溶けた月光は、さっきより一層静かに濃く、寒さをまして重た

そうに見えた。そこを劈いて一筋サッとこちらからの電灯の光が走っている。ひろ子は雨戸に手をかけた姿で、身ぶるいした。

「――重吉さんから手紙来るか？」

「もう二週間ばかり来ないわ――どうしたのかしら」

「戦争からこっちまたなかの条件がわるくなったんだナ。――会ったらよろしく云って下さい」

「ええ。ありがとう」

ひろ子はつよく合点した。そして、良人の深川重吉の古い親友であり、現在の彼女にとっては指導的な立場にいる大谷の戛々と鳴る下駄の音が、溝板を渡るのをきき澄してから、戸締りをして、二階へ戻った。

二

横丁を曲ると、羽目に寄せてズラリと自転車が並んでいるのが目についた。夫々うしろに一寸した包みをくくりつけたままで、斜かいに頭を揃えて置いてあるのだが、その一台には、つつじの小鉢が古い真田紐で念入りにからげつけてあった。

青葱の葉などが落ちている朝の往来をそっちに向って近づきながら、ひろ子は或る言葉を思い出した。その国の労働者の生活状態はその国の労働人口に比例して何台自転車をもっているかということで分る。多分そんな文句であった。今目の前に市電の連中の自転車は二十台以上も並んではいたが、スポークがキラキラしているような新しいのは唯の一台もなかった。

ガラス戸が四枚たつ入口のところへ、三々五々黙りがちに従業員がやって来ていた。入口のすぐ手前のところで立ち停ってバットの最後の一ふかしを唇を火傷しそうな手つきで吸って、自棄にその殻を地べたへたたきつけてから入るのがある。どっかりと上り框に外套の裾をひろげて腰をおろし高く片脚ずつ持ち上げて、いそぎもせず靴の紐を解いているのがある。

ひろ子は足もとの靴をよけて爪立つようにしながら、

「あの、山岸さん見えていましょうか」

上り端の長四畳のテーブルにかたまっている連中に声をかけた。黒い外套の背中を見せてあちら向に肱を突いていたのが、向きかえり、土間に立っているひろ子を見た。

「――オーイ、支部長いるかア」

声だけ階段口に向って張り上げた。

「おウ」

「用のひとだ」

踵に重みをかけド、ド、ドと響を立てて誰かが降りて来かけた。折からゆっくり登って行った三四人と窮屈そうに中段で身を躱し、のこりの三四段をまたド、ド、ドと小肥りの、髮をポマードで分けた外套なしの詰襟が現われた。

「やア」

如才ない物ごしで声をかけてひろ子に近づいた。ひろ子は、大谷にきいて来たと云った。
「ヤア、それはどうも御苦労さんです、上って下さい」
ひろ子が靴をぬいでいる間、山岸はそのうしろに立って両手をズボンのポケットに突っこんだまま、
「大谷君、今日は見えんですか」
と云った。
「私ひとりなんですけれど」
「いや、却って御婦人の方が効果的でいいです。ハッハッハ」
階子口に行きかかると、山岸が何気なく、
「じゃア……」
片手で顎を撫で、通路からはずれて立ち止った。
「どういう順序にしますかな」
ひろ子は講演にでも出る前のような妙な気持がした。
「御都合で、私は別にどうって――」
「じゃ――一つ先へやって貰いますか」
早口に云って山岸自身先に立ち二階へ登って行った。
大小三間がぶっこぬかれていた。正面の長押から墨黒々とビラが下っている。「百三十名馘首絶対反対！」「バス乗換券発行反対！　応援車掌要求」強制調停後のと並んで「百二十一万三千二百七十円、人件費削減絶対反対！」というのも下っている。
すっかり開け放された左手の腰高窓から朝日がさし込んでいた。まだ暖みの少い早朝の澄んだ光線を背中にうけてその窓框に数人押し並び、その中の一人が靴下の中で頻りに拇指を動かしながら何か説明している。ひろ子の坐ったところから其等の人々の姿は逆光線で、黒っぽく見えるうしろに、広く雲のない空が拡がり、隣のスレート屋根の上で、四つずつ二列に並んだ通風筒の頭が、同じ方向に、同じ速さで、クルクル、クルクル廻っているのが見える。
隅っこに、どういう訳か二脚だけある椅子へこっち向に跨り、粗末な曲木のよりかかりに両腕をもたせて一人は顎をのせ、一人は片膝でひどく貧乏ゆすりをしている。畳の上では立てた両方の膝を抱えこんだ上に突伏しているもの、あぐらをかいた両股の間へさし交しに手を入れ体をゆすぶっている者。――
ひろ子は、あたりの雰囲気の裡に複雑なものを感じた。会合に馴れ切った、一通りのことでは驚きもせぬと云いたげなその室内の空気の底に、実は方向のきまっていない或る動揺、口に出して云い切るまでにはなっていない予期というようなものが流れているのが感じられる。それは、椅子に跨って貧乏ゆすりしている三十がらみの従業員の落着かなく人の出入りに注がれる眼くばりの中にも認めることが出来るのであった。
やがて、正面の小机のところへ、喉に湿布を捲きつけた一人の背の高い従業員が来た。その男は立つなり自分の腕時計を見、ネジをまき、さっきからその机へ頬杖をついて

ぼんやりあぐらをかいていた中年の従業員と何か話した。
「じゃあ、始めますからア」
椅子に跨っていた一人の方は下りて畳へあぐらをくみ、一人はそのままいた。
「お、しめなよ、寒いや」
窓際のが外套の襟を立てた。
「じゃあこれから第五組組会を開きます」
じじむさく喉に湿布を捲いたのが組長であるらしく、司会をした。
「一昨二十六日午後、川野委員長対大石、佐藤との会見においては、百二十七名に対する不当なる馘首に対する我々の側からの強硬なる抗議に拘らず、あっさり蹴られた顚末は、即刻掲示したとおりであります。今日は、その後の経過について報告し、我々第五組としての態度を決したいと思いますが、その前に、今ここへ労救が人をよこしているから、その方からやって行きたいと思います」
すると、ひろ子が坐っているすぐわきにあぐらをかいていた一見世帯持の四十がらみの従業員が、誇張した大声で
「異議なし！」
と下を向いたまま首をふって叫んだ。
「――……じゃ、どうぞ」
ひろ子はその場で居ずまいを直し、口を切ろうとしたら
「こっちへ出て下さい」
議長が自分のわきを示した。ひろ子がほんのり上気した顔でそっちへ立って行くと、更に、
「異議なアし！」
と後の方で頓狂に叫んだ者がある。笑声が起った。
それにかかずらわないことで全体の空気をひきしめつつ、ひろ子は飾りけのない、はっきりした口調で、今度の争議が一般の労働者の神さんたちにまで、どのくらい関心をひき起しているかということを、鍾馗タビへ出ている秀子のおふくろの言葉などを実例にひいて話した。そして、今朝既に広尾では家族会を応援して移動託児所をひらいていることを説明した。
「きのう、慶大裏で飛びこみ自殺をした大江さんはほんとにお気の毒だったと思います。新聞は、日頃呑んだくれだったと書きましたけれど、広尾の人からじかにきいた話はちがいます。大江さんのお神さんが病身だものでどうしても欠勤が多く、それを首キリの口実にされたらああいうことになったんだそうです。私たちがもっと強くて、病院でも持っていたら、大江さんは病身のおかみさんのためにクビにはならずにすんだのにと思います。自殺しなくてもよかったと思うと、残念です」
「異議なし！」
「そうだ！」
つよい拍手が起った。ひろ子は自分ではまるで気づかない集注した美しい表情で顔を燃し、
「どうぞ、皆さん、がんばって下さい」

と云った。
「私たちは及ばずながら、できるだけのおてつだいの準備をしています。それが無にならないように、どうぞしっかりやって下さい！」
さっきのように弥次気分のない、誠意ある拍手が長く響いた。
「——では続いて報告にうつります」
皆に要求されて、支部長の山岸が片手をズボンのポケットに入れた演説口調で、
「不肖私は、この際支部長の責を諸君と共に荷っております以上は、あくまで闘争の第一線に殪れる決意をもつ者であることを声明します。ついては、即刻闘争の具体的方法について忌憚ない大衆的討論にうつりたいと思います」
そう云ったころから、場内は目に見えて緊張して来た。
「支部長の提案に、質問意見があったら出して下さい」
「………」
「議長！」
このとき、ひろ子の坐っている壁ぎわの場所からは斜向きに当るところで、一人の若い従業員が肱を突きのばすような工合に手を挙げた。
「第三班の決議を発表したいと思います」
「やって下さい」
「われわれ第三班は、今朝改めて班会を持ち、要求は当然拒絶されるであろうという見とおしに立って、即刻ストを決議し、闘争委員を選出しました」
「………」
微妙なざわめきが場内にひろがりはじめた。百二十七名の馘首反対を絶対に妥協しないこと。要求がきかれなければストライキ準備に入れという指令は本部から既に数日前発せられているのだ。山岸は力のつよい小波のように動きはじめた雰囲気を強いて無視し、わざとらしく燻たそうに眉根を顰めて丸っこい手ですったマッチから煙草に火をつけている。
「ちょいと……そのウ、質問なんだが——」
不決断に引っぱって、のろくさと一つの声が沈黙を破った。
「その第三班の決議ってのは——というんかね。俺にゃちょいと分らないんだが——全線立たなくても、ここでだけ行こうってのかね」
「第三班ではその気なんだ」
若い従業員は短く答えて口を噤んだ。
「それなら」
のろのろものを云っていたその男は俄に居直ったように挑発的な声を高め、
「俺あ、絶対にその案には反対だ！」
ひろ子はその声がさっき自分が立ってゆくとき後の方から「異議なし」と弥次った声であるのをききわけた。

「異議なし！」
別の声が続いた。
「俺も反対だ！　ここっきりなんぞでやって見ろ。馬鹿馬鹿しい。根こそぎやられて、それこそ玉なしだア」
ひろ子は全身の注意をよびさまされた。異議をとなえているものたちの間には妙に腹の合った空気がある。
「議長ッ！」
「議長！」
二つの声が同時に競り合って起り、甲高い方が一方を強引に押し切って、
「そりゃ違うと思うんだ」
と強く抗議した。
「二月の広尾のストのことを考えて見たって分ると思うんだ。部分的ストは可能だし、それがきっかけで全線立つ情勢は現実にもう熟しているんだ。そんなことは誰だって実際現場の様子を知っているもんには分っているはずだと思う。さもなけりゃ、本部はどうしてああいう指令を出したんだ？」
「議長！」
万年筆だのエヴァシャープだのを胸ポケットにさしている年配のが、落着いたような声で云った。
「俺は第一班だが……これは個人的意見なんだが、ストをやることに俺は絶対、賛成だ！」
一言一言に重みをつけてそう云っておいて、
「但し、だ」
一転して巧みに全員の注意を自分にあつめた。
「但し、全線が一斉に立たないならば、ストをやることは俺は絶対に反対だ！」
ひろ子は胸の中を熱いものが逆流したように感じて唇をかんだ。何とこの幹部連中は狡猾に心理のめりはりをつかまえて、切崩しをしているのだろう。自分がこの会合で発言権のないお客にすぎないことをひろ子は苦痛に感じた。炭がおこって火になるときだって、どこかの一点からついて全体へうつってゆくのではないか。それだのに——。
言葉使いの意味ありげなあやに煽られて、パチ、パチ手をたたいたものがあった。
「力関係を考えないで、何でもストをやろうなんて、それこそ小児病だ。今、ここだけでなんてやれるかい！」
「議長！」
再び甲高い声が主張した。
「力関係って云ったって、相対的なもんだぜ、放ったらかして、こっちから押さないでいても有利になって来る力関係なんて、資本主義の社会にあるもんか。現に強制調停までにだって、一ふんばりふんばればやれたんだ。それを、天下り委員会にまかしといて、謂わば、いなされたんじゃないか」
「そうだ！」
「異議ナシ！」

「今度だって、本部がこっそりクビキリ候補の名簿をこさえてさし上げたんだっていう話さえあるじゃないか」
「チェッ！」
大会の前後に、各車庫から「傾向的」な従業員が六十人以上警察へ引っぱられ、労救員もその中に何人かまじっていた。あらかじめ、そうしてしっかりした分子を引きぬいてしまった経営者側の意図が、こういう場合になって見ると、まざまざ分るのであった。ひろ子は益々くちおしく思った。

全線ストか、さもなければ全然ストには立たない、立っても意味ないという敗北的な考えかたを、指令や方針の解釈に当って争議のはじまりっから、東交幹部の大部分が盛んに従業員の心にふきこんで来ていた。情勢がこみ入ると、そういうあれか、これかへの考えかたはどこにでも起りがちであった。亀戸託児所が市電の応援をやりすぎて親たちがこわがりはじめた、その時にもやはり、争議応援を全然打切ろうという意見と託児所ぐらい一つ潰したっていいという見解とが対立して、大谷がその席でその両方とも誤っていることを指摘した。

度々の弾圧で東交職場大衆の中には、このいかがわしいかけ引きの底をわって、自分たちのエネルギーを正しい闘争の道へ引っぱり出すだけの組織者、先頭に立つべき指導者がのこされていない。それが、はたで見ているひろ子にさえ分った。

場内は、立ちこめる煙草のけむりと一緒に益々混乱し、いろんな突拍子もない意見や質問が続出した。ストは是非やるべし。だが、今度こそは百パーセント勝つという保証つきでやって貰いたい。

そういうのがあるかと思うと、どういう意味か、わざわざ、
「俺は支部長にききたいんだが」
と、国家社会主義とはどういうものかと質問したものがあった。ひろ子はそれをきいて、はじめその質問者は、窮極には資本家の利益を国家が権力で守ってやる国家社会主義は、労働者の幸福とどんなに反対のものであるかということについて、誰にでも呑こめるような説明をひっぱり出そうとしているのかと思ったら、そうでもなくて、山岸の曖昧な、階級というものの対立する関係の説明をぬいた答弁だけで、反駁さえも加えられずに終った。そして、
「議長！」
次には、まるで別な話のように、こんな提案がされた。東交はスローガンとしてファッショ打倒をかかげているが、俺はそのスローガンに反対だ。東交の規約には、政党、政治に関係なく全従業員の経済的利益を守るとある。それだのに、ファッショ打倒なんかというスローガンをあげることは規約を無視している。だから、
「その点がはっきりしねえうちは、俺あもう組合費は出さんつもりだ」

「チャッカリしすぎてるぞ！」
「下田は何だョ！」
それは、東交内で有名なダラ幹で新聞にさえその御用的立場はすっぱぬかれていた。
「ファッショのヤタイ店、ひっこめ！」
「議長！　議場整理！」
「みなさん、静かに願います。順々に発言して下さい！」
議長は形式的にそう云ったぎりで、支部長の山岸はその間ずっと片手をポケットにつっこんだなり、小机の端に頬杖をつき、おきているのか居睡りしているのか、瞼の重い目をつぶって場内を混乱にまかせているふうである。散々ごやごやしぬいて肝心の討論の中心ははぐらかされ、全体の気分がだれて散漫になった時分、議長はさも潮どきというふうに色の黒い顔をのび上らせ、
「じゃア、もう時間が来ましたから」
と決議を求めた。柳島車庫は、何処かがストに立ちさえすれば、直ちに罷業に入るという奇妙な決定をしたのであった。

三

事務所の裏口から出て、コークス殻の敷かれた長屋の横丁を歩いて来るうちに、ひろ子は苦しい、いやな心持がつのって来た。

それは複雑な心持であった。東交が、全く従業員の高揚を引止める役にしか立っていない。それだのに自分はうまく幹部に扱われて実質的な激励の役にも立たない前座で、応援のことを話させられてしまった。その失敗が今はっきりと感じられた。ひろ子が情勢をよく見ぬいて自分の話をあとに押えておくだけの才覚があったら、全体の気分があんなにだれた時、少しは引緊める刺戟にもなったかもしれまい。山岸ははじめっからそれを見越して行動した。大谷が来ないと云ったとき、山岸は笑っておだてるようなことを云った。それも、ひろ子の顔を屈辱で赫らめさせた。山岸がひろ子を後で喋らせなかったのは、すれきった彼の政治的な技術なのであった。

広い改正道路へ出る手前に新しく架けられたコンクリートの橋があった。片側通行止で、まだ工事につかったセメント樽、棒材、赤いガラスをはめこんだ通行止の角灯などがかためて置いてある。人が通れる日向の歩道の上で、茶色ジャケツにゴム長をはいた七つばかりの男の児と絣の筒っぽに、やっぱりゴム長をはいたいがぐり頭の同じ年頃の男の児とが独楽をまわして遊んでいる。二つの小さい鉄独楽が陽に光りながら盛んに廻っているぐるりをめぐって、紐をもった二人の男の児は、シッ、シッ、唾を飛ばしながら力一杯に紐をふり、自分の独楽に勢いをつけ、横を何が通ろうが傍目もふらない。その様子を見るとひろ子はなおさら、今出て来た会合と自分に腹が立った。

歩調をゆるめて腕時計を見、ひろ子は一層おそく歩きながらハンドバッグをあけて、中仕切を調べた。一週間ばかり前裁判所へ行って貰っておいた接見許可証は、四つに畳んだ端がささくれたようになって入っている。十銭、五銭とりまぜの財布の口をしめ、ひろ子はもう一遍首をかしげるような形恰をしたが、時計を見直すと、今度は地味な黒靴をはっきりとした急ぎ足になって停留場に向った。

重吉が市ガ谷の未決に廻されたのは、半年程前のことであった。警察には十カ月以上置かれた。はじめ半年ばかりの間は、ひろ子まで警察に留められていたのでもとより会えず、ひろ子がかえってからも、重吉への面会は許可されなかった。重吉が未決にまわったことがその日の夕刊でわかって、裁判所へ初めて許可を貰いに行ったとき、ひろ子は予審判事にこう云われた。

「警察では自分の姓名さえも認めておらんのだから、深川重吉という人物はいわばいるかいないか分らんようなものだ。然しマア、いろいろの証拠によって、こちらには分っていることだから許可します」

重吉は白紙で送られているのであった。

終点から引返しになるそこの電車は空いていた。日の当る側の座席を選んで四角な大きい白木綿の風呂敷包をわきにおいて腰かけ、それに肱をかけながら長くのばした小指の爪で耳垢をほじったりしているモジリの爺さんのほか、乗客はまばらである。前部のドアの横に楽な姿勢でよっかかっている年蜚の車掌が、手帳を出し、短くなった鉛筆の芯を時々舐めながら何か思案している。市電の古い連中では株をもっているものが少くなかった。肩からカバンを下げていても、そうやって自分ひとりの世界の中に閉じこもっているその老車掌の自分中心にかたまった顔つきを見ていると、ひろ子の心には重吉からはじめて来た手紙の一節が無限の意味をふくんで甦った。重吉は、なかで注意しているだろう。歴史の歯車はその微細な音響をここには伝えないが、この点に関しては、何等の懸念もない。そういってよこした。何等の懸念もない。——だが、ひろ子はその不自由に表現されている言葉の内容を狭く自分の身にだけ引き当てて、自負する気にはとてもなれなかった。かりに自分の身にだけひき当てて解釈したとして、どうして「何の懸念もない」自分であろう。応援の挨拶一つ、正しい機会をつかんで喋れないのに。そういう未熟さがあっちにもこっちにもあるのに。

上野を大分過ぎたころ気がついて車内を見わたすと、いつの間にか、乗客の身なりから顔の色艶、骨相までが最初柳島で乗ったとは違っているのに、ひろ子は新しい目を瞠った。大東京の東から西へ貫いて、ひろ子は揺すぶられて行っているのだが、同じ電車が山の手に近づくにつれて、乗り降りする男女の姿態は、煤煙の毒で青い樹さえ生えない城東の住民とはちがう柔軟さ、手ぎれいさ、なめらかさ

で包まれているのであった。
ひろ子は、新宿一丁目で電車を降りた。そして、差入屋の立看板の並んだ、狭苦しい通りに出た。行手の正面に、異様に空が広く見える刑務所の正門があった。門のそとに、コンクリート塀の高さと蜒々たる長さとを際立たせて、田舎の小駅にでもありそうなベンチがある。そのベンチの上のさしかけ屋根は、下から突風で吹き上げられでもしたように、高く反りかえっている。雨も風もふせぐ役には立たなかった。
ひろ子はこの道を来て、森として単調な長いコンクリート塀の直線と、市中のどこよりもその碧さが濃いように感じられる青空を見上げるにつけ、胸を緊めつけられるようにその不自然な静寂を感じるのであった。
砂利を鳴らしてひろ子は入って行った。人の跫音のよく響くようにというためであろう。どこにもかしこにも砂利がしいてあった。
内庭に面して別棟に建っている待合室は、男女にわかれていた。ガラス戸をあけると煉炭の悪臭が気持悪く顔へ来た。割合すいていて、毛絲編の羽織みたいなものを着て、くずれた束髪にセルロイドの鬢櫛をさした酌婦上りらしい女が口をだらりとあけて三白眼をしながら懐手で膝を組んでいる。そのほか四五人である。十二時から一時までは面会を休む。あと十五分ばかりで一時という刻限であった。
ひろ子は売店で十銭の菓子と、のりの佃煮を差入れ、待合所の外の日向に佇んでいた。内庭には松などが植えこんである。面会所は左手の奥にあった、が初めて来た時、ひろ子は勝手がわからずそこが便所かと思って行きかけた。そういう間違いも不思議でないような見かけであった。門扉の外でタイアが砂利を撥きとばす音がすると、守衛が特別な鍵で門をあけ、そこから自動車が一台内庭へ入って来た。三四人の男がその車から下りて、敬礼を受けつつ別棟の建物の中に入って行った。はなれたところからその様子を眺めていて、ひろ子は、重吉がここへ来たとき玄関の石段を登るに、拷問ではれた脚の自由がきかないで手をついてあがったと人からきいた話を思い出した。
気になって時計を見たが、まだ五分も経っていない。待つ間はこんなに永いが、いざ顔を見て口を利くときになると、幾言もまだ話したと思えないのに、もういい、と窓をおろされる。期待の永さと、短い間にひどく緊張して気をはりつめるせいで面会はくたびれた。面会窓があいた瞬間に、やあ、と笑顔になりながら大きい両眉をゆっくり揉み出すようにのり出してくる重吉の身ぶりや、いつも落ちかかって来る窓ぶたに語尾を押し截られるように、じゃ元気で、という重吉の声の抑揚は忘れられなかった。次に会うまでに一カ月の時がたっていても、最後に見た重吉の眼の中や、唇のあたりに浮んでいた細かい表情はそのままの暖かさで、ひろ子の心にのこっているのであった。
ひろ子はハンドバッグをあけて、ひびの入った小さい鏡

をのぞきこんだ。そしてハンケチで鏡のごみをふき、ハンケチの別なところを出して堅く丸め、頰っぺたの上をきつくこすった。皮膚のいくらか荒れた頰に少し赤味がさした。
　待合所の壁にとりつけられている拡声機に、ようやくスイッチが入って鳴り出した。ガラス戸をあけて覗くと、雑音が混った聞きとり難い呼声を間違いなく聴こうとして、女連は今までよりなお深く襟巻に顎をうずめ、袂をかき合せている。
「エー、お待たせしました。……エー、二十八番、二十八番は六号へ。六号。エーそれから三十番」
　その声につれて思想関係らしい四十ばかりの細君風の女が、薄べりを敷いた床几から立ち上り、ショールへ片手をかけ、黒いラッパを頼りなげに下から振り仰いだ。
「エー、三十番——あなたの面会しようとする人は他の刑務所に送られました。」
　ザザ鳴る雑音に遮られ、他の刑務所というのが、サの刑務所と云われたようにひろ子の耳にも聞えた。おとなしい細君風の女は、思わず一足のり出して、
「え？」
　と、黒い拡声機に向って女らしく首をかしげてききかえした。が、スイッチはそれきりプッと音を立てて切れ、その女のひとは何も云えない、困惑の身ぶりで、恰度旧劇の女形が途方にくれたときのしぐさにやるあのとおりの片足をひいた裾さばきでひろ子の方を見た。
　ひろ子は同情に堪えない気がした。
「どこかよその刑務所へいらしたっていうらしかったわ。事務所へ行ってきいて御覧なさい、あすこから入っていらしって」
　ペンキで塗られた二階建の玄関口を指さした。
　一時間以上待って、ひろ子はやっと二三分重吉と話すことが出来た。
　ひろ子は、痛い程柵の横木へ自分の胸を押しつけ、重吉の体の工合をきき、中風で寝たっきりの重吉の父の様子を話すと、いつも註文の本が入らないで本当にすみませんと云った。託児所の逼迫した自主的やりくりの生活の中で、ひろ子は本を借りに歩く交通費さえないことがあった。少し金があるときは時間の余裕がなく、両方そろった時をのがさず、重吉の最低限の必要のまた何分の一かを満たす差入れをするのであった。いやがらずに本を貸してくれる人は概してひろ子の欲しい種類の本を持っていなかった。持っていそうな人々は、本を人に貸すことを一般的にきらった。そういうところに重吉が察しる以上の不便があるのであった。
　重吉は、突然面会につれ出され、立ったまんまで宙で、一時にいろいろ思い出さなければならないので、工合わるげに眉を動かしたり、足を踏みかえたりしながら本の名をあげ、

「しかし、ひろ子の都合もあるだろうから、あんまり無理はしないでいいよ。よしんば本の読めない時があってもわれわれはいろいろ有益なことを考えているしね」
と云った。
これは、時に告げるのだがという心持をこめて、ひろ子はゆっくりと、
「私、けさは柳島へまわって来たんで、こんな時間になってしまった。……託児所の仕事がひろがって来ていて、大人のことにまでのびているもんだから——御無沙汰も、わたしが怠けていたからじゃなかったのよ。電車の父さんたちだって負けちゃ仕様がないでしょう？　だからね」
そう云って、眼で笑った。
「ふーん」
重吉は、もう窓ぶたをしめる構えでそれを引っぱる紐に手をかけている看守の方を一瞥し、その視線を真直ひろ子の顔の上に移し、兵児帯をグッと下げるような力のこもった体のこなしで云った。
「もし、ひろ子が『病気』にでもなったとき、急にこまらないように、出来たら少し金をいれておいてくれ」
重吉のそういう言葉を、ひろ子は咄嗟に自分たちの生活で理解できる限りの豊富な内容で理解した。重吉は本当は金のことを云ったのではなかった。ひろ子の託児所もまきこまれている市電の闘争では、また自分たちが会えなくなる時が来るかも知れない。そのことを重吉は諒解し、諒解しているということでひろ子をはげまし劬わってくれたのであった。
冷たい共同便所に似た面会所から出て、日のよく当っている門へ向って帰りかけながら、ひろ子は自分も矢張り面会を終ってかえるほかの女のひとたちと同じような足つきで砂利の上を歩いている、そう思った。会えて嬉しい、そんな一言では云いつくされないものがひろ子の体の裡にのこされてある。
門を出るとすぐそこの広い砂利のところに、チャンチャンコを着せられた小猿が一匹来ていた。その小猿をぐるりと囲んで背広の男が二三人とピストルを吊下げた守衛もまじって、立ったり、しゃがんだりして笑っている。猿まわしの背中につかまっている猿ともちがう、どこかのその小猿は、黒い耳を茶色のホヤホヤ毛の頭の両方につき立て、蒼ずんだ尻尾を日向の砂利の上にひきずってしゃがみながら、皺だらけの顔を上下にうごかし、せわしなく目玉をうごかし、こせこせ何か食っている。
「こうしているところを見るとなかなか可愛いもんだね、ハハハハ」
それは貧相ないやしげな猿であった。人間に向ってピストルを下げている人は猿になら気やすく愛想を云って笑っていた。ここには、人間についてすべての愛嬌を禁止した規則があった。けれども、猿となら笑っても反則ではなかったから。——

四

数日経ったある午後のことであった。赤坊二人が二階で昼寝している。その間にと、ひろ子が上り端でおしめを畳んでいると、スカートへ下駄をつっかけたタミノが遠くからそれとわかる足音を立てながら外から戻って来た。土管屋と共同ポンプのわきまで来ると、
「ちょっと、どうしたのさア あの看板、ひっくり返っているじゃないの」
と大きな声を出した。庭先に遊んでいた二郎が、
「飯田さん、なんなの？　ネ、なんだってば、なんのカンパンが、しっくりかえったのかい」
五つの袖子や秀子、よちよち歩きの源までタミノのまわりにたかった。
「橋のわきに、白い三角のものが立ってたろう？　あれが溝へおっこちてるのよ」
子供たちもぐるみ上り端の前に立った。ひろ子は、怪訝そうに、
「だって――あれそんなはじっこに立ててありゃしなかったじゃないの」
と云いながら、自分も土間へおりた。蛇窪無産者託児所と白地へ黒ペンキで書いた標識は、土管の積ねてある側、溝からは一間以上も引こんだ場所に、通行人の注意をひくように往来へ向って立ててあったはずである。
「ホラ！――ね？　誰がやったんだろう、こんなわるさ」
なるほど、枯草の生えた泥溝の中へ、頭を突こむような形恰で標識がぶちこまれている。
「今朝は何ともなっていなかったわねえ」
「うん、出かけには気がつかなかったわ」
板橋の上へ並んで子供らは驚きを顔に現わし目を大きくして見ていたが、タミノに手をひかれていた袖子がいきなり、オカッパをふり上げて叫んだ。
「ね、あれ、うちの父ちゃんがこしらえたんだね」
「そうよ。わるい奴、ねエ」
ひろ子は、土管の側からそろそろと片脚をおろし、枯草の根っ株を足がかりに、腰をできるだけ低くして手をのばして見た。そうしても、鯱鉾立ちをしている標識までは、なお二尺ばかり距離があった。
「ちょっと！　あなたまでおっこっちゃ、やだよ」
「大丈夫」
その時道路のむこう側に洗濯屋の若い者が来て自転車をとめ、女と子供ばかりでがやついている様子を珍しげに眺めていた。
「――そりゃ、綱でもなけりゃ無理でしょう」
手の泥をはたき落しながら、ひろ子も断念して、
「袖ちゃんのお父さんが来たら上げて貰おう、ね」
皆で引かえす道で、二郎がしつこく訊いた。

「ね、だれがやったの？　どうして、あんなにすてたんだろ」
　腹を立てていたタミノは、赤い頬っぺたを四角いようにして、袖子の手をひっぱって大股に歩きながら、
「きっと、藤井のごろつきのしわざだ。――ぐるんなってやがるんだもの、何をするかしれたもんじゃない」
　酔っぱらいなどの気まぐれな所業でないことは、明らかであった。
「ポンプのことだって、スパイの奴がたきつけてるにきまってるんだもの」
　おとといの朝、臨時に託児所を手伝いに来ている女子大出の小倉とき子が、井戸端でおしめの洗濯をしていた。水を流す音がしたと思うと、土管屋の台所口のガラス戸が開いた。すると、主人の政助が顔を出し、
「あんまり方図なくつかわれちゃこまりますよ。井戸をつかうのはそっち一軒じゃねえんだからね、勝手に自分の方でばっかりつかわれちゃ、こっちじゃ、ゆっくりおまんまをとぐひまもありゃしねえ」
　と云っている声がした。
「どうもすみません」
　洗い上げたおしめをもって物干竿へまわる時、とき子は四畳半にいたひろ子と窓越しに顔を見合わせ、荒々しい扱いに不馴れなものの、訴える表情を浮べて笑った。ひろ子にはとき子の心の状態がよくわかり、却って、何も云わなかった。
　ひろ子は考えにとらわれた顔つきで、先へ家へ上った。
「さて、と。御苦労様、どうだった？」
　タミノは、とんび足に坐ったスカートのポケットからハトロン紙の小袋を出し、一つ一つふるって白銅三枚と銅貨を十一二枚畳へあけた。
「依田の小母さん、二度目なんでねえって、渋ってた。これっきりか！」
　市電争議の基金を託児所でもあつめるために袋がまわしてあった。
「直接のことじゃないから、何てったってちがうねえ。本当に勝つかどうか分りもしないのに、弾圧くうだけ馬鹿らしいっていうところもあるらしいね」
　市電の従業員の中には、労農救援会の班がいくつかできていた。蛇窪が赤坊寝台を買う必要に迫られた時、柳島では班が中心になってその基金を集めた。その金で今ある三つの籐の寝台が備えつけられたのであった。藤田工業、井上製鞣、鍾馗タビ、向上印刷などへ出ているここの父さん母さん連は、そういうことから市電の連中と結ばれた。隣り同士の義理堅さというようなところもあって、一回の基金募集の時は三円近く集った。然し、おッ母さん連は、自分達が出ている、それぞれの職場で市電で従業員のために基金を集めるというような活動をすることは概して進まず、綱やのお花さんが、消費組合の即売会に誘って行った

同じ長屋の神さんから、二十銭足らずあつめただけであった。
ひろ子は、自分たちの託児所でのそういう経験を、数カ月以前から持たれるようになっていたフラクションの会合で話した。その日は亀戸での話もされた。亀戸では応援活動のために特別な父母の会が催された。そして、特別に若い人が来て、それぞれの職場はちがっても、労働者であるということから共通に守られなければならない労働者としての連帯ということについて熱心に説明した。親たちは、はじめから終りまで傾聴し、その場で相当な額の基金が集った。ところが程なく意外な結果があらわれた。一人、二人と子供が減りはじめ到頭長屋から五人の子がその託児所へ来なくなった。
「なにからなにまで一どきに話しすぎたのがわるかったんです」
睫毛の長いそこの保姆が全体的な批判として云った。
「やっとききだしたところによると、こうなんです。話があんまり尤もで、もし争議へまきこまれたらとても断りきれない。もしそうなったら自分のクビが心配だから、今のうちに子供をひっこめちゃおうということになったらしいんです」
「なるほどね」
大谷は、一度ふーんと呻って、笑った。
「話が尤もでことわりきれまい、か。ふーん。それで、なにかね、もうそれっきり本当に子供はよこさないんだろうか」
「ええ。今のところ来ないんです」
蛇窪でも、沢崎キンが警察へつれてゆかれてから、二人、三人、子供をよこさなくなった親たちがあった。一人は井上搬糅へ出ていた。そのおかみさんの云い分はこうであった。
「そりゃ、こんな暮しをしていたって、つき合いってものはありますからね、たまにゃちょいとしたうちへだって行かなけりゃなんないやね。そんなとき、行坊をつれてくってと、お前さん、人前ってものもあるのにあの子ったら大きな声して『おっかちゃん、ここんちベルジョアだね、だからできだね』って、こう来るんだからね。あたしゃまったく、赤面しちゃうのさ」
そんな話のあったのも近頃のことではなかった。ここがあっちこっちにあった無産者託児所として、統一された活動に入ったばかりの頃、現われた偏向なのであった。
赤坊のぐずつく声をききつけてひろ子が二階へあがって行った。
お花さんのちい坊が、十カ月近くたつのに一向発育のよくない小さい顔をしかめて、寝苦しそうに半泣きの声をしぼって頭をふっている。ひろ子はおしめを代えた。消化不良の便が出ていた。

母乳のほかに山羊の乳をのませろと医者に云われて、お花さんは自分の稼ぎのつづく日にはそれを飲まし、ここへあずけて「よいとまけ」に出ているのであった。

タア坊のおしめを代えてやっていると、窓の下で、

「いいかい、ここ、あたい達のコーバ」

甲高い、勝気そうな袖子の声がした。ひろ子がちい坊の寝台を二階の手すり間じかまで引っぱり出して日光浴をさせながら見下していると、入口の前の空地の隅に、こわれたブランコがある、その切れた綱の先を握って袖子が何かを手繰るような手つきでそれをふっている。二郎が、茶の毛糸と青毛糸とをいかにも間に合わせに継いで寸法をのばしたジャケッを着、ゴム長をふんばって、わきからそれを眺めている。

やや暫く二郎はそうやって眺め、袖子は、目をつつきそうに伸びすぎて剽悍に見える黒いオカッパの下から、時々真面目くさった視線で二郎の方を見ながら、運動をつづけているのであったが、やがて、二郎が、ぶっきら棒に、

「ヤーイ、名なしの工場なんて、ないや」

と云った。袖子は睨むように二郎を見た。そして思案していたが、やがて動かしている手はとめず、

「——ブランコ工場だヨ！」

イーというように返事している。

見下していたひろ子は、声は立てずに大きな口をあけて笑った。

「ここ、キカイだよ！」

矢張り生真面目な顔で、袖子は、ブランコの柱のひびわれた木目を、あいている左手の指先で押しつけるようにして二郎に示している。

今度は二郎が黙って袖子と並んで立った。そして自分でも、もう一本の切れた綱の端を握り、袖子よりもずっと荒ぽく、調子をつけて振っている。振っていると思うと、二郎はいかにも男の児らしい敏捷さで、ひょいとゆれているその綱の先へぶら下って、脚をちぢこめた。止りそうになるとゴム長で地べたを蹴り、またぶらん、ぶらん振りなおす。盲滅法（めくら）に地べたを蹴ろうとする二郎の足は、やっと地べたに届いたり、そうかと思うとたった二分ぐらいのところで宙を掠めてしまったり。——

ひろ子は、いつかつりこまれ、さながら二郎の背中を押してでもやっているように、調子をあわせ無意識のうちに自分まで顎を動かした。

袖子は、綱を持ちかえたが、そのまま目をこらして二郎のやることを観察している。

それに飽きると二郎は暫くどこへか姿をかくし、出て来たところを見ると、羽目板のはずれたのを、片ぺら泥だらけのまんまひきずって来た。それをブランコの切れた綱の下まで引っぱって行き、綱へくくりつけた、つまりブランコらしいものにしようとしているのだが、綱は太いし、板は薄くて幅がひろいし、霜やけの出来た小さい二郎の手に

はしまつがつかない。ぎごちない形恰で膝までつかって何とかしようと、板を落しても落しても、二郎は声も出さず力みこんで骨折っている。家でも、託児所でも、玩具らしい玩具を持たない二郎の努力がそこにあるのであった。ひろ子はそれをただ見下してはいられない心持になって来た。タミノはどうしたのだろう。そう思いながら下りて来て、ひろ子はおやと思った。臼井がいつの間にか来ている。そしてあっち向きに、タミノと向いあって柱によりかかっていた。ひろ子の跫音で、タミノが顔をあげると、臼井はこっちは振りかえらないまま、いそがず、しかし十分ひろ子を意識した素ぶりで何か前にあったものを畳んで紺絣の内懐へしまった。

ひろ子は二人のいる四畳半の方へ行こうとしたのをやめた。そしてありあわせの下駄をはいて外へ出た。

五

夜みんな子供をかえして静かになると、タミノとひろ子とは、工夫してなるたけ人目をひくように、字の大小、ふちどりなどに心を配りながら、大きいのや小さい四角い伝単形やらのガリ版をきった。

託児所の経済は、市電応援以来非常にわるくなった。ひろ子らは、これまでのように、定って毎日来る子供ばかりを預るだけでなく、急用に出かける母親にも便宜なように、どんな臨時でもおやつ代だけで預ること、そして託児所の仕事をもっと大衆化することを決定した。同時に従来も労救とは別に託児所としての維持員を一般の進歩的な家庭の婦人の間に持っていた、その方面も拡大しよう。原紙を切っても手許に謄写版がなかった。診療所まで出かけて行って刷らなければならなかった。翌日タミノが例によってスカートに下駄ばきで出かけようとしているところへ、臼井がやって来て、

「どれ?」

タミノの手から原紙の円く捲いたのをうけとって見て、かえし、

「あっち、多分今つかっているでしょう」

各部署の活動に通暁したように云ったりした。

「あら! やんなっちゃうね。よって来たの?」

臼井はそれには答えず、

「そんなものくらいだったら、僕の知っているところのでやれると思うんだが——」

「なーんだ、そんなことがあるんなら早くそう云ってくれればいいのに! そこへ行こう、ね、いいんでしょう?」

「今夜あたりは、大抵いいだろうと思うんだが……」

正直で単純なタミノに向う臼井のそういう話しぶりや、ひろ子がこの間二階から何心なく降りて来て目にした臼井の凄んだような態度などには何かわざとらしいものが流れているのであった。臼井と二人で出かけて行って、タミノ

は謄写版刷りの仕事もちゃんとして来たが、その四五日あとになって、ふと何かのはずみで云った。
「ポートラップって、わたし、洋酒だとばっかり思ってたら——ちがうんだね」
或る晩のことであった。タミノが電灯を低く下げて靴下の穴つくろいをしながら、
「わたし、いまにここかわるようになるかもしれない」
独言のように云った。それは風のひどい晩で、ひろ子も同じ電灯の下へ机を出して会計簿を調べていた。顔もあげず数字をかきつづけながら、ひろ子はごく自然な気持で、
「ふーん」
とタミノの言葉をうけた。
「どこか、うまいところがありそうなの？」
タミノは三月ばかり前、山電気を組合関係で馘首になるまで、ずっと工場生活をして来ていた。組合の書記局へおいでよって云われたけれど、私、職場の方が好きだ。又入りこむよ。そう云って、一時ここを手伝っているのであった。
下を向いて、こんぐらかった絲を不器用に、若々しい粗暴さで引っぱりながらタミノは、
「まだはっきりしないんだけどね」
間をおいて、
「臼井さん、待ってたのがやっとついたって、とてもよろこんでる……」
ひろ子は思わず首を擡げ、下を向いているタミノを見ながら、ペンをもっていない方の指で自分の下唇をゆるゆると捩るような手つきをした。タミノはやっぱり顔をつくろいものの上にうつむけたままでいる。
「——つくって……」
様々のありふれた推測が、ひろ子の胸に浮んだ。いずれにせよ、臼井と党の組織との連絡がついた、ということにはちがいない。
「だって、そのことと、あんたが、ここからかわるってことは、別なんでしょう？」
タミノは直接それには返事をせず、自分自身の考えに半分とりこまれているような調子で、暫く経って呟いた。
「なかなか役に立つ女が少なくて、みんな困ってるらしいわねえ」
その言葉でひろ子には全部を語らないタミノの考えの道筋が、まざまざ照らし出されたように思った。
「こんどのところは——職場じゃないの？」
「………」
ひろ子は、若い正直なタミノに向って、こみ入った自分の愛情が迸るのを感じた。タミノは、おそらく臼井に何か云われて、彼女には職場での活動よりもっと積極的なねうちを持っているように考えられる或る役割を引きうける気になっているのではないだろうか。ひろ子としては、若い

女の活動家が多くの場合便宜的に引きこまれる家政婦や秘書という役割については久しい前からいろいろの疑問を抱いているのであった。ひろ子は、なお下唇を捩るような手つきをして考えていたが、ゆっくりと云った。
「あっちじゃ、女の同志をハウスキーパアだの秘書だのという名目で同棲させて、性的交渉まで持ったりするようなのはよくないとされているらしいわね。――何かで読んだんだけれど」
ひろ子たちの仲間で「あっち」というときは、いつもソヴェト同盟という意味なのであった。
「ふーん」
今度はタミノが顔をあげた。眉根をキと持上げるような眼でひろ子を見て、何か云いかけたが、そのまま黙って針を動かしつづけた。
やがて、靴下つくろいを終って、タミノは、維持員名簿をめくりながらハトロン封筒へ宛名を書きはじめた。
夜が更けて、風が当ると庇のトタンがガワガワ鳴った。その木枯しが落ちると、道の凍てるのがわかるような四辺の静けさである。タミノが万年筆の先を妙に曲げて持って字を書いている。減ったペンと滑っこい紙の面とが軋みあって、キュ、キュ、キュと音をたてている。
そのキュ、キュいう音を聴きながら自分も仕事をつづけているうちに、ひろ子の心は一つの情景に誘われた。六畳、四畳半、そういう家には遠山に松の絵を描いたやすもののの唐紙がたっている。そのこっちのチャブ台で、ひろ子が、物を書いていた。もう暁方に近かった。ひろ子がくたびれて、考えもまとまらずにあぐねていると、その唐紙のあっちから、丁度今きこえているようなキュキュというペンの音がした。唐紙のこっちからでも、書かれてゆく字のむらのない速力や、渋滞せず流れつづける考えの精力的な勢いやを感じさせずに置かない音であった。ひろ子は自分の手をとめたなり、心たのしくその音に耳を傾けていた。それから、唐紙ごしに、
「ちょっと」
重吉に声をかけた。
「――何だい？」
「……デモらないで下さいね」
ひとり口元をほころばせ、様子をうかがっていると、重吉は、とっさにひろ子の云った言葉の意味がわからなかったらしく、唐紙のむこうで、居ずまいを直す気勢であったが、程なく、
「――なアんだ！」
笑い出した。
「そんな柄でもないだろう」
じきにまた、キュキュ音がしはじめた。――
ひろ子には、タミノがこれから経てゆくであろう一つの階級的な立場をもった女としての一生が、自分の経験するよろこび、苦しみの一つ一つと、情熱的に結び合わされた

ものとして感じられるのであった。
重吉が検挙されてひろ子も別の警察にとめられていた時のことであった。ひろ子は二階の時高室の窓から雀の母親が警察の構内に生えている檜葉の梢に巣をかけているのを見つけた。
ひろ子は覚えず、
「マァ、可哀想に！　こんなところに巣なんかかけて」
と云った。するとそこにいあわせた髭の濃い男が、
「なに可哀想なもんか！　安全に保護されることを知ってるんだよ」
そう云って、ジロジロひろ子を上へ下へ見ていたが、
「君なんぞも子供を一人生みゃいいんだ。さぞ可愛がるだろうな、目に見えるようだ」
ひろ子は、その男の正面に視線を据えて、
「深川をかえして下さい」
そう云った。男は黙りこんだ。
ひろ子がそこから帰って、託児所へ住むようになったばかりの夏の末、お花さんの友達が現場で大怪我をして病院にかつぎこまれたことがあった。
ちい坊を託児所にあずかって、下の四畳半へねかしたまま、団扇で蚊を追い追い、ひろ子はそのわきで本を読んでいた。やがて眼をさましたちい坊は泣き出してどうしてもだまらない。鼻のあたまに汗をかいて泣きしきるので、ひろ子はああと思いつき、その思いつきに自分で嬉しがりながら、
「さァ、これでどう？　ちい公もこれじゃ泣けまい？」
そう云いながら白いブラウスの胸をひろげて、ひろ子は自分の乳房を泣いている赤坊の口元にさしつけた。ちい公は、その時分からしなびて、顔色や足の裏の血色がわるい児であったが、ほそい赤い輪のように口をひろげ、さぐりついてやっとひろ子の乳首をふくんだかと思うと、すぐ舌でその乳首を口の中から圧し出して前より一層激しく泣きたてた。三度も四度もひろ子はそれをくりかえした揚句、到頭あきらめて自分も困ってききわけのある子に云うように挨拶した。
「いやじゃあこまったことね。――でも小母ちゃんがわるいんじゃないのよ、ちい坊や」
それから一時間あまり経って、北海道生れのお花さんが帰って来た。
「すみませんでしたね。ふー、たまんね。なんとした暑さだろう」
お花さんは立ったまま帯をほどき、大柄な浴衣をぬぎすて、腰巻一つになった肩へしぼって来た手拭をかけ、
「ホーラよ、泣きみそ坊主！」
長く垂れ下って黒い乳首をあてがった。鼻息を立ててちい公はそれへかぶりついた。ひろ子さえほっとする安堵の色が赤坊の顔にあらわれた。
ひろ子はその様子をわきからのぞきこみながら、さっき

の話をした。お花さんは、無頓着に生えぎわの汗を肩へかけた手拭でふきながら、
「そりゃ吸わないわね、だって、のましてる乳でなけりゃひゃっこいもん、いやがるよゥ」
ひろ子にはその夜のことが忘られなかった。この自分の乳首が子供を生んだことのない女のつめたい乳首であるということ。そして、見た目は見事な体のお花さんが、栄養不良でおむつから出る二つの小さい足の裏が蒼白いような赤子を、暖みだけはある乳房に辛くも吸いつけている姿。この社会での女の悲しみと憤りの二つの絵がそこにあるように、ひろ子の心に印されたのであった。
その晩、床に入って電灯を消してから、ひろ子はさりげない穏やかな調子でタミノに云った。
「ねえ、あなたの将来のあるいいところや積極性を、個人的なあいまいなゆきがかりで下らなくつかってしまわないようにしなさいね」
「………」
「おせっかいみたいでわるいけど、私たちは仕事をやってみて、その実際でひとを見わけるしかないんだもの……ねえ。そうでしょう? 臼井さんとあなたはまだ仕事らしい仕事をやって見ていないんだもの——気心のしれない気がする……」
タミノが寝床の中で身じろぎをする気配がした。よっぽどして、タミノは素直な調子で、
「——そう云いやそうだね」
ゆっくりそう云って、溜息をつくのがひろ子に聞えた。

六

朝っぱらから所轄の特高が託児所へ来た。何ということなしその辺をうろつき、
「豊野が来るだろう」
と、土間にある履物を穿鑿的に見た。豊野などという名前を、ひろ子たちは知らなかった。
「何、しらん? うそつけ、ちゃんと連絡に出ているところを見た者があるんだ」
それは明らかに云いがかりで、そのまま帰りかけたが、
「おい、ありゃ、何だ!」
ステッキの先で指すのを見ると、それはこの間溝にうちこまれたあと、また立て直されている託児所の標識であった。
「何って——わかりきってるじゃないか」
タミノが出て云った。
「もう一年もあすこに立ってるんだもの」
「立てていいって誰か云ったのか?」
いかにも煩さそうに、タミノが、
「だって、立ってるんだもの。ここがこうやってあるんだ

から――」
　と云いかけると、その男はおっかぶせて、
「そりゃ分らんよ」
　といやに意味深長に云った。
「こっちで、ない、と見りゃ、在りゃしないじゃないか。日本プロレタリア文化聯盟だって、当人たちはあるつもりらしいが、われわれの方じゃ、あらせちゃいないんだ」
　タミノは、その男が去ると　地べたへ唾を吐きつけて云った。
「チェッ！　すかんたらしい！」
　その次の日の午後二時頃、ひろ子が二階でニュースの下書きをしていると、誰かが一段、一段と重そうに階子をのぼって来る跫音がした。きき馴れない足どりであった。ペンを持ったまま振り向くと、そこには、鍾馗タビの稲葉のおかみさんが、風呂敷包みを下げたなり上って来ている。包みからは大根がはみ出していた。
「ああ、小母さんなの……どうして？　何か用？」
「大谷さん、ここへきなかった？」
「――来ませんよ」
　大谷とは、今夜会う約束なのであった。稲葉のおかみさんは、平常でない目のくばりで、
「じゃア、やっぱしそうだったんだろか」
　ひろ子は、自分でも知らない速さで椅子から立ち上った。

「どうした？」
「――あたし、見ちゃったんだヨ」
　その声の表情にはひろ子をぞっとさせるものがあった。
　おかみさんの家が講の当番なので、今日は休んで買い出しに出た。駅前の大通りをこっちの方へ曲ると、前の方を大谷らしい男が、もう一人別の若い男と連れ立って歩いて行くのが見えた。稲葉の神さんは、もう少し近づいてみて大谷だったら声をかけようと思ってうしろからついてゆくと、ラジオ屋の角で若い方の男が別れた。二つばかり横丁をすぎた時、駄菓子屋の横から一人の洋服の男が出て来たと思うと、早、もう二人どこからか出て来て丁度前後から大谷を挟んだ。
「おい！」
　何とかいうのと、大谷がすりぬけようとするのと、その大谷をすばやく三人が囲んでちょっと組合いがはじまったのと、稲葉の神さんの目には、すべてが速い、鋭い、音のない電光のように映った。むこうへ行かず、駅前の方へ戻るので、お神さんは袂で半分顔をかくして軒下に引っこんでいた。その眼に映ったのは左右とうしろからとりかこまれ、手錠をはめられた男の姿であった。それでも落着いて着物の前を不自由な手先で直しながら来たのは、たしかに大谷だったというのである。
　ひろ子は、聞き終った時、喉がつまって、変に声が出し難いように感じた。暫く、ペンをもったままの右手で口を

抑えるようにしていたが舌の乾いた声で、訊いた。
「大谷さん、何か持ってませんでしたか？」
「サア、私もあれッと思っちゃったもんで――ちっちゃい包みみたいなもの下げてたね、たしか」
「先に別れた男って――どんな装してました？　洋服？」
「洋服なんぞじゃあるもんか、そら、そこいらによくあるじゃないの、書生さんのさ、絣だったよ、多分」
ひろ子の瞳孔が、凝ーっと刺すように細まった。絣……絣。臼井は絣ばかり着ている。――だが――
「そのひとの顔は見なかったのね」
「だって、あんた、そりゃ先へ曲って行っちゃったんだもの……」
一段おきに跨いで、タミノが下から登って来た。
「きいた？」
赤い頬の上で、タミノは眼をギラギラさせた。
「こっち来るんじゃない？」
稲葉のお神さんは、何かが身近に迫ったのを直感したように、ひろ子の顔からタミノへ、又ひろ子へと不安そうな目をうつした。ひろ子はそれに心づき、
「大丈夫よ！」
タミノに向って目顔した。
「ここは託児所だもの、ねえ、変なことをすりゃ、おっかさん達だって黙っちゃいやしないわねえ」
汗が出ているというのでもないのに、稲葉のお神さんは縞の前垂を指にからんで頻りに小鼻のまわりをふいた。
「ポロレタリヤは、しとじゃないとでも思ってけつかるのかしら！」
稲葉のお神さんが下へおりて行くと、待ちかねたように、タミノが力のある腕を動かして戸棚から行李を引きずり出した。そしていらない紙きれを注意ぶかく始末しながらタミノは、
「ここまで総ざらいなんての、御免だね」
と呟いた。
それは分らなかった。ソヴェートの友の会が各地区の職場へ拡がって、ソヴェート見学団の選出が職場でされるようになったら、その活動は却って不自由にされた。市電応援の活動と大谷の部署の関係とから、託児所へまで余波が来ることを全く予想していないことではなかった。或るところへ電話をかけ、そこから必要な場所へ知らして貰うため、タミノを出した。
重吉がやられた時、ひろ子は自分では十分落着いているつもりであったが、大谷の家の降りなれた階子の中途に下っている壁の横木へ、二度もひどく自分のおでこをぶつけた。その薄い傷あとを黙って見ていた大谷の眼差し、それから、
「まア、飯をたべて行きなさい」
と、チャブ台へ自然とひろ子を坐らした大谷のもの馴れた思いやりのこもった沈着さ。仕事で彼によって成長させ

られた色々の場面を考えると、ひろ子は、遂に彼のつかまったくちおしさで腹が震える感じであった。
　いつだったか、ひろ子は大谷がもう少しであぶなかったところを、樹へのぼって助かったという話を誰かからきいた。ひろ子が面白がってその噂を重吉に喋り、
「ほんとにそんなことがあったの？」
　と訊いた。重吉は、ひろ子の顔を一寸見ていたが、直接そのことがあったとも云わず、ただ
「なかなか早業をやるよ」
　そう答えて、愉快そうに笑った。ひろ子は、後々まで、そのときの重吉の返事のしぶりを思いかえして、心に刻みつけられるものを感じた。重吉と大谷とのつきあいの深さは、互いの噂を個人的に喋りちらす以上のものであり、そういう友情が歴史を押しすすめるための大事な見えないバネとなっている。その値うちがひろ子にも近頃少しずつ分って来ているのであった。
　だが、果して大谷はやられなければならなかったのだろうか。ひろ子はそう考えると、大谷のやりかたにも口惜しいところがあるように思えた。例えば絣の男ときいてひろ子の頭に浮ぶのは臼井という人物である。もしそれが、稲葉の神さんのみたあの絣であったとしたら、ひろ子が言葉は少くしかし意味は深く漠然とした疑いを話したとき大谷は、比較的あっさり、ひろ子の不安を否定した。だが大谷は絶対にそのようなことがあり得ないという確信を持つ客観的な根拠があったのだろうか。
　この前後のいきさつには、ひろ子として何か口惜しいところがある。
　僅か一日おいて、託児所からタミノがやられた。
　ひろ子が子供らの駆虫剤をもらいに診療所へ行ってかえって来たら、溝橋のところに二郎と袖子がこっちを見て立っていた。遠くでひろ子の姿を見つけると、二人の子供は手を繋ぎあわせ、駆けられるだけの力で走って来た。子供らの様子を見た刹那、ひろ子は、何故か、火事！　と錯覚した。こちらからも思わず小走りになった。出逢いがしらのひろ子のスカートへ掘りかかって、二郎が、
「あのね！　あのね！」
　息を切り、
「飯田さんがつれてかれちゃったよ」
　と告げた。
「いつ！」
「さっき！」
「小倉さんは？」
「いる」
　その朝の新聞に、市電争議打ち切りが出た。タミノは、立ったまま新聞をひろげて見ていたが一遍おろしたのを又とり上げ、
「あたしたちが、こんなことを今朝になってブル新で知るなんて。――何てくやしいんだろ」

と云った。その直截な表現は、ひろ子の心持とも云えた。

お花さんが、その話をきいて、

「あれ、あたし困っちゃったな、近所せわりいようでさ。ストライキするからって、たとい一銭にしろ、袋せ入れてむらったんだもん……ねえ」

基金を出した親たちに、争議は従業員が実力を出して負けたのでないことを説明したビラを刷る、その仕度をタミノはさっき迄していたはずなのであった。

小倉は、入って来るひろ子を見ると、

「ああ、よかった!」

まるでたぐりよせられるように立って来た。

二人の特高が、まるで何でもないようにやって来て、ろくに物も云わずいきなり二階へのし上った。すぐつづいてタミノがついて上り、降りて来たのを見ると、一人の特高が手に、赤インクで「赤旗」と題を刷ったものを持っていた。それでタミノの顔をぶった。

「しらばっくれんな、貴様党員じゃないか。大谷が皆喋ったぞって、それはそれはひどくぶたれなすったわ」

そう云いながら小倉は涙を浮べた。

ひろ子は我知らずきびしい調子で、

「そんなことは、うそだがね」

と云った。ここの託児所に一枚だってありようのないそういう文書が口実として、どこかから用意して来てつかわれる。それは、プロレタリア文化聯盟の弾圧の場合にもつかわれたてであることをひろ子はきいていた。

ひろ子は小倉を励ましながら、大きい白い紙に、何の理由もなくもう三カ月近く警察の留置場におかれている沢崎キンのことと更にさっきひっぱられて行ったタミノのことを書いて、入って来る者の目にすぐつくように、上り端の鴨居に下げた。

自分がこの今の一ときはのがれているその永続性が、夜までつづくか、あしたまでつづくものか、ひろ子には見当がつかなかった。ひろ子はひとりで二階へ上って見た。三畳のテーブルのまわりが取乱されている。テーブルの下の畳へ、ペン軸が上から乱暴にころがり落ちたまま突刺さっていた。しずかにそれをぬきとり、ひろ子はそれをいじりながら、夕方子供の迎えに来る親たちで、そのまま会合を持つ方針を立てた。それから下へおりて行って、小倉に一つの包みを託した。なかみは、獄中の重吉のための一着のジャケツであった。

(一九三五年四月「中央公論」)

鈴木・都山・八十島

中野重治

カタリという音を聞いた時田原は来たなと思った。今日は『人』の来る日だった。彼はこの週刊新聞が七日ずつ遅れて来ることにもう慣れていたが、それ以上一日でも遅れるとどうしてもいらいらせずにいられなかった。何度か彼は待ち切れなくなって報知器を下ろして看守に訊ねた。「『人』はまだ来ないんですか？」その都度看守は、『人』というようなものを待ち焦れる人間がどうして存在するのか理解できないような、またそういう人間が彼の毎日の相手であり、彼の生計がそういう人間との毎日の交渉の上に営まれていることについて一度として考えたこともなく今後も決して考えないに違いないことが一度で分るような調子で「あ、来ないようだな」と答えるのだった。何度か同じ経験をして以来田原は二度と訊かなかった。今日も彼は朝から（それが予定日の癖になっていた）雑役や看守の足音、床屋や検閲係りの何かの話し声に苦しいほどきき耳を立てていた。しかしその足音や話し声は、近くて高い時でも非常に不分明にしか聞えなかった。遅れても三日待てば確実に来ると分っていることで幾分かでも落着くことは彼には出来なかった。「今日も来ないんじゃないか？」という不安がいつも先きに立った。ちょうど一年前、父、妻、妹以外のものとのすべての手紙往来が禁止されて以来この気持は強まっていた。カタリという音を聞いて彼は自分で気羞しくなるほど有頂天になりながら非常な素速さで二つ折りになった新しい『人』を手元へさらい取った。

「スキーの季節に入る」という題の写真、「主張——歳末随感」、「第六十五議会——開院式は二十六日」、「海軍の巨将山本権兵衛伯逝く」というような題をざっと眼に入れてから彼は「主張」を読みだした、「又しても今年は暮れんとしている。慌しい思出であった。永劫から無限に流れて行く歳月に、我々の小さい人生の足跡を、瞬間的存在としての歴史を残しているのだと考えると、何んとなく心細い感じがしないでもない。然しそんな現在と縁遠いことを考えると言うことは、余りにも非現実的な、そして又感傷的なことで感心したことではない。歳末に際して、先ず第一に自己の経て来し三百六十五日を反省して見たい。去年のそれと幾何の進歩向上があったのだか、或又斯る点に於ては……」彼は舌打をして裏の方をひっくり返した。進歩向上が「あったのだか」！　「或又斯る」——もう何十ぺんもしたと同じように、毎号「主張」を書いている岡生とい

う男に業を煮やしながら彼は「編輯だより」を読んだ、「本号を以て本年の最終点といたし十二月二十五日発行にあたる分は前例によって休刊いたします。新年号は特別増大号として諸大家の有益なる修養談をはじめ、新春の読物を満載することになっています。本年最終号にあたり読者諸子の健康なる越年を祈り上げます。」彼は「読者諸子」でにやりとしたが、ふとそのすぐ傍に枠つきの「記事取消」を見つけて、「なに？　なに？」と独りごちながら読んだ——『人』に取消しの出たことは彼の知る限りかつてなかった——「本月五日貴会発行『人』第三百八十二号所載『農村の窮迫を聖上御軫念』と題する記事中侍従武官長が『偽らざる農民の声』を奏上云々並に小野宇之松氏に『偽らざる農民の姿』を約三時間に亙って聴取し奏上する事になった旨記述しあるも右は事実無根に付本全文を掲げ取消相成度候——右侍従武官府より御達に依り謹んで取消しを致します。」

彼はあわてて、箱お膳わきに本の下敷きにしてある六・七部の『人』の中から第三八二号を出して読み返した、「農村の窮迫を聖上御軫念——侍従武官より小作人の語る実情を奉答。天皇陛下には非常時農村の実情について深く大御心を垂れさせ給い、侍従武官長本庄繁大将にしばしば御下問あらせられ、本庄武官長は恐懼して『偽らざる農民の声』を奏上していたが、たまたま同武官長と姻戚関係にある土浦町前町長笹部重道氏の金婚式がこの程目黒雅敍園に催された折、同席した新治郡藤沢村坂田農小野宇之松(五四)氏に『偽らざる農民の姿』を質問、約三時間に亙って詳細聴取しこれを『一小作人の語る農村の現状』として奏上することとなった。藤沢村の農家に小野氏は有難き叡慮の程を偲びまつりて感泣しながら語る——本庄武官から三時間余に亙り農村の現況についていろいろ質問されましたが、現在の農民は非常に真剣であることを申上げました。何ぼ働いても『残る』などいうことは考えられません。強いていうならば、労力が純益とでもいうのでしょう。私どもは小作で一町二反歩程耕して居りますが、たとえ自作であっても朝から晩まで一生懸命働いてカツカツです。災難でも起るとそれこそ手も足も出ません。それから農民がいま一番気にしているのは繭の相場です。何れ詳しく書面ででも申上るつもりでいます。」

田原は去年の今頃札幌の権堂という青年が（未知の男で手紙の文面から推して青年と思われた）書いてよこした水害と凶作とのことを思い出して、その時分の『人』をむざむざ捨てさせられてしまったことを後悔した。（その後彼は頑強に主張して『人』をすべて「領置」に保存させて来た。そして多分四年位後に一抱えほどの『人』と二十円位の金とを抱えて出て行く積りでいた。）凶作地農民に御料林で薪や食い代を探す許可の下りたことがどれかの号に書かれていたのだった。思いついて彼は『毎日年鑑』を引き出して巻頭の「宮廷」の欄を開けてみた。「皇室祭祀」、「皇

室御料地」、「宮城」、「御苑」、「離宮」、「御用邸」、「御猟場」、「御料牧場」というような項目の中から彼は数学を拾い出して紙石盤の上へ写した。

御料地	一、三二〇、四三四町
宮殿地	七一八町
宅地	二四〇町
林地	一、二四六、二七一町
農地	六九、〇七五町
雑地	四、一三〇町
世伝御料	二一六、六二四町
宮殿地	四七八町
宅地	三九町
林地	二一四、二八四町
農地	一、七六〇町
雑地	六三町
普通御料	一、一二三、五六九町
宮殿地	一九三町
宅地	一九三町
林地	一、〇四七、四六三町
農地	七一、六八七町
雑地	四、〇三三町

金がなくて今年の年鑑が買えなかったため去年のものを使っていたが、皇室御料地の大きさに大きな変化があり得ようとは彼には考えられなかった。彼はそこに説明してないため、「御料地」、「世伝御料」、「普通御料」の間にどんな差別があるか全く知らなかったが、念のため二、六六〇、六二七町歩という合計を出して見た。それから「諸等数」という言葉をはじめて知った小学生時代の記憶を夢のように辿りながらそれを坪に直した。一町は一〇段、一段は一〇畝、一畝は三〇歩——七九八、一八一、〇〇〇坪。彼はこの頃こぼして来た父の手紙を思い出して土地にかかる税金について考えたが、土地種別による税率の変化さえ知らぬ彼には問題がそれ以上数学的に進むことは出来なかった、「それにしても」と彼は考えた、「もしすべて土地というものが……」

カチャカチャッという鍵の音が田原の思考を中断して、細目に開けた扉から背の低い鈴木が笑顔をのぞかした。

「いいですか？　お忙しいですか？」

「いや、どうぞ、どうぞ」自分も笑顔になりながら田原はよりかかっていた小机を心持ち鈴木の方へずらして愛想よく問い返した、「その後出来ましたか？」

「いや、出来もしないんですが……」鈴木は髯の濃い顔を赤くして扉を後ろ手にしめながら開いた方の手を伸ばしてカタリと報知器を下ろした、「こういうのですけれど、駄目なんです」

何だって報知器を下ろすんだろう？「中央」から見られても被告人に呼ばれてはいってることにはなる訳だが、しくじったものがあったのか知らと思いながら田原は紙切

れを受け取った。
病みほけて必ず思い出だすらん山峡の駅に食せし天井
今日もまた真赤な情念に打たれけりほのかに浮かぶ君が
　面影
意久地なき兄を見つめて泣け泣けと我と我が身を罵りて
　見る
どうせそうよとお白粉の顔を寄せて来る馬鹿にするなと
　つっ立ち上る

ふる里を遠く
今朝初めて降りしきる粉雪
唖の如く沈黙の底に沈澱して苦しむ我
囚衣を着居るも同じ人の子
同じ人の子

事あれば我に尋ねよと言いし師は既に死なれて三とせと
　なれり
事あれば我に尋ねよと言いし君家を訪ない共に淋しむ
「そうですね……」鈴木の原稿を読むたびに感じる一種の困った気持がこの半年間に殆ど変化していないことを考えながら田原はどこから切り出すべきかに惑った、「これはいいでしょうね。それからこれも詩もいいでしょう。」と田原はいった、「これは友達か何かなんですか？」
「そうなんです。僕の親友でしてね。非常にいい人なんです。一しょに旅行したことがあるんですよ。今病気しているんですがそうした気持を……」「そうした気持」とか「そうしたこと」とか言うのが鈴木の昂奮して来た時の癖だった、「そうした気持を歌った積りなんです。」
「それは出てますよ。これはかなり纏ってるでしょうね。しかし」といって田原は理解されるかどうか危ぶみながら続けた、「その人は今病気で寝てるんでしょう？　寝ていてきっと思い出しているだろうというんでしょう？」
「そうなんです。」
「そうするとですね。病みほけて必ず思い出だすらんというのでは少し足りなくはないんですか？　病みほけて必ず思い出すだろうってんでなしに、病みほけいてて思い出しているだろうという……今のことじゃないんですか？　それが……」
「そうなんです。今思い出しているだろうというんです。」
「そうするとですね。そのことをはっきり言う必要があると思うんです。」
「はあ……」といって鈴木はしゃがんだ。
「つまりですね。病みほけて必ず思い出だすらんというのでは今病気で寝ていなくても言える訳でしょう？　今はぴんぴんしてるがいつか病気になってきっと思い出すだろうということにもなる訳ですね。」
「そうなんです。そうした気持なんです。」
「今病気していないんですか？」と田原は混乱して訊い

た。
「いや、今すっかり衰弱してるんです。」
「そうでしょう？　だから今衰弱していて思い出しているだろうというんです。現在ですね。いつか思い出すだろうじゃなくて、あの時うまかった天丼をいま思い出しているだろうという……」
「そういうことにならないでしょうか？」
「いや、なります、なってますがね……」田原は説明仕方に対する自信で曖昧になりながら続けた。
「将来のことになる恐れがあるんですよ……しかし、まあいいでしょうね。食せしというのは食いしの方がいいかな？　しかしどっちでもいいですね。それからこれは『師』と同じ人じゃないんですか。この『言いし君』というのは？」
　鈴木は帽子を冠ったでっかち頭をつき出して紙切れをのぞき込んだ。
「ええ、おんなじ人です、（彼は猟犬のような素速さでドアの外へひょいと首を出してまたすぐ戻した。）僕の先生なんです。」
「そうするとこの『家を訪ない共に淋しむ』というのは誰なんです？」
「奥さんがいるんです。今東京へ来てるんですが……」
「そうでしょう？　そうするとしかし、この『共に淋しむ』という『共に』というのは先生のことになりやしませんか？　しかし先生は死んじゃって奥さんが残ってるんだから……そりゃ連作だから分るには分りますがね。」
「そうですね。」と鈴木は自分に納得させるためかのように田原の言葉をくり返した、「共にというのは先生と共にということになりますね。しかし先生は死んでいるんですからね……」そして「ふふふ……」と満足そうに笑った。自分も笑いながら田原は続けた、「それでこっちの方はこれでいいでしょう……それからこれは言葉のことだけれども、この『事あれば』という『あれば』ですね……」
「え……」
「この『あれば』は間違いなんですよ、（「間違いなんですか？」と鈴木がいった。）間違いなんです。『あれば』というのはあるからという事があって、事があるから、あるのでという意味なんです。しかし先生の言ったのはもし何かあった場合にはというんでしょう？」
「そうなんです。」といって鈴木は帽子を冠り直した。
「だから『事あらば』としなくちゃいけないんです。『事あれば』じゃなく『あらば』……」
「しかし何かあればと言ったんですよ。そういうじゃありませんか？　もしあればなんて……」
「言いますよ。言うけれどもそれは違ってるんです。あったらばとかあるならばとかいうのが『あらば』なんです。あるから、あるのが『あれば』……」「あらば、あれば、あれば」と口の中で繰り返している鈴木を見ながら田

原は中学時代のある日の国文法の時間を思い出した。その時はじめて彼は日本文法というものに生きた興味を感じたのだった。その時の驚きは二十年近くも彼の中に生きて来ていた。「勅語、教育勅語を知ってるでしょう」と彼は続けた、「勅語に一旦緩急アレハとありますね？　あれは……」

「ちょっと待って下さい」といって鈴木が立ち上って外へ首を出した。と、「ちょっと」と首を下げるなり非常な速さで外へ飛び出した。高い鍵の音――そして看守長のいる「中央」の方へ駈け出す草履の音が田原に聞えた。田原は原稿の方へもう一度移って行く自分の眼を意識しながら、これ以上説明することに退屈を感じ出している自分を感じた。彼は眼をつぶって額へ手をあてた。一昨日あたりやっと退いたと思った最近の熱がまた出て来ているらしかった。秋以来四カ月ほどの間の熱のさし退きから、病気の性質があまりよくないらしいことが改めて感じられた。

カチャカチャッと鍵の音がしたので田原はいきなり原稿を握りつぶした。そして

「失礼しました」と再び扉を後ろ手にしめながら鈴木がはいって来た。「あればというような言葉ですね」と彼は肩で息をしながら、今し方の中断を全く無視して続けた、「それはむずかしくいえば間違っているかも知れないですけれど、誰でも普通そういってるならば使ってもいいんじゃないでしょうか？　僕はむずかしいことは分らないですけど、何も文法にこだわらなくともいい。みんな平生、(彼は上唇をなめた)たとえ間違っていても平生使ってる言葉ですね、そうした言葉は僕らは歌の中へ大胆に入れていいんじゃないんでしょうか？」

(そうした言葉は)――(大胆に)――「そうです、そうです」と田原は答えた。鈴木が時々そういう形で理屈を持ち出すことが彼と話す時の田原の楽しみの一つだった。鈴木の理屈は論理的おしゃべりに対する田原の情欲を刺戟した。彼は熱っぽい気だるさの中でではあったが、この半年間批評だけは真面目にして来たことを思い返しながら続けた、「平生使ってる言葉はどしどし使うべきだと私も思いますね。文法にこだわる必要なんかないんです。しかしですね、文法を無視してもいいということじゃない。言葉が二つあって一方が……」

「ああ、呼び出し！」という都山の声がした。

「呼び出し……」

あわてて飛び出した（そして報知器を起した）鈴木の後ろから、都山が肺病人特有の青黒い顔を入れて田原に言った。

「面会ですか？」と田原は、ある理由から多分そうではないだろうと考えながら訊いた。彼は編笠を取り出しながら屑籠の上で手を開いた。玉になった鈴木の原稿がぽとりと落ちた。

「いや、呼び出しだ。」と都山が答えた。

「来たな。」と思いながら田原は「予審判事ですか？」と訊いた。
「予審判事だ……はあ、行きますよお。」
と彼は下の方へ呼んだ。
「御飯の用意！」
向うの端で雑役が叫んで車の音がした。田原は急いで膳の用意をしてそれを入口のところへ出して置いて廊下へ出た。
「行きますよお。」と都山がまた下へ呼んだ。田原は鉄板の階段を下り、別の補欠看守に後ろからくっつかれて、四・五日前降った初雪が溶けずにまだ残っている建物の蔭を新館事務室の方へ草履を引きずって行った。都山は田原の担当看守だった。鈴木はそれよりも一段地位の低いあちこち一時仕事に使われる補欠看守だった。半年——一年といる中に田原のところへ詩を持って来る看守（彼等はすべて補欠看守だった）は三人ほどになっていたが、半年ほど前に初めて知った鈴木の質が田原には一番いいと思われた。彼等は補欠で来た時だけ詩を持って来ることが出来た。そしてこの頃は被告人が部屋を空けたあとを黙って監房検査するらしかった。
看守の開けたドアの中へはいると同時に田原はムッとするスチームのいきれを感じた。彼は広い部屋の正面に大テーブルを前にして腰かけた小柄な予審判事とそれと直角の位置にかけた書記の青黒い吹出物のした顔とを見た。田原は判事の前へ進んだ。窓からの逆光線を背負っているため分らなかった判事の顔や髯が初めて分った。判事が黙っているので瞬間的なためらいを感じた田原は、しかし編笠をわきに置くと軽く頭を下げて判事に向き合って置いてある椅子に腰かけた。
「僕は八十島予審判事だ。」腰かけた田原の眼をまっすぐ見入りながら八十島が儼然とした口調で言った。それは田原が、原田警部を除いては、前の事件の時の椿判事からも、住んださきざきの警察のものからも、肉体的なまでの憎悪感を感じている浦島警部と柳本検事とからもかつて受けなかった調子の挨拶だった。八十島の人物が田原に何となし軽く思われた。
「君は田原だね？」八十島は口一ぱいに金入れ歯をしているらしく、それが煙草の脂で黒ずんで光っていた。
「そうです。」と田原は答えた。
「実は君の細君がうるさくやって来てね」と八十島は幾分顔を和げた、「家の方の事情も大分困ってるらしい。早くやってくれといって仕様がないのだが、我々の方も、人が変ったりするし忙しいものだから……遅くなって気の毒したがこれから取調べることにする……（そして彼は書類綴りを引き寄せた）……それで、予審は受けるね？」
「は、受けます。」と田原は答えた。しかしこの問いは田原にややふいだった。彼は書記が墨をすり出したのを見た。

「第一に訊くが」と八十島は始めた、「君は党組織にはいってたことを認めるかね？」
「認めません。」と田原は答えた。
「認めぬというのだね？」
「そうです。つまりはいっていなかったから認めないというのです。」と田原は答えた。
「ふうむ……君と一しょに、多少前後はあるが君達の仲間がやられたことは知っているね。（「大体は知ってます。」と田原は答えた）その連中が、しかも重なるものだ、異口同音に田原は確実に組織成員であったといってんだがどうだね？　（田原は黙っていた。八十島は細い鉛筆を出して野紙に何か書きつけた。田原はそれを判断したかったが全く分らなかった）しかも単なる成員じゃない、重なる一員だ。」
田原は黙っていた。
「君は大森を知ってるね？　（「知っています。」と田原は答えた）大山を知ってるね？　（「知っています。」と田原は答えた）大森も大山も君が成員だといってるんだ。大山は君が成員だったといっている。もちろん大山も成員だ、そう認めている。それから大森は君がフラクの責任者として淀橋の堀江という家へ集っていろんな問題を討議したといっている。（田原はその家を知っていたが家の名は知らなかった。彼は必要なものは家を知ることで家の名ではないと考えていたのだった。）どうだね？　それでも認めぬというのは妙なもんじゃないか？」
田原は黙っていた。彼は自分の眼に釘づけされている八十島の眼を払いのけるために何か言いたい衝動を感じたがおさえつけた。彼は眼たたきをなるべく数少くするように努力しながら出来るだけ静かに相手を見ていた。何分かして――しかし一分もたたなかったかも知れなかった――彼は八十島の上唇が上方と左右とへ引かれて入歯をした歯並みが歯齦まで現れて来るのを見た。八十島は微笑したのだった。八十島は開いた上唇を歯の上へ着せるためかのように口髯にさわりながら「やはり認めぬというのだね？」といった。
「え。」と田原は答えた。
「じゃ君は大森や大山が嘘をついてると思うのかね？」
「嘘をついてるとは思いません。」と田原は答えた。
「じゃあ妙なもんじゃないか？　（「妙なもんじゃないか」というのがこの男の口癖の一つなのだろうと田原は思った）左翼の連中は僕等の知ってる限りでは嘘はつかぬものなんだ。否定することはあるよ。しかし少なくとも他の同志の名を出す以上、どこまで出すかは別だよ、嘘は絶対にいわない。これや、ま、一般の常識なんだ……」
「大山君や大森君が（と田原は君づけで呼んだ）嘘をつくかつかぬか私は知りません。」と田原は答えた、「嘘をついてるとは思わないと私はいうわけなんです。」
「大森も大山もはっきりそういってるんじゃないか？」

（八十島の口調は、わざとそうしてるようにも思われたが少し怒ってるように聞えた。）

「大森君や大山君がどういってるかは私は知らないんです。しかし私としては、あの人達が嘘をつくとは思ってはいないといってるんです。」

「じゃ君は嘘をいってるのは僕だというのかね？」

「いや。」田原はもっと何か言いたかったがそれだけで切った。八十島がそれを聞かぬ振りをしたと田原は思った。

「君の学歴は？」としばらく黙っていてから八十島は始めた。彼は厚ぼったい書類綴りを同じように開いて幾分かずらして載せた。

「大学の文学部を出ました。」と田原は答えた。

「大学はどこだ？」

「本郷です。」

「本郷大学なんてないじゃないか？」

「いや、本郷の帝大なんです。」と言い直しながら田原は不愉快を感じた。

「卒業したのかね？」

「しました。」と田原は答えた。

「何年度かね？」

「二七年です。」

「君、西暦は止そうじゃないか！」鉛筆を放り出して八十島は真面目な顔をした。「お互い日本人だ。神武紀元もあれば年号もある。昭和何年だ？」

「昭和……と」田原はまごついて「今年は昭和八年ですね？」と訊いた。「そうだ」と八十島が苦りきって答えた。

「三三年が昭和八年だから……」と田原は胸算用をして「昭和二年です。」と答えた。昭和元年が同時に大正一五年であることで彼は計算上うろたえた。

「じゃ僕の方が少し先輩だ」と八十島が待ち構えていたように言った。田原は聞いていた。「僕も文学部だ。」と八十島は続けた（田原は文学部を出た判事を珍しいと思った）、「社会学科を出た——（彼は何か回想したらしかった）——大学も同じ大学、学部も同じ……学友だ、君。（田原は「はあ」と答えた）母校を同じくするものがこんなに対しているなんて余り感心せんじゃないか？（「感心しませんね。」と田原は笑顔をして答えた。彼は息ぬきをしたいと感じた。八十島の頬にシミのあるのに彼は気づいた。）学友会で顔を合わしても先輩後輩として俺・お前で『よう』と言えんじゃないか？（田原は自分の大学時代について考えたが学友会というものを知らなかった。八十島の言葉で彼は何か非常に汚れた——汚ないというよりも道徳的に汚ない——手で撫でられたような生理的な悪寒を感じた。また八十島という男が、わざとしているのでなしに本質的に豪傑風学生のような卑俗さを持ってるように感じた）僕は自白を強要はしないよ。強要はしない。しかし分り切ってるじゃないか？　君のようにしていればただ心証を悪くするだけじゃないか？　勿論心証を悪くしたからといって

裁判所の態度に変りはないさ。しかし裁判所だって人間だからね。……思想上の問題は別だが、個人としては僕らだって君等に相当な尊敬は払っている。だから君等程度の人に思想を捨てろとはいわぬさ。自白を強要はしないよ。また必ずしもどこどこまでも言えというものでもない。君等が共産主義者として組織上の秘密を守らねばならぬ位は知っている。ここまでしか言えぬ、言わぬというんならそれ以上強要はしないんだ。君等だって知ってるだろうがそういう例は多々ある。…(そういう例があるかも知れないと田原は思った)しかし子供らしいじゃないか? 君一人の問題ならいいさ」と彼は続けた、「しかしほかの連中はどうするんだ? いたずらに全問題を長びかすだけじゃないか? 君一人そうやって下らぬ頑張りをしているだけほかの連中が迷惑がってるんだ。名はいわぬが、迷惑がってる人がいる。嘘だと思うんなら出してもいいがね。(「迷惑がってる」という言葉は田原にある現実感を伴って聞かれた)僕は君がそうやって頑張ってること一般を下らぬというんじゃないよ。分り切ってる部分を否定してるものとしての頑張りを下らぬというんだ。子供らしいじゃないか?・どうだね、昭和七年九月初め以前において日本共産党に加入しているのではないかね?」

　この最後の言葉の調子はかなりねばっこく田原にきこえた。

「いいえ、加入しておりませぬ。」と田原は答えた。

「ふうん……」といって八十島はちらりと書記を見た。墨をすりやめていたらしい書記は彼の机の上の一部分を見つめたまま——同じ姿勢で聞いていたものと田原には思われた——再び墨をすり始めた。彼はかなり見すぼらしいなりをしていた。彼の顔色の青黒さが自分の顔色に似ているのを見て田原は書記に対する一種の理由のない好感を持った。

「じゃ作家組織の話を聞こう。」と八十島が再び始めた。

「ちょっと待って下さい。」といって田原は中腰になりながら判事に訊いた、「窓をちょっと開けてもいいですか?」

「何だ、あついのか?」といって八十島が書記の方へ顎を向けると書記が立って行って窓を二つすかした、田原は立ち上るのが早過ぎたことを感じながら多少態裁わるく腰を下ろした。「カーデルオルガニザチョーンのことはどういう風であったかね?」八十島は続けた。

「カーデル……」田原は何のことか分らなかった。「どういう風であったかね?」という口調に何か心持ちを感じたがそれと結びつけてその「カーデル……」を聯想することが出来なかった。

「カーデルオルガニザチョーン、新幹部の養成だ。」と八十島が言った。

「あ、Kader……」

「む、カーデルオルガニザチョーン。」

田原はこみ上げて来るものなつかしさを感じた。幹部隊

め養成——いかにそのための努力がなされたであろう。それに関して主として彼の責任である失敗の記憶をも含めて人に語りかけたいという強い情緒に彼はゆすられた。同時に彼は他人の声で発音されたドイツ語の音——その音の短い連続を、殆ど自分の耳を疑いたいほどのある珍しい甘美さで聞き、楽しんだ。この一年半の間彼は音読する自分の声以外の声でどんなドイツ語をも聞かなかった。一年半の間に彼の読んだドイツ語の本の中にKaderというような言葉はたしかに一度も出て来なかった。Kaderorganisation……八十島が鉛筆でまた何か書きつけたのを見て我に帰りながら田原は訊いた、「幹部養成のどういう点ですか？」

「幹部の養成ということが確かにいわれたね？」

「いわれました。」

「それは新しい幹部の養成、同時に古い幹部の再教育という意味でいわれたね？」

「そうです。」

「カーデルとは、フランス語のカードル、ドイツ語のスタム、聯隊幹部の意だ。(と彼は詩のように続けた)……しかし我々にあっては、(彼は「我々にあっては」といった)それは、コミンテルン、すくなくともプロフィンテルンが、特定の段階において設定した活動方向の一つの戦術的規定だ。(田原は聞いていた)……日本における革命的文化活動の当年におけるカーデルオルガニザチョーンのスローガンは、この戦術的規定と、『ローテ・ゲベルクシャフツ・インテルナチョナール』一九三〇年一〇月号附録、『労働組合宣伝と文化活動』所載の論文『プロレタリア文化・教育組織の役割と任務』とが結びついてそこから引き出されたものだ。それの日本における文化運動への直接の適用だ。そうじゃないかね？」と彼は切った。

「そうじゃありません。」と田原は答えた。彼は八十島がドイツ語の文法を間違えてると思った。「新幹部養成の問題についての文化団体の活動はコミンテルンなどに関係のあるものではないのです。」

「日本共産党に関係ある問題なのか？」と八十島が言った。

「日本共産党に関係あるものでもありませぬ。」

「どうしてそう言えるのかね？」

「私のいる作家組織について見てそれが事実だからなのです。」

八十島の目が再び自分の眼に釘づけされたのを田原は感じた。彼はある努力でそれをじっと受け留めていた。しばらくして八十島の上膊が再び上方と左右とへ引っぱられた。田原は八十島が心弱く微笑に落ちるのを見た。

「君は『プロレタリア文化・教育組織の任務と役割』というパンフレットは見ているね？」と八十島は訊いた。

「見ました。」と田原は答えた。

「いつ、どうして見たかね？」

「はっきり覚えていませんが三一年の夏頃だったかとも思います、警視庁で見ました。」と田原は答えた。その大分前にそのパンフレットが彼のところへ郵便で送られて来て彼は読んでいた。しばらくして画家の逸見がそのパンフレットの話をして田原に読んでいるかと訊いた。田原はある理由から読んでいないと答えた。そして家へ帰ってからその朝の郵便物の中にまじって色刷り表紙のそのパンフレットを見つけた。逸見の口調に考え合せて田原にはそれが大体において逸見達の仕事に思われた。彼は逸見達の仕方の中に火遊びを見たと思った。その後しばらくして彼は警視庁へ呼び出された。そして浦島警部からほぼ八十島から言われたようなことを言われた。彼はそういうパンフレットを見ていないと言った。『ま、僕の方には来てるんだが……』といったので田原が要求すると浦島は見せた。それは色刷り表紙の方だった。

「警視庁で？」と八十島は聞き返した。

「そうです。」といって田原は事情を説明した。八十島は三一年という言い方に今度は別に異議を称えなかった。彼はしばらく何か考えているようにも見えたが、「じゃ始めよう。」と言って書記に合図をした。書記は新しく急いで墨をすって、田原がいつも勿体ないと思う美しい日本紙を出して三本ほどある筆から一本を撰り出した。田原は一種の準備かのようにテーブルの下で手の指を握ってポキポキと折った。彼は腹がへったのを感じて今頃は飯も湯も水のようになってるだろうと思った。

「問として」八十島は始めた。書記が見事な字で片仮名で書いた。八十島は続けた、「君は昭和五年に起訴されてここへ来たね？（「来ました。」と田原は答えた）それは党へ活動資金を出したということについてだったね？（「そうです。」と田原は答えた）前回に引続いて訊ねるが（と彼は、書記に書けるようにゆっくりゆっくりと始めた）、前回被告人は、日本共産党にその活動のための活動資金を提供した廉により、昭和五年七月三一日、豊多摩刑務所に起訴収容されたものであるが、（「そうじゃないんです。」と田原がさえ切った）……そうじゃない？　シンパ事件だったじゃないか？（「そうです。」と田原は答えた、「しかし党へ党の活動のためとして金を出したのではないのです。」）しかし党へ金を出したというんなら活動資金じゃないか？党活動以外何に使うんだね？（「何に使うか知りません。」と田原は答えた、「金は出したのですが、はっきり党の活動資金として、そういうものとして出したのではないのです。」八十島は黙ってさっきの厚ぼったい綴りを取り上げて、「これやこの前の君の調書だ。ちゃんと拇印がある。」といってその中の一節を読み上げた。その文章は、常識的には田原が党へ活動資金として金を出したと読み取れるように書いてあったが、論理的には必ずしもそうは取れなかった。「明らかじゃないか？」と八十島はいった。「金を出したということは明らかですよ。同時に活動資金として

ということははっきり認識していなかったということも明らかなんです。」と田原はいった。「つまり漠然と出したというのかね？」と八十島はやや軽蔑したように言った。「そうなんです。」と田原は答えた。「じゃ」と八十島は始めた）活動資金じゃなく金員だ。（書記が文字を削して上の方へ急いで三字削除と書き入れた。）金員を……『活動のための』も直すか……あ、いい（書記はうろたえを見せた）……それはいい。別に書いて。別だ。（書記は新しい紙に急いで前書きを書いた）じゃ何だね？　この前収容されて、保釈になったのはいつだね？（「その年の一二月二六日です。」と田原は答えた）ふむ……それは事実だね？（「事実です。」と田原は答えた）問として、前回に引続いて訊ねるが、前回被告人は、予審判事から取調べを受けた後、昭和五年一二月二六日保釈となり、その後昭和七年五月三一日、右保釈を取消され、当刑務所に、収容された訳だね……と。これや間違ってるかね？（「その通りです。」と田原は答えた。）答として、間違いありませぬ。問として、保釈出所中における被告人の行動は？……これやどうだね？（「出てから一と月程田端の元の家にいました。」と田原は答えた。「それから？」「上落合へ引越したんです。」――「田端は何番地だね？」「四四五番地です。」――「上落合の番地は？」「四八一番地です。」――「田端に一カ月ほどいたというのは何をしてたんだね？」「病気で寝ていたんです。」――「それからずっと作家組織にいて、第三回大会で中央委員になってる。第三回大会はいつだったかね？」「昭和六年四月中です。」――「これや間違いないね？」「間違いありませぬ。」――）私は、保釈出所後一カ月余りは（書記が書いて行った）田端四四五番地の元の家で、静養して居りました。その後、昭和六年二月中に（「二月中だね？」と彼は訊いた。「そうです。」と田原は答えた）上落合四八一番地の現住所に移転しました。そして日本プロレタリア作家団員となっておりましたが、同年四月中、同団体の第三回全国大会で、中央委員に選出されました。問として、その以前にも、中央委員となっておったことはなかったか？……これやどうだね？（「ずっと前にもあったと思いますが、出てから大会までの間はどうだったかはっきり覚えていません。」と田原は答えた）答として、ずっと前にも、あったと思いますが、保釈後、前述、いや、前の日じゃない、前に述べるだ、前述の大会までの間に、中央委員になっていたかどうかは、今はっきり覚えておりませぬ。問として、昭和六年一〇月末か一一月中、日本プロレタリア文化団体聯合が、結成されていることは、承知しているか？……これや知ってるね？（「知っています。」と田原は答えた）答として、はい、承知しております。問として、その結成にあたって、合法の準備会が持たれなかったか？（「持たれました。」と田原が答えた）答として、持たれました。問として、被告人は、その合法の準備会には、出席していたか？……作家組織の準備員と

してこれや出ていたね？（「出てました。」と田原が答えた）答として、はい、作家組織準備員として出席していました。問として、その合法の準備会以外に、連合結成の準備として、水木友一、大山速男、山口道一郎、その他のものと、会合を持ったことはなかったか？（「会合を持ったことはありませぬ。」と田原が答えた。「会合へは出なかったんだね？」と八十島が訊いた。「出ません」と田原が答えた。「会合があったことは知ってたんかね？」「いや、知らなかったんです。」）答として、出席したこともありませんし、また、さような会合が、あるということも、知りませぬでした。」（「ちょっと」と田原は口を入れた、「私のは会合があったかなかったか知らないということですよ。会合があることは知っていたが出なかったから直接には知らないというんじゃないんです。」「だからそれでいいじゃないか？」と八十島がいった。「しかし」と田原が答えた、「さような会合があるということも知りませんでした、というと、あったことはとにかく認めてることになりやしませんか？」「あったんだよ」と八十島が嵩高かに言った、「君がどういおうと事実あったんだ、客観的実在だから仕様がないじゃないか？」「客観的実在はそれでいいと思いますがね」と田原はいった、「それを私が知ってたように予審調書に表れることが困るんです。」「いや、これで分るよ。あるということも知らなかったんだから、あったかなかったか知らなかったということになるよ。」「なればそれでいいですがね。」と田原は答えた。）問として、大山速男は、被告人も、その会合に出席したと述べているがどうか？」（「出席していないんです。」と田原は答えた。「しかし大山は確かに出席していたといってるんだよ。」「しかし私は出ていないのです。」――「それや、さっきもいったように僕は強要はせんよ。しかしそんなことを言っていたって見す見す損するだけじゃないか？　男らしくあっさり片づけたらいいじゃないかね？」「男らしくというのはどういうことなんですか？」と田原は訊いた。八十島は黙っていた。田原も黙っていた。しばらくして八十島は続けた）――答として、全然ありませぬ。問として、水木友一の家で、連合結成準備のために、前述、前に述べる、の合法的準備会の外に、いろいろ話し合ったことはなかったか？（「時にそういうことはありませんでした。」と答えて、田原は、答えの文句が知らず知らず予審調書張りになって行くのを感じた）――答として、時にそういうことはありませんでした。しかし大山が予審でこういってるのはどういうもんかね？（といって彼は別の書類綴りを取って、見出しのために挿んである細い紙切れを繰って行ってある場所を拡げた。）ちょっと読む――（といって彼は読み始めた）――では連合成立過程の模様を続けて述べて貰いたい。答えた。――さきほど述べた通り、私が最初に水木から連合の結成について協力してほしいという話があり、次で田原の手を経て斎藤に会って――君は大山を斎藤

に会わせてもいる――同人からも連合結成について水木と相談の上協力して貰いたいということを頼まれたのであります。(この話は警察にいた間にも出なかった問題だった。)左様な訳で、昭和六年七月下旬頃から同年八月末頃までの間、水木と三・四回会合して、科学者組織の方針、無神論者団、エスペランチスト組織等をどう動かすか等を色々相談しました。そして同年八月下旬から九月上旬になって、さきほど申上げた有志会を持つことになったのであります。この会合は不定期で原則として一週一回の予定で東京府下上落合の水木友一の家で会合を持ちました。この会合の召集は最初水木友一で、間もなく大森から召集を受けるようになりました。議長は大体水木で協議は殆ど座談的に討論して行ったのであります。問いが、有志会のメンバーは? 答えが、先ず演劇組織からは水木、大森、作家組織からは田原、なお同年九月下旬から山口、同年一〇月中旬からは中川――これは金之助の方だ――科学組織からはわたくしが出席しました。問いが、協議事項は? 答え、要するに合法的な準備会に於て協議せられたる事項は総てこの有志会に於てあらかじめ協議されておったので、合法の準備会の経過については既に連合の機関紙『文化』創刊号に載っておりますから、そこに書いてあることが取りも直さず(「取りも直さず」というような言葉は田原にへんに気にかかった)有志会に於て協議されたる項になるのであります。ただ有志会に於ける協議の際には、合法的準備会の場合と異り、日本共産党の指導メンバーを通して協議に上っている点が異るだけであります。そこを順を逐って述べますが、まず加盟団体の点について述べます。まず有志会には――これはいいだろう――そういってるのだがね、事実なかったことをこんな風に創作できると、正直な話一体考えられるかね? どうだね? (田原は黙っていた。八十島もしばらく黙っていていった――)やはり知らぬというのだね? (「そうです。」と田原はいった)問いとして(と八十島は続けた)大山速男は予審においてかように述べているがどうか? この時予審判事は被告人大山速男に対する治安維持法違反被告事件記録中被告人大山速男に対する第一二回予審訊問調書中第二〇ないし第二二問答を読み聞けたり。謄本として。答として、さようなことは知りませぬ。ふうっ……」といって八十島は時計を見た。田原は個人的にも親しくしている中川の名が中川の言葉としては全く出て来ていないこと、この調子では恐らく出ずじまいになるらしいことに気づいた。またかなり早くいろいろのことを認めたらしく思っていた水木が少くとも今までのところではやはりそう出していないらしいことに気づいた。彼は「もし俺たちが一般に、取調べに対して正しい態度を最後まで維持するとしたら、この八十島たちは別としてもこの書記たちに何かを与えるだろう。」という気がした。彼は何かがすっと頬の皮膚の下を走るような気がした。

「君はラップが解散したことを知ってるかね？」と八十島が始めた。書記が筆を下ろさないのを田原は見た。彼は「知ってます。」と答えた。

「どうして知ってるんだ？」

『中央文芸』で読みました。」と田原は答えた、「ピリニャークの文章に三二年四月二三日、でしたかね？――あの党の布告がのってましたね。もっとも私はそうはっきりは読んでないんですが……」彼は発禁を食って押収されて来たその雑誌を彼がまだ警察にいた時に偶然目にしたのだった。

「それで何かね？　君はソヴェート連盟のやり方は正しいと思うかね？」と八十島が聞いた。

「正しいと思います。」と田原は答えた。

「ふむ……」といって八十島が続けた、「そうだ、今朝だ、僕はその『中央文芸』を読んだがね。正月号だがね、（田原は今ごろもう多くの部厚い正月号の雑誌が山のように店々に積まれている様子を眼にうかべた）――それに永田が文芸時評を書いてる。永田、知ってるね？　僕は文芸のことは素人だからよく分らぬが君の名が文中に出ていた――（そういって彼は田原の顔をみた）――それで見ると、やはり君は組織にはいってるように僕なんかには思えるんだがね。……」

「なぜ思えるんですか？」

「人見という変名で発表した斎藤の論文を君が前以て知ってるんだ。君が否定するのは勝手さ。しかしそういう理解が一般的だったことは永田でさえ認めてるんだ。永田はそのことを書いてるんじゃない、しかし文中にそれがはっきり現れている……」

田原はある複雑な怒りと、それに負けると思いがけぬところへ連れこまれるぞということを感じた。しかし怒りはそう小くはなかった。

「君はアウエルバッハが除名されたことを知ってるかね？」と八十島が続けた。

「知りません。」と田原は答えた。

「除名されたんだ。あれは哲学上デボーリンの弟子でね……さきの話だが、永田はそう書いてるんだ、理論家というものは気楽なもんだって（田原はますます腹立って来るのを自分で感じた）……しかし何だってじゃないか、君も唯物弁証法的創作方法の問題じゃ大分苦しんで、永田に小説のことで相談に行ったそうじゃないか？」

「へえ？」田原は何のことか分らなかった。

「いえね、君がいかに描くべきかで行き詰った。それである日阿佐ガ谷の永田を訪ねて創作の実際的な相談をしたというじゃないか？」

「私がですか？」と田原は訊き返した。彼の中のある自惚れがもり上って来るのを彼は感じた、「創作実践の苦痛について私が永田に相談を持ちかけたというのですか？」

「いや、ただ永田がそう書いているというんだ。」

「永田がね……」突然彼は全く別のものを感じた。彼は続けて問い返した、「しかし永田が何か書いてることが私の予審調べの問題にどういう関係があるんですか？」

「そういう風に言ってやしないよ」と八十島が答えた、「僕の方は何もそんなことを証拠にしてやせんのだ。例えば永田が何を書こうとそんなものは問題にやしない。君自身の言葉だ。それも決して強要はせんよ。そんなものを証拠にしてると思ってそれを蹴とばしたって僕の方じゃ痛くもかゆくもないんだ。」

「そうですか？」と田原はいいながら、「手前えは手前えの前にいるのがどういう人間か自分で知ってるのか？」という気持になるのを感じた。彼はいった、「私はそんなものをあなたが証拠に持ち出そうとしてるなどと思ってやしないんです。話はあなたが持ち出したんですからね。もし証拠ないし証拠的なものとして問題にならないものならほかのどんな理由から問題になるんでしょう？　私としては、あなたの言葉はあなたのものだからどうでもいいのですが、『中央文芸』の話をあなたが証拠にしてると思って、私が思ってですね、それを蹴とばすことで全問題を蹴とばそうと私がしてるだろうというようなことは（彼は考えが言葉を逐いこして行くのに強いもどかしさを感じた。我ながら舌のもつれる感じだった。）私の予審上の問題としては直接的なことではないと思うんです。私は、なにもそういうものを、あんたが証拠のために出してるだろうなぞとは考えてもいないのです。」

彼は言っても言ってもこの問題だけについても足りないような気がした。彼は書記の書いた枚数がまだ幾らでもないのを知っていた。何頭かの馬の手綱を一人で握って走らせるサーカス馬乗りのような仕事がこっちへ向ってじりじり近づいて来るのを感じて、彼はもう一度テーブルの下で指をポキポキと折った。

（一九三五年四月「文芸」）

鶏飼いのコムミュニスト

平林彪吾

一

朝といってもまだ早く竹藪の中はうす暗い、小田切久次は四辺に気を配りながら静かに鋸を挽くのであった。ゴースー、ゴースーとかすかな音がひびく。

半丁ばかり距てた藪の入口には乞食たちが住んでいる。ここに住む恩義から乞食たちはこの竹山の番人の役を買っていたのである。

だが今朝はまだ彼等も菰の中で夢を見ているのであろう、気づかれた気配もない。鋸はいつか唐竹の根に三分の二ほども喰い入っていた。パーンと不意に竹が裂けた、小田切久次はぎょッとして手を引いた、サアサアと頭の上で葉ずれの音がして竹はばさりと倒れた。小田切久次はにたりと会心の笑をもらした。どこかで鶏がときをつくっている、サアサアと再び竹が倒れた、パチーンと不意に礫が飛んで来て小田切久次の右手の竹に当りはね返った、つづいて、誰だッと鋭い声が背後で呶鳴った。小田切久次は総身に水を浴びたようにはッとして脂肪ぎった顔を上げうしろをふり向いた、三人の乞食たちが近くに迫っていたのである。それをちらと視線の端にとらえると彼は四斗俵のように太くずんぐりした体をむっくり起し、鋸をつかんでとんとんと駈け出した。パーン、パーンと竹にぶっつかる礫の音がした、小田切久次は白髪まじりの頭を振り熊のように竹藪を縫って走った。追手の間隔は遠くなっていた、追うことをやめたらしい、小田切久次ははじめて立ち止りふりかえった。乞食たちの姿は竹に遮ぎられて見えなかった、はッははははと小田切久次は笑った。竹を盗って鶏小屋を建て増ししようという計画が喰いちがい、彼は少しばかり不愉快になったのである。

家に帰るとしかしもう仕事がそれを忘れさせた。鶏小屋で鶏たちが騒いでいた。家に程近く彼が盗みに行ったような竹山も雑木林もあり、前は原っぱ、裏には地面に軒のすれそうな藁葺きの百姓家もあろうというなごやかな新市内だったので、夜はしっかり鶏小舎を囲わぬと野良猫や鼬の類にしてやられる。だから毎朝小田切は鶏に鳴き起されると、囲いのトタン板を取ってやるのだが、今朝は臨時の仕事でそれが遅れたのである。

鶏は三十羽、兎が二十匹ばかりいた。兎の方が蕃殖力が

強いのでゆくゆくは兎をふやすつもりであった。これをやりかけた当座、うるさい友人の中には、小田切いよいよ変てこなことをはじめたよ、と笑う奴もいたが、詩を作るよりこの方が飯を食うにはたしかさがあった。
小田切久次は囲いをとり鶏たちを広い棚の中へ移すと、籾殻を敷いた中の糞をかき集め掃除して新しい餌を撒いてやった、兎にもキャベツと人蔘を与えた、子兎たちは同じ籠の中で全く戦争のように大騒ぎして野菜を奪い合った。
それが済むと小田切は台所へ行き、昨夜魚屋から盗って来た魚の雑物の入った馬穴を流しの下から引きだした、腐ったような魚くさい臭いがむッとする、小田切久次はどろどろした雑物の中にどぼりと手を入れた、臓腑の中に混って魚の頭や骨が手に触れる、彼はその頭やほんの少しでも肉のついた尾鰭は丹念に拾いあげるとジャアジャアと水をかけて洗いドンブリに入れた。これは鶏や兎にはもったいないので彼等夫婦がおつゆにしたり、余れば壺の中の酢につけておく。後の臓腑や骨はどぼどぼと大鍋に移し瓦斯にかけて煮るのであった。鶏たちの馳走である、煮つめた雑物は細かく打ち砕きぬかに混ぜると鶏三十羽の三日分の餌が出来る。思えば鶏も兎も小田切久次もよく肥っているのはこうした特別な脂肪分とカルシウム分とを摂っているせいであろう。ただ生来腺病質な女房の芳江だけがこの例に洩れる、それがために性欲旺んな小田切久次がお精進でいねばならぬことは不幸だったが、兎は毎日機関銃のように体をふるわして生殖に没頭していたし、鶏も大きな卵をよく産んだ。
兎の馳走は八百屋の掃き溜めから持って来た。腐りの来たキャベツや人蔘は糞蠅がたかり嘔吐が出そうだが、小田切の手を通せば見ちがえるような野菜になる。まず人間も兎も食えそうもないものは畑の野菜の根にくれてやる。彼に不要というものがない、彼は前の空地を耕して畑を開いている。この開墾は一度ひどく地主にどなりこまれたことがあるが、地主は遠くのべつに来れない所に住んでいるところから小田切はねばり強く今でも時無大根や茄子、カブ、トマトの類を見事に育てている、地主が現れるまで口に入れるほど大きくなれと希う日々の気遣いは投機的興味さえあった。むろんそんなわけで所有権を主張する地主のために何時荒らされるか計りがたいので面積はごく遠慮がちなものだったが、台湾禿げの地主の恐れさえないなら彼はもっと大規模な耕作地を開墾したいのであった。さて、選り分けたキャベツや人蔘は水で洗い、腐った部分は庖丁で削り取る、中には殆んど何ともないのさえまじっていることがある、そんなのを発見した時小田切久次は、ほおう、と入念に手に取ってみる、だがこうして手を入れてみるとみんな人間が食べても恥かしからぬ結構な野菜になり、兎や鶏にはもっと外に何かないものかと小田切は何時もいたく惜しいと思うのである。そして人の気も知らずにこの野菜を当然のように貪り食う兎たちにほんの軽い嫉妬

に似たものをおぼえ、彼も亦豊富な煮込みや野菜サラダを作り消化れ切れぬ位沢山食べるのであった。

小田切久次はたまに肉類も食べたいと思う、そんな時は鶏の首をひねるなり、兎の眉間を叩けばよかった。無駄はない、骨はスープにして一週間も食べる、煮出した骨は臓腑や足やトサカまで一緒に細かく叩きつぶし、ぬかに混ぜて同族に馳走する。羽毛は座蒲団に、兎の皮は敷物になる。彼の家を訪ねた物は兎の皮を何枚も合わした思いがけぬ豪勢な敷物に坐らされ一驚するであろう。腕前も立派なものだが、小田切久次にあまり出来ないものがない、何処からか桐を見つけて来ては自分の下駄を作るし、セーターを編み、机、椅子を作る、野菜を作り詩を創る、彫刻をやり染色をやり版画をやり小説を書く、それが何れも一応専門家の域に至っているのが不思議である、彼の友人である堀川と杉村はある日彼の女房がベッドに寝ているので、病気の女房をいたわるためとはいえ小田切にしてはよくも奮発したものと感心し、ためつすがめつ、相当取られたたろう、と尋ねたほどである、それほど彼の製作品は素人ばなれしていたのである。

小田切久次は又面白い木片を拾って来ては盆や灰皿や額皿を彫る、これらのさびた芸術品は彼の家の長押や床の間や机の上やに随所に発見されるのである。彼は美に対して敏感で、町に出てふと眼にふれると急須や湯呑みを買って来る、それがきまって揃いの一つか二つに傷物のある場合である。それを見つけたら彼は腰を据える、まことに彼の執念深さはこういう時に現れる、そうか、どうしてもまからんなら止めよう――散々時間をつぶさせた後で彼は一旦店を出るようとする、そんなことを性凝りもなく繰り返しているうちに店主の方がへとへとになり、ようがす、と来る、小田切はにたりと笑う、だが彼はまだ金を出さない、そこまで負けたんだからも一と奮発えい丁度にしとけよ、と第二段の交渉をはじめる、或時は最初六十銭に負けろと値切っておきながら、店の者が性も根もつきはてた結果、口あけだ、と投げ出すと小田切久次は仔細らしく財布を取り出し、ジャラジャラと白銅銭をかぞえ、次第に困ったような顔をして見せ、いかんな、五十銭しかなかった、と言い出す、再びすったもんだがはじまり、しかし結局辛抱強い小田切は店主をぶらぶらにして了い、呆れ返っている相手の手からさらうように、買い取って来るのである。文化的な今日にお構いなく米醤油を買うにも卵や鶏に換えて来るほどの小田切久次が、錆びた財布の紐を解くのはこうした芸術的な茶器類と書籍を買うときぐらいのものである。

小田切久次は珍らしい蔵書家である、彼は欲しいと思う本があればどんなことをしても手に入れる、たとえ盗んでも――盗んでもと云ったが、実は彼の見上げるような書架にぎっしり詰った本の三分の二は盗んで来たものである、彼がそこらの古本屋で一冊の本を買えば帰りにはマントの中に買わなかった本も入っている、何時いかなる隙に

それだけ器用なことをやってのけるのか生れつきタレントがあるのであろう。

　ともかく彼の所有慾は貪婪で、これから話そうとすることも思想をマルキシズムに拠りながら、資本主義社会に育ち生きている小田切久次が食わんがためには如何に執拗な所有欲と個人主義的な感情に満ち、一個の矛盾した生活をしているかをありのままに語るにすぎないが、彼の場合はそれがシムボリックで、個人主義的な慾望はその階級的な思想と共に清算したかの如く上手に取り済ましたポーズをした彼の同志たちからは、まるでマルキスト検査の不合格品で余計者のように取り扱われ、そのために小田切久次をして一層人を疑い世を白眼視する性格を創り上げる結果となったものであろう、階級のため一生懸命働く同志を見ても彼は、へん、執行委員にでもなりたいのだろ、と思うのである、何時か彼の心には疑いを貪る暗い隅が出来、物を見ても一度その隅を通さないと考えられぬ常癖が創られて了った。彼はアナーキスト時代からの詩人であり、今はプロレタリヤ文学者同盟でも古顔の一人だが、同志の中でも彼と交友のある者は少く、又自分からも強いて友達を求めようともしない、豪らそうな理論闘争をやって同盟を喰い物にしているヴューと（ヴューはアウトサイデヴューのことであろう、彼は時々よく意味のわからぬ英語を使った）自分で鶏でも飼って働いてるのとどっちがプロレタリヤ的かと、ぷんぷん一人で腹を立てながら毎日魚屋の雑物を盗って来ては煮しめ、鶏の糞をかき集めたり、兎の旺盛な繁殖を見て暮らしている、たまたま堀川や杉村が訪れても、のらくらと着流しで何しに来たのかねえ、というような顔をするのである。

二

　地区の研究会が済んだのは夜も更けてからであった。ほめられても素直に嬉しくなれたためしのない小田切久次も今夜は心自らたのしかった。詩人としての自分の才分を同盟員たちは今度正当に見た、彼はこれまでついぞ人を賞めたことがない、小田切久次の眼には同盟員七百人中誰一人、詩らしい詩、小説らしい小説を書く者もいない、幹部の指導方針や活動も気に喰わぬ、小田切久次にとって他人のすることは善悪美醜ともに浅墓でケチくさかった。だが生れつき容易に人に感服できない彼の性格が何時か万年不平分子というレッテルを張られ、今日では誰も小田切の不平を本気で聞くものがないような結果となっていたのである。

　ところが今度彼が機関紙の五月号に書いた「相模川の霧」という詩は計らずも問題になった、それも臆病な同盟の批評家たちは異端者扱いにされている彼の詩なぞ読んでも読まぬふりをしていたのだが、あるブルジョア雑誌で「相模川の霧」を賞め、わずか一篇の詩を七頁ほども割いて取り

扱っていたので、同盟側としても見直してみねばならなかったのである、そうなると編集部に来ていた、正に屑籠に入るだけの運命にあった投書なども引き出され、地方通信員たちや地方支部同盟員たちの推賞の言葉も案外沢山あさり出された。そして今夜地区研究会でも小田切の詩が批評の中心になっていた。

小田切久次はそれを考えると久しぶりおおらかな気持にさえなるのであった。ざまァ見あがれ！　小田切久次はいまいましい仇敵を今日只今ぎゃふんとやっつけた時のように独り言を云って満足気に笑うのだった。ふとその笑いが消えた、小田切久次は木下暗に立ち止まった、さっき研究会に行くとき彼は本屋に寄るため廻り道をした、途中酒屋の店先高く積まれたビール箱の上に一斗甕を見た。実はゆうべ気づいたのだが、ゆうべはまだ少し早く酒屋の戸が細目に開いていたのでそのまま通りすぎた、今夜は大分遅い、もう寝てしまったにちがいない、よし、と思ったからである。小田切久次は踵を返し今来た道をすたすたと戻りはじめた、木下暗を出ると何夜の月というか知らぬが月が冴え、ずんぐりした彼を斜め上から一層ちぢめた影にして地に落した。ずんぐりと云えば彼の背丈は四尺五寸三分――つまり普通の女よりも低い、その埋め合せでもあるまいが横巾が張り、脂切った肉がでっぷりつき腰の回りは四斗俵を思わせる、腹は十分ふくれ、胸に女の乳房のような乳房がふわッふわッとゆれている、しかし贅肉でもなく足は丸太ン棒のように、腕には隆々と力瘤が盛り上がっている、不均衡な体は徴兵検査に落第したが生れてから病気をしたこともなく、百姓出で力は沢山持って居り、今でも四斗俵を膝につけずすーうと肩に持ち上げるのが自慢の一つである。

顔の雑作も体と均衡を保ち四角で、眉は濃く繁り、唇はむくれて厚く、鼻は小鼻のところが一般の型を破って反対に凹み、先へ行くに従い徐々に高さと巾を加え先端はやや誇張を許すなら奇想天外な形でむっくり飛び出している、これは小田切の平凡ならざる顔の中でも尤も偉観であって全体が膨れたような感じを与え、跳び出した鼻先は見事な赤褐色を彩どり健康と強い情慾を現している。ただ何時の頃からかぽつりぽつりと生えはじめた白髪混りの頭が精力的な顔貌と似つかわしからず流石にそろそろ四十に手の届こうという彼の齢をうかがわせるものがある。

その風変りな姿が今ポストのある菓子屋の角を曲った、菓子屋の隣りが乾物屋、乾物屋の次がしる粉屋、そのしる粉屋と露路一つ距てて例の酒屋だった。とうに十二時は過ぎたろう、田舎街は已に寝静まり、彼の目指す酒屋も雨戸をとざし隙間洩る電灯の光さえなかった。ただ店先のビール箱の上には相変らず一斗甕がのっている、彼は四辺を見廻しそっと近づいて行った。両手を伸ばし取りおろそうとしたが、何か中に入っているのであろう、びくともしなかった。彼は傍に乱雑に置かれたビール箱を二つ重ねて足場

を作った。今度は腕を水平にして甕が抱けた、力を入れると重ねられたビール箱がぎーいと揺れただけで甕は尻を持ちあげなかった、糞ッと小田切久次は渾身の力を出した、大力な小田切に渾身の力を出されては甕も尻を持ち上げぬわけにゆかなかった。だぼッだぼッと重たく液体の揺れる音と共に甕は小田切の胸へのしかかって来た、小田切ははずみを食って足場の悪い箱の上で危く倒れそうになり、やっと踏みこらえて姿勢を直し足場を跳び下りた、その拍子に甕がビール箱に障りガラガラと音を立ててくずれた、小田切久次は総毛立ち反動で駈け出していた。甕はだぼッだぼッと気になるような音を立てた、中味は何だろう？ 追う者もないのに小田切は駈けている、淡い月光に濡れた道を四斗俵と一斗甕が一緒に転がってゆくように見えた。

三

おい開けてくれ、と小田切久次は足で玄関の格子戸を蹴った、すぐ女房の芳江はごほんごほんと咳をしながら起きて来た。彼女は格子戸を開けると入って来た甕の親子のような小田切の様子に、まあどうしたの、と眼を見張るのだった。小田切は、ああ重かった、と玄関の間の上り口にどしんと甕を下ろした、だぼッだぼッと甕は鈍重な音をたてた、何よそれは？ と芳江が重ねて尋ねても小田切は矢張りそれには答えず、暑い暑いと帯を解いてぱッと浴衣をぬいだ。びっしょりかいた汗を拭きもせず、一寸茶碗を貸してごらん、と云う、芳江はごほんごほんと咳をしながら台所へ行って湯呑みを持って来た、その間に小田切は玄関から甕を持って来て六畳の床框の上にどっこいしょと据え、栓口が框から喰み出るようにした。差し出した女の湯呑みを無言で受け取り甕の出口にあてがって栓を抜いた、どくッどくッと大きく息づきながら液体が出て来た、なみなみとついだ湯呑みへ小田切は鼻を寄せ小首をかしげ、長い厚い舌を出して舐めてみた、そして、おい舐めてみろ、とはじめて芳江の方をふり返えるのだった。

それまでやせた体を前かがみに、ごほんごほんと咳をしながら見ていた芳江は、鼻近く差し出された湯呑みの液に一寸舌をふれたが、水じゃないの、と云って明らかに軽蔑の色を現した。小田切は、いや、ほんの少しだが酒の気があるよ、と笑いもせず、自分でもう一度舐めてみて、うん、たしかに酒の気が大分まじっている、とつぶやいた。芳江は中の水にはあきらめたが只甕に気を曳かれ、どうしたのよ？ ともう一度尋ねた、これか、と小田切は、どうやら余裕のある声を出し、あり体の話をするのであったが急に思い出したようにむずかしい顔になり、こんなことを誰にも云うんじゃないぞ、杉村なんか放送局みたいにうるさい奴だし、堀川と来たら藪ん中の蚊みたいに油断のならぬ奴だからな、いいか、と念を押した。

芳江は、ああこれがわが亭主かとあさましい気持に

なり、妾寝るよ、と云ってさっさと寝床にもぐり込んだ、小田切は慌てて呼び止め、ねえおい、まさかこの中に汚い水を入れるわけはねえなア、と聞いた、芳江は答えない、わざわざ溝の水を入れる必要もないからなア、と今度は独言を云い、そして、ねえ芳江、明日から煮〆はこの水で煮るといいよ、わざわざ味醂や酒はダシに入れるもんだからな、と云う、芳江は、止して下さい、そんな腐った水！と怒った声を出した。小田切は芳江にそう云われると矢張りいくらか気になるらしく、又思案気に舌をつけて舐めてみるのだった。

何だかすっぱく、墓場の花立の中に澱んだ水を思わせるような臭いがした、だがたしかに舌の先には生ぬるい酒の気が残る、小田切は二三度犬のようにペラペラと舐めてから独りうなずき、台所へ行って手製の塩辛と葉唐辛子の煮つめた皿を持って来た。そして一斗甕の前にどっかり安坐をかいて塩辛を食べては湯呑みの液をちびりちびり飲みはじめた、小田切久次はそうしているうちにほんとに蕩然となって来るように思えるのは我ながら嬉しかった、一文もかけず、人間の裏面にはこんなにも怪しからぬ程面白い、秘密の快楽があるものだとでも云うように、薄笑いを浮べながら塩辛を舐めては仔細らしく湯呑みを口へ持ってゆくのであった。

四

居るかい、と誰か柵の外から呼んだ、小田切久次は台所で魚のヘタを煮ていたが、声で杉村と直感し急いで座敷へ引き返した。机の上にあった五十銭銀貨とバットの箱を曳出しにしまい込み、小田切君、ともう一度呼ぶ声にはじめて聞えたふうをし、おう、と応えて台所から出て行った。小田切は突然友人に来られ、今みたいに五十銭銀貨やバットの買いたてなぞ見られるのが嫌いだったので何時も柵の柴折戸に鍵をかけておいた。

彼は杉村の顔を見ると落ちついた様子を装い、やあ、と云いながら鍵をはずしだ。杉村は座敷に通ると妙にかしこまった様子で膝を揃えて坐り、どうしているかねえ、とこの歴史には逆行しているような変り者の友人の顔をうかがい、袂からバットを取り出した。小田切は小田切で何時見てもインテリ臭い男だ、今頃何しに来やがったのか、と杉村を考察るように見て、いや、どうもこうもないよ、と云うのだった。杉村は傍のマッチを取ろうとして急に気づいたように、どうぞ、と小田切の方へバットの箱を押しやった。小田切は虚を突かれたように一寸たじろいだ、此奴俺が今バットを曳出しにしまったのを見てわざと皮肉にすすめるんじゃないか、とちらとそう思ったからである。しかし窓はしまっていた、あの今しがたの自分の慌てぶりは見

えなかった筈だと思い返し、何喰わぬ顔で、いや俺ぁキザミがある、と机の下からハガキの袋と煙管を引きずり出した。小田切は同盟で流行している「お先煙草」が大嫌いだった。彼は人から馳走になることも、自分のものを侵害されることも共に好まない。義理というものが思わぬ金を喰う。それが一番面白くなかった。しばらく煙草を吹かしていた杉村はふと床の間の一斗甕に気づくと、ほほお、豪気なものがあるじゃないか、と感嘆した、小田切久次は、何、あれか、と空とぼけ更に取り合おうともしない、杉村は好奇の眼をかがやかし、入ってるのか、と重ねて聞くのだった、小田切は仕方なく、いや知り合いの酒屋がやろうと云うから貰って来たのさ、空だよ、水を入れておいて夜中に眼を醒ましたときなんかに手を伸ばして飲むんだよ、と答えた、彼は折角盗んで来たこの甕をもっと外に何か利用方法はないものかとあの夜以来考えていたのであるが、今のところそれ以上にいい方法も思いつけないでいたのである。

空だと聞いて杉村は興ざめの形で、そうか、時に――と急に話を転じた、実は君にお願いがあって来たんだが、小田切君、君機関誌部の仕事を手伝ってもらえまいか、木村君が病気でね、僕後釜の人選を任されたんだけど、君にやって貰えれば非常に好都合なんだ、と杉村はごく謙遜な云い方ではあったが、多分に好意を押し売りするひびきがこもっていた、小田切は同盟の中にこれはと思う親友もなし、杉村や堀川なぞまあ最も親しくしている方だが、何時も杉村や堀川が中央部や支部の機関にいるということが小田切とすれば面白くなかった、大体杉村という男は、ともかく評論委員会にいる男だけに会合なぞではいささか弁の立つところから、小田切よりいくらか利用価値があるように見られている、だが本当を云うと評論も小説もてんで駄目だ――尤も同盟の役員なんぞというものは本当の芸術家でないのが多いが――それでいてよく堀川なぞと大言壮語し、かつての同盟の混乱時代反対派活動の急先鋒であったことを今もって鼻にかける癖がある、内省が足らず思い上がって居り、鈍感で芸術家としての稟質は気の毒ながらなさそうに思えるのは小田切としては嬉しいが、そのくせ妙に腹黒いようなところがあり、矢ッ張り心から好きになれぬ男である、そう云えば同盟の中で一体誰と誰が親友であろう？　同志というからにはブルジョア的な親友以上のものかも知れないが、結び目を解いてみた個人々々の交友は何と寒々しいものであろう。家庭的にも感情的にもしんみりと話し合える親友という程のものは誰にもない、それは慌ただしい同盟生活のあるひょいとした間隙にふとわびしい思いにとらわれる誰しもの事実であった、同盟の同志たちはなまじっか階級的制約の不文律があったためにお互に暗黙のうちに警戒し合い、弱根や恥や愚かさもそっくり吐き出して理解し合うということはついぞなかったのである、杉村が小田切を後ろ暗い男と思い腹の底まで打ち明け

ず、小田切が杉村を狡猾な男と眺めているのも何れこの例に洩れないであろう、ただし本物の間には階級的不文律がこんな愚かしい交友の桎梏となることはないであろうが——。

それはともかくとして機関誌の編集部員になってくれという杉村の言葉は小田切久次の気を引いた、杉村や堀川たちの所謂三十歳組よりはるかに歳上の彼は同盟生活の歴史も古いのに、今日まで思わしい部署についたこともなく、万年不平分子の名にふさわしく何時も不遇？であった。杉村や堀川たちが一緒に東京支部の執行委員になった時も小田切久次は地区の配宣係、つまり地区同盟員に機関紙やニュースを届けて廻る役にえらばれた、子供達の遊戯に一人除け者にされ、それでも時々用事の時は使い走りをさせられるようなのが彼の存在だった。糞面白くないと彼が大層いじけたのも無理ないであろう。

そんな彼だ、杉村の言葉がうれしくないことはない、だが人間は他人に損させても自分で徳することばかり考えるものだという哲学を持つ彼は、人がうれしい便りを持って来ても、此奴俺を喜ばして鶏の卵でも一つ貰おうと思って来たんだろうと疑う、だから喉から手の出るような杉村の交渉にも一度は歪んで意地悪を云ってみないと気が済まないのであった。何も君、鶏飼いぐらいが適当している男に編集の仕事を持って来んでも、外に沢山ジャアナリストがいるだろう、堀川なんかどうかね？　と小田切は白眼がちな眼をじろりと杉村に向けた、誰某はどうかね？　と人を引き合いに出し、相手が誰某をどう思ってるかを探りたいのが小田切の妙な癖だった。この場合堀川を引き合いに出したのは、堀川が蔭で小田切のことを「鶏飼い位が適当だ」と評したのを聞き知っていたからであろう。杉村はこんな時のくせで、まあ冗談は止して、君本当にやってくれないか、と殊更鹿爪らしい顔をするのであった。小田切は、俺も杉村常任に認められたわけかね、とねちねちと皮肉を重ねた、まさか駄目なら外の人へ頼もう、と白々しく帰ってしまう冷淡な杉村でもないことを見越しての思わせぶりでもあり、比較的近かしい友人に平常不満の飛沫を撥ねかける可憐な甘えでもあった。ほんの少しばかり政治家のつもりでいる杉村が又、この小田切の皮肉も甘えもいやいや左もありなん、と一通り悟ったような顔をし、子供でもあやすような悠然たる態度で、どうか一つ引きうけてくれないか、と神妙に頼むのも安手の政治家のようでおかしかった。すると小田切も今度は真顔になり、俺に出来ることなら一つ手伝ってみようかねえ、と受けた。殊勝な顔や深刻な顔をするのが若きコムミュニストのポーズであったから——。

じゃ一つ頼むよ、と杉村が立ちかけると小田切は、俺もそこまで行こう、と云って急いで着物を着更えるのだった。外は何時か暮れていた、二人は原っぱを横切り、火葬場の前を通ってほんの申しわけほど店の並んだ街通りへ出

た、小田切久次はとある酒屋の前を通りかかった時、冷酒を一パイやらないかね、と杉村の袖を引いた、杉村は立ち止まり、思いがけぬことを云う鶏飼の顔を怪訝そうに見つめた、小田切は、いや今日は卵を売ってね、二杯位ずつならあるんだよ、先に立って酒屋の土間へ入って行くのだった、奇特なこと、よほど先ッきの話は先生うれしかったのだな、と杉村は小田切の心を読みながら彼の後に従った。
小僧が酒を持ってくると鶏飼いはコップ受けの桝を持ち上げ中をのぞきながら、おいサービスが少ないぞ、と呶鳴った、そして一口ぐっと飲んでから桝を小僧に突き返した。杉村は苦笑した、見栄坊の彼は小田切のすることには何時も冷汗をかくことが多い、そのくせ自分でも桝をちらと見て、俺のもこぼれが少い、と思うのだったが――。
小田切は立ち飲み用に置かれた沢庵を杉村にも食わないかとすすめ、杉村がつまむと後に残った三片ばかりを一緒に口に押し込み、小僧さんお新香もっとくれよ、と小皿を高く持ち上げた。小僧がはあッと威勢よく小皿を受けて奥へ消えると、小田切久次はじろりと杉村を横眼で見、しきりに腮をしゃくりはじめた、杉村はその意味がわからず、え？　と聞き返した。小田切ははッとしたようにどこか後へ伸ばしかけていた手を急に引っ込め奥の方をぎろりと鋭くふり向いた。やがて小僧の持って来た小皿に早速手をつけながら小田切は、仲々君ソとこの酒はうまいものを飲ませるじゃないか、とお世辞を云い、ヘッヘッと笑うのだった。
店を出て四五間も行くと小田切久次は急に小走りにいそぎだした、杉村も無意識のうちにそれに従った、何故か鶏飼いの態度は杉村にもそうすることを命じているように思われた、小田切久次は早く早くと小声でささやき煙草屋の角を折れた、杉村が呆気にとられ、どうしたのか、と追いついてゆくといきなり鶏飼いは懐から二つの固い物を取り出して杉村の袂に投げ込んだ、急に左袂がぶらんぶらんしはじめた、杉村はわけもわからず、只何か逼迫したものを感じ小田切と共に駈け出した。
杉村の家まで急ぎつづけ、玄関に入ると錠を下ろし、座敷へ上ってはじめて安心したように小田切久次はヒヒヒヒと笑った。そして、どれ出して御覧！　と杉村の袂をさぐり、蟹の罐詰とココア罐を取り出した、杉村は憑ものでも落ちたようにぽかんとし、小田切久次の顔をみつめた、小田切はそんなことには頓著なく、罐切りがないか、と云い杉村が茶箪笥から出してやるとさっさと罐を切り、手づかみに食べるのであった。杉村はようやくわかったのか苦笑を洩らし、なかなか達者なものだねえ、と感嘆すると小田切久次は笑いもせず、いやしかし君も達者だよ、あの曲り角で僕が袂に入れたとき直感して一生懸命駈け出したところなんざなかなかどうして馴れたもんだ、君も相当経験があるんだねえ、驚いたよ、とあべこべに敬服するのであった、杉村は返えす言葉もなく呆れ返った顔をして小田切久

次の怪奇な赤鼻を眺めていた。

五

編集会議が済んで小田切久次が家に帰ったのは夜の十時過ぎである、彼はさっき紙を呑み込んだのが未だに腹につかえているようで変な気持ちがしていた、実は会議も終りかけた頃、事務所の本部書記が来て、知らせに来たのを皆まで聞かず、丁度その時小田切は咄嗟に丸めて手早く呑み込んでしまったのである、彼はまるでもう玄関に来たかのように聞きちがいしたのであろう、それから書記の報告を落ちついて聞いてみると委員長のKの家へ廻り、その足でこの会場とは方角ちがいの下落合の方へ廻ったことがわかり、小田切は、是非読みたいところがあったのに、とくやしがったが、呑み込んだものをどうしようもない。

悪食に馴れた彼も少し胃袋がしっくり来なかった。台所へ行って手杓子でごくごくと水を飲んだ、女房の芳江は読みかけていたらしい本を肱に敷き枕を外してよく眠っていた、彼は起そうかと思ったが止めにした、柱にぶら下った富山の薬袋から宝丹を取り出し、ぽりぽりと噛みながら彼は机の前に坐って、今日杉村から電車賃として貰った五十銭の中の残りを数えるのだった、二十五銭残っていた、うれしかった、彼は抽斗から直径八分、高さ二寸五分ばかりの金属製の円筒を出した、上端に口があり、口の下に「独立貯金銀行」と枠付きの文字が浮き出ていた、そしてその枠右肩に「大海の」とあり枠の左下に「水も一滴より」と受けてある、露店を歩くとよく一本十銭で売っている例の貯金箱である、小田切久次はその「銀行」に三つの白銅銭を押し込んだ、ガチンと音がした。

何と思ったか彼は立上がり古ぼけた箪笥の上から三番目の抽斗を開け両手に幾本かの同じような「銀行」を掴み出した、それを机の上に並べ、同じようなことを三度ばかり繰り返した、机には円筒が二列横隊に並び、小さなポストの行列のように見えた、並べ終えると彼はバットに火をつけうまそうに深く吸い込んだ、すぱーすぱーと天井に煙を吐き上げながら小田切久次は悠然と机の前に坐っていた、時々じろりとポストの兵隊に眼をくれ、満ち足りた秘密な幸福ににんまりと微笑を洩らすのであった。

やがてゆっくり一本の煙草を吸い終えた小田切久次は「銀行」の端からヒーフーミーヨーと腮をしゃくりながら数えはじめた、「銀行」は皆で二十五本あった、彼はそこにあったメモに25と書きつけ、それに23をかけて五百七十五という答を出した。「銀行」にはそれぞれ五十銭銀貨四十六枚の二十三円ずつが入って居り、二十五本で五百七十五円也という意味であった。

鶏や兎の収入と云っても最近失業者の増加と共に競争者がふえ、割に金高にならず月せいぜい二十五円か二十三円だった、家賃は十一円で小田切夫婦の大半ではあったが、

それでもどうしてこれだけの金を何時の間に溜めたものか平凡な頭には想像のつかぬことである、同盟員中誰がこうした隠れた蓄財を彼が持っていると知り得よう、尤もそんなことを知られたら貧乏な同盟から、出版防衛基金だの、犠牲者救援金だの、支部強化費だの、新聞定期刊行基金だのと数限りもない名目で入り代り立ち代り部署々々の係が現れて二十五本のポストは日ならず美名？ と変るであろう、考えてもみるがいい、彼が何時も柵に鍵をかけておる理由であり、バットをかくす理由であり、又こうして夜更けてはじめてゆっくりとポストにあかず眺め入り、所有するひそかな愉悦をやっと味い得る理由である。

六

印刷所のケースに仕切られた校正室では杉村と小田切が忙しくゲラ刷りに赤字を入れていた、小田切は人の欠点だけが眼につく男で、校正をしながらも原稿の誤字を一々取り上げては、何だ粉砕の粉の字も紛と書いてる、実際此奴は字を知らん男だなア、こんな男が巻頭論文を書くんだから同盟の弱化も必然だよ、なぞとぶつぶつ云いながら得意の達筆をふるい、原稿の字が間違いでお気の毒、植え代えを頼む、と長たらしい説明をつけたりして校正している、そんなことでも書けば巻頭論文に少しは腹癒せが出来るのだろう、杉村は何かぶつぶつ云ってないと奴さん生きていられないのだなと思いながら赤線を引いていた、そこへ妻君とも娘ともつかぬ女がお茶を持って来た、彼女は、まあもうそんだけになったんですの、仲々早いわね、と愛想を云い近くの椅子に腰をかけ、テーブルにお盆をおいてお茶をすすめるのであった。

小田切は忙しげにゲラ刷りを読んでいるふりをし、上眼使いにしきりと女の顔をうかがっている、杉村は、や、ありがとう、と云ったが仲々筆をおかない、菓子盆には大福が入っている、小田切はそれを盗み視ると一層せわしく赤字を書き込んだ、彼はこんな場合決して自分から手を出さぬ、それでいて、杉村の奴早くお茶にしたらいいのに、気取っているな、と思うのだった。

暫く二人の仕事をぼんやり眺めていた彼女はつまらなさそうに、杉村さん、如何！ と甘ッたれた声でもう一度すすめた、杉村はやっと筆をおき、あーあと大きな背伸びしてから豆入りの大福をつまんでぱくりと喰いついた、小田切も今やっと終ったというふりをして顔を上げ、はじめて大福に気づいたかの如くやあこいつは豪気だナ、と云って手を伸ばした。女はお茶をすすりながら小田切を見て、こちらさんはじめてねえ、と云い杉村に紹介をしないかと催促顔であった、杉村は、そう紹介しようか、こっちは小田切君、ほら「相模川の霧」を書いた小田切君、こちらは——と女の方へふり向き一寸言葉に詰ったふうである。女は臆でにっこり笑い、蓄妾（おめかけ）さんよ、とずばりと云ってのけ

た、はア、と小田切久次は神妙に頭を下げた、杉村は勇敢です、と推賞し、頭に手を上げて照れた様子をして見せた、彼女もほんの少しばかり頬を赤くし、あ、そお、此の方なの、と云ったが何か妙にしっくり来ないような顔をした。杉村はふいと真顔になり、何が？　と聞いた、彼女も大層真面目に取りすまし、何故？　と問い返えすと期せずして三人の間に何やらわけの知れぬ笑いが流れた。彼女はその笑いをいち早く消し「相模川の霧」とても良かったわねえ、と小田切を見直した。

小田切はまごつき、へえ、貴方はそんなものを読むんですか、と意外な面持ちである、杉村が、いやア彼女は仲々プロレタリア文学のファンでね、と説明した、すると、あらファンは可哀想よ、と彼女は杉村を睨む真似をし、でもあんな詩を書く人妾どんな人かと思ってたわ、とそっと紅色の大福をつまんだ。小田切は、こんな人でがっかりでしょう、と云いながら、あんまりがっかりもしないでしょう、というような顔をするのである、彼女は思い出したように、あーア当分呑気だわ、と云って背伸びをした、杉村はこれ今居ないの？　と親指を出して見せた、彼女はうなずき、出ればきっと一週間は帰って来ないですね、とまるで自分には関りのないことのように云うのだった、彼女は男の需めるものを与えて、着る物と食うものと、それからほんの少しばかり気儘に使えるお小遣いとを貰えば何の取り組んだ感情もなく平静であるように見えた、小田切はその間中もちらっちらっと彼女を盗み視た、彼女はかこい者になるだけあって何となく艶っぽく、束髪にこそ結っているが、どこか素人ばなれのしたところがあった、元は三味線ぐらい持った身であろう、丸顔で、身のこなしかたなぞ少しばかり淫蕩的な感じを与えたが、たしか美人の部類に属するであろう、小田切は女性と同席すると何時も体内から何か分泌するような興奮を感ずる癖があるが、はや怪しからぬ想念に体をほてらし、彼女が、当分呑気だわ、と云った言葉を妙に忘れかねていた。

彼女は改まったように、時に小田切さん、妾これから詩を勉強したいと思うんだけど、見て下さらない！　と云って、それは身についてしまった彼女の癖であろうが肩をよじり、気にかかるような様子をするのである。小田切久次は洗練された男好きのする瞳を真正面に受けると、ふと刺激され、腋の下を羽毛かなんぞで撫で上げられるような変にこそばゆいものを身内におぼえるのだった、え、ぼ、僕でよかったら何時でも拝見します、と云いながら不覚にももう落ちつきを失い、そそっかしくお茶をすする小田切の様子はおかしかった。

杉村はもう筆をとってゲラ刷りを読みはじめた、間もなく女も茶碗を片づけて去って行った、彼女が去ると小田切は、仲々シャンじゃないか、勿体ないねえ、と云うのだった。何がどう勿体ないか杉村はわからなかったが、うむ、と只口の先だけで答え文字面を追った。小田切は残り惜し

そうな顔で、仕方なく丸めたゲラ刷りをひろげたが、一行も読まぬうちに再び顔を上げ、職工たちはここに泊るのかと聞いた、杉村が簡単に、いやと、答えると、小田切は尚も、ここには二階に住いがあるのか、と問いかけた、杉村は妙なことをうるさく聞きたがる男だと思いながら彼女の部屋が二階にあるらしいねえ、と素気なく答え、ゲラ刷りに角の字を書いた。もしもし、はいはいと二階で電話をかけている彼女の声が聞えて来た。

七

校正を了えて杉村と小田切が工場を出たのはかれこれ十一時すぎ、ぱたんとばね仕掛の開戸をはなして外へ飛び出すと、杉村は一パイやるかと小田切をふり返った、小田切は背の高い杉村を見上げ、悪くないねえ、とわざとごくり唾を呑む真似をした、だがこれは秘密だぜ、と杉村は念を押すのだった。同盟の財政は窮迫し機関誌も新聞も月々に細りつつあるこの頃、たとえ長い労働の後とはいえ、編集雑費で酒を飲むことは許されない。

工場から四五軒、すぐT字形になった角を曲り、その道を出た所が電車通りである、右手に赤い灯の見える交番に反対の方角へ一丁程ゆくと杉村が時たま来たことのある「たこ安」というおでん屋がある。奥まったテーブルに向い合って、酒を、と小女に命ずると杉村はテーブルの蔭でこっそり財布を調べるのだった。

二人ともいける方で、編集雑費の残額は心細いものだったが、一本や二本位の不足は自腹を切ってもと酒のことなら杉村は最初から覚悟が良かった。酒が来ると小田切は杉村の手を制してすばやく徳利を自分で持ち、まあま、と杉村に先ず猪口を上げさせた。小田切の百姓出らしい義理がたい癖である、次に自分の猪口にもつぐと徳利の口にしただる滴を小田切は長い舌を出してベロリと舐めた、やってるな、と思いながら杉村は知らぬ顔だった。一人で飲む徳利ならいいが、みんなで飲む時は少々きたならしいので、これまでも堀川なぞが、小田切もそれをせんといい男だけど、と遠う廻しに云っても通ぜぬのか仲々直らなかった。

小田切は最初の一杯を飲みほすと感にたえた面持で、うまいなア、と眼をつむった、五臓六腑にしみ渡るという様子である。杉村はそれほどの正直さは出さぬが、久しぶりに飲む酒は乾からびた喉にじゅうと鳴る思いだった。

しばらくは話もなく口からテーブルへ、テーブルから口へ杯が上下していた、徳利が空になったところではじめて、やあ、と感慨めいた顔で二人は互に見合い、ふふと笑った。杉村は空の徳利でコツ、コツとテーブルを叩き、何かおでんを、とはじめて箸の物を注文した、二本目から三本目と酔いが廻るにつれ杉村は冗舌になった、彼は、書記長が頭を割られたというニュースを知ってるか、とにやにやしながら小田切の顔を見た。そうかい、それは本当か

い、小田切久次は思いがけぬ喜ばしい事件のように眼を見張った。まあ書記長にも時には虫下しだ、しかし新聞なぞが書き立てると困るから極秘だぜ、と杉村も時節柄流石に内紛のデマを恐れて特に念を押してから、実は昨夜の、まだ湯気のホヤホヤ立ってるニュースだよ、と語り出した。

　最近同盟には一種の伝染病のように女房が亭主を捨てて逃げるのが流行った、高川という男は警察に半月ばかり泊っている間に最愛の女房に家財道具をさらって逃げられた、大栗は女房の同郷とかいう男に盗られ、吉野は親しい同志であった元の書記長に女房と共に裏切られた、山檻鈴江が獄中の細河内を捨てて新劇の男優の懐に走ったことは一般にも注意を曳いた程である、その外成島、細山等数えれば案外の多数に上る、闘争は困難になるにつれプロレタリア作家の行く手には暗い雲が垂れはじめた、階級闘争に身を捧げたつもりの同盟員たちまでが、絶望や懐疑におちいりがちな時、華やかな夢を期待し、いくぶん感傷的な昂奮で亭主に従いて来ていた彼女たちが、観念の上の昂奮では、し太い伝統の力や外的圧力に勝ちがたく、とどのつまりが現実とは冷雨(ひさめ)であったと悲しい悟りをひらいて、ひょッとしたら自分の亭主は豪い人になりはしないかと、或は仲々いいところがあるが、とそれぞれにまだ幾分の恋情を残しながら男を捨てて逃亡する――これも情勢であり、壊えはじめた屋台骨の中に起る悲劇の一例に過ぎないのであろう。

　一夜高円寺組でこうした悲劇の主人公の一人である吉野を慰め、はげます会というのが持たれた、ごく親しい者だけが寄り合い、小やかましい会合の型を破って酒を飲み、腹の底から友情まで温めようというのであった。かつて同盟の懇談会が酒を用いたということで「同盟の自己批判」という大論文を書き、酒飲みの杉村や堀川たちをすくませたころのあの書記長がその発案者であった。杉村はここで一区切りして、昔は酒を飲むさえこっそりやっていたのに、同盟は今昔の感に堪えないものがあるではないか、と思わせぶりな顔をしながら立てつづけに酒をあほるのであった。小田切も忘れていた杯を乾し、それでどうした、と好奇の眼で追及した。

　ところが大体一座の顔も赤くなった頃、書記長は例の雄弁で誰かを相手に口角泡を飛ばしていると突然、馬鹿野郎ッと叫んで横合いからビール壜で殴りつけて来た者がある、理論家ではあったが書記長も暗打ちには身をかわす暇がなく、殴られてからやっと驚いて身を引いたが、その時は己に頭でビール壜がはじけ全治一週間の傷が出来た後だったそうだ、あははと笑って杉村は言葉を切った。

　ふむ、ふむ、同盟にも仲々捨てがたい奴がいるね、で、そ奴一体誰だい、と小田切は益々興味をそそられて来たふうである、宍戸だよ、と杉村はずばりと云った、小田切は、宍戸か、ほほお、と感嘆の態である。

　何でも事の起りは何時か書記長が文芸時評を書いていた

が、その中で宍戸の小説の批判がなっていないと云うので根にもっていた彼がその席で書記長の名を呼んだらしいけれど、今云った通り奴さん夢中になって理論闘争をやっていた折から聞えなかったのだろう、そ奴を生意気だと取り、かっとなって殴りつけたというわけだ、それからまあ大騒ぎになり、みんなで宍戸を抱きとめると宍戸は、貴様が同盟を今日のような極左に陥し入れたんだぞ、自決しろッ、と叫びながら猛烈に欠けたビール壜を振り廻して暴れ、仲々勇ましかった模様だよ、と杉村は語り終えると愉快そうにぷすりとおでんの豆腐に箸を突き刺した。

ふふーん、仲々宍戸もいいところがあるねえ、と小田切はつまらぬところに感心し、興趣自ら湧くと云ったような顔をしてもう一度、ふふーん、と独りうなずくのであった。

前書記長は恋の逃避行をやるし、屋台骨が傾きかけるといろんなことが起るよ、と杉村は余所事のように云ったが、矢張り気になると見え、ともかくあんまり人に云わぬがいいよ、ともう一度念を押し、さあ飲もう、と徳利を眼のあたりまで高く持ち上げた、少々酔って来たようだ、小田切久次は、お祝いのようだね、と意味のわからぬことを云ってにやにやしながら杯を徳利の口へ寄せてゆくと不意に、おーとっとっと、頓狂に叫んだ、杉村が酒を注ぎこぼしたのである。勿体ないことをするな、と小田切は急いで杉村の手から徳利を引ったくり、周囲をベラベラと舐め廻し、それからテーブルに鼻面をすりつけてこぼれた酒をズー、ズーと吸った。おでん鍋の向うで小女がくすりと笑った。杉村は、止せよ、と小田切の額を指先でついて持ち上げさせ、お代り、小女をふり返った。

おい、いいのかい？　と小田切は心配そうな嬉しそうな顔である。杉村は、ポッポは温かいよと着物の上から胸を叩いて見せるのだった。

八

二人は何時かいい気持ちに酔っていた。十二三本の徳利を並べ、ふらふらと彼等が「たこ安」を出たのはもう一時すぎだった。通りかかった円タクを呼び止め杉村が乗り込むと、何故か小田切久次は素知らぬ顔でひょこひょこ行きすぎた、おーい、おーい、と杉村は車の中から呶鳴ったが、小田切は聞えぬのか、それとも聞えて聞えぬふりをしているのか矢鱈にずんずん歩いて横丁へ曲ってしまった、杉村は、厄介な奴だな、とつぶやき車を跳び降りて後を追った、角を曲って横丁へ入ると小田切の姿はもう見えなかった。おーい、小田切君――杉村は跣足になり横丁を抜けて向う通りに出たが更に小田切の姿はない、小田切君、と何度呼んでみたが返事もない、変てこな奴だな、まるで鼠みたいだ、と独りつぶやき杉村は尚も横丁や露路をうろうろとのぞき廻ったが、もう皆目わからなかった。探しあぐ

ねた杉村は何時か狐につままれたような顔をして電車通りへ出て来た。
　その頃小田切久次は知らぬ家の裏の塵芥箱の蔭にしゃがんでにやりと笑いを洩らしたところだった、うまく行った、と頃合いをはかって彼はのっそり立ち上がり、露路から裏通りへ出るとすたすたと印刷所の方へ急ぎはじめた、怪しからぬ想念に刺激され心臓が何時になく太く息づいていた、あの女はたしかに俺に好意を持っている――小田切久次は改めて思い直す、鶏や兎の性慾的な生活だけを見て暮している彼は何時か鶏や兎の生活と人間の生活とのけじめがつかなくなっていた、人間も性慾的には雄鶏のように軽率で安直ならばいい、いや誰も心では雄鶏を羨んでいるのだ、何の不自然もなくそう思い込んでいる小田切久次はあの女が今夜俺を待っている、――でなくてどうして主人が留守だということをあの時わざわざ云う必要があろう、況して詩を見てくれ、なぞとてっきり文学少女の手だ、よし文学少女結構――それは杉村と飲んでいる間中も彼の脳裡をはなれなかったのである。彼はそれを本気に信じていた、うっかり、おでん屋の主婦にでも、又いらっしゃいねえ、と云われると本当に夜遅くなってからなぞ、又来いと云ったから来たよ、と云ってやってゆく彼とすれば無理もないことかも知れない、やがて小田切久次は体を縮めたかと思うと跳び上り塀の笠木に手をかけた、音もたてずよじ昇り、するすると向う側へ降りてゆくのも手馴れた小気味よい手際だった、そこは印刷所の通用口である。溝板を踏んで奥へ進むと間もなく台所だった、そっと硝子戸に手をかけてみたがもちろん錠が下りている、彼は一寸考え、ふと露路の突き当りに私設の電柱が立っているのを発見すると静かにそれに近づき、ぺッぺッと掌に唾をかけそろそろと細い電柱を登りはじめた。
　ふと小田切久次は頭に何か触れたように感じた、途端に何物かが肩をかすめ、塀にぶっかって時ならぬ音を立てた。電柱が物干に代用され竿が渡してあったことに気がつかなかったのである、小田切久次ははッとして電柱の中途で身をすくめた、大した音というでもないが突然隣りの庭から犬が吠えはじめた、彼は慌てて電柱から跳び降りた。すると犬は一層仰々しく吠え立てるのであった、小田切久次は塀腰の横桟の間からのぞき不器用な手つきでおいでおいでをしながらだまそうとかかったが、犬はその手に乗って来ない、小田切はへっぴり腰で去就に迷っているうち、隣りでは誰か起きたらしくがちゃがちゃと台所の鍵をひねる音さえ聞えて来た、今は猶予もならず小田切はちッと舌打ちして裏口へ急いだ、再び小気味のいい跳躍を試み、能のように塀によじ登った。だが運の悪い時は仕方ないもので、一人の警官が右手の曲り角に立っていたが、小田切が塀から跳び降りたのを見るといきなりサーベルを摑んで追って来た。流石の小田切も狼狽し、地に足がつくが早いか一散に駈け出した。

泥棒、泥棒ッ、と警官は夜更けの街に物々しい声を上げながら追跡した、小田切久次はその叫びが気に喰わなかったが泥棒じゃねえぞ、と一声喚き返して宙を飛ぶように走った。足は太く短いが走ることは自信があった。通りを右へ折れ半丁も駈けると再び露路に入り、それからというものはどこをどう抜けたが自分にもわからぬ位彼は無茶苦茶に駈け廻った、蓄積された彼の精力はこういうときに目覚しいばかり発揮された。もう警官もつけて来る模様がなかった、どんなもんだ、小田切久次はほんの少しばかり得意になり、その露路の角に偶然にもさっきの警官が立っているとは知らず悠々と出て来た。

九

小田切久次が警察の地下室から出て来たときは已に機関誌部には他の同志が補充されていた。だが校正の済んだ組版も同盟が約束の半金を入れないため未だに印刷所の棚にそのまま積まっていた、雑誌も新聞も何時出るか見透しさえつかなかった。只ひっきりなしにニュースや号外だけが同盟員に訴えかけていた、だが同盟員たちはあまり感激しなかった、何れの機関も有名無実で、錆びた車のように動かなかった。それでも辞めさせられたと思うと小田切は癪だった。彼はますます誰とも逢わなくなり、毎日鶏と兎と女房の芳江にぷんぷん当り散らしていた。鶏と兎はもう可愛がってくれなくなった主人の時々の粗暴さに頓狂な叫びを上げておびえたが、女房の芳江は鶏たちほどおどかされなくなった。

はじめて検げられた理由が夜這いだなんて、どの面下げて留置場から出て来たんです！　と筋張った顔で詰め寄った。そして二言目には出てゆくといった。

小田切久次は世間が憎く、人が怨めしく、わけのわからぬことを呶鳴っては芳江を殴った、芳江はそうなってくるとじっと歯を喰いしばってこらえ、一言も云わなくなるのである。この変った鶏飼いに連れ添うた短かからぬ年月が彼女をも亦変った女にしたのであろう。ある日、小田切久次は鶏小舎を開けて糞の始末をしていたが、ひょいと顔を上げると芳江が風呂敷包みをかかえてこっそり裏口から出て行こうとするのを見た。逃げる気だなと直感した小田切は鶏の糞を片手に掴んだまま小舎を飛び出し、いきなり芳江の襟首に手をかけて引倒した。ふくれた風呂敷包みがころころと溝板の上に転がった。小田切はもの一つ云わず彼女を引ずって鶏小舎まで来ると、片手に握っていた鶏の糞を棚の上に投げ（鶏の糞は一俵いくらで売れるので彼は一塊の糞もおろそかにしなかった）それから彼女を座敷に引きずり上げ、手足を細紐でがんじがらめに縛り上げた。その間中小田切は全く口を利かなかったが、芳江も亦無言でされるがままになっていた。

鶏小舎では鶏たちが怪訝そうに首を伸ばしたり縮めたり

していたが、やがて一匹の雄は入口の開いていることに気づき、くくくくと云いながらのこのこと庭へ出てゆくのであった。それを見ると外の鶏たちも申し合せたように喉を鳴らし、ぞろぞろと隊を作って庭へ出はじめた。先の雄鶏は久しぶり開放された喜びで垣根のそばに餌を見つけたらしく、くおッ、ここここと逞ましい脚で砂をかき、雌鶏たちを呼んだ。

丁度この時芳江を縛り上げて出て来た小田切久次はこの有様を見ると人間か鶏かの見境いもなくカッとなり、馬鹿野郎ッと呶鳴って傍の薪木をはっしと雄鶏に投げつけた。雄鶏はこの奇襲に驚愕の声を上げ、一旦は飛び上がったが、降りたときは薪木を受けた片足がなえていた。それでも恐ろしさにびっこ引き引き小舎の中へ逃げこんだ、外の鶏たちもむろん肝をつぶし悲鳴を上げながら垣根や小舎にばたばたと飛び上った。三十羽からの鶏が前の原ッぱや隣家の庭へ逃げ出したのには今更小田切自身がひどく狼狽しなければならなかった。こんなことが度重なり、今では鶏たちは主人の姿を見ると体を寄せ合い、すっかりちぢこまるようになってしまった。

雄鶏の脚を折ってから一週間ばかり経った或る日の晩、もう鶏たちの餌がなくなり、小田切は例の魚屋へ雑物を盗りに出かけねばならなかった。芳江は已に寝ていた、小田切は着物の上からかつては新らしかったこともあったかと思われる、ほんとに申し分けのためにだけ破けずにいるような古ぼけたレインコートを着、台所から大きな馬穴を下げて出かけた。レインコートのポケットからは小便染めのような手拭がだらりと垂れていた。これは全く相当な格好だった。夜も更けて街通りは雨戸を閉め、通る人の影もない、やがて目的の魚屋のところまで来ると彼は足音を忍んで裏露路を入って行った。魚屋の裏にはいくらかの槽が積んであった、彼はそれに近づき上から順々にそっと胴を叩いて中をたしかめてみるふうだった。そして夜盗のように緊張した様子で上の槽を静かに地面に下ろし、二番目の槽に手を差し入れた。手摑みに幾度か槽から馬穴へ移し、それが一杯になると再び槽を元通りにしてこっそり露路を出て来た。

彼が馬穴を下げて家に帰った時には已に寝ていた筈の芳江の姿が見えなかった。便所かと思って台所脇の便所の戸を開けて見たが、ぷーんと臭気が鼻に来ただけで彼女はいなかった。芳江、芳江、と彼は呼んで見た。返事はなかった。座敷に引き返し、机の前にゆくと彼はそこに見覚えのある筆跡を発見した。左様なら、小田切久次様、芳江——と簡単に走り書きがしてあった。

小田切久次はぼんやりと馬穴を下げたまま暫く立っていた。彼はそこまで馬穴を下ろしてもいいことを忘れていたのである。彼は次第に云おうようのない空虚と寂寥にとらわれて行った。ああ、出かける時に手足を縛ってゆけばよかったと後悔したが甲斐もなかった。今更逃げた魚は惜し

く、何よりも再び女房を持つことが出来るかという不安と絶望とがはっきりと彼の心に来た。やがて彼は座敷の真ん中にはじめて馬穴を下ろし、そのまま下駄をつっかけて出て行った。彼はすっかり昂奮していた。無意識に中野の方角へ駈け出していた足をふと止め、踵を返えすと今度は杉村や堀川たちの家の方へ急ぎはじめた。夜更けの道は寒々とする程静かだった。通り馴れた火葬場の前も夢中で過ぎ、寺や墓場のある薄暗いところにさしかかると、不意に横丁から出て来た背の高い男があった。

のっぽの男は前を走り過ぎようとするずんぐりした男を一寸眼で追い、すぐ、小田切君じゃないか、と呼びかけた。小田切はいささかぎょッとして立ち止まり、杉村か、と感慨めいた声を出した。杉村は小田切に近寄り、常任委員会は今夜――たった今、同盟の解散を決議したよ、とこれも昂奮した口調だった。だが小田切には同盟の解散という歴史的な事件も今はさして驚くほどの事件ではない、ふむ、と一つうなずいただけだった。杉村は小田切の様子が何時もとちがうことにはじめて気づき、君は又、この夜更けにどこへ行くんだ、と尋ねた。小田切は落ちつかぬ気に、女房が逃げたよ、と云い、杉村が聞きとがめて、何ッ、奥さんが？ と驚くのにも答えず、後で君の家へ寄るから待ってくれよ、一寸神近さんところへ行ってみるから、と云い捨ててもう歩き出していた。

杉村は着物の上から古ぼけ垢じんだレインコートを着て、そのポケットからだらりと手拭を垂らした滑稽な小田切久次の後ろ姿を暫らく苦笑もせずに見送っていたが、やがて、ふむ、やっぱりそうか！ と独りわかったようにうなずき、墓場の前を家の方角へと帰って行くのであった。

（一九三五年七月「文芸」）

人生のいり口

江口渙

一

「おい。朗。鶯に餌をすっておやり、いっしょに水も換えてやるんだ」

父にいわれると、朗は、早速台所から青い物や小さな擂鉢などを持ち出して来た。そして、庭の新緑をくぐって縁側へ射し込む朝日の中へ、大人のように胡坐をかいて、寝床の中の母をふり返えった。早起きをして、元気よく働くのを、母が見てくれるのが、耐らなく嬉しいのである。朗は、小學校の正服の臂を突っ張ったまま、しばらく夢中になって、おもちゃのような擂木を廻した。

朗の母が寝込んでから一年半。兄の鉄が無断で姿をくらましてからまる一年。重苦しい陰欝さが家中を閉ざしている。それを少しでも紛わそうとして、父が昨日鶯を買って来たのだ。

朗が、やがて、すり上げた餌を餌壺へ移した時だった。突然、門のリンが割れそうに鳴りひびくと、「御免」という鈍い声といっしょに、玄関の格子が荒々しく開いて、大勢の足音がドタドタと入って来た。姉のまき子が「どなた」と答えて茶の間から出て行った時には、その沢山の足音は、障子や唐紙をがたびしさせながら、玄関を通りぬけて、もう玄関脇の六畳へ誰の許しもないのに入り込んで来た。

顔色を変えた父と姉とが、慌てて六畳の縁側まで行った時には、背広を着た男が七八人、部屋いっぱいに突っ立っていた。

「真田鉄の部屋はここか。一応、見せてもらうから」

叱るような、いい渡すような声である。

「鉄がどうかいたしましたか」

「さあ、どうしたか知らないが、部屋を全部あらためるから」

それに対して、又、父が何かぼそぼそと小声で訊き返えしている間に、まき子が朗の布団を片附けにかかると、前の声がもっと鋭い調子でどなった。

「それはそのまま、そっとして置いて。一さい、手を着けちゃいかん」

そして、図抜けて背の高い三人が、父と姉とを監視するように、三方から見降していると、他の男達は、手早く何かやり始めた。本箱の硝子戸が荒々しく開けられる音がす

る。続いて、本をばたばたさせたり、それをどさりと畳へ放り出す音が聞える。机のひき出しも開けたらしい。
「兄ちゃんのことで何か怖しいことが起ったのだ。兄ちゃんに大変なこと起ったのだ」そう思ったら、朗はもうじっとしてはいられなかった。餌壺を持ったまま、自分の部屋の入口まで行って姉の袂の横合から、こわごわ中を覗いて見た。

矢張、朗の考えていた通りだった。その男達は、兄の本箱から勝手に本を引っ張り出しては、片っ端から、ばらばらと頁をめくったり、逆さに振って見たりしては、畳の上へ放り出すのだ。狭い部屋は放り出された本で、足の踏み場もないほどである。兄の机の抽出しが、二つとも空にされて、壁の隅に押しやられている。中の物が机の上にぶちまけられている。顎に不精髯の生えたのと、変に耳の大きいのと、二人の背広がそれを丹念に検べている。子供の朗にも、それが警察の者だということが、直ぐ解った。兄がいる時も時々来たが、いなくなったしばらくは、うるさいほど来た。その同じ類なのだ。

兄は家にいた時、朗が自分の本箱をいじったり、机の抽出しへ手をかけたりすることを、絶対に許さなかった。一度など、朗が抽出しから勝手に鋏を出して爪を切ったら、いやというほど頭を撲られた。それ以来、兄の物は朗にとって決して手を触れてはならない大切なものとなっているのだ。それなのに、この男達はどうしてこんなことをするのだろう。しかも、兄に何か憎しみでも持つかのように、何でも彼でも荒々しく扱うのである。兄が見ていたら、どんなに腹を立てることだろうか。それを、又、どうしたわけか、父も姉も、突っ立ったまま黙って眺めていて苦情ひとついおうとしない。本が手荒く放り出される度に、朗はまるで自分が放り出されたような、口惜しさと腹立しさとを感じて、躰がふるえた。

気がつくと、出窓の上の鶯までが、すっかり脅え切っている。その男達が立ったり座ったりするたびに、鶯はばたばたと籠の中を逃げ廻る。そして、逃げあぐんでは竹の格子へ獅噛みついてこわそうに毛を逆立て、黄色く舌を出しては、はっはっと胸を波打たせる。その様子が、今にも呼吸が絶えそうである。朗は、いよいよ、耐らなくなって来た。

不精髯の男が、とうとう、朗の机に手をかけた。
「小父ちゃん。それ、開けちゃ駄目じゃないか。僕の机だよ」
「朗ちゃん。黙っといで」
そっと姉が肩をつついた。
「だって、僕の机、いじっちゃ嫌だもの」
「そうか。これ、坊やの机か。ハッハッハ」
だが、男はかまわず抽出しを開けて、掻き廻している。中には色鉛筆だの、クレヨンだの、画用紙へ張りつけた植物の出来損ないの標本だのが詰っている。標本の下からキ

キャラメルが、五つ六つ顔を出した。
「これが坊やの一等大事な私有財産だな。ハッハッハ。一つ喰べてやろうか。ハッハッハ」
キャラメルを一つ摘み出すと、朗に見せびらかすように、わざと眼の上へさし上げて、くるくると廻して見せた。眼尻に皺をよせて笑う顔が、とても嬉しそうである。
「小父ちゃん。汚いじゃないか。手垢がついて」
「ハッハッハ。坊主。なかなかやるなあ。流石は真田鉄の弟だけあって、相当なもんだ」
「もう、すっかり兄貴の影響下に置かれていやがるな。今にいい後継ぎが出来るぜ。ハッハッハ」
耳の大きな方までが、横目でじろりと朗を見ると、傍から口をはさんで来た。
「なんてやんだい」
そして何かもっと鋭い一と言を、投げつけてやろうとした時だった。父の手が烈しく朗の肩を押して、朗は、咄嗟に縁側へ突き出されてしまった。
「朗。あっちへ行ってろ。うるさい」
先刻から堅く結ばれていた父の唇が、その時、叩きつけるように言葉を吐いた。
朗は止むなく縁側を後じさりに、じりじりと座敷の前までさがって来た。そして、ふと気がついて、中に臥ている母を見た。母は痩せた躰を寝床の中から半分程起して、右手で支えながら、上眼づかいに庭の一方を見詰めたまま、六畳の物音に、じっと聞き耳を立てている。母の寝ているところからは、障子の蔭になって、部屋の中が見えないからだ。
普段からつやの悪い母の顔から、血の色が無くなって、不気味な土色に変っている。そして、左の肩へ半分かけた掻巻の襟が肩といっしょにわなわなと眼に見えてふるえている。
朗の眼と母の眼とぴったり合うと、母の顔がかすかにゆがんで、苦しそうに眼ばたきした。だが、母は直ぐ様、視線をもとへ返えすと、眉の間に一層くらい影を見せて、尚も六畳の物音に耳を貸した。
「そうだ。やっぱり兄ちゃんに何か怖しいことが起ったんだ。確にそうに違いない」
こう思ったら、朗は自分ながらどうしていいか解らなくなった。そして、何か眼に見えない怖しいものが、真黒な羽ばたきをして、四方八方から兄の体へ襲いかかっている有様が心に浮ぶと自分自身が咽喉でも絞めつけられているような苦しさをさえ感じて来た。しかも、それを訴えようとして、更めて母を見ると、母は病人らしく痩せ細った首を伸ばし、眼をじっと据えたまま矢張肩をふるわせているので、朗はついに一と言もいうことが出来なかった。そして、そのまま縁側へ腰をおろすと、いつまでも花壇の花ばかり見詰めていた。

一時間近くもさんざん引っ掻き廻した揚句、その男達は大きな布呂敷包を三つも抱えて引き揚げて行った。帰り際になってでっぷり肥った鼻の赤い一人が、わざわざ、母の臥ている座敷の中まで入って見たり、茶の間を通って、姉の部屋から台所までも覗いたりした。

「ほんとなら、家中、検べるべきなんだが、病人もいることだから、今日は、まあ、大目に見て置いてやろう」

その声には、相変らず叱るような、いい渡すようなひびきがあった。

みんなが出て行った時、父と姉とは玄関まで見送りに出た。だが、朗はどうしてもそんな気持になれなかった。相変らず縁側に腰をおろしたまま、身じろぎもしないで、花壇の花から眼をはなさなかった。不安に渦巻く心の中にしきりと兄の姿を捜しながら……。

二

次の日の朝、父は兄の着物を布呂敷に一と抱え持って、何処かへ出て行った。そして、やっと夜になって帰って来た。

父は臥ている母の枕元へ洋服のまま坐り込むと、姉のまき子も仲間に入って、小声で何かぼそぼそと話し始めた。それがいかにも人に聞かれてはならないという風に、声というよりも、むしろ呼吸に近い低さである。朗が傍へ行くと、三人ともいい合せたようにぴたりと声をのんで、話を切って終う。そして、父も姉も元気のない顔を鈍く動かしては、電灯を見上げたり、部屋の中を見廻したりする。

「朗ちゃん。好い児だから、もうおやすみ。子供は何時までも起きてるもんじゃないよ」

とうとう、姉がこういって、眼で六畳を指差して見せた。それが、いかにもおっかぶせるような声だったので、朗は仕様がなしにしぶしぶ自分の部屋へ帰って行った。が、その時には、三人の話は、又、今までのように細々と続くのであった。

朗は、いつもの通りそそくさと床をとると、手早く寝巻に着換えてもぐり込んだ。だが、今夜も矢張、兄のことが思い出されて仕方がない。兄が家にいた時、朗が寝てしまっても兄はなかなか寝なかった。どうかして、夜中にひょいと眼をさますとよく兄は机に向って起きていた。そういう時、兄はきまって何か書き物をしている。万年筆が紙の上を、シュッシュッと軽く走るのが聞える。指の先で、本の頁がさらさらと鳴る。

時には垂れ下っている髪の毛を、すうっと指で掻き上げて、軽く頭を振ると、髪の毛全体が電灯の光の下で黒々と揺れた。

最後に家からいなくなった時の兄が朗には一等思い出される。学生服に茶っぽいオーヴァを着て、帽子を冠らない頭の上には、真黒な髪の毛が、風に長く揺れていた。本を

入れた布呂敷包と、中型のトランクとを両手に提げて、そして、その日に限って朗に電車の停留所まで送らせた。
「朗。何かすきな本買ってやろうか」
「ううむ。いらないや」
「じゃ。何か甘い物買ってやろうか」
「ううむ。今、お腹が一ぱいだからいいよ」
「じゃ、ノートか鉛筆、いらないかい」
「いらないね」
「いらないかい。そうかい。じゃね。兄さんのいない時でもおとなしく勉強するんだぞ」
「うむ」
「勉強して、兄さんの置いて行った本を早く読めるようになるんだぞ。いいか」
「うむ」
そこへ、電車が来たので、兄は朗の方を振り返えりもしないで、そのまま、つかつかと乗ってしまうと、直ぐ車内の人ごみの中へ見えなくなった。その時も、兄の頭の上で黒々と揺れる髪の毛が、朗にはとても美しいものに思われた。
兄が早く帰って来てくれればいいのになあ。どうして、こんどは一年近くも帰って来ないのだろうと、朗は寝ながら思うのである。兄が帰って来たら、こんどこそは、早速ピクニックにつれて行ってもらうことにしているのに。
家にいた時、兄は天気さえ好ければ、日曜毎にピクニックに行った。朗やまき子のお友達をつれて。大抵は、小田急か京王の沿線だったが、時には省線で遠く高尾山まで行った。高尾山の坂の途中で、杉がうす暗く茂った所へ来た時、朗が突然、
「兄ちゃん、こんな所で虎が出て来たら、僕どうしたらいいだろう」
と、心細い声を出したので、みんなが腹を抱えて笑い崩れたことがあった。それ以来、「高尾山の虎」というのが朗の家で有名になった。そして、ピクニックに行く度に、寂しい森や木立へ来ると、兄はきまって、
「おい。朗。虎が出たら兄ちゃんどうしたらいいだろう」
と、いっては、さも嬉しそうに笑うのである。それでも朗にはピクニックが何よりも楽しみだった。
たしか、一昨年の十月だった。兄は、朗と、朗の仲好しの三ちゃんと、三ちゃんの家の飼犬のペチ公と、まき子とまき子のお友達とをつれて、京王沿線の烏山から井の頭へ、秋の武蔵野を歩いたことがあった。その時、茸を採るのだといって、井の頭の少し手前で、みんな雑木林へ入って行った。茸は採れなかったが、代りに龍胆だの、秋のげしだの、きれいな花が沢山とれた。
ゆるい登になっている雑木林を出はずれると、自然と小高い丘のてっぺんへ出た。そこで日当りのいい芝生を見附けて、円くなって腰をおろして、弁当を喰べにかかった。
「いいかい。一寸、待っておいで。お茶を沸かして上げる

から」

兄はリュックサックからニュームの薬鑵をはずすと、それを提げて急いで何処かへ降りて行ったが、間もなくいっぱい水を入れて帰って来た。そして、もう一度、林の中へ入って、枯草や枯枝をどっさり抱えて出て来た。

やがて芝生の真中で、焚火が気持よく燃え上った。みんなが面白がってあたっていると、更に兄は三尺位の枯枝を三本、三つ又に組み合せて、根元をペチ公の鎖でしばった。そして、鎖の端へ薬鑵をぶら下げて、それを焚火の上へ置いた。お茶が直ぐ沸いた。

最初、三つ又が組まれて薬鑵がぶら下げられた時、朗は兄の思いつきの素晴らしさに感心した。ことに、ペチ公の鎖が即座にそうまでうまく利用出来ようなどとは、夢にも思ってもいなかったので、それがいいようのないほど嬉しかった。

「ばんざい。ばんざい。これで、いよいよお茶が沸きますす」

朗は、思わず手を叩き、体を揺って歓んだ。そのことを今でもはっきり覚えている。

「兄ちゃんは、何時になったら帰って来るのかしら。そうして、こんどは又、何処で三つ又に薬鑵を下げてお茶を沸かしてくれるのかしら」

そう思ったら、又、心細さが俄かに強く湧き上って来た。朗は思わず溜息をついて、真暗な部屋の天井を見上げた。

その時、暗い出窓の上で、ささやかな小鳥の足音がしだした。鶯が眼をさまして止り木から止り木へと渡る音だ。朗の注意は忽ちその足音へ吸い寄せられた。何というつつましやかな、そして、いとしさに充ちた足音であろう。その足音にじっと耳を貸していると、何ともいえない物なつかしさが、暖い波となって部屋いっぱいに溢れて来る。朗は、兄のことなどつい忘れて、いつか和やかな眠りに落ちて行った。

三

その日以来、朗の家は明るさを失ってしまった。

父や姉は矢張、兄の着物を布呂敷に入れては、何処かへ出て行き、又帰って来た。この間、出しぬけにやって来たのと同じような背広の男が、その後も時々玄関へ姿を見せた。もう前のように家の中へは上らなかったが、きまって、二十分も三十分もくどくどと何か訊ねて行った。その度に底の知れない不安が、又、更めて家中を脅かすのだ。ことに、朗にさえも解るほど母の体が眼に見えて悪くなった。その事がみんなの気持を、一倍見透しのつかない不安の中へ追い込んで行った。

朗は家の中でいつか独りぼっちになっていた、誰も話仲間へ入れてはくれないからだ。そしてただ、鶯だけを相手

にして日を送った、朝、学校へ行く前に、必ず餌をすった。午後、帰って来ると、忘れずに行水を使わせては籠を洗った。だが、降り続いた長雨がやっとはれて、暑い夏の日射が庭いっぱいに照りつけた朝になって、鶯はぱったり鳴かなくなった。朗はいよいよ独りぼっちになった気がした。

夏休みになって直ぐだった。朗は蝉でも撃ってやろうと思って空気銃を担いで裏へ出ると、物置きの日蔭で姉のまき子が洗濯をしていた。

珍しく手拭を姉様冠りにしたまき子は、浴衣の袖を襷よりも高くまくって、肉附きの好い腕を動かしながら、せっせと汚れ物を洗っている。襷の赤い色が着物の白地に映って、薄赤い影をぱっと眩くにじませている。

傍へ行ってよく見ると、盥の中は浴衣、襦袢、シャツ、どれもみんな見覚えのある兄の物だ。朗は思わず立どまった。そして、石鹸の泡の中で動くそれらの物に眼を注いだ。

「小姉（ちいねい）、こんだ、いつ、兄ちゃん所へ行くんだい」

思い詰めている朗の声は、強い調子に張り切っていた。だが、まき子は返事をしない。ただ、ちらりと眼を上げて鋭く見返しただけである。

「こんだ行く時、僕も伴れて行ってよ。小姉（ちいねい）、一人で行くのずるいよ」

「あたし、兄さん所なんかへ、ちっとも行きゃしないことよ」

「嘘！ しょっちゅう着物持って行くじゃないか。これだって、昨日、持って来たんじゃないか。僕みんな知ってるよ」

「いいえ。そうじゃないのよ。これ、みんな他処のお家へ預けてあるのを貰って来るのよ。持って行く時だってそうなの。そのお家へ預けて置くと、そこから兄さんに届けて下さるの」

「じゃ。兄さん何処にいるの」

「さあ。あたし知らないことよ」

「知ってるくせに、嘘つき」

兄のことになると、みんな、どうしてこうまで嘘をつくのだろうか。何故、家中寄ってたかって朗にだけほんとうの事を聞かせまいとするのであろうか。そう思うと朗は、又しても耐らなくむしゃくしゃして来る。だが、その腹立しさを何処へも叩きつける処がない。叩きつけたって相手にされないのが解っているからだ。朗は仕方なしに、又、空気銃を肩へあてて蝉を打って歩いた。だが、蝉には一発も当らなかった。その上、ひどい奴になると、慌てて歌を止めて逃げる拍子に、さっと小便をひっかけるのさえある。朗はますます、むしゃくしゃした。

そのうちに、ふと自分の部屋の出窓の前で、アミの佃煮をまいたように、何千とも知れぬ赤蟻が群れているのを見出した。赤蜻蛉が死んでいるのだ。それを蟻が一せいに襲

っている。見ると蜻蛉の胴体は既に無残に喰い破られ、葡萄色の大きな頭は、盛り上げられた土の粉で早くも半ば覆われている。

黒地に黄色く派手な横縞を描いた赤蜻蛉の胴体は、朗に、直ぐ様兄の以前着ていたユニホームを思い出させた。朗は高等学校時代に蹴球の選手だった。そう思った瞬間、鉄は又してもいつかあの時、玄関脇の六畳へ、無断でずかずかと入って来て兄の机や本箱を引っ掻き廻し、勝手に本をさらって行った、あの男達を思い出した。……そうだ。あの男達も、この蟻がしているのと同じように、兄ちゃんを、よってたかって、ひどい目にあわせているのではないだろうか。そして蟻が土を盛り上げて蜻蛉を隠くそうとしているように、あいつ達も、兄ちゃんをどこか遠くの暗い所へ隠してしまったのではないだろうか。……こう思ったら、蟻が無性に憎くなった。どうしても、この蟻をみな殺しにしてやろう。にくいにくいあの男たちの代りにこの蟻を殺してやろう。忽ち、蟻に対する憎悪が頭の中に閃くと、朗は急いで家の中へ駆け込んだ。

間もなく、台所から新しいマッチが三箱も持ち出され、朗の部屋からは兄に貰った凸面レンズとナイフとが持ち出された。箱の中のマッチの棒は三箱とも引き出されて、頭につけた丸い薬がナイフで残らず削り取られた。そして、その薬だけを大切にもとの箱へ入れた朗は、しばらくレンズで地面の蟻をのぞいていた。拡大されて見える蟻は、普通の蟻よりは、もっと揺かに憎々しく見える。頑丈な顎、かたそうな腐、鋭い牙、ずんぐりとした頭と尻。そして、がっちり踏んばった六本の脚。……朗はマッチの薬を蟻の群の上へ三所ばかり盛り上げると、又、レンズでのぞいた。驚いて逃げるのもある。薬の粉へ喰いつくのもある。薬の下敷きにされるのもある。だが大部分はずうずうしく蜻蛉を襲い続けている。

朗はレンズの面を太陽の光線に直角に向けた。そして、そこへ集められた光の先を、盛り上げられた薬の上へ円く落した。円い光がだんだん小さく集中されて、やがて眼に痛いほど白熱した小さな鋭い点になった。と、思った時には薬は荒々しい音といっしょに爆発した。焰に噴き飛ばされて、無数の蟻が八方へ散った。白く焦げて飛ぶのもある。黒く小さくちぢれるのもある。ひどいのになると、頭と尻とがひきちぎれて小さなごみになるのさえある。それが朗には耐らないほど痛快だった。

「そら、見ろ。そら、見よ。兄ちゃんのばちがあたったんだぞ」

朗は何度も同じ言葉をつぶやきながら、薬の山を次から次へと爆発させた。そして又、レンズでのぞいた。死に損なった蟻が、しきりに苦しんだり藻掻いたり、逃げまどったりするのを眺めるのが、更に一層痛快だった。

朗は、久しぶりで胸の中のわだかまりが、すうっと消えて行くのを感じた。

四

夏休がすんで朗が再び学校へ行き出すと、母の病気はくっきり段がついて悪くなった。下っ腹が西瓜でも抱えたように膨れ上った。そして、しばしば苦しそうに呻いては、身悶えさえした。医者がとうとうお腹から水をぬいた。水をぬかれると母の様子は見違えるように楽になった。だが、又、下っ腹がふくれ出すと、苦しみが甦って来る。又水をぬく。矢張一時は楽になる。だがそれも長くは続かなくって又苦しむ。そういう日が毎日続いた。その度に、朗は母の苦しみを自分の体にじかに感じて、痛々しさにたえられなかった。

秋になっても暑さが肌を焦がすような日の午後だった。朗は学校の帰り道に多勢の友達と一しょに省線の踏み切りで電車の通り過ぎるのを待っていた。

そこへ副級長の松本と、その腰巾着の吉川と白井とが、大きく肩を組んで、わざと酔っ払いのような歩き方をして近寄って来た。

「おい。みんな、真田の傍へ行っちゃ駄目だぞ。さわるとすぐ赤に染るからな」

松本はいかにもみんなに聞えるように、殊更大きな声でいった。だが、その意味を誰も直ぐにはのみ込めなかった。そしてただ不思議そうな顔附をして、朗と松本とをじろじろ見較べている間に、電車が通り過ぎて遮断機が上った。みんなはぞろぞろと踏み切りを渡った。だが、渡り終ってからも松本達三人は相変らず肩を組み、何度も耳打ちして朗を振り返えって大袈裟に笑った。そして、しっこく振り返えっては笑い、笑っては振り返えりながら、生垣に沿ってぶらぶら歩いた。

朗はむかむかと腹が立った。ことに、松本は学校なども朗よりずっと出来ないくせに、家が金持であるばかりに親の威光で副級長にしてもらっているのだ。そして、多勢の腰巾着もただそのためについているのだ。それに対する平生からの反感が、突然、このわけの解からぬ侮辱にあった朗の怒を一倍烈しく燃え上らせた。朗の痩せた頰に、忽ち血の色が刷いたようにさっと走った。

「何がそんなにおかしいんだ。腰巾着なんかつれやがって、いやあな奴」

だが、朗の言葉は、直ぐ様、無残にはね返えされた。

「どっちがいやな奴だい。この共産党!」

「僕、共産党なんかじゃないようだ」

「共産党の弟なら、共産党にきまってるじゃないか。馬鹿野郎」

瞬間、朗は言葉が咽喉へ詰った。だが、たちまち怒がそれを突き破った。

「僕の兄ちゃん、共産党なもんかい。ちゃんと帝大へ行ってるんだぜ」

「嘘を吐け。隠したってみんな知ってるぞ」
「隠すもんかい。じゃ、誰がそういった。いって見ろ」
「昨日、警察の人が僕ん家へ来てそういったよ、真田の兄貴は共産党で、刑務所へおっぽり込まれているんだって……」
「嘘だい。僕の兄ちゃん、刑務所なんかにいやしないよ。大きなお邸で勉強してるんだよ」
「アハッハッハ。おかしいなあ。刑務所がお邸だとさ。アハッハッハ」
腰巾着の白井が青っ鼻をすすり上げて、大業に笑って見せると、吉川も直ぐさまそれに合槌を打った。
「全くハッハッハだ。ねえ君。真田の奴、よっぽど馬鹿だよ。自分の兄貴が暗い所へ入れられてくさいおまんま喰べさせられていることなんか知らないんだよ。アハッハッハ」
だが、それに対して、朗の怒にふるえる唇が、言葉を出せずにいる間に、こんどは、又、松本がのしかかるようにどなった。
「校長先生がそういったよ。真田の兄さん赤いんだから、真田と遊んじゃいけないって。うっかり遊ぶと赤くなるって」
「君、真田の何処が赤いんだい」
腰巾着の一人がきいた。
「頭が赤いんだとさ」
「そうかい。こいつの頭、赤いんかい」
こういうが早いか、吉川の腕が伸びて、朗の帽子を鷲づかみにした。
「畜生。何、しやがるんだ」
朗が荒々しくその手を押しのけた時には、帽子は既にもぎ取られて、後には刈ったばかりのいが栗頭が、日を浴びてうす青く光っていた。
「やあ。真田の頭、赤いと思ったら、真青だよ。西瓜みたいに真青だよ」
「西瓜だから、中の方が赤いんだよ」
「そうなんだよ。西瓜頭の赤頭だ。ハッハッハ」
「やあい。西瓜頭」
「ハッハッハ、ハッハッハ」
三人が組み合せた肩をほどいて、体を左右にくねらせながら、又大袈裟に笑った頃には、朗の帽子は向うのぬかるみへ投げ込まれていた。
朗は口惜しさで頭の中がいっぱいだった。自分の事も口惜しかった。だが、それよりも、兄の事が更に幾倍も口惜しかった、世の中で誰よりも一等すきな兄、始終、勉強していた兄、よく学校のできた兄、そして兄弟思いで親思いで、いつもみんなにやさしい兄。その大切な兄を、こんなろくでなしの金持の子供に、とやかくいわれるのが口惜しかった。その又ろくでなしの腰巾着に馬鹿にされるのが口惜しかった。

帽子が投げ飛ばされたのを知った時、朗はもう我慢が出来なくなった。そして、怒と口惜しさとで顔をいっぱいにふくらませて、松本目がけて飛びかかった。取っ組み合いが始った。白井と吉川は直ぐ松本に加勢した。白井は後から朗の服の襟を引っ張り、吉川は横から腕を押えた。互にぶつ。蹴る。ねじる。からみつく。四人は顔を真赤にし、獣のように呻きながら、往来一ぱい埃を立ててぐるぐる廻った。朗はとうとう砂利の上へ押し倒された。

「ざま見やがれ。弱虫」

「口惜しかったら、かかって来い」

「いくらでも、のしてやるから」

罵声が汚く浴びせられた。朗がその勢に脅かされて、立ち上るのを一寸、逡巡した瞬間だった。上背を頼んで見下げるように、睨みつけた松本の口から、

「国賊」

と、いう一語が何ともいえない毒々しさで吐きかけられた。

その一声は爆弾よりも、もっと無残に朗を撃った。朗は頭がぐらぐらした。全身がかっと燃えて、眼の中さえも熱くなった。……兄ちゃんは国賊じゃない。そんな悪い人間じゃない。断じて兄ちゃんは国賊じゃない。……こういう考が忽ち朗の頭の中で、呼吸苦しいほど渦を巻いた。だが、それがどうしても口へ出ない。言葉となって出て来ない。そして、焦れば焦るほど、尚更感情がこんがらかって、少しも舌が動かない。ついに、何ともいえない口惜しさをこめて、涙が瞼に溢れて来た。

朗は立ち上った。埃だらけの全身を、怒りに烈しくふるわせながら、猛然として立ち上った。新しく突き上げて来た焔のような怒が、更めて勇気と力をよび返えしたのだ。そして、忽ち路傍に積んである道路工事の玉石を、力いっぱい摑むが早いか、両手で高く差し上げて、物もいわずに突進した。汚れた顔に、涙をぽろぽろこぼしながら。

それを見た白井と吉川とは、顔色を変えて飛びのいた。そして、ばたばたと靴を鳴らして逃げ出した。だが、松本一人は、猛獣に見据えられた餌物のように、生垣へ体をくっつけたまま立ちすくむと、臂を曲げて顔を隠くし、下から朗を覗きながら、ただ、徒らにもじもじした。朗が一歩進むと、それだけ松本の体が、さも怖しそうにくの字に曲った。更に、又、一歩進むと、又、曲った。そして、高く差し上げた朗の石が、いよいよ近く迫った時には、すっかり脅え切った松本の体は、生垣の茂みの中へ、半分、埋るように入っていた。

「畜生奴。国賊なんて、よくもいったな。この野郎」

その時こういう言葉が朗の頭の中で、稲妻のように閃いた、だが、矢張口に出ない。そして、ただ、静脈のふくれ上った腕の先から、玉石だけが突き落された。石は重々しいひびきといっしょに、松本の編上げ靴の蹠へ、どしんとあたった。顔を隠くした松本の肘の下からひいという叫び

声が迸り出ると、その細長い体は軟体動物のようにへなへなと地に倒れた、
「わかったか。兄ちゃんは国賊なんかじゃないんだぞ」
朗は思わず心の中で鋭く叫んだ。すると、矢張、夏休みに蟻を爆破させた時と同じように、長く解けなかったどす黒いわだかまりが、すうっと胸から消えるのを感じた。
やがて、生垣の根に倒れて泣きつづけている松本をそこに残したまま、朗はさっさと家へ帰って行った。だが帰ってからも、その日の不愉快な出来事を、ついに誰にも話さなかった。

五

母の顔が黄色くなり、だんだんむくんで来た。手も、手の指もはれぼったくなり、皮膚にもつやがなくなった。母はなめらかな木の皮で造った人間のようにさえも見えて来た。
秋のふかまるのを知らすように、軽い嵐が通り過ぎて行った日のことである。真新しい竹箒の竹の青さをなつかしみながら、朗がせっせと玄関を掃いていると、郵便が来た。珍らしく兄からの手紙である。朗は強く感動して思わず竹箒をおっぽり出すと、急いで庭へ駆け込んだ。そして、運動靴を蹴飛ばすように脱ぐが早いか、硝子戸を開けて縁側へ上った。

「母さん、兄ちゃんからお父さんへ手紙が来たよ」
「まあ。そう」
母も寝床の中でなつかしそうに顔を動かした。兄の手紙は端書を三枚重ねたような形をして、下に一列ずつ、針であけたような穴がある。朗などが、ついぞ見たこともないものである。朗は珍らしそうに手紙を眺めた。
「兄ちゃんは牛込にいるんだね。牛込区市ヶ谷富久町百十三番地。真田鉄と書いてあるよ」
だが、その言葉がすっかり終らないうちに、父が慌ただしく茶の間から出て来た。そして、何もいわないで、いきなり手紙をもぎ取ると、寝ている母の裾にある、三つ重ねの簞笥の上へ、封も切らずにのせてしまった。台所から姉も出て来た。父と姉とが二言三言囁き合うと、姉が更めて朗を見た。
「朗ちゃん、いい子だから、もっと玄関掃いてらっしゃいよ」
「もう、とっくに掃いちゃったよ」
「そう。じゃね。序手だからお庭もお掃きなさい。あれごらん。嵐であんなに木の葉が散ってるじゃないの」
「うむ」
朗は又しても自分と家の人達との間に、大きな溝を感じた。そして、追い落されるのと同じ感じで、しぶしぶ庭へ降りると、玄関から竹箒をもって来て、掃きにかかった。
その間にも、もう父と姉とは、母の枕元へ近く座って、

今来た手紙を開けて見ている。そして、何時もと同じひそひそ話しが、今日も三人の間に続く。朗は、又も、むしゃくしゃして来た。そして、矢鱈に竹箒に力を入れては、荒々しく庭の土を引っ掻き廻した。

そのうちに髯を生やした背広服のお客が来た。その客が、客間にしてある朗の六畳へ通されると、父はそっちへ行ってしまったし、姉は何処かへお使いに出たので、朗は、早速、掃除を止して、又、母の部屋へ入った。

「母さん、山茶花がどっさり蕾を持ったよ」

「そうかい、もう、蕾を持ったかい」

「ああ。一寸、見ると新芽見たいだけれど、あれ、みんな蕾だよ。白の方も、白とうす紅の絞りの方も、うんと持ったよ」

「そう。まあ、楽しみだわねえ。山茶花が咲く頃迄には、母さんも少しぐらいは好くならなけりゃ」

だが、朗はそれには答えない。そして、瞬間、母の眼をまじまじ見詰めた後で、かすかに声をはずませていった。

「母さん、学校でね。兄ちゃんのことを共産党だっていっているよ」

「まあ。一体、誰がそんなことというの」

「先生がいってるんだって」

「まあ、先生が」

「うむ。そうしてね。兄ちゃんは刑務所へ入れられて、暗い所でくさいおまんまを喰べさせられているんだって」

やつれ切った母の顔が、見る見る苦しそうに硬張って行った。そして、青く澄んだ眼の中が、すうっと赤く染ったと思うと、ぽっつりと涙が睫の蔭から溢れた。だが、矢張り返事をしない。ただ、ふかく呼吸をのんで、まじまじと朗を見詰めるだけである。

朗は何か触れてはならないものに触れたのを感じた。そして、烈しく心が痛んだ。そのため、あの日以来今日まで、家の人達の前で、ついに一度も話さなかった踏み切りでの松本との喧嘩を今日又、一寸口へ出しかけて、思い返えして引っ込めてしまった。ことに国賊と罵られたことを思うと、いまだに体がふるえるほどに腹が立つが、怒を感じれば、感じるほど、その言葉の毒々しさに押し倒されて、誰にも話す気になれない。朗は空しく口を噤んで、しばらくの間、遣り場のない瞳を母の顔へ注いだ。

「母さん。兄ちゃんは刑務所なんかにいるんじゃないねえ。市ガ谷にいるんだねえ」

「ええ。そうよ」

母の顔に始めてほっとした安堵の色が動いた。

「僕、兄ちゃんの所へ遊びに行きたいな。こんだの日曜に行っちゃいけないかい」

母の眼が再びせつなそうに眼ばたきして、心持、顔がふるえた。

「市ガ谷なら省線でいいんだから、僕、ひとりで行けるよ。だから、行きたいなあ」

「さあ。それはね。しばらく、遠慮した方がいいよ」
「どうしてだい。母さん」
「兄さんはね。今、試験で一所懸命勉強しているんだから、朗ちゃんが遊びになんか行くと邪魔になるといけないから」
「僕つまんないな。……じゃ、試験、何時すむの」
「さあ。まだまだ、長くかかるでしょう」
「じゃね。僕、兄ちゃんに手紙上げていい。ねえ。母さん。手紙なら兄ちゃんの邪魔にならないだろう。手紙上げたら、兄ちゃん、返事くれるだろうね。それとも試験で駄目かしら。駄目だったら、僕つまんないけど」
久し振りに母親を独占した歓びのために、すっかり朗は甘えていた。
その時、六畳の部屋から、突然、ふかい感動をこめた父の甲高い声が聞えた。そして、それがだんだん、苦しそうに呻くような低いふるえ声に変ったと思うと、
「鉄が……鉄が……鉄が……」
と、三度、同じ言葉がくり返えされてぴったり途切れた。一瞬間、家全体が俄かにしいんと静まり返えった。それは文字通り呼吸の絶えるような静けさであった。が、忽ち、その中から、いかにも切なそうな啜り泣きが、かすかにふるえながら湧き上った。
父が泣いているのだ。兄の事で何か思い余って泣いているのだ。朗は忽ち烈しく胸を突かれて思わずはっと六畳を見た。だが、生憎、襖が閉っていて、父の姿は見えない。しかも、見えなければ見えないほど、倘更、泣き声が耳にこたえる。朗は仕方なしに母を見た。母は相変らず身じろぎもしない。そして、蒲団の襟に顔を埋めて天井の片隅を見詰めたまま、六畳の啜り泣きに聞き入っていたが、悲しげに開けた瞼へ、ついに涙が溢れて来た。
朗は俄かに兄に会いたくなった。直ぐにもここへ兄が帰って来て欲しくなった。兄が帰って来てくれさえすれば、そして、一と言、言葉をかけさえすれば、みんなの涙と悲しみは消え、家中はもとの楽しさに返えるであろうに。そう思うと、倘更、兄に会いたくなった。
「母さん。僕、兄ちゃんに手紙出していいだろう」
朗の声が途切れ途切れに、ふかい感動をもって唇を洩れると、母は二度ほど軽く顎を引いて、はっきり首肯いて見せた。と思う間もなく、急いで蒲団の襟を上へ上げると、すっぽり顔を隠してしまった。
やがて、取り残されたような形をして、枕の上にのっている母の頭が、こまかく強く左右に揺れて、病み衰えた髪の毛が、いたいたしいほどふるえ出すと、押えきれない啜り泣きが蒲団の襟を突いて溢れた。

六

朗が生れて始めて封緘端書というものを買って来て、市

ガ谷にいる兄のところへ手紙を出してから三日目だった。朗へ宛てた兄の手紙が始めて届いた。矢張、封緘端書だった。朗は自分の手紙に対して、兄がこんなに早く返事をくれたのかと思うと飛び上るほど嬉しかった。

だが、よく見ると投函の日附が一と月も前になっている。市ケ谷とこの郊外と、如何に離れていたって、同じ東京で手紙が一と月もかかるということが、どうしても解らなかった。だが、まち切った手紙が来たための、はち切れそうな歓びは一瞬にしてその疑を消してしまった。朗は軽い興奮に頰を赤く輝かせながら、大急ぎで封を切った。

「朗ちゃん。その後は元気ですか。僕もここへ来てから至って元気です。少し、肥った位だ。毎日、本ばかり読んでいます。今年は夏中雨が降ったので、今頃になって却って暑くなって来たようですね。けれども吹く風はさすがに秋です。昨日の夕方、窓の外の樹でつくつく法師が鳴いていました。さっと降って来る雨も秋の近づくのを知らせるようです。家の花壇、今年もきれいに咲いたでしょう。この手紙がつく頃には菊も咲くでしょう。コスモス、今年はどうしました。

ここには可愛らしい雀やおとなしい鳩が沢山います。時々窓へ来ては部屋の中を珍らしそうに覗きます。僕はこの雀や鳩とお友達になりたくって仕方ないので、時々、飯粒などやるのですが仲々仲よしになってくれません。朗ちゃんも家で雀を見たら、兄さんの窓へ飛んで行って、兄さんと遊んでくれるように頼んで下さい。ハッハッハ。この間、夕立がやって来た時に、窓から外を見ていると、忽ち地面に水溜りが出来ました。すると、雀が一羽ぱっと飛んで来て、その中へポチャンと飛び込み、羽ばたきしながら水浴をやり出しました。実に可愛らしい格好をして水を使っていました。こいつ、見かけによらず、お洒落と見える。やがて水浴がすむと、この小さい田舎紳士は、ブルッと体をふるわせて水を払い、チュッチュッと舌打しながら何処かえ飛んで行きました。

僕の部屋にはいろいろな虫が遊んでいます。小さいバッタのようで肥った虫や、ハサミ虫や、草鞋虫や、油虫や、茶っぽい虫がいます。この茶っぽい虫を朗ちゃんは見たこともないだろうが、この虫に喰われると、とてもかゆくって、つぶすとひどく臭い。中国人はこの虫を臭虫と呼ぶが、全く臭虫だ。油虫というのは真黒な一寸位の奴で、晩になると天井や壁を横行します。昔、ロシアのピータ大帝という男は、この虫が大きらいだったそうだが、何もピータ大帝でなくたって、こんな虫好きな奴なんかいるもんか。

二三日前の夕方、美しく澄んだ空に三日月が静かに浮んでいました。僕はこれくらい清らかな夕月を見たことがない。あんまり清らかなので、月が窓から見えなくなるまで月ばかり見ていました。僕の今の心はあ

の夕月のように静かです。むろん、寂しいことは寂しいが、真実なそしてふかいものが、その奥にある寂しさです。僕のこういう気持は、まだ朗ちゃんには解らないだろう。解る必要もない。そんな事、今、考えなくたっていいのだが、やがてほんとうに解る時が来るだろう。

　夏休みがすんで毎日元気で学校へ行っているでしょうね。兄さんがいなくってもよく勉強するんですよ。お父さんやまきちゃんのいうこともよくきき、お母さんを大切に看病して上げて下さい。お母さん、その後どうですか。少しはよくなりましたか。ここにいても他に心配はないが、その事だけが心配です。みなさまによろしく。

×月×日　　兄より

朗さま

　手紙は小さな字で、実に丹念に書いてある。それを、さながら渇いた者が水を飲むように、兄に対する心の渇きの止るまで、朗は、何度もくりかえし、むさぼり読んだ。いつも鶯に行水を使わせている朗には、雀の行水のところが一番うれしかった。飽かず読み返えすうちに、そこの文句をいつか暗記してしまった。だが、コスモスと菊のところは流石にさみしかった。兄がいないので、今年はコスモスも作らなかったし、菊は誰もかまってやらないのでひどく荒れたまま、みじめな花をつけたからだ。それにつけても、矢張、兄に一日も早く帰って来て欲しかった。

　朗はそれらのことを残らず兄へいってやるために、直ぐ手紙を書いた。

七

　朗が兄へ四本目の手紙を書いた頃には、母の容体は、すっかり悪くなっていた。いくら下っ腹がふくれて来ても、医者はもう水をぬかなくなった。今までむくんでいた顔が急にげっそりと痩せて、小さく更に青黄色くなった。喰べた物はみんな吐いた。喰べたがるけれども、喰べれば直ぐに戻すのである。そして、毎日、犬のように黙り込んで床の中に横たわったまま、殆ど身動きもしない。最後の怖しいものが、母の体にぐんぐん近寄って来ることが、朗にもはっきり解った。

　看護婦が寝泊りしだして、女中が新たに雇われた頃には、父は看病のために、夜昼、母の枕元に附き切りになった。朗もまき子や看護婦の手伝いをしては、スープや重湯を運んだり、時には吸い飲みで母の口へ入れてやった。母にこんな事をして上げるのも、これから先きそう度々無いかもしれないと思うと、尚更そうせずにいられないのだ。その度に母は静かな声で「有難う」といっては悲しそうに眼で笑った。そして、その眼に、時々、かすかに涙が光った。それを見ると、朗は母のためならどんな事でもして上

げなければいけないということを、尚更、強く感じるのである。
名古屋にいる上の姉の民子が電報で呼び寄せられて、赤ん坊をつれて帰って来た日から、朗は遊びに出るのは、勿論、学校へ行くのさえ止められてしまった。
「母さんが何時どんな事になるかも知れませんから、家にじっとしていなければいけませんよ」
まき子が朗をわざわざ玄関へ伴れて行って、おごそかな眼つきでいった時、朗はいつになく素直に「はい」と答えて、つつましやかにうなずいて見せた。何かしら、母に対する最後の覚悟に似たものが、すうっとうすら寒く朗の背筋を通った。
だが、どうしたのか名古屋の姉が来た日から母は俄かに元気になった。むろん、喰べ物は相変らず受附けなかった。それでも父や民子を相手に珍しく笑ったり、話したりした。そして、民子の赤ん坊を、時々、枕元へつれて来させては、しげしげと見詰めては嬉しそうに顋をしゃくった。
三日目の日は、冬の始めと思われないくらい暖かだった。そのせいか、母はことに機嫌がよかった。
朝のうちは、煙のような淡い靄が軟かく庭の木々を包んで、地面がふっくらと湿っていた。靄がはれて、豊かな太陽の光が空から明るく落ちて来ると、まるで春がだしぬけにやって来たように暖くなった。

母は気分がいいから久し振りに庭が見たいといい出した。まき子が看護婦に手伝って蒲団の敷き換えや、座敷の掃除をしている間、上の姉に助けられて縁側へ出た。そしてぽかぽか日が射す真中へ、座蒲団を敷いてぺたりと座った。
「あら、山茶花が咲いたわね。まあ。きれいだこと」
嬉しそうに首を傾しげて、母は、縁側に腰かけている朗を見た。
「いつ咲いたの」
「さあ。僕。よく知らないけど、三四日前から咲いてるんだよ。
「そう」
木戸に近い左手にある白の一重は、やっと蕾がふくらんだばかりだ。正面の松の植込みの右手にある、白にうす紅の絞りの一重は、もうぽつぽつ花をつけている。厚い、そして、黒ずんだ緑の葉が、いっぱいに降り注ぐ日を射返えしてきらきら光る。その蔭から、ほのかな紅をぼかした象牙のような五瓣の花が、心持、胸をそらせて晴がましそうに覗いている。
「山茶花って、いつ見てもいい花ねえ」
いかにも引き入れられるような眼つきをして、母はしげしげと山茶花に見入った。
「母さん。この頃、お庭へ又、四十雀が来ているよ。ヒタキも来るよ。紋ビタキが」

「まあ。そう。もう、小鳥が来る時分なのね」
「やあ。四十雀がいらあ」
「どこに」
「あすこに」
朗が顎をしゃくって、庭の一方を眼で指した。見ると、右手の隅の散りかけた紅葉の蔭に小鳥が一羽とまっている。うす墨色の円い頰を、可愛らしく動かしては、しきりに何かついばんでいたが、やがて、ぱっと、そこから飛び立つと、黒地に明るい瑠璃色を染めた羽根に日を返えして、うす紅絞りの山茶花の中へ、忽ちすうっと見えなくなった。
「まあ。きれいねえ」
こういって朗を振り返えった母の首は、いかにも、細々と痩せていた。
しばらくして母がいった。
「ねえ。民子さん。久し振りに髪を解かしてくれないこと。どうにも欝陶しくって仕様がないから」
「ええ。ようございますとも」
上の姉は、直ぐ様、髪の道具を持ち出して来て、嬉しそうに母の髪を梳き始めた。
「山茶花の咲く頃までには、少しは好くなりたいと思っていたのに、私、これじゃとても駄目ね。どうせ、そう長くはないんだから、もうこうなっちゃ、お医者さまもお薬も、ほんとうは無駄なんだけど」
しんみりとした母の声はふかい諦めをこめてふるえた。
「そんな心細いこというもんじゃなくってよ。母さん」
姉は母の髪に櫛の歯を入れながら、静かに答える。
「朗ちゃんも、もうじき中学だし、これで母さんの病気が癒って、鉄ちゃんが家へ帰って来てくれれば何もいう事はないわねえ……」
「そういえばまあそうだけれどね……でも、私、どうせもう長くないんなら、生きているうちに、一と目、鉄に逢いたいと思ってね。この間からお父さんや弁護士さんに随分運動してもらっているんだけど、いまだに帰えしてくれないんだよ」
「鉄ちゃん。中でお母さんの病気、知っているんでしょう」
「知ってるとも」
「じゃ随分心配しているでしょうね」
しかし、母はそれには答えなかった。そして、暖かい日をいっぱいに浴びて、影一つ動かそうとしない冬の庭の、穏かな眺めに見入っていた。が、やがて、ぽつねんとひとり言のようにいった。
「こうして、民子は来てくれたし、赤ちゃんの顔は見たし、これで、鉄に一と目会えたら、私、いつ死んでもいいんだけど」
その時、肉附きのいい姉の頰を、涙が一と条流れ落ちた。硝子戸の蔭へ中腰に立って、姉は母の髪を左手の指にからませ、右手の櫛で掻き上げながら、瞼にいっぱい涙を

溜めて、じっと後から母を見ている。姉の顔がかすかに動くと、又涙が頬を流れる。そして、心持受け口の口へすうっと入って行く。だが、母はそれを知らない。時々毛筋棒で気持好さそうに頭の中を掻きながら、矢張、飽かず山茶花を眺めた。

母と姉との顔を、傍からしげしげ眺めていた朗の心に、その時、黒々とした髪の毛を、豊かに掻き上げている兄の顔が、又しても、痛いほどはっきり浮び上った。

八

母の体が幾分持ち直したらしいというので、朗は再び学校へ行くことを許された。

その二日目の、ちょうど習字の時間だった。

「真田君。今、家から電話がかかって来たから、直ぐ帰えって」

と、いう先生の声を聞くと、朗は思わず弾かれたように立ち上った。そして、手早く書物を背嚢に詰めて廊下へ出ると、マントを引っかけるが早いか、殆んど走るようにして階段を下りた。出口から真直ぐに門へ急ぐ間、今にも降り出しそうな空の下で、生徒のいない校庭が、いかにも寒々とひろがって見えた。

先生は電話の内容については、別段、何も話さなかった。だが、朗には、それが母のことだということは、あまりにもはっきり解っていた。

省線の踏み切りへ来ると、慌てて駆け出した。前を行く野菜のトラックの背中越しに、遮断機の長い腕がじりじり降りかけたのが見えたからだ。だが、後から追い越して行った同じようなトラックに妨げられて、朗はついに間に合わなかった。

電車の通り過ぎるのを待っているのが、今日に限って、何というもどかしさであることか。自転車を降りた御用聞きや、半纏着にじか足袋の朝鮮人や、割烹着に風呂敷包を抱えたおかみさんや、更にそれらの人達を左右から圧し潰すように頑張っている、幾台ものトラックの間にはさまって、朗はしきりにじりじりした。

ふと、夥しいプロペラの音が、底力のあるうなりをこめて、空から流れ落ちて来たので、朗は思わず、首を上げた。踏み切りの遥か彼方の、赤い瓦屋根の上の空を、飛行機が全部で九台、きちんと鱗型に隊を組んで飛んでいる。飛行機は少しずつ隊形を崩したり、建て直したりして、互に、離れたり追いついたり、時には重り合ったりしながら、滑らかに辷って行く。分厚く曇った冬の空が、不機嫌におし黙ったまま、上からそれを見降している。

飛行機の大すきな朗が、その珍らしい編隊飛行にうっかり見とれているうちに、遮断機が上った。朗は、又、呼吸を切らして街を急いだ。

簡易舗装を施した六間道路から右へ入った横丁の、一寸

した坂を登り切ると、そこが朗の家だ。曲り角の石垣の下まで来て、自分の家を見上げた時、朗の足はいつか再び駆け出していた。檜葉の生籬の向うに見える、小型の屋根を持った門の様子は、いつもと少しも変らないが、今日に限って、そこに、ただならぬ物のけはいを感じたからだ。

三ちゃんの母さんと姉さんとが、寒そうに体を曲げて、あたふたと門のくぐりへ吸い込まれると、入れ代りに、白いエプロンの女が慌しく中から出て来た。新しく雇った女中である。

「とうとう、母さんがどうかしたのだ」

朗は、直ぐ様、女中を呼ぼうとして胸を張ったが、咽喉が乾からびて声が出ない。

女中は一寸家の中を振り返って何か大声で怒鳴った後で、ちらりと朗の方を眺めたが、気がつかずに、そのままあっちへ走って行く。エプロンの背中で、帯のお太鼓が赤く揺れる。朗は夢中で坂を駆け上った。

どうしたのか、普段と違って、とても呼吸が切れる。ゴムの長靴が、ただ、ばたばた音を立てるだけで、足が思うように前へ出ない。焦って無理に出そうとすると、膝がへんにがくがくしてヒビのきれた膝小僧が前へのめる。坂の途中から、マントが段々ずり落ちて来た。学校の廊下で肩へ懸けた時、慌てて咽喉のホックとボタンを懸けるのを忘れたためだ。だが、朗はそれを直そうともしない。兄のおふるのために、ただでさえ大きすぎるマントから、肩を半分はみ出させたまま、砂利道へ裾をずるずる引き摺りながら走りつづける。いつか、眼にはいっぱい涙が溜って、門の屋根が見えなくなった。

けたたましくリンを鳴らしてくぐりをくぐった朗が、やっとの思いで玄関へ飛び込むと、奥からまき子が慌しく駆けて来た。涙でくちゃくちゃになった姉の顔を、一と目見た時、朗に凡てのことがはっきり解った。

「朗ちゃん。母さん、もう駄目よ」

返事も何もきかないうちに、まき子は朗からマントと背嚢とをもぎ取ると、腕をつかんで引きずり上げた。朗は長靴を蹴飛ばすように脱ぐより早く、姉につかまれたまま廊下を走った。二本の靴が蜻蛉返りをして壁にあたる鈍い音が、背中の方で聞こえていた。

座敷では、蒲団をまくられて、むき出しにされた母の上へ、看護婦が大きく馬乗りになっている。人工呼吸をしているのだ。みんなは苦しげに瞳を据え呼吸をのんで、それを見ている。看護婦は母の両腕をゆるく上下左右に動かしては、ぐいっと強く胸をしめる。胸をしめては、又、円くゆるく腕を動かす。だが、母は呼吸をしない。又、腕を動かしては胸をしめる。矢張、駄目だ。あらわにはだけられた母の胸が、何んとまあ不気味にげっそりと瘦せていることか。肋骨が一枚一枚、今にも外へ飛び出しそうに突き上って、その間の肉が一と条一と条、谷のように凹んでいる。人間の胸というよりも、骨の上へじかにうすく皮を張

った平べったい箱のようだ。それでいてお腹の方はこわいくらい高くふくれている。こうまで無残に変り果てた母の肉体を見たということに、朗は何か母に対するふかいすまなさをさえ感じた。

人工呼吸が終っても、母がついに呼吸をしないのを見ると、医者は母の胸に聴診器を当てた。そして、じっと眼を据えた後、直ぐにはずして、何か小声でいいながら頭を下げると、一度に女達の口から泣き声が迸った。

「朗ちゃん。お母さまの口を濡らしてお上げなさい。お別れですから」

三ちゃんのお母さんが朗の肩を押すようにして、母の傍へ座らせ、濡れた筆を手に持たせた。乾いてひびが入って、色の変った母の唇を、そっと水で濡らすと、朗は忝しく頭を下げた。

「兄さんの代りにもう一度」

兄という言葉が電撃のように鋭く全身をつきぬけた。一度に悲しみが突き上げて来た。朗は、ついに声を放って泣いた。

「唯今から看護婦が死後の処置をいたしますから、その間、みなさん外へ出て下さい」

医者はやがてこういうと、みんなを縁側へ出して、座敷の障子を閉め切った。再びそれが開けられた時には、母の体には白い布がかけられ、顔にはガーゼが覆ってあった。

やがて涙を拭き終ると上の姉が

「鉄ちゃん。とうとう、帰してくれなかったわねえ」

と、いかにも思いあまったらしい調子でいった。だが、その言葉の終らないうちに、茶の間にいる父の興奮し切った声が鋭くそれを遮った。

「鉄のことは、もう何もいうな。今更いったって何んになる」

それが声というよりも、むしろ叫びに近く、あまりに烈しく、ひびいたので、朗は思わずはっとして父を見た。父は母の着物を直した茶っぽい褞袍を羽織って、長火鉢の前にこちら向きに座ったまま、疲れた気むずかしい顔をして、長煙管のやにをほじっている。そして、火箸の先を一所懸命雁首へ突込もうとするが、指がふるえて、うまく行かない。火箸の先が雁首を右へそれたり、左へそれたり空を突いては下へさがる。その様子が、見ていてさえももどかしい。とうとう父は顔いっぱいに険しく筋肉をふるわせながら、怒気をふくんだ舌打といっしょに、煙管を高くふり上げて、いやというほど火鉢の枠を叩いた。だが、やにはとれない。又、打った。矢張、駄目だ。三度、力任かせに枠を打つと、らおが割れて、雁首の根元がくの字に曲った。

間もなく父の瞼の間に、大粒の涙がぽっつり浮んだ。それが俯向き加減にしている顔を伝って、鼻の先からぽたりと落ちた。すると、それを隠すように、急いで袂から鼻紙を出して、大きな音をさせて涕をかんだ。だが、矢張、涙

が落ちて止まないので父はついに立ち上った。そして、尚も涕をかみながら、みんなにわざと顔をそむけて、すたすたと便所へ急いだ。
家の中は、しばらくの間、光も空気も何もない、何処かのふかいどん底のように、しいんと静まり返っていた。父は、長い間、便所から出て来なかった。

九

葬儀屋が来たり、坊さんが来たり、お経が上げられたりしているうちに夜になった。だが、兄は帰って来ない。そして、内々だけでしたお通夜は兄のいないことで一倍寂しさをふかめた、次の日も次の夜も、矢張、帰って来なかった。みんなは兄を待ちあぐみぬいているくせに、誰も兄の名を口にしない。そして、とうとう三日目の朝になって、母の柩は、降り出した雨の中を火葬場へ運ばれて行った。朗は三ちゃんのお母さんといっしょに、留守番をいいつけられて家に残った。
十時頃でもあったろうか。玄関の格子の開く音がしたので、直ぐ様、朗は迎えに出た。みんなが帰って来たのだと思ったからだ。ところがどうだろう、そこには思いがけなく兄が立っているではないか。紺飛白の着物の裾を雨に濡らして、雫の垂れる蝙蝠傘のやり場に一寸惑いながら、ぺちゃんこにへった下駄の先に、ぬかるみの泥をアンコのようにくっ着けて立っている。
更にもっと驚いたことは、いつだったか、出しぬけに飛び込んで来て兄の部屋を引っ掻き廻した奴と同じような特高の男が三人までも、兄の後についてどやどやと入り込んで来たことである。その人達は蝙蝠傘を杖について、家の中をじろじろと覗いたり、互に頭をくっつけ合って、何かひそひそ話したりしている。
「ぬかるみへ入っちゃって、下駄が低いもんだから、まいちゃった」
兄はこういうと、戸障子が開け放されて、廊下から奥まで見える家の中と、自分の前にぼんやり立っている弟の顔とを、不思議そうに見較べながら、上り框へ足をかけて、汚れた足袋を脱ぎにかかった。
「兄ちゃん、雑巾持って来てやろうか」
「いいよ。足は汚れちゃいないんだから。それよか、みんなどうしたい」
「今、火葬場へ行ってるよ」
「えっ。もう焼いちゃったんか」
驚きと落胆との混った声が、悲痛な調子をこめて兄の口から迸った。
「うむ。みんな、兄ちゃんの帰るの、待ってたんだけど、もう、先へ行っちゃったよ」
「がっかりしたな。おれはね。母さんのひどく悪いってこと、今、知ったんだよ。今、出される時に。だから、まだ

間に合うとばかし思っていたのに。何だ。畜生！」
上り框へうずくまって、更に左の足袋を脱ぎにかかった兄の眼に、見る見る涙がさっと湧いた。涙は更に眼頭に溢れ、小鼻を伝って畳へ落ちた。兄はそれを人に見せまいとして、わざと低く頭を下げた。そして、水をふくんで吸いつく足袋をやっと脱ぐと、懐から手拭を出してごしごしと足を拭いた。時々、それを眼にも内所で当てながら。……その時、痛いほどはっきり朗の眼に沁みた。
特高の男達を玄関に残して、兄はやがて奥に入ると、折柄、エプロンで手を拭きながら台所から出て来た三ちゃんのお母さんに、先ず叮嚀に挨拶をして、更に床の間の前へ座った。床の間には新たに引き伸ばしをされた母の写真が、額に入れて飾ってある。兄はきちんと膝に手を置いてしばらく写真に見入っていたが、段々、頭を垂れ眼を瞑って長い間動かなかった。兄の眼から涙はもう乾いていた。
気がつくと、久し振りに見る兄の横顔が、何とまあ好くも母に似ていることとか。高い鼻。ひろい額。引いたような太い眉。心持つき出た顎。唇から覗く大きな歯。それが以前家にいた時に較べて、ぐっと青白く痩せたせいか、一倍はっきり似て来たのだ。朗は兄が母の写真に見入っている間、母に似て来た兄の顔を思わずしげしげと眺め入った。
すると兄の帰って来た歓びが、始めてはっきり心の奥まで沁み透った。こうして兄が家にいてくれさえすれば、もう、どんな大きい悲しみが襲って来たって大丈夫だ。兄が立派に切りぬけてくれるに相違ない。そう思っただけでも、豊かな安心が心の中いっぱいにひろがるのである。朗は今日ぐらい兄を頼母しく感じたことは、いまだかつてないことだった。
やがて兄が顔を上げて自分の方を振り返った時、朗はもう耐らなくなって、思わず兄の傍へ寄った。何かしら兄の体へつかまらずにいられなかったからである。
「兄ちゃん、山茶花きれいに咲いたよ。見てごらん」
「そうかい。もう咲いたかい」
始めて兄の顔に暖い微笑が湧いた。
朗は兄を引っ張って縁側へ出た。そして、硝子戸を開けて庭を見せた。庭には一昨日から降り続いた雨が、尚も飽かず降っている。冬にしては暖かな雨の中で、白にうす紅絞りの五瓣の花が黒ずんだ葉の蔭から、相変らずつつましやかに覗いている。花は雨に濡れて、色が透き通るほど冴えたせいか、一段と寂しさを加えている。兄は庭を一とわたり眺め終ると朗にきいた。
「鶯、まだ、いるかい」
「いるよ」
「何処に」
「僕のお部屋にいるよ。兄ちゃんの目白の籠に入れてあるよ」

「そうかい。もう笹鳴き始めたかい」
「え？」
「チャッチャッて鳴き出したかい」
「うむ。もう、やってるよ」
更に朗が後を続けて、もっと鶯の話をしようとすると、兄はそれをはずすように、縁側を一人で往ったり来たり仕始めた。そして、縁側を一人で往ったり来たり仕始めた。
兄は眼を何処かへじっと見据えたまま、体を、やや、俯向き加減にして、大股に、しかも静かに歩きつづける。歩きながら、時には座敷の方へ顔を向けて、床の間の母の写真に眼をやったり、庭へ注ぐ雨の脚を硝子戸越しに、眺めたりする。それでいて、その眼は何物をも見ようとしないらしく、瞳が少しも動かない。その様子がいかにも何か思いあぐんでいるらしい。
兄は茶の間にいる三ちゃんのお母さんを、ひょいと振返った。
「おばさん。今から自動車で飛ばしたら、骨上げに間に合うでしょうか」
「さあ。多分間に合うでしょうよ」
「それなら今から行こうかしら。火葬場は桐ガ谷ですね」
「ええ。あなた。是非行ってお上げなさいませよ。あんなに会いたがっておいでになったんですもの。せめてお骨でも上げてお上げになったら、仏様がどんなにお歓びになるか知れませんよ」
「じゃ。とにかく行って来ます。途中で行き違いになったら、その時のことだ」
兄は急いで玄関へ行った。そして、時高の男達に何か二た言三言いうと真赤な素足にぺちゃんこの下駄をはいて、外套も着ずに、又、雨の中を出て行った。矢張、その男達もぞろぞろ後について行った。兄の姿が格子の向うに消えた時、帽子を冠らない兄の頭が短くかられて、もはや以前のように、黒い長い髪の毛が美事な波を打っていないことに、朗は始めて気がついた。
一時間ほどたって、みんながいっしょに帰って来た。大きな四角い白布の包を、大事そうに抱えた兄が真先きに玄関へ入ると、出迎えに出た三ちゃんのお母さんが直ぐきいた。
「お間に合いになりまして」
「ええ、ちょうど、お骨上げのときでいい工合でした」
「まあ。それはほんによろしうございましたわね」
三ちゃんのお母さんは、まるで自分の事のように、嬉しそうな声でいった。

十

朝、眼をさますと、鋼のように碧い空が、鋭く硝子窓から覗いていた。明方、寒かったと思ったら、雨が晴れていたのだ。庭一面、霜が白く置いていた。

母の葬儀は少数の近しい人々の手だけでもって、いわば極めて内々に行われた。二台の自動車を連ねて寺へ向う時も、母の遺骨は兄の膝の上に置かれていた。寺で退屈なお経が済み式が終って、みんな揃って境内の墓地へ行った時も、遺骨は矢張兄の腕の中に抱かれていた。兄は昨夜一と晩中お通夜をして寝なかったせいか、昨日よりも更に青白く痩せて見えた。だが、角帽を冠って焦茶のオーヴァを着た大学生らしいその姿は、朗にとって、兄を久し振りに自分の手へ取り戻したという感じを強くさせた。朗は、始終、兄の傍にばかりくっついていた。兄の傍にいさえすれば、何ともいえないほどの豊かな安心が感じられるからだ。ことに、三人の特高の男が、何処へ行っても後について歩くのが、朗に少なからざる不安を与えただけ、それだけ、兄にすがる心を更にふかめさせたのである。

お葬式から帰った後でも、又、昼食の後でも、兄は何か父と頻りに話していた。昨夜も遅くまで話していた。同じ話の多分続きであるらしい。兄は、何となく父に隔りを感じるらしく、話がきれる度に、みんなから離れてひとり六畳にいた。

硝子戸越しに射し込む午後の日が、いっぱい飴色に溢れて、部屋の中は温室のように暖い。その真中へ、朗が長々と臥そべって少年雑誌を読んでいると、やがて兄が入って来た。

「兄ちゃん。これからはもう家にいるだろう」

兄はそれには答えないで、本箱から本をぬき出しては、それを机の上へ積み重ねる。そして、風呂敷をひろげては順々に包むのである。

「兄ちゃん。こんだ、何時、ピクニックに行くんだい」

「そうだな」

「この次の日曜あたり、どう」

「駄目だよ」

「じゃ。お正月になったら」

「さあ。どうだかな。兄ちゃん、当分、とても忙しいからな」

そこへ上の姉が縁側の開きを開けて入って来た。

「鉄ちゃん。お父さんが一寸来て下さいって。どうしても、もう一度話したいからって」

「でも、あの話なら何度話したって同じだから止しましょうよ」

「そんな事いわないで、少しはお父さんの気持も察して上げたらどう。そう、苦しませるものじゃなくってよ」

「僕だって苦しんでますよ。むしろ、僕の方が遙かに苦しんでらあ。お父さんの気持も解るからそれだけ一層苦しいさ。でもこの問題だけは、どうにも出来ないことなんですから。唯物史観は正しいものと信じるより他に仕方がないんですから」

「そんなむずかしい理屈、私には解らないけど」

姉は困ったらしい顔つきをして、真直ぐに鉄を見詰め

た。そして、もっと何かいおうとしたはずみに、まき子が玄関との境の唐紙を開けた。
「鉄さん。もう、自動車が来たんですって。例のがお迎えに来てよ」
「チェッ。いやに早く来やがったな。構わないから待たしておけ。まだ時間はたっぷりあるよ」
兄が一寸腕時計を見て、又、元通り本を包むと、上の姉が横から言葉をはさんだ。
「ねえ。鉄ちゃん。もう一度お父さんと話し合って見たらどう。後生だから」
「いつまで話したって同じですよ。それにもう時間もないし。……でも、とにかくお別れの御挨拶だけはして来ましょう」
丁度、本の包が出来上ったためか、兄はこういうと起って茶の間へ行った。上の姉も、まき子といっしょに出て行った。そして、朗だけが一人部屋に残ってしまった。
朗にとって耐らない不安の数分が過ぎた。茶の間では、又、兄の低い声と、父の興奮しきった声が聞える。時々は姉のおろおろとした声も混じる。その中へ、火鉢を煙管で叩く鋭い音がひびきわたる。父の不機嫌は煙管の音で直ぐ解るのだ。その上、玄関では例の三人の特高らしい男のけはいが、もそもそする。次に起るであろう、何か怖しい事件の予感に脅かされて、朗はじっと呼吸をのんだ。
やがて、上の姉と鉄とまき子の三人が、又六畳へ帰って来た。みると、二人の姉は、毛布や着物を入れた風呂敷包を、大きく胸に抱えている。みんな、兄の物だ。そして、先刻包んで置いた本を二た包、重そうに両手に下げると兄が先ず玄関へ出た。
朗はびっくりして起き上ると、直ぐ兄の後を追った。
「兄ちゃん。また何処かへ行くんかい」
「うむ。又、一寸。勉強しに行って来るんだよ」
その時、土間から手を伸ばして、鉄の荷物を受取った背広の一人が、にやりと笑って口を入れた。
「兄ちゃん。これから洋行だよ」
「嘘っ。嘘だあい。……兄ちゃん、ほんとに何処へいくの」
「ほんとうに洋行して来るんだよ」
こんどは鉄も笑った。
「じゃ。この次、いつ頃、帰って来るの」
「さあ。十年ぐらい帰らないな」
「そんなのいやだい。十年なんていやだい。兄ちゃん」
だが、朗の言葉にはお構いなしに、鉄は荷物を全部三人の特高にあずけると、自分も直ぐに下駄をはいて、叮嚀に姉やまき子へ挨拶をした。下駄も足袋も、昨日と違ってまっさらである。
「じゃ。鉄ちゃん。私達はわざとここでご遠慮させていただきますから。どうぞ、体だけは大事にして下さいね。お願いだから」

その時、茶の間から父の声が鋭くひびいた。
「まき子。おい。まき子。一寸来い。まき子」
　まき子は困ったらしい眼つきをして、一瞬間、姉と兄とを見較べていたが、更めて兄に向って頭を下げると奥へ入った。兄はもう一度、朗と姉とに挨拶をして、静かに格子の敷居をまたいだ。
「兄ちゃん。ほんとうに何処へ行んだい。兄ちゃん」
「洋行だよ。洋行だよ」
　兄は外に出た。朗は慌てて土間へ飛び降りると、長靴へ足を突っ込むが早いか、ばたばたと兄を追った。そして門のくぐりをくぐった頃には、兄の紺飛白の袂の先を、もうしっかり横からつかまえていた。
「兄ちゃん。もう、何処へも行っちゃいやだよ。兄ちゃん。ねえ。もう。何処へも行かないでよ。ねえ。兄ちゃん」
　坂の下の簡易鋪装の道路の上で、自動車が待っている。みんなは、そっちへ向ってぞろぞろと、せまい砂利の坂道を降りて行った。
「朗はいい児だから、そんな無理をいわないで、兄ちゃんがいなくったって、ひとりでちゃんと勉強して、立派な人間になるんだぞ。いいか」
「いやだい。いやだい。兄ちゃん、いなくっちゃ、いやだい」
「兄ちゃん、いなくったって、お父さんも、小姉(ちいねい)もいるじゃないか」
「駄目だい。兄ちゃんいなくっちゃ駄目だい」
　兄の手が優しく頭を撫でれば撫でるほど、朗は涙声になって行く。
　やがてみんなが自動車の傍まで坂を降りた時だった。坂の上からまき子の美しく澄んだ声が、高々とひびいて来た。
「兄さん。一寸、待って下さい。兄さあん」
「何だあい。用かい」
　振り返った鉄には答えないで、まき子は顔を真赤にほてらせながら、そのまま砂利を蹴って一気に下まで降りて来た。見ると、華手な花銘仙の袂の中に、父の二重廻しと襟巻とが、大切そうに抱かれている。
「お父さんが、これ、是非兄さんに着て行くようにっておっしゃるから、持って来たのよ」
　鉄の眼は、瞬間、ふかい悲しみの色を浮べた。だが、直ぐに、それが当惑の表情に変ると、ふかい愛情のこもった声で答えた。
「いいよ、おれ。別に寒くないから。お父さんだって、無くっちゃ困るだろうから。いらないよ」
「でも、オーヴァがあるからいいんですって。だから、是非着て行くようにって。何でしたら途中だけ着て行って、中から返して下すったっていいでしょう」
「それも、まあそうだなあ」

鉄が先ず襟巻を受取ると、まき子が二重廻しをひろげながら、後へ廻って肩へ懸けた。
「それからね。お父さんが、あの事をもう一度考え直して見て欲しいって。そうしてね。一日も早く出て来て欲しいっておっしゃっててよ」
「そりゃ困るよ。お父さんは。転向しろ、転向しろといわれるけど、転向って、そう簡単に出来るものじゃないんだよ」
鉄は、突然声に力をこめてこういうと、その顔を一倍悲しげに、むしろ、苦しげに曇らせて、二重廻しのボタンをはめた。それを見た特高の一人が、まき子と鉄とを見較べて、にやりと笑った。
「親って全く有難いもんだな。こんな親不孝だって、子となりゃ自分の物まで脱いで着せてやるんだからな」
「黙ってろ。横から詰らないことをいうな」
兄の唇から言葉が稲妻のように迸り出た。そして、烈しい怒のため顔全体が見る間に青白く硬張って行った。
だが、兄の言葉は、もう一人の特高のとげとげした言葉でもって、直ぐ無慈悲に押し返えされた。
「おい。愚図愚図しないで、早く乗らんか。もう、時間がないぞ」
怒をふくんで毒々しく顔をふくらませた三人の特高は前後から兄をかこみながら、殆ど、押し込むように自動車へのらせてしまった。

それを見た朗は、もう、耐らなかった。嘘にもじっとしてはいられなかった。咄嗟に身を躍らせて自動車の踏台へ飛び上ると、片手で入口のふちをつかんで、片手を中へ突っ込んだ。
「兄ちゃん。行っちゃいやだよ。行っちゃいやだよ。兄ちゃんが行くんなら僕も行くよ。僕も……行っちゃいやだよ。行っちゃいやだよ」
朗は眼にいっぱい涙をうかべながら、遮二無二、兄の二重廻しを摑もうとした。途端に、特高の一人が朗の手首を逆にとって、中から烈しく押し返えしたので、朗の体ははずみを喰って踏み台から落ちた。そして、よたよたと、倒れながら後へ退ったが、溝の縁の電信柱へ背中をどしんとぶつけたおかげで、危くそこで踏み止った。だが、その時には兄を乗せた自動車は、鋭く扉を閉めるが早いか、烈しい爆音をとどろかせて辷るように走り出した。
「畜生。畜生。馬鹿野郎。畜生。畜生。畜生め」
朗は往来に溜っている小砂利を摑んでは投げ、摑んでは投げ、遠のいて行く自動車の背中に向って叩きつけた。だが、砂利は簡易舗装の上を徒らにころころところがるだけで、自動車は見る間に姿を消してしまった。
身を切るほどの口惜しさと腹立しさに、朗は烈く咽喉を鳴らして泣きながら、やがて、まき子に肩を抱かれて、しぶしぶ、坂を登って行った。

（一九三五年七月）

夕焼の窓

間宮茂輔

街の中の古ぼけた未決監で、沖は秋から冬へと、最初の三ヵ月を過した。南に窓をもったその独房に沖はようやく住み馴れ、自然とわいてくる心持の余裕を見出しかけていたのである。ある日の朝、若い看守があらあらしく扉をあけ、荷物を持ってすぐ出ろと沖に命じた。理由をたずねると、転房だという。沖は陽当りのよい房に名残り惜しさを感じ、編笠をかぶる時、あかるい房の内にそれとなく惜別の瞳をむけたが、看守は洋剣を脚で蹴り、だまって先に立つのであった。沖は夜具を肩に背負い、右手に書籍をいれた風呂敷包をさげ、左の手には箱膳を抱えて、よろよろと後につづいた。獄舎を出るまでにもう息がきれ、脚がちぢむようで、頭がふらふらした。沖は自分が病み上りであることを看守に告げ、内庭の桜の樹にもたれてしばらく動悸をしずめた。その時、沖は、どこへ移るのかとたずねてみたが、若い看守はそういう彼をチラッと眺め、俺にはわからぬと答えるだけであった。沖はどこの舎房にも入れられず、真直ぐ事務室につれられて来て、そこで、お前は今度急に郊外の或る刑務所に移ることになったからといい渡され、あわただしく護送自動車に乗せられてしまった。三十分ほども揺られていたであろうか。厚い磨り硝子の窓に迫る歳暮の街々の騒音に、眠っていた沖の神経は愕然と目をさまし、巷の気配を探ろうと狂いたった。沖は窓にすがりつき、僅かな隙間に編笠を押しつけた。編笠にはのぞき口——銃眼のような穴が三つあいているのだが、しかし何も見えはしなかった。大売出しの赤い旗や、電柱や、看板の一部などが目をかすめるだけで、沖のほかに二名の未決囚を乗せた護送自動車は、あっけなく広大な石造監獄の門をくぐってしまった。そこで沖に与えられたのは、旧館とよばれている赤煉瓦の年代を経た獄舎の片隅に、西北にむいて高い窓を持った暗い独房であった。

護送自動車の上で、三十分間に受けた外界の刺戟は、そんなにながく沖に作用してはいなかった。新しく移ってきた刑務所に対する興味……囚人特有の子供らしいしかし真剣な興味もうすれ、新しい独房の朝夕にも少しずつ慣れてくるに従って、沖はまた、自分でも苛酷に思えるような自己批判のうちに身をおきはじめた。それにしても、人間の心理と光線とは何という密接な関係をもつものであろうか。沖がそれまでいた刑務所の独房は、二階の南側で、正

午前から温い日光が射しはじめ、窓をあけ放っておくと、蜂や蝶がまいこんで来た。ちょうどファブルの昆虫記を読んでいた沖は、何か自然科学者めいた気持になり、蜂を捕えて指を刺されたりした。沖はまた壁に爪の跡を印し、静かにはってゆく陽足がそこにとまる時刻を知るようなことに、日課的な興味をもった。そのような一切のことは、鬱結しがちな頭にも、春の陽溜りほどな明るさを点ずることに役立つのである。それがこの房にはすこしの日光もおちては来なかった。夕暮近く窓の外の赤煉瓦に射す西陽のいろが、灰色の壁にうつる時、味気ない茜色に明るむきりで、房の内はいつでも曇り日のようであった。雑役の話から想像すると、南側の独房にくらべて温度が三、四度も違うらしかった。沖自身は後になって気がついたのであるが、……ここに移ってきて以来、沖の頭は急に鈍くなり、その代りに薄ら暗い空想の世界へ彷徨していった。沖がそのような状態にあった期間は、およそ三、四十日ほどでもあったろうか。正月も過ぎ、空っ風の吹くある日、見失った意思の力を不意に取戻すようなことが沖に起ったのであった。

朝であった。便器や排水桶の掃除が終り、『明日の願い事』がはじまろうとする間際であった。沖は机の上に紙石盤をひろげ、宅下げする書籍を調べていたのである。不意に妙な動悸が打ちはじめ、頭の毛が逆立つように感ぜられると同時に呼吸が苦しくなった。沖は脈を握り、その異常に速いのを知ると真暗な恐怖を覚えて立ち上った。その瞬間、血が一時にさあっと引き、沖は報知機を前にみて昏倒した。それでも意識はすごいほどはっきりしていた。沖は医者を早くと絶叫し、厚い扉をどすどす蹴った。すぐあわてたように扉があいた。

「どうした？」

沖は指で胸をさし、苦しいと云った。看守は急いで房を飛びだし、思ったより早く医者が馳せつけてきた。白い診察衣を着た中年の医者は、沖を畳の上にねかせ、脈を握ってじっと沖の様子を眺めているのである。

「注射を早く」

沖が叫ぶようにいうと

「よしよし、ちょいとこれを御覧！」

医者は円い反射鏡を取出し、沖の顔が斜に映る位置にかざした。蒼白い浮腫のきた顔がそこにみえた。眉毛が抜けて薄くなり、頭髪は半白に変っているのである。

「最近、何か病気をやったのかね」

と、医者は静かな調子できいた。

「去年の夏ひどい脚気をやりました。」

「なるほど……」

医者は鏡の角度を変え、以前の顔とちがっているかときくのだ。沖は少し変ったようだと答えて、血筋の縦横に走っている自分の眼を眺めていた。他人の眼のようであっ

た。
「煩悶しちゃいかんよ」
沖は黙っていた。
「僕が来た時は、脈が百二十もあったのが、今はもう八十幾つしかない。うそだと思うなら自分ではかって御覧！」
沖は頭を振り、その必要はないといった。
「君のような病気には薬がないんだよ。落ちつくまで鎮静剤をあげるがね。それから先は修養一つだ。わかるだろうね。」
医者は沖の少し楽になるのを待って衣物をぬがせ、丹念な診察をした。
「矢張り神経性のものだ」
沖が帯を巻いていると、医者は沖の称号番号をたずね、紙片に何か書き留めて出ていった。沖の房には『三日間臥床許可』の札がはられ、雑役が熱い白湯をもってきてくれた。沖は寝床を敷いて静かに横たわり、インテリは弱いなあと呟くのである。
出廷の時刻であった。廊下の看守の靴音が響き、金属性の用具の錆っぽく鳴るのがきこえた。予審がはじまると誰でも元気になるというが、呼びだされて出廷してゆく足音は、どれもこれも寝ている沖の頭にひびくほど高かった。
やがてざわめいていた物音も消え、凍てついた朝の静寂がひろがると、沖は壁にむいていつか眠った。
沖が目をさましたのは夜であった。大きな獄舎全体が底冷えする夜気に沈みこみ、蟋蟀が一匹、どこかでたえだえに啼いている。夜勤看守の靴音が房の前を通りすぎると、夜はあけ放しの視察窓から人間の匂いが鋭く流れこんだ。
沖の心は水のように澄み、さえきった頭がむしろ怖いようであった。沖は霜をおいた高い窓をみつめ、父にもう一度だけ手紙を書こうと思った。それに対して今まで通り返事が来なければ、最早諦めるほかはなかった。いちど横をむいた父を、再び自分の方へむきかえらせようと望むことが無理かも知れない。そうも思われるのであった。沖には妻との間にも愛情の問題が起っていたが、そうしてそれは父との場合に比較して遙かに複雑な問題であったが、しかし沖にはまだ絶望感が来ていなかった。擦りきれた縄が細い一筋の繊維によって断たれずにいるように、沖と妻とはどこかでまだつながっていた。そのつながりの脆そうにみえてねばり強く断たれないのは、沖自身にとっても意外なほどである。父との場合にあっては、そのつながりがもう切れているように思われた。これが妻との場合であれば、二人を結びつけていた糸が断たれてしまえばもうそれっきりであった。それが解決であった。しかし仮りに父と沖とを結んでいた糸は既に切れているにしても、それが解決だといい切れぬ点で、父との問題は、執拗に沖の心を噛みつづけずにはいない性質のものなのだ。沖自身それを悟り、つとめて父のことにふれまいとして来たが、ふれまいとする自分自身に卑怯さを感じ、またいつかふれ、際限なく沖を

疲労させた。……独房で夜も昼も父や妻について考えつづけて来たことが沖をしらぬ間に異常な興奮へと導き、今朝のような惨めな状態に落入ったことを沖は反省した。朝飯を食べたぎりの胃がしくしく痛み、目はさえて睡られぬままに、沖は水桶のびしっびしっとなる音をきいているのであった。氷がはるのであろう、雪の降り出す前や木枯しの吹き荒む晩にはいつでも水桶が鳴るのである……。

沖は父と喧嘩別れをした訳ではなかった。

去年の夏、沖は半年近い留置生活のあげく脚気を患い、病勢が昂進して一時的の執行停止となった時、しばらく父の家に引取られて寝ていた。その間、父の方から沖に話しかけたことは殆んどなかった。たった一度、つかつかと沖の枕許にきて坐り、お前は子供の時から歴史が好きのようであったが、今度のことを機会にもういちど勉強してみる気はないかときかれたことがあった。思いがけなかったので、沖はちょっと間誤つき、いろいろ勉強し直したく思っていると答えた。父は煙草を一本ふかし、沖の返事に物足りぬようであったが、西式健康法の話など少ししゃべり、間もなく室を出ていった。

沖が父に父を感じたのはその時だけであった。その後、父は何もいわず、沖が家にきて寝ていることが厭わしいようであった。八月の苦熱の衰弱とで、沖は物を考え詰める力を失うていたが、父の目に沖が、親を裏切った子として映っていることはわかるのである。思い出すと、沖が文筆の仕事から遠去かりはじめた頃から、たまに会う父の面にはいつも不安の色がただよい、その目は、お前も×にいったのではないかと、おびえているようであった。沖は、しかし、つとめて快活に笑い、父が青年であった明治中葉の社会相なぞをたずねるのである。父も母も沖のそのような態度に騙され、別れる時には見違えるほど明るい顔になり、早く文学の仕事を始めるようにと沖に励した。執行停止となって父の許に引取られてきて後、沖は自分のとった態度が余りに人情的であったことを後悔した。その後悔の中には、自分の行動に対する沖の覚悟が、あまり高いところまでいっていなかった事実が含まれていた。それはともかく、沖が労働組合で働いていた二年間、父は漠然とした不安の中にそのことを察していたらしく、何かと口実を作っては外出し、百貨店や活動や、遂には浅草の少女歌劇までみにゆき、帰ってきて母なぞを相手にその感想を語り笑い興じていたというが、浅草の芝居小屋でも父は沖のことを考えていたに相違なかった。沖が×われたと知った時、父はそれについて一言もいわず、それからぱったり外出しなくなったのだと、これは母の話であった。若い時から無口で、物事を内訌させる性質であった父が、その時から心の中で沖を突っ離そうとし始めたことは沖にも想像された。そしてやがて父は、沖を親であるがために引取らねばならなくなった。巧いことをいってごまかしてはいたが、

貴様も矢っ張り×だったのか、温和な父はそれさえ沖の前ではいわず、最早や沖が信用できないのである。母はそれでも沖のために小豆を煮てくれ、小豆が煮えましたよと沖の妻に声をかけたりするが、父は暑い陽盛りを机に向い、古い日誌の整理に日を暮しているのであった。三十何年間もつづけてきたという父の日誌はそのまま父の半生史であり、父は過去を振返る感慨の中に、現在の気持を忘れようとするらしかった。這うようにして便所にゆく途中、沖は縁先から、やせて何か鳥のような感じのする父が、黒い眼鏡をかけ、古びた手帳をいじっている姿をよく見かけた。沖は縁の柱にもたれ、そういう父の姿に心の惹かれるのを覚えるのであったが、父は決して沖へ振りむかなかった。いつも父と離れずにいる母が沖へ顔をむけ、お茶でもいれようかというのである。沖はそれを機に母の前にあぐらをかき、ついでくれる熱い茶を啜った。不意に父は顔をあげ、沖をみずに、日誌は書いておくものであるというようなことを独言し、どうかすると、明治十六年、松原伊丹大井諸兄ト久能山ニ遊ブ。清水港ニテ昼食。次郎長トイヘル勇俠漢ノ故ニ有名ノ地ナリ、薄暮ニイタリテ駿府ニ帰着、夜半阿部川ニ赴キ名代阿部川餅ニ満腹ス、などと低声に読みあげるようなこともあった。母は眼鏡をはずして微笑みみ沖は庭に緊った柿の梢に瞳をそむけるのであった。

　九月になって、沖はようやく歩けるようになった。涼風の立つ夕暮など、沖は妻の肩にすがり、裏の草っ原まで出てみることもあった。そういう時、父母の顔が急に遠退き、近寄ってくる日のことが頭を真暗にした。沖はまだ最終の取調をうけていなかったが、起訴猶予になる望みはまず全くなかった。明日にも……の手がのびるかも知れない。そう思ってふりかえると、妻の美枝は夕闇の中に、冷たく沖を寄りつかせないのである。沖には彼女以外にHという女があり、……の直前まで沖は本郷……にHと同棲していた。沖よりも一足早く、……られた美枝は、……でそれを知り、沖の慰撫で沖よりも先に父の家に来ていたのであるが、沖の裏切りを許しているのではなかった。沖の片がつくまで……彼女自身の気持がそのように中途半端である以上、父母もまた彼女をどういう風に扱ってよいか迷ったに相違なかった。沖が父の家に来た頃、父母と彼女の関係は、幾回かの衝突の後に、もはや絶縁状態にまで進んでいた。わずかに沖をはさんで父母と彼女は小康を保ち、表面は何事もなかったが、父母は彼女を嫁ではなく沖の愛人としか見ていないようであった。負けぎらいの彼女はそれを鋭く反撥し、沖の病気が彼女の看護を要しなくなり次第に別居するといい切っていた。沖の愛情に対する疑惑を表面の理由としてはいるが、彼女の別居説の裏には、沖の父母に対する感情が流れている、それを沖は知っていた、知ってはいたが、彼女をそこに至らしめた最初の種は沖が播いているため、沖の説得は哀願の外にでることができないのである。沖はしかし、やはり彼女に父母は頼むといいた

かった。Hは、所詮、おそかれ早かれ別れねばならぬ女であったが、裏切りはしたが美枝は、沖が共に墓場までゆこうと考えている者であった。若い彼女にはそれがわからないのである。

彼岸過ぎた或る朝、玄関の外に太い男の声がきこえた。出ていった美枝はすぐかえって来て沖をみつめ、来たわと低い声でいった。沖は目で父母に知らすなといい、美枝に食事の支度をさせる間に衣物を着更えた。寒かったので給羽織を重ね、薬瓶に手拭鼻紙なぞを一緒にしてハンカチに包み、それを提げて茶の間にいった。食事をしながら耳を澄ますと、父の咳払いだけきこえ、ひっそりと物音もないのである。自分のかえって来るまで父は生きられるか、或はこれきりになるかも知れぬと思い、箸をおいて襖をあけると、父はいつものように文机に向って坐っていた。秋雨の冷気がこたえるとみえ、給を着、懐手して濡れた庭を眺めていた。母は座敷の隅にじっと顔を伏せ、やはり沖の方をみなかった。父母は知っているのである。沖は少し乱暴に歩みより、父の前に膝をついて

「それでは一寸いって参ります」

といった。父はその時、うむとかすれた声でいい、不意に横をむいた。沖は父が何か一言いうかと思い、しばらく待ったが、父は遂に沖へ顔をむけなかった。沖は母の涙のすするのをきき、そのまま玄関に出ていった。美枝一人、自動車まで送って来て

「春樹、元気で！」

と、手をふった。沖を乗せた自動車は、雨の往来に美枝を残して、ぐんぐん遠去かってしまった。その朝の光景が、沖には父との関係の縮図のように思われ、横をむいた父のやせた顔が心にこびりついて離れないのである。沖は子として父をもう少し多面的に深く斬込んで考えねばならぬと思っていたが、ともすれば沖の目は人情の靄にさえぎられて、自分をひたすらに不孝者とする逃避に身をかくそうとした。沖が不孝者であることに論はなかった。父がその不孝者を如何に見ているか、それをつかみ得ず感傷の流れに押倒されてしまうことは、やはり沖の恥辱であった。

運動場は周囲が約三十米はあった。街の中の古い木造監から移ってきて、最初に運動場へ出た午後、沖は高い塀にそうて歩き、それを測ったのであるが、同時に沖は一つの計画をたてたのであった。それは三十分の運動時間にここを何回まわることができるかを試すことであった。最初は並足で、次に跑足をまじえ、遂には駈け通して何回廻われるか、その記録をとってみようと思いたったのである。南をうけた運動場には日光が一杯にあふれ、花壇の菊に蜂が集って羽音をたて、高い獄舎を越して青空がみえた。それは僅かの時間ではあるが、独房を忘れさせ、衰えた健康を再び取戻せるような希望を沖に与えた。沖は勇みたち、その日から計画の実行にとりかかったが、しかし最初は、静

かに五、六回廻るのがやっとであった。平気で二十四回歩けるようになった時、沖は初めて跛足をやってみた。なんというよろこびであったろう。沖はハアハア荒い息をきり、高い冬の空を仰いで子供のように笑った。その日から記録はずんずん上ってゆき、並足と跛足をまじえて三十五、六回……十丁近くの歩行に堪えうる自信がついて来た時、沖はある朝、不意に昏倒し、それは前に述べたように神経性の心気亢進であったが、沖はそれから走るのが怖ろしくなってしまった。同じように漏斗形をした運動場が八つ並びその一つ一つは高いコンクリートの塀に区切られていたが、どの運動場からも元気な跛足の地響きがきこえ、バスケット・ボールが囲いの板にはねかえる音がひびいてくる。機械体操の金棒に飛びつく、えいッ！　というような掛声が日に一度はきっときこえるのであった。沖は自分の神経や肉体の弱いことを嘲笑いたい気持になり、輪投げなどやってみたりするが、長くはつづかなかった。じりじりとまた健康が衰えてゆくようなのである。少しのことにすぐ興奮し、妙な動悸が打った。理由のない不安にたえずおびやかされ、聯想作用の異常に飛躍的なのが自分にもわかるのである。沖が思いがけなくも父からの手紙を受取ったのは丁度そのような時期であった。

朝から生温い風が吹き、春の近づいたことを思わせる日であった。夕方近く、扉の下の格子窓がコトリとあき、一枚の端書が房に投げこまれた。書体で父のだとすぐわかったが、読んで頭を興奮させはしないかと沖はそれを恐れた。端書を握ったまま沖は迷い、しばらく突っ立っていたが、我慢できなくなって裏をかえした。

端書には沖をせめるような文句は一言も書いてなく、父自身の或る心境が簡潔にのべられてあるきりであった。

沖は端書を机の上に置き、これは絶縁状かと独言した。すぐ沖は自分の頭が飛躍しすぎたことを反省し、また端書の文句を読みかえしてみた。沖は刑務所にはいってから、四、五回も父に手紙を出したが、それはいつも自分の不孝を詫び、将来は以前の文筆生活に戻ることを誓い、そうして父の健康であることを希うたものであった。父はそれに対して一言の返事もせず、不意にこの端書をよこしたのである。父がこの短い文章に、自分の立場と思想とをはっきり表示したのだという推察は、常識的ではあるが、父の気持にいちばん近いように沖には思われた。しかし今更ら父は、なんの必要があってそれを表示したのであろうか、父は軍人であった。父は少年の頃……明治初年……白馬にまたがった仏蘭西士官のはなやかな姿に憧憬れ矢も楯もたまらず、軍人を志願したのだという。数学と語学の達者な父は、それでも日清日露の両役にも出征し、佐官にはなったが、多くは事務的な仕事にたずさわり、将官に進む間際になって上官と何か意見の衝突があって退官したのであった。沖はその日の……上官と激論してかえって来た日の父を今でもはっきりと記憶していた。温和な小言一ついわな

い父、女性的なといえる静かな父、そういう父ばかり見ていた沖は、蒼白な顔にやる方なき憤懣を漂わせ洋剣を蹴って、馬から飛び下りた父に驚きの目をみはった、父も怒る時には怒るのだ、その時の印象が不意に憶い出され、沖は三たび父の端書を読み返えすのであった。

沖がいなくなって以来、うすら暗い影にとざされていた父の家は、沖の連坐した事件の記事解禁と同時に、対社会的なひけ目がずしっと加わり、それこそ灯の消えたようになっているであろう。×××突破、××総動員、××思想の新らたなる昂揚……ちょうど社会全体にそういう雰囲気のみなぎり渡っている時期であり、いわゆる軍人型ではないにしても、それを最も敏感に反応する教養に育った父が、沖を子にもったがために感ずる対社会的な恥ずかしさは相当に深いものに相違なかった。沖はまた母の遠慮がちな手紙や、面会に来る妻の話によって、妹の縁談が理由もなく破談になり、弟の就職運動にまで沖を兄に持ったがためのの影がなんとなくつきまとうらしいことを知っていた。そういう一家の不幸の因は残らず沖にあり、その不幸、その暗さは、また一つ一つ父のやせた肩にかかってゆく。人間のながい生涯の終りにたった一度しか来ない安息期、そういう時期にようやく達して、父を襲うた現実の暗さ冷たさ、沖がたえまもなく、心を抉られてきたものはそれなのだ。おもうに父は長い間、父のうちに在る本来の気質と教養との闘争——心の中での闘争を闘ってきたのではあるまいか。父はかつて沖の行動と思想の上に自分の意思を強制したことはない。しかし今度のことは、今度のことだけは、どうしても父には許せないのだ。父は六十七歳の老齢でまたしも背負わねばならぬ現実に暗い憤りを感じ、あくまでも家長として一家を守ろうとしているのであろう。父が一枚の端書にこめた感情は、そのようなものの圧縮されたものであり、同時に老齢の故にもうどこへも示すことのできない自分の立場を、沖へ叩きつける激しい意味も含まれているように思われた。

「御飯の用意！」

沖は雑役の声を廊下の端にきき、父の端書を本に挾んだ。アルミの碗と木製の飯受を膳にならべ、中腰になって配給車の近づくのを待っていると、高い窓からヒラヒラと何か舞いこむのがみえた。それは窓の下の排水桶の中におち、うす濁った水の上に一点の紅をうかべたようにゆれた。桜の花片であった。珍しいことなので沖は目をひかれて眺めていたが、その時、沖は不意に父の家にも細い桜の木のあったことを憶い出し、その下を歩く父のやせた肩にひらひらと舞い落ちる花びらが瞳に泛むようであった。沖は自分がまだ感傷的な気持になりかかったことを苦笑し、膳を抱えて立ち上った。

晩春から曇り勝ちであった天候は、初夏になっても恢復しなかった。昨日も雨、今日もまた雨、そして明日も晴れ

る望みのないといったふうに、じとじとと雨ばかり降り続いた。……便器の匂いが房にこもり、食い物の滓や汚れをためておく排水桶には、ねっとり青い黴がはえた。終日ひとり黙然と房に坐っていると、身も心も腐れゆくようで、どうにも気持の紛らしようがなくなるのである。そういう時、沖は窓をあけて外を眺めた。背の低い沖には、わずかな面積の空と、窓の前に建っている目隠しの垣根の上半身しかみえなかったが、それでもいくらかは気がまぎれた。この古い獄舎にはおびただしい雀が巣を喰うていて、夜があけると一斉に囀り、どこかへ飛び立っていったが、夕暮にはかえって来て、巣へはいる前にその垣根に群れてとまった。濡れそぼち垣にいならび羽虫とり、胸毛そよがす夕暮雀……雨の日には雀らも啼かないのである。一列にならんでいた雀らも、一羽、二羽、と巣にはいり、雨雲にとざされた空ばかり眺めていると、自然と何か哀愁めいた気持が湧けば、Aはどうしているか、Kは健在かなぞと、記憶にある人たちのことを沖は考え始めるのである。欠伸のきこえだすのも毎日そういう時刻に限られていた。どこかの独房で誰とも知れず、あああーっと長い欠伸をする。大きな口を上にむけ、力一杯腕をのばしてやるのであろう。どうしようもない退屈の底からもれてくるような欠伸であった。と、それに応えて、またどこかの独房で誰かが同じように長いながい欠伸をする。そして遂にはそっちでもこっちでも、欠伸、欠伸、欠伸……誰の心も房の外へ出たいとあせるのだが、来る日も来る日も雨に閉じこめられて、運動にも出ることができないのである。靴音がきこえるたびに面会か？　と思う。通りすぎるとがっかりした。沖が妻に対して真暗な気持になり始めたのもその頃であった。彼女の立場の苦しさ——実家からは絶縁を迫られ、沖の家からは沖の妻としては認められず、沖との関係で容易に職業が得られぬ様子であり、そういう一切の困難をはね飛ばす勇気の源泉である沖への愛情に、深いひびをはいらせてしまった彼女である。彼女が母をつれて沖に会いに来たのは、もう一カ月も以前のことであった。母は沖の顔をみるなり涙に鼻をつまらせ、身体だけはせめて大切にとやっといい、彼女は黙ってうつむいているきりであった。母も彼女も父については、お変りないとそれだけで、何かぎこちない感じであったが、それが最後でふっと面会が絶えてしまった。沖には妻と父母との関係が今でも円滑にゆかず、それが彼女の沖に対する感情に二重の溝を掘っていると思われ、あんなに堅く結ばれていた二人の結合もどうやら旧にかえらぬ気もするのであった。ある日、久しぶりに房の扉があき、雨は降っているが、希望者だけ運動に出すとの事であった。沖は手拭をもって出て、運動場にはいると頬被りをし、水溜りを飛びこえながら歩き廻った。しばらく見なかった花壇に夏草がぼうぼうと生い繁り、雨にぬれてそれは廃園のような美しさであった。空を仰ぐと、真黒な雨雲がしきりと北へ流れ、反対に南の涯がほのぼのと明る

み渡っているのである。明日は晴れるかも知れぬと思い、沖は房にかえってきたが、その翌朝、目をさまして窓をあけると、空は藍一色に輝き、初夏も梅雨期も一足飛びに夏が来たのであった。

沖が机をすえて坐る場所は、扉を右にした畳の端であった。窓の下には夜具が積み重ねてあるので、そこより他に坐る所がなかった。この独房に長い憂愁の年月を送った先住者たちも皆そこへ坐ったのであろう。うしろの壁には脂で描いたような人間の形がうす黒く染みついている。沖もまたそこへ背をもたせ、苦熱に喘ぎながら、ぼんやり天井をながめて暮すのである。殊にただれた汗疣と蚊にせめられて、不眠の夜が続くようになってからは、健康と一緒に思考力まで鈍く衰え、あれほどの心がかりであった父のことも遠い過去のことのように距ってしまった。自分の頭が少しずつ現実から遊離してゆくようであり、どうかすると、幾日間かの記憶を喪失することに沖は気がついた。ふっと我にかえって、沖はある時、自分が嗚咽しているのに愕然としたことさえある。沖は不幸な伯母のことを考えつめていたようであったが、自分の頭がすでにもう客観性を失いかけている気持がして沖は寒気立った。

「四五三号、面会だ」

面会が絶えて四十五日目の午後であった。沖はその声にはっと起ちあがり、扉のあくと同時に草履を摑んで廊下に出たが、獄舎を出るまで沖は何を考える余裕もなかった。

かっと烈しい陽の下に立ち、生温るい風に吹かれると、沖はいくらか落着きを取戻し、面会は誰かとそれを看守にたずねた。

「杉田美枝」

声の優しいその看守は沖に答え、

「しばらくみえないようだったな」

といった。沖は黙って編笠の内でゆがんだ微笑をうかべ、四十日の余も面会に来なかったことを、どういうふうに詰問してやろうかと考えた。中年の関西訛のある看守は沖に寄りそってゆっくり歩き、君の家はすぐ近くのようだなとか、予審は未だかとか、そんなことを話しかけるのである。接見所へと内庭を半分ほど横切った時、沖はふっと看守の様子に気がついた。面会担当の看守は、いつも何枚かの紙片をもっていて、それに面会人の姓名なぞを記し、せかせかと独房から引出すのであるが、今日は紙片も持たず、ゆっくりと沖を連れてゆくのである。それは沖の他に面会人のないことを物語り、それから沖は、土曜日の面会は午前中であることを思い出した。

「今日は土曜日ですね」

と沖はいった。

「土曜の午後、こんなにおそく面会があるのですか」

看守はそれに答えず、接見所の建物にはいってから、土曜でも日曜でも裁判所の許可さえあれば会わせるといった。

沖が接見室にはいると、立会の主任は沖の番号と姓名を確め、すぐ美枝をよびいれた。美枝は少しやせ、目が一皮にやや瞼しく興奮しているようであったが、
「お変りないんですか」
といって、沖の前に腰を下した。
「本を四冊、小包で送ったの届きましたか」
「受取った」
沖はいった。
「妾、怠けて来なかったのじゃないんですの、妾の方にも少しごたごたがあり、それがまだ片づかないうちに……」
彼女は言葉を濁し、苦し気な表情を浮べた。沖はだまっていた。
「知らせずにすむこと、妾たち、何も知らせないようにしているんですが、……これだけは、どうしても知らせない訳にはゆかないので……」
彼女はまたいい澱み、瘀をみたりしていたが、
「今年の冬、軽い肺炎をおやりになりましたの、その時はじきによくおなりになったのですが、先月初めから急にお悪くなり……」
と一気にいった。誰が？ と沖はたずねたつもりであったが、声には出なかった。黙って美枝をみていた。彼女の頬がひくひく痙攣している。母には腎臓の病いがあったが、年も若く、先々月の末に面会に来ている。
「お父様か」
と沖はいった。
「そうです……」
「いつだ？」
「この一日の午前十時半です」
沖は全身に汗だけを感じ、そうか、親爺、死んだのかと思った。
「残念です、妾……」
美枝はかすれた声で叫ぶようにいい、刺すような瞳で沖をみた。沖は久しぶりで美枝を身近くに感じ、取乱すまいと腹に力をこめた。
「俺は覚悟していた」
「え……」
「お別れする時、お父様、ずい分もう弱っていられた。何年に決るかそれは判らぬが、お父様にはもうお逢いできないような気持がしていた。何か俺にお言葉はなかったのか」
「……」
「なかったのか」
「え……」
沖はやはりそうかと思った。
「よしわかっている」
そういうと、不思議に腹のすわった感じになった。父と父の兄との関係、父が分家していたこと、大森の墓地は、それ故、本家の所有になっていること、金の都合さえつく

なら新らたに墓地を買った方が後の面倒がなくてよいこと、べらべらとそういうことをしゃべり、最後に、一切のことは母の意志を尊重してやってくれといって沖は腰をうかせた。

「家の将来のことについては、俺には何もいう資格がないし、今は考えられない」

「え……」

「二三日中にもう一度来てくれ。いろいろ考えておく、今日はこれで別れよう」

沖は編笠をすぽっと被り、立ち上って出てゆくと、美枝の声が背後にきこえた。

「春樹、元気で……！」

沖は笠の内で、

「ああ」

と高い声でいった。ほこりっぽい建物の内で、その声は四方の壁に反響し、ああとそのまま、沖の耳にかえってきた。

精根がつきるのではないかという気持がした。脚が宙に浮いたようでもあった。やっと自分の房へ辿りつき、笠を釘にかけていると、いつかのように髪が逆なでられたようになり、悪感と冷汗と、数えきれぬ心臓の呼動が胸を乱打し始めた。沖は犬のように四つん這いになって脈を握った。あえぎあえぎ起きようとしたが立てなかった。沖は窓下まではってゆき、そこに積み重ねてある夜具にもたれて胸をひろげた。悚え場だな、沖は西日に燃えている天井を仰ぎ悚えるぞと自分にいった。ここで自分が少しでも惨めな気持になることは、自分が父に敗けることだと沖は思った。水が欲しかった。沖はふと父のよこしたハガキの文句をおもい出し、美枝の話を綜合すると、父は病気衰弱を押して……したものに相違なかった。その時の父には、老いて病身な妻のことも、不幸な長女のことも、失業中の次男のことも、そうして刑務所にいる長男のことも思いうかばなかったことであろう。沖によって汚された一家のために潔めの塩になろう……父の心にあったものは、ただそれだけではなかったろうか。

窓の外には、暮れのこった夕焼雲が、まだ赤々と燃えていた。遠くにかなかなと蜩の冴えた声がきこえ、それは沖の心に染み透るような余韻をただよわせた。父は別れる時に横をむき、最後までその姿勢を崩さずに死んで逝った。そのことの寂しさは、沖の心に針を刺すような痛みであったが、しかし、父が遂に自分へ顔をむけることなく死んだということに沖は男の死を感じ、かえって激しい愛情を感じるのであった。胸をはだけて横たわっていると、一家の崩壊してゆく物音が遠くきこえるようであった。父という男が半世紀以上にわたって維持して来た家の倒れてゆく物音である。一家の歴史もまた進んでゆく。父を中心とした時代は去り、新しい内容と形式とがやがて一家に創りだされてゆくであろう。父が残した足跡は、次の時代を受けつ

ぐ者の心の中で追憶となって残り、日々に色褪せてゆき、そうしてやがて、沖たちが曽祖父について何一つ知らないように、父もまた次第に忘れられてゆくであろう。これが人間の歴史なのだ。沖は老齢の父を苦しめた。沖の与えた精神上の暗い疾患が父の死期を早めている、それを知らぬ沖ではなかった。しかし沖は、父よ許せ、仕方がなかったのです。と祈りたい気持であった。私の将来を見届けて戴けぬのは残念ですが、あなたの後は誓って引受けます。父の臨終に立会ったとしても、沖は父に我児の属している時代のことを述べたであろう。それは父に我児の属している時代を認識させ、我児もまた一人の男であると思わせ、父はかえって安らかに死んで逝けたであろう。

窓をあふれた烈しい夕日は、壁から天井一面に流れこんで息も詰らんばかりに燃えた。動悸は鎮まり、全身の力が悉く抜けた感じで、じわじわと汗が流れていた。かっと燃え輝く窓の縁を脚の長い灰色の蜘蛛がひれひれと歩いている。沖はぼんやりそれを眺めながら、喪主のいない葬式の寂しい有様なぞをいつまでも思い描くのであった。

（一九三六年二月「文芸」）

嗚呼いやなことだ

高見　順

その一

伊吹真治の手紙は、これを要約するならば、花輪恒雄の死は自殺に非ずして、どうしても他殺のようであるからして、在京同志に真相調査を命ずるというのであった。

花輪恒雄の死は、この手紙で私は初めて知らされた。花輪恒雄の周囲の友人が今日、私をどのような眼で見ているかを知らない伊吹真治は私を同志扱いにした。そして彼の所謂在京同志が、私に花輪恒雄の死んだ旨の一片の端書も呉れることをしないのを彼は知らない。——私は今でも裏切者の扱いをうけている。

私は伊吹真治の分厚い手紙を懐中に入れると、外へ出た。街には生温い靄が漂っていた。ポストの立っている四辻まで来て、私は部屋の電気を消し忘れたのではないかと気が付き、つけっぱなしにして置くとアパートの婆さんが

大層口うるさく言うので、――さて、スウイッチをひねつたような気もするが、消さずにフラフラと出てきた気もする、さて、さてと、ポストの頭を拳固で軽く叩きながら思案にふけらねばならなかった。そしてポストの土台を、磨り減った下駄で一蹴り蹴るとそれを機勢（はずみ）にして私はアパートへ戻ったのだが、電気はやはりちゃんと消してあった。そのかわり財布を忘れたのを其処で気付いたからして、所詮無駄足ではなかったのであった。私の足は、人に余り知られていない私娼の住んでいる某方面へと運ばれて行った。私のアパートは浅草田島町にあって、吉原とか玉の井などというのはどうも地元の感じであるから、人の言うほど魅力を感ずることが出来ず、場違いへと好みが動くのは致し方ない。軈て私は私の馴染の女がいる店の前へと来たが、和洋支那料理と書いてある不透明の硝子戸をすこしく左右に開いたなかに、私は一目でそれと分る馴染の女の足を認めたのである。上体を布暖簾のうしろに隠したその足は、ただ黙って裾を多少あげて、外へ向け突き出していることによって一種の表情を持ち、鼠啼きなんかする以上の効果を期待している風であった。ここは許された地帯ではなかったから、看板は和洋支那料理とかおでん屋とかを装い、そしてそうした足の恰好による暗黙の約束で、看板以外の秘密の商売を営んでいることを、道行く人々に告げていた。和洋支那料理と書いてあるが、殆んどなんにも出来はしないその店の、和子と呼ぶ女と、私は半年来馴染を重ねていた。店には他に女がもう一人いたが、私は足を見ただけで的確に区別することができた。

自分の家へ来たような顔で私はその家の階段を昇って行った。おビール？――女が下で言った。ああと私は答えて、唐紙の開けっぱなしになっている左側の部屋にはいった。右側はちゃんと閉めてあるところから見ると、客があるらしいが、話声はなかった。私はしめっぽい畳の上にドテンと身体を倒し、じッと眼をつぶった。暫くして女がビールを持ってはいって来た。頭の具合はどう、やっぱし、いけないの。――うん。私は眼を閉じたまま、生返事をしたが、女も別段私の答えを聞こうという調子でなく、――タバコ持ってる？　一本くんない。そう言いながら私の袂にもう手をつき込み、女の手が私の腋の下にちょっと触れたが、とても冷たい指であった。女はバットを一服吸うと、起きて飲まないかと言ったが、気だるそうにちゃぶ台に肘をついているだけで、ビールの栓を抜く訳でもなかった。私は眼を細目にあけて、猫のような顔つきの女の横顔を眺めていた。女は全く猫か何かのような無表情な顔で煙草をすっていたが、――注射は打ったの？　と横を向いたままで言った。まだだ。――いけないわね。――うんいけない。そう言う私の声は、少しもいけないと感じている調子がなく、女の声だって同じであったが、その証拠に女はすぐこう言った。そう、そう、切符を持ってきてくれた？――忘れた。――チエッ、薄情だヨ。――小屋へ来て呼び

出してくれればいい、同じだ。――同じナもんか、小屋にナンカ居たためしはないじゃないか、いつだって莫迦みる。そして、ここで女は初めてビールの栓を至極乱暴な手附で開け、頭にビンビン響く音を立てて二つのコップをちゃぶ台に並べ、ひとつにだけビールを注ぐと、そのビールをぐいとのんだ。この女にそんな要領でのまれては、それこそかなわないからして、私はにわかに身体をおこし、骨太の女の手からビール瓶をもぎとらなくてはならなかった。ケチンぼ。女は顎を突き上げ、そしてケッケと笑ったが、この女の笑うということは、上唇の方をパクッと蓋のように開きつつ唇の部分を内側へ悉くめりこませ、そのかわり大きな糸切歯をニュッとあらわすと共に下歯は下唇ですっかり蔽って口の両端を耳の方向につりあげることであった。その笑顔は私に寒気のようなものを与え、又それ故私には煽情的であった。私は――左様、私のこれからの振舞は、どのような穏便な取扱いで書こうとも、所詮伏字の憂目から免れることができないであろうから、いっそ書かない方がましである。……なお、切符云々というのは、私が席を置いている某娯楽小屋の切符をかねて女は私にせがんでいるのだが、ちゃんとした劇場のように招待券というものを、そこは発行していないのである。文芸部というと名前はいいが、客席にまじって売出しの漫才芸人に、ヨオ○○! という声をかけるさくらの役まで私はやらされている。

――私は帯を玩具(おもちゃ)にしていた。そのうち私は帯を自分の頸に巻きつけ、両手で引張ってみた。ウーと私は唸り、女は、およしよ、縁起でもないと言った。私は女の声などには無関心な顔で、なるほどと仔細らしくうなずき、今度は女の頸を締めて見ようとしたが、女は手をバタバタさせて、およしッたら、よォと怒った声を出した。私はそこで億劫であったが説明した。俺の友達が首を縊って死んだんだ、ところが検べてみると、どうも自分で首を吊ったのではなくて、誰かに首を締められ、締めた奴がその死体を自殺のように見せかけたらしいことが分った、どうだ、面白いだろう。――そいで、どうだって、いうの。女は白粉をむらに塗った顎をボリボリと掻いて、いやな顔を横にそむけた。うん、そいで、俺は自殺と他殺と、どんな具合にちがうか、ためしにお前の頸を締めて見ようとおもうんだ。――そんなことしたら、あたいは死んじゃうじゃないか。――こうだ。――チエェ、莫迦におしでないよ。――そうか。――無理心中は御免だよ。女はシンから私を軽蔑した顔付になり、蝿を追うような手の動作を二つ三つ私に向けて行うと、身を挺して立ち上ろうとした。私はその裾をぐいと掴み、瞬間、この女の頸をほんとうに締めあげたい憤りで、その手が震えた。私はいま初めて、この女にことごとく惚れて了っている自分に気付いた。こんなに惚れていようとは今まで分らなかった。が、そう気付くと、私は手を離した。しょッてやがる。そう言って私はヒッヒッと笑

った。誰がお前みてえな奴と心中するかってんだ。——それはこっちの科白だよ。——お互さまだい。私はちゃぶ台を引き寄せ、その上にのしかかると、酒をもってこいと言った。すると女は財布を見せろと言い、私は蝦蟇口を、まだ立ったままの女の足許に叩きつけた。女は光力の乏しい電灯の方に向けて蝦蟇口を開き、身体を傾げてのぞき込んでいたが、何かブツブツロのなかで言うと、着物の前を直しながら出て行った。私はひどく酔いたいと願った。そして首を左右に振っていると、伊吹真治の手紙が畳の上に投げ出されているのに眼がとまった。私はそれを拾いあげてちゃぶ台の上に載せ、腕組みして暫くそいつを睨んでいた。

一体伊吹真治が花輪恒雄の縊死に他殺の疑いをかけたのは、それは花輪恒雄の兄の花輪盾雄が弟の死は他殺らしいということを伊吹真治に書き送った手紙から推断したものであった。したがって本来ならば、花輪盾雄のそうした手紙を参考までに同封すべきであるのに、そうしてないのは、花輪盾雄の手紙は余程以前に岸谷達夫の方へ送ってあるからであった。その時、伊吹真治は岸谷達夫に対して、私に書いてきたと同じことを手紙にして送ったにも拘らず、岸谷達夫は（伊吹真治の文面によれば）何故か責任を回避して死因を一向に調査したような報告を寄こさない。そこで改めて私に命ずるというのである。伊吹真治が、花輪恒雄の死を他殺と推定した根拠は、それは恐らく兄の盾雄が書き送ったものであろうが、その方面のことに詳しくない私などには成程と納得する他はない法医学的な文字を具えていた。すなわち花輪恒雄の死体の頸にのこった凹みには、絞殺の場合にのみ見られる皮下溢血があり、また凹みの溝が縊死の場合とちがった方向を示していると伊吹真治は論じ、手紙のなかに上のような絵を書いていた。上図が縊死で下図が絞殺である。

では誰が花輪恒雄を殺したのだろう。「花輪盾雄氏の手紙は下手人については曖昧になっているが、俺には見当がついている。そして伊吹真治は次のように書いている。「以下の事は君を信用して打明けるのだから、絶対秘蜜（密を彼は蜜と書き間違っている。その他、以下の文章には脱字や当字がいっぱいあって、文脈は乱れ、彼の異様な昂奮状態を宛ら伝えているのであるが、ここでは訂正を加えつつ書き写した。）にしてほしい。なおこの手紙はよんだら、すぐに焼きすててほしい。僕が花輪をやった下手人と見当をつけている奴は、F—というY（共産青年同盟）の城東地区にいた奴で、一九——年の秋、スパイの嫌疑でリンチをうけた男だ。M電社の「金属」のメンバーがゴソッともって行かれた直後、前にも各所でバタバタと手入れを食っていたが、

M電杜の場合でどうもF—の奴が臭いとなった。そこで査問委員会開催ということになり嫌疑の濃厚なF—をやっつける役にまわったのが花輪なのだ。当時の事情を知っているもののうち、今娑婆にいるのは僕位らしい。F—は半死半生の状態で、捕えられたが、気が変になって間もなく出されたときいた。そして花輪に復讐してやるんだ、花輪を殺して俺も死ぬんだと言っているということを聞いたが、花輪は相ついで生憎く捕えられて了った。——この男がやったにちがいないんだ。花輪が出所したのを待ち受けて、この男が花輪の首を締めたのにちがいない」眼玉が病的にでっかい伊吹真治が、静脈の浮き出た頸をのばして叫んでいる姿がありありと見える。左様、叫んでいる恰好であって、手紙を書いている恰好ではない。伊吹真治は大体が、普通の会話に於いても、常に抗弁的に叫んでいる印象を与えないではおかないので、伊吹真治といったら叫んでいる伊吹真治以外を想い出すことができない為かもしれない。胃が悪いせいか、彼の端の口はいつも白く爛れておったが、そこにブクブクと泡をため、「この男が、この男が花輪の首を締めたにちがいないんだ」と、大きな眼玉をグリグリさせて私を睨みつけている伊吹真治の顔が、まざまざと浮んでくる。——

なんだねエ、その怖い顔は。女は敷居の上に突っ立ったまま、言葉ほどには動じてない魯鈍な顔で、そう言い、——済まないけど、階下で飲んでくんない。私は返事をしなかった。そこで女は、その時、卓の上に顔をうつぶした私の側に来て、猫をつまみあげるような手附で、立ったまま私の襟を掴み、さあ、さあと引張った。下へお客が来たんだよ、降りておくれよオ。私はちゃぶ台に獅嚙みついた。いやなら、お金をおくれ、お金はもうないじゃないか。女の言葉はこう書くと冷酷も甚だしいように読まれるのであるが、実際の声はそうでもないのである。かくて私は階下へ追われ、酒をコップにドクドクと注ぐと、眼をつぶって一気に呑みくだし、そのまま戸外へ出た。

（その一の註）既に読まれたごとく、私はある種の悪疾に犯されていて、それは既に私の脳細胞の方へも攻めのぼっているらしい。早く注射を打ったらいいのであるが、乏しい金を私はそんなことに使いたくない。自滅を待っているようなものだと、人は私を咎めるかもしれないが、私ごときは自然に滅んで行って、一向に差支えないのであるから、咎め立ては無用なのだ。それは兎も角、私の脳は頗る具合が悪くなっているので、花輪恒雄とか伊吹真治とか岸谷達夫とか、私の友人が尚これからも一二、この物語に出てくるが、そのもとの素性を闡明にしつつ目下の筋を運ぶ巧妙な手捌きは到底為し能わぬのを悲しむ。もとの素性といったのは、たとえば、伊吹真治は今は名古屋に落ちて保険の外交員をやっているが、私の物語にとっては伊吹真治

が保険の外交員であろうと、よしんば洗濯屋の外交員であろうとその他等々、現在の事柄はさして問題にならぬ。ならぬ訳でもないが、もとの彼や彼等のことを語りたく又語らねばならぬとする気持の方が熾烈だ。すなわち回顧となるのであるが、そうした過去と現在とを塩梅よく織りなして行くかけひきの力が、私の脳からはもはや失われているようだ。そこで、こうした「註」などというのを持ち出す誠に不様な恰好で、登場人物の紹介を致さねばならぬのを、寛大な読者よ、御寛容ありたい。

扨て先ず、死んだ花輪恒雄のことを語ろうか。彼と私とは某大学の同級生であった。彼はその特別な風貌によって、予科一年に入学すると忽ち私どもに際立った印象を与えた。私ども新入生が皆、新しい洋服を着ているなかで彼ひとりは、垢でテカテカしたそれもすこしも身体にあわない奇体な洋服を着込んでいた。それが注意を惹いたところもあった。彼はその恰好を卑下するどころか、右の方の肩を充分にせりあげたその胸を昂然と張って、真直ぐ前を向いたまま、すこしも傍目をしないでノッシノッシと歩いて行く様は、歴史ありげな洋服の古さを四囲に誇示しているようであった。年齢も私どもより確かに二つ三つ上に踏めたので、新入生ではなく落第した先輩ではないかという風評を彼は背後に受けていたが、それにしては金ボタンが真新しいピカピカしたものであるのが奇妙であった。だが、彼に於いてもっと特徴的なものは、そうした服装や態度などより、彼の頭部なのであった。彼の顎骨の逞しい形状は、扨て、なにに例えたら、その印象を伝えるのに一番いいだろうか。左様、なににも例えようのない異様な顎だ。そしてそうした巨大な顎と均衡を保つ為にはやはりあの程度の頭蓋骨を必要とするだろうと、誰でも首肯するに違いない大きな頭を持っていた。そして、その頭に合う制帽は手に入れることができない為のソフトだと、これはたしかに彼自身言ったのが流布されたのだとおもうが、形の全然崩れた黒いソフトを、彼はその大頭にチョコンと載せていた。そのソフトの下には、これ亦必要以上に隆起した頬骨、それを、まあ、山とするならばその谷底の小さい沼といった感じで、二つの小さい眼が曖昧に光っていた。それも今にもお互に流れ出して、ひとつになって了いそうな危険を感じさせる距離であった。ところで、こうした頭部を支えている頸はどうかというに、これがなんとしたことか、至って羸弱な細さであって、そういえばこの果茎のような頸が或は彼の大きな頭、大きな顎をいよいよ誇大的に際立たせたのかもしれない。そして私どもに実に傲慢無礼な彼の態度だと思わせた、昂然たる歩き振りも、さぞや相当の重量であろう頭部を支えるのにそうした脆弱な頸をもってせねばならない為の、全く余儀ない、そして全く悲しい恰好であったのかもしれないのである。そして——いや、彼を見たことのない読者は、私が誇張の戯筆を弄していると思うかもしれない。そう思われては困るから、もう

止そう。胸部は再びガッチリした外観を呈しているのだが、下部へ向けて漸次尻つぼまりの要領でしなび衰えて行く奇観は、子供の足のように小さいその足に於いて極まっている。そこの具合を語ろうと思ったのであるけれど、止めねばならぬ。

以上述べたような外見だけで、既に花輪恒雄は私どもの眼を充分に瞠らせたのであるが、彼はそれだけで満足できないかのごとく、いろいろな奇行を演じて私どもを次から次へと驚かせた。今、その振舞に就いて書いている余裕はないが、要するに、それは私に彼を極めて粗暴な傍若無人の人柄でありその癖人目につくことの好きな浮薄な狡さと陰険さをも具えた男と印象づける種類のものであった。次に述べるような機会に私が遭遇するまで、私は彼というものを、私のもっとも嫌いな型に属する人間としていたのである。それは予科三年の秋の終りのことであった。私は神経衰弱が昂じ、富士山麓のY湖へ静養に赴いた。大学の学友会が経営している寮がその湖畔にあったからである。そこへ行って、初めて私は花輪恒雄がその寮の管理委員に成っていることを知った。私の嫌いな彼が生憎くそこに滞在しているのを、寮へ行きついた途端その入口で発見せねばならなかった時の私はどんな渋い顔をしたことだろう。中途半端の時季であったから、寮には私ども以外に学生は誰も来ていなかった。番人の老夫婦が囲炉裏の方へ茶をのみにくるようにと初めは幾度か私に声をかけたが、私は頑固にその好意をしりぞけて、奥の部屋の万年床にもぐったままでいるうち、彼等は私にもうかまわなくなった。私はこうして花輪恒雄と顔を合せるのをできるだけ避け、会っても口をきかないようにしていた。寮は湖畔のY村とH村との丁度中間の斜面に位していて、彼は毎日そのどちらかの村に出掛けて行った。寮の周囲に運動場を建設するに就いて、両村の村長と彼は何事か懇談を遂げねばならぬ用事を持っていたらしい。時々、彼は、一緒に行かんかと私に声をかけたが、私は不貞腐れた声で、行かんと言い、そうかと彼は言った。そうした私の依怙地を少しも気にしないらしい朗らかな声で彼が野球応援歌を高唱しているのが、間もなく寮の下の坂道からきこえてきた。彼は汚い洋服に下駄をはき、その不均衡な細い腰にタオルをぶらさげ、現在では湖畔をめぐってバスが通っている由であるが当時に於いては未だそんな便宜のなかった凸凹の小路を、何時間もかけて、Y村へと歩いて行くのであった。私は寮の窓から、頭でっかち尻つぼみの彼が悠々と坂を下って行く奇妙な後姿を眺めていた。やがて彼は横へ曲り、薄その他の丈なす雑草が彼の身体を隠して、見えるのはその大きな頭だけであった。それも間もなく、湖畔の茫々たる風景のなかに没して、彼の歌声だけが微かに遠くの叢のなかから響いてくるのであった。秋らしい色に澄んだ湖へ私は眼を放ち、立って柱に凭れ彼の歌声に耳を傾けていると、わけの分らぬ悲哀が私の心を噛みはじめた。私はそんなえたいの

しれない悲しみから遁れたいため、何事か考えることの方へ頭を向けようと試みた。たとえば、彼、花輪恒雄だが、彼は何故、ああして歌をうたいながらはるばるY村へ歩いて行かねばならないのだ。そんな事を考えることにした。それは、運動場を湖畔に建設する為だろう。それはまた何の為だ。学生のためだ。じゃあ何故彼は学生のためにそんなことをしなくてはならないのだ。こんな寂しい山麓の寮に独りでいて、毎日凸凹の道を往復するのは、どんなにつらいことだろう。そしてまた莫迦々々しいことだと彼は思わないのだろうか。私は下駄を突掛けて、外へ出た。富士はもう余程深く雪をかぶっていた。傍の叢で、もはやそう長い命とおもえぬ蟋蟀が必死のような声で啼いていて、私は心惹かれ静かにそこに蹲った。蟋蟀の声の奥から花輪恒雄の歌声が絶え絶えに響いてきていたが、聞こうとして耳をすますと、彼の声はもう聞えなくなった。

それから二三日して、私は独りでY湖へボートを出した。エイヤ、エイヤという私の声が静かな湖面を走って行くのが大層気分よろしく、私は湖心へぐんぐんと漕いで行った。湖の真中あたりへ来て、私はボートのなかに身体を横たえ、眼をつぶった。すると不思議な睡気が私を襲ってきて、そのままボートのなかで眠って了ったのだが、どの位たってからか、ふと気がつくと、風が出てきていた。さして目立たない風ではあったが、ここの風は気紛れの力をすぐ発しがちな恐れのあることをかねて注意されていた私は、あわてて身体を起して帰ろうとしたが、儘かにあげて置いた筈のオールの片方がいつの間にか流されていて、仕方がないので片方で漕ぎ始めたが、軈て案の定、性の悪い風が富士山の方から吹いて来て私はあせり出した。片方でだけ漕いでいては舟が曲る一方なので。すこし行ってはオールを抜いて反対のクラッチへ付け変えねばならなかった。私はヘトヘトになり、それでもどうやら寮の方向へ近付いたが、すっかりあわてていた為、オールを抜かうとしてボートをひどく傾けさせた瞬間、大きな横波をドンと食って、小さいボートはころりと顚覆した。その水の冷たさといったらなかった。泳いでいるうちに、手足の痺れて来るのを感じ、私はとうとう声を挙げた。助けてくれえ！助けてくれ！　寮にいた花輪は、これを聞いて、早速救援のボートを出してくれた。待っとれ！　頑張れ！　等々の大声を挙げて彼はボートを進ませてきた。彼のボートに手をかけた瞬間、私は気を失って了った。——気がつくと、私は寮の囲炉裏の側に真裸で寝かされていた。そして花輪も赤猿股ひとつになって、しっかりしろしっかりしろと怒鳴っていた。凍えた私の身体を彼は自分の体温で暖めてくれたのであった。彼はそれからなにくれとなく私に親切を尽してくれたが、天邪鬼の私は、そうした彼のまめまめしい親切が却っていやであった。俺は死ぬ積りであったのだが、いざとなるとやはり死ねない。そんな偽りのいやがらせを私が言うと、彼はみるみる顔を真赤にして、馬鹿、死

ぬ奴は馬鹿だ、死ぬなどというのは卑怯だ、卑怯だぞ。ああ、獰猛な恰好をした頭は、なんという純真さをおさめていることだろうと私は薄くあけた眼で侮蔑的に見ていると、彼はその頭をやおら横に向け、逞しい顎を私に見せて、ホッと溜息をついた。死ぬナンテことを考えることのできるのは仕合せだ。彼はそう呟いて、私の側を離れた。ああ、いい月だ、そういう彼の声が間もなく寮の庭から聞えてきた。なんの鳥か、キ、キ、キと啼いて夜空を渡って行くのが聞えた。

私は彼に対して急激に親愛の情を覚えてきた。そしてある晩、囲炉裏の側で、私は彼から沁々とした話を聞いたのである。彼は私より四つ年上であった。彼には両親がなく、彼の兄が埼玉の小学校に奉職して彼の学資を出している事情が、どこかで、彼がそんなに学校へはいるのに遅れた原因を作っているらしかった。(彼の可笑しな洋服は兄のお古であった。) 兄の花輪盾雄は、彼の言葉から察すると、弟に学資を貢ぐということをば、自分の諦めた栄達の夢が弟によって実現できることと、そっくりきめて了っている風の窮屈な性格であった。僕は、だから、どうしても出世しなくてはならないんだ。そう花輪恒雄は唸るように言い、私はそうだねと頷いた。私は出世という小学校以来聞いたことのない懐しい単語の響きを面白く感じた。——ところが、と彼は言い、そして歯をぐッと食いしばったことを、顎の附根の隆々たる筋肉にあらわして、もう一度、ところがと言った。どうしても出世しなくてはならないということは、今の世の中で、どんなにか苦しい心の負担であろう。ところが、彼にとって、苦痛を更に倍加させたことには、——左様、この当時の良心的なインテリゲンチャの心を誰彼の見さかいなく必ず捉えないではおかなかった左翼思想、それに彼も亦惹かれたのであった。それは所謂出世の道から彼を裂いて行こうとするものであった。そして彼も裂かれねばならぬと頭の中ではしていたが、しかし気持が、兄のことを想う気持が、重い鎖となって彼から離れなかった。

既に黄昏の靄が湖上に漂うていたが、私はこれからY村へ行こうと彼を誘った。寮は酒が禁制であったから、Y村の居酒屋でこの地方特有の生葡萄酒を桝で飲ませるところへ赴こうというのである。翌朝、彼は運動場建設地に関する用件を携えて、Y村の村長と一緒に県庁へ赴き、その結果をもってすぐ帰京することになっていた。丁度いい、今晩は村長のところへ泊ろうと彼は言った。寮からY村へ行く道は私は、初めてであった。私は寮へ来る時、Y村を通過せずに、バスで須走へ出て湖の方へ降りて来たからである。初めてのせいかもしれないが、道は頗る遠く感ぜられ、こんな道を毎日のように往復している彼の労苦が察せられた。何故、彼はそんな苦しみを苦しまねばならないのだということを私は先日考えたが、今、それが分る気がした。ただもう勤労的に身を苦しめることによって、彼は私

に語ったような苦しみから救われ遁れようとしているにちがいない。そう私は感じたのである。——然し、これは何事によらず自分というものと結びつけないでは物事を考えることの出来ない、汚い私の根性からの独断であるかもしれない。ただ学生のためをおもう、私（わたくし）を無にした彼の行為であったかも知れない。——

東京で再び会ってからの私と彼との交遊に就いては、余りくだくだしくなるから、詳しい敍述は避けねばなるまい。彼は本科に進むと共に、寮の仕事と縁を切った。運動場の地所を県から無償で借り受けることに成功した他、管理委員として種々の輝かしい功績を残して辞めた。そして彼は遂に左翼の運動へ身を進めて行ったのである。私も彼に曳き摺られて漸くその方へ近寄って行った。そうした大体を述べただけで、本筋へ私は戻らねばならない。

その二

扨て私は翌日、「ラ・エスペロ」と呼ぶ高田馬場の喫茶店を訪れた。これは友人堺輝二の経営になるもので、今から数年前、彼が大学を出るとすぐおこした店である。同じく大学を出た花輪恒雄は、添田秀三郎と二人で、当時ここのコックをつとめ、堺輝二を扶けて創業の苦難を能切り抜けさせたのであるが、その辺のことは例によって註の部分に譲り度い。「ラ・エスペロ」というのはエペスラント語で「希望」という意味で、花輪恒雄が「十月」とか「火花」とかいった店名を主張したのに対して、大学の緑星会（エスペラントの会）の会員であった堺輝二は商売と思想とは違うと言って、兎も角こうした店名を選んだのである。学生上りの素人の商売が果してどの位つづくものやらと私は陰で危ぶんでいたが、案に相違して、今日「ラ・エスペロ」といったら、ああ、あれかと喫茶店通でなくても、一応名前は知っている、そんな殷賑振りを示している。堺輝二が仲々のやりての故であろう。私は花輪恒雄がここにいた時分は、ちょくちょく訪れていたが、花輪恒雄が（というよりは相棒の添田秀三郎が）堺輝二と喧嘩しておん出て了ってからは、その交遊の濃度に於いて花輪恒雄側の友人であった私はもう行かなくなった。——私が裏切者扱いをされていることを堺輝二も知っているであろうとおもうと、私の足は流石に渋ったが、例の伊吹真治の手紙に就いて私の訪ねて行けるもとの友人といったら彼以外になかった。

「ラ・エスペロ」は昔日の俤をとどめない豪華な店内の装いで私を驚かせた。花輪恒雄がどこからか持ってきた怪しげな風景画の以前掛けてあった壁には、今は、いずれ名のある洋画家の力作に違いない裸婦の油絵が燦然と掲げられてあり、その下には大きな電気蓄音器がピカピカと光っていた。そこには、もと、安物のポータブルが置かれてあって、レコードを二三枚かけると忽ちゼンマイがゆるんで了い、しょっちうハンドルを廻していなければならない女

給は、手が痛くなっちゃうわと花輪恒雄に心やすだての愚痴を零しているのを、私は聞いたことがある。そのポータブルも彼が奔走してどこからか都合して来たものであったが、女給にそう言われると、それがまるで彼の責任であるかの様に小さい眼をしょぼつかせ、勘弁してくれ、そのうちチャンとしたのを探してくるからと言い、あら、そんな積りで言ったんじゃないと却って女をまごつかせた。その時分の女給は粗末な和服を着ていたが、今は背中をすっかり出した妙な衣服をじゃらじゃらと纏った女に、私は御主人に会いたい旨を告げた。女は奥にひっこみ、軈て出てきて、しばらくお待ち下さいと言った。そのしばらくというのは、随分長く、やっとのことで、どうぞと言われ、私は奥に行こうとしたら、こちらへと言って外へ出された。開店当時の彼は花輪恒雄や添田秀三郎と一緒に、店の二階に寝起きしていたが、当時空地であった裏に今では別棟のすまいを立てて住んでいて、そこへ私は、ぐるっと廻って案内された。

　やあ、待たせて失敬。――無骨な男の筈だった堺輝二は、すっかり商人風の愛想の良さを身につけていた。――組合のものが来ていたので、すっかり待たせせた。組合？と私は言った。二階にみんながゴロゴロしていた時分、その壁に掛けてあったレーニンの画像が、――当時を偲ぶよすがの今は悉く失われているなかで、この画像だけが棄てられずに新しい住いに移されて部屋に飾られているのを、私はなつかしい眼付で見上げながら、そう言った。組合というのを私は労働組合と勘違いしたのだったが、――いや、喫茶店の組合なんだがね、どうも仲々うるさくって。そう言って堺輝二は狡るそうな笑い声を立てた。そうした種類の笑い声を彼から聞くのは初めてであったが、今の彼にはそれを少しも奇異に感じさせない一種の貫録が具っていた。ここ三四年の間に適当な脂肪をすっかり蓄えた彼の身体はその前に坐った人間を忽ち圧倒する微妙な雰囲気を発散していた。剃跡の青々とした顎の下がむくむくと盛り上った精力的な肉附なのを、彼は満足そうな手附で撫でさすりながら、君はいま浅草の方で活躍しているとか聞いたけど……。いや、なに。――劇場？――なに、ヘンなところで。――いや、結構ですな。――結構じゃないよ！ 私はきだすように言った。彼の鄭重な言葉遣いのヌラヌラとしたわざとらしさに腹が立った。同じ左翼くずれでも、彼と私と、こんなにも違うものだろうか。いや、いや私如き裏切者はもとより例にはならないが、崩れたとなると、なにもかも崩れてしまう型がある一方に、堺輝二のような型は、左翼くずれであることによって一種の強靱な生活力を得ている。左翼的訓練がその生活態度に齎したものを巧妙に活用して、たけだけしく進撃して行くのだ。彼は左翼くずれであるお蔭で、「ラ・エスペロ」を今日のような隆盛に導くことができたに違いない。そういう彼に私は神経的に反撥しても、しかし、それは些かも理窟のたたないこ

とだと知ると、私は自分が子供型の人間であってそれに対して彼は大人なんだとおもって項垂れて了うより他はなかった。つまりヤクザな脆弱な草と、どうあっても枝葉をのばしてゆく喬木との違いだといってもよい。こういう私の項垂れ方を彼はちゃんと見抜いて了ったのか、ますます威圧的な応対にでるのであった。顔色が大層よくないようだが、どこか具合でも悪いんじゃないかと彼は言い、そして自分は健康だということを自分に言いきかしているような風に、その首を小刻みに振りながら、チェリーのけむりを胸深く吸いこんだ。僕は駄目なんだ。私がボソッと言うと——駄目？　駄目とはなんだ、いかんな、そんな元気のないことでは。そして彼は言った。僕らはせめて身体だけでも健康にしておかなくてはならない、そうだとも。

　女房だと言って紹介された断髪の小柄な女性がお茶をもってきた。ツーウと啜ってから、私は言った。花輪恒雄が死んだね。——ウン、意気地のないことだ。彼は唇を不愉快気に歪めた。花輪恒雄の自殺を彼はちゃんと知っていた。——自殺じゃないっていうじゃないか。——自殺じゃない？　そいつは初耳だ、刑務所で病死でもしたのだろうか。——いいや、出てから殺されたというんだ。——誰に？　と流石に彼は身体を乗り出してきた。誰に？——ウン、それが、……と私は口籠った。伊吹真治の言ってきたF—の一件を口にするのが憚られ、私は下手人は不明だとぼやかした。——ほう、それは初めて聞いた、花輪が殺された？　ふうん。堺輝二はソファに身体を倒し感慨無量の眼差を欄間に向けた。誰がやったのだろう。彼は独り言のように言い、ややあって、そうだと叫ぶと身体を起した。——兄貴がやっつけたんだ、それに違いあるまい、あいつの兄貴ときたらカチカチの奴だから。こういう型の人間に特有の、自分でこうと察するともう揺ぎのない事実ときめてかかるあの強さで彼は言い、その団子鼻を蠢かした。——花輪も仲々鼻ッぱしの強い奴だから、出所てから、兄貴と喧嘩したんだろう、そして兄貴がカッとなって……。いや、兄さんじゃないらしい。私は臆病な声で遮った。どうして。彼は濃い眉毛を怒った風にあげた。私は遠慮した調子で、他殺を触れ廻っているのは、他ならぬその兄貴であることを述べた。警察はどうなんだ。さあと私はつまった。警察の検視は一体縊死としているのか、絞殺としているのか、その辺のことには伊吹真治の手紙が触れてないので(或は花輪盾雄の伊吹真治宛の手紙には書いてあるのかもしれないが)今のところ私には不明であったけれども、この場合の事の勢いで、私は次のような臆測を述べた。犯人を捜す便宜のために、きっと絞殺を縊死として秘めているに違いない。ところが犯人が仲々挙らないので、兄貴が痺れを切らし実は他殺なんだと言い出したのであろう。なにしろ弟を頼りにしていた兄さんだからねえと私は言い、私をジリジリと瞶めている堺輝二の凄い眼を他に転じさせたい意味からも私は、——とにかくよく知らないんだ、僕

はただ自殺というのはウソで実は誰かに殺されたんだという話を聞いただけなんだ。病いのせいか、後頭部の筋肉が凝って痛いのを私は指でゴリゴリと揉みながら、そう言った。そうか、ふうんそうかと彼は私を直視しつづけた。何か思い当ることでも彼の頭に浮んできたらしい。然し私はそのことに興味を釣られるより、彼が私の顔をもう何分間か睨みつけている、そのことの意味に感心する気持の方が強かった。それは、生活に図太い自信を持った人間の視線であった。こうした眼玉を、もとの彼は持っていなかった。——彼はパチンと指を鳴らし、わかったと言うと、やっと私の顔から眼を離した。私は顔の面をつるりと撫で、どうやら彼の顔に眼を注ぐことができたが、血色の良い肉附豊かな彼の頬はその浅黒い皮膚の上にテラテラした脂肪を万遍なく浮ばせていた。

花輪恒雄の首を締めたのは「万盛館」に相違ないと今度は言った。万盛館というのは神田にある学生専門の安下宿の名で、花輪恒雄は学生時分そこに泊っていて、そこの女中と過ちを犯した。それは私が湖畔で彼に会ったすこし前の出来ごとであるらしい。前述のように彼はその時、私がすかないとしていた強がりのポーズを全く崩してその身の上を語ったのだが、そうしたボロのなかに万盛館の女中に関するボロを出さなかったのは、どういう訳か。堺輝二にきけば、彼はきっと（正確に言えば花輪恒雄と喧嘩別れした後の堺輝二は）——そういう男なんだ、花輪という奴はと言うに違いない。花輪恒雄は人前でボロを出すまいといつも気張っている。相手より高く位置していることを相手に印象づけようと絶えず計画を怠らない。そうした性分のせいだと言うだろう。それは兎も角、彼は彼より丈が高く、男のように筋骨逞しい福島生れのその女のことを友人に隠していたけれど、その女はすっかり彼の女房気取りであって、誰にでもすぐそれと感ぜしめた。軈て彼は運動にはいり、そして前述のように「ラ・エスペロ」へ転がり込んだ。彼女は万盛館でやはり女中をしていたが、時々、高田馬場へやってきた。おい、花輪、「万盛館」が来たぞ。彼女はそう呼ばれていた。——花輪恒雄が「ラ・エスペロ」をおん出たことは、「ラ・エスペロ」で暫く休養した後ふたたび運動に帰った形になったが、それからの彼と「万盛館」との関係に就いては私は知らない。私の知っているのは、彼が捕えられた後に、彼の妻と称する若い女性がいたことである。明子と言い、帝大病院の内科の看護婦であったが左翼の関係でやめさせられた女である。

その「万盛館」が二カ月ばかり前に、ここへ来たんだと堺輝二は何故か嬉しそうな顔で私に言った。女は花輪恒雄の保釈を知っていて、出所したら一緒に世帯を持つ様、彼に話をつけてくれと堺輝二に頼みに来たのだった。いつかは自分のところへ戻ってくると信じて、今日までじっと我慢し、相当の金も貯えた。今度を措いて他に時はない。顔をしゃんと挙げてそう言う女の眼は血走り、瞳孔から針の

ような光が放たれていた。――花輪恒雄は間もなく出所した。帰って行った先は、明子のところであった。堺輝二は勿論、「万盛館」の頼みを花輪恒雄に伝えはしなかったが、たとえ伝えたところで彼女の意向通りになったか、どうか。――「万盛館」は、今おもえば、気違い染みた様子を既に示していた。堺輝二はそう言って獲物を前にした獣の咽喉が出すようなク、ク、クという音を、咽喉の奥から発したのだった。

（その二の註）左翼運動に身を投じた花輪恒雄と「ラ・エスペロ」に於ける花輪恒雄との間には、語らねばならぬ幾多の事柄が存するのだが、今はこれを省略する。堺輝二が喫茶店を立てようと思いついた時、花輪恒雄は「共青」の学内責任者として丁度検挙されていた。出てきた後者に前者は、どうだ、俺のところへ来て、すこし身体を休めないかと言い、よし、手伝おうとなって「ラ・エスペロ」の開店となった。堺輝二は「西瓜のテル」という渾名をもち、その訳は中味が赤いにも拘らず表面は緑（即ち緑星会）だというのだが、花輪恒雄等とおなじグループであった。生活の解決をつけてから運動にはいるという堺輝二の言葉に、添田秀三郎も応援しようと言って、花輪恒雄と一緒に合所に立った。

　花輪恒雄の勤労振りはまことに献身的なものがあった。私がある時、「ラ・エスペロ」を訪れたら彼は一罐について二銭だか三銭だか廉い煉乳を仕入れる為に、新宿の大売出しの店へ出掛けて行って留守であった。私はY湖畔をてくてく歩いて行く彼の姿を思い浮べた。なれない手附で米をといでいる堺輝二に、店の成績は如何かときいた。駄目だ。彼は横を向いて、水道をじゃあじゃあと出し、その音は彼の余り好まないらしいその会話を中絶させた。新米コックの具合はどうかと私は言った。「ラ・エスペロ」は喫茶の他に「米国式軽食事（ライトミール）」という看板をかかげ、花輪が素人式のカツレツ、コロッケその他を製造していた。花輪は全く器用な男だと、堺輝二は答えた。――あいつが来てくれたので迚もたすかる。私が、そうかというと――だけど、気持にムラがあるんで、そこがどうも。――ムラッていうと？――働く時は無闇と働くのだが、気がむかないとなると、蒲団をかぶったきりで下へおりてこない、友達の間柄であってみれば、まさか雇人のように困ると怒鳴る訳にも行かない、それに花輪の気持も僕には分るし、一緒に暮すと外でつきあっていた時と違って、いろいろ問題が起ってくるものだ。

　軈て花輪恒雄と添田秀三郎とが帰ってきた。歩いて往復したと見え、擦り切れて草履のような下駄を穿いた花輪の小さい素足が土埃で真黒であった。塩鮭の頭をさげていて、これで栄養をとるぞと私の前にブランブランさせた。彼は鮭の頭をたたいて団子にし仲々美味いスープを作る方法を知っていた。花輪の提唱で男たちは三度の食事を味噌汁と沢庵ですますことにし、おかずをつくってもそれは通

動の女給の食事に当て、孫田秀三郎が出歯の唇を余計とがらせてブーブー言うと、花輪は抑えた。内輪のものは我慢して他人を優待しなくてはならん、待っていろ、その内、鮭のスープを作ってやる。——然しそのスープは彼の言う程、栄養の補充にはならないと見え、彼の所謂内輪の男たちはみんな栄養不良のような蒼然たる顔をしていて、特に花輪恒雄はひどく、眼窩が落ち窪んで穴のごとくであった。それは彼の精神的な苦悩の為の憔悴であったかもしれない。彼が「ラ・エスペロ」で孜々として働いている様を見て、学生時代のグループのなかには、彼はああやってズルズルベッタリに運動から離れて行く気ではないかと陰口をたたく者がいたが、そういう陰口に対して彼は痛ましいほど敏感になっていた。そうした陰口を叩くということは大概、そういう本人自身が、その頃いよいよ弾圧のひどく成った苦しい運動から機会と口実があれば身をひこうと、そんなこと許り考えていることを逆に明かにするものであったが、花輪恒雄がまたそれにこだわるのは、彼も陰口をたたく者たちとおなじ心の状態にあり、それが彼の神経をむきだしにしたためかもしれない。彼と一緒に学内左翼グループをつくっていたものたちは、ほんの二三人を除いて、多くは学校を卒業するとともに左翼運動への献身は学生時代だけの情熱であったというような形で、それぞれ各方面に就職し、花輪恒雄はそうした面から見ると要領の悪い男として取り残された具合であった。しかし、彼自身は、「ラ・エスペロ」で少しの間休んで、そのうち、時期を見て運動にかえるんだということを自分に固く言いきかせている風であった。彼は暇を見てはパンフレットに顔をむけてた。——そういう彼を見ると、堺輝二は眉をひそめた。花輪恒雄が最近の検挙ですっかりネをあげその心に動揺を生じたことはちゃんと分っていると堺輝二はしていた。花輪恒雄が兄の盾雄からの激しい手紙を毎日のように受けとって、それを読んだ後の一時間位は暗い翳が彼の顔や動作から離れないのを狡い目で観察している堺輝二は、一方、花輪恒雄が寸暇を惜しむ風な熱心な眼をパンフレットに注ぐ恰好をば、そうして彼がひるもうとする心を締め直している努力とは見なかった。「ラ・エスペロ」を開こうという時はまだそうでもなかったらしいがいざ自分の店を持ったとなると運動に対してすっかり逡巡を感じて来たと見られ、また自分への一種のいやがらせとさえ取れた。そうおもわせる暗さが実際、花輪恒雄の周囲にもあった。

客のすくない昼間であったから、私たちは堺輝二を残して二階へ上った。どう？　と花輪恒雄が言った。私の仕事のことを訊ねているのだが、私はその時分、「出版」の城南地区で働いていた。話が戻るが、私はＹ湖畔で花輪恒雄と親しくなって東京へ帰り、間もなく彼に導かれて左翼理論に頭を向けはじめ、彼のグループの研究会に出ることになった。そこで私は、眼のグリグリした伊吹真治、出歯で

怒りっぽい添田秀三郎、ひどい近視眼の岸谷達夫、それから、詰襟の制服にいつも白いカラーをつけているので目立った堺輝二などと知合いになった。花輪恒雄は他のものより遅れて研究会にはいり、そのせいばかりでなく、彼の理論的水準は低いとされて、他のものから軽蔑されていたが、俺はどうも頭が悪いから……と彼はそう自分でも言って、そのかわり実践的な方面にまめまめしく身体を動かした。理論と実践との間にまだ線を置くことの可能であった頃だった。私はY湖での死にぞこないから神経衰弱が収まった感じで、彼のうしろについて一緒に動いていたがそのうち別々に働くことになった。――私は私の地区にこの頃ボッボッと工場的基礎を持ち出した形跡の「刷同」のことに就いて、花輪恒雄にちょっと語った。ほう、と言ったのは、花輪恒雄でなく出歯の添田秀三郎であった。岸谷の奴、策動しているな。そう言って添田秀三郎は眼をもう光らせた。岸谷というのは私どもの旧友の岸谷達夫のことで、彼は早くから学校を放擲して運動にはいり、その時分は「刷同」の幹部になっていた。昔の友を今では左翼の攪乱者たる敵とせねばならないことに成った訳だ。ふてえ野郎だ。添田秀三郎がなおも、そう罵ると、まあ、そう言うなと花輪恒雄は言った。彼は掌から垢をこすりながら、――岸谷はそう悪党じゃあない、あいつは早くから労働者のなかにはいっているので、いろいろ行き掛りがあるのだろう。――行き掛りとか腐れ縁とか義理とかで、運動をあいされて堪るもんか。添田は頰のこけた神経質の顔を蒼くした。――それはいかんけどなア、岸谷は俺達とちがって労働者と個人的に深いつきあいをずっとしているというのがあって、仲々理窟一点張りで動けないところもあるのだろう。――というと、左翼は大衆から浮いたところにある理窟一点張りのものという意味になる、岸谷のやっていることを個人的な感情で見ちゃいかんよ、花輪、お前はこの頃どうかしているぞ。添田秀三郎にこうきめつけられると、花輪恒雄はその大きな顎をガクリガクリと振りながら、よし、よしと言った。そろそろ、ここをひきあげようぜ、こんな生活をしていたら、あたら花輪恒雄も腐ってしまう。添田秀三郎はそう言い、なア、そうだろうと私に賛成を求めた。

丁度、その時、階下から花輪恒雄を呼ぶ女の声がきこえた。花輪は、おうと言って階段をおりて行き、下で何かボソボソ語り合う声がして、やがて姿をあらわし、弱ったと添田秀三郎に言った。下にいるのは「ラ・エスペロ」の女給で、今日速達でもって突然解雇され、困るからなんとかしてくれと、そういうことを言いやすい花輪を呼び出したのであった。作家同盟にはいっているプロレタリア作家某の細君である彼女を解雇したことは花輪も添田もいまはじめて聞いたのだが、弱ることはない、そいつは慥かに無法だ、堺を呼ぼうと添田秀三郎は立ち上った。堺輝二があがってきた。添田が早速、無法をなじると、営業不振を理由

とした。――それはをかしい、喫茶店繁栄の基礎は女にあるとこの間もお前は言っていたじゃないか。うん、堺はピョコンと頷いてから、――ちょっと違うんだよ、と眼をむき、畳の目に爪を立てた。彼女は容貌があまり美しくない上にプロレタリア作家の女房であるということを鼻にかけた風の、客扱いの悪さもあって、店には不向きだと彼は言った。おなじ女を置くなら、もっと客を吸引する種類の女が欲しいとしている彼の気持を、添田は、だんだんブルジョア根性になって行ったなと突いた。なにがブルジョア根性だと堺は流石にキッとなった。はじめ女給を選ぶ時に、成程、美人ではないがプロレタリア作家の細君を採用してその生活を助けるということは、普通の女を雇うより、階級的に意義があると意見が一致した。然しそれはいかにも学生らしい甘ちゃんの考え方だったと堺は言い出した。昨日、彼はその女に、喫茶店へ勤めている以上は少しは化粧もし愛嬌のある応待も心掛けてくれるようにと言ったところ、彼女はいやな顔をしてソッポを向いた。そういうのがプロレタリア的というのかと堺は歪んだものの言い方をはじめた。花輪は、まあまあと調停に入り、私は早晩決裂の来ることを感じた。

　そしてほどなくして決裂は来た。損をしていると堺輝二の零している「ラ・エスペロ」が案外幾分の収益があるのを添田秀三郎が知り、俺たちに駈け引をせんでもいいだろうと言ったのが口火であった。月給でも貰っているのならまだしも、階級的になんの意味もないところで、徒らに搾取されている手はないと、彼はがなり出した。真正直な性質だけに、運動から離れていることが彼を焦躁的な怒りッぽさに捉われ易い状態に置いていた。もしかすると、運動からはなれたいとおもっていたかもしれない花輪恒雄を、そうして添田秀三郎は遮二無二、連れ出して行った。――私と違った「線」で二人は働きだした。ところで私だが、私はそれから何箇月かして大井町の某活動写真館の前で捕われた。前にもう数度つかまっている私は、顔見知りの本庁の者に、この野郎と怒鳴られ、私を捕えた所轄の者に手をかせという合図をした。拷問。インテリの肉体は繰りかえされる拷問の苦痛に堪えることが到頭できなかった。私は棄て鉢になってしゃべり、私の頭に浮んでいるのは同志ではなく母親の顔であった。母親は私という連れ児を抱えて弁護士の許に再婚し、そこでは子供を生まなかった。継父は母親の持って行った金で株をやり悉くすって了ってからは、もう母親になど用はない、出て行けという意味か、そう若くはない妾を家に入れ、その女によって自分の子を得るんだと言った。然し妾にも子ができず、妻妾同居の形がずっと続けられていた。母親は、そうした憂目を忍んでいるのは偏えにお前の為だと私に愚痴り、私はそういう母親にやさしい言葉を掛けるのがいやであった――。

　私は周囲に大きな損害を与え、それによって戻ってくることができた。そして同志から身を隠した私は、それから

一年余たって花輪恒雄が神奈川の公判廷で転向組駁撃の頗る激烈な演説をやっているのを通信で見、そこで初めて彼の消息を知ったような始末であった。「ラ・エスペロ」にいた時分、確かに動揺の窺われた彼のこの元気は私を充分どやしつけていい筈だったが、私はもう腑抜けの有様になっていた。――私の入獄が母親を家から追いたてる口実になってはと恐れ、入獄を免れるようにして私は出てきたのだが、出て見ると既に母親は離別され、地方の親戚を頼って東京を去らねばならぬ悲運に私は母親を陥れていた。それから少しして母親は病死した。私は身寄からもなんからも捨てられて、東京にとどまったのである。

その三

労働△△社というのは小さいしもたやであった。そこから発行されている「労働△△」は、左翼的伝統を守っている労働組合に基礎的読者をもった大衆雑誌で、現在の岸谷達夫はその編輯に従事していた。私は前日、堺輝二から岸谷達夫に会える手順を教えられ、労働△△社を訪ねてきたのだが、その格子戸の前でやはり躊躇した。傾けていた雨傘をゆっくり閉じ、すると雨が吹きつけてきたから格子戸を開けてなかに飛びこまねばならなかった。

出てきたのは当の岸谷達夫で、ながい間会わなかったこの友人は、ウアと言い、度の強い眼鏡に手をかけながら、珍しい、まあ上れ上れと言った。頰にぽってりとした肉を附けた美少年タイプの往年の俤が今はすっかり消え失せて、黄色く萎び皺立った顔にながい不精ひげをはやしていた。そしてその髭だけは以前とかわらず薄くまばらであった。そうした彼もまた逆に私のすさまじい肉体の変化にあきれた様子で、私を二階に導く階段の途中で幾度も振りかえって私の顔を見るのであった。親愛の情に溢れた彼の態度を、僻み歪んだ私の心は最初素直にうけとろうとしなかったが、次第にその心の襞もほぐされて行き、回想的な会話が取りかわされた。しかし今はその辺は省略して、私が彼を訪ねた目的の、伊吹真治の手紙を彼に示したところへと飛びたい。手紙を彼は眼鏡の前にもって行き、それで顔を隠すみたいにして読んでいる彼の表情が気になって私は身体を傾げた。彼の剛い眉はいよいよきつく寄せられ、はあと肩を落して溜息をつくと、手紙を静かに膝の上に載せた。どういうのだろうと私が言うと――二人とも気ちがいだ、困ったことだ。――気ちがい？――まあ、異常としなくちゃなるまい、嗚呼いやなことだ。――二人ッて？――花輪の兄貴はたしかに変だ、それから伊吹は会ってないからどの程度かわからぬけれど。――やはり自殺がほんとなのか、Fーというのを持ち出したのはどういう訳だろう。――妄想だ、伊吹はFーとおなじようにFーよりあとでだが、ひどいリンチをうけ、それから被害妄想に取り憑かれて出所てからずっとなおらないらしい、誰かにつけねらわ

れそうだという自分の恐怖をすっかり花輪に当て嵌めたのだ、当て嵌めるのに具合のいい手紙をまた花輪の兄貴が伊吹に送っている、伊吹に送らないでもよさそうなものを、伊吹と兄貴とは何かの機会から文通をはじめていたらしい。——そして彼は煙草に火をつけ、——君は伊吹の手紙を見て少し変だと感じなかったか、伊吹の言う通り他殺とおもったのか。私は返答に窮した。私は脳の調子が悪くなっているからと言おうとして、——堺輝二は「万盛館」が花輪の首を締めたのだろうと言っていたと逃げた——。そうか、いかにも彼らしい想像だ。——一体、花輪はどうして自殺したのだろう。——どうして？　それは分らない、いや分らないといえば分らないが……。そう言って彼は煙草の灰をおとし、私は脣を歪め、虚ろな声で言った。そうだ、誰だって死にたいんだ、だけど死ねないのだ、死ぬ勇気がないから。——いや、それはうそだ。岸谷達夫の言葉は静かだが力強く奥行のある響きをもっていた。今なお労働者のなかにあって生きているインテリゲンチアだけに与えられる響きであった。

　私は伊吹真治が岸谷達夫の許へ廻送したと言っている花輪恒雄の兄の手紙を見せて貰えないかと言った。岸谷達夫はそれを花輪恒雄の妻の明子に手渡して今はないと答えた。花輪の兄は明子を憎むの余り、花輪の首を絞めたのは明子であるかのように、その手紙のなかでほのめかしていると彼は言った。どうして憎んでいるのか、それも亦気の狂ったためかと私はきいた。——花輪の兄貴は花輪が獄につながれるようになったのはみな彼女のせいだと思い込んでいるのだ、自分がさんざん苦労して一生の望みをかけていた弟が、その苦労をフイにして了うようなことをしでかしたのは彼女の煽動によるものだとした、兄貴は弟を憎むことはできないのでその女房を憎んだのだ、そしてあの頑張っていた花輪も遂に転向して出て来、兄貴に会い、その絶望を眼のあたり見た、俗世的にも「政治」的にも今は台無しの彼は、たまらなくなって死んだのだろう、兄貴の苦労が花輪のからだにしみこませていたものから花輪はのがれることができなかった、兄貴はとうとう決定的に弟を失い精神に狂いをきたした、そして花輪を殺したのは花輪の女房だという妙なところへ落ちこんで行った、それはまた花輪の死体に他殺のような疑いが当初起ったためもあるんだ、頸のところの皮下出血の具合が絞殺のようでもあったのだが、それは花輪の縊死体を女房が発見して紐を切った時は、血の循環がすっかりとまってはいなかったので、それで出血したらしい、それから頸にのこった紐の痕だが、花輪はあのように異常な大頭でそれに顎がひどく張っているので絞殺のような紐の当り方であったらしい。——この時、郵便という声に岸谷達夫は階下へおりて行った。私は、気が付くと大層雨がひどくなったその沛然たる音に耳を向けながら、岸谷達夫の話が正眼に構えた理づめで攻めてきて降参する他はない苦しさであるのに、心中ひそかに

反撥を覚えてきた。Ｆ―が狂った復讐心で花輪恒雄を絞殺したとか、「万盛館」の痴情の犠牲になったとか、そういった無茶さの方を私はとりたい感じであった。

花輪恒雄が縊死を遂げた時、明子は急を兄の花輪盾雄に報じ、花輪盾雄はすぐ飛んできた。そして弟のむごたらしい死体に向ってしばらくの間なにやらブツブツ言っていたかとおもうと、プイと出て行って了った。いつまでたっても戻ってこない。明子は男手を求めて添田秀三郎に打電した。添田秀三郎は花輪恒雄と前後して捕えられ、彼よりずっと早く出てきた。「刷同」に岸谷達夫がいた時分、添田秀三郎は岸谷達夫を痛烈に罵っていたが、今では親しく往来していて、二人で明子のところへ手伝いに行った。――花輪恒雄の肉体が今はひとつの小さい骨壺に収められたその前で、俺と添田と明子さんとが首を垂れて追憶談をしていた。その晩の九時頃だったか。岸谷達夫は下からもってきた手紙の封筒を無意識の手附で細く破ってかんじんよりをつくりながら、そう言った。――ずっと姿を見せなかった花輪盾雄が突然ヌッとはいってきたのであった。明子が、まあ兄さんと言わなかったら、花輪恒雄の幽霊かとおもわれる程、そっくり同じ顔容であった。然し兄と知らされると、花輪恒雄より背が低い違いを見ることができ、花輪恒雄の眼といったら実に特徴的に落ち窪んだ小さいものであったがその兄の眼は弟の分をも横取りした如き大きさで、義眼のようなギラギラした光を放っていた。彼はその眼玉で明子をギロッと睨みつけ、勿論岸谷達夫たちには一瞥もくれず、険しい無言のまま机の上に安置した骨壺の方へ歩み寄り、それをむんずとばかりに鷲掴みにした。兄さん、なにをなさるんです。明子は静脈の見える痩せ細った手を彼の腕にかけた。彼は骨壺を犇といった恰好で右胸にかかえこむと、左手で明子の胸をドンと突いた。倒れる拍子に、線香立てがわりの湯呑茶碗に明子の袖がひっかかり、飯を盛った茶碗もろとも、それは畳の上へ無慙にころがり落ちた。パッと立ちのぼる灰から顔をそむけて添田秀三郎が、お待ちなさい、あんまり乱暴じゃないですかと言った。――彼はこの三日間、花輪盾雄の埼玉の家へはるばると、幾度足を運んだかわからないが、相手は全く姿を見せない。待てるだけ待った後、仕方なく棺は火葬場へ運ばれた。そして今まで頑固に顔を出さなかった花輪盾雄の仕打ちに添田秀三郎は口にも出して腹をたてていた。――骨をどこへ持って行こうというんです。彼は怒りを抑えた震え声で言い、花輪盾雄のよれよれの帯をつかんだ。既に狂いのきたと見られる花輪盾雄はなんとも無気味な微笑を添田秀三郎の蒼白の面に注ぎ、そして徐ろに明子の方へ眼を移し、明子が灰だらけの畳の上にうつぶし背中を激しく波立たせて忍び泣きしているのにむけて、鼻をフンとならした。とにかく、坐ったらいかがです。岸谷達夫が言うと、彼は――いいえ、坐りません。そう言うと、その一瞬間前までのきびしい表情とは打って変った、今にも泣きだしそ

うな顔になって岸谷達夫の方へ歩み寄り、――実はです、この可哀そうな仏に私どもの死んだ父や母は一遍も会っていないのです、土に埋めてしまう前にせめて一度でも拝ませてやりたいとおもいます。それは、声とは言いがたいほどの低声で岸谷達夫の耳許へ囁かれ、そして今度は叱咤するような声で言った。恒雄も他人の手で葬られたのでは成仏できないでしょう。

花輪盾雄は歯をキリキリと嚙みならし、添田秀三郎の手を凄い勢いで振り払って、さっと玄関の方へ走った。その音に明子は弾かれたように身体をおこすと、飯粒を踏みつけながら、彼の背にとりすがって行き、たとえようのない悲痛な声で、――お願いですから……兄さん。ええ、うるさい、なにが兄さんだ。既に三和土(たたき)に立った彼は憎悪に充ちた声でそう叫び、ええいと肩を振った瞬間、骨壺が手から抜け出た。

花輪恒雄の灰に化した、骨が三和土の上にパッと四散した。

（一九六三年六月「改造」）

彼岸

徳永直

一

ヨシ婆さんは毎朝、低い軒庇からチロチロと陽がのぞく格子窓の傍で、つくねんと坐っていた。盲縞木綿の鉄砲袖を前の方で掻き合せるようにして、トンボのように小さく束ねた白髪頭髪をジッと俯むけている。二時間でも三時間でも、だれかが声でもかけねば、一ン日でもそんな姿勢でいた。皺でたるんだ眼瞼は垂れさがって黝ずんだ唇はあいたまま、延びすぎた二本の犬歯がつっぱっているために、欠けた前歯のところは黒い穴になって見えた。

そんなときヨシ婆さんはウツラウツラ眠ってることもあったが、それもホンの僅かの間であった。不断に右腕が神経痛のために疼いているし、何よりもこの工場長屋は太陽(ひ)のめがささず、腰が冷えてきていくら湯水を呑まぬように気をつけても、すぐ小便を催うしてくるのだった。

流し元で、もう産月ちかいお腹を反っくらせながら、茶碗を洗っている孫娘のユキが、先刻裏口の吹きさらしに煉炭に火をいれてくれたが、まだ浅黄色のキナくさい煙りをたてていて、それが真ッ赤になって室の中に抱えこんでくれるまでには大分時間があった。凹んだ畳の隙きめや、室の隅などから風がゾクゾク忍びこんでくるが、相変らずヨシ婆さんは柔和な笑顔をうかべて、ときどき内懐中から左手をまわし痛む腕をおさえていた。しかしヨシ婆さんの左腕も若い頃からの無理働きのせいか充分にはとどかないので、永いことかかりながら呟やくように、

「なむあみだ、なむあみだ」と称えていた。

近頃は陽脚がみじかくて、最初トタン屋根の庇斜めから少しずつこぼれ、ヨシ婆さんの渋紙色のおでこを少しばかり照らすと、もうすぐ庇の中程から向う屋根に辷り落ちてしまうのだった。

「お婆ッあんは、まるで日向奨みたいいす」

朝の跡片付が終ると孫娘のユキは、内職の編物仕事にかかるまえに、いつもの如くお婆さんの頭髪をとりあげてやりながら、田舎言葉でからかった。すると耳も遠くなっているヨシ婆さんは、やっと「なしてや？」と訊きかえした。

「だっておめえのおでこはお太陽さまと一緒にうごいてるのすべ」

ガクンガクンと、櫛の勢いに、ひきあうのけられながら、ユキが笑えば自分も黒い歯茎をだして笑うのである。

ヨシ婆さんはたしかに太陽に敏感であるが、わずかずつ陽脚と一緒におでこを仰うのけながら、ボンヤリ向い屋根からツン出ている電柱をすかしているのは、今朝はまだ見えない雀の姿を待ってるからであった。ちょんちょんと電線の上を跳ねてくる二三羽の雀が、胸毛をふくらまして囀ずるのを聴くと、お婆さんはその一ン日が救われる気がした。

「……雀はおめえ、お釈迦さまが成仏なさるとき一等さきに駈けつけた忠義者ッしゃ。んだからお釈迦さまがおめえは虫けらなぞ喰わんでいい、米を喰えとお授けになった鳥だでば。そんときお化粧したり、無精したりして間に合わなかった燕とか、鶺鴒とかいう鳥は虫けらばかり喰うようになったのッしゃ――」

ヨシ婆さんは、もう亭主のある孫娘に今でもその話をする。それは非常な確信をもっていてユキが笑い出したりすると、口をすぼめて黙りきってきた。しかし彼女のうすくなった眼にも東京の雀は黒く煤けているようで、故郷でみるあんな焦茶色で胸毛が白く肥った雀はいないように思われる。

この孫娘夫婦のところへ引きとられてから三年になるが、婆さんは少しもこの長屋町に馴染むことができなかった。朝、昼、晩、ビックリするような工場の汽笛が、頭の上で鳴り喚めくと、いまでもそのたびにキョトキョトする。

風がある日は煤煙がどこからともなく舞いこんできて、そッと膝を撫でてもザラザラとわかったし、雨の日は長屋じゅうどこもここも子供の泣声や叫び声がひびいて、ときには仕事にあぶれて酔っぱらった親爺達が、狭い路次を大声あげながら窓格子にぶっつかってゆくし、皿小鉢の割れる音お内儀さんの喚めき声など、いちんちつづくこともあって、まるで船の中にでもつめられて揺すぶられているような落ちつきなさであった。

それに隣近所の人達の肌合が、田舎の人間達とはまるで違っていた。言葉もさまざまだし、人気が荒っぽくて寄りつけない気がしたが、それは孫娘の亭主である松本でも、孫娘のユキでさえが、どうかするとそう感じられた。若い者同士のことだから家の中に神棚一つない無信心さはまだよいとしても、不思議なことは、このペンペン草一本生えないまるで石炭殻で出来たような地べたに、平気で生活していることだった。春のお彼岸が来ようが団子一つ作るじゃなく、隣りのお内儀さんが家ン中のぞきこんでも茶呑み話一つするじゃなかった。お天気がよくたって悪くたって、時間時間にはとっとと仕事に出てゆくし、めざまし時計一つがこの家の中をひっかきまわしているような生活である。その癖孫娘は土曜とか日曜とかをよく覚えていて、そんな晩はきまって夫婦でどっかへ出かけてゆき、お婆さん一人が留守番させられるのであるが、それは何か勝手の違った味気なさであった。

ヨシ婆さんは田舎へ帰りたかった。諦めよう諦めようと思っていても、フッと前後を取り乱したときは子供のようになってユキと争った。

「帰る帰るッて、どこさ帰る？」

孫娘も躍気となって、眼に涙さえ浮べていた。婆さんもそう云われると、帰る家がないことに思いあたるが、強情に歯を喰い反らして、

「ツネの家だって、貞助の家だってありす……」

と云い返した。ツネとは二番娘で登米在近くの佐沼という町に嫁入っていて、貞助とはお婆さんの舎弟であった。

「ほ、ツネ叔母さの家で養ってくれすかい」

「あに、娘の家だでば」

「強えこと、その強さで田舎にいるとき一口でも云えばよかったに」

そんなにひどく争っても、故郷のことだけは諦めきれなかった。

「妾、とっても送ってなンぞいがれねえから。——松本がいい人間だからッて、そんな我儘は云えねえから、帰りたければ一人で帰らッし——」

ユキは半分自棄気味に、半分は自分一人にお婆さんを押しつけて、実の娘達が知らん顔でいる腹だちを混ぜて突ッ放すのだった。

「あに、一人で帰れす」

「ロクに眼も見えぬ癖して……」

「腰に札をつけて貰うだでば」
しかし、そんな処へ松本が戻ってきたりすると、二人とも黙ってしまうのだった。松本はいやな顔こそしないが、ヨシ婆さんにすれば大威張りで「かかりうど」していられる家でなかったから、たとえば朝晩一緒になる膳の前でも、松本がまだ箸を握るまでは、子供のように膝の上に手を重ねているのだった。
だからお婆さんはよく田舎のことを夢みたり、独りで想像したりした。留守番している寝床の中で、いつまでも温まらない両肢をちぢめながら故郷のことを思い泛べる。そこにはヨシ婆さんが住んでいたころは格別気もつかなかった故郷の懐しい出来事や風景ばかりが泛んできた。向岸の村の家が小さく見える程ひろい北上川の流れ、春先になれば、氷塊をつんだ雪解水が増して、泡だつ碧い水の中を仔をつれた鮭や鱒やがのぼってくるし、背後の後世山の雪が黄色く汚れる頃には、麓から真ッ先に炎のように咲きひろがってゆく山躑躅の赤さなどが眼をつぶっていてもちらちらした。川向いの浄行寺の彼岸桜の鷹揚な枝ぶりや、筏をくんでその上に板を渡した一銭橋の揺れ加減や、小娘のころ小荷駄馬の背中に乗って、北上川の土堤を石巻町まで揺られていった憶い出や、宮大工だった亭主がまだ生きて景気よかったころ、小粒の銀貨をザックリ持ち重りする程臍繰ったり、祭礼のとき土地一番の分限者にも負けぬような大絵馬を奉納したりしたことなど。――不思議とお婆さんの瞼の裡に現われるものの中には数々の辛らかったこと、悲しかったことは姿をみせなかった。
ジッと眼を閉じていると夢とも現ともなく、田舎の家でよく土甕の中に塩漬にしておくなめた（鰈の一種）を心ゆくまで喰べている味や、彼岸桜が霞んでいる浄行寺へ黒い角巻をかぶり、新藁の草履を穿いて参詣している自分の姿が現われたりした。しかしそんなときけたたましい工場の汽笛に眼を醒まされると、気疎くボンヤリして、やがて「南無阿弥陀仏」と呟きながら、孫娘夫婦に内密で、こッそり茶棚の隅に飾っている、亭主や亡くなった子供達やの位牌のまえに小さい蠟燭をあげて、四辺りの様子を窺い窺い、暫らくは唇をうごかしているのだった。

二

三年前の秋、ヨシ婆さんは生れて始めて十何時間という永い汽車に乗って上野駅に着いた。手紙で教えられたとおり、ホームの柱の傍にボンヤリたっていると、孫娘夫婦が迎いにきてくれて、それから停車場の人力車に乗せられたが、孫娘夫婦は電車でゆくというので、行李とか莚包みとかを一緒に詰めこんだ車の上で揺れるたんびに呼吸が塞りそうであった。
しかし安心したのは、こんな厄介者が転げこんできても婿の松本はべつに悪い顔もしないことだった。ユキを嫁れ

るときの口約束ではあったが、それでも永い汽車道中での気がかりはそればかりであった。眼がひどくウスいので最初のうちは婿の顔もボンヤリしか映らないので、印刷工であるという松本は青い顔のどっか気むずかしい無愛想な男にみえたが、さればといって自分の茶碗数をかぞえるようなところはなさそうに思えるのだった。それに具合いい事は、朝は六時過ぎには工場へ出かけてゆくし、夜も残業がないときは「労働組合」の役員をしているとかいうことで、殆んど家にいないので、まだ子供のできない孫娘の内職などしている傍らで、ツクネンとしている退屈さえ我慢できれば、案外心配はなかった。

　婿が工場へ出たあとで、ヨシ婆さんは田舎の家をたたんで持ってきた行李や莚包みなどを、孫娘と二人で拡げてみた。めぼしい金目のものは何一つなかったが、それでも永い間の生活に必要だった品物があれこれとあった。まだ亭主が生きていた頃からのこっている環のついた大きな茶釜とか、塗りの剝げた重箱とか、欅づくりの頑丈な針箱とか、つるのついた大きな鉄鍋とか、縄でがんじがらめに結えた梅干瓶とかいうものであったが、そんなものを拡げてとり出すたんびに、ユキは腹をかかえて笑い出すのであった。

「はれまア、お婆ッあんたら、こんなもの妾の家のどこに使ふのッしゃ？」

　孫娘はわざわざ大きな鉄鍋をかかえあげて、ガス焜炉のうえにいきなりおっかぶせてまた笑うのである。

「ほれ見ろッしゃ——鍋さ台所いっぱいになっちまったでば」

　人の好いヨシ婆さんは、孫娘が笑えば自分も笑うのだが、しかし腹のうちでは何となしに淋しいような、心ぼそいものが溜ってゆくのであった。成程ウスい眼を透かしてあちこち見廻すと、田舎の家より綺麗ではあるが、まったく箱の中のようで、流し元は田舎の土間の十分の一もないし、天井には吊るすような梁もなければ、軒先だって一尺と使える場所もないのである。

「こんな役たたずのもの、近所さくれてくればよかったに、嵩ばかり嵩ばって……」

　ユキが白いエプロンを汚さぬように、まるで猫の首でも吊るすようにして、家じゅうを見廻しながらその置場にもてあましているのをみると、ヨシ婆さんも腰を延ばしてたちあがりながらウロウロするのであった。

「あにおめえ、近所さいろいろやってきたでば——、鍬や鎌や、㊁（地主）の男衆さくれたし、お櫃も蓑も、隣りの甚さの女房にくれてきたし……」

　傍で言訳するのを耳も藉さぬ風で、わずかの間に東京者になってしまっている孫娘はやっぱり顔をしかめていた。

「仕様がないねえホンとに、屑屋が来たら売っちまいましょうよ、こんなもの——」

　亡くなった総領娘に似て勝ッ気なユキが、無雑作に縁の

下に押しごんだりしてしまうのを、ヨシ婆さんはボンヤリ見送って、それからそッと室の隅へきてまた坐るのだった。

両手を膝において眼をつぶると、ポッキリ折られたような現在までの思い出がうかんでくる。亭主に先だたれてから七人の子供と一人の孫とを育てたが、三人は亡くし、一人は行衛知れずになっていた。何十年という後家暮らしの間、多くは養蚕や野良の手間どり、元気な頃には男衆に混じって山仕事もしたし、笊をかついで行商などもやってきたが、そんな労働を格別辛らいとも思わなければ、これだけの子供達を育てても、気儘一つ云える養い手もないという自分を、それほど悲しいとも考えなかった。

「お婆ッあんも不倖わせだねす――」

誰かにそういわれれば、「ハイ、有難うがす」と言って頭を下げるけれども、それはいわば相手への感謝だった。

ヨシ婆さんのボンヤリした考えでは、不幸といわれ、不運といわれても、一体どれを指すのだかハッキリしなかった。大酒呑みだった大工の亭主が脳溢血で倒れ、間もなく出来のよかった次男が、奉公先の薬種問屋で脚気衝心で死に、三番娘が東京の紡績工場から骨壺だけ送って来られたりしたことなどがそれだというならば、そんな不幸は何と数限りなくあったことだろう。それはとても数えきれたものではなかった。

総領娘はまだ亭主が生きている時分だったから、土地の一寸した商人へ嫁けられたが、身持の悪い亭主に愛想つかして、もうお腹に子供さえ出来ていたのに自身で追ン出てきて、製絲工場に働きながら現在のユキを産み落したのを、戸籍面は自分の庶子ということにしたものの総領娘は間もなく死んでしまった。二番娘のツネは幸いに奉公先から嫁入りして調子よくいってるし、四番娘のハルは東京の小笠原という華族様に永年奉公したお蔭で、これも主人に親許になって戴いて、芳村という機械職工の嫁になり、現在は神田にある小笠原様の作法道場の番人代りに住んでいるが、長男の馬之助は十何年も以前に出奔したきり、東京にいるとは噂にきくものの何という町に住んでいるやら、どんな稼業をしてるやら見当もつかなかった。ハルの話によれば一昨年の秋ごろ、ある晩ヒョッコリ作法道場へ訪ねてきて、一円なにがしの金をせびっていったというが、そのときも何処にいるとも語らず、ウソ寒いのに袢纏一枚の見すぼらしい風体だったということであった。自分の年齢から繰って、馬之助もモウ四十幾つになる、親爺似で大酒喰らってるだろうなぞと、そんなことが不断に往来しているのであるが、現実にはどの子供も何か垣根に距てられてるようで、手もとどかぬ遠くで別々に生きてる感じであった。

「親子縁が薄いのッしゃ――」

ヨシ婆さんは他人にもそういわれ、自分でもそう思うようになっていた。考えてみれば自分の手許で満足に育てた

のは総領娘だけで、その他はみんな小学中途くらいで奉公に出したり、他国の紡績工場などに出したりしてしまわなければならなかった。そうしなければ飢えるよりなかったからで、孫娘でさえ九歳で村の肥料店へ奉公に出し、ユキは主人の子供をおぶって、小学校に通っていたのである。

それはちょうど孵った蛾のようなもので、沢山の子供は次々に、自分で身の廻りが始末できるようになれば、すぐ手許から飛び去ってしまう。追っかけることもとめることも出来はしない。ユキも奉公先で年期が明けると間もなく、東京へ飛び出していって看護婦になったとかで、稀れには小為替の入った手紙がとどいたりしたが、この孫娘に養子をとって、「かかり子」にしようという彼女の考えは、この場合もやはり水の泡であった。

しかしユキを「かかり子」にする企ては、実は佐沼に嫁入ってる二番娘や、神田のハルの勧めからであって、お婆さん自身からすれば、同じように苦労させた孫娘にだけ厄介になることは心苦しかったし、だから松本からの縁談が手紙で言ってきたときも、六十幾つになる婆を養ってくれという条件は、二人の娘の差金であって、いやユキを嫁にやることでさえ、彼女はホンの決まってしまってから、あとで話をきかされた程度であった。

ヨシ婆さんは本当はもうどの子供の厄介にもなりたくなかった。出来るものなら働きとおしてポックリ死にたかった。東京へ来いと孫娘が言って来、東京へゆけと二番娘が追いたてるように強請(せが)んだときも、もう五体が利かなくなっているからの止むを得ぬ承諾だったのである。

痛む右腕を揉みながらヨシ婆さんは眼をつぶる。東京へ来てから急に弱ってしまったと思う。こっちの食物はうまいが、まるで籠の中に入れられてるようで、喰い拡がっている胃袋だけが石のように重かった。電車や自動車などの激しい表通りには眼がウスくなたって危ないし、ユキは内職で忙しい上に大きなお腹してるので連れて出ぬし、仕方なく故郷の事だけが眼に浮んでくる。北上川をのぼってくるポンポン蒸汽の積荷のあげおろしや、桑畑でいちんち唄がけで働いていたことや、労働は彼女の不幸な思い出を追っ払ってくれるし、食物をうまくしてくれた。山仕事のときなどはモンペの上から脚絆をあて、男衆の相棒をかついで捻じ鉢巻の下からタラタラ流れこむ汗の爽やかさなど——。

「お婆さん、お婆さん」

傍で材料の絲束をひっくりかえしていたユキが、きつい声で呼んだ。

「また眠ってるの?」

「ハ、ハイ」

慌てて声の方角へ眼をあげると、拡げた両手へ、いつものように絲束をかけられた。

「シャンと張ってよ、シャンと」

くるくる絲玉をつくりながら、もつれると孫娘は疳性に

キュンキュンひっぱった。夢は一ぺんに消し飛んで、婆さんは慌てて両手をうごかしながら、ウスい眼をみはるのだった。――

三

軒下三尺ばかりの日当りの悪い空地へ、ヨシ婆さんは近所の省線電車の土堤から抜いてきた一握りの雑草を植えていた。コークス混じりの堅い土は、一尺掘ってもカサカサになっていて、線香をたてたような萱の芽も葉を巻いたまま凋み、頑固な駒ッナギ草の根ッこでさえが、死んだ蟹のように白い手足を抛げ出したままでいる。

婆さんは毎日、それにウスイ眼をちかづけ、手探ぐりに撫でてみるが、皺だらけの経験ある感触では、やはり見込みがなかった。それでも暫らくは小石をどけたり、土塊を揉みホゴしたり、腰をのばして、いくら待っても陽の射しそうもない軒庇から、煤煙で澱んだ春さきの空を眺めいったりするのだった。

「おめえ、よんべ何であんなに大声で喋べったり、笑ったりしていたの？」

家へ入ると、窓ぎわで内職しながら、ユキが訊ねた。

「はれ、何も喋べりやしねえ？」

煉炭火鉢の傍に這い寄りながら、トボけると、

「嘘ばかり言ってるよ。私が何度こずいても眼をさまさないでさ。おらはア松本が眼を醒ましねえかと思って、はらはらしたでばや！」

と、ユキは急所をついた。近ごろは故郷の夢をみるのが殆んど毎晩だったから、孫娘にそう言われると、お婆さんは子供のように愧かしくなった。

「折角東京へよんでやったら、こんどは田舎に帰りたいだなんて、喰べ物一つ不自由させるじゃないのに、松本がきいたら怒っちまうわよ」

「あにも無理に帰らなくてもようがす」

「だって寝言で言ってるじゃないの。――松本だって一緒になるときは、次男だから係累者(かかりうど)はないと云ってたけれど、田舎の兄さんの稼業(しょうばい)が思わしくないし、朝鮮へ出稼ぎに行ったりしてるので、月々三円五円と送ってやらねばならんし、この上おめえが田舎へゆくからッて、とッても十円の二十円のッて旅費なんか出来やしない」

叱られるように、お婆さんは丸くちぢかんでしまう、ユキはかじかんだ掌を、まだ青ッぽい煉炭火にかざしては、忙しく編棒をうごかしているが、小さくなっている祖母をみると、益々苛らだってくるらしかった。

「神田だって姑ばかり怖がっているし、佐沼だっておめえを東京を追いやってしまったら、もう年賀状一本寄越さないじゃないの。そして何かといえばユキはお婆ッあんのお蔭で育ったんだから養うのはあたりまえだなんて。――妾だってハル叔母や、ツネ叔母よりも、よっぽど幼さくから

働らかされたじゃないの」
「そりやそんだ。おめえだってもッと手許におきたかったぺども、連れ歩いちゃ仕事が出来ねえし、餓えねばならんで仕様がなかったどもや。――」
素直にうなずいて、白状するように呟やくのをみると、ユキはこんどは逆にいじらしさが撥ねかえってきて、なんてこのお人好し！　と思うのである。小さいながら養蚕機具店をやり、総領息子は中学校にもやっている佐沼の叔母に、小遣一文せびることが出来ないし、稀れに神田の叔母がつれにくれれば、先方の姑にイビられて、二タ晩と泊らずに戻ってくる。
「かえる、かえるッて妾ばかり責めないで、ツネ叔母や、ハル叔母にも相談してみりゃいいじゃないか。バカ正直だから実子にだって、それッ位が言えないんだよ」
「そんげな訳じゃねえども……」
「だったら、言ってごらんなさいよ」
「ん、いうてみる……」
そんなとき気がつくと、入口ではいりそびれた神田のハルが、赤ん坊をねんねこ背負いして黙って、土間にたっていた。ヨシ婆さんそッくりの背低で、片手に風呂敷づつみをさげ、暇を偸んで来たらしく、生え際のうすいおでこに汗さえ滲ましていた。
そうッとあがってきて、風呂敷包をユキの前におき、背からおろした赤ん坊のお襁褓をとりかえたりする間も気拙くて、三人とも黙っている。
「これ、小笠原様から戴いたの」――
子供の頭越しに手を伸ばして、風呂敷づつみを解いてやったが、ユキは口の中で「すみません」と呟やいたり、鰹節が二本と蜜柑の十個ばかりを、ボンヤリ眺めただけで手を触れない。いつものように臍繰ったらしい皺になるほど小さく畳んだ一円紙幣を帯の間から出して、お婆さんの手に握らせているハル叔母のしぐさにも、気づかぬ風で黙っていた。
「――妾だって一ト月くらいは婆ッさまを、家に伴れてゆきたいと思うんだけれどね、何しろ姑があんなに頑固なんでしょう。それに……」
てんでんが、勝手なところに視線をおいていて、むずかっていた赤ン坊だけが母親の手をすりぬけると、独りで台所の方に這い出していった。――
「それに妾も、小笠原さまに親がわりになって戴いて嫁づいてる身分だから、今更、田舎の親をどうこうするには、亭主との約束もちがうしするもんだから……」
もうそんなことを聴かなくったって判ってるという顔で、ユキは膝までそッぽむけて編棒をうごかし始めた。
――亭主が怖いのは何もあんたばかりじゃあるまいし、と怒鳴ってやりたいくらいであった。
「そいで、お婆ッあまは、どうでも東京がイヤになったんでがすか――」

赤ん坊をひったくって、むりやりおッぱいをおしつけながら、ハルも到々声をふるわせてきた。
「ナニ、いやになった訳ではねえでば」
慌てて襟の中にちぢこめてしまった首をのばして、ヨシ婆さんが弁解するのを、ユキが横合から叱りつけた。
「嘘吐きなさいよ。毎晩、寝言でまでいう癖して!」
そう言われると、ヨシ婆さんは黙って首をちぢめてしまう。
「贅沢な婆ッあまだこと――」
ハルも唇を噛みながら、ヨシ婆さんを睨みつけている。
「田舎にゃ家もない癖して、松本さんが折角自分の親同様にしてくれてるのに」
「だから、おらはァ無理に帰るというのでねえだでば…」
子供のように他愛なく詫まるのだが、ハルは誰にもっていっていいか判らぬ腹だちをぶちまけてしまった。
「何を言ってるのさ。――ホンとにこの婆ッあまときたら、子供たちの苦労も知らないんだから。妾ァ十二のときから奉公に出されたきりで、嫁にゆくんだって針箱一つ買ってくれたじゃあるまいし……」
「おらだッてはァ、亭主にゃ早く死に別れたで何ともはァ……」
「だまんなさいよ、わからずや! ここのユキちゃんだって、みんなそうだけど、娘が嫁にゆくときに簞笥の一本も祝って肩身を広くしてあれば、こんなとき『親でござい』が出来るけど、ッていうのよ」
「………」
もう嵩にかかられればかかられたなりで、ヨシ婆さんがウスい眼をしばたたいて俯むいているのを見ると、ハル叔母は終いには到々声をあげて泣き出してしまった。
「お人好し! わからずや!」
袂を顔におしあてたまま、畳にしがみつくようにして背をふるわせているのを、抛り出された赤ン坊がキョトンとした顔色で眺めている。ユキは編棒持っている手を硬わばらしたまま、ヨシ婆さんは眼をつぶったきりで思い思いに黙ってるよりなかった。
四時になると、ハルは赤くなった眼を拭きながら慌ててたちあがったが、ユキが赤ん坊のうしろからねんねこを着せてやりながら、格子戸までついて出ると、ハルはそこで思い込んだ顔つきで振り返った。
「あんた、片道の汽車賃だけ出来る? 妾が婆っあまを佐沼まで送っていってくるけど……」
「………」
「一年か、せめて半年でもね。妾がツネ姉さんを口説いてみるわ」
ハル叔母の生活から、それだけのことをさせるのは、ユキにも一寸怖い気がしたが、自分にもとても出来そうでないと考えると、頷ずくともなしに黙っていた。

四

ハルに伴れられて、ヨシ婆さんが故郷に旅立つのは、もう東北の遅い桜がすっかり青葉になってる頃であった。
汽車が小牛田を過ぎ、瀬峯という小駅で登米行の支線に乗り換える頃から、ヨシ婆さんは子供のように浮き浮きし始めていた。軽便鉄道の小さい箱の中は、薪や木炭など焚ける囲炉裡が切ってあって、流石にもう火はなかったが、乗客はやはりそこを中心に集っている。草鞋がけの繭商人や、生絲工場あたりの女工らしい娘やが、短かい停車駅毎に騒々しく乗りこんできては土地訛りの高声を抛げすてて降りていったりした。
「いまのは豊里の嘉吉やんでねえすか？」
懐かしい田舎訛りをききつけたお婆さんはキョトキョトと顔をうごかしながら、どうかすると傍で話している声の中に割り込もうとする風だったが、そのたんびにハルに小突かれて慌てて口をツグむもののやっぱりニコニコしていた。
「中沢が何というか、妾が話をつけるまでお婆さんは黙ってて頂戴！」
佐沼という駅で降りると、ハルがそう云った。中学校と女学校が四五年前に出来てから急にひらけた町で、お婆さんの生れ在所登米まではもうすぐだったが、ハルに手を引かれて歩きながら、ヨシ婆さんも次第にさっきの浮き浮きした顔色を失っていた。娘の嫁入先ではあったがこれも奉公先の主人の世話で嫁ずいていて、二十年このかた滅多に足踏みしたことはなかった。
「中沢蚕具店」と、浅黄暖簾のかかった店先にたつと、ハルが他人行儀に声をかけた。しかし田舎風のだだ広い間口は森閑として、乾いた藁の匂いだけむっとしていた。桑切機械や、蚕座やが土間に積みあげてあって、奥の方で子供達のうるさく泣きさわぐ声がきこえる。——
ハルが帳場わきの暗い土間を、独りで台所の方へいった間、ヨシ婆さんは杖をかつぐふうにして、蚕座の蔭に蹲がんで待っていた。
「はれ！　婆ッあまを、何処に？」
やがてきき覚えのある二番娘のツネの声が、子供の泣声に混じってきこえた。お婆さんも思わず顔をあげたが、障子が少し軋んだ音がしただけで、ツネはすぐに立っては来なかった。娘達の話し声も、あとは低くなってしまって、お婆さんはじいッとしているよりなかった。
「婆ッあま、兎に角こっちへ上んなし……」
永い時間経ってから、これも乳呑子を抱いたツネが顔をのぞかして、それは一寸も弾みのない声で言った。
表間口に似合わず、畳も唐紙も荒れ放題な座敷へ通ると、小さい行李や信玄袋と一緒に婆さまを坐らせて、娘達はまだ話している。どういう落着になったのか、ヨシ婆さ

んには見当つかないが、話の折れめ折れめにツネが、「婆ッあまの養い手は松本だからね」と念を押していた。
ハルも殆んど話してくれず、夕方になってからまるで置き逃げでもするように、無理無理東京へ帰っていったが、別れるときたった一言、
「兎に角、ユキと二人して幾らかでも金を送るからね。この中沢さんは恰度、旅商いに出てるというし、手紙ででもまた相談するから……」
と言っただけであった。
ツネはすッかり世帯やつれしていた。死んだ親父に似て姉妹じゅうでも一番器量よしだったが、お婆さんの古い記憶に残っている面影はまるでなかった。ツネに会ったらば話そうと心組んでいたあれやこれやも、面と向と向ってみるともッと険しいものが遮ぎっていて、二番娘もまるで他人のような気がした。
「おめえ、ユキに追ン出されたんでねえすか？」
翌る日になっても、ツネは執拗く訊ねる。
「いんや、そんな訳じゃねえだてば……」
「だら、何だッていべきところさいねえのッしゃ――」
「………」
そう追求されるとヨシ婆さんは、終いには口をモグモグさせるだけで、やはり田舎が恋しくて帰ったとは、とても言えなかった。三日経ち四日経っても、お婆さんは汽車の中で着てきた汗くさい単衣をそのまま着ていた。ツネは子供が沢山いて、手が廻り兼ねるせいもあったが、行李の細を解くことは、明らかに不在の亭主に気を兼ねて、手を触れないようにするのだと思った。
中学に上っている長男の他に、女、男とりまぜて子供が六人もいる、間口の広さに似合わず暮し向きが楽でないことは、お婆さんにも気がつく程であったが、夕飯のときなぞ、そうッと末席の箱膳に坐ると、二番めのお老成な女の子がお給仕しながら、麦ばかりの飯をちょッぴり盛って、
「婆やん、これ二杯めでがすぞ」
と、叩きつけるようにした。どの子供もツネに似ていて大柄だが、殊に長男などは亡くなったお婆さんの亭主を憶い出させるほどで、のびてくる頤のへんなどそッくりだったが、しかしこれが血をわけた自分の孫だと思うには、何か越えがたい垣根がある気がした。
「これさ、乱暴するでねえてば、おめえの婆ッあでねえか」
悪戯盛りの小学校にあがっている男の子がものさしを振りあげて、お婆さんのトンボ頭髪を殴ったりするとき、傍からツネがたしなめたりすると、中学の霜降服を着た長男までが、一緒になって笑い出す。――
「止せやい、こんな汚ねえ婆ア」
そんなとき、さすがにヨシ婆さんのウスい眼頭にも生ぬるいものがこみあげてきた。
五体さえ利くなら、と思う。裏へ出て垣根をぬけ出る

と、もうそこには田圃で、植えつけたばかりの稲苗がたっぷりな水の中で首をおよがせながら、浅い萌黄色になって遠くまでつづいていた。草や木はポックリ朽ち折れるまで子供の世話にならずに済むのだが、人間はどうしてこう罪深く出来てるだろうかなぞと考えながら、眼庇にせまっている後世山の頂きや、ボンヤリ霞すんで見える自分の生れ在所の村の方角などをヨシ婆さんは飽かず眺めていた。

半月ばかり経って、田舎廻りの商売から中沢が戻ってきた。ゲートルに地下足袋穿きの小柄の男で、眼玉の大きい尻上りの声を出す、向うッ張りの強い東北風の商人であったが、声をききつけてツネが飛んで出ると、ヨシ婆さんもいそいで背後の方で、ぺったり頭をつけて「お帰りなんし」と挨拶した。

中沢は地下足袋を脱ぎながら振り返って、ジロッと見ていたが、不機嫌に黙りこんで奥へ入ってしまった。ヨシ婆さんは店へ坐っているのは恥ずかしく、さらばといって奥へ戻るに憚かられて、閾越しに身体を浮かせていると、とたんに長火鉢のむかうで、大きな声がした。

「この人、どこの婆ッあまだね？」

それまで亭主の傍に引ッ添うようにして、あれこれと婆さんについて説明していたツネの低い声が、それで一ぺんに断ちきられてしまった。

「ナニ、俺らおめえを嬶アに貰ったが、婆ッあまを貰ったおぼえはねえぞ」

ガチンと、煙管をたたきつける音がした。ツネも継穂がなく俯むいていれば、夕飯をたべていた子供たちも怖びえたように、ポカンとこっちを眺めている。――

ヨシ婆さんは身の置きどころがない気がして、手さぐりに土間の草履を穿くと、暗い裏庭に出てきたが、母屋からは中沢とツネの声とが益々たかく入り乱れてきこえた。

「おめえも一緒に出てゆけ！　婆ッあま伴れて出て失せろ！」

「あい、出てゆくとも……」

やかんを抛げつけたらしい音と一緒に、乳吞児の疳だかい泣声も混じってきた。ツネのふるえ声と一緒に、障子がガタビシぶっつかる音、大きな子供達の「母ちゃん、母ちゃん」と叫ぶのまできこえている。――

暗い物置小屋の傍にしゃがんで、しっかと杖につかまりながら、ヨシ婆さんは顫えていた。

四五日経って、ツネはお婆さんに信玄袋を背負わして、登米在のタマヨという後家女のところに伴れていった。一里あまり野道を歩く間も、ツネは沈みこんで何事も語らなかったが、タマヨ後家と永い間話しこんだ後、

「何事もタマヨさに頼んであるから、その通りにしてけろ、おらも自分の力じゃこれより出来ねえッから」と、そう言って、一人で佐沼に戻っていった。

タマヨ後家はいわば女三百代言で、筆は握れなかったが

弁舌が達者なので、一寸した部落の出入事を引受けては暮していた女で、その一ト晩、お婆さんを自分の家に泊めると、翌る朝早く怒鳴り起した。
「さ、これから東京さえぐんでがすぞ、ほらほら、さッささと仕度さッし――」
まだ暗い囲炉裡の傍で、男のように立膝して焼酎ひっかけながら、タマヨ後家は兆巻頭髪の小髻に光っている天保銭ほどの禿を真ッ赤に染めていた。
「おらが、えぐんですか？」
ボンヤリ囲炉裡の傍へちかづくと、
「何て仏様だ、おめえがえがねえで誰がえぐのッしゃ、さ、おらも汽車賃だけで頼まれた仕事だでば。あんまり手間どらせないでけろ――」
骨太で大柄な四十後家はそういって立ちあがると、色気も恥もない風で、素ッ裸の腰へ水色の腰巻をまきつけながら、鼻唄まじりで支度をはじめていた。

五

お婆さんは孫娘の家が東京のどの辺だったか、三年住んでいたが皆目記憶になかった。やっと工場長屋に入ってきて、タマヨ後家が田舎訛りの、それも路次じゅうに響くような大声で訊ね廻る背後から、ハラハラしながら歩いていた。

「松本さん、こちらでやすか？」
古びた格子戸のツイ鼻ッさきに、ひょいと振りかえった束ね髪の、青い顔したユキの顔をめつけると、タマヨ後家はガラガラと開けた。
「はアれまあユキやんか、何て家がコチャコチャとあることッだか、ホンにやっと探がしあてたでば……」
挨拶もなくペッタリと、上り口に腰をおろして、埃りを浴びた腰巻のへんを手拭いでバタバタ払っている。ユキは痩せて、両手に赤メリンスにくるんだ孩児を抱いていたが、ギョッと眼をみはったまま、つるされたようにたちはだかると、格子戸のむかうに入りそびれたまま杖に縋っているヨシ婆さんを、呼吸もつかずに見詰めていた。
「ま、あがらして貰いすべ。旦那居すか？」
押しの太さで相手を射すくめながら、ユキの肩越しに室の中を覗こうとしたが、ユキは見知っているこんな人間にお婆さんが伴れられて来たことをそれと察したか、顔をひっつらせたまま動かなかった。
「婆っあま、暑いとこ立ってねえで、こッちさ入らッし、娘の家に入るに遠慮することねえだでば。――なアユキやん」
ヘンに笑いかけられると、ユキは逆上したようにカッとなった。
「だめすだめす婆ッあま。一と足だって閾を跨ぐことならん」

タマヨ後家を押しどけて、土間に跣足でとび降りると、格子戸をピシャッと閉めてしまった。「ホウ、強えこと――」いくらか呆気にとられた風で、タマヨ後家は振りかえったが、そのとき昼寝していたらしい松本が、ノッソリと猿股一つで顔を出したので、いそいで裾をおろし、大きな身体を障子にぶっつけながら、叮嚀な挨拶を始めた。
「お初でござりやす、中沢一郎の代理でめえりやしたですが、――」
松本は狼狽てて着物をひっかけたり、団扇や座蒲団をだしたりする。孩児を抱いたまま、モウ洒ア洒アと陣地を占めた風で落ちついて喋べっている客の横顔を睨みつけているユキに、茶を淹れてこいといいつけたりしながら、「はア、はア」と頓珍漢な返辞ばかりしている。
畳の赤ちゃけた室の中は、まだすッかり産後の日が明けてないらしく、小さい子供蚊帳と一緒に寝床がのべてあるし、押入れとならんだ三尺床には小さい本箱や茶棚がおしこんであって、油じみた菜葉色の作業衣が柱からブラさがっている。箪笥一本ないそんな室を、タマヨ後家はぶ遠慮にジロジロ見廻しているが、喋べることだけはぬけぬけしていた。
「お芽出度うがす。赤さんいつお産れやした？」
「は、いつだッけな？　あんまりお芽出度もねえんで、親爺ア失業したのに、赤ん坊だけは勝手にとび出しゃがって……」
「会社、お辞めしたんでがすか？」
「いえ、馘首になったんで、へへへ」
人が好さそうに松本は笑いながら、客の肩越しに女客の方を見ると、ユキはまだ上り口のところに、石のように固くなって坐っていた。
「ごめんやして――」
タマヨ後家は帯の間から「朝日」を出して男のように喫いながら、相手をもう呑みこんだ風で、勝手に膝をくずしていた。
「どうぞどうぞ、暑いからお脱ぎなすッて」
気がついて松本がすすめると、
「じゃ、勝手でやんすが」
と、臆面もなく肌脱ぎになり、脊中のお灸がのぞけるくらい、「サテ」という顔色で首をのばすのだった。
「実は、その厄介者の婆ッあまを伴れてめえりやしたが………」
「は」
そのときやっと呑みこめた風に、松本も顔をあげたが、小鬢の赤禿を光らせながら喋べっている客の顔をみていると、些かむッとしてきた。ユキを嫁れるとき、お婆さんを養うという堅い約定があるのだから、この際きれいに引き取って貰いたいというような切口上が、まるで貸借の証文のように権柄ずくでかかられると、自分がいま失業しているという苦しさばかりでなしに腹がたってきた。

「べつに約定なんて訳じゃないんですがね……、尤もお婆さんがいることは媒酌人からききましたし、それでこちらへきて貰っていたんですが、何しろ老人で東京も馴染めないのか田舎ばかり恋しがるんで……」

松本が喋べっている間、タマヨ後家はニヤニヤ笑っているが、そこに理解をいれて聴いてる風でもなく、手拍手に団扇でコッコッ畳を叩いていたが、

「……そうトボけられッと、おらはアまるで子供の使いになりやすがない……」

と云った。松本も明らかに憤った顔をして、客の顔をマジマジと見つめていたが、そのとき孩児を傍に抛うり出したユキが、いきなりタマヨ後家の胸倉をツカんで叫びたてた。

「帰ってけせ！　帰ってけせ！」

青い額をひつらせ、おどろいた松本が制めるとよけい狂人のようになった。呆気にとられたタマヨ後家をグイグイ押出しながら、もう泣き声になっている。

「帰ってけせ！　うちで三年も養ったのに、一ト月かそこらで、三百代言に伴れさして寄越すてんな、――さア帰ってけせ、婆ッあまは一と足だって閾を跨ぐことならん……」

タマヨ後家は剣幕に駭いて、上り口まで押出されてきたが、やがて馴れてる風に、壁際でやんわり身体をかわすと、そのまま立膝になって団扇をツカっていた。

叫び声で、近所の子供や女房やが入口に集ってきて、そこにボンヤリたっているヨシ婆さんをとりまいている。西陽の照りつける路次表で、お婆さんのトンボ頭髪をうつむけたままやっと杖に縋っているのが見える。松本は窓越しにそれが眼に入ると、訳なしに自分が責められてる気がするのだが、中沢一郎のやり方に腹がたってきて、そして実は失業してる苦しさから、もう半年でも田舎におっつけておきたい己れの気持を意識するのがいやさに、よけいと腹をたてていた。

「仕方ねえす、また伴れて戻りすべ、だけんど戻るにしても、汽車賃なしではどもならんが……」

暫らく経ってから、思案を変えたらしくタマヨ後家が笑って言った。

「中沢じゃ汽車賃も寄越さねえすか？」

ユキはどこまでも屹っとなるのを、

「ハイハイ、婆っあまはこちらさ引取って貰うつもりだったし、おらも汽車賃くらいお礼に貰えると思ってなイ、ハハハ、ところがすっかり当てが外れたのッしゃ」

嘘吐け！　という風に睨んでいるユキに、しかし、松本は二人分の汽車賃や弁当代を訊してから、この金を作ってくるように言った。ユキは孩児を亭主に渡すと、手荒く押入れの行李を引出して、嵩張った質草を風呂敷につつみこむと足音荒く出ていった。

「ハハハ、何と因果な婆ッあまだか――」

肩をいれて、旅費をしまいこんだ帯をポンとたたくと、

タマヨ後家は松本夫婦にあてつけるように笑いかけながら、ゆっくりと土間へ降りていった。

それでもユキは歯を喰いしばって怺える風に、やっとタマヨ後家が外へ出ると、ピシャッと格子戸をしめた。そして小突かれるように促がされたヨシ婆さんが、タマヨ後家の背後について、塩たれた白地の単衣の、屈った背に信玄袋をのせてトボトボと揺れながら、やがて路次のむかうへ消えるまで見送ると、いきなり上り口に馳け戻って泣きふしてしまった。

「ツネ叔母の人でなし！　亭主があるのはおめえばかりじゃあるまいし、ツネ叔母の人でなし――」

松本も慰めようがなく、赤ン坊を抱いている片手で、「見っともないからこっちへはいれ」と肩をゆすぶるのだが、そうすればユキはよけいにワッと泣き声をたかめるだけであった。

六

ヨシ婆さんは、一と先ず身の振方がつく間、タマヨ後家の所に寝ていた。下腹がキリキリ痛んで、五体の節々まで脱けるようであった。下痢は帰途の汽車の中でもう始まっていたが、未だ止まらなかった。タマヨ後家と二人でユキの家を探し歩いた途中で、水道の水とか、甘ったるい氷水を飲んだりしたのがアタったのだろうと、ヨシ婆さんは下腹を抑えながら考えていた。昔なら食当りしたって、韮か、せんぶりでも飲めば一晩でケロリとしたが、近頃では「熊の胆」をのんでもすぐには治らない。タガのゆるんでしまった、自分の胃腸を自覚せねばならぬが何よりも辛かった。

「ユキやんて何ぼ人情知らずだか、え、婆ッあま」

家に帰ってからでも、タマヨ後家が散々罵るのを、ヨシ婆さんは「うん、うん」と曖昧に肯いて聴いてるが、心の底ではそれ程人情知らずとは思えなかった。ただ心残りだったのは、ユキが抱いていた曽孫の顔をみないでしまったことだった。

「五体さえいうこと利くなら、何のおめえ――」

タマヨ後家が、佐沼の中沢や、登米町はずれに住んでいる舎弟の貞助のところを往復しながら、身の振方の前後について相談しても、ヨシ婆さんはこんな風に答える。

下痢腹が止まったころ、やっと東京からユキが月々三円、神田のハルが二円、中沢一郎は飽迄知らぬと突っ張ったが、ツネが内密で一円ずつ臍繰って寄越すということで、舎弟の貞助の家へ引取られることに決った。

北国では夏も秋も馳け足で過ぎ去ってしまう。「鬼のような主人でも、足袋と綿入だけは奉公人に仕着せねばならぬ」という蛭子講の前後からは、もう粉のような雪がちらつき始める。

背後の後世山の頂きが日毎に白くなって、北上川の水の

音が急に疳だかくひびき始めるのもこの頃であった。

貞助の家は、北上川のすぐ土堤蔭にあったが、五つ違いの舎弟もひどいリウマチで、暖かいときでも跛ッこひいていた。東京の下谷で番頭奉公をしているという長男の月々の送金と、土地の製絲工場へ通い働きしている末娘の賃銀とで暮らしているが、女房に早く先だたれて、三度の台所や洗濯物まで女がわりにやっていた。若い頃村役場の雇書記をしていたことがあって、ユキやハルからの送金につい ても、姉に代って達者な筆で礼状を書いてくれたが、仕送りが遅れたりすると、姉には無断で催促状を書いた。

ヨシ婆さんは、貯えのない囲炉裡のそだを拾うために、風が激しくない日は町端れから、川下の船着場へんまで出かけていった。伊達様御一門のこの城下町は、お婆さんのウスい眼にも、近頃めだって寂びれたのが判った。土地一番の分限者である造り酒屋、ヘヤの倉庫の入口へ廻っても縄ぎれ一つ落ちていない日が多い。鉄道が石巻から小牛田へ敷けてしまったとかで、川下から登ってくるポンポン蒸汽もめったに船着場に止まらなかった。それでも丸太の流れ木などをめっけたときは、長い縄の端に結えて、熊が鮭を盗むような恰好でひきずりながら戻ってきた。

手足が凍えて外へ出られぬと、ヨシ婆さんは喰べ物のことばかり考える。舎弟が不自由な身体でめしの支度をすると子供のようにそればかり待っている。

「姉さ、おめえあまりガツつくだから、腹こわしちまうんでがすぞ」

囲炉裡のつるした鍋をはさんで、姉弟は喰意地が張って、しゃもじを奪い合うような喧嘩をした。

「おらはアまだ三つめでがす、腸が悪いのは食物のせいではねえだでば……」

「あに、食い物のせいでねえことがありすか、腹は気のせいで悪くなるでねえ」

舎弟は婆ッあまから杓子をひったくって、鍋の中を掻き廻す。色の真ッ黒気な、大根の乾葉を刻んだのと、皮の剝れたばかりの麦の雑炊がすこしばかり、鍋の底で塩っぽく焦げついていた。

しかし争った揚句、ヨシ婆さんに大人心が甦えってくると愧かしくなった。そして心の底から、若い時分から喰い拡げてしまった自分の胃袋を情なく思ったが、同時にもう食物が食べられぬという人生は、死んだも同じだと思うと味気なかった。

あまり餓じいときは舎弟の眼をかすめて、裏から川土堤へ脱け出る。トンボ頭髪を雪に染めながら船着場にゆくと、荷揚げのときにこぼれる大豆やいんげんを拾って、前垂れに忍ばせるが、近頃は昔のようにこぼれていなかった。

途中で疲れてしまって土堤に蹲みこんで、永いことじッとしていることもあるが、雪も歇んで雲が切れ薄す陽がさしてくると、向う岸がすッかり見えてくる。さだかではな

いが、隣り村の家々が霞んでちらつく。ヨシ婆さんはふッと向う岸にある浄行寺に参詣しようと思ったりする。藁草履にかがと紐をつけて、長い一銭橋を渡りかけるが、半分までゆかぬうちに、筏を脚にした橋は波と一緒にゆれて、足がすくんでしまう。——

「お詣りすか、婆っあま」

馬など引ッ張っている土地の人が声をかけると、ヨシ婆さんは欄杆にしッかり掴まりながら声の方角へ人の好い愛想笑いしてみせるが、到々渡りきれない向う岸の、それらしい甍(いらか)へむかって念仏を称えていた。

旧の正月も過ぎ、春の彼岸に入ったが、今年はいつになく寒さが、こたえて、めっきり身体が弱ってきたのを感じた。後世山の頂きは白くても、毎日灰色の吹雪が北上の川ずらを見えなくしても、上げ潮どきには水の色が少しずつ黒さを増し、雲が切れた日などは氷が亀裂する音を、耳ざとく聴きつけることが出来た。「暑さ寒さも彼岸ぎり」だと四五年まではまだ元気に言えたのだが、今年はいつまで冬がつづいて限りがないように思われた。

囲炉裡にかぶせた櫓炬燵に、丸く小さくなっていても、破けた壁や土間から冷たい風が忍びこんでくるので、ヨシ婆さんは益々小さく丸くなった。冬になれば不断に痛んでいる右腕をさすりながら、疲れてくるとウツラウツラした。夢とも現ともつかず、何か喰べているようなそんな気がする。——そんなときフッと眼が覚めると、ヨシ婆さんはわれにもなくお尻を汚してしまっているのに気がついた。

「もうろくしちまッて、——おのれの尻から出るのに気がつかねえすか」

舎弟に炬燵の中から引ッたてられながら、叱られるとヨシ婆さんは子供のようにビクビクふるえていた。

七

ある夜、もう暁方ちかくであった。ヨシ婆さんは永いこと寝床で温まらなくていたが、いつしか手足が痺れたように疲れてしまって、やがて行衛不明になっている筈の長男の馬之助と面会しているところだった。いつか神田のハルから聴いたように、袢纏一枚でウソ寒そうであったが、傍らにきれいな花嫁がならんでいた。その嫁どこから貰ったんだと訊ねると、川下の船着場で拾ったんだと長男は答えた。よく見るとそれは成程豆俵のようにも見えてきた——しかし痺れた両肢の硬直した痛みで、夢が消えるとお婆さんはハッとした。お尻のへんがヒャッとしていて、手をやると寝巻をとほして蒲団の上に敷いているボロまで濡れていた。

ヨシ婆さんは急にふるえてきた。ウスい眼をあけて闇の中をすかすと、怖い舎弟の貞助が、娘とならんで上り口へ足をむけて眠ってるのがボンヤリ判る。戸外では風が鎮ま

って、土堤上の川の水音が、雨でも降ってるように冴えていた。
永い間モヂモヂしていた後、そっと起きあがるとボロを抱えて壁を手さぐりながら土間に降り、掛金一つの板戸を開けた。戸外は霜柱にうきあがった砂地が銀色に光って、月も落ちた暗らさであったが、見当はついた。片々の草履を穿いて、濡れ汚れた寝巻に足をからまれながら川土堤を這うようにのぼっていった。
寒さはもう感じなくなっていた。川の水面にはすこしも靄がなく、昼間のようにはっきりと白かった。泡だちもつれあって流れている水は、むしろお婆さんには賑やかに見えた。幼ないころからよく知っている川土堤を、こんどは石塘に沿うて水際に降りていった。その岩をめぐれば大きな丸石がある。丸石の下には自然にできた石段があって、水際までは干潮どきでも手を伸ばせばとどく、——と、お婆さんの頭脳にはハッキリしているのだが、凍えた五体だけがいうことをきかなかった。
満ち潮どきらしく水が石塘にひたひたと寄せているのが見える。岩につかまり、やっと石段に片足をおろすと、抱えたボロを持ちかえた。洗っておけば舎弟に叱られずに済むだろう、——ヨシ婆さんはただそれだけを考えていた。ボロの端はもう水に浸かって、も一つの足をやっと浮かしたが、それがまるで他人の足のように、見当はずれの石に躓いてしまうと、急に身体が中心を失った。
ふざけて、誰かがうしろから押したように感じて、ぐるッと川面が浮きあがると鼻ッさきにつかえた。何か固いものがコツンとぶっつかって、瞬間、お婆さんはくすぐられでもしてるように「はァれ!」と、かすかな声をあげただけであった。
潮はすこしずつ満ちて、水は石段の上までひたひたと洗っていた。対岸の土堤がしだいに姿をあらわしはじめ、水面も仄明るく乳色に染まりつつあった。ヨシ婆さんの屍体はボロ切れと一緒に、一間ほども川面にさまよい出ては、また波に押し返され押し返されて、夜が明けてからも石塘の下を漂っていた。
それは霜のつよい暁方であった。

……………………………………

最初に、ヨシ婆さんの屍体を発見したのは、きょう彼岸の中日で、隣村へ出かけてゆく町の商人であったが、報らせをきくと、舎弟の貞助は跛をひきながら駈けてきて、川の中から抱えあげた。
よけい小さくなったようなお婆さんの屍体は、町の警察署から巡査や医師が来て検視が済むまで岩蔭におかれたが、自殺でないことはすぐ判明した。額のやや右寄りに、二銭銅貨大の、皮膚がすこし破けて血が滲んでいる紫色の斑点が致命傷で、だからヨシ婆さんは水一滴も呑んでいなかった。
電報で、東京からユキと、神田のハルは、その翌日にな

って、めいめい子供をおぶって駈けつけてきた。
一間きりない狭い家の中に、近所の人が四五人来ていて、小さい粗末な棺の前には、まだ枕経もあげてないらしく、とぼしい線香の煙りが二筋三筋たゆたっていた。棺の傍に佐沼のツネも平常衣のまま子供を抱いて坐っていたが、背の子供もおろさずユキとハルは棺の蓋を脱って見た。硬直もすぎて、ヨシ婆さんは子供のように小さく膝を折り、藁の中で手を合せている。白木綿を買う金もなかったのか、仏は東京から追い戻されたとき着ていた白地の単衣で、首からじゅずをかけていた。
ユキは怺えるために怒ったような顔になってじっと見つめていた。両眼も柔かにつぶり、しまらない唇のまわりも皺がたるんで笑っているように見えたが、おでこの傷口をみると自分が突き刺されてるようで、ユキは苛らだちながら顔を反向けて、むずがる背中の赤ン坊の尻ばかりたたいた。
「ちょいと、顔貸して呉っせ」
葬式費用について相談するために、貞助に呼ばれて、ツネとハルとユキとが、裏戸口の傍にしゃがんだ。貞助は不自由な身体で、一人で、仏の湯灌をツカわせたり、お寺へいったり、夜伽をしたりして、鰯のような眼をしていた。
ツネ叔母とユキとは、まだ顔を合わしたときから口をきかなかったので、ハルがひとりで喋べるはめになっていた。
「ユキやん、松本はこねえすか？」
黙っていたツネがそういうと、ハルが仕方なく「何しろ遠いし、それにやっと近頃入れた工場でなかなか休めないそうでね」と宥め顔に言ったが、こんどはユキがふるえ声で言った。
「中沢さんどうしたの？　自転車なら三十分もかからないで来られるじゃないの？」
しかしツネも返辞しなかった。ユキは憤った顔をかくしもせず、用意して来た拾円紙幣を一枚、貞助大叔父に渡すと、さっさと家ン中に戻って棺の傍へ坐ったが、腹だちのために悲しくとも何ともなかった。
お婆さんの屍体は、浄行寺の墓地に葬ることになっているが、昨日から何度足をはこんでも、住職はもちろん番僧もきてくれず、やっときょうになって十二三歳の小僧坊主が、大きすぎる法衣の袖をたくりたくり、引導をわたしに来た。
茶碗に白飯を丸く盛って、箸を真ッすぐ突ったてたのが、風呂敷をかぶせた蜜柑箱の上においてある。造花一対なく、露き出しの棺の前で、小僧坊主は小学校の読本を読むような、フシのない声でお経をあげている。その背後に従いて貞助、ツネ、ハル、ユキと順に並んでいるのだが、お経は調子ッぱずれて、それにときどきひっかかったりすると、座は妙に現実的に白ちゃけて、とげとげしいものがツんでてくる感じだった。

ユキはお婆さんを殺したのは自分のせいだと思うのがいやだった。それで頻りとツネ叔母が憎くかった。しかしツネ叔母はお前が追い返したせいだとでも言いたいのか、これも怒った顔でツンとしていた。ハルはハルで、むずがる赤ン坊よりも自分の方が苛らだっているらしく何度も座をたったりしていた。

お経が一旦終って、小僧坊主が団子をたべている間、近所の人達がお念仏を称えたり、ヨシ婆さんの生前について話したりした。ヨシ婆さんは好い人だったとか、不運だったけれど、現世の苦患はすればするだけ後世では酬われるとか。——

「ホンに生きながら仏様だったでは、——その証拠に見ろッしゃ、彼岸の中日に往生するなんて、万人に一人とねえこッでがすぞ」

だれかがそういうと、ホンとにこの偶然に駭いたように、誰もかもがお念仏を唱えはじめた。するととげとげしい空気が瞬く間に変って、ツネもハルも、てんでに子供の頭に顔をおっつけたりして、大きな声で泣き始めた。「南無阿弥陀仏」「南無阿弥陀仏」という声がしだいにたかくなって、ユキもごくッと咽喉がせぐりあげて来た。それは何もかも許されてしまうような、お婆アさんの不慮の最期も、自分の突き刺されるような心の傷みも、一切合切が忘却してしまうような不思議な空気であった。——

ユキも、やがて止め度なく涙を流し始めていた。

（一九三六年七月）

綴方教室 抄

豊田正子

困っていた頃の事（第一部より）

去年のことでした。私の家はずいぶん困ったことがありました。ある朝早く、父ちゃんは、しょうかいじょへいきました。私は母ちゃんのお手つだいをして、ごはんの支度をしていると、父ちゃんは、「ちきしょう、今日も、はずれやがったよ」と、元気のないこえでいいながら、うらの方からはいって来ました。そして、お勝手へはいって、「おらあ。明日だ」といって、又おぜんの方へかえってきて、「今日は、たった二十名しか出なかったんだからな」と、さもがっかりしたようにすわって、うでぐみをしてかんがえこんでいました。

稔ぼうと光ぼうは、二畳でぐうぐうねていました。私は、今日こそとうろく当るだろうと思っていたのにと思いながら、おちゃわんをはこびました。なんだか、仕事が、いくらやってもやっても、すこしもはかどらないような気持でした。その日、父ちゃんはどこへも仕事にいきませんでした。

そのばん七時ごろ、ねようとしていたら、母ちゃんはうらの方へ私をよんで、「明日になったらたくさん買うから、今日だけは、お米をこれだけ買って来ておくれ」といって、五十銭銀貨一つと、今日父ちゃんがしょうかいじょでもらってきた、お米のふだとをよこしました。米のふだは一人に五銭ずつで、家では五人いるから、五枚で二十五銭です。

私は、ふろしきと、お金と、ふだをぎっちりつかんで家を出ました。買ってきて、うらの方へいって母ちゃんにわたすと、母ちゃんはさもうれしそうに、「どうも、ありがとう」と言って、その米を半分とちょっと出して、うらの井戸へとぎにゆきました。私は、それからまもなくねてしまいましたが、ねてからも、なんだか、なみだが出そうでたまりませんでした。

お米を買ってくる時は、はじめはとてもいやでしたが、だんだんなれてくると、知っている近所の人が、「それ、なあに」ときいても、「ぬかみそをつけるに、ぬかをもらって来たのよ」などといって、ごまかすようになりました。あとでそれをかんがえると、お米を買って来たことが、みんなにわからないでよかったと思いました。

そのあくる日は、父ちゃんはしょうかいじょへいったら、水道の仕事にあたったといってよろこんでいました。おまけに、浅草の平田さんの家から、仕事があるから来てくれという手紙が来ました。私は、うれしくてたまりませんでした。母ちゃんだってよろこんで「この分なら、いい年とれるぞ」といっていました。

それから三四日の間は、とてもげんきよく平田さんの家へかよって仕事をしていたのでしたが、仕事がすんでかんじょうを取りにいって、その時自転車をぬすまれてしまったのです。父ちゃんは、「三円や四円のかんじょうもらったって、大事な自転車をぬすまれてしまっちゃ、なんにもならねえ」と、とてもがっかりしていました。

それから自転車をかりたり、稔ぼう等にかすりの着物をかってやったりして、お金が少ししかありませんでした。私の着物は正月のきわになって買ってやると言ったので、私は買ってくれるまでまっていました。

くれ近くなって、池戸さんと父ちゃんは、立石のブリキ屋さんから、えきの仕事をたのまれて、あぶない屋根ふきまでして、十円ぐらいの仕事をやっただのに、かんじょうは、たった三円ぐらいしかくれなかったそうです。

父ちゃんと母ちゃんが、

「お雪、困っちゃったい。うかうかしていると、向うのかんじょうが、あぶねえぜ。いくらいったって、も少しも少しで、なかなかくれそうもないもの」

「大へんだね。もし、くれなかったとしたらどうしようね」

「おれ、はじめっからへんだと思ったのよ。はなに三円くれる時、これでいいんですねといったんだろ。いいなんて、へんだとは思っちゃいたがな」

「ああそうだ。きっと、みんなかんじょうをつかいこんでしまったんだよ。それで、いいかげんのこといってるんだな、どうしようね。これじゃ、年もとれやしないよ」

などと話し合っているのをきいて、私は、くやしいような、かなしいような気持で、頭がくちゃくちゃになってしまいそうでした。そのお金で、私の着物を買ってくれるつもりなのでした。私は、また着物が買えないのかと思って、かんがえこんでしまいました。光ぼうは、あまり小づかいをつかわれないもんだから、すねてばかりいてしょうがありませんでした。父ちゃんが、

「こんなに、子供の着物まで、まんぞくに買えねえんだからな」といってため息をつくと母ちゃんは、

「着物どころか、口の方がしんぱいだよ」といってため息をついていました。

稔ぼうは、うちの困るのも知らないで、お正月には、たこの大きいのを買って上げるんだとか、カルタを買うんだとか言っていました。私が稔ぼうに、

「お正月、そんなにうれしいか」と聞いたら、「うれしい

さ、いろんなもの買うんだもの」と言って、ニコニコわらっていました。

あるばんでした。父ちゃんが、母ちゃんに向って、「正子の着物、どうしようか」と、こまったように言っていましたから、私は父ちゃんに「あたい、着物なんか、いらないよ」といいました。私は口ではそう言ったけども、心の中では、ほしくてほしくてたまらなかったのです。

三十日ごろだと思ったが、うらわから手紙が来て、父ちゃんがかんじょうを取りにいきました。父ちゃんは、かえって来てごはんを食べる時、二円五十銭だして、

「おれがな、ハンダとコールタと手間で、二円だっていったんだ。そしたら、ああそうだ、その前に、自転車かっぱらわれたことや、あっちのかんじょうがうまくとれねえってことをみんな言ったんだよ。そしたら、お気のどくだっていって、五十銭よけいにくれたんだよ」と、とくいそうに言って、お金を母ちゃんにやりました。

三十一日の夜は、父ちゃんも母ちゃんも、おそくまでおつかいやなんかをしていました。よく朝になって見ると、父ちゃんたちはニコニコしていました。私は、昨日まであんなにかんがえこんでいたのに、今になってあんなにニコニコしているなんて、いくら元日だってへんだと思いました。これはきっと、どこかでお金をかりたんだなと思っていると、母ちゃんが水をくんでかえってきて、

「正子、げた買ってきたよ」と言いました。私は、「あアら、うれしい」といいながら、たもとの着物を出して着ました。たもとのといっても、二年のおわりの時こしらえた古いメリンスです。私は、古い着物を着て学校へいくのが一ばんいやでした。

困っていても正月はまだよかったのでしたが、七日まではお金がちっともはいらなかったものだから、うちはよくよくびんぼうしてしまいました。七日すぎてからは、父ちゃんの仕事が少い上に、雨だの雪だのふったものですから、なお困ってしまって、お米を買う金もなくなってしまいました。私は学校で食べさせてくれなかったら、おべんとうも持っていけなかったかもしれません。ほんとうに、そのころを思うとかなしくなってきて、綴方にもかけません。（十一歳）

お勘定（第二部より）

朝、家を出る時、母ちゃんは、「正子、きょうは二十八日だからお勘定だろ」と言った。私は、「そう、今月は三十日だから、たぶんきょうくれるよ」と言って、小雨がしょぼしょぼ降っている外へ出た。ああして聞くくらいだから、きっとお金がないのだろうと、私は道々考えながら歩いた。

その日、四時半頃であった。誰かが私の隣りにいた八重

ちゃんに向って、「あんた、今日お勘定ね」と言った。八重ちゃんは、いつものうすのろのような調子で、「うん、でもね、何だかね、明日になるかも知れないんだってよ」と言う。私はみんなまで聞かない中に、
「あら、今日じゃないの、厭だなア、困っちゃったなア」と言った。あんまり驚いたように言ったので、後できまりが悪くなってしまった。八重ちゃんは、「あたいは、いいや、お部屋だから小遣いは三円ときまってんだから」と、のんきそうに言っている。私はお部屋の人がうらやましいなと思いながら、黙って仕事をしていた。
　五時をちょっとすぎた。いつもならミシン部や、機械場の係の人が小さいボール箱にお勘定袋を菓子折の様にならべて、事務所に近い仕上場を通って行くのが、今日は誰も通らないので心配になった。私はどんどん針の進んでゆく電気時計を、何度も見ながら仕事をしていた。反物のつなぎ目をほどいていると、そばに誰かきたようなので、見ると、マキエちゃんが、うす黒くよごれた手拭いを首にたらして、両はしをひっぱってつっ立っている。
「どうしたの」と笑いながら聞くと、マキエちゃんは馬見たいに大きい目を片方少し細くして、首をかしげながら、
「つまんないわ、今日お勘定じゃないんだってさ、家の母ちゃん、あてにしてたのよ。そいでね、今朝さあ、あたい三銭くれって言ったら、母ちゃんはくれるって言うの、でも父ちゃんは工場なんてお勘定おそくくれる時があるから、一銭でもだめだって言うのよ。んだからあたいさ、もう今日こそはもらえるからって言ってたのんだけど、父ちゃんたらくんなかったのよ。きっと虫がしらしたんだね」と笑いながら言った。私も笑いながら、
「そうお、家だって困っちゃうのよ。でも本当にくれないってきまったの」マキエちやんはうぶ毛のぼうぼうに生えた鼻をひくひくさせて、
「あらあら本当よ、機械場に書いてあるわよ」と言って、おくれ毛ばかりのような髪の毛を、黒いゴムぐしでかき上げた。そばからそばから、ばさりばさりとおちてしまう。顔中毛がぼうぼうなので、青白い顔がうすく黒くいんきに見える。私と年は同じでも、背が小さくて、がくがくにやせているのでずっと小さく見える。その上、いつも毛を赤ん坊のにぎりこぶしくらいに丸めているので、どこかの子守のようだ。
　私は機械場に書いてあるのなら、もう今日はくれないと思ってあきらめた。五時半になると石川さんが、お勘定は明日になりますからと皆に言ってあるいた。雨は朝からふり通して、帰る時もやまなかった。「只今」と言って戸を明けても、何となくものたりなかった。弟たちはどこへいったかいないので、家の中はしんとしていた。私はつまらないので、黙ってお勝手で足をふいていると、よし子におしめをとりかえていた母ちゃんが、
「正子、今日お勘定になったんだろ」と言った。私は、

「ううん、なんない。明日だって」とあっさり言った。母ちゃんは、あまり私があっさりしているので、うそだと思ったらしかった。私は足をふいて、きり雨のかかったスカートをぱんぱんとはたいた。そして、何か書こうかと思って、押入をあけて原稿用紙を出していると、
「本当にくれないのかい。早く出しなよ。お米買わなきゃならないんだから」と母ちゃんがいった。
「え、お米買うの、本当にくれないんだもの、仕様がないな。……よう母ちゃん、どうするんの」と心配顔で言いながら押入をしめた。
「本当なのかい、困ったなあ」そう言って、母ちゃんはつっ立ったまま何か考えている。私はまさか今夜のお米までないとは思っていなかったので、びっくりした。母ちゃんは、
「どうするの、母ちゃん」と聞いた。母ちゃんは、
「どうするって言ったって、仕様がないじゃないか、もらえないもの」と怒ったように言った。私は心の中で、「一日おくれれば、ああゆうふうにぷんぷんするんだから。くれなくてもあたいのせいじゃない」と思ってそっぽをむいた。そして畳の上に腹ばいになって、知らん顔をして書きかけの綴方をかきはじめた。
「まったく仕様がないな」と母ちゃんはいっている。綴方の文句がすらすら出てきたので、嬉しくなりながら夢中で書いていると、母ちゃんはまた、
「正公や、ほんとにくれないんなら仕様がねえ、お前のあれ貸してもらうよ。いいだろ、金が入ったらすぐもってきとけば」と言った。私が「え、何あれって」と言いながらふりむくと、母ちゃんが工場のおそろいのゆかたを、壁の釘からはずしている。白地に紺のよこしまでところどころに、ひし形を二つ重ねた工場のマークの入った柄だ。私はまたかと思うと、見るのも厭になって、黙って書きつづけた。母ちゃんは困るとすぐ、いろんなものをもって質屋へゆく、困るんだから仕方がないと思っても、あまりちょいちょいなので、どうしてそんなに困るんだろうと思う。
「よう、かまわないだろ、すぐ出してやるから、お前でも、父ちゃんでも勘定になったら」と言いながら、畳にひろげてたたみ始めた。私が鉛筆を持ったまま、じっと母ちゃんの手元を睨んでいると、母ちゃんはちょっと顔を上げて、
「お前は厭だろうけど、仕様がないよ、食う米がないんだから、母ちゃんだって、お前のをあてにしてたんだから」と言う。私はさも厭そうにまゆをしかめて、
「うん、でもすぐ出してきてよ。厭だ、母ちゃんはなんでもすぐもってっちゃうんだもん」と言ってむきなおると、勝手の戸があいて、洋服をびっしょりにぬらした光男が、家の中の様子をうかがうように入ってきた。私が、「あらあら大変だ。びしょぬれで。母ちゃんに怒られるから」と言うと、光男は首を背中の中にうずめるようにして、下をむいて、泥だらけの駒下駄を見つめている。それを聞いた

母ちゃんは、たたんだ着物を膝の上で小さく三ッに折りながら、大きな声で、
「光う、またお前は雨ん中うろついてきたのか。どうする、着る物なんかないよ。さっきとりかえたばかりだよ。全く呆れるね、この子じゃ。ぐしゃぐしゃ出あるいてばかりいるんだから。早く足でも洗え。自分で洗うのが厭だったら、も少し気をつけてあそべ。入梅でじめじめしてるってのがわかんないのかな」とどなった。光男はべそをかいて、そばにあったぞうきんをつかんで、膝ばかりぐいぐいふいている。私は立ち上って、
「だめだめ、そいじゃおちないよ。洗っちゃわなきゃ。ほら、ならねえちゃんが洗ってやるから」といって、光男の下駄をぬがせた。そして、光男を流しの中にたたせて、水を出しっ放しにしてごしごし洗ってやった。最後にぬれた足をぴしゃりとたたいて、
「もう、よごすんじゃないよ。着るものがないっていうじゃないか。どうする？　裸でいなけりゃならないよ」というと、光男は口をふくらがして、ふん、ふん、いった。洗い終わると同時に、また戸があいて、こんどは、すぐ下の稔がよし子をおぶって帰ってきた。私はぞうきんで手をふきながら、「おち子や、あんがしな」と、よし子の顔をのぞきこんで笑うと、よし子は手足をばたばたさせて、早くおりたがった。そのとき母ちゃんが、
「よう、早くおろしておくれ、おぶって行くんだから」と言った。私は「あ、そう」といって、大急ぎで稔の背中からよし子をおろして、おぶい紐もとらずに、すぐ母ちゃんの背中にのせた。よし子はふんぞりかえって怒り出した。
「ああよしよし」と母ちゃんは体をふって、家の中をあるきながら、着物をあごでしゃくって、
「ほら、それ、早くつつんでおくれよ」と言った。いい風呂敷がないので、仕事場の棚から自分の黒い人絹のをもってきた。
「母ちゃん、これでいい、少しくしゃくしゃだけど」「ああ」母ちゃんは面倒臭そうに眉をしかめて、太いおぶい紐をぎゅっとしめた。私は、この着物もかあいそうにと思って、ていねいにつつんだ。母ちゃんは何かぼんやり考えている。私が「母ちゃん、これ」と心配そうに顔色をうかがいながら、つつんだ物を出すと、母ちゃんは、はっとして受取って、
「母ちゃんがいってくる間に、お釜に水を入れて燃しつけといてもらおうかな。すぐいってくるから、そいから父ちゃんが帰ってきて、酒が買ってないから、きっとぶうぶう怒るかも知れないけど、お前からよく言っといてね」と言ってお勝手へおりた。稔がぞうきんをしぼりながら、「母ちゃん、どこへ行くの」と聞いた。母ちゃんは、「お使いだよ」と言って、稔がさしてきた古い番傘を、重そうに持って表へ出た。バチンと傘をひろげる音を聞くと、私はなんとなくききかえしたくなって、「お釜、水入れて燃やし

っとけばいいの」と大声ごえで云ってみた。「ああ、そうだよ」とガラス戸をしめながらそう言って、母ちゃんは出ていった。行ってしまうと私は、お勝手をみまわして、まだぐずぐず足をふいている稔に、
「稔坊、ねえちゃんはこれから用をするんだから、光男や、ちゃあ坊をよくあそばしててよ」といった。稔は、「うん」といって、ざしきへ行った。私は、お勝手にのこっている光男にも「光坊、お前も早くあんちゃんの方へいきな」といった。

水だらけのお勝手をふいて、お釜の下を火をつけようと思ってさがしたが、燃しつけるものが何にもない。押入れをあけて見ると、うす暗い中に、新聞紙が半分ほどあったので、それを丸めた。もっと何かないかと思って見たが何にもない。私は押入れをしめかけたが、前にある米びつが気にかかって、外がわからたたいて見た。すると、さも空っぽだというように、がんと音がした。ほんとに仕様がない。仕事場の一畳で弟たちが何か言い合って笑っている。弟なんかなにも心配がなくていいなと思った。新聞紙をぽんとへっついにいれて火をつけようとすると、こんどはマッチがない。私はお勝手中さがした。ようやく探しあてたと思ったら、中味がなくて、外側だけだ。「いやだなあ」私はそういいながら、お釜の下にそれを放りこんだ。ねずみいらずのひきだしから、神棚までさがしたが見つからない。しまいには、弟たちにまできいてみたが、「おれ、知るかい」「知るもんかい」というだけだ。だんだん時間はたっていく。これ以上なかったら、母ちゃんのかえるまで待つしかないと思って、最後に消しつぼをどかしてみると、灰とゴミにまじって、三、四本のマッチの棒が出てきた。私は、くやしいなと思いながら、さっき、釜の下に放りこんだマッチ箱の外がわを、手を釜すみだらけにして、とりだした。

揚板を上げて見ると薪もろくにない。ぷんと変なにおいのする暗い中に首をつっこんで、ようやく屑のような細い薪を一にぎりひろい出した。こんどこそみんなそろった。私は「エヘン」とせきばらいをして、へっついの前にしゃがんだ。

燃しつけてしばらくすると、体がむしむし暑くなった。私はお勝手の戸をあけて、表に首を出した。雨はまだやまずに、じとじとふりつづいている。ながしの水が流れるところに、青茶色のこけが、雨にあたって光っている。ちょうど、家ののきばのあたりで、霧のようになって落ちてくる雨は、そこいらじゅうをじめじめさせている。うしろでぱちぱちと音がした。ふりかえると薪がおちかかっている。私はお釜の下の火を直してから、まだ外を眺めつづけた。原っぱのむこうの、前の家のガラス戸があいた。おばさんが煙のたっている七輪をお勝手の入口におくと、しかめっ面をしながら、茶色いうちわで、ぱたぱたあおぎ出した。小さい星のような火の子が、雨の中をかるそうに飛ん

でいく。そこから家の中がよく見える。見る気もなく見ると、前の家はもうお膳がしてあって、新聞紙か何かがかぶせてある。私は戸にもたれて、頭をかきながら思わず、
「いいなあ、前の家はお米があって」と言ってしまった。言ってしまってから、後悔した。どうしてそんな乞食のようなことを言ったんだろうと思うと、自分で自分がにくらしくなった。おばさんは火がおこったらしく、七輪をかかえて家の中に入っていく。私も戸をしめた。
残りの薪をくべていると「おかいんなさァい」と言う弟の声と一緒に自転車の音がした。父ちゃんが帰ってきたのだ。何と言おうかと思っていると、父ちゃんが入口で「母ちゃんは」と言った。私は仕事場まで出ていって、
「母ちゃんはお使いにいったの」と言った。父ちゃんは、せまい土間で、ぬれたはだし足袋のまま、二三回、足ぶみをして自転車をいれた。
「この雨のふってるのに、子供らばかりおいて、どこふらついてやがんだか」そう言いながら足袋をぬいでいる。
「あらやだ、父ちゃんそんなこと言ったって、今日あたいの方お勘定になんなかったのよ。だから、母ちゃんは心配して出ていったのよ」と怒ったように言うと、父ちゃんは
「ああそうか。そりゃ大変だな」と心配顔で上った。私は、お勝手へいってお釜のふたをあけて見た。お湯はにえたつし、母ちゃんは帰ってこないし、困ってしまった、父ちゃんは今にも文句を言いたそうな、厭な顔をして、坐っている。私は、あまりうす暗いので、電灯をつけた。家の中がぼうっと黄色くなった。「ちょッ、ちょッ」と父ちゃんはさかんに舌うちしている。私はそれをきいて、きっとなにか文句を言いだすと思った。こういう時は、いつも親子で口喧嘩をするのがおきまりだ。私はちょうど鼻の医者へいかなければならなかったことを思いだして、弟たちに
「姉ちゃんこれから鼻医者へいってくるから、母ちゃんがきたらそう言っといてね」と言って大急ぎで家を出た。
立石町まで三〇分もある。大変だなと思いながら急いであるいた。四ツ木の大通りをすぎて、学校の前あたりまでくると、とてもつかれてしまった。お腹がきゅうきゅうに空いていたので、なおさらつかれたらしい。治療をすませて帰り道になると、だんだん家が心配になった。母ちゃんが帰ってきてればいいがと思いながら歩いた。
家へついて急いで戸をあけて入ると、みんなご飯を食べていた。私が、「ふわあ」と声を上げてよろこぶと、母ちゃんは、「何だね、この子は」と言って、じろじろ私を見た。私は笑いながら、
「だって、母ちゃんが帰ってきてるかどうか、心配しいしいきたんだもの」と言って、ぬれた、スカートを、ちょいとつまんで、おぜんの前に坐った。大きな、どんぶりに、紅しょうがと、こぶのつくだにが少しずつ入ったのと、小さいいれものに、たくわんがあるだけで、おぜんの上はがらあきだ。父ちゃんも、今夜はお酒を飲まないらしい。貞

坊が「ごつさま――」といって立ち上った。
「もう終えたの」私は、そんな事におどろきながら、あったかいご飯をよそった。父ちゃんが、しょうがをかじって言った。
「お雪、かつお節あったっけな」母ちゃんは、ちょっと首をかしげて、
「うん、あるかな、まだ」と言った。私が、「ほんとにあるの」と言いながら、体をよじらして後のねずみいらずから、かつおぶしの箱をとり出した。ふるとかるいので「ないかな」と思いながら、お皿にあけると、細かいおが屑ようなのが、少し出ただけだ。母ちゃんは私のあけたのを見て、「ああもう切れちゃっている」と言った。父ちゃんは
「ま、いいやな、明日勘定もらえたら買えば」と言った。
「ああ、七銭か、八銭なんだから」母ちゃんはそういいながらよし子を抱きなおして、茶わんをとり上げた。しばらくするとまた父ちゃんが、
「おしたじ出せよ」といった。また私がねずみいらずから、おしょうゆのびんをだすと、それも空っぽ。私は、おかしくなって、
「あれま、これもからっぽだ」といって、ななめにして底を見せた。
「ああ、切れてるんだっけ」わかっていたらしい母ちゃんは、ふきだすように笑った。父ちゃんは呆れて、
「厭んなっちゃうね、あれも切れた、これも切れたってなア、まったく。切れねえのは、俺と手前の、くされ縁ぐれえのもんだ」と言った。それをきくと、母ちゃんも負けずに、「そうだともそうだとも。まったくそうだ。早く切れないかと思っても、中々切れやがんねえ」と笑いながらいいかえした。父ちゃんはおぜんと母ちゃんをきょときょと見くらべて、
「な、なにを言いやがんでえ、こん畜生」と白い歯を出してわらった。弟たちも、わけもわからないのに、父ちゃんたちを見てわらっている。私は箸をおいて、
「よう、あしたのをどうするの」と言うと、父ちゃんは、
「あしたはあしたの風がふかあな」とおっぽり出すようにいって、おぜんをはなれた。母ちゃんは黙って何か考えていた。母ちゃんも大変だ。だけど。あしたはきっとお勘定になるだろう。（十六歳）

友情

立野信之

一

「いやに降ってきやがった……」
ポケットに両手をつっこんで硝子越しに雨脚を見ていた健介が、つぶやいた。と、その声に切って落されでもしたように雨はにわかにザアッと音をたてて、しぶきをあげた。すぐ前の松林が白い風にもまれて、はげしく身もだえしはじめた。
「こんな風雨で……大丈夫かな？」
前の晩寝が足りなかったといって、柱にもたれてぐったりと眼をつぶっていた小沼三郎は、不意に上体を起すと、出眼に近い、いつも濡れているような眼を大きくあけてぐるっと廻わし、二三度頭をふった。それは睡気を無理にさますときや、頭の中の雑念をふりはらおうとする時などによくやる小沼の癖だった。……小沼は嗄れ声でいった。
「……いや、雨風になった方がかえっていいんだよ、自動車ん中が外からよく見えなくて。」
健介は、それがいかにも小沼らしい考え方だ、と思った——おれは、自動車がこの家の前まではいれないので、二町あまり歩かなければならないのを、気にかけていたのだが……。
小沼は、帯の間から懐中時計を出してみて、ギリギリとねじを廻わし、
「もう来る頃だ……」とつぶやいた。
健介は眼を斜かいに、横丁の曲り角にむけた。とその時、長い防水マントをきた小さな男の子が、学校がえりらしく、雨風にもみくちゃにされながら、現われた。小学生は眼をつぶってきたらしく、行きすぎて角の板塀に頭をぶっつけた。びっくりして立止まり、長いこと板塀をみつめていたが、やがて二言三言悪態をついて、板塀の前をはなれた。そしてまた眼をつぶってそろそろと歩き出した。
「ふふ……」と健介は、思わず笑い落した。
「来たか？」と小沼が顔をあげた。
「いや、子供だ。」
健介は硝子戸の前をはなれた。安物の花りんの食卓にもどると、手もちぶさたをまぎらわすために、バットに火をつけた。吐きだした煙の行方をぼんやりと眼で追っていると、ふと、これからこの家で秘密に逢おうとしている久本達也の顔がうかんだ、髪の毛の濃い、涼しい眼と、赤い小

さな唇とをもった女性的な顔が。――丁度、まる一年間逢わないが、変っているだろうか？　聞くところによると、カモフラージにひげを生やしているということだが、奴のような女性的な顔立ちにひげはさぞ不似合だろう……つけひげのようかも知れない、などと思うと、滑稽な気もした。

……健介が久本達也と最後に逢ったのは、一年まえの六月だった。その頃彼等の属している作家団体に最初の嵐があり、指導的なメンバアの五、六人が捕まった。主謀者と目されていた久本の家も襲われたが、彼はそのまえから用心して郊外に宿をとってあったので、難をのがれることが出来た。

検挙は、しかし作家団体ばかりではなく、「上部」にもひんぴんとあるらしかった。久本は、健介と逢うたびに「今日も連絡がきれた」といい、「どうも変だ」としきりに首をかしげるのであった。が、そういいながらも彼は不断着のままで、白昼公然と銀座へ出かけたりして、大胆に仕事をつづけていた。

「大丈夫か、そんなにのその歩いていて？」

健介が心配していうと、久本は冗談に肩をそびやかして

「平気だよ。」と笑っていた。

だが間もなく笑っていられない時期が迫ってきた。ある晩、健介が郊外の宿に久本を訪ねて行くと、久本は外出の仕度をしてい、二人は一緒に外へ出た。健介は久本のいくらかそわそわした様子の中に只ならぬものを見出し、自分も心を硬くさせながら、だまって歩いた。

田圃へ出ると、久本は用心ぶかく前後を見廻わしてから、低声でいった。

「おれはね、今夜から姿をかくすよ……上からそういってきたんだ。」

「そうか」

健介は息のつまるような思いで、外に言うべき言葉が見つからなかった。

久本もさすがに興奮しているとみえ、ひっきりなしに掌で髪の毛をかきあげ、肩をふっていた。がその顔には、闇の中でもはっきり分るほどの、ほの白い微笑がうかんでいた。多分、困難な、新しい境遇に対する強い緊張が、微笑となって現われていたものであろう。

「……おやじが病気しているんで、それが少し気にかかるけど、しかし、おやじはおれを理解しているから、その点は安心できる……」

健介は、もう長いこと中風で寝ている久本の父親の病みほほけた姿を思いうかべた。――父親は自由主義者で、古くから普選運動などに関係していたが、その激烈な正義観のために近年は政界に容れられず、中風にかかって、古ぼけた借家にちっ居していた。生活も困窮しているらしく、久本は稼いだ原稿料や印税の中から、可成りな額を父親の生活費にまわしていたのを、健介は見て知っていた。

健介は、歩きながらぽつりぽつり話す久本の短かい、前後のれんらくもない言葉にだまって耳を傾けていた。ふだんならば親しさの余り冗談をいったり、ひやかしたりする健介だったが、その晩は、自分が団体内で一番親しく、一番信頼している友人から直接聞く最後の言葉だ、という気がし、言葉の半かけらでも聞きのがすまいと努めるのだった。――もう当分逢えないだろう……或はこのまま永久に逢えなくなるのではあるまいか？　と、そんな気さえして。

その夜、久本は姿をかくした。いい意味での坊ちゃん育ちで、宿をさがすとか、或いは宿のものにちょっとした世辞をいって自分の本性を知られないようにすることとの不得手な久本だったから、行先のことなどが気にかかったが、しかしそんなことはみだりに聞くべきことでないと思い、健介は「じゃ、気をつけるんだな」と一言いっただけで、あっけなく別れた。それに、奴はすばしこいところもあるから、案外うまくやるだろう、という安心もあって、それだけで沢山なような気がした。

それから二日目に、久本のいた郊外の宿が襲われた、という知らせを健介はうけとった。

『なんという運に強い奴だろう？』と、健介は感嘆した。

――『どうか、その運が長くつづくように！』

だが、皮肉なことには、それから半月と経たないうちに、健介が捕まってしまった。その頃、ちょうど作家団体の大会に出席するために青森の田舎から上京して、健介の家に泊っていた小沼三郎と一緒に。

八ヵ月の後、保釈で出てきてみると、久本達也は健介等が捕まると間もなく日本から姿を消したらしい、ということであった。噂は、久本がベルリンにいるとか、モスクワにいるとか、いや上海にいるとか、まことしやかに伝えた。それを耳にするたびに、健介はほほえんだ。――奴はドイツ語の達人で、それに英、露語も相当できるし、一度外国に住んでいた経験もあるのだから、危険な日本にいるよりも却って楽だろうし、何よりも勉強ができるだろう……当分外国にいた方がいい！

ところが間もなく、作家団体の機関紙『ザリヤ』に、滝田澄夫という匿名で、文化運動の組織問題に関する論文が掲載された。論文は、それまでの街頭的な組織方針を根底からくつがえすような、強い、そして高い政治的見地に裏づけされたもので、一読しただけで、久本達也によって書かれたものであることが分った。

『久本が、日本へ帰っている！』

健介は、胸に大きなショックをうけた。逢いたい、と思った。が、久本は恐らく前よりはずっと重要な位置や任務をもっているだろうから、個人的な友情だけで逢うのは危険だ、と自分をおさえていた。

久本の新しい意見は、団体に大きな衝動をあたえた。街頭的な組織になれていた作家たちは、…………………直

接工場、農村に置くという方針が、あまりに労働組合組織の機械的な適用であるような気がし、さっそくは受取れないといった様子で首をひねるものが多かった。ごく少数の者だけが、新方針を支持した。健介や小沼三郎は、どっちつかずの気持ちで成行をながめていた。久本の論文が雑誌に載って出た日に、小沼は、せかせかと健介のところにやってきて、「読んだか？」といい、「どうも受取りにくい所がある」といってしきりに首をひねった。

小沼の持っていた雑誌の論文の所には、赤や青のアンダー・ラインが、方々に汚らしいほど引いてあった。

「もしもこれが正しいとすれば……」小沼は首をひねった後で、顔をあげていった。「脱落者がずい分出るぞ、きっと出る！」

そして彼はそわそわと落着かぬ様子でたちあがった。

「おれ、中島と討論してくる……」

彼は、駈け出すように出て行った。

集会がひらかれ、新方針が何度も討論された。ある者は極端に支持し、ある者は極端に反対した。が、久本の論文はそうした物議のゴッタ返しの中で、不思議なほど平然たる落着きをみせていた。非常に巧みな弁士が、聴衆の鎮まるのを待っておもむろにしゃべり出し、やがて、卓抜な言葉をもって一語々々人々を魅了し去るように、久本達也の論文は、時がたつに従って次第に物議の声をしずめ、やがて確固たる光を放ちはじめた。団体の、誰も彼もが……

……の『文化、教育に関するテーゼ』を読みはじめた。というのは、久本の論文がもっぱらそれに依拠しているのだということが、解ったからである。……作家団体は、久本の提出した新組織の方針にむかって、急げきに動きはじめた。

「久本は、やっぱりエライな！」

感嘆の声が、そちこちで囁かれた。

そうした時期のある日、健介は、久本が逢いたがっている、ということを聞いた。それを告げに来たのは、二、三年まえ久本と健介が一つ家に住んでいた頃、久本の翻訳の仕事を手伝いに出入りしていた香月トミ子だった。

「先生は……」とトミ子は、以前久本に対して使っていた敬称をそのまま使っていった。

「近頃淋しがっているのよ、とても！」

「どうしてですか？」健介は、淋しがっているということに奇妙なひびきを感じて、きき返えした。

「だってああいう不自由な生活をしているんでしょう……やたらに外へ出られないし、知ってる人にも滅多に逢えないし……」

そうかも知れない、と健介は思った。——久本は根は強い男だが、一面にはまた非常に人懐しがる性格をもっている。

「行きます。」と健介はいった。「小沼を一緒につれてってもいいんですか？」

「いいでしょう。小沼さんにも逢いたいといってらしたから。」
　香川トミ子は、無雑作にそういった。
　そこで健介は小沼と相談のうえ、知合いの家の二階で、火曜日の午後に逢うことに決めた。火曜日にしたのは、久本がその日だけ身体があいているということだったからである。——

　久本は約束の一時かっきりにやってきた。
「やあ、しばらく。」
　久本は元気にいって、健介と小沼の手を、かわるがわる強く握った。……久本は肥って、すっかり人相が変っていた。髪をきれいに分け、眼鏡をかけ、太い口髭をはやしていたが、口髭は健介が考えていたほど不調ではなく、肥えて血色のいい顔に一種の威げんをそえ、なんとなく医師のような感じを起させた。——一日二十四時間中、恐らく神経の休まることのないような…………生活をしている男が、どうしてこんなにも血色がよく、肥れるのか？　と健介は、不思議な感銘にうたれるのだった。
「肥ったろ……そう人の顔をみるなよ！」
　久本はカモフラージにかけていた眼鏡を外して食卓の上におき、てれ臭そうに髭をゆがめて笑った。するとその太い口髭が急に附け髭のように不自然にみえ……そこに健介は、以前の久本の顔を見出し、急に打ちくつろいだ気分になるのだった。
「かつらみたいだね、その頭は……」
　健介はひやかした。……久本は濃い、美しい髪をしていることで、仲間では有名だった。彼はいつも長い髪の毛を、油をつけないでただ後へかきあげるだけだったが、髪は自然にゆるい、美しい波をうっていた。が、いまは堅い油で塗りかためられ、頭の上に平べったく硬ばっているのだった。
「これがいやでねえ……」と久本は髪をつまんで、苦笑した。「外から帰ってくると、大急ぎで洗っちまうんだよ……時に、小沼君はいま何を書いているかい？」
　久本とは二三度しか逢っていない小沼は、だまって白茶けた表情をうかべてぼんやりと久本を見守っていたが、そういわれると、急に眼をパチパチさせ、
「いや、何も書いていない、君のおかげでとても忙しくって！」といって、歯のかけた口をあけて笑った。
「そんなに忙しいかね？」と、久本はまじめな顔つきで、首をかしげた。「……そんなに忙しいかねえ。もっとも組織が変ったばかりだから、それが落着くまでは忙しいだろう……しかし、もうじき落着くよ。そしたら書けるだろう……作家は、たえず書かなけりゃいけないよ。」
「何か食わないか。」
　健介が、久本のコップにビールを注いでやりながらすすめた。

「うん、食おう……」
久本は反射的に鮨を取り、それからビールをまずそうに一口飲むと、すぐまた文学に話をもっていった。まるで、文学の話に飢えきってでもいたかのように……事実、彼は飢えていたのだ。その飢えが、久本の方から健介に逢いたいと申込ませたのである。

久本は、やがて自分が実際に接してきたドイツのプロレタリア文学について、熱心に話しはじめた。

「ドイツのプロレタリア文学運動は、組織としては日本よりすぐれてるようだが、個々の作家の政治的観点ははるかに高い……例えば、ベッヒエルはソヴェートの五カ年計画を擁護する一大長篇叙事詩を書いている……ところが、日本の作家は、相変わらず貧乏小説、変てこなストライキ万才小説しか書いていないんだからねえ……だけど、そいつは作家に個人的に解決しろといっても無理なんだ。街頭的な組織に安住していれや、どうしたって観点が街頭的になるし、小ブルジョア的傾向から抜けきれやしない……ベッヒエルやその他の向うの作家の観点が非常に高いのは、やはり、先生達が……………結びついてるからなんだ。だから、もう日本でも……」

久本は、なぜかふいに言葉をとぎらせた。ビールのコップを取りあげて唇へもっていったが、飲まないで、また下へ置いた。そして急に何か思いついたらしく、笑顔をつくって、

「……この頃団体では、誰も彼もみな哲学を勉強してるそうだね。集会に出るにも、道を歩くにも、皆一冊ずつ抱えて歩いてるそうだね、正に風景だね……」といった。が、すぐ打ち消すようにまじめな顔つきになって、

「しかし、いい事だよ。今までは、みんな不勉強だったからねえ――」

小沼と健介は、自分達がそういわれでもしたように、顔を赤らめて苦笑した。

話がとぎれると、久本は、タバコに火をつけ、煙むそうに喫った。

――日本の作家の政治的観点が非常に低いということは事実だ、と健介はぼんやり考えた。――そしてベッヒエルなどが、積極的な主題の作品を書いているのは、彼等が……………結びついているからだということも、事実であろう。もしそうだとしたら、自分達がプロレタリア作家として成長を遂げるためには、当然……………結びつかなければならない。もしそうだとしたら……そうだとしたら……？

「この家は、仲々いい家だね。」と久本があたりを見まわして、突然いった。

健介は、思考の糸をポッンと切らしたまま久本の視線と一緒になって、古い、せまい部屋を見まわした。と、視線が床の間の古ぼけた山水の掛軸の上にとまった。――久本の父親の所にも、これとよく似た掛軸がぶらさがっていた

っけ……
「君が東京にいることを、君の親父さんは知ってるかい？」
健介は、ひょいと頭にうかんだことを、そのまま言葉に出してきいた。
「知ってるかも知れない……しかし、別に知らしてはいない。」
久本は、無雑作にそういったが、心なしか幾ぶん顔をくもらせた。
「もし何なら……」健介はためらいながらいった。「……何か言づてでもあったら、伝えるぜ？」
「いや、いいんだ。用があれば頼むけど、いまは別に用事はない……！」
健介は、余計なおせっかいをいったものだと、ひどく後悔した。――それにしても、久本の奴は強くなったものだなァ、と心の中で、あらためて感歎するのだった。

二

小沼三郎は、青森の田舎から出てきた母親と二人で、健介の家の近くに小さな家を借りて、住んでいた。……一年まえ、青森から出てきて健介の家に泊っていて一緒に捕まったり、久本達也に対して特別に深い信頼心をもっているといったような事から、小沼は健介にとって、久本に代わる友人になっていた。小沼も健介に対して深い友情を感じていて、朝に晩に健介を訪ね、一緒に飯をくい、以前健介が久本とやっていたように夜更けまで文学の話をし、雑談するのだった。
健介の妻の栄子は、路地の戸の開く音をきいただけで、すぐ、
「ああ、小沼さんだ。」といいあてた。
実際、小沼はせっかちで、その上、そそっかしい所があったので、しじゅう建附のわるい路地の戸を外し、その度毎に、栄子が駈けだして行かなければならなかった。
「おれ、またやった！」
小沼は赤い顔をし、首をすくめて入ってくる。――
久本達也の論文が『ザリヤ』にまだ出ない頃、小沼三郎はレーニンの芸術に関する文献を読んでいて、レーニンが、詩人のデミヤン・ベドヌイが組合の仕事を時々サボって集会にも出て来ないという非難に対して――うっちゃっておき給え、デミヤンには我々の生活をすばらしい言葉でうたう、詩を書く仕事があるのだ――といった言葉にひどく感心し、何度も健介に向っていった。
「これだ！　この大きな愛情の中から作家は育つんだ。……日本には、こうした政治家が一人もいない。久本が、まあそれだが……久本に逢いたいなア……！」
そしてまた、彼はこうもいった。
「おれは、ねえ、理論家がそばにいてくれないと、どうもだめなんだよ……久本がいてくれるといいんだがなア……

！」
　小沼三郎はどっちかというと、理論の上を忠実に歩こうという、熱烈な要求をもった作家である。だから八ヵ月間刑務所で過し、出てきてみると作家団体には久本に代わる理論家がいなく、しかも団体の理論的活動が…………………………………いくらか混乱しているという状態が、彼を戸惑いさせたのだ。
　そこへ、久本が新しい意見をもって現われたのだ！　最初の間こそ、新しい組織理論に首をひねっていたが、すぐに小沼は自分をもちなおした。
「この方針が実施されれば、……脱落者が出るぞ、きっと出る……！」
　小沼は、何度もそういった。その言葉の中には、「おれは脱落しないぞ！」という響が、ガンガン鳴っているように、健介には思われた。
　殊に久本と逢って以来、小沼は急に人間が変ったように元気づき、しじゅうニコニコと、自分の一番信頼している人にひそかに逢ってきた喜びを、顔にうかべていた。
「おれはねえ……」と小沼は健介にいうのだった。「……久本がいるんで、もう書けるよ……どうもおれは、久本が見ていないと思うとつい気持がだらけて、だらしない物を書いちまうんだよ。しかし、もう大丈夫！」
　健介は、そういう小沼を羨しい、と思った。……健介は、どっちかというと理論を正しいとは感じても、それに一そく飛びに飛びこんで行けない男だった。久本達也との個人的なつきあいの中からは、その理論的なものよりは、理論以前の人間的なもの、文学的なものを学ぶ方が多かった。
　小沼と健介のそうした性格的な相違は、作品の上にそのまま現われた。……二人は、その頃、ほとんど同時に長篇小説を機関紙に書き出していた。小沼は、彼の生れ故郷である青森の小都市の労働者の闘争を、健介はやはり故郷の農村を背景に農民の生活を描き、共に千枚を越える予定のものだった。二人は、毎月五六十枚ずつ書き進めていった。
　小沼は毎日のように健介を訪ね、二人の話は自然文学の上に……その二つの長篇の上に及んだ。小沼の書きぶりをみていると、月々のものに可成り無理な飛躍があって、前月分と今月分との間の必然性が欠けているのが、めだっていた。
　で、ある日健介は小沼に向って、それを指摘した。すると小沼は堅い表情を顔にうかべ、自信にみちた口調でいった。
「おれは、正しいと思った批評は、うけいれて書いているんだ……飛躍は、それが積極的な方向にむいてるかぎり、多少は仕方がない……」
「月々の批評を、か？」
「そうだ。」

「そりゃ無茶だよ！」健介は、おどろいて小沼の顔をみつめた。「……そんなことをしたら、折角の君の作品を殺してしまう。……おれの好みからいえば、長篇は、書き出しの一行が最後の一行にピーンと突抜けてるような、そういうものでありたい。例えばトルストイの……」

「いや！」と小沼はさえ切って、強く、決定的にいい放った。「……おれの長篇は、あれでいいと思っている！」

何という頑な自信！　健介はその強さに圧倒されて、反ぱつすべき言葉を見出すことが出来なかった。で健介はだまって、友人の尖った小さな顔を、突きのめされた心でみつめた。

友人は、明らかに……………………………………立とうとしているのだった。丁度…………………………、小沼の生れた故郷の…………………………………………、……………………………をさまよっていた。そして、……………、作品の中に、それらの社会現象を強く捕えることを、作家に要求していた。久本の理論の上をもっとも忠実に歩いてきた小沼三郎が、いまその急げきな主張にぶっつかってその最前に立とうとあせっているのは、当然なことである。

――小沼の作品に、おれは何をとやかくいうことがあろう！　と健介は、自分の作品の非積極性を思い、はげしく後悔するのだった。――小沼の長篇には、多くの無理がある。しかし、奴はその無理を、奴一流の強気な……作品をいつも……………させようという意気込みで縫いあわせている、そしてそいつが、立派に読者をつかんでいるのだ！　ところが、おれの作品にはそれがない。いつも現実の泥沼の中であがき廻わっている。耳をすませば、悲鳴がきこえるだろう……何よりも気魄だ！　自信だ！　作品の必然性なんて、くそくらえ!!

健介は、あせった。指導理論の示す方向に追いつこうと努力した。だが、その結果は……あせりだけが先にたって、現実がびっこをひきはじめた。一言でいうと、作品に破たんが生じた。で、間もなく、小沼が長篇の予定の三分の一で打切った翌月、健介も刀折れ矢つきた形で、止めてしまった。小沼は、別にもっと積極的な題材を選んで書くからという理由だったが、健介には、他に示すべきはっきりした理由は何も残らなかった。

健介は明らかに敗北を感じた。が、そのつきのめされた絶望感の中で、健介は、久本がドイツのベッヒエルの例などをひいて話した言葉を強く思いだした。――作家は、自分を高めるためには、作家団体以外の他の…………に結びつく必要がある！

『そうだ。おれに欠けてるものは、そいつだ！』と健介は強く思った。

丁度…………に差入したり、その公判に……………………………………、…………………とってくれと作家団体に申込んできていた。なるべく…………

……………………健介は、その仕事を快く引きうけた。

『それが、どんな下の仕事でもいい!』と、健介は思った。『おれにとっては、意義がある。おれは、そういう仕事の中から、自分をたたき直して行こう……!』

……は、一週に一回あるいは二回……場所は大抵神田辺のミルク・ホールか、そば屋であった。指定された時間に健介がそこへ行く、と若い体格のがっしりした洋装の女が待っていた。洋装——といっても、かなり粗末なもので、木綿のストッキングをはき、運動靴のような平べったい靴をはいていた。……女は一人で片隅に腰かけ、備えつけの新聞や演芸画報に見入りながらそばを食べていたり、ミルクを飲んでいたりする。そして健介が入っていくと、女はおどろいたように顔をあげ、

「あら、しばらく。」と声をかける。

その言葉は、昨日逢っていても使われる。

「や、しばらく、どうしてますか?」と健介は笑いながらいい、女の前に腰をおろす。「……さて、おれは何を食べようかな?」

健介はゆっくりとメニュを眺め、コーヒーを注文したり、女と同じようにもりそばをあつらえたりする……それからお互に顔を見合わせ、ごく何でもないように話しだす。

「集って?」

「なかなか集らない……この頃、僕等の方でも雑誌や新聞が沢山でて、そっちの方へ金が注ぎこまれるもんで……困難です。」

「そうでしょうね……」

女は、困ったような表情をうかべ、一寸のあいだ沈黙する。が、すぐ顔をあげて、

「Sさんという方、ご存じですか?」

「よく知ってます……」

Sというのはある雑誌の編集をしながら小説を書いている男で、作家団体に属していなかったが、プロレタリア的な小説を書いているので、世間に知られていた。

「あの方、少し出してくれないでしょうか……何しろいま……………………、………………………………。いろいろ手段を講じていますが、仲々思うように集まらなくて……じゃ、今日行っていただけますか、わたし一緒に行きます……」

健介は一寸考え、

「行きましょう」と、答えた。

外へ出ると、女は歩きましょうといい、外濠に沿って、二人は銀座の方へ歩いていった。女は、歩くのが特別好きらしく、平べったい靴をはいていて、男のように大股に足を運んだ……突然、女は小説のことを話しかけた。

「あなたの長篇、どうして中止したんですか?」

「別に……」健介はまごついて、別なことをいった。「…

…あんな、薄暗い農民の生活なんか描いたものに、興味がありますか？」
「ええ。だって、わたし農村生れですもの。」女は、まじめな顔つきでいった。「……でも、あなたの小説に書かれているような平べったい農村じゃない……」
「どこですか？」
「山ン中……炭と、薪と、それから馬の産地……不便な、ずっと遠い所なんですよ……」
女は自分でいった言葉がおかしいらしく、くつくつと笑いこけ、それ以上は何もうちあけなかった。健介は、女は多分東北地方の生れだろうと勝手にきめ、その屈たくのない、それでいて与えられた仕事をどこまでもやり通しそうな、健康な所が、何かしら地方的なものに結びついているような気がし、一種の親しみと、敬愛の念をよび起した。そして自分が、この仕事を選んだことが、自分の作家的成長に、決して無駄ではないだろうことを確信するのだった。

三

女との連絡は、健介がその仕事を順調に運ぶことを望んでいたにもかかわらず、途切れがちであった。
というのは、作家団体の大会が眼のまえに迫ってい、会合が毎日のようにつづいた。…………、団体の仕事は——定期刊行物の増加、各専門部の増加、…………ある者は毎日自転車にのって駈けまわり、ある者は新聞の編集やプリント刷で幾晩も徹夜を重ね、またある者は赤ん坊を背負って「部」の会合やサークルの会合に夜おそくまで——一日に二ヵ所も三ヵ所も廻わって歩かなければならなかった。そうした組織活動の多忙さは、多くの人々から作品を書く時間を奪い、一層いけないことには生活費をかせぐ暇さえ与えなかった。で、ある者はいつも会合の先々で次の場所に行く電車賃を工面し、メシ代を借りて歩き廻わらなければならなかった。
そこから、不平が生れはじめた。
「自転車にのって小説を書くわけにはいかないんだからな！」
「小説を書かせない作家団体て、あるもんか！」
「もっと…………をとらなければならないんだったら、わたしは……」と婦人作家がぼんやりと自分の腹を割って、いった。
「……わたしには子供があるし、子供を抱いて刑務所にはいるわけには行かないから……団体を脱退するよりほかないけど……どんなもんでしょう？」
人々は、それをきいたとき、声をたてて笑った。が、笑いながら腹の底では——「ひとごとではないぞ！」と思った。

しかし、団体は政治主義的な軌道をまっしぐらに馳っていた。二人や三人の者が、その早い速力のために気分を損ったからといってそのために急停車するわけにはいかなかった。轟音でかき消され、かき消されしていた。

健介は、団体の中央委員だった。団体内での彼の仕事は、サークルや地区で働いてる人達ほどの忙しさはなかったが、団体の轟音はたえず足許で鳴っていた。そしてそいつが彼に、ゆっくりと小説を書くことをさまたげた。そして何かしらあわただしく、そして自分の心臓の刻みが轟音と一致していないことが気になり、そいつが、彼を落着かせなかった。で、勢い電車賃や米代にしじゅう困った。

朝、会合に出かけようとすると、栄子がいいにくそうに告げた。

「電車賃がないのよ」

その言葉にはなれきって、貧乏に対しては一種の不感症になっている健介ではあるが、それでも三度に一度は胸にグサリとつきささり、眼先が昏くなるのだった。そしては一時げしい絶望と、憤りと、自己憎悪に身を任せたまま、一時間もだまって、机の前に坐っているのだった。

そんな健介をみると、栄子も不機嫌になり、クンクン鼻を鳴らした。

「いつも電車賃に困って……それでも会合に出て行かなければならない……お米もないんですよ……こんな状態をくり返えしていて、いい小説が書けるわけはないですよ。いつも鼻ん棒をついてから、あわてて間に合わせ仕事ばっかりしてるから、だから原稿は売れないし……」

「バカ！　貴様には何もわかっちゃいないんだ、おれの今の苦しい気もちが……？」

苦しい気もちとは何だろう？　栄子には具体的にはわからないが、しかしそういわれると、何か漠然とした重苦しいものが気もちの上にのしかかってき、それ以上何もいえなくなるのだった。だが、電車賃がなく、米もすぐなくなるという、現実にさし迫ってる問題をどうする？　で、栄子はいった。

「会合を休んで、仕事をするわけにはいかないんですか？」

そいつは、健介も時々考える。が、仲間達がみんな集っているだろうことを思うと、とうてい会合を休んで原稿を書く気にはなれなかった。……で、強いて気もちをひきたて、近所に住んでいる知合いを訪ねて電車賃を借り、おくればせに会合の場所に駈けつけると、ほとんど全部の役員の顔ぶれがならんでい、健介は来てよかったと、ひそかに安堵するのだった。

会合には健介は小沼としじゅう連立っていったものである。だが、組織が変わってからは、小沼は役員の中で一番いそがしい書記局の責任者に選ばれたので、いつも健介よりも先に出かけた。それに新組織以来の多忙が、二人を以前のように気楽に逢わせなかった。……健介がたまにぶらりと訪ねて行くと、小沼は開け放った部屋で夢中でニュー

スの原稿を書いていたり、ある時は朝はやく出かけたといって居なかったりした。お互いの役目が極端に分化していい、以前よりは何倍かこみいってきているので、何をしているのかさえもわからない事が多かった。小沼は、いつも帽子をあみだにかぶり、忙しそうに、せかせかと着物のすそを蹴飛ばすようにして歩き廻わっていた。そしてその間にニュースの原稿を書き、指導的な論文を書き、そして何よりもおどろくべきことには精力的に小説を書きつづけた。

「あんな貧弱な身体のどこに、あんな精力があるんだろう？」

健介は、驚歎した。そしてそういう小沼の姿は、組織活動の多忙に対する不平の泡つぶを押しつぶすのに、無言の威力を発揮しているように思われた。

しかし会合で顔を合わせると、小沼は睡眠不足の赤い眼をシパシパさせ、

「ああ、ねむい！」と訴えた。

健介が冗談に、

「死なないようにやってくれよ、命あっての物種だからな。」

というと、小沼は奥歯の欠けた口をポカンとあけて笑い

「ほんとだ、おれは、一貫目やせたよ。」

といって、女のように白くて細い、ひ弱そうな腕をまくって見せた。

「もう一貫目もやせてみろ、元も子もなくなっちまうぞ！」

「元も子も、か……」小沼は笑い声をたてたが、急に肩をそびやかして、「しかし、おれの身体はこれで案外丈夫なんだよ、…………、…………、…………、……………、…………………………………………」

会合の帰りも――以前は一緒だったが――二人は別々になった。

「おれ、一寸用事があるから……失敬。」

そういって、小沼は中島とつれだって出たり、また次の時は福田と一緒に他の者よりもひと足先に出て行ったりした。中島はごく最近理論家として団体に入ってきたのだが、福田は古くからの指導的メムバアの一人で、健介や小沼と一緒に……された仲間だった。……健介は、そういう小沼や福田等の行動の上にある種の想像をめぐらし、時にはいい様のないせき寥と焦燥にかられるのだった。

――おれは取残されている……？

ある晩、小沼三郎は、会合の帰りにめずらしく一緒に帰ろうと健介を誘い、二人は一緒に会場を出た。

外へ出ると、ならんで歩きながら、小沼は突然いいだした。

「……久本がね、君を心配してるそうだよ。――もっと積極的な行動をとれば、物の見方も変わってくるし、新しい生活にもふれるから従って書くものもちがってくる……思い切ってやるようにした方がいいッて、そういってたそう

だ。……君の考えはどうかね？」
もっと積極的な行動――それが何を指しているかは、健介の胸には明らかだった。そしてそいつは、久本と逢った時から健介の胸に蟠まっている事柄だった。プロレタリア作家である以上、強い意志と行動とで自分を高めることが必要だ……ということは健介にも分っていた。そして常にそうありたいという要求を、自分にむけていた。が、何かしら、腹の底からその要求に沿い得ないものがあり、それが健介をたえず苦しめていた。
――もしも自分がやるとしたなら、一体どうなるだろう？ と健介は時々考えてみるのだった。――――…………………………………………………………、とうてい今までのように「小説」は書いていられないだろう……そうなれば純然たる政治家になるよりほかかない。だが、おれは政治家になれるだろうか？ なれそうもない……おれにとって文学を手放すことは、生命を半分失うようなもんだ！
しかしその後では、また強く思い直すのだった。
――いや、やるのが本当だ。……そうした行動を回避していて、何のプロレタリア作家か？
その二つは、いわば永久に交ることのない二つの平行線のようにいつも胸の中で格闘しつづけ、それが健介をずっと落着かせなかったのである。だが、とうとうその平行線のどっちか一つを取らなければならない時が来たのだ！
胸の中では、二つのものが激しく格闘し、健介は息苦しさを覚え、自分が歩いているという感覚をも失っていた。
「どうかね、君の考えは？」
小沼がうながした。
もっと積極的な行動をとれば、ものの観方も変わってくるし、したがって書く物もちがってくる……それは事実だろう、しかし……？
「君のいうことはよくわかる、しかし……」
と健介は息苦しさの中からようやくいった。
「おれには、そうなる自信がない。……おれは、もっと下の仕事をやって、日常的に自分を充実させたいんだ。そして自然に気もちや行動がそこまで行った時にはおれはやる！ しかし、いまは……いまのおれにとっては、いきなりそうすることは一そく飛びで、危険だ……」
しゃべっているうちに、健介は自分の心が熱してくるのを感じた。が、小沼がそれをさえぎった。
「いや、同じ事だよ。」と彼は頑固にいった。「ただ、気もちのもち方一つだよ。」
「いや、気もちだけじゃない……生活的な問題だ、と思うんだ……！」
健介は感情が昂ぶり、思わず大きな声を出した。
「生活？ おれにはよくわからんな。」
小沼はチラと眼を健介にむけたが、その眼の中には幾分さげすむような色がうかんでいるのを、健介はみてとった。小沼は、急に思いだしたように調子をかえていった。

「……断っておくが、おれは別にどこからも命令をうけて、君にそういったんじゃないよ。ただ友情から、そうした方が君のためだろうと思ったんだ。恐らく久本だって、そうだろうと思うんだ……」
友情――その言葉は、棍棒のように健介をぶん殴った、よろめくような思いが、一瞬間、全身をかけめぐった。
――おれは久本達也の人間的なふかい友情の中で、階級的作家として育った。そして小沼は、久本に次いで離れがたい友人だ……それだのに、おれは二人の友情を裏切った。……おれ達にとって「友情」とは、単に人間的な附合いだけではない、それを…………のうえに発展させていくことが、本当の意味での友情だ……それだのに、おれは……!? 後悔と焦燥が、健介の胸にうずまいた。………二人は、郊外電車の停留所へ出た。
「とにかく、よく考えておき給え、……おれは、他へ廻わるところがあるから、ここで失敬。」
小沼は、そういうと停った電車の方へ、そそくさと走って行った。電車は小沼を一人のせると、すぐ出た。健介は取残されたような思いで、ぼんやり電車を見送っていたが、やがて自分を取戻して電車道を横切った。
――久本に一度逢おう。そして自分の意見をきいてもらおう……その上で態度をはっきりさせても遅くはないだろう……!

四

「ちょっと。」
後で、女の声がした。健介がふりむくと、栄子と香月トミ子が電車通りを横切って、追いかけてきた。健介は二人の様子が変だったのでギクリとし、立ちどまって、
「何だ?」と思わず声に力をいれた。
「先生が……捕まったんですよ!」
トミ子の顔は青ざめて、やせた頰を涙が流れていた。健介は、瞬間、眼先がくらみ、足許の地面が揺れたような気がした、一寸の間は言葉が出なかった。
「いつですか?」
健介は、つとめて自分を冷静に保とうと腹に力を入れて、きいた。
「今日、午後四時頃です。……わたし逢う約束だったものですから、行ったんですよ。そしたら突然洋服をきた四五人の男が路地から出てきたので、おやッと思ってみると、その中に久本さんがいるんです……わたし、それを見てすぐ引き返えしてきたんですけれど、あなた達の会合の場所がわからなくて探しまわって……でもいい所で逢ったわ。小沼さんは?」
「いま、そこで別れた……電車で新宿の方へ行ったが、残念だなア、たった今なんだ……」

「電車で？　じゃ、わたし追っかけてみるわ、心当りもあるから……」
「じゃそうしてみて下さい。」
そして健介夫婦は、ひょっとしたら小沼が家へ帰えってるかも知れないから寄ってみよう、と約束し、停留所でトミ子と別れ、省線の駅に向って急いだ。
小沼の家では、明るい電灯の下で母親が一人でぽつんと坐って、縫いものをしていた。
「まだ帰りませんよ、今夜はおそくなるっていってましたが……」母親は玄関に起ってき、小さな顔をキョトキョト振りうごかして、健介夫婦をかわるがわるみつめた。「……何か、心配なことでもおこりましたか？」
「いや、別に……」
健介は心配はないといい、もし小沼君が帰えったら、久本が夕方捕まったということだけ告げて下さい、と頼んだ。
「久本さん捕まりましたか、へえ……！」
母親は首を振り、とがった口をポカンとあけ、語尾をながく引っぱった。
健介はこの母親の心に余計な衝げきを与えないように、ごくなんでもない調子で「お寝みなさい」をいって、外へ出た。外へ出ると、緊張した気もちを割って、はじめて溜息が出た。
「あいつ……とうとう捕まったか……！」

健介は、独り言をいった。
「残念ねえ。……久本さんは、あなたに逢いたいっていってたんですって……逢っておけばよかったわねえ。」
傍らで、栄子がグズりと鼻をならした。健介は、不機嫌に黙りこんだ。——
その晩、小沼は帰らなかった。中島も一緒に。そしてそのまま姿をくらましてしまった。……三日後には、福田をはじめ文化団体の指導的なメムバアが次々と…………。が、小沼は姿をくらましたので、運よく…………れた。
文化運動は、この嵐で機関車をなくした形だった。多くの人々は、足許に危険を感じはじめた。危険は、人々の気もちをかきみだし、はげしく動揺させた。ある者は危険から急に遠退き、右翼的な意見を出しはじめた。ある者は、興奮のあまり、一層危険を助長するような……な絶叫をつづけた。人々は、落着きなく「右」に「左」に動揺した。
健介の心の中にも、その振動ははいりこんできた。が、彼は「右」にも「左」にも、はっきりと自分を現わすことができないでいた。そしてただ、小沼三郎と最後に逢った日のことや、久本に逢えずじまいになったことが時々強く思い出され、はげしい自責の念にかられるのだった。
——おれは、ひょっとしたら……大変な裏切り行為をしたのではあるまいか？
その疑惑は、火になって胸を焼いた。

健介は、例の女との連絡は大会準備の時連絡がきれたままになっていたし、団体の仕事もほとんど常任委員会に出席するだけだった。で、彼はいつも浮かない顔つきをしてい、何事にも消極的にしか行動できなかった。

その状態は、健介にろくな作品も書かせなかった。いつもその場かぎりの、米代稼ぎの原稿を書くのが精一杯であった。いや、それすらも満足には行かなかった。

――同じ、金に困るにしても、自分が積極的な行動をしていれば、張りもあるだろうが――と思うと、自分が情なかった。彼は、醜い自分に唾液を吐っかけ、ありとあらゆる罵倒をあびせてもまだ足りないといったような、はげしい自己嫌悪と絶望を感じた。

「おれは、駄目だ！」

健介は、無意識のうちにそう声に出していっていることが、時々あった。

妻の栄子はそういう健介をみると暗い気もちになり、腹の底から溜息をもらした。

「あんた、小沼さん達のようになる気なら、なったっていいわ。わたしは、別に止めはしない。しかし、わたしには到底ついて行けないから、そうする時は離縁してもらうわ、その方があんたの気もちの負担が軽くなるでしょうから。……わたし、あんたがそうして毎日原稿も書けず、いらいらしてるのが、とてもみちゃいられない……」

またある時は、涙を流してくってかかるのだった。

「……こうして貧乏して、苦しんで行って……あげくのはてわたし達は、一体どうなるんですか⁉……をもっと勇敢にやるならやるようにしなければならないし……やらないんならやらないように生活をもっとどうにかしなければ、一緒にいるわたしがつらい……」

健介夫婦はそういう話し合いから、時々はげしい喧嘩をひきおこした。喧嘩は、たいてい些細な事柄から起るのだったが、原因はもっと深い所にあるような気がした。つまるところ愛情の問題――健介は、妻が「貧乏」を口にするのは、彼女にはっきりした階級的信念がないからだ、という思想にたえず苦しまされた。そういう時、やはり文学をやっているか、あるいはその組織的な、事務的な仕事に興味をもつかして作家団体に加わっている細君をもった、何人かの仲間達の事を考え、そうした夫婦関係が理想的なのだと思い、自分達夫婦がいつも趣味や信念のくいちがいからしじゅう喧嘩をくりかえしているのはたまらないことだ、地獄だ！　と思った。

そういう時、健介の胸には、家庭という殻を背負っている重みが強くのしかかり、たえ難くなり、家庭を離れたいという気もちがしきりに湧くのだった。はげしい喧嘩をした時には、健介の気もちはすぐそこに飛んでいき、夫婦は何度か口に出していった。

「別れよう。」

「別れましょう……わたし達、どうしても性格が合わない

んだわ、これまで散々苦労してきて……あげくのはてが、こうなるんだ……？」
栄子は顔中を涙でぬらし、一緒になって以来四年間、一日も気もちの楽な日がなかったことをつぶやく……貧乏、しじゅう捕まりはしないかという不安………、そして八カ月間の刑務所行き……苦しい差入れ……出てくると、またやるとか、やらないとか……やれずにいるのが妻君の罪でもあるかのような人々の眼、口ぶり……そしてまた……………………貧乏……あげくのはてが別れる……
家庭が重荷だ……!?
「わたし出て行きます……だけど、わたし、あんたと一緒になるために親兄弟に叛いて家を出てきたんですからね、いま更うまく行かなかったからって、親の家には帰えれないんですから……家へは、知らさないでください、お願いですから。……わたしは、どうなったって構わない。しかしいまの姿を、親兄弟に見られるのは死ぬほどつらいんですから」
「どういうわけかね、それは？」
「これが、女の気もちなんですよ。女は、一旦境遇がきまれば、身も心も一緒くたに打ちこんでいるんですよ……わたし、遊びや冗談で、あんたと一緒に棲んできたんじゃないんですよ……それだのに……」
健介は、そういう妻の言葉から何かしら一生懸命なもの、真けんなものを感じ、打たれた。だが、その一生懸命さは、何かしら固い矛盾にぶつかって羽ばたきしているような気がした。
『妻も傷ついている―』と、健介は思った。しかし、それをどうすることも出来ない自分であることを思い、健介は暗たんとした気もちに襲われるのだった。――

小沼は、姿をかくしてからも、時々それと思われるような指導的な論文を、文化団体の機関紙に匿名で書いていた。その論文は多く、…………の後に作家団体の中に発生した右翼的な傾向にむけられたものだが、しかしその筆法はあまり神経質で、公式主義をふり廻わしさえしたので、却って右翼的傾向を反ぱつ的に助長した。そして論文の調子には、あせりがめだっていた。
姿をかくしてから半年目に、小沼は突然、百枚ばかりの小説を、本名で普通雑誌に発表して世間を驚かした。
――小沼はやっぱり小説を書きつづけていたんだ！
健介はそこに、久本達也によって提唱されて以来の指導方針を、自己の作品の上に、もっとも精力的に遂行している姿を見出し、しばらくはその新聞広告の「小沼三郎」という活字が、小沼の姿そのもののようにみえ、圧倒されて息もつけなかった。が、しばらくすると健介は、小沼の身の上を案ずる心が、徐々に頭をもたげた。
――こんなことをして、大丈夫だろうか？
二三日の後、健介は道で小沼の母親に出逢った。母親は

小さなまげの載っかった頭をふって、いった。
「あれは今度、小説を書いてくれましたで助かりましたよ……だけど、あれがお金に困ってやしねえかと思うと、わたしゃとても使う気になれません……ええ、なれません。」
健介は、小沼が大胆に発表した理由が、単に階級作家としての名誉心だけではなく、別な所にあったのだ、ということを発見し、胸が熱くなるのを覚えた。
母親は小沼が居なくなった後も、ずっと一人で同じ家に住んでいた。小沼の部屋だった八畳の間は、いつもきれいに掃除がしてあり、机の上には必らず何かの草花がさしてあるのだった、あたかも小沼が今日にもヒョイと帰ってきても、すぐ机に向って仕事ができるように。そして机の上には、インクと原稿紙と灰皿までが、きちんと揃えてあった。
「一人ぽっちの暮しはさびしいでしょう？」
健介が慰さめの心算でいうと、母親は、
「いいや、別に淋しいとも思いません。」とかぶりをふった。――「青森から、三郎の友達で、やはりあちらで捕まって四年の懲役になった人のおッ母さんが、いまこの近くに来ていますで、わたしゃ、その方と毎日往き来してますよ。ですから、淋しいことは何もありません。……今も、その方の所さ行って、お互に田舎言葉でしゃべくってきましたよ。ハハハハハ！」

母親は、息子とそっくりな、赤ん坊のような笑い方で、口をつき出して笑った。
「ただね。」と母親はつづけていった。「あれが丈夫でさえいてくれれば……と願ってますよ。ほんとに、そればかし願ってますよ。」
健介は、この息子思いの気丈夫な母親のまえに、ろくな仕事をしていない自分をさらしているのが気恥ずかしくなった。……『この親にしてこの子あり』という古い言葉が、これほど現実にあてはまる親子を、健介はかつて知らない。しかも、この深い親子の愛情の中にプロレタリア的な真実がある！
だが、この真実が、それから一週間後に悲劇に代わろうとは!? 健介は友人の家で夕刊をみてはじめて小沼の「急死」を知ったのだが、その死骸をみるまでは、どうしても信ずることができなかった。……………
……、…………………… ……、…………… ……………
「死骸」になっていたのであった。
不幸な母親は、息子の「急死」を隣家のラジオのニュースで知ると、とるものもとりあえず、地理もよくわからない市内の……へかけこんだ、そして長い時間を費してようやく「息子」を受取り、家につれかえると、以前息子が使っていた部屋に寝かせた。母親は、気も狂わんばかりになっていた。彼女は髪をふり乱して息子の「死骸」にとりすがり手首を、胸を、頬を、首を、額を、所きらわず両手で

撫でまわし、オロオロ声をしぼって叫びつづけた。
「おお、………………………もう一度息を吹き返えせ……もう一度息を………！」
誰も、母親を止めなかった。親戚の者がみかねて起っていき、母親を死骸からひきはがそうとしたが、彼女は離れなかった。
「皆さん。」と母親は叫んだ。「わたしは決して気は狂いません。……ただこんな……………… ………、残念でなりません……！」
そして母親は、また息子の手首をもみほぐすように動かし、尖った頤をゆすぶって、「……もう一度息を吹き返せ！」と叫びつづけるのであった。
健介はラジオや夕刊で事件を知って駈けつけてきた仲間にまじって、そうした情景を、ただ茫然と見守っていた。あまりに異常な、だがそのくせこんなにも早く、もろくやってきた「悲劇」を前にし、健介は何の言葉も出ず、悲しみの感情さえ湧いて来なかった。胸はガラス板のように硬ばっているだけだった。そして健介は仲間と一緒に、ただ乾いた眼で、静かに眠るように横臥している友を、見守りつづけた。
友は、その…………「死骸」にもかかわらず、まったく静かに、やすやすと眠っているようであった。恐らく文化運動が急げきに活動しはじめた時から二年近く、その最前線に立って進んだ友は、一日としてゆっくり眠ったことはないであろう。
だが今こそ君は、役目を終って母親の許にかえってきた。部屋の中は、君が一年前に使っていた通りになっている。本棚をもたないので、壁ぎわに垣根のようにならべてある本は、そのままだ。君の頭のすぐ先には、君が古道具屋で買ってきた机があり、机の上には灰皿と、インク壺と、原稿紙と、雑誌と……そして花がある、花は、君のお母さんが今朝さしかえたばかりらしく、新しくて薄赤い、清楚な花だ。
君の傍らには、君の愛するお母さんが、君の手首をとって撫でている。そのまえには、作家団体の婦人作家や細君連がかたまってい、その後には大勢の仲間がならんで、君を見守っている。
友よ、君の任務は終わったのだ。……静かに眠れ！

五

小沼三郎の葬儀がすんでから半月あまりは、健介は小沼の作品を出版する用事で、毎日歩いた。それは健介がかつて小沼と個人的に最も近しかったし、作品も多く知っているというところから団体が彼に任命した仕事だった。
だが、団体では、文化団体の指令で別に小沼三郎全集を出す計画があり、健介もその委員に選ばれていた。しかし、全集が出し得るだろうか？　団体は、新組織以来出版

物の大半は……………………、経済的に手も足も出せないような状態にある。それに……につづいて小沼の急死などで打撃をうけ、すっかり足並がみだれている。そこで作家団体は小沼全集を出し、それによってみだれた足並に最後的な興奮をかきたてようというのだ。

健介はしかしその仕事とは別な――つまり小沼の母親の生活を保証するための出版の用事で、忙しかった。

ある日健介がそういう用事で銀座に出ると、鋪道で、島木に出逢った。――島木はどっかの大学の教授で、久本達也とも知合いだったし、小沼三郎の熱心な愛読者でもあった。

二人は喫茶店にはいった。

「小沼君は、残念なことをしましたねえ。」と島木はテーブルにつくなり、度の強い近眼鏡の奥からまじまじと健介をみつめていった。――「もう一度『煙害』のような大作を書かせたかったなァ……どうもあせりすぎたようだ。小沼君があせったのか、それとも運動があせったのか、それは僕などには何ともいえんが……とにかくあせりすぎた、という感じだなァ。……あの、新聞に写真の出ていたお母さんは、どうしてますか？」

健介は通夜の時の母親が狂気のように息子の死骸にとりついて「もう一度息をふきかえせ！」と叫びつづけた有様を、手短かに話した。

「そうでしょうね……え」と島木はいって、溜息をついた。――「で、後の生活の方は？」

健介はとりあえず出版の方で金を作っている。今もその帰りだ、と話した。

「そりゃいい。」と島木はいった。「……君なんかが、友人としてそうしてやることは、僕のような傍観者にとっても大へん力強い！」それから急に何か思いついたように言葉の調子をかえて、「……小沼君なきあとは、君なんか大いにやってもらいたいですねえ。小沼君と君の友情の点からも、また君のえつ歴のうえからも！　僕は大いに期待してますよ……！」

健介は、胸につよい一撃を感じた。……数日まえにも、彼は団体の若い作家から、同じような意味の言葉をあびせかけられた。――小沼三郎は死んだし、……久本直系の作家で残っているのは君一人だ！

指導的メムバアが殆んど捕まってい、小沼の急死によって最後的な痛棒をくらわせられて浮足だっている状態が、人々をかきたてているのだ――誰か出て、この混乱状態を救ってくれ！　そしておれ達の行くべき方向を、腹の底から納得できるように示してくれ……さもないと、おれ達は泳ぎつかれて、溺れるよりほかない……！

夕方、健介はひどくつかれ、空ッ腹をかかえて家へかえった、栄子は、彼の姿をみると、待ちかまえていたように、せっかちに訊ねた。

「お金できた？……」

「ああ忘れた……」
健介は朝出かけに、金を作ってかえると約束したのを、すっかり忘れていたのだ。……ずっと引続いた貧乏ぐらしの上に、小沼の死とその後の用事で出歩いたために、もう質入する品物もなくなっていた。
栄子は、それを聞くと急に憂鬱そうに顔を曇らせ、クフンクフンと鼻をならした。
「……困ったわねえ、お米がきれてるのよ。」
「今夜のは？」
「ないんです……」
健介は、一寸の間、栄子の眼のおち凹んだ顔をみつめていたが、やがて物もいわないで自分の部屋へはいると、机のまえに坐った。空腹感が胸につきあげ、それが気持をいらだたせた。栄子が足音をたてないで、部屋に入ってきた。健介の傍に立ち、ぼんやりと四辺を見まわしていたが、やがて独り言のように呟いた。
「……わたし達しょっちゅう貧乏してきたもんで、ずいぶん人からお金借りたわねえ……久本さんや小沼さんは、よくゆう通してくれたっけ……しかし今は、お金借りるようなお友達は一人もいない……」
「バカ！　くだらない事をいうな！」
健介はふりむいて、怒鳴った。……が、ふいに久本や小沼が自分達夫婦に示してくれた友情の深さが、健介の胸に湧きあがってきた。久本の五、六年にわたる交友、小沼との短いが、決して浅くなかったつきあい、……二人は、健介に対して精神的に好意をもってくれたばかりではなく、物質的な事柄にさえ深い友情を示してくれていた……健介は、この二人のすぐれた仲間を友人にもったことによって、作家的にも、人間的にもどれだけ高められたか知れない、と思った。おれはもっと別な人間になっていただろう……だのに、おれはもこの二人を友人に持たなかったならば、おれは、二人の最後の友情に強く応じなかった！　おれは混乱した文化運動を正しく発展させることに努力しないばかりか、一緒になって押し流されようとしている……
——おれは、救い難い人間だ……虫けらも同様だ……！
不意に涙が出てきた。
「あんた、泣いてるの……!?」
妻がとつぜん叫んだ。そしてけげんそうに、机の上に頬杖をついたまま涙をポタポタ落している健介をみつめていたが、やがてはげますようにいった。
「……これ位の苦しみが何ですか！　貧乏なんて、わたしたちちっとも恐わかないことよ。確りして頂戴……しっかり！」
栄子は荒い足音をたてて、部屋を出ていった。次の間で、空にちかい簞笥をカタコトいわせていたが、やがて台所口から出ていった……彼女の足が路地を曲って、消えるのをきいて健介は不意に身を起した。
健介の頭の中を、一瞬間、文化運動の姿が急行列車のよ

うに通った……文化運動は強い力にひっぱられて、急速に進み、拡がり、そして暗礁にのりあげた。久本達也や小沼三郎の境遇——殊に小沼の不幸な「急死」は、文化運動そのものを体現している！　これは日本の歴史の大きな一断面だろう、そして転換期の苦悶の姿なのだ！

　だが苦しんでいるのは、久本や小沼ばかりではない、運動が暗礁にのりあげたために、方向を見失った人達の苦しみも、いわば転換期の苦悩の姿なのだ……としたら……？

　健介は起って、部屋を歩きはじめた。

「もしそうだとしたら……」健介は部屋を歩きながら、呟いた。——「おれは久本や小沼のように強く振舞えなかったことを、いたずらに嘆くことは止めよう！　この苦しみに堪えてゆくことだ、そしてそれを自分の作品に生かすことだ。畜生め！」

　健介は何者かに向って、拳をかためて飛びかかるような身構えをした。

『……畜生め！　この打撃を、苦しみを、仕事のうえに生かさないで、何を生かそう！　そうだ、おれは、久本や小沼の後が継げなかったからって、いたずらに嘆く必要はないのだ……忍耐づよくこの歴史の苦しみに堪えてゆくこと、それがいま、おれにとって肝心なことだ！　その中にこそ、久本や小沼の友情が生かされるのではあるまいか……』

　台所でドサリという音がし、栄子がはいってきた。

「電気つけないで、何をぼんやりしてんの？　お腹が、すいたんでしょう……いますぐ拵えてあげますから……」

　栄子は、頓狂な声でいい、いたわるような眼つきで、健介をみた。……健介はふりかえって、夕方の薄闇の中に浮いている栄子のやせて尖った顔をみ、ここにも運動の困難な破片があると思った。

（一九三四年八月「中央公論」）

草場

金親清

一

太田為蔵という地主から借りているお峯の稲田の南隣りは、鍵の手なりに長くひろがった雑草に蔽われた空地で、その向うにはポプラや竹藪やえぼたの木で区切られた勤人向の家屋がつづいている。さらにその向うには次第に街の屋根がこまかく重なりながら四方にひろがっていた。雑草で蔽われた空地は、同じ地主の所有で、三年前の秋までは、矢張りお峯と夫の太平治が耕作していた田であった。其処は家敷（宅地）にするのだからと明け渡しを迫られたのは次の年の三月で、不意のこととて驚いたがそれでもあっさりと地主の要求を容れたお峯とその夫だった。が、それ以来、其処はただ草の伸びるにまかせた空地として、別に家の建ちそうな気配もなかった。

八月上旬の或る朝、汽車の線路の向うに離れた村の百姓女二人が、小川づたいに、その空地の草を刈りとるために、目の荒い大きな竹籠を背負って遣って来た。小川には、四方の田に供給ずみの水が澄み、その水面を水すましが細い足を四本伸ばしてはすっすっと泳ぎすすんでおり、たなごやだぼはぜが同じ方向へ頭を向けて、非常にすばやく底のちかくを泳いでいた。まこもの根元から時折り飛び込む蛙が、わずかにその水面をかき乱した。夜になると田甫中が蛙の鳴き声でさわがしくなるのであったが、今はまるで地の底から洩れてくるような名も知れぬ虫共のじーんという鳴き声が、微かにしかしひっきりなしに満ちわたっていた。籠を背負った二人の百姓女は、囚人笠に似た、茸を逆さにしたような笠を被り、その笠で顔をかくしているように、俯向きがちに足早に進んできた。首元には汗をふくために手拭いを巻きつけ、どちらも地下足袋をはいて、大きな乳房をめくら縞の大型の模様のついた、薄い仕事着で包んでいた。籠の中には、詰め込んだ草をしばり付けるための太縄と鎌とそれからすり減らされた砥石とが入っていた。彼女等の足下の畦道は、石のように硬く踏みかためられていたが、まだ夜露でしめっていた。彼女等の遥か後方には、よく首くくりがあるといううまんがら松が西の方へ枝を伸ばしてうずくまっていて、その根元の叢の蔭から白く乾いた水門の柱が光っていた。微風が時折り青々とひろがっている稲の葉をさやさやと鳴らしながら吹きわたっていった。水にも格別の不足もなく、二番の草取りもすんで

いたためか、百姓らしい姿は殆んど見当らなかった。それでも、水でさわいだ田植え前後の、苦心を物語るものが二つ残っていた。一つは、お峯の苗代田と小川の間の畦に立っているはねつるべ、それからずっと東の方を流れる枝流の向うに、四本の竹で支えられている莚張りの水番小屋であった。その名ばかりの小屋の遙か向うには、田甫の涯を区切って低く一直線に伸びている断崖と、それに平行して灰色にそびえ立つ刑務所の外壁が、所々に頭を覗かせた獄舎の角ばった屋根や煙突などで、晴れ上った明るい午前の空と地上とをさえぎっていた。太陽はもう余程高く昇り、じりじりと灼きつけるような光を斜めに放射していた。南に面した獄壁は一きわ白くかッと輝いていた。それにそうて田甫の方へ下る急勾配のつきるところ、其処の草の上には、誰か畠からぬすんで喰らったらしい西瓜の片割れが捨ててあった。その西瓜の赤味の残っているところには、片足のないきりぎりすと四五匹の虻が共同で甘い汁を吸いとっていた。きりぎりすが少しずつ動くたびに、虻は一時に飛び立って、ぶーんぶーんと唸った。刑務所の向うの畠に取かこまれている部落に住む老ぼれた鶏の仲買人が、軍鶏を一羽ずつ入れた鳥籠を、天びんで担いで勾配をゆっくりと下りて来た。その老人の身辺にも、どこからついて来たのか、虻がぶんぶん唸り廻っていた。が、老人は別に追い払おうとはしなかった。経木の海水帽で額をかくした彼の馬面は、人一倍赤く、どこかお能の面にでもありそうな無表情を浮べていたが、さすがに老年らしく一種名状しがたい陰鬱さと疲労とをあらわに示していた。疲労は明らかに蟹股のその足どりにも、如実に示されていた。そのすがたは肉体の老衰のためばかりでなく、天びんと一緒に重い気苦労がのしかかっていることを想わせた。彼は崖のふちを廻って、県道の方へよたつきながら出ていったが、虻の唸りはしかしやっぱりつき纏っていった。虻の唸りは何時の間にか田甫中を襲うていた。それは太陽の高く昇るにつれて益益増えてくるように思われた。獄門を出された一群の青い囚人が、短銃を帯びた白服姿の二人の看守に引かれて、白く輝く壁にそうて這ってきた。が、まもなく反対側の坂道を典獄の邸の方へと登っていった。草むしりでもさせるつもりなのだろう。至るところに動きのない、沈鬱の気がみなぎり渡っていた。ただ虻だけが、いかにも忙しげに唸り廻っていた。

籠を背負った二人の百姓女は、目指す空地につくが早いか東西にわかれて草を刈り進んでいた。ほんの一足おくれてお峯は、田を見守るために西の方に離れた自分の家から這って来た。若しもお峯が今一足はやく苗代田の傍についたならば、二人の草刈り女と丁度そこに渡してある船板橋のあたりで、ぱったり行き遇ったであろう。そのように出遇うか、それより以前にお峯がそこにつき、そして彼女時有の忠実さで稲の出来栄えを見たりして愚図ついていたな

らば、後から橋をまたいで来る彼女等は、どんなに気まずい思いをしたであろう。何故かなら、彼女等は隣村のもので、しかも誰の所有とも知らぬ空地の草を盗み去るつもりで来たのだから。が、今はもう悠々と彼女等は鎌の切れ味を示していた。そうしてその鎌の先にも虻が唸っていた。

二

「おれ、また荒して」

後の文句は出なかった。お峯は、船板橋――船板の一枚を渡したもの――のところで、棒立ちに立ちすくんでいた。眼の前の苗代田と向い合っている早稲餅田の稲株が、四方に押し靡がれたようになっていた。その根元には、くっきりと人の足跡が残されている。それが子供の足跡だとわかると、お峯は四辺を見廻しながら、心の中で呟きつづけていた畜生という言葉を、もう一度口の外へ洩らした。子供はどこにも見られなかった。そこで一層口惜しさが募った。彼女は首を傾け、溜息を吐いた。それから急に痩せ細った皺だらけの手をひろげて、荒された稲株を元のようにさせようと骨を折った。やがて断念めたように其処から離れようとして苗代田の方へ廻って来たが、不意に立ちどまって、踏み荒された方の田の、早稲餅の穂をさがして眼を近づけたりした。穂はまだ青く水々しかった。穂はそしてまだほんのちらほらとしか見られなかった。しかしよその田の早稲餅にくらべておくれているという訳ではなかった。むしろ稲の出来栄えは順調で、背丈も大体そろっていて、潑剌としていて大株だった。苗代田の稲も、その向うに三枚つづいている田の稲も、四辺の田にくらべれば同じ位いのいい生長ぶりを示していた。お峯にはこれまでに日に二度ずつは必ず見廻りに来ていたので、そのことだけはよく分っていた。どう考えても分りかねることがあった。一つは、田植え前から自分が寝ついたので、横着者の太平治や、義理づきあいで手を借して呉れた親戚の連中に任せ切ってあったにも拘らず、よくもこんなにいい稲が出来たもんだということ、今一つは、毎日きまって荒される餅田は、なぜ荒されるだろうかということであった。この二つの疑問はしかし解けなくとも、彼女は一向平気だった。何故かなら、荒されている現場を見たら腹を立てればいいし、それに稲の出来栄えがいいということは、そのことを知るだけで充分に満足させられたので。で、お峯は、早稲餅の穂を見たり苗代田の畦から腕を伸して、稲よりも高く伸びているひえ草を引抜いたりしている中に、やっぱりうちの稲が一番もてる（大株の意）という満足感に支配されはじめていた。すると長い病苦の元であった胸までが、急にすっきりとして来て、晴々とする思いが泉のように湧き上って来た。で、彼女は、いかにも人のよさそうな明るいひびきのする声で、

「ああ、いい場所めっけましたねえ」

と草刈り女に、話しかけた。その女は、めくら縞のやや若そうな方の女であったが、汗のにじんだ大きな尻を向けたままで、

「ええ……」

とだけ、とぼけたような声で答えた。

「牛屋へ納めるですかい」

お峯は、虻の飛ぶ畦に立ちどまり、その時ややこちらに向きを変えた女の横顔と、鎌の先とを見較べながら、重ねて訊いた。その声は一層親しげにひびいた。

「連隊ですよ」

と草刈り女は、同じ調子で鎌を使いながらも、いくらか声を和らげて答えた。が、うるさがっていることは、顔を向けようとしない態度で分った。

「ああ連隊ですかい」

お峯は、自分に納得させるように呟くと、だまり込んだ。そして、鎌の動きを凝視めつづけていた。牛屋というのは、お峯の縁つづきになっている田代という牧場のことで、連隊というのは、草刈り女達の村つづきにある鉄道連隊のことであった。牛屋は牛に喰わせるために、連隊はいくらかつながれている将校連の馬のために、よく乾燥させた草を買いとっていたのだ。

鎌は実に手ぎわよく駆使されて居た。草はさくさくと音を立て、平らに根元から刈り進められていた。刈られた草は、篭に詰め込む時に都合のいいように、最初刈ったところから今鎌の進んでいるところまで、刈り手の股の下をくぐって長々と溜め重ねられていた。草は、雑草と言っても大別すると二種類で、つたに似た細かな葉を一面に這わせているのと、その葉の間から真直ぐに伸び上った一尺程の葉の先に、白っぽい小さな花らしいものをつけている奴、これが大して生えてはいないのだが、どことなく可憐に目立っていた。刈り手にとっては、細かい草ほど篭に沢山詰まるので、先ずそのことだけでもいい場所だとしなければならなかった訳だ。

「草がいいから刈りいいでしょう」

と不意にまたお峯が声を投げた。が、殆ど同時に、鎌がきらりと閃いて草上の空気を横に切り、しッという刈り手の声が飛んだ。虻を追ッぱらったのだ。虻はしかしすぐまた刈り手の面前で唸り廻っていた。で、彼女は初めて顔をお峯に向けた。そして、赤黒い大きな唇の間から真ッ黄色な歯をむき出して、にやりと笑った。「ええええ、こんな草なら刈りいいですとん」

そこでお峯も思わず微笑み、歯のない歯茎を赤くむき出して「いい場所を見つけましたね、こんな所は外にはありませんよ」

「怒られませんでしょうね」

「ええぇ、大丈夫ですよ、どうせ空地ですかんね」

この答えに安心したものか、刈り手はまた黙々と刈りつづけた。でお峯も邪魔をしては気の毒だと思い返し、口の

先まで出ていた言葉を飲み込んでしまった。毎年、田植え前にはお峯もかならず草を刈り廻って来た。その草は売るのではなく、田へ肥料として埋めるためであったが、しかしお峯には同じ草刈り女としての苦労や心持ちが、年々に積み重ねて来たその経験を通してよく分った。で、すべて同情をもって快く眺められるのだった。

「たんとお刈りなさいましょ」

お峯はこう別れを告げて、小川の方へ歩き出した。家へ帰るつもりだった。苗代田に追いついたところで彼女は自然にまた笑顔になり、もう一人の草刈り女に声をかけた。それは同じ別れの挨拶であった。そして、こちらに返って来た向うの言葉も、まるで申し合せてあったように単調にひびいた。

「ええ」

三

単調で平凡なのは、草刈り女の言葉ばかりではなかった。お峯自身が凡そそのような存在ではなかったか。総べて平凡人の常として、時別の悩みらしいものを持たず、したがって何事に対しても深い考察力を持たないということが〃そのままお峯にも当てはまった。で、彼女に比較するならば、夫の太平治は流石に一家の主人らしく秀でたものに恵まれていた。彼の弱点はしかし遙かに女房よりも、身体を使うことを嫌がるというその習性の中にあった。で、彼はお峯が田の見廻りにいって帰って来る間、家でごろりと寝そべっていた。彼は六尺褌一つで、毛むじゃらな足をひらいて真ッ直ぐに伸し、半白の頭はお峯の病熱をさます為に買った水枕の上にのせていた。そして、高いいびきを立てて眠り込む前には何時も、一月十八銭で取っている「日刊千葉」という小新聞を、老眼鏡ごしにゆっくりと愛読していた。で、そういう時誰かが出て来て、おやお休みですかい、とでも言おうものなら、彼は速座に、ええ仕様がありませんや、と答えるにちがいない。仕様がありませんやというのは、仕事はしたくとも無いので困るという意味だった。彼は百姓というよりも、若い頃から主として仕事師の下で労働していたので、お世辞のいいものには『頭』などと呼ばれてもいた。で、肩から両腕にかけて青地に朱で刻んだ紅葉の入れ墨が、未だに見事にくっきりと浮んでいるのは、いわばそういう時代の記念であった。

お峯が低い下駄の音を立てて家に戻って来た時、太平治は眠りからさめて間もない赤味がかった眼を大きく開いて、何を考え、何を凝視るともなく、天井を見上げていた。

「あああ、くたびれた」

お峯はわざと声高くそう言うと、土間から上框に上り、右手を枕にして横になった。で、彼女の顔には深い窪みが目立ち、高い骨ばった顔や頰骨の間にかくれた眼は、黒い

かげに覆れて全く光を消してしまった。そして横になると同時に身体は海老みたいに縮まり、両手はあばら骨の露出している渋紙色の胸に、無意識的に当てられていた。例の持病――彼女の考えに依れば、十五年前に十二指腸を患らった時、虫を下すためにあまりに激しい薬を飲み過ぎたのが原因で、それ以来どうも胸が板のようになって苦しい――という苦痛が感じられていたのだ。そしてそれは疲労の後に襲う一種の癖ともなっていたのだ。彼女は暗い顔を俄に歪めて、溜息を吐いたり、微かに喘いだりしていた。

「どうだい、俺が言った通りだっぺや。水は要らなかっぺや」

障子の向うから、唸るような声で、太平治が叫んだ。

「うん」と素直に首肯いてから、荒されていることを思い浮べて、お峯はつづけた。「でん、また野郎共が、這入りやがってねえ、……どうしたもんだろうか?」

「どうしたもんだろうかって、何故這入るか汝や考えてみねえかえ」と太平治はまるで呶鳴りつけているように声を高めた。「俺にや此処にこうして寝てても、よっく分ってらあい。あすこに竹がぶっ刺さっていたっぺや。あの竹ん先へ蜻蛉がとまるかん、餓鬼等が這入り込むだ。それに違えねえ!」

なる程、とお峯は思った。が、それと知ってて、家で寝そべっている亭主が憎らしかった。

「そんなによく知り抜いていて、どうしてその竹をふん抜いて来なかっただかい?……」と彼女は胸に両手を押しつけたままで言った。「昨日だって、見廻りにいった筈だのに」

「忘れただい」と太平治は、真実のことを打ち明けた。

お峯はしかしそれも横着がさせた結果だと思ったので、忘れない前に引き抜いて置けばよかったのに、という意味の言葉で応酬した。すると、太平治はひどく怒って、呶鳴りつけた。

「何を吐かしゃがるんだ。抜いて来お!…手前えに見せてやるべと思って、わざと残して来ただ! 抜いて来お!」

「ああ、嫌だ嫌だ。死んだ方が、よかったっけや!」

お峯は、がばと起き上って、土間へ下りながら、意地でも抜いて来ると言った調子で、半ば嘆くような声で呶鳴り返した。彼女はそしてまた笠のひもを頤に結んで、外へ出た。外はかあッと白く、黄色く、燃え立っているように見えた。

四

お峯はぴんと胸を張った。その時、年に四五度しか帰って来ない一人息子の誠治の顔が、ちらりと彼女の頭の中を通った。伜は東京神田の印刷工場に働いていて、月々十円ずつ送ってよこしていた。

踏み荒された早稲餅田のへりから三尺程はなれた稲の間

に、稲よりも七八寸長いと思われる程の枯れはてた細身の篠竹が一本、確かにやや傾きながら立っていた。それを見出すと同時にお峯は、おや本当にあったと心の中で感嘆した。すると途々抱いて来た夫に対する激しい憎悪感が、ふッと一時に消え失せて、喜びとも悲しみともつかない複雑な気持が湧き立って来た。次の瞬間には、それははっきりとした夫への信頼となって、彼女を支配していた。で、彼女はまた胸の苦しさも忘れてしまって、裸足になり、稲を巧みにさばいて田へ踏み入るや否や、力まかせに竹を引ッこ抜いた。

「婆あ、何してんだい？」

と太い朗かな声が後からひびいた。地主の太田為蔵が自慢の猛犬を連れて遊びに来たのであった。主人の手に握られた綱ののびるだけ前に進んだ犬は、ふッふッと鼻を鳴らしながらお峯の尻のあたりを睨んでいた。それと気づいたお峯は、声も出せずに、顔色を変えて振り返った。

「太郎、これ！」

犬は主人の叱声に恐れて、船板橋の方へ寄っていった。お峯はほッとして田から出た。が、まだ犬を恐れていた為に、それから婆あと呼ばれた為にひどく相手に不満を感じていたので、直には言葉が出せなかった。

「蜻蛉でん、つかむ心算かえ、モッチ棹なんか持ってさ」

と太田は、大黒様のような笑顔で叫んだ。そして、くッくッと苦しさうに笑いつづけた。お峯は モッチ 棹と言われて、握りしめて居た竹を見直した。成る程、たしかに、空に向いていた先の方に、モッチが三寸程黒くなってこびり付いている。蜻蛉をとるための悪戯道具だということは、最早疑い得なかった。で、彼女はもう一度夫の洞察力に感嘆した。

「わたしゃ子供じゃねえから、蜻蛉なんかつかみてえとは思やしませんけんど」と彼女は半分太田に対する不満を含めて言った。「何しろタチの悪りい餓鬼等がいましてね、こんな棒を田ん中へ刺して置いて、かかった蜻蛉なんかをはがしに入るでしょう、毎日のように稲を荒すんですよ、それをどうでしょう、家のお父っあんが見ずにちゃんと知り抜いていて、ぶん抜いて来おッと言ったもんで、来て見てわたしゃ魂消ましたよ。たしかにこの通り、ちゃんとありましたもんでね」

「ほほお、成る程……」と太田は相手の生真面目さを顔に反映させて、「成る程、そういう訳かい、……あれで、おぬし等が親爺や、頑固もんで手がつけられねえけんど、却々悧巧もんだかんなあ！」

太田は橋を渡りたがる犬を引き戻すために、うんと息張りながら低い声でもう一度成る程と繰り返した。お峯は、首を傾げ、瞳だけを足許の下駄に落して、黙ってきいていた。が夫が褒められていると思うと流石に嬉しかった。ただ、婆あと呼ばれたことが今度はおぬし等に変ったことに、軽い反感を覚えたが、直にそれも消え去った。

「ほんとにタチの悪りい餓鬼等がいますねえ」と相手から受けた屈辱感を餓鬼等の方へ移そうとでもするかのように、お峯はつづけた「百姓の子供らならこんな悪悪戯はしねえでしょうが、何しろ其処にゴタゴタ建った家の者は、みんな他方の者でしょう、だから旦那も知ってのように、何をするか分りませんですよ！」

「ほんとに困った奴等だなせえ」

太田はもう一度犬を引き戻しながらこう言って同情を示したが、しかし何となくそっけないものが感じられた。それは旦那の知ってのように、と言われた通り、元は田や畠畑であったその辺の家の者が塵芥を田へ投げすてるということで、再三太平治からその家主として苦情を持ち込まれた覚えがあったからだ。が、お峯は皮肉を言っているのではなかった。ただ心から悪戯小僧を呪ったに過ぎない。で、表面ばかりの苦情だとは思えたが、それでも太田が小作人としての自分の誠実に対して同情を寄せてくれたことが、何となく嬉しかった。その嬉しい気持が、今まで考えもしなかった言葉を、ふいと唇の上に洩らさせてしまった。

「空地で、何処の者だか知らねえけんど、草を刈ってますよ旦那？」と、お峯はそっと眼を上げながら言った。

「ああ、今し方、三蔵が寄って知らせて呉れたよ」と太田はにやりと笑って答えた「刈ったっていいさ、どうせ土入れさせべえと思ったところだから」

「へえ、そうですかい」

お峯は、ちょっとバツ悪そうに俯向くと、腰を曲げて、手から竹を放して、両手で下駄を掴んだ。ふッふッと犬はまた鼻をお峯へ寄せた。

「それ、歩け歩け」

太田は犬の先に立って、腹と二重になった顋を顫わしながら畦づたいに空地の方へと進んでいった。畦には虻が唸っていた。それで黄色い斑点のある流石の猛犬も、——と言って喧嘩して勝ったということは誰も聞いたためしはなかったが——白く輝いている横ッ腹を激しく揺すぶっていた。そして一層荒々しく鼻を鳴らしつづけた。その犬に忽ち追い越された太田は、手拭い地の浴衣に包まれた丸い肩を、ぐッと後ろに反らして、まるで犬に引きずられて弾んでいるように見えた。お峯は船板橋にしみ込んだ陽の熱さを尻に感じながら、下をゆっくりと流れる小川の水で足を洗っていた。虻が背中や顔の横を唸り廻っていた。けれども彼女はたった一つの新しく生れた想念を追っていた。それは従兄三蔵は相変らず、イケ狡るく立廻っている、だから親類でもちっとも油断してはならぬ、ということに就いてであった。

五

太田為蔵は、気まぐれで犬を引ッ張って遊び廻るような

性質の男でないことは髄かだった。若しもそのような男であったなら、今日彼の保持するほどの財産は、減らすとも増すことは出来なかったであろう。一口に言うならば、彼は目先の利く抜け目のない地主だった。それ故に、これまでに、次第に膨脹する地元の市街の発展に応じて、というよりもそれに先んずる気構えを示して、適宜に親ゆずりの田畑を、家敷（宅地）として埋め立てたり、借り手がつきそうにない場合には進んで貸家を建てたりして今日に及んだ。万事この通りで、それがすべてうまく運び、やり方が人の意表に出て誰が見ても健実らしく見られたので、そういう人柄が自然に人々の信頼を呼び、区長を二度までしたことがあった。彼には格別恐しいという大物は無かったが、ただ強いて言えば、太平治みたいな頑固者が一番にが手であった。頑固者は時に依ると意地をどこまで張って自分の主張を貫くことがあるからだ。が、今までのところでは、幸いなことに太田の権利を侵害するような挙に出た頑固者はまだいなかった。区の集会の席上では必ず何かの問題にケチを付けて譲らぬ太平治でさえ、一度び地主対小作人として会って話せば、易々と田畑を返上して来たのだ。だから太田が、お峯を、婆あだとか、おぬし等だとか言って、馬鹿にするのも無理はなかったのである。ところで彼は、お峯の前に洩らした通り、近々の中に、法政大学の法科を出てぶらぶらしている次男のために、表面は勉強部屋を作ってやるという名目で、その実肺病の隔離部屋を建ててやろうとしていた。で、お峯の従兄の三蔵に草刈り女のことを聞いたのは事実であったが、しかし自身犬を遊ばせるという風で見廻りに遣ってきたところを見ると、矢張り何らかの打算があった。想像の許すかぎりでは、本気に家を建ててやる決心から長い間見えなかった空地の様子を見廻るべく遣って来た程次男の病勢が進行していたか、それとも稲が実り始めたので自分の所有田だけでも検分するつもりでか、多分その何れでもあろう、と推察されもする。というのは、夕方になるときまって顔の青白いひょろりとした次男がよくなついているらしい犬を引いて田甫へ出るのであったが、ここ半月程一日も姿を見せたことがない。それに太田の稲の検見は有名で、毎年丁度今頃からやられる例になっていたのだ。が、彼の場合はすべて、口に出す言葉と腹の中とが喰いちがっていたので、誰にも真実のことをつかむのは甚だ困難なのだ。

　彼が犬に引きずられながら空地についた時、草刈り女は二人とも所有主が現れたとは知らなかったので、一度ずつちらりと視線を走らせたが、次の瞬間にはもう元のままの状態に返っていた。手前の年老いた方の女は、刈りとられた草の根の上で片足で鎌と柄を踏みしめて、刃を砥石でこすっていた。水代りに時々唾を吐きつけていた。めくら縞の女は、相変らず大きな尻をこちらに向けて、一生懸命に刈り進んでいた。刈られた跡は、バリカンで刈られたように美しい、細かな草の茎が極めて短かく揃っていて、それ

が十坪ちかい面積となってひろがっていた。が、背中から腰にかけて汗が黒くにじみ出ている以外には、疲れているらしくは見られなかった。その姿勢は殆どお峯が最初に見たときと変らず、いかにも慣れきった草刈り女にふさわしく、鎌とそれを動かす腕の敏活さにも拘らず、他の動作はすべてどっしりと落ち付いていた。で、見ように依っては悠々とも、図々しいとも、また鈍重だとも感じさせるのであった。若しやくざな、或いは不慣れな刈り手であったら、上体をもっと上か下へ苦しげに折り曲げ、足を忙しく運ぶか、動作全体をもっと懸命に、もっと荒々しく見せたであろう。顔は依然として笠にかくれていたし、向うむきになっていたのでよけいに見られなかったが、しかし注意力は充分に四辺の草上にゆき亘っていた。それは鎌の先が右に向って進んでいたかと思うと、間もなく左に向って延び、そうかと思うと急にその中間をねらってさくさくと刈り進み、これらの変化に応じて足が蟹の鋏みたいに動くや否や刈られた草を纒め、さらにそれに連れて腰から上が自然に向きを変えることで分った。とにかくこうして彼女等は、一分一秒でも早く互いの距離を押しちぢめることに依って、空地全体を蔽うている草を刈りとろうとしていたのだ。で、今はもう彼女等は、相変らずつき纒っている虻さえ、眼中にないものの如くであった。

　太田為蔵とその愛犬太郎はしかし、みずから進んで自己の存在を彼女等の前に示した。

「お前等、その草、どうするだかい？」

　と手綱をたぐり寄せ、畦の上に真ッ直に立ちどまって太田は叫んだ。その声の調子や厳粛な態度は、かつて区長時代に多くの区役員を前にして何らかの困難な問題に就いてなした説明や意見を述べた時にのみ、はっきりと現れたところのものだった。で、犬も威嚇されてか温和しく彼の足許に尾を垂れてしゃがんだ。尻を向けていた女は驚いて振り向いた。

「れ、連隊へ納めるですよ！」と女は鎌を休め、例の黒い丸い顔に黄色い歯をむき出して答えた。「刈っちゃいけねえですかい？」と女は直ぐこう訊き返した。

　太田はそれには答えず、丁度砥ぎ終った年老った女の方を凝乎と見た。が、其処では、何を言ってやがると言わんばかりに、砥ぎたての鎌でもう刈り進めていた。きちきちきちきちとばったがそちらから飛んで来る。

「連隊じゃ、一貫目いくらで買うかね？」

　と刈っては悪いとは言わずに、同じ調子で太田は訊いた。その時、こちらの女の鎌もまた動き出していた。が、女は素直に答えた。

「四銭ですよ旦那！」

「十貫目で四十銭、二十貫目で八十銭か？」

　犬が主人の代りにおどかしてやるぞと言わぬばかりに、鼻を激しく鳴らした。が、それは女に対してではなく、鼻先で唸り廻っている虻に対してであった。女はまた尻を向

けた。
「ざッとお前等の眼で見て、どれ位い刈れそうかね？…」
太田の声がいくらか低まって、慣れなれしげなひびきに変った。
「二十貫目ぐらえは刈れますね……」
と女が答えた。
「乾してから納めるだっぺね？」
「ええ」
「二日ぐれえ乾すのかい？」
「これから持ってって、……そうですね、夕方まで乾しといて、それからまた明日の午前一杯ひろげて置きますね」
「なる程、……四十銭とるにゃ大変だっぺ、阿母？」
太田はここでまた相手に対する呼び方を変えた。が、阿母は軽蔑を示そうとしたのではなく、むしろ同情と親しみの念を現わそうとしたに過ぎなかった。
「何しろ、こうして担いでゆく時にゃ重いけんど、乾すとからからからになっちまいますかんね」
と女は答えた。
すると此の時、向うの女が笠の下から渋紙をもんだような顔を覗かせて、声をかけた。
「一ぺん運んで来ぺでん？」
声までひからびてしまったように、ひどく皺嗄れた声だった。が、此方の女はひょいと笠を擡げてにっこり笑い、
「うん、そうしべや阿母さん！」
と、急に元気づいたような快活なひびきのする声で答えた。
恐ろしく図々しい奴等だ、と太田はまた歩き出そうとする犬を引き寄せながら考えた。——尤もこれでなければ、よそ村は荒されねえ訳だ。
向うの女は、腰を伸ばして、片手でさすりながら、まぶしそうな眼つきで太陽を見上げていた。（太陽は、彼女の時計の役目を果していた）ちらりとその姿を見ると、此方の女も太田に尻を向けたままで立ち上り、鎌を持たない方の手で腰骨を叩いた。太田は、自分が煙たがられているな、と思った。そこで彼は、力一杯に犬を引き戻し、最初に見せたような威厳ある態度に返って叫んだ。
「俺は、この地所の持主だけんど、お前等がこの草をだんまりで売ってもうけたとて、ちっとも苦情を持ち込む心算はねえ！　（ここで、彼は不意に振り返って、お峯が苗代田の稲を見ているふりをして、一心にきき耳を立てている姿を見た）むしろ俺は、誰に刈らしても同じ草だから、そっくりおぬし等（と四度彼は呼称を変えた）にやってしまいたい！　だが物事には筋道というものがある、見たところおぬし等は、よそ村の者のようだが、一体え何処から来たのだい？　先ず、これをはっきりきいて置かねえと俺の立場が苦しくなる！」
「…………」
「…………」

女は二人共何故か黙っていた。で、太田は予想通りに、線路向うの佐賀村の者だと見当をつけた。佐賀村と言えば、鉄橋の下をくぐって来る小川の水をやるやらぬで、水のすくない田植時にはきまって争いの相手となる部落つづきの村であった。

「線路の向うから来ただっぺや？」

と太田は皮肉った。

「いいえ、都森（みやこもり）ですよ！」

とこちらの女が、のっそりと左手に置いてある籠に歩みよりながら、しかしはっきりとした声で答えた。太田は凝乎とその女の横顔を見守った。都森といえば線路向うは向うでも市街の末端に位いする一部落であった。しかもその部落と鉄道連隊はいわば目と鼻の間にあったので、草の取引きをするには如何にも都合のいい地位なのだ。で、本当に都森の者かな、と太田は思い返してみたが、疑念は霽れなかった。彼はしかしこれ以上此の女達をいじめても仕方がないと思ったので、丁度また犬が引ずり出したのに任せて足を運びながら、嘲りと皮肉と威嚇と同情とを同時にこめてゆっくりと叫んだ。

「いや、都森の者で俺も助かったよ、佐賀村の者だと、俺は大目に見ても、ほかの者が承知しねえからなあ。全く、実際、水の問題じゃ此の部落は散々いじめ抜かれて来たのだから無理はねえ話さ。……でも俺は、見て見ぬふりしてるから、おぬし等はたとい都森の者であっても、あんまり大面して歩かねえ方がいいよ！」

太田はこうして何の目的かは知らずに、虻の群り飛ぶ畦づたいに、東の方へと犬に引きずられていった。草刈り女達は黙りこんだまま刈った草を抱えて籠に詰め込んでいた。お峯は太田の理窟は尤もだと思ったが、しかし何となく彼女等が気の毒になってきた。で、先刻話をした女の方へ声を投げた。

「阿母さん達、この暑さに、重ッつらかしに！……其処へ乾して置いて、乾いてから運びなさいよオ！」

しかし答えはない。草刈り女達は、ただ、せっせと詰めた草を、できるだけ籠の底に押し沈め、すなわち出来るだけ重くして担ぐために、汗を流していた。

（一九四三年四月）

II 評論

「文学者に就て」について

——貴司山治へ——

中野重治

最近君が東京朝日新聞に書いた「文学者に就て」という短い感想を読んで僕はある黙っていられないものを感じた。「文学者に就て」——これは君が自分でつけた題でないかも知れないが、そのことは今の場合どうでもいい——は短い感想にすぎないが、一つのはっきりした主張を持っていて、その主張に僕は正面から反対なのである。君の書いたすべての言葉に反対だというのではない。しかし問題の本質的な点ではことごとく反対なのだ。

文学の発展の道が今日いろんな力ではばまれていると感じていることでは君も僕も同様である。またそのことについて、自分としてはこのはばむ力を押しのけて文学発展の道を少しでも切り拓いて行きたいと思っていることでも君も僕も同様であると僕は思う。文学発展のための革命的流れがある程度強く断ち切られて、君のいわゆる「転向作家」が珠数つなぎに出て来たという事実は、この流れに対する、同時に文学発展そのものに対する新しい攻撃を呼び出している。この攻撃の現れ方はいろいろにあると思うが、その最も時徴的なものを僕は二つに分けて見たいと思う。一つはごく悪質な、そのものとしての攻撃精神にみちたもの、他の一つはごく善良な、文学発展の道を守ろうとしながら事実では意志に反してそれを攻撃しているものという二つである。前者は、文学発展のための革命的流れの一時的敗北に対してこう言ってのしかかっているものである。「ざまを見やがれ！」「分ったか！」、「革命が起ったら俺なんざほんとに殺されると思いこんでたのだぞ！」この攻撃は最も時徴的なものの一つではあるが、その質の悪さが愚かなまでに純粋なため、論理的には却って弱いのである。こういう攻撃をしている人達は、彼等がプロレタリア文学・革命文学の擡頭におびえた時も、それの一時的敗北に噛みついている今も、芸術家・文学作家としてかなり低かったし低いのである。彼等は勝ちほこっているが、実は文学の相対的堕落に勝ちほこっているのに過ぎない。（勿論君が言ってるように、こういう誤りも、革命的文学運動が犯したかつての過ちに部分的には基づいているだろうし、彼等が今後その仕事で文学発展のための道へ出て来ることも一般には可能である。）

しかし僕は、こういう素朴な攻撃よりも、自分では本当に文学発展のために働いていると信じ、そのことで多くの

人を同じ道へ勇気づけながら召集していると思いこんでいる人々が、自分の主観から独立にしている攻撃の方を一層悪質なものに感じずにはおられないのだ。攻撃とか悪質とかいっても第一の場合とは気持ちは違う。しかし気持ちを抜きにして同じ言葉を使えば、この方が一層攻撃的で一層悪質だと僕は思うのである。君の感想もそういうものの一つとして僕は受け取った。

君が文学の発展のための道に立っていることとやわが文学上の友であることなどは分り切ったことだから触れない。そうでなければこんな手紙は初めから書かないのである。

「文学者に就て」で君が問題にしているのは全体として「転向作家」だ。第一に君は、君自身の転向の内容をある意味で明かにして、転向作家に対する世間の非難をすなおに受け入れている、特に板垣直子の『転向作家の第二義的生活から、第一義的な文学の生れる筈はない。かれらは転向せずに某々の如く死ぬべきである。』という趣旨の非難」に「一番打たれた」と言っている。第二に君は、こういう非難に対して「黙っている」「知らん顔をしておし通してしまおうとするかの」ような友人たちの態度を「非常によくない！」と言っている。転向作家も作家として生きる以上「依然勤労大衆の前」に立っている、「これらの大衆の面前でもし黙ってわれわれが何事かを始めようとする」ならばそれは「許されないやり方だ」、「きのうまでおのれの階級の作家としてわれわれを遇して来た労働者たち」に対して彼等（われわれ）は「自分の道徳的性格が弱かったということ」を語らねばならぬ、「しかし、なおかつ、君のために働かせてくれ、とありのままの自己の姿において、約束を結び直さねばならぬ。」と言っている、第三に君は、「転向作家の文学者としての更生」の可能を説明して、「それは文学の仕事においてわれわれはなおブルジョア文学に優位する方法と理論を失ってしまってはおらず、特にその方法による作品の制作において、文学全体を前へおしすすめることが出来る自信を持っており、この仕事に自己を就けうるということである。」と言っている。そして実例として村山の「白夜」と窪川鶴次郎の「風雲」とを引いている。第四に君はインテリゲンチャの分析をやっているが、このへんの君の言葉は僕には十分には分らない。とにかく君の結論はこうである――転向作家は「その全行動において明確に理想的にプロレタリア側に立ち得てはいない。その点でかれらは（われわれは）敗れたのである。故に政治的にも、又文学的にも、第一義的たる能わない。」彼等は第二義的存在である。しかし第二義的存在であるにも拘らず「なお十分にわが文壇に優位ある立場を失わないで」活動して行ける。彼等は転向はしたが敵へ移ったのではない。「かれらはプロレタリアの立場、多数者の利益の立場に、自分の文学上の努力を一致させようとしている敗れたる必死の実践者であるといえるのである。」要するに、君は、第一義的生活を失った（と君のいう）転向

作家たちに第二義的作家として生きる道を与え（そしてそれでも今の文壇の中では文学を引上げるクレーンであるそうである）、そのことで転向作家をある種の非難から弁護すると同時に彼等を激励しようとしているものと僕は理解する。それらすべてに僕は反対なのである。

一体、転向作家のあるものが「知らん顔をしておし通してしまおうとするかの如く」とか、頰冠りで押してしまおうとしている「かの如く」とかいうことはどういうことなのか？「かの如く」というからには実はそうでないかもしれないと君自身にも思われるのだろう？　そうでないかも知れないことは、世の中のことすべて、特定の条件の下で以外一般には問題にされないのではないのか？　頰冠りを云々するとすれば頰冠りしているかいないかである。頰冠りしている転向作家は何かになり下っただけである。頰冠りしていない作家については、彼が作家としての第一義的生活へ乗り出しているかどうかが検べられるだけである。

第一義的生活と僕はいうのだ。「文学者といえども、政治的節操を守っていいし、守らなければならぬことはいう迄もない。それをわれわれに守る力が足りなかったということ、このことをまずみずから承認することなくして、転向作家のいい分などというものはありはしないのである。」ところで君は、それについて黙っている人々について、彼等はそのことを「肚の中では誰よりもよく承知している。世間に向ってそれを口外するのは、生傷にふるる思いがし、苦杯をなめる思いがし、機会はあってもいい出す勇気がないのである。」と言っている。しかも君の見つけた彼等の沈黙（？）の「最大の理由」はこうなのである、「今一つ、黙っているもっとも大きな理由は、誰もまだ政治的節操をみずから破ったという苦悶を、売り物にする勇気がなかったのである。」苦悶を売り物にする勇気があれば、それで、政治的節操を守る力が足りなかったということを「まずみずから承認」したことになるのか？　それこそ空手形ではないか？

僕は、転向作家については——頰冠りしていない限り——第一義的生活のみが求められると考えている。それはそのことが、彼等にとって一般に可能だからである。しかし君は反対に、彼等に第二義的生活の可能を説いて、それをすすめている。君はこういっている、「しかし板垣氏いうように、転向作家の生活は第一義性を一応失った生活である。転向作家の産み出す文学は、プロレタリア階級が要求している文学の観点に立っていうならば、随って今のところ一応も二応も第二義的な作品である。」また、「故に〔彼等は〕政治的にも、又文学的にも、第一義的たる能わない。これは大きな首枷である。この制約の中で現在すぐその立場や、作品を厳密にプロレタリアートによって清算せられてしまうならば、転向作家の文学作品はブルジョア文学の一種類だと極印を附されても仕方がない場合に到達するかも知れない。」これらの言葉のうち、君自身の立場

とは多少違ったものとして出されているかのような「プロレタリア階級が要求している文学の観点」とか、「現在すぐ」とか、「厳密にプロレタリアートによって清算せられてしまうならば」とか、前の引用中の「明確に理想的にプロレタリア側に」とかいう言葉は僕にはよく呑みこめないが、しかしそれが何を意味するにせよ、転向作家の作品が君のあげたような理由で「一応も二応も第二義的な作品」であったり、「ブルジョア文学の一種類だと極印を」打たれたり、彼等が「文学的にも第一義的たる能」わなかったりするとは僕は絶対に思わないのである。反対に僕は、もし転向作家のそれぞれが、文学上の一般的可能を自己の文学実践に生かし切るならば、決して消されぬその転向の事実にも拘らずすべて第一義的作家たり得ると信じている。

しかし君は、転向作家の文学的新生の道を第二義的文学者としての道に見つけただけではない、そのこととの根拠を彼等の過去、彼等の生活経験に見つけている。反対に僕は、それを彼等の第一義文学者としての道に、そのことの根拠を彼等の将来、彼等の文学実践に見ている。

君はこういっている、「即ち、転向作家は転向しても、なおかつ多くのブルジョア作家よりも文学の仕事において前を歩いている。ある意味ではますますその足どりは確乎となり、歩程はのびるであろう……転向作家の社会的生活経験と、敗れたりといえど、文学のための命がけの政治的経験をしてきたということが、その文学の土台となるのである。一般のブルジョア作家よりも、転向作家の方がまだまだより多くのものを文学に対して支払っている。生活におけるこの支払高が芸術の中で物を言うのである。」

今の転向作家達が、「命がけ」だったかどうかは知らず、多くの経験をして来たことは事実である。また転向以前、多くの誤りがあったにせよ文学発展のために革命的に寄与して来たことも事実である。それを支払と見ることは出来る。しかし、真実支払だったかどうかはこれからの受払勘定できまるのだ。そしてこの受払勘定そのものが支払って独りでにはいって来る性質のものではない。それを作家が自分からあえて努力して取らねば受取れぬ性質のものだ。

見給え。駄目な作家の多くがいかに多く支払っているか！　彼等はしばしば彼等の全人間的退化をすら支払ってしかもマイナスを受取っている。革命的文学運動のある発展期に、ある種の作家が「革命が起ったら自分は殺されるのだ。」と本気に信じたという エピソードは、実に彼がいかに多く支払ったかということに就てのエピソードではないか？　そしてその同じ作家が今日ごろ文学の一般的堕落という勝利に酔いしれているという事実は彼があの大きな支払高に対してマイナスしか受取っていない事実の生きた証拠ではないか？

もしここで彼が多少のプラスを受取ったのであったならば、今後彼はそのことでより以上のプラスを受取り得たの

である。そして、しかしここでかくも明らかにマイナスが受取られたことからして、このマイナス（これもまた支払いだ）からこの次彼の受取るものが再びマイナスでしかないことが予測されさえするのである。支払高はそのものとしては決して「芸術の中で物を言」いはしない。過去の経験はそのものとしては決してより高い「文学の土台」とはならない。「物を言う」のではない、物を言わせるのだ。足どりが確かに「なる」ものか！　それを確かに「する」かせぬか、歩程を自分で「伸ばす」か伸さぬかがすべて今後の仕事の仕方一つにかかっているのだ。

僕は君が僕の考え方に賛成するだろうと思う。しかしそれなら僕は、まだ肝腎なものがぬけていると言わなければならない。君の支払勘定にあらゆるものはのっているが、最大のもの――「転向の事実」はのっていない。君の言葉によれば、これは、転向作家たちから第一義的なものを奪ったし、奪っているし、将来にわたって奪っているものである。そのため君に「むしろ死ぬべきであった」という非難にさえ頭を垂れさしたものであるそれがのっていない。君のは大福帳が間違っているのだ。「文学のための命がけの政治経験」を目たたきと共に葬り去った最大の政治的経験は君の支払勘定にははいらないのか？　「敗れはしたが命をかけた経験ではない」「命をかけた（？）のに自ら敗れたという経験」――これこそがすべての作家もかつてなめなかった第一義的な敗北、深い恥にみちた最大の支払なのである。そしてそのことによってそれが、もし我々がそうする為めに努力し通すならば、第一義的な文学実践の最も強い土台の一つとなれるのだ。「詩人窪川鶴次郎の書いた『風雲』。この作品の出来栄えについて批評はどんな風にでも出来る。しかし獄中相聞のこのたえなる人間生活の場面を、その経験を以て如実に描きうるブルジョア作家があれば見たいものだ。」

「批評はどんな風にでも出来る」？　しかし僕らは、どんな風にでも出来るかも知れないもののうちで、ただこうとするしかない最高の、第一義の、最後の批評を求めているのではないか？　「その経験を以て如実に描きうるブルジョア作家があれば見たいものである。」――その経験を以て如実に――そんなブルジョア作家の持っているような経験を殆んど全く持たない僕なぞは、彼等のある種の作品のようなものを「その経験を以て如実に描く」ことなぞ絶対に出来ないのであるが、彼等の作品に対して「批評はどんな風にでもできる」とは決して思わず基本的にはただ一つであるとする文学批評の眼を向けて行く所以は、その作品を通してその作家が辿りつくべきである唯一の客観的真実へ、批評するもの自身その批評を通して同じく辿りつかねばならないしまた辿りつき得る――少くとも近づき得ることを知っているからである。作品の批評について作家の経験を問題にすることは出来るし、作家論の多くの場合そのことは必要でさえある。しかし作品の文学批評を作家の経

験談でカバーすることは、作家に対する侮辱であるともに批評家自身に対する侮辱でもある。

転向作家が転向によって失ったのは第一義的生活であって第二義的、第三義的生活はまだ残されていると見るなぞは甘い考え方である。彼等は（僕等は）、第一義を失ったことで第二義も第三義もすべて一挙に失ったのである。それは彼等が、それまで、社会的に第一義的に生きることを自己の第一義的生き方としていたからである。だから彼等は、譬えていうのではあるが、第二義的に生きようとして僅かに第三義的に生きて来たような作家よりもずっとずっと下へ、どん底まで堕ちたのである。問題はそこから再び這いずり上がることにあるのであるが、這い上がる目標は絶対に第一義的作家生活に置かれるべきであり、置かれずにいることは出来ないのだ。彼は第二義から下、番号のつくすべての段階よりも底いところにいるが、それは第二義・第三義から堕ちたためではなく、第一義から堕ちたことですべてぶっ通しに堕ちたためである。もし目標を第一義に置かないとすれば、それは第二義にも第三義にも第十義にも置かないことであり、第一義から堕ちたこと即ち転向そのことについて頬冠りすることである。第二義的として生きろと言うならば、転向作家から作家として生きるすべての道を剝ぎ取って、上への道しるべであるかのようにして永久の奈落へ導くことでしかないのだ。

個々の転向作家がすべてこのことに成功するかどうか僕は知らない。それぞれの主観的客観的与件によってそれは違って来るだろう。しかし一般にはそれが可能なのである。一般的にある作家が自己の実践に生かし切れなかったとしても、それは事志と違ったのであって努力した作家の恥ではない。第一義的作家としての道は、すべての転向作家に一般に可能なものである。結果としての失敗は特殊な不可能である。

僕は個々の転向作家が転向の事実について黙っていることをそれだけとしていいことは思っていない。しかしそれは、彼が依然としてその面前にいる人民大衆に向ってあやまることをそれだけとしていいことと思っていないのと同様である。まして自分が道徳的に弱かったことをまず自ら認めて、第二義的な作家として改めて契約を結び直すなぞは、事実上の頬冠りを坊主式懺悔でごま化することである。

僕はある人々の前科者に対する態度を思い出している。盗みをした男に対して雇入れを拒むのが彼らの常である。俗人の仕方としてこれはうなずけないわけではない。しかし盗みをした男は、その自己批判を、何か変質者でない限り、再び盗みをしまいという戒律をつきぬけて、盗みそのものの社会絶滅の方向へ進め得るのである。そしてこのことを見ることに文学作家の本来の眼があるべきではないのか？　労働者階級独裁の国では行刑制度そのものの建前がそうであることは君の知ってる通りである。

君の言葉によると、板垣直子の転向作家非難は世間の評判が悪かったそうである。君自身も一方でその言葉に君として強く打たれたといっているが、他方で彼女の図式主義を誤謬として指摘している。君の書いたものに現れている限りでは、僕も彼女の言葉を正しくないと思っている。しかし彼女が「転向作家は転向するよりも転向せずに小林の如く死ぬべきであった」といった時、彼女の求めたものは転向作家の死ではなくて第一義的な生活であったこと、彼女の言葉が片寄ったものであったとしても、その片よった表現へ彼女を駈りたてた激情の源泉に対して彼女が強い肯定の立場に立っていたことは君自身見逃していはしないか？　「第一義的な作家として死ぬべきであった」という非難を受入れながら「第二義的に生き得る」（そんなことはあり得ない）ということでその非難を撃つことの矛盾を君自身どうしようというのか？『改造』一〇月号の「文学指導の問題」という文章の中で「指導的批評家の欠如」について君はこう書いている。

「……けれどもこの側面だけを見て満足するというわけには行かないだろう。日本の今日のこれらの若い文学は著しく地についたリアリズムの観点に立ちえたということによって、漸く出発点に身がまえしたのだと理解せねばならぬだろう。いわば『オン・ザ・マーク』の段階である。これに出発の号令を与えるのは――即ちそれらの作家の文学内容を発展させ、質的に高めて行くようにしむけるのは――批評家の仕事でなければならない。然も現在そのための有力な全面的な指導理論は批評家によって新たに概括され、確立されてもおらず、さしあたって、ちょっとその望みも見出せないのである。あらわれつつあるプロレタリヤ的な、農民的な、小市民的な進歩的な多くの若い作家にとって、このことはやがて一番大きな不幸となってのしかかって来るにちがいない筈である。……しかし一時代の文運を一人の力で前へ動かすほどの批評家は、偉大なる作家と同様、やたらに輩出するものではない。天才的な作家・批評家は、時代のために育つ前に、まず生れるものである。現在、文学指導のための全面的な理論の確立を託しうるほどの批評家の出現が、さしあたって望めないといったのもこの故である。」

君の空想しているような「批評家の出現がさしあたって」望めるか望めないかは知らない。しかし君が、批判と激励とにつき刺されて第一義的作家生活への新生の「オン・ザ・マーク」についた転向作家たちに第二義的生活への「出発の号令を与え」ていること、「即ちこれらの作家の文学的内容を畏縮させ、質的に低めて行くようにしむけている」ことは事実である。（『改造』、の論文で君の言ってることは新しい若い作家達に関している。しかし新しい作家達について何かを言う発言の基礎は転向作家について何かをいう発言の基礎以外のものではない。しかも僕らは言葉の単純な意味に於ても若い作家である。）そしてそのこ

とで君は僕らに、一つの「大きな不幸としてのしかかって来ている」のだ。天才的な批評家は「時代の為に育つ前にまず生れるものである」かどうかも僕は知らない。しかし僕は君のこういう意見と戦うことによっても天才的批評家を育てもし生みもしたいと思っている。僕らの微少な仕事も時代を造って行く。僕らは時代を造る一粒である。そして時代のために育ち生れる才能とは、時代によって育てられ産み落された才能のことであろう。

君は実に謙遜で、善良で、正直で、潔癖で、弱気である。「僕などは多分の俗物で面の皮あつく」とか、「良心の苦悶は不幸にして大きくはなかった」とか、「僕が作家として、社会的制約を越えて〔?〕社会主義的リアリズムの日本での実現に突進しないという非難ならば、僕は頭をたれるばかりである」とか（『文化集団』一二月号）いっていることにそれが現れているだけではない。「われわれは、ころんでもおきてもつねに大衆の前にいるのだということを忘却してはならぬ。二三の批評家の眼は眩ますことが出来る。しかし、大衆の眼を欺くことは出来ない」とか、「これらの大衆の面前でもし黙ってわれわれが何事かを始めようと」すれば（何事かを始めることは黙っていないことではないのか?）、それは「ずるい態度」で「許されない態度」で「非常によくない!」とかいっていることに一層よく現れている。

しかし、こう書いて来て僕の気づいたことは、君の出したような意見の論理的批評が大事である以上に、もし僕らが、自ら招いた汚濁にもかかわらず第一義的作家として必ず生き返ろうという信念とそのための努力との中で少しでも動揺したが最後、誤った批判の鞭の影や文学的デカタンの勝どきに少しでもおびえたが最後、弱気を出したが最後あらゆる善良な気持と真面目さとをささげたまま二度とたてないような敗北の沼地へずりこんでしまわねばならぬということ、文学発展の道に対するはばむ力とはばまれる力との綱の撚りがそういう時期へかかっていることが一層大事だということだ。弱気を出したが最後僕らは、死に別れた小林の生き返って来ることを恐れ始めねばならなくなりそのことで彼を殺したものを作家として支えねばならなくなるのである。僕が共産党を裏切りそれに対する人民の信頼を裏切ったという事実は未来にわたって消えないのである。それだから僕は、あるいは僕らは、作家としての新生の道を第一義的生活と制作とより以外のとこには置けないのである。もし僕らが、自ら呼んだ降伏の恥の社会的個々的要因の錯綜を文学的綜合の中へ肉づけすることで、文学作品として打ち出した自己批判を通して日本の革命運動の伝統の革命的批判に加われたならば、僕らは、その時も過去は過去としてあるのではあるが、その消えぬ痣を頬に浮べたまま人間および作家として第一義の道を進めるのである。

君の提案の中で君の善良さは君の弱気と弱気から来る誤

りとに結びついている。転向作家から第一義的生活への可能を奪うことによって、彼女を偏った表現へかり立てた激情の源泉への彼女自身の主観的肯定からは独立に、「転向作家達は死ぬべきであった」ということによって彼等を二度殺そうとした板垣の後を君は追っている。板垣が日本の革命的文学運動の一つの偏向に対するセンチメンタルな反撃の気弱さに引かれてし出している。「二、三の批評家の眼は眩ますことができる。然し、大衆の眼を欺くことは出来ない」ということで、君は結果として、大衆の前へ実践的に歩み出ることを避けて二、三の世間の批評家を顧慮したことになっている。このこと――それが君のような人の口から出たという事実に日本的現実の今日の特徴の一つを見ずにいられない僕は、それと戦うことでも僕の第一義的作家生活への新生の道を準備しようと思っている。僕等の身体の中で作家としての多くの仕事仲間への記憶は動く刺となって刺している。成敗は別である。

これを書き出してから後で僕は君に会って僕の考えを話しておいたけれども、暇がなくて途中で打ち切らねばならなかったし君の意見が僕らにおける一般的可能の基本的抹殺である以上、こういう形で書きたいとも思ったのである。題材の問題や「典型的な情勢における典型的な性格の表現」という問題についても、僕は君と違っているが、それは自分にもまだよく分らないし、別の時に考えて見たいと思っている。

（一九三四年三月「行動」）

創作方法と芸術家の世界観

――ソ同盟における討論から何を学ぶか――

森山啓

一、問題の重要さ

ソヴェート同盟における創作方法の再討議から学び得る事がらは多いが、特に方法と世界観との関係の問題では、私達の今後の探究も刺戟されている。それは現在次のような理由から最も大切な問題として横たわっている。

第一に、方法と世界観との関係の問題においては、旧ラップ（旧ロシア・プロレタリア作家同盟）の運動のみならず、日本における文学運動も、後に見るような誤謬や不足を示して来たにかかわらず、それを見ない人々が未だに少くないからである。新しい状勢に面してラップが組織上おかした誤謬だけを見て、その文学理論がもっていた欠陥を

見ない人にとっては、社会主義的レアリズムに関する新しい討論も、結局ソヴェート同盟の社会事情においてだけ現実的意義をもつかのようであり、日本における創作理論の真正な検討のためには生かされていない。

第二に、この問題における理解の不充分は、すでに創作方法の図式化、批評における官僚態度、方法と世界観との関係の切断、「レアリズム」の神秘化、方法の世界観への優位を説く見解等を生んで来ているし、これからも生み出すであろうからである。

第三に、この問題においては、翻訳紹介された限りでのソヴェート同盟における討論もなお究明すべきものをのこしているように思われる。

私がここでもこの論題の下で研究する所以である。

二、この問題におけるラップの誤謬

創作上の見解においてラップが示した誤謬は、外村史郎氏の訳著「社会主義的レアリズムの問題」が出て、私達のまえに一層明かになった。「新段階に立てるソヴェート文学」（組織委員第一回総会の報告）におけるキルポーチンも、論文「社会主義的レアリズム」におけるラージンも芸術の特殊性、特に芸術が他のイデオロギーへどのような関係をもつかについてラップが甚しく無理解であったことについて書いている。

ラップ指導部（アウエルバッハ達）は、作家の創作方法が作家の全体としての世界観と切り離すことができないという事実の解明にとどまらないで、それ以上に創作方法は完全にまた全体的に作家の全イデオロギー的構成に従属すると説いた。（「ラップ書記局の手紙」）。――これについてキルポーチンが次のごとく書いていることは、もはや周知のことであろう。

「芸術は他の上部構造と密接な関連の中にある。それは政治の影響と指導の下にある。社会的・政治的発展、経済、政治は芸術をも指導する。しかしこの芸術の政治への、イデオロギーへの依存関係は同志アウエルバッハに考えられているように、しかく直線的でなく単純ではないのである。芸術の複雑性に関するかかる単純化された表象の下にあっては我々は不可避的に作家に対する行政的命令に、単に思想的指導的影響が必要な場合に作家を引きむしることに来らざるを得ないのである。」(外村氏上掲訳書二六頁)

これは正しいであろうか。正しいと思う。キルポーチンは、非教化主義者であり反動主義者であったゴーゴリが、ニコライ一世の制度を擁護する目的で「検察官」や「死せる魂」を書きながら、その作品への客観的現実の真実な反映の程度が、かえってその作品をして「全ニコライ的現実の批判のための強力な武器」たらしめた事例や、小ブルジョア的人民主義の幻想的世界観をもった、ウスペンスキイのレアリズムの程度は、その作品の意義が「人民主義者と

して彼が信じていたところのものに反対なものを立証したほどに偉大であった」という事例、其他エンゲルスが教えたバルザックの政治的見解とそれに反対して顕われた彼のレアリズム等、多くの事実をあげて説明している。このことは又勿論、ゴーゴリやバルザックがその世界観乃至政治的見解において、歴史的に進歩的な階級を代表していたとすれば其創作において一層、時代の生活の真実な把握を保証されたであろうと云うことを、否定しているのではない。イ・ラージンは、過去の偉大なレアリスト達の歴史的限界をも、方法と世界観との密接な関係の観察のなかに究明しているし、私達も後にそれを一層明かに見ようとせずに居られないであろう。

　が、ともかく、一般に創造的作物への客観的真理の反映ということにおいては、創造者の方法は決して完全に、また「直線的」に、その人の全体としてのイデオロギー的構成に従属するものでないということについては、われわれは尚幾多の事実を見ることができるであろう。トルストイの観念論、そのキリスト狂信、その政治に対する拒否は、レーニンも示したように、作家としてのトルストイにも制限を加えている（社会発展の根本法則を現実のなかに見る代りに、宗教と道徳に関する説教を置いた）ことは事実だが、それにもかかわらず、彼は「きわめて冷静なレアリズム」をもって「あらゆる仮面の剝奪」を行い、矛盾にみちた「ロシア生活の比類のない諸々の絵巻物を与えた」し、また「現在の秩序に……つけられた広大な大衆の気分を重味のある力で再現し、彼ら大衆の状態を描写し、彼等の牢固として、抜くべからざる……と不満とに表現を与えることができた」（レーニン）のである。このような矛盾をわれわれはどうして、「創作方法の世界観への全的従属」によって説明し得ようか。さすがにレーニンは、この矛盾を「十九世紀の最後の三分の一期におけるロシアの生活がそれのなかに置かれていた矛盾極まる諸条件の現れ」として照明し、またトルストイの芸術家的天才をも正しく評価している。

　ひとり芸術家のみではなく、哲学者の場合においても同じような事例が見られるであろう。フランスの機械的唯物論者ラ・メトリイが、哲学は何ら政治に属するものではなく、また政治のためにするものではないことを如何に陳弁しているかを見るのは興味がある。（中央公論社版「フランス唯物論」八——九頁参照）。こんなことも書いている「社会の攪乱者は夢にも哲学者などではなかったのであり、哲学は唯真理のみを愛する者として、自然の美の静粛な観照者として、大胆不敵な真似など出来る柄ではなく、断じて政治の権利を侵害したことなどはないのである」と。このような見解は勿論、かれらの機械的、直観的唯物論の限界——非歴史的自然観、認識における実践の役割の無視等——を語るものではあるが、そのような政治的見解にもかかわらず、かれらは「娘が母親に従うように哲学は自然に

頼っている」（ラ・メトリイ）と考え、現実から出発し現実の「観察と実験の明瞭な結果」から学説をつくり上げるという態度によって、自然に対する観念的妄想を払いフランス革命を用意した彼らの唯物論を生み出したのである。またヘーゲルが思惟の最高形式としてとりあげた弁証法が、ヘーゲルの政治的見解に反して何をもたらしたかはエンゲルスが語っている通りである。でこんな場合にも、哲学者達の創造方法が、その現実に対する態度が、全的にかれらの「イデオロギー的構成（政治的見解をも含めて）に従属していた」と見るならば何事をも理解しないにひとしい。十八世紀のフランスの唯物論者たちは、ラ・メトリイもディドロも、みんなはじめは観念論の玄関を出ないで一度は僧侶をも志したのだから、もしかれらの作物が全体的にそのイデオロギーに従属するとすれば、いつまでたっても彼らは坊主の袈裟をつけているにとどまっていた筈である。が事実は、当時の社会発達の状態――わけて自然科学の勃興が、才能あるかれらをして、自然の追求へ向わせたのである。だから哲学的作物の場合にも一定時代の条件の下における哲学者たちの、天分をもっての社会的実践（学者としての社会生活）が先にあったので、イデオロギーが先にあったわけではない。

三、芸術と芸術家の社会的実践

ここで読者諸君は、最も大切なことに注意せられる。即ち、作家の創作方法が、作家の「全体的なイデオロギー的構成」に完全に、膠着的に従属するなどという考え方は、芸術というものが芸術家の現実な社会的実生活の特殊な反映であるということを見ないで、芸術家のもつ何か出来上った、現実とは無関係な「世界観」乃至「政治的見解」「思想」等を「形象化」するものであるかのように説く考え方に通じているということである。事実、第一に、そこからしてラップによる、創作方法における「唯物弁証法」の図式化が生れた。現実から出発するのではなしに、「唯物弁証法」から出発するという、全く逆立ちした方法が生れたのである。そこでは弁証法は現実を切りきざむための目盛りとなり、作家を束縛し裁断する法典になった。このことは私達もすでに書いて来たし、またラージンの論文も充分に明かにしていると思う。キルポーチンが、前に引用した文章のなかで「芸術の複雑性に関するかかる単純化された表象の下にあっては我々は不可避的に作家に対する行政的命令に、単に思想的指導的影響が必要な場合に作家を引きむしることに来らざるを得ない」と云っているのも、このためであろう。日本においても、同じ根拠から作家を引きむしるに至った二三の批評文については、すでに他の文章に書いたのでここではのべない。

第二に、またそこからして、ラップの作家達のなかには政治的見解の「卑近な形象への具体化」に安んずる人々が

出たらしい。「政治的課題」なるものに集約されているところの階級的生活的必要を、広汎な、複雑な社会生活そのもののなかに発見する代りに、スローガンの響を伝えるための人間や事件をつくりあげるというやり方である。「政治的視野は相当に広く、芸術的具体化は貧しく、図式的で修辞的である」というような例は、日本の作家、はじめたばかりの作家の投書小説や詩にかなり多く現われて来た。世界観においては相当徹底したものをもちながら、作品を書かせると、てんで目鼻のある人形をしか描けないというような作者に向っても、適当な技術上の指導をする代りに又もや問題を「世界観」へ還元してしまう。こんなやり方では、実践において確乎としたものを持った労働者にも、彼がヴァイオリンをひくのを学びたいときに、青いインテリゲンチャが弾奏の技術を教えずに「唯物弁証法」の命題をあたえるかも分らない。

第三にまた、ラップが一時おちいった誤謬「人間――それが世界である」という思想、個人心理の分析を「社会心理の理解の最良の方法」とした誤謬も、芸術に対する右のような無理解を考えると、決して偶然に起ったものではないとうなずかれる。芸術を、芸術家の社会生活の意識的な表現として理解しないで、芸術家の何か固定した世界観や、「人間」（人格）だけの反映として理解することは、「人間――すなわち世界」という思想と同様に、人間の意識や観念や表象の社会的な現実的基礎を見極めないために起り得るのである。

煩を厭わずに、念のために次のことに注意したい。

芸術は他のあらゆるイデオロギー的所産（政治、法律、道徳、宗教、形而上学等）と同様に、「人間」によって作り出されることはいうまでもない。

「しかし（とマルクスは教えている）ここにいう人間は彼等の生産力の一定の発展によって、またその最高の形態に至るまでこの生産力に相応する交通の一定の発展によって、制約されているところの、現実的な、行動しつつある人間なのである。意識とは意識のある存在以外の何物でも断じてあり得ない、そして人間の存在とは彼等の現実的な生活過程である。」だから人間がもつ表象、観念、意識、イデオロギーなどは、マルクスやレーニンや乃至は旧ラップの指導者の発案によってわれわれ人間に授けられるようなものではなく、人間達の「現実的な諸関係および活動、かれらの生産、かれらの交通、かれらの社会的政治的及び実践の、実在なまたは錯覚的な、意識的な反映」（ドイチェ・イデオロギー）なのである。

政治も芸術も、「弁証法的唯物論」の世界観も、ひとしく一定の社会階級の人間達の生活を表現しているものであることを見忘れると、政治的課題や、「唯物弁証法」を現実から引き離して、芸術の上に君臨する何か神秘な、万能な力であるかのように考え、お題目として唱えるにいたる。このような見地においては、福本イズムの全盛時代に

は、この万能のイズムによって芸術を咲かせようとし、そのイズムの凋落に際しては見事に狼狽するというような結果しか生まれない。「……とファシズム」というスローガンをだけ唱和して、「ファシズム」の現実的進行の如何を具体的には見ず、やがてこのスローガンを改めるに至るというようなのもそれであろう。このこと自身が、一定の階級の世界観や、その政治的要求が、現実における階級実践の意識的表現であり、現実の進行とともに発展するものであることを語っている。

唯物弁証法は、科学上の新発見がある毎に一層豊かな内容をもって発展しうるものであることについては、すでに私達が教えられている通りであるが、作家個人の世界観というものも無論決して固定したものであり得ない。それは作家の社会的階級的生活のなかで形成され、変化し、発展するものであり、必ずしも徹底した矛盾のないものではないとしても、一定の段階、段階の世界観にほかならないのである。

でこれらのことが注意されるならば、ラップの指導部によって設定された「方法」の「世界観」への関係のごときは、何ら真の「世界観」への関係ではなくて、むしろ一定の図式、規範への関係であったことが見られる。

四、この問題における日本の理論家達の理解

蔵原による問題提起の意義

では日本における文学、芸術運動の指導理論は、方法と世界観との関係について、どんな理解を示してきたであろうか？

ここでは多くの作家や批評家の言葉尻を一々とらえて見たところで仕様がない。全体としてわれわれの前には、キルポーチンが示しているほどの具体性をもって、方法と世界観との関係はあきらかにはされていなかった。私達はしばしば「作家の創作方法はその世界観によって決定される」という表現を使ったし、また理論家たちによるそのような問題の定式化をも多くはあやしまなかった。

勿論われわれの作家のなかに方法と世界観との関係を、早い時期から、直観的に或程度正しく見抜いていた人がないではない。たとえば中野重治がそれだ。彼は一九二八年にかいた「いわゆる芸術の大衆化論の誤りについて」のなかで、トルストイがその「復活」において対象をその客観性において正確に捕えているときいかに芸術的に成功したか、しかし乍ら彼が「坊主と一しょにお寺の鐘をならした時」いかに失敗したかを説き、又ユーゴーはレ・ミゼラブルにおいて「一八三二年六月五日から六日にかけてパリのバリカードに現れた浮浪少年と共和の老人とをあるがまま

に捕えた時、だからそこで我々の前にユーゴーが消えてパリの身慄いそのものが残った時、その偉大さで我々を、曳きずり廻し、しかし彼が彼の観念哲学をお説教し始めた時、我々は彼から正当に去ったのだ」と書いた。又その後の中野の文芸時評においては、トルストイが観念論者であったにかかわらず、カチューシャ達を決して神が欲するようには救うことができなかった、そのようなのがトルストイのレアリズムであったというようなことが、人間を公式的に処理した作品の批評の際にのべられていたと記憶する。彼は方法と世界観とのこのような具体的で密接な関係に触れながら、「芸術家がその小さな成心で対象に臨むなら対象はその客観性において捕えようがない。そこに生れるものは捻じ曲げられた芸術であり、そこに示された道は袋小路である。」「芸術的価値は、その芸術の人間生活の真への喰い込みの深浅（生活の真は階級関係から離れてはならない）、その表現の素朴さとこちたさによって決定される」と説いて、芸術における生活的真実への正しい要求を示している。だがむろんここでは、古来多くの芸術家が、いかに生活的真実を語ろうと努めながら而もその任務を不充分にしか遂行しえなかったかについては触れていない。

蔵原惟人も、作家は現実から出発し、現実そのものの中に潜む……的なものを発見することこそ必要であることを説き、そのプロレタリア・レアリズム論を提起した。その際に氏は、芸術上のレアリズムは哲学上の唯物論と一致すると説いたが、後になってこの両者は「必ずしも一致しない」事実をみずから教えた。キルポーチンによれば、ラップの指導者は、芸術上のレアリズムを「多かれ少かれ、明瞭に意識された唯物論と同一視する傾向があった」とされているが、この点では蔵原は同一視されるべきではない。

それだけではなく蔵原は、ラップの指導理論が、唯物弁証法を空な方式に化したのとは反対に、社会現実や芸術運動の現実の状態から出発して、現実の弁証法的発展を未だ正しく反映していない大多数の作品の批評を通じて、作家の現実に対する方法を問題にしたことについては、「文化集団」九月号に私が少しくどい説明を試みた通りである。しかし尚つけ加えたいことは次のことだ。蔵原の手紙のなかの「作者は自分の見たままをいつわらずに描くより方法はない」という言葉に対して亀井勝一郎は「文化集団」創刊号に次のような正当な疑問を投げている。

「しかし、この『自分の見たまま』ということが実に重大な問題なのである。

プロレタリアの側へ……しようとするインテリゲンチャ作家の最大の苦悶は、『自分の見たまま』のものが、屡々ただ悲劇的であるに過ぎないという明白な事実である。おのれをいつわるな、おのれをあざむくな、とはブルジョア・リアリストの間でもよく言われている言葉である。」云々。

しかし実を云えば、ここに亀井勝一郎が言っていること

が正しければこそ、蔵原惟人は「現実に対する方法」をも問題にする必要があったわけで、そのことは彼が同じ手紙のなかにも書いているのである。先にものべたように、古来多くの芸術家が、自分の見たままを、「真実」を描こうと努力しながら、何故それぞれの限界においてしか、それに成功しえなかったのであるか。それは作者が単に「対象を形象的に描く」という能力に乏しかったためのみによって起ったことであろう筈がない。個々の現象の表現においては無数の輝しい形象を与えている所の、また人間一般をではなく現実の社会的人間の綜合的なタイプをも描いている所の、スタンダール、トルストイというような過去のすぐれたレアリストも、それらの人間生活を規定して動かしている「社会発展の根本的推進力」に関しては、より少くしか真実を捉えていない。かれらが芸術的に綜合し、典型化し得た生活現象では、それもなお、現実におけるような発展の合法則性を反映していない。これこそ、芸術がその観察のために、どんなに天分と誠実とをもって、「現実」の大海へ乗り出しても、その時代的な階級的制約のために、現象の波浪に溺れ得ることを示している。作家の表現技術だけではなく、作家の現実に対する方法の問題がもち出された理由がそこにあるわけである。

前述したように、すべての芸術は、現実の複写として存在してきたのではなくて、芸術を生んだ人間達の社会階級的実践の特殊な意識的表現として存在してきた。芸術は、生活を現実的に表現していようと、仮幻的に作り上げていようと、いずれの場合にも、それを生んだ人間達の物質的な生活過程の必然な反映として発展してきた。だからそこには必ず作者達の現実に対する見方がはたらいてきた。観念論者達は、この作者の「見方」を、何か先天的なものとして解釈してきた。しかしわれわれは、それを一定時代の社会、階級の実践が生んだところの現実認識の能力として理解する。周知のようにマルクスは、ギリシャ芸術の土壌でもあり材料でもあったギリシャ神話が、ギリシャ人達の「自然及び社会諸関係に対する特殊な見解」であることを教えている。ギリシャ神話はギリシャの「民族の空想において、無意識的な芸術的加工をうけた自然及び社会形態」である。そしてギリシャ芸術は、それを生み出した時代のギリシャ人の社会生活の特殊な表現にほかならないし、そこには自然や社会諸関係に対する当時のギリシャ人達の見方が明かにはたらいている。同じことは近代の客観主義芸術においても根本的には異るところがない。ブルジョア・レアリスト作家がいかに「現実をありのまま」に描こうとしても結局それについてのブルジョア的真実をしか捉え得なかったのは、そのためであり、多くの人々が明らかにしてきた通りである。

作家の現実に対する方法を蔵原が問題にしたことは、だから正当で、必要なことであった。

ソヴェート同盟における創作上の討論は、「われわれは

作家にむかってただ真実を描けと云う。われわれは作家に何の処方箋も与えようとはしない」という意味のことを強調していると共に、その言葉の下から、「真実を描く」には然らばどうしたらよいかについて、やはり作家の現実に対する真の（――図式化されない――）徹底した唯物論的見地を問題にせずに居れないでいるわけも、又全く右の理由によるものである。注目すべきことは、そこでは唯物弁証法の命題が弄ばれる代りに、正しくも、現実そのものの弁証法とそれの作品における反映を、おもに具体的作品の検討によって明かにしている点である。

五、方法と世界観

日本では蔵原だけではなく、中野、宮本、川口、亀井その他のすぐれた理論家達は、ラップの一部の人々とは異って、むしろ創作方法の図式化と戦ってきている（このことは他文にも書いた）し、芸術の特殊性をあきらかにするためにも戦ってきている。また「創作方法における唯物弁証法のための闘争」に参加したすべての人々は、ラップの指導者達と同様に、創作の問題が単に手法や技術のみの問題ではないことを明かにするためには、決して無益な努力をしてきたのではない。それによって、創作を単に才能や技巧の問題とし勝ちなブルジョア的芸術観との闘争へ、沢山の人々の注意を喚びおこした。

しかしそれでも、方法はしばしば現実からひきはなされ勝ちであり、批評は命題を刻りつけた棍棒となり勝ちであり、作家は創造上の積極性と溌剌性を抑えられると感じ勝ちであったのは何故であろうか。それはこれまで明かにして来たように、一つにはわが問題であるところの「方法と世界観」との関係を具体的に明かにして来なかったためである。それは次に見るように蔵原さえ、充分には明かにはせずにいた。それについているので幾らか、補正したまま用いることを許していただきたい――

蔵原はその「怱卒な覚えがき」のなかで、芸術上のレアリズムと哲学上の唯物論は必ずしも一致しないことを指摘している。これは、それだけとしては、全く正しい。また必要な教示であった。だが氏が、それ故にわれわれの芸術的方法はプロレタリア・レアリズムと表現さるべきではなくて弁証法的唯物論の方法と表現さるべきであるとした時、芸術創造の方法を単に現実認識の方法によって置き代えるような結果をもたらした。

勿論、蔵原はそれ以前に、その「芸術的方法についての感想」のなかで、芸術と科学、及び芸術的方法と科学的方法との区別を問題にしていた。しかしそこでは芸術一般の特殊性、および芸術一般の能力の特殊性が解明されたにとどまり、芸術創作の方法そのものの、特殊性を歴史的・具体的な姿ではあまり鮮明にするいとまがなかった。創作方

法というものは、特定のレアリズム、特定のロマンチシズムというように、現実認識とそれの形象的表現において歴史的にそれぞれの芸術的様式をもって発現して来たところの、発展して来たし又発展しつつあるところのものである。創作方法一般は、芸術創造における現実認識とそれの芸術的・形象的表現の方法である。その場合、現実に対する方法とそれの表現の方法とは不可分の関係にあればこそ、それを統一して創作方法という名で呼ばれうるのであるが、決してその一つをもって他に置き代えうるものではないのである。しかもそれは定義にすぎないもので、「創作方法」は現実においては、それぞれの階級のそれぞれの作家によって異って把握され、個々の作品に体現される所のものである。だからそれは、キルポーチンが云うように、個々の作品の素質、才能、技術等の程度によって現れるが、またその作家の属する時代と階級の状態によって方向、色彩、程度を与えられて具体化する。たとえば、ホイットマンとポウをくらべれば、その現実に向っての態度だけではなく、その表現の様相が著しく異るのは、二人の素質が違うためばかりでなく、二人がその素質そのものを形成、発展させた各々の時代における二人の社会的生活が違うからである。しかしともかく、同じ時代の同じ階級の作家が、現実に対する同じ見方を示した場合にも、その表現の上では一方の作家は徳永直のように絵画的に鮮明に描写し、他方の作家は或時期の中野重治のように説話的に巧みに描くという風に、ひとしく「現実の客観的にリアルな芸術的表現」の態度をもちながら、それの発現においては異った形態をとり得るのは、作家の方法が、その才能の特殊性や程度によっても色彩や程度を異にしてあらわれ得るものであり、作家的修練、独創への努力、生活上の闘争等を経て、成長することを示しているのを見落してはならない。さもないと、批評家は、創作方法を一定不変の法式であるかのように考え、実際には何の役にも立たない処方箋をもって単に作家の胸を悪くするにとどまる恐れがある。ソ同盟で、作家はそれぞれ異る道を通って社会主義的レアリズムを作品に実現し、発展させてゆくものであると主張され、作家の才能、個性等も重視されているのは全く正当である。最後に、それの、それの、創作方法の特性の中で重要なものは、それの、芸術以外のイデオロギーへの「複雑な依存関係」にあることは、すでにキルポーチンから聞いた通りである。

次に蔵原は、一方において、プロレタリア作家は最も完全なレアリストたり得るし、またそうである必要があるという思想をもっていた。そして最も完全なレアリストたり得るためには、プロレタリア作家は弁証法的唯物論で武装される必要があることを説いた。(「芸術的方法についての感想」七〇頁——鉄塔書院版)これは完全に正しい主張であると思う。しかるに他方においては、前述のように、レアリズムと唯物論は必ずしも一致しないという理由から、

われわれの創作方法は何かのレアリズムと呼ばれうるものではなくて、弁証法的唯物論の方法と表現されるべきものとした。あきらかなように氏は、ここに問題があることを感じ、みずから「発展させられねばならない」と言ったのである。(「芸術理論におけるレーニン主義のための闘争」)

氏による「芸術上のレアリズムと哲学上の唯物論は必ずしも一致しない」という指摘は、事実をさしている。だが又芸術史的事実は、その両者のあまりに密接な関係を示している。(そのことを今後われわれは具体的に明かにしてゆくであろう) それは何故か。それこそ何度も説明してきたように、特定の唯物論も、特定のレアリズム芸術も、ひとしく、それを生んだ人間達の社会的物質的な生活過程の反射物にほかならぬからである。それだからたとえばベーコンやホッブス達の近代の先駆的な英国の唯物論と、シェークスピア達の先進的な近代的レアリズムは社会的に無関係ではあり得ない。また十八世紀のフランス唯物論と、バルザック、スタンダール、乃至ゾラ等のレアリズム。いわゆる「はにかみや」の軟化した唯物論である「不可知論」と印象主義的芸術の現実に対する態度。弁証法的唯物論とプロレタリア文学におけるレアリズム等、いずれも、それぞれの時代の一定の階級実践の反映であるが故に、密接な関係をもたざるを得ない。

然るに何故哲学上では観念論者である作家が芸術上ではレアリストとなりうるのであろうか。この事も最早明かなように、その作家の一定時代における社会的、政治的実践によって説明される。がこの場合、「実践」ということから、人間が動きまわる姿だけを抽象する人があるならば、粗末な考え方をしかしないことを意味している。作家の実践というものは、一方においてその住んでいる社会の発達状態、その属する階級の歴史的地位、芸術や哲学上の遺産の質量等、その作家の生活を充たし、規定し、動かしている現実を抜きにしては考えられないことであり、他方においてはその客観的現実にむかって働きかけ、それによって発展させられる作家の認識や表現の能力を抜きにしては考えられないことだ。だからトルストイの社会的実践といえば、トルストイの才能、トルストイの社会的地位、かれが摂取した芸術上の遺産、かれの時代のロシアの社会状態等を考えなくては、示されえないものである。又それ故にトルストイの観念論とそのレアリズムとの矛盾が、当時の矛盾にみちたロシア社会での、地主であった天才的芸術家のである。私達もプロレタリア文学運動の初期においては、実践の産物であることを、明かにしたレーニンは正しいの客観的世界の実在を決して疑わなかったし、意識が生活の反映であることは知っていた(即ち哲学上は唯物論者だった)が、それでもその時代の社会状態や運動の状態の中での私達の多くの詩人の実践は、その作品において現実を主観的ロマンチックに仕上げさせていた。その他いくらでも事実について見うるであろう。

以上のことが、うなずかれるならば、同志蔵原が、芸術上のレアリズムと唯物論哲学が必ずしも一致しないことの「秘密をとく鍵」をやはり芸術家の世界観にあるとしか説明しなかったのは、不充分であることが明かであろう。氏は、トルストイ達が、観念論者でありながら、レアリスト作家でありえたことを、かれらが「自然の現象は人間によって認識されうる」という可知論の見地に立っていたことで説明している。勿論可知論的見地はレアリストたるための一つの条件であるし、プロレタリア作家がレーニンの「反映論」の見地に立つ必要があることを氏が説いたことは、正しく、重要なことである。しかし、それでも氏は、「レアリズムと非レアリズムの区別」が「唯物論と観念論との区別にのみではなく、可知論と不可知論との区別に対応している」という説明をあたえることによって、作家の方法は全く哲学（世界観）によって決定されるかのような印象をあたえた。

六、図式とその強制の排撃。弁証法の導きの糸

問題はまだ多く残っているが、枚数が切れて走らねばならぬ。右のような、創作的見解においての不充分さが、批評活動においてどんな誤った態度をも生み出させ得るかはのべて来た通りである。そして実際に、批評における官僚的態度は日本においても存在してきた。この点において批評家たちは、何も新しい不遜をもって自分の肩を張るにはあたらない。……だとか重要産業の労働者生活だとかを直ぐに描きえないからと云って、その事態から、作家の「臆病」や「怠慢」や「敗北」だけを引き出した批評家にわれわれは希望するであろう。行って君みずからそれらの事象を具体的に観察して来たまえ、批評家は現実そのものについて作家以上に深く具体的にも知る必要がある。大衆の生活を生き生きと知ることなしに、君らは、作家がそれを具体的に描き出した場合に批評しようと待ち構えているかのようである。だが近代工場の機械を現実的に見ていない批評家が、どうして作品にえがかれた機械の響の真贋を判じ得るか。われわれの作家はつねに一台の機械に対してさえその名称はおろかその全具体性をその眼で見るために苦労しているのである。現実から直接学ぶための作家の困難や努力は、会合や書斎で既成の理論を喋ったり延長したりして、同志蔵原の理論を発展させる代りにその到達地に足を生やして作家を監視する苦労よりは、はるかに大きいと云わねばならぬ。せめて作家のために、大工場を描くための色々な統計だとか、日本社会の経済的、政治的機構（たとえばカルテルとかシンジケートだとかは実際には今どのような姿と力をもっているか等）を示してやるとか、文学史を新しい方法で立派に編むとかそう云う仕事をもやってく

れるように希望する。
　だが批評上の欠陥はソヴェートでさえも示されてきたのだから「神経質になる必要はない。」ラージンによれば「ラップ員は社会主義的真実の表示をあれやこれやの今日の主題的任務に帰着せしめた」「彼等は各個々の作家個性が我々の時代の真実を語っている一切の特殊性、一切の創作的多様を理解しなかった。」そしてレーニンの次の言葉を引用している。「議論の余地はないのである――とレーニンは書いた――この問題においては個人的な創意性、個人的な傾向に大なる自由を、思想、幻想、形式と内容に自由を確保することが絶対に必要である……我々は何等かの一様な体系、若しくは若干の決議による課題の解決を説教する考えからは遠い。否、この領域に於いては図式主義は問題になりえぬのである。」
　一方においてレーニンは「文学は党のものにならねばならない」ことを説いたことも周知のことであるが、文学の党派性ということを、それに関する一般論だけで始末して、プロレタリアートに……する作家の個人的創造的潑剌を何ら実践的には促さない人々は、レーニンの意を解する必要がある。
　つぎに、もはやいうまでもなく明かなことは、作家がすぐれた作品をうむためには、その生活的努力によって諸々の事実を経験し、洞察することがいかに重要であるかということである。闘争に……することなしにはそれを真に深刻にえがくことは困難である。「或る事をかくためには私は何かを学ばねばならなかった。がそれは自分で経験することによってのみ可能であった」と云ったというバルザックの言葉は、またあらゆる作家の本音であるから、これについては多く喋るほどのこともない。
　最後に、唯物弁証法を図式化して、それに拠って現実を描こうとすることは、あたかも東京の地図だけを見て東京を描こうとするようなものである。しかし地図でさえも、東京の現実そのものから作製されたもので、東京が発展すれば地図も発展しなければならぬ。また地図でさえも、複雑な都市を実際に知るための道案内となる。それなしにも人は都市を知りえないことはないが、道に迷わぬためには必要である。まして弁証法は、現実そのものの発展と、それの思惟における反映の、一般法則に関する知識なのだから、現実を知ることにおいて作家を益しない筈はない。昔からすぐれた芸術家はゲーテ、ハイネ、トルストイのように、みな自分の哲学を深めるため、不得手ながら努力せずにおれなかった。またバルザックがゾラにくらべて優れていた点は、第一に生活現象の「哲学的綜合の程度、思惟の深さにある」ことも、今は私達がみな聞かされている通りである。徳永直が唯物弁証法を真に現実そのものと結びつけて学んだとすれば、それは必ずや氏の優れた作家的才能をも育てて行くであろうと望まれる。
　（この論文は同じ主題をもって他に発表した拙文と重複す

る部分があるが御諒承を乞う。また「内容と形式」その他の二三の大切な問題をのこしていることをことわっておきたい。）

（一九三三、一〇、一〇）

作家同盟の解散

江口渙

一、街頭の立ち話

昨日は久し振りで風が東風に変ったので、昨日までの寒さとは打って変ってすっかり暖かな陽気になった。永らく北風に脅かされつづけた吉祥寺にも、とうとう春がやって来たのだ。それは井戸端の猫柳の前にも生垣の根元の蕗のとうにも現われていた。

とてものんびりとした気持になった私は、幾日目かでぶらりと街へ出た。そして郵便を出しながらあっちこっちと歩いた揚句、吉祥寺の駅に近い志村という古本屋の店に立って古本を見ていると、そこへどてらを着た佐々木孝丸がひょっこりと入って来た。

「やあ」

思わず同時にいった二人の声がまだ消えないうちに、珍しく金が入ったと見えて床屋へ行きたての顔をしている佐々木が更めて真面目に私を見た。

「作家同盟。とうとう解散したね」

「ウム。君のところへも声明書が行ったろう」

「来たよ。昨日、一寸読んで見たが相変らずむずかしい文句を並べて、訳の解らんことがごてごてと書いてあるね」

「例によって同盟の文書には鹿地亘的悪文がのさばっているんだよ」

だが、こういった私の言葉には答えないで、佐々木は後をつづけた。

「あれだけじゃ、たいして解散の理由にならないじゃないか。」

「しかし新しい…………が議会を通過すれば合法団体として到底やって行けないことが解ったから解散したんだろう。プロットはどうすんだい」

「解散なんかしないよ。その代り、…………へそのために何度足を運んだか解りゃしないよ。何度も行っていろいろな方法で話をつけた結果、この分なら解散しないでもやってゆけそうだという見透しがついたから、このままやって行くことにしたんだよ。作家同盟ではそういう努力をこれ

っぽちもしないくせに、いきなり解散とは変だね」
「つまり合法性獲得の闘争を全然放棄したという点で超時急的敗走主義という奴だね」
「たしかにそうだよ。あんまりだらしがなさすぎるじゃないか」
そして再び私の顔を見詰め直して佐々木がいった。
「君。近頃の作家同盟の出版物には実に誤植がひどいね」
「そりゃ、きっと書記局の連中がまだ経験が足りないのでそうなんだろう」
「昨日もあの声明書を読んでいて一つとんでもない誤植を発見したよ。あの中に、作家同盟がこんなになったのは──指導部の個々のメンバーの無能に死せらるべきものでは断じてない、と書いてあるが、ありゃ君、断じてあるの誤植だね」
「僕もあすこを読んだ時、こりゃどうも変だなあと思ったんだよ」
「ありゃ、君、たしかに誤植だよ。それでね」と佐々木はとてもうれしそうな顔をして、
「おれは、あすこを、断じてあると訂正して鹿地か山田のところへ送りかえしてやろうと思っているんだ」
「それよりも、君」と、こんどは私がいった。
「山田清三郎と鹿地亘とに、あすこの所を──断じて指導部の無能に帰せられるべきであると更めて訂正しますという声明書を、もう一通書かして全同盟員に配付させせた方が好いよ」
「そうだ、それが好いな。じゃ、君、是非そうするように一つ骨を折ってくれたまえ。折角の重大な声明書にあんなひどい誤植があっちゃ、何にもならんからな。ハッハッハハ」
「ハッハッハ。ハッハッハッ」
二人は大きな声で笑いながら、肩を並べて本屋を出た。そして駅まで新聞を買いに行く佐々木と別れて、私は真直ぐに家へ帰えると、早速机に向ってこの原稿を書きだしたのだ。

二、創立大会を回想しつつ

日本のプロレタリア文学運動に於ける最大の組織でありり唯一の正統派として自他ともに許していた日本プロレタリア作家同盟がついに自発的に解散した。昨日、同盟員各自の手元に届けられた同盟第三回拡大中央委員会の解体宣言によって、それは既に明かである。

同盟の創立大会が浅草の親愛会で盛大に挙行されたのは、実に一九二九年二月九日の事だった。爾来今日まで、前後六年もの長い間、日本のプロレタリア文学運動の陣頭に高く揚げられて来た輝かしい作家同盟の旗は、一九三四年二月二十二日に到ってついに下されたのだ。全同盟員はむろんのこと、同盟外の人々でも多少ともプロレタリア文

学運動に関心を持つ人々は、これを見てまことに感慨に耐えないものがあるであろう。

ことに藤森成吉が独逸へ行った後をうけて一九三〇年四月の第二回大会から一九三二年六月の第五回大会まで、前後三年間引きつづいて中央委員長をしていた私は当時の自分の生活を殆んど全部同盟のために傾け尽して、謂わば同盟と生死を共にし起居を共にしていたといって好い位、密着した関係にあったために、この声明書を手にして、尚更、人一倍に感慨ぶかいものがあるのだ。

だが、吾々は今日唯徒らに過去の運動華かなりし時代をのみ追想して、空しい感傷に溺れているべき時ではない。

こうなって行った事実そのものを、その客観的情勢と主体的条件の凡てに亙って誤りなく直視し、どこに吾々の正しさがあったかどこに間違いがあったかを冷徹に見究め、批判すべきは批判し、排除すべきは排除し、正しく発展させるべき部分はあくまでも発展させることによって、今後のプロレタリア文学運動を正しく力強く育て上げて行くように、吾々は相互に協力して十分に努力しなければいけない。それは同盟解体の後に於いても、尚全同盟員の肩に残されたプロレタリア作家としての当然の義務である。

三、声明書を手にして

私はそれについて、今から所々声明書の重要な部分にふれながら私の考を卒直に述べて行きたい。

同盟は何故自発的に解体しなければならない破目に陥ったか。それには大体二つの重大な原因があったといえる。

一つは………以来日ましに烈しさを加えて来た客観的情勢の圧力である。ことにいよいよ近く議会を通過しようとしている新………の設定による新たな……の発生である。

新………………されれば、作家同盟は所謂………といゝ……峻烈な……あろう事は、今日、もはや不可避的な事実と見て好い。

しかしこれについても、私は先に書いた佐々木孝丸の言葉に、一応の正しさがあると思う。たとい……としての……脱がれ得ないものであるとしても、尚同盟指導部としては、それについて……と出来る限り折衝して、あくまでも合法性獲得のための努力を傾け尽すべきであったのだ。それは指導部として当然しなければならない重大な責務の一つではなかったのか。

あるいはそういう努力は、凡ての情勢からいって当然水泡に帰すべき努力であるといえるかもしれない。だが、そういう見透しがあったとしても、尚最後の最後まで根強く繰り返えさなければならない筈の努力なのだ。それを爪の垢ほどもしなかったばかりか、てんで考えても見なかったという一事だけでも、同盟指導部の怠慢と無責任とは十分批判されなければならない。

プロットでは今後も現在の……ままで十分やって行けるという見透しでいるらしい。この見透しが正しいかどうかを私は知らない。だが、プロットが…………の努力をあのように繰りかえしている責任感の強さに対して、作家同盟の指導部は果して恥ずるところないだろうか。

こういったからといって、何も私は作家同盟の解体に反対するものでは断じてないのだ。それどころか、この上とも無理に組織を維持して行くほど、同盟が現在より遙か以上のみじめな混乱と壊滅に陥るであろうことは、あまりに明白である。又、全国六百人の同盟員と…………の前にさらして無意義な……を生み出すよりも、……解散を断行した方がどんなにましであったか解らない。こういう意味からいって私はこんどの解散に双手をあげて賛同するものである。

事実、最近では無能と誤謬と無責任の集中的表現であるかのような感じしか与えなかった作家同盟指導部として、こんどの処置はせめてもの最後のたった一つのファイン・プレーであったともいえる。にもかかわらず私は、指導部が今日まで……………のための努力をただの一度も払わなかった一目散的遁げ出し方に対しては深甚な遺憾の意を表さないわけに行かないのだ。

四、鹿地、山田ブロックへの批判

解体声明書は大体に於いて正しい。だが、事いやしくも指導部に関する限り、その無能や無責任や間違いの合理化と自己弁護とに於いて、相当にひどいウソや出鱈目が平気で並べられているのを見逃してはいけない。

声明書はいう。

「我が同盟の活動的作家たちは、現在の情勢下に於ける旧来の活動形態に対して、機関誌の発行擁護、同盟費の納入、……活動遂行等の一切の義務を放棄することによって絶対多数をもってそれへの不信を表明しつつある、指導部への不満に対しても組織的方法による指導部への批判乃至改造への意志を放棄することによって、事実上同盟を形骸にとどめている状態である」

むろん最近ではこういう現象が一般的に同盟員の間に決してなかったと私はいわない。だが、一体だれが全同盟員をそういう状態の中へ追い込んだのだ。それについて私は一二の具体的な例を挙げて、責任の所在をあくまで究明したい。

私は中央委員長を辞した後でも、去年の三月にソヴェート友の会へ行くまで約十カ月間を当同盟の指導部に残っていた。その当時でさえも既に相当忌むべき現実が指導部の中に発生していた。それはどんなに正しい意見であろうとも、いやしくも鹿地・山田ブロックに気に入らない意見である限り、常任中央委員会からは常に閉出しを喰わされたという事実がある。又、同盟発展のためにどんなに積極性

のある意見を出しても、否、積極的であればあるほど鹿地・山田ブロックによって、敬遠され黙殺されたという事実もある。

そういう点で最も苦い杯をなめさせられたのは、中条百合子だった。成程中条百合子の意見の中には、時に随分いろんな誤謬のあった事は私も認める。だが当時の常任中央委員の中で、同盟の発展に対して彼女ほどの熱意と積極性を持っている者は、他に一人もないではないか。

それだのに鹿地・山田ブロックは彼女を積極的であるが故に敬遠し、その意見を殆ど常に黙殺した。それについて彼女は私に、

「もう、駄目。駄目。大廈の倒れんとするや一本の好く支うるところに非ずだわ」

と、いって嘆声をもらしたものだ。

私だって同じだった。常任中央委員会に提出されたる「文学新聞」に関する私の改造意見は、それがどんなに正しくとも常に鹿地・山田ブロックによって黙殺された。

「非政治主義と文化主義の克服。政治の優位性。文学の政治への隷属」ということを全く機械的に理解する能力しか持たなかった当時の文学新聞編集長山田清三郎は、コップ拡大中央協議会解散の前後からして、「文学新聞」をまるでヘタクソな政治新聞同様なものにしてしまった。政治的水準を引き上げるということが、彼には難解なコケオドカシの文句をむやみに並べて金切り声で絶叫することだと考えられていたらしい。そのため「文学新聞」は「文学新聞」としての本来の要素を失って行ったばかりか、常に「解り難く興味少く」しか編集されなかった。

それにもかかわらず山田編集長は常任中央委員会へ出て来る毎に、「こんどの新聞は創刊以来一番好い新聞になった」とか「文学新聞は近頃号を追ってよいよすばらしいものになって行く」などと、好い気になって見当違いの手前味噌を並べたものだ。

聞いていてそれがあまりに馬鹿々々しいので、私はしばしば反対意見を呈出した。そしてもっと「解り易く興味多く」編集されなければならないし、かつ、「文学的要素をもっと十分生かさなければいけない」と、幾度もくり返えして述べたりした。

だが、山田清三郎はそれに対して常にただ冷然と黙殺をもって答えることしかしなかった。あれではどんなに積極的な改造意見を持っている同盟員でも、しまいには嫌になって自然と沈黙を守らざるを得なくなるのも当然ではないか。

今日、あの当時の「文学新聞」をもう一度読み直して見るが好い。文学新聞の本質から逸脱した、いかに愚劣な編集が臆面もなくなされているかはもはや何人の眼にも明かであろう。鹿地・山田ブロックでさえ今日ではその愚劣さは認めているらしい。普通の人間なら当時既に解っていた愚劣さが、二年も経たなければ解らないとは彼等もまた何

という厄介な頭の持主だろう。
声明書のウソについては、もう一つ具体的な例を揚げよう。
三三年五月の同盟第六回大会の時だった。鹿地・山田ブロックが同盟中央部に巣喰っている以上、作家同盟の正しい発展は阻止されるであろうと考えた東京支部城西地区吉祥寺班は、こんどの大会では鹿地亘、山田清三郎を中央機関から絶対に引きおろすという決議を満場一致で採択した。そして目的貫徹のためには、地区総会へ出て行ってあくまでも下からの正しい闘争をまき起すことを申し合わせた。
その事が忽ち東京支部へ知れ渡ると、どうだろう。何者かの策動によって城西地区総会への案内状は、吉祥寺班に対してだけ送られなかった。そして見事にボイコットをくわされた吉祥寺班は、ついに大会へ意見を反映する機会を奪われてしまった。それどころか大会には東京支部から鹿地・山田ブロックに都合の好い代議員が選りぬかれ、中央部の実情を全く知らない地方代議員がつき混ぜられて出されたために、鹿地・山田ブロックお手盛りの役員が再び中央部を占めることになってしまった。
その時、鹿地亘は吾々の眼をそらすために中央書記長の椅子を佐野嶽夫にゆずって、自分はわざと無任所常任委員になった。だが、佐野嶽夫は鹿地に顎で使われる男だから鹿地は相変らず実質的な書記長であったのだ。こんなお粗末な瞞着で同盟員大衆の眼をくらまし得たと考えた鹿地亘は好く好く浅墓な男だということができる。
事実、鹿地・山田ブロックにとって大切な事は、作家同盟の運動を正しく力強く発展させることよりも、先ず同盟内の重要な機関を占拠し自分の役人的地位を固め、それによって同盟内に於ける自分達の勢力を拡大強化する方が遙かに重大事なのだ。
こういう現象は、得て作家的気魄の乏しい作家にあり勝ちな事なのだ。その作品力だけでは同盟員大衆の信頼をつなぎとめる事ができず、従って同盟内における自分の地位を固めることが困難なために、つい策動によって機関をのっとり、機関の威力によって政治的に自分の地位を築き上げようと計るのである。その結果、政治的野心のない有能な作家が逆に機関から追い出されたという反対な現象さえ生じるのだ。しかも、文学的に有能な作家は、彼等の策動に悩まされながらも無理に中央機関に停ることを欲しないばかりか、いくらでも自分の才能を自由に伸ばし得る機会に恵まれているから却って自分からも中央機関をはなれてどしどし外へ出て行ってしまうのである。
以上の事実によって見ても、先に私が引用した「解体声明書」の中の文句が、いかに鹿地・山田ブロックに都合の好いデタラメばかり並べられているかが解るだろう。

五、虎と狐

前にも述べたように、かつて「文学新聞」の編集の愚劣さについて私が積極的な正しい意見を出す度に、山田清三郎があまりに頑迷悪質な黙殺をもって答えた。で私はついその憤慨を上野壮夫に洩らしたことがあった。すると上野壮夫は、

「なあに。山田の後にはちゃんと堀英之助の論文の与える幻想がついているんだよ。だからあんな大きな面をして見せるのだ。山田一人ならもっと簡単に屈伏するんだが」

と、いかにもにがにがしそうに答えたものだ。

つまり当時の山田清三郎はまさにその論文という虎の威を借る狐だったといえるのだ。

だが、折角の虎が生憎なことに眼ッカチだった。右の眼がつぶれていて、左の眼しか開いてなかった。だから駆け出せば駆け出すほど左へ左へと曲って行った。おまけに自分の右側にいる者は、味方をさえもみんな敵だと思い込んで盲滅法に噛みついた。先ず林房雄や武田麟太郎が噛みつかれ、つづいて徳永直や細田民樹が噛みつかれた。

怖れをなした同盟員はただもうほんとうの無我夢中で虎の尻っ尾について走った。中には無論、虎について走らなければエラクないと感違いして、眼をつぶり歯をくいしばってまでも無理に走った奴もいるが……その虎がやがて………時、彼等は文学運動の道よりは遥かに遠く距った山の中に、全身傷だらけになっておっぽり出されていたのである。昨夜、私は堀の「××主義に対する××」を読みかえして見た。そしてかつて雑誌でよんだ時に受けたのと同じ印象を、又新しく受け直した。

彼はあの中でスターリンの言葉を引用して、しきりに××日和見主義と××日和見主義との××の必要を強調している。

あそこに引用されたスターリンの言葉は、言葉そのものとしてはたしかに正しい。それはソヴェート連邦に於ける社会主義建設五カ年計画という具体的な方針を確立した上での、そしてそれを基準としての××両翼の偏向への××という点で、たしかに正しい。つまり、ソヴェート連邦に於ける政治的経済的情勢の中に具体的に打ち立てられた方針としてあの言葉は十分に正しいのだ。

それを彼は性急にも、日本の、しかもプロレタリア文学運動にたいして、その文学運動という時殊性を全然無視してただ機械的にあてはめたのだ。そこに彼の理論の出発の第一歩から、既に重大な誤謬があったのだ。

だから堀にとっては××両翼の偏向への××ということは、結局プロレタリア文学運動という材木を前に置いて二梃の鉋を使いながら「やあ。こいつは右翼的偏向だ」といっては右側を削り、「やあこいつは左翼的偏向だ」といっては左側を削り、右と左を次から次へと削るうちに、やがて材木が板になり板がだんだん薄くなって、ついには何に

も無くなってただ鉋屑ばかりになったのと同様なのだ。
彼にいわせれば彼の最後の作品「地区の人々」や「転換時代」に示されたものこそプロレタリア文学にとっての正しい道であるというかもしれない。あの道はむろんたしかに正しい。だがあそこに示された道だけがプロレタリア文学にとってのたった一本の道ではないのだ。
凡ての道はローマに通ず。だが、プロレタリア文学にとって何も凡ての道が必ずしも全部ローマに通じるわけではない。中には一見ローマに通じそうにみえて、外へそれる道さえある。だが、彼の考えたようにたった一本の道しかないというわけでは断じてないのだ。ここに新しき出発がある。

六、この責任は誰が負うか

私は何も物好きに彼をこんなところへ引き合いに出して来たわけではない。それは作家同盟を今日の状態に追い込んだ責任の一部は、指導者としての彼の理論的誤謬もまた当然負担しなければならないものだということをいいたいからだ。
だが、彼よりも誰よりも最も厳重に批判されなければならないのは、ああいう理論的誤謬に満ちた指導を、平然として受取り、それを支持し守って来たために、更に一層同盟の混乱と沈滞とに拍車をかけた同盟指導部の救われ難き不見識と無定見と坊主主義とであると私はいいたい。
困ったことに指導部の無定見と無能と不見識とは、ただにこの一事に停らなかった。弁証法的創作方法から更に創作方法に於ける社会主義的リアリズムの確立へと転換した時にも、もはや彼がいなかっただけに指導の中に存在していたこの欠陥は、一層はげしく暴露された。
ソヴェート連邦では既に社会主義的リアリズムの問題が盛んに大衆討論にかけられて、漸次確立されて行きつつあることを、ちゃんと承知していながらも、同盟指導部はそれを日本の作家同盟の内部へはあくまで隠蔽しつづけていた。
やがて「文化集団」やその他の雑誌で盛んに日本へ紹介されて、もはや隠しきれなくなると彼等は先ず一と通り反対した。唯物弁証法的創作方法をあんなに躍気となって提唱してから一年たつかたたないうちに、早くも社会主義的リアリズムへと引っ越しては指導部としての沽券にかかわるとでも思ったのか。それとも「文化集団」が提唱したから反対したのか。どっちにせよ。とにかく彼等は反対した。が、だんだん風向きが怪しくなるとこんどはお定りの折衷説を吐き出した。そして最後になって大勢の趣くところどうにも仕方がなくなったら、ついに無条件に支持しだした。
農民組合の人がいつか私の家へ遊びに来た時、そのことについてこんな事をいった。「社会主義リアリズムの問題

に対する鹿地や山田の態度は、ありゃ何じゃ。しょっちゅうぐらぐら変ってばかり居ってさ。わしらに文学のことは好う解らんけれど、田舎で遠くの外から見ておっても、あんまりみっとものうて本人どもより見物しているわしらの方が却って顔が赤うなったでよ」

作家同盟の指導部の諸君に敢えてこの卒直な農民の言葉をつたえて置きたい。

七、新しき出発

解体声明書に対してまだまだいうべきことは大分ある。しかし私はここで何も殊更揚げ足取りをしようとは思わない。又、死んだ児の歳を数えるような愚を敢えてしようとも思わない。ただ、憎まれるのを承知の上でわざわざ以上のような事をいったのは、将来のプロレタリア文学運動をして、このような無残な誤謬や混乱をもう一度くりかえさせたくないからである。

徳永直のいう通り、吾々にとって今や新しい出発の時が来たのだ。吾々は今までのように、全然形骸に化け去って単なる重荷にすぎなくなった組織の軛にわざわいされることなしに、大いに思うままに物を書こう。

吾々は過去における吾々の文学的遺産……それは単にプロレタリア文学だけではなくブルジョア文学のあらゆる種類をもふくめての過去の遺産の堆積を、精力的に摂取してその正しきを取り、正しからざるは排除しつつ、それをあくまで吾々の陣営のために生かそう。

それは単に文学作品についてだけいうのではない。文学理論についても、あらゆる遺産を再検討することによって、将来への優れた礎石を造り上げつつ、こんどこそ吾々の文学を真実の意味に於ける労農大衆の文学としよう。

吾々の作家の中でも、時に間違ってブルジョア文学の路へ紛ぎれ込んで、姿を見失ってしまう者もあるかもしれない。たとえば立野信之のように。だが、そんなものにかかわり合っているよりも、吾々は先ず吾々の前進のための道を切り開かなければいけない。(三月十三日午前五時)

(一九三四年四月「文化集団」)

社会主義的リアリズムか！
日和見主義的リアリズムか！

伊藤　貞助（発表名　佐分　武）

ナルプの解散について

ナルプは解散した。

これは解散を敢行した中央部にとってはジクザクの途をたどった熟慮の結果であったかも知れない。しかし多くのナルプ同盟員にとっては寝耳に水であった。噂は既に拡がっていたが解散そのことは突然に行われた。

理論的に、解散が正しいか、正しくないか、それは議論の余地がないであろう。

勿論、断呼として正しくない。

徳永直君の賛成(?)論によれば(東朝三月八日)第一にそれは、その組織形態が、今日発展して来た作家達に適合しなくなって来たこと、第二に……存在の不可能がその動議を与えたことによるそうである。

解散によらず再組織の方向は何故とられなかったのであるか? 又解散必至ならば何故、そのための準備活動が行われぬのであるか?……この脳髄に霞のかかった作家はナルプ解散という記録的大問題をしかく簡単に片付けようとしている。

プロレタリア文学運動は一個の運動である。個々の作家が思い思いの作品を書いていればそれですべては終るものではない。プロレタリア文学運動が……………………、そのことによって質的に高められつつ集団的教育活動を押進めねばならぬものであることは既に明らかなことではないか? この運動は誰が押進める。勿論、個々の作家・働き手がその構成部分である。しかし、その主体は何者か? それは文学的組織である。

指導の機械化、作家に対する悪しき影響、文学の特殊性の無視、その政治化等々の誤謬は……が存在するからではなく、その……が誤った方向をたどり、誤った構成がとられているからである。その誤謬が正される時、……は健康なものとなる。徳永君及びこれとつながる一連は、運動の誤謬と行詰りが……の存在のためではなく、その内部的誤謬のために生じたものであることを認識し得ないか、乃至は認識することを欲しないのである。

解散が……意味から……的に企てられたということになるなら、問題は自ら別個のものとなって来る。この観点からすれば、今度の解散は正しいとされ得るか? 否?

解散は溝を飛び越すように行われた。此方側から向う側へ! そして、両側には何等のつながりもないのである。

ナルプは如何に進むべきか? これは充分な考慮――客観的条件とナルプ自身の現実の状態との慎重な評価の下に決定さるべきであった。――正しく客観的条件はナルプにとって極度に不利であった。同盟員は萎縮し積極性を失いつつあった。だが、指導的対策が正しく行われたならば、再び新しいいぶきを吹返すべく多くの同盟員はあった筈である。同盟員の消極化はすべて客観的条件の不利によるものではなく、指導の機械化によることが多大であったこと

を中央部も亦認めているではないか！

同盟員の積極化のためには何等努力せず、手をこまねき実行のともなわぬお喋りをくりかえしつつ、日一日と衰退の一路をたどり、遂に溝際へ来て了い、身を翻して解散の最後の手をあげてしまう。これが、中央部諸君の口をきわめてののしって来た日和見主義にあらずして何んであろうか？

ナルプは、同盟員の積極化と、そして……の………のために、幾段もの備えをたてて……べきだったのである。公式の道をではなく屈伸自在の身ごなしを以って進むべきだったのである。その結果、解散が必死なれば、そのための準備活動は、より勢力的に行わるべきであった。それは全同盟員を含むところの広汎な準備活動であるべきであった。中央部のイニシアチブの下に広汎な討論がまき起さるべきであった。会合のみがその手段ではない。各種の手段を通じて解散の意義と、解散後の同盟員の進むべき方針が、明確に具体性をもって指示さるべきであった。

『解散？　散りぢりばらばらになった俺達は何処へ行けばいいのだ？　………とはどういうことか？』こう叫ばざるを得ない多くの同盟員が居ることだろうと信ずる。ナルプは一人立ちの出来る者ばかりの組織であったろうか？　一人立ちの出来ぬ者は波の間に沈んで了えというのか？

解散の後始末は誰がする？

だが、いたずらに慨き昂奮することを止めよう。われわれは、この解散のよって来った実体をよりハッキリと捕えこの悲しみ怒るべきことにさえも幾多の意義を見出し、われわれの今後の途を照らす炬火とせねばならぬのである。

私は、今度のこの日和見的解散を或る意味に於いては歴史的必然であったと理解する。労働者農民の……が、全体として……の時代にあった、その文学運動も、その組織も発展の途をたどることは当然である。……が困難に面し——労働者の生活が本質的には少しもよくなってはいないし、資本主義的なもろもろの……が解消しているわけでもない、農民の足が泥沼から一歩でも抜け出しているのでもない、唯、………後の………………、政治的作用の故に、又、……インフレ、貿易インフレの………故に、それが加速度的に退却の途をたどらざるを得ぬ状勢に立到る時、文学運動の組織も亦下向線を辿らざるを得なくなる。それが最近の状態を特徴づけ現在の分解を結果した、と、見ることも出来る。時の流れは冷酷であって弱き者は沈んで行く。彼等の敗退は必然であろう。

だが、ナルプ中央部が時の流れによって打ちひしがれ敗北することは歴史的必然として合理化されることは出来ぬ。戦い利あらずの時にあって、逆流に抗して戦うところにこそ、ナルプ中央部の重大任務は存するのではないか！　彼等こそ転落せんとする車のブレーキとなり、進路を正し、整備をととのえ、確固たる足どりをもって、急坂をも隘路をもものともせず、一歩一歩登り行くべきではない

か。
彼等は抗議するであろうか、『解散は前進のためであり、再整備のためであると』と、『それは絶対に……ではない』と。では中央部諸君よ、解散後に処すべき諸君の成案を示せ。成案なく成算なき解散、分解は敗北へ向っての超スピードの前進ではないか?
一人の個人を例に引こう。
鮮やかな、ジャーナリスチックな転向ぶりを示した藤森成吉先生についてである。
労働者農民の運動が、そして同時にプロレタリア文学運動が華やかな開花期に入らんとする頃、彼はプロレタリア文学の陣営に入って来たのであった。運動の昂揚期を通じて彼はプロレタリア文学陣営内の働き手としてだけでなく、或いは………に、或いは政治運動に――労農党代議士候補者とまでなって、筆をもって、又身をもって、彼自身精一杯の……たることを示した。――勿論、筆の上で、抽象的に……たることを示す方が多かったが……。
嵐が来て、冷い風が吹く時が来るや、彼は燕のように暖地を求めて、ドイツへ去った。……ドイツにも冷いヒットラーの嵐が近づき、日本には一応の整理後の静けさが来たかの如く見える時、彼は帰って来た。景気よく彼は口を開いた。彼は拳をあげて叫んだ、『あちらでは!』ブルルル…彼は声をふるわし口をつぐんだ。――物言えば唇寒し秋の風――同時に彼は、自分の周囲、仲間を、同じ心理におのき、坂を降らんとする一連の同志を見た。彼は洗練された敏感さをもってすべてをさとった。『冬が来る、雪に閉されねばならぬ冬が』彼は、吹きさらしの坂の上から、誰よりも身軽く、山の麓の南の日だまりに――『月と花の島』へ――駆け降りた。
これが、彼の、つまり……の跡である。
彼は疑いもなく進歩的インテリゲンチャであり、良心ある人間であった……と共に、非常に虚栄心の強い男であった。
私は、彼の中に弱き進歩的インテリゲンチャの一般的姿を見出す。彼が今日あることはまことに歴史的必然であったろう。私は、彼の中に悪しき意図や、不純な精神を見出そうとはしない。彼が今日までたどって来た道は、彼自身には信念の命ずるところであり、良心と誠意の命ずるところであったと信じよう。彼は弱き人間であり、……の鉄火の中で自らを鍛えるだけの、強固な意志も持ち合わせていなかったのである。彼は鋼鉄にまで鍛えられず、生鉄のまま、焼きが廻わればなまくらになる人間であったのである。
彼と同じ道をたどり、又たどらんとしつつある同傾向の作家達に対し、私はすべてこの善意ある言葉をささげよう。
だが、彼等に同情することは絶対に出来ない。彼等が歴史的必然の道をたどったのであっても、それが結局に於い

て……であることに少しの変りもない。彼等が真に………
……の……たらんとしたのなれば、彼等は自らを鋼鉄にまで鍛え上ぐべきではなかったか！　彼等の……とは、つまりは自己満足であったのである。困難に面すれば破綻である。

　彼等が労働者農民のために、と喚き廻っている時彼等は百パーセントに自己満足した。だが、労働者農民は殆んど何んら益されるところがなかった。彼等が敗走する時、彼等は失うべき何物もない。むしろ世間は拍手してくれた。だが、労働者農民は、意外なる損害を与えられた。なまじいの彼等の名声の故に衰退の誇大化と、腐敗的影響の少なくないことを見よ。労働者農民は、彼等のために嘲けられるところが多大ではないか！

　だが、我々は笑って彼等を行かしめよう。それは、一方に於いて……清掃であるのだ。茨の途を進むべきプロレタリア文学運動は、此処から新らたなる出発をするのである。

　これは脱落し行く個人に向って言えることだ。くり返して云う……の日和見的解散と、それを敢行したナルプ中央部の責任は、かかる冷笑をもって見送ることの出来る種類のものではないのである。彼等の誤れる……と、彼等の責任に対しては……………………、徹底的批判、追求、糾弾こそが必要なのである。そして、この追求の中から、新らたなる方針は生れ、力は養われねばならぬ。

　未だナルプ解放の声明書なるものを読んで居らぬので、その方面からの批判が行われなかった。後の機会に論じたいと思う。

鸚鵡のリアリズム

　鸚鵡は物真似の上手な程値が高い。人間社会に於いてもあれやこれやの物真似によって仲々上等な場席へ這い上るものが多い。プロレタリア文学の領域に於いてもこの物真似の上手なものは沢山居る。今や彼等は、ソヴェート文学の領域に於いて形成された理論を、色とりどりに物真似して、自らを華やかにしている。

　プロレタリア文学の鸚鵡達は、口を揃えて唄う。『社会主義的リアリズム』『社会主義的リアリズムこそ我等のものだ』『唯物弁証法的創作方法は間違いだ、社会主義的リアリズムが正しい』と。

　かつてはラップ的機械論のチャンピオンだった方々もいつか社会主義的リアリストになっている。林房雄もこのリアリストらしい。広告文によれば、この方面の第一人者である森山啓君の功績は決して少いものではない。それはハッキリと認められねばならぬ。しかも、同君も亦、社会主義的リアリズムのスローガンが、この資本の栄ゆる国に於いて直ちに適応さるべきか否かを検討して居らぬ点で鸚鵡の一族たるをまぬがれない。

ソヴェート的現実と日本的現実の差異、ソヴェートのプロレタリアートとこの国のプロレタリアートの置かれている状態の差異、当面しつつある……の差異を理解し得ぬ者は、その思考能力を疑われても仕方がないではないか。

社会主義的リアリズムとは何か？　それを根本的に分析批判し摂取することが必要なのである——それを繰返して叫び、紹介することではない——それは如何なる精神をもった創作方法であるか、如何に芸術を理解し、如何なる芸術の創造に役立たんとするものであるか……等々。その時それが日本的現実の中にあって如何に生かさるべきかが明らかになって来るであろう。社会主義的リアリズムというスローガンは、それ自身永遠の真理ではない。弁証法論者の理解する創作方法のスローガンは、……的目標の変移にともなうものである。ソヴェートのプロレタリアートと、資本主義国のプロレタリアートとはその……を異にしている。すべての国々のプロレタリアの文学にとって、社会主義的リアリズムのスローガンが正しいのではない。

では、社会主義的リアリズムとは何か？　又この国に於いては如何なるスローガンが正しいか？

——同志スターリンによって提出された社会主義的リアリズムのスローガンは第二次五カ年計画の開始に於いて、ソヴェート文学の前に立てる新しい諸任務の有機的表現である——ラージン

——これらの諸任務は何よりも先ず芸術文学を数百万の読者の精神、その心理と意識への強力な教育的な影響の武器に転化させる線に沿うて進んで行っている……中略……そしてここで芸術の言葉は最も大なる意義を獲得するが夫々の作品の教育的影響力こそは社会主義的リアリズムの第一の要求である。

社会主義的真実は——事実の総和ではない。それは諸事実の綜合であり——その中から典型的なもの、性格的なものの撰択である……そして正に生活のかかる社会主義的真実を語る能力こそはソヴェート文学の指導的スタイルとしての社会主義的リアリズムの第二の基本的な特徴であるのだ。

社会主義的リアリズムの第三の特徴は大衆性、任意の労働者及びコルホーズ農民への作品の接近、芸術作品の深い、私はそう言いたいのだ、——天才的な単純化への方向である……中略……社会主義的リアリズムは幾百万が建設の中へ惹き入れている……的な社会主義的建設の時代に形成されたスタイルとしてこの幾百万の最も高い積極性と意識性とを反映しなければならず、換言すれば文化と開明とを渇望しつつある新しい読者を考慮に入れなければならない——ラージン「社会主義的リアリズムについて」文化集団社発行——

る。それがソヴェート的現実——社会主義的建設の進行の中から形成されたものであり、社会主義的建設のために幾

百万の読者の精神、その心理と意識への強力な影響を与えるべき武器たらねばならぬものであることが明らかにされている。

――社会主義的リアリズムとは社会主義建設についての凡ゆる真実を大衆に向って語ることを我々に助けてくれるようなリアリズムについて言うのである。……社会への進展についての一切の真実を大衆に語ることを助けるようなリアリズムについて言うのである――と、グロンスキー。

社会主義建設の中から形成され、社会主義建設のために役立つようなリアリズムのスローガンであるが故に、この資本の栄ゆる国にそのまま移すことが出来ない、と私は言うのではない。

も一歩を進めて、第二の基本的特徴として挙げられている、社会主義的真実を語るものとしての、……ソヴェート文学の指導的スタイルとしての社会主義的リアリズムについて考えねばならぬ。

社会主義的真実とは何か？　この国に於ける社会主義的リアリスト達は、この国に於いても社会主義的真実は存在すると考えているのであろうか？……社会主義への歴史的必然性を示すことが、社会主義的真実を描くということになるのであろうか？　とすれば、それは正確な意味に於いては明確なマルクス主義的歴史観によって……されたものでなければ、描けぬと云うことになる。それはソヴェートの社会主義的リアリスト達の排撃する公式主義、機械主義である。又、非常に広義の意味に理解するとすれば、……

……的一切のもの、資本主義の……を、その中から生ずるもろもろの事象を描くものは、すべて社会主義的リアリストということになる。此処に至れば、それはプロレタリア・リアリズムの主張よりもっと漠然たるものとなる。

社会主義的真実とは、ソヴェートに於ける社会主義建設のために邁進しつつあるプロレタリアと農民と生活的真実ではないか。この国のプロレタリアートと農民は、其処に至るまでに、なお二つの……の階段をのぼらねばならないのである――それは、引続き同時的に登らねばならぬであろうとしても――その日までの生活的真実、然り、この国に於けるプロレタリアートの、農民の、すべての勤労民の現実の、この社会に生きる生活的真実をこそ、われわれは描かねばならぬのである。この国に於けるその生活的真実は、豆粕的であり、暗黒であり、飢であり、親子心中であり、……そして、その一切をはねのけ、自らの……のために不断に重い鉄の蓋をゆるがす、鉄瓶の中の蒸気のようなものである。その時われわれのところに於けるリアリズムは如何なるものであるべきだろうか？　この国のリアリスト達は――ブルジョア・リアリストは、事実に於いてリアリストたり得ない、彼等にはこの生ける資本主義社会の真実を見得ない――この国の労働者農民及び一切の勤労民の置かれた生活的真実、既に述べたような暗黒と飢と……

……と……の真実を描かねばならない。そしてそれは、この国のプロレタリアートの直面しつつある……、彼等の明日のために役立つ、明日のために彼等を教育し、……せしめる様に描かねばならない。——農民をその封建的泥濘の中から救い出し、一切の勤労民の……のために助力し、然も彼等と結んで自らをとき放つための途を突進まねばならぬという、二重の複雑な任務を解決するために、昨日を示し、今日を示し、亦明日を示し、今日の日に役立ち、明日に役立ち、……対……の突角の…………の日に準備するようなリアリズムでなければならない。この観点から、封建的残存と資本主義的諸……と其処から生ずる一切のものが生々と、伸々と、自由に描かれるところにこそ、われわれのリアリズムは輝きを持つのである。

——芸術はどのように、またどこへ諸階級は進みつつあるかということでなく、どのように、またどこへそれは近い将来に於いて進まなくてはならないかを理解すべく実践に助力することが出来る——スターリン

このすばらしい芸術の功利性——われわれの文学は明確に奉仕すべき対象を持っているのである。そして、ソヴェート文学の対象と、この国のプロレタリア文学の対象とは同一種のものではあるが、全く異った条件の中に置かれている。それは導くべき道を異にしている。この国のプロレタリアートと農民は、現在、ソヴェートの彼等よりは後の、よりけわしい、複雑な、……多い道を歩いているのである。

では、この国のリアリスト達のスローガンは？……的リアリズム!!……これは適切な言葉ではない。しかし、文字の形に於いては、より正確に現わし得ないことは残念である。

労働者農民、及びすべての勤労民の明日のために、その……の生活的真実を、そして……的生活の真実の一切を描け、彼等の進むべき道を示せと、このスローガンは呼びかける。

……的リアリズムの具体的内容に関しては×××ロマンチシズムの問題と共に追って詳細に論じてみたいと思っている。

プロ作家のブルジョア化

プロレタリア文学が今日程全面的後退を示したことはあるまい。林房雄君などに云わせると大変な満開期のようだが、それは林君的な華が最も時を得てのさばり返っているというに過ぎない。……又、一歩前進したとも言われている。だが、『廻われ右、前へおい！』でなければ幸である。

林君及びそのグループの人間に言わせると文学は人の心をたのしませるものであるらしい。——だが、そうした意味からも林君やその他の彼と一連の作家の作品を一部分の所謂文学の判る人々（?）以外の心をたのしませないこと

も事実のようである。
プロレタリア文学は人の心をたのしませるためにのみその存在の価値があるのではない。それは既に前節に述べたところで明らかであると信ずる。
「作家の創意と傾向の大なる自由賛成！　思想、幻想、形式と内容の自由賛成！」とわれわれも亦叫ぶことが出来る。しかし、
――芸術は形象の助けをかりての認識である。が世界の認識方法はわれわれにあっては――芸術家にとっても、政治家にとっても、唯一である――ラージン。
プロレタリア作家の自由にはこの意味での限界性がある。作家はプロレタリア文学の偉大なる光栄ある功利性を忘れてはならない。かくあったところの歴史、かくあるところの現実と共に、かくならねばならぬ未来を描き示さねばならぬ。これは当然に、作家に一つの角度を要求する。他階級の文学者とは全く異った角度からの物の見方を要求する。プロレタリア作家の自由とは、川端康成や横光利一或いは吉田絃二郎、サトー・ハチローの自由とは全く異っている筈である。ところがプロレタリア文学の華と自負する林、武田麟太郎、藤沢桓夫君等及びそのグループの人間はこの限界性を踏みくだいて、川端、横光的自由にあこがれ進んでいるものの如くである――武田君はごく最近までも自分の右翼的偏向を認め、その清算を大いに誓っていた、と同君の大変親しい友人が語っていたが、どうも今ではそんなことは溝の中に蹴込んで了ったらしい――
私は、ブルジョア作家と交ってはいかん……等々小児病的なことを言おうとは思わない。しかし、自ら労働者農民、一切の勤労民の文学者であると自負する作家は、角度を失ってはならぬとする。角度とは何か？　弁証法的唯物論の世界観を持って…………………な意識ではない。勤労民に味方するものの……情熱――怒り――良心をさすのである。
現在の林、武田君とその亜流達には縦から見ても横から見ても、前から後から見ても、この情熱、この精神を発見することが出来ない。
彼等は恐らく、自らの現在の……を進歩的作家を労働者農民の側に引きつける為の努力をなしつつあるのだと抗弁するだろう。――或いは、その抗弁さえもせぬかも知れぬ――しかし、現実の具体的な現われは、彼等が進歩的作家を引つけるのではなくてブルジョア作家達に彼等が引ずり廻わされているではないか！　今や、プロレタリア文学の領域には、ブルジョア文学の、特に世紀末的小ブルジョア耽美主義の影響が波を打って流れ込みつつある。進歩的ブルジョア作家の獲得という合言葉は、逆にブルジョア文学によるプロレタリア作家の軟化のために役立っているという皮肉な現実を呈しつつある。
われわれのところでは世界の認識は政治家にとっても芸術家にとっても同一である。プロレタリア作家がプロレタ

リアの作家であり、より優れたプロレタリア作家であるためには、彼はプロレタリアの唯一のものの見方、世界観としての唯物弁証法を獲得せねばならぬ。芸を磨き、技術をねり芸術をたのしむことのみがプロレタリア作家の能ではない。勿論、それは必要事である。しかし、自らの世界観、プロレタリア作家の基本的な任務である。――進歩的ブルジョア作家の中にプロレタリア文学の影響を浸透させることも必要であるが、それは彼等との酒場での交遊をもって達せられることではない。

それによって彼は、よりすぐれたプロレタリア作家として高められて行くのである、……誤解してはいけない。私は、唯物弁証法の世界観をもって……されなければプロレタリア作家ではないというのではない。プロレタリア作家はプロレタリアの唯一の世界観を獲得することによって質的に高められて行くというのである。

以上は、問題を時評的に論じて来たので非常に概括的になってしまった。

ナルプ解散の声明書についても徹底的な……を加えねばならぬし――この声明書がいくらかでも正しい議論をもっていようなぞとは信ぜられない。――創作方法の問題についても森山君などの意見を吟味しつつもっと突込んだ考察が加えられねばならない。又、林、徳永、武田、藤沢、藤森等々、或いは両細田等の作家に対する意見も、いつかもっと具体的に述べて見たいと思っている。

（一九三四年四月「文化集団」）

否定的リアリズムについて

――プロレタリア文学の一方向――

川口浩

一

プロレタリア文学運動の過去の欠陥や誤謬は一通り清算された。そのまぬがれがたい帰結として、日本プロレタリア作家同盟は解散され、ちかく正式の解散声明書が発表されるという。これで遂に、行くべきところまで、行き着いたわけだ。いまはもはや死児の葬送曲をかなでているべき時ではない。作家同盟を解散して、ただしいと信じるあたらしい方向のもとに、プロレタリア文学の再建を試みると

いうことは、われわれ自身にとってはもちろん、社会的にも重大な意味をもっている。われわれはこの再出発を、充分意義ある、ゆるぎないものとしなければならぬ。ちかい将来におけるより一層の飛躍を期として、いまから充分用意するところがなければならぬ。

そこで――プロレタリア文学再建運動の方向はなにか。これがいま、再出発の門出に際して、当然発しうるべき最初の質問である。われ、ひと共に、たずねたい問題である。ところが、そうたずねられると、われわれにはまだ充分に、それに対する解答が、用意されていないのではなかろうか。過去への訣別の辞は、すでに述べられたが、将来への方向は、まだはっきりと見定められていない。これが現在の偽りない状態ではなかろうかと思う。

個々人についてみれば、みながみな、それ相当の用意と覚悟をもっていることだろう。私はけっしてそれを疑わぬ。それからまた、あたらしい方向というものは、そうてっとりばやくきめられるものではない、ということも考慮に入れているつもりだ。こうあるべきだという定式をこしらえて、それを頭からおっかぶせようとすれば、それは過去の誤りの繰り返しでしかない。あたらしい方向は、作家と批評家との協同事業によって、おのずから生みだされるべきもの、はじめからまとまったものがあるなら、なにもあたらしい運動はない。そのことも私は心得ている。また別な方面からみれば、プロレタリア文学の新方向は徐々にではあるが、次第にあきらかになりつつある、ということも、認められないではない。作家・批評家諸君の労作から、われわれは或る程度までそれを看取することができる。

が、それにもかかわらず、物足りないものを感じるのは、つまり、もっとはっきりした文学的（政治的ではない！）プログラムが欲しいと感じるのは、私だけであろうか。

近頃、そこかしこで、文学復興の声がたかいのに対して、復興の要望や意気込や掛声はあるが、しっかりした根拠なり積極的な立場なりがまだない、といわれている。プロ文学再建運動は、この声に無関心ではありえないと思う。なぜなら更生プロレタリア文学こそは、あらゆる文学建設運動の最前線に立たなければならぬからだ。

プロレタリア文学再建運動の方向は、できるだけ明確でありたい。その過去に対する否定がつよければつよいだけ、あたらしい意欲の方向は、ますますもって公明でありたい。美女の扮いや鬼の面はいらぬが、なにを欲し、なにを欲しないか、なにに賛成し、なにに反対するか、その旗幟はなるべく鮮明であった方がいい。このことを、作家はともかくとしてすくなくとも批評家は、いつも心掛けているべきだと思う。と同時に、口のなかでモグモグいったり、さりげない様子で物をいうことを、批評家は現在とくに避くべきだと思う。

二

プロレタリア文学再建運動の方向は、いまさら事新しく問題にするまでもない、それは社会主義的リアリズムではないか、という人があるかも知れぬ。なるほどそうだ。私もそれに異存はない。社会主義的リアリズムに賛成である。そしてその意味では、プロレタリア文学再建運動の方向は、一通りあきらかにされている、ともいえる。しかしそれでは、それが唯一の道であり百パーセントの適合性をもつか、ということになると、現在おかれているプロレタリア文学の状態からみて、私は若干の疑問を提出しないわけにはゆかぬ。

もしも社会主義的リアリズムをかかげるのだったら、それは、わが国においてはソヴェートの場合とはかなり異って、といってわるければ、或る程度まで屈伸されて、考えられねばならぬ、と思うのである。この創作理論の運用に、本誌前号で森山啓が示しているとおり、具体的考慮が払われねばならぬ、と思うのである。もちろん、芸術的方法としての社会主義的リアリズムは、ソヴェートにおいても、非常に広汎な包括的な意味に附せられて、提唱されている。この創作スローガンは、図式的な処方箋ではないということが、繰返し強調されている。×××ロマンチシズムという条件もそこでは認められている。が、それらすべてを考慮に入れても、なおかつわが国においては、もう一段の考慮が必要ではないか、と思うのだ。そしてそれをいろいろな方面から試みることによって、プロレタリア文学再建運動の方向は、次第に具体的な明確さを獲得してゆくであろう。

その一つの試問として、私はここで、いわゆる否定的リアリズムの問題をとりあげてみたい。てっとりばやく結論をさきにいえば、いささか異説めくかも知れぬが、否定的リアリズムは、再生プロレタリア文学の一つの方向として、有意義でもありまた認められるべきだ、といいたいのである。

私はこの問題を、社会主義的リアリズムとの対比において論じることにしよう。まず最初に、幾分脱線する嫌いがあるかも知れぬが、前置きとして、社会主義的リアリズム説を生んだ理論的前提について、私の理解するところを一言述べさせて欲しい。

三

社会主義的リアリズム提唱の意義を、文学理論の面について考察するならば、それは、マルクス主義文学論における、旧来のイデオロギー万能説、もしくはイデオロギー偏重説の終極的な清算である、と私は解する。社会主義的リアリズムの方法にしたがって書けということはなにを意味

するかといえば、それは真実をえがけということだと、グロンスキーはいっている。またキルポーチンは、社会主義的リアリズムのスローガンのもっとも簡単な真意は、芸術家から真実を、芸術における生活のただしい描写を、要求することとのなかにふくまれるといい、あるいは、現実の真実の描写の問題は、文学にとっての、芸術にとっての生死の問題であるともいっている。ただグロンスキーやキルポーチンにとどまらず、ソヴェート作家・批評家の任意のたれかれが、一様に、このような観点からものをいっている。プロレタリア文学論は、ながい間、イデオロギーの世界を彷徨したのち、いまやようやくその呪縛からのがれて、文学の本来の故郷へもどった、と確言して差支えないだろう。

真実をえがけ、それは、まあなんと、古くさい常識であるか、という奴があるかも知れぬ。が、それこそはまさにシニズムというものだ。古来の大文学はすべて、この平凡な、常識的な「真実をえがく」ことのために、生死してきたのではなかったか。

ところで、真実といっても、さまざまである。それはけっして一様ではない。けっして無規定ではない。ブルジョア的真実もあれば、社会主義的真実もある。漠然たる意味の生活的真実や人間的真実というものもある。それからまた、真実に対する考え方についてみても、芸術的真実というものは、当の作家をはなれては存在しえない、というふうな考え方もある。真実というもののこのような差違から、リアリズムの多種多様の性格が生じてくる。特定のリアリズムには、特定の真実が対応する。真実というものをつねに目標としながらもこの真実がその度毎に更新されてゆくところに、リアリズムの、一般には文学の、歴史的発展があるのだ。

さらに、われわれは、特定の真実には、特定の現実が対応することをも、わすれるべきではない。認識の歴史的限界が、現実の歴史的限界に達しない場合はいくらもある。凡庸な作家において殊にそれがはなはだしい。しかしどんなにすぐれた作家であっても、彼がおよび得る文学的認識の範囲は、現実の歴史的発展、限界を超えることはできぬ。一九世紀初頭のスタンダールやバルザックにとって、現実についてのブルジョア的真実をかたることはできるが、現実についての社会主義的真実をかたることはできないだろう。

社会主義的リアリストといえども、このような限界からけっして自由ではありえぬ。なるほど階級の情勢が当面の問題になっているソヴェート同盟においては、認識の階級的限界というものはなくなるかも知れぬが、その歴史的限界はこれからさき何年経ってもなくなる時はないし、また現実の歴史的発展が終止する時もないのである。過去のリアリズムの限界だけを論じて、社会主義的リアリズムにはなんらの限界もないように考えるならば、それはあまりに

も独りよがりというべきだろう。

四

さて、以上を前提として、社会主義的リアリズムをみる。

社会主義的リアリズムは、すでに述べたように、非常に広汎な包括的意味をふくまされている。しかしそれはけっして無制限の広ろさではない。そこにわれわれはいくつかの重要な規定を見出すことができる。それらの規定は、説く人によって(たとえばキルポーチン・ルナチャルスキー、ラージン)それぞれの言葉をもってかたられるが、えがくべき対象もしくは目標についていえば、現実についての、まさにそれであって、それ以外ではないところの「社会主義的真実」をえがくということではなかろうか。たしかにそれは、ブルジョア的真実でもなければ、漠然たる意味の生活的真実でもなくまさに「社会主義的真実」なのである。このことはラージンが、「社会主義的真実とはいかなるものか」という質問を発し、また「われわれの社会主義的真実と、ベリンスキー、チェルヌイシエフスキー、ドブロリュボフの真実、ゴーゴリの真実、バルザックおよびスタンダールの真実との間に、いかなる相違が存在するか」という問題を解こうとしていることによってもあきらかだ。

では、いうところの「社会主義的真実」とはなにか。これについては、はっきりした説明を見出すことが困難だ。それは非常にしばしば、真実のえがき方の問題と、相交錯して述べられている。が、キルポーチンの次ぎのような言葉から推して、その大体の意味は汲みとれるように思う。たとえば、「その肯定的なモメントにおける、その発展の勝利的な傾向をもてる本質的な歴史的内容における、生活の豊富さと多様さとの真実な正しい描写」あるいは「その一切のプラスとマイナスとをもてる、その困難と勝利とをもてる、困難にもかかわらず×の妨害、抵抗に打ち勝ちつつある………………原理をもてる、本質的な歴史的プロセスを要求すること」……。つまり、社会主義的建設の……進行ということが、「社会主義的真実」なるものの本質的モメントをなしている、と考えることができよう。これによって貫通されない真実は「社会主義的真実」ではない。それどころか、それは一般に虚偽でさえある。ルナチャルスキーの次ぎのような言葉がそれを物語っている。「家が建てられるところを想像せよ、それが建てられるであろうとき――それは荘厳な宮殿であるだろう。しかしそれはまだできあがっていない。そして諸君はそれをそのままに描いてこういう。これが諸君の社会主義だ――だが屋根がないじゃないか。諸君はもちろんリアリストだろう――諸君は真実をかたっている。しかしこの真実は実際には虚偽であることがすぐわかる。社会主義的真実をかたりうるので

は、どんな家が建てられるか、いかにそれが建てられているかを理解し、また家には屋根がつくられるはずだということを理解する者のみだ。発展を理解しえない人間はけっして真実をみないだろう。なぜなら、真実はいまの姿に似ていないからだ。それは一所にじっとしてはいない。真実は飛ぶ。真実は発展だ。真実は葛藤だ。真実は闘争だ。真実――それは明日の日である。したがってまさにそういうふうにそれをみなければならないのだ。が、そういうふうにそれをみえない人間は、ブルジョア・リアリストでありそしてそれ故に――ペシミストであり、憂愁家であり、しばしば騙りであり、贋造者であり、いずれにしても、意識的なまたは無意識的な反革命家であり、阻害者である」

ソヴェートの作家・批評家が、真実の本質的モメントを以上のように理解し、それを「社会主義的真実」と呼ぶだけの理由は、充分すぎるほどあるように思う。その理由、その根拠というのは、現在のソヴェート的現実だ。ソヴェート同盟においては、彼等がつねに誇示するように、巨大なテムポをもって、国全体が前進運動の真只中にある。中世紀的状態の後進国から、一足とびに現代世界の最先国になりつつある。政治・経済・文化等々、およそ社会のあらゆる領域が、無限の上昇線をたどっている。向上、進歩、発展、前進、隆盛、――なんといってもいい。要するにソヴェート同盟においては、現実そのものが、おそろしくポジティヴなのだ。誰の眼にもあきらかなくらいポジティヴなのだ。

この、眼にみえるということ、理窟や期待や見透しではなくて、その姿が実際眼の前にあるということ、それが作家にとってこの上なく重要である。作家は何者にもまして、抽象的真理を信じない。その意味で、作家は非常に頑固であり融通がきかない。

ところが、ソヴェート的現実における社会主義的建設の……進行は、もはやお伽噺や空約束ではなくて、明白な生活的事実である。もはやソヴェート生活のあらゆる隅々にあらわれているのだろう。たとえ否定的モメントが処々にあったって、肯定的モメントの比ではないだろう。グロンスキーは、いかなる真実をえがくべきか、という問いに答えて「もっともありふれた事実」をだといっているが、彼が「社会主義的真実」を「もっともありふれた事実」といったところに、ソヴェート的現実の性格的な風貌があらわれていないだろうか。

現実そのものが社会主義的であるときに、作家は社会主義的真実についてかたることができる。現実そのものがポジティヴなときに、作家はポジティヴな真実についてかたることができる。かくて、社会主義的リアリズムは、ポジティヴな肯定的な、能動的なリアリズムである。

五

ところが、われわれの場合においてはどうか。ソヴェートの現実と比較するさえバカゲているだろう。…………なんてことがないのはいうまでもないことだが、一般にポジティヴなものがあまりにすくなく、ネガティヴなものがあまりに多いことはたしかだ。支配的なのは、…………、…………、頽廃であり、不健全であり、醜悪であり、欺瞞であり、死の反動である。古いものは、ますます古く、醜く、ほろびるものは、ますます腐り、朽ちてゆくが、新しいもの、生まれゆくものは、まだ社会の河床に沈んでいる。

…………はどうした、プロレタリアートや農民の…………、と憤慨する人があるかも知れぬ。もちろんそれはある。そしてそれこそ日本的現実における唯一のポジティヴな存在だ。だがそれはまだ社会の前面に大きくあらわれたとはいえぬ。しかもそれはこの数年間に、何回にもわたって、手痛い敗北を被ったのではなかったか。

私はここでなにも政治論や社会情勢の分析をやるつもりはないし、またそんなことは私のよくするところではない。私はただ、日本的現実においては、ネガティヴなものが、ポジティヴなものに比して、あまりに大きく強いこと、だからネガティヴなものは、けっして軽視できないということをいえば足りるのだ。したがって私の意図が日本的現実におけるポジティヴなものの無視にあるのでないことももちろんだ。

ところで、もしも現実そのものがネガティヴなものであるとしたら、そのとき、作家がポジティヴな真実についてかたることは、非常に困難だといわなければならぬ。作家は、すでに述べたように、理窟や、予想だけで物を書くことはできぬ。明日はこうなろうといくら考えたって、こうなるべきものを現在自分の眼でみなかったら、それについてかたることはできぬ。たとえかたることができたにしたって、これまでの安直プロレタリア小説の領域を、どれだけでられるか疑問だ。

このことはさらに、現在のプロレタリア作家の階級的出身を考慮に入れるとき、なお一層、シリアスな性質を帯びてくる。現在のプロレタリア作家の大部分は、インテリゲントの出身であり、そうでないものでも、すでに前からインテリゲント化した人たちだ。そして今後ともこの事情がさほど変ろうとは考えられぬ。時たま労働者層や農民層からすぐれた作家があらわれようとも、残りの大部分はやはりインテリゲントによって占められるだろうと思う。彼等は社会におけるポジティヴな存在から遠くはなれている。彼等が直接そのなかへ入ってゆくのだったら別だが、そうでないかぎり、ポジティヴな存在について知ることは、困難だとしなければならぬ。

この困難を乗り超えて、日本的現実におけるポジティヴな存在についての、たかい芸術的真実をかたることのできる作家が、いまどれだけいるかは疑問だが、もしもそうい

う作家が出現したら、（それはけっして不可能ではないし、またそれを目ざすことは必要なのだが）私はその作家に対して最大の敬意を払うだろう。文句なしに頭をさげるだろう。

しかしそのことのために、私は現実についてのネガティヴな真実をかたる作家を軽視したくない。現実そのものが堪えがたいまでにネガティヴであるとき、そのただれた上皮をひんむくことは、ポジティヴな真実をかたることにくらべてけっして劣るものではないと考える。それ故、私は、再生プロレタリア文学の一つの方向として、ポジティヴなリアリズム（わが国においても、それを社会主義的リアリズムと呼んでいいのか、あるいは別の名前で呼んだ方がいいのか、私にはわからぬが）とともに、否定的リアリズムが考えられるべきではないかというのである。

六

ソヴェート的現実の照明のもとでは、否定的リアリズムは灰色のものであるらしい。

ルナチャルスキーは、一概にこれを、現実からの反動的離脱として排撃している。だが、ロマンチシズムにも、反動的なものと、そうでないものとがあると同様に、否定的リアリズムにも、反動的なものと、そうでないものとがないであろうか。資本主義的現実のもとにおいては、……ロマンチシズムの問題は、否定的リアリズムの問題と同一の基礎において考えられはしないかと思うのだが——たとえば、ゴーゴリをとってみたら——はっきりしたことは、まだ私にはわからぬ。）

それからまたラージンは、ベリンスキーやチェルヌイシエフスキーやドブロリュボフの名前をあげて、次ぎのようなことをいっている。「ベリンスキーもチェルヌイシエフスキーもドブロリュボフも一切の徹底性をもって、芸術における生活の完全な全面的な反映のために闘争することはできなかった。その政治的見解および哲学的見解において空想的社会主義の代表者であったところから（彼等の各々が個別的には政治的および哲学的見解をそれぞれ異にしていたのではあるが）物質的現実の真実の発展過程に依拠した積極的な綱領をもっていなかったところから、彼等は客観的には否定的リアリズムのために、社会的発展の推進力——……を示すのではなくて、生活の暗黒面を曝露するところのリアリズムのために、生活現象を綜合し典型化するだけで、その発展の自然的なもの、一つの特定の階級ではなくて、全人民の利害の見地から生活を反映するところのリアリズムのために、闘争したのである。」

さらに、ゴーゴリの名前をあげて——「まだ青年の時代に彼を囲繞する貴族的環境のなかで、ゴーゴリはあきらかに貴族階級のさしせまれる滅亡を感じた。そして自己の階級を救おうとするはかない空想に身を燃やした。典型的な

観念論者であったところから、ロシアの資本主義発達の一切の合法則性を理解しえないで、ゴーゴリは貴族階級の地位は道徳的説教によって、暗黒面の曝露によって、それについての警告によって救うことができると考えている。彼はフレスターコフ、マニーロフ、およびノズドリヨフを描出して、さながらこういっているかのようだ。まさに彼等こそは貴族階級の咎人であり、この階級をほろぼすところの人々である。彼等とたたかえ、コンスタン・ジャグロの例にならえ！」

以上ラージンがいっていることのなかには、否定的リアリズムの特色があざやかに示されている。が　その批判はかならずしも適切ではないようだ。彼等を否定的リアリストたらしめたものは、彼等の政治的見解や哲学的見解ではなくて、ニコライ的現実そのものだろうと思う。ソヴェート的現実のもとでこそ、否定的リアリズムは灰色であるだろうが、ニコライ的現実のもとではけっして灰色ではありえなかったであろう。たとえ彼等が、空想的社会主義者でも、観念論者でもなくて、科学的社会主義者であり、弁証法的唯物論者であったにしても、また物質的現実の真実の発展過程に依拠した積極的な綱領をもち、資本主義発達の一切の合法則性を理解しえたにしても、当時において、彼等がどれだけポジティヴな真実をえがきえたであろうか。たとえ社会的発展の推進力や、その発展の自然的なもの、合法則的なものを示さなかったにしても、ゴーゴリの「死せる農奴」は、サルトウイコフの「県物語」は、ニコライ的現実についての、たかい真実をえがいていないであろうか。

私はゴーゴリ時代のロシアと現代の日本とがおなじだとはいわぬ。だが私は、否定的リアリズムは、現在において有意義であり、認められる必要がある、更生プロレタリア文学のなかに、公然たる市民権を要求し得る根拠がある、というのである。「主題の積極性」時代にうばわれたところのその市民権を。

そしてまた実際にも、すでに武田麟太郎その他の諸君において、否定的リアリズムへの方向はあらわれはじめているのだ。

（一九三四年四月「文学評論」特輯号）

プロレタリア文学とナルプの功罪

山田清三郎

一

ナルプが無くなった。ナルプ——作家同盟の解体が、プロレタリア文学の新たなる再出発の道に置かれたものであることは、いうまでもない。でなければそれは意味のないことである。が、だからといって、ナルプはこれまで、プロレタリア文学の発展にとって、有害無益であったかというに、勿論そんなことはない。

ナルプはプロレタリア文学組織として、重大な誤謬と偏向を犯しはしたが、そしてそれが、今日の解体と、全然関係なしとはいえないのであるが、しかしながら、その積極的な業績もまた、決して没すべからざるものがあるのである。所謂「功罪」は共にある。私は今ここに、それについて一応の簡単な総決算的解明を試みたいと思う。

二

先ず功績についてであるが、それは(イ)理論的なもの、(ロ)創造的なもの、(ハ)組織方面に於けるそれと、この三つに分けて考えられる。

(イ)では、第一に、プロレタリア・レアリズムの主張を挙げねばならぬ。第二は、文学大衆化と形式と内容の問題の一応の解決、第三には、最近の社会主義的レアリズムの方向の確立に指が屈せられる。唯物弁証法的創作方法の提唱も、歴史的に一定の積極的意義を持つものであったが、それはまた一方に於いて、非常に重大な否定的効果をもたらしたものであるから、この場合、一応保留して置く方が適当のように考えられる。

さて、第一のプロレタリア・レアリズムの理論的及び実践的意義については、すでに、歴史的に、一定の評価が確立されているところのものである。即ち、プロレタリア文学に於ける一部の主観的、観念的傾向と、それに対置されたところの自然主義的、日常主義的皮相なレアリズムの批判に伴って提起された、現代生活の客観的描写——プロレタリアの高き階級的観点に立っての——について強調したこの主張は、未だ極めて素朴なものしか持っていなかったプロレタリア文学理論に、劃期的なものを加えると共に、それは一連のすぐれた、創造的成果の導きの糸となったのであった。小林多喜二の「蟹工船」「不在地主」徳永直の「太陽のない街」藤森成吉の「光と闇」中野重治の「鉄の話」片岡鉄兵の「綾里村快挙録」村山知義の「暴力団記」岩藤雪夫の「鉄」等が、プロレタリア・レアリズムの線に置かれたものであることは、作者たちをも含めて、一般に承認されているところである。而して、この主張が「戦旗」誌上に於いて行われたものであり、その先頭に立ったものが蔵原惟人であったことも、今なお多くの人々の記憶に新たなるところであろう。

第二の、文学大衆化と形式と内容の問題に関する一応の解決ということは、プロレタリア文学に於ける卑俗な大衆化の危険の克服——即ち、封建的、ブルジョア的大衆文学

の形式の模倣と追随の危険から、プロレタリア文学を救うと共に、芸術文学に於ける内容と形式の単なる関係と両者の統一に関する問題の一応の究明が、それを物語っている。この問題は、蔵原惟人（また林房雄）対中野重治、鹿地亘、蔵原対貴司山治、小林多喜二、宮本顕治、山田清三郎対徳永直等々の、激烈な内部的討論を伴ったものであって、その到達点は、ナルプの「芸術大衆化に関する決議」に、まとめられたのである。その決議の中には、今からみると、なお機械的な点や不統一さが残されているのであるが、その後に於けるプロレタリア文学の正道的な発展と、ブルジョア文学理論に於ける形式主義との闘争に於いて、それが果した積極的な役割は否むべからざるものがある。

第三の社会主義レアリズムということが、プロレタリア文学の新しい旗印となっていることは、現に周知の如くである。それは、曽てのプロレタリア・レアリズムを、一層発展させたものである。プロレタリア・レアリズムの場合には、プロレタリアの高き階級的観点ということが、強調されたが、社会主義的レアリズムは勿論それを抹殺し否定するものではないが、その根本に於いては、等しく生活の現実の客観的描写ということに立脚し乍ら、後者が、前者のより高い発展であるという意味は、前者が作家に、階級の主観――イデオロギーと世界観を、恰も先決的なものであるかの如くに要求しているのに対して、後者は、何よりも、生活の現実の正しい芸術的反映ということを、指示することによって、イデオロギー的、世界観的には或は後れ、或は動揺的な作家たちを含めて、複雑な創作上の道を照らしている点に求められる。社会主義リアリズムの問題については、ナルプは始め、個々の成員のイニシアチーブにも拘らず、それを精力的に研究することに於いて、消極的であったことは非難に値するが、後に、問題を正しい方向に統一的に導き、発展させて行ったことは認められねばならない。この問題についてはなお、たとえば「ソヴェート的現実」と「日本的現実」との関係やその他について、より具体的に究明しなければならない重要なものがのこされているにしてもである。

次に(ロ)については、「戦旗」「ナップ」「プロレタリア文学」「文学新聞」等に発表された、次の諸作品を思い浮べるだけで十分である。小林多喜二の「一九二八・三・一五」「蟹工船」徳永直の「太陽のない街」中野重治の「鉄の話」須井一の「綿」等は、あまりに有名であり、村山知義の「暴力団記」立野信之の「軍隊病」藤森成吉の「光と闇」三好十郎の「疵だらけのお秋」金親清の「旱魃」堀田昇一の「奴隷市場」細野孝二郎の「貧農組合」針木清の「監房細胞」等々、注目すべきものが甚だ多い。

これらの作品は、勿論個々の作家の手に成るものであって、ナルプはただそれらに、発表の場面を与えたに過ぎないという風にも、見えもし考えられもするだろうが、これらの創造的成果が、プロレタリア文学運動の進展と、ナル

プの方針の線に沿って、生み出されたものであることは、あきらかであって、それはまた、たとえば片岡鉄兵の「綾里村快挙録」等の場合についても、いい得るのである。「綾里村快挙録」が、ナルプ作家として、プロレタリア・レアリズムの軌道に立った収穫であるということを、作者自らが認めている事実によっても、それはあきらかであるのである。

創造的収穫についての具体的な解明は、ここでは省かなければならないが、それらが、日本プロレタリア文学の発達と、現代日本文学の中に、多くのものを与えていることだけは、疑う余地はないであろう。

最後に(ハ)では、第一に、大衆の中から新たなる文学的働き手を、多数誘導し、発見したこと、第二に、すでに世に現われている作家、批評家の中から、有力なメンバーをプロレタリア文学の側に引き寄せ、獲得したことに見出される。

「文学界」に長編「天国の鐘、地獄の鐘」を連載して、広く注目を惹きつつある阿蘇弘、農民作家の新人佐々木一夫、その他安瀬利八郎、橋本幸吉、黒江勇、島田和夫、田中英士、橋本正一等々は第一の場合で、彼等は何れもナルプが、「文学新聞」「プロレタリア文学」その他の活動を通じて大衆の中から得たところの、前途有望の若き作家たちである。第二では、大宅壮一、勝本清一郎、小宮山明敏、宮本顕治、坂井徳三、貴司山治、中条百合子、平林英子、大江賢次等々の名が、数えられる。これらの諸君のナルプへの参加とその活動が、プロレタリア文学運動の発展と成長のために、非常に重大な意義を持つものであったことはいうまでもない。

三

以上の功績に対して、その反対のものは、一に頑固なセクト主義に、集約的に表現されている。そしてセクト主義は、(イ)作品におけるイデオロギー万能もしくは偏重の傾向、(ロ)前者と結びついての批評における官僚主義、(ハ)敵か、然らずんば味方かの小ブルジョア的排他主義に導かれ、またそれらの中に、強化されて行ったのである。

これらは、今日では、何れも一通り清算されたところのものであるが、それは大体、次の如きものであったのである。

即ち(イ)は、プロレタリア文学の価値と効果は、作品の中に盛られた、作家のイデオロギーの高さに照応するという見解がそれで、この傾向は、芸術のボルシェヴィキー化、唯物弁証法的創作方法、主題の積極性等の言葉の鉦太鼓にはやしたてられて、ひた押し進められて行ったのであった。プロレタリア文学は、マルクス主義の理論的解説でもなければ、思想や、哲学についての芸術的形式による飜訳を意味するものではない、それは、現代生活の現実の、真実に触れた芸術的反映であり、なければならない。このこと

は、今では、全く明白にされているのであるが、すこし前までのナルプにあっては、全くその逆なことが、指導的・支配的傾向として、行われていたのである。作品における「左翼」的観念的方向が、ここに導かれ、この方向に反対し、もしくはイデオロギー的に後れた作家が、創造的活動から、次第に遠去かるようになったのも、理由のないことではない。小林多喜二の「沼尻村」の観念的生硬さは、この傾向が生んだ、悪結果の代表的なものの一つである。

(ロ)は、イデオロギー批評　棍棒批評、やっつけ批評とも呼ばれたところのもので、もろもろの作品の中に、一列一体に、作家のイデオロギー的高さの度合と政治上の主題の積極性なるものについて、検事の峻烈さをもって検討しつつ、この批評的尺度に不満なものに対してはおしなべて何等かの悪しきレッテルを貼りつけることを以て、能事終れりとしたのである。中条百合子の「一連の非プロレタリア作品」なる論文が、この場合の典型的なものとして喧伝されたことは、多くの人の知るところとなっている。こういう批評にかかっては、作家は、伸ばされることのかわりに萎縮せしめられ、啓発されることのかわりに、反感が挑発され、結局尻尾をまいて、後足を見せるほかはない。こういう批評が、大衆の中の初歩的な作家の成長を助け導くかわりに、彼等の二葉を刈りとる鋏となったことは、決して不思議ではない。

(ハ)については、曽ての「女人芸術」最近の「文学界」に対する態度や、ナルプ外作家の作品に対する批評等に示されている。

プロレタリア文学は、いうまでもなく現代のあらゆる文学の最優位に立つべきものであり、そしてそれは、そのことの具体的証明を通じて、多少共進歩的傾向にあるもろもろの文学の、その積極的な発展の方向の先頭に立って、後につづくものの綱を曳かなければならないところのものである。プロレタリア作家、批評家は、従ってまた当然の任務として、あらゆる文学者の文学者として進歩的意義ある欲求と行動はこれを支持し、これに協力し、正当な方向への発展のため導き手となることを、惜んではならないのである。ところが、ナルプは決して、そのようには行わなかった。個々のメンバーの個人的活動については別である。公には、ナルプは、ナルプ外文学諸勢力に対しては、それが敵対的なものではなく、多かれ少かれ進歩的であり、もしくは進歩的なものを含んでいるものに対しても、「プロレタリア的基準」による鋭い批判が、常に先行的に現われたのである。それが、プロレタリア文学に好意と良き理解を持つ人々に対しても、ナルプが彼等にとっては、近づき難い存在であるかの如くに思わせて来たのである。否、組織としてのナルプだけではない、プロレタリア文学運動そのものに対してでもあることに於いて罪禍はまさに二重であった。

セクト主義に集約された、否定的なものといえば、およ

そかくの如くであったのである。

四

ナルプは、一九三四年三月を以て、旧ナップ文学部以来の七年間の歴史を閉じた。解体は客観的な状勢の強圧に導かれてはいるが、主観的なものの中にもその要因はある。主観的なものでは何といっても、熱病的なセクト主義による最近一年間に於ける著しい内部的離散が、その致命的なものであろう。

しかし、一度傾き、傷いた家屋は、これをこわして、新しい建物にみなを移した方がいい。歴史や伝統に固執して無理細工を施しても、事態は決してより良くはならないからである。況んや、ナルプ成員は、住みなれた古巣を見捨てて、夫々思い思いに新しい建物を自分でつくって、互に競って、文学的営為にいそしんでいる。過去のすべての教訓を、新しい再出発の糧として。ナルプは無くなったが、プロレタリア階級と共にプロレタリア文学の発展はとまらない、セクト主義の清算の後に、プロレタリア文学の道は、新しく八方に拓かれている。ナルプも、以て瞑すべきであるのだ。

（一九三四年五月「新潮」）

政治と文学について

亀井勝一郎

一、夢想の純潔性

政治か文学かと、それを問うごときこころは、元来幸福な人間のものではないのである。いかに切実なものであれ、かかる心情が、芸術家の理想的幸福状態でないことぐらいはじめから明白なのだ。文学などというややこしい仕事を思いきって、一の社会的理想のために政治家たりうる人、然らずば一切の政治から身をとおざけて生涯を文学に托しうる人、政治に至上をみいだし、文学に至上をみいだす、そのあきらかな判断の心こそ、むしろ僕らの終局的憧憬であると云えば云えるのだ。だが、そのような判断が一体いまの世の中において可能なものか。政治か文学かと云いながら、実際には文学しているごとき矛盾を、矛盾だと嘲り笑うことが果して出来るものかどうか。おそらく、後生の幸福人は、もし彼らが美しい世の中に成長したならば、僕らの痴愚を微笑をもって眺めることであろう。しか

し現在の僕らは、その幸福状態をはるかにとおいものとして憧憬するが故に、現実的には却ってあたまからそれを否定し去り、不安定な文学精神に身を委ねて、かような質疑に揉まれなければならない。才能の問題でもなく、性格の問題でもない、転形期にある智識人のややこしい良心の問題である。実行を思う芸術家の心とか、理想につかまれる嘆きとか、すべては時代の転形に、まずいかに生くべきかを問う作家のせつない探求心なのだ。

　政治と文学という問題は古い。いまそれが再び作家の心によみがえるのは、現代の社会的不安が作家の背後にあってその身をひしひしと嚙むからであろう。暗いと思う感じ、その暗さをはねのけようとする意志、どうにかしてのびのび暮したいと思う念願、更に、それを実現するための力の探求と、こうして我しらず自分の手からペンの離れ去る瞬間を、諸君は果して感じないであろうか。政治と文学という問題を、その概念の説明によって区別づけようとする奇麗事や、この問題を政治文学という範疇内で研究しようとするペダントや、創作方法上の問題にのみ還元する仕事など、そういったものはこの際一切御免蒙りたい。それらは今日おそらく第十義的な些末事にすぎない。僕はここに、ブルジョア文学とかプロレタリア文学とかいう概念的差別をさえ撤去していいと考える。階級的自覚といったものの以前、云わばその原始的状態に、何ものにもわずらわされることなき純粋な良心の鼓動だけをまず聞こうではないか。たとえばひとりの恋愛詩人でもいい。また市井の情痴を描くことに無上の喜びを感じている作家でもいい。あらゆる社会的激動から身を離して、自己の書斎のなかにとじこもった学究でもかまわない。ただ我々が、そこに静かなペンを走らせているとき、窓の外に失業者のうめきをきき、マルセーユの歌声をきき、その声の素直にうけとれた刹那、そのためにペンの動きをとめどんな自己打算も消え去った瞬間にのみ、はじめて政治か文学かの問題がつきあがってくる。文学では喰えないから政治をやるというのではない、政治が恐ろしいから文学に逃げ帰ったのでもない。あらゆる功利的考えから自己を解放して、社会的激動に身を震わせえたとき、はじめて問題は正しくそこにおかれよう。マルクス主義を知ろうと知るまいと、むしろ卒直にして果敢な良心の上にまず問題をおかねばならぬ。

　人は現実的でなければならぬという。もっともなことである。そして現実的な人々は、仮りにそのような瞬間を自分のうちに感じようと、それが一体どうなるものかと、むしろその心情の甘さを笑うかもしれぬ。ペンを捨てて街頭にとび出す。さて、かような人間のおちつくところは、せいぜい階級闘争の足手まといになるのが関の山であろうと。すべては冷酷な事実であるかもしれぬ。しかしそのとき、それら現実的な人々は、要するに一個の見物人にすぎないことを僕らは知っておるべきだ。第三者であることをどんな場合でも僕らは恥辱としなければならぬ。能動的な

心情をのみ愛すればいい。それを横から眺めたとき既に一個の俗人と化す。「理想につかまれる」という言葉の意味を、ほんとうに自分自身のものとするためには畢竟「非現実」の観念に純粋である以外にはない。こういえば、俗流唯物論者たちは大騒ぎをするかもしれない。がいま暫く僕の説明をきいてほしい。「文学界」の「政治と文学」特輯号で、阿部知二氏は注目すべき疑惑を提出している。曰く、観念の中で考えられたり弄ばれたりする政治は或はロマンティクかも知れぬが、実際の政治（実際の政治を除いて何処に政治の実体があろうか）は決してロマンティクでない。人々が偶像化して遠くから眺める政治家はさまざまなロマンティクな衣裳を冠っているかもしれぬが、現実の政治家は決してロマンティクなものではなかろう、と。然り。だが、観念の中で考えられた政治が、実際の政治とどのような関係があるか、もっとひろく云えば、一見観念的とみらるるロマンティカーの精神が、云うところの現実性といかに相関するか、そこに問題の焦点があるのではなかろうか。ロマンティシズムを、妄想であり、観念の遊戯であるとみなす俗見は既にうち破られている。それはふかく現実に徹しようとするものの情熱の方向であり、現実のなかにただ現実を見るのではなく、その可能性と未来性とをみる、云わばリアリストなるが故にこその夢であると、僕は他の個所でものべておいた。そうだとすれば、窓の外にマルセーユ歌をきいてペンを擲つ心は現実的の政治に無縁にみえて、然かもその現実的政治の可能性に云わばその夢想にむすばれるものではあるまいか。阿部氏が実際の政治と云われるとき、それが何を意味するかあきらかではないが、たとえば政友会に入るべきか詩人となるべきかという設問の意味であるごとく、現存する政治の肯定に氏が立って居られるのではなかろう。むしろ一の社会的理想への追究力がいま問題である。何故政治に夢がないと言えるか。民衆を革命に駆る政治が虚無の仕業であるならば、人間喜劇に流血の心を注ぐ文学もまた虚無の仕業でなければならぬ。果して実際の政治が冷血の動物を生むならば、市井の戯作者もまた冷血の動物であろう。が、僕らが政治か文学かというとき、それは現存するものの単なる観照よりはるかにとおい。夢なき政治はいまの場合意味をなさない。もとより実際の政治とロマンティクな文学とは同一物ではないし、それに参加する人の性格もまた異るであろう。しかし氏は一方において ロマンティカーの心をみとめつつ、他方政治においては俗流唯物論の見地におちいっている。なぜ、政治が常に、ただつねに現実的であらねばならないのか。

おなじ「文学界」をみると、今度の問題の発頭人は小林秀雄氏であるという。僕は氏の「青年」評をよんだとき、既に氏の今日あるのを察知することが出来た。「青年」の作者として林房雄、「青年」評における小林秀雄、これは当今文学界の白眉である。小林氏はそこで云っている。何

故に人々は作家は架空の世界に自在に創造するものだ、しなければならぬものだという自覚を怖れるのか。作家は現実の再現を企図すべきではない、現実の可能性の上に創造を行うべきだ、という自覚を何故に怖れるのか。僕のいう処が果して浪漫派の寝言かどうか、君一つ判断してくれ、と。おそらく、世を激動せしめるすべての危険思想は、ここから胚胎するのだ。現実の可能性の上に創造を行うべきことが何故に恐怖であるかは、それが人類の未来を、理想を、憧憬を物語る夢であり、そのために本を焼かれたり鎖につながれたりしなければならぬからである。僕は、マルクスの思索が、夢から生れたものと堅く信じている。「経済学批判」は、「資本論」は、けっして大英帝国の博物館やブルジョア経済学の検討から胚胎したものではない。それは、みすぼらしい、暗い、中世のおむつをひきずっている夜明け前のドイツから、そこに住む純潔なユダヤ人の夢から生れたものである。世界は一の事柄に関する夢を長らく懐いており、その事柄を現実に手に入れるには唯その夢についての意識のみをもてばいいとは、左翼ヘーゲリアンたりし若き彼の言葉だ。「資本論」はその夢をうちに宿したもの、ハイネの詩はその夢を夢のままに歌いあげたものであろう。あらわにされた夢と、うちに抑えられた夢と、そこにどんな差別もあろう筈がない。マルクスがハイネを愛したのはその夢を愛したのであり、ハイネが政治か文学かと悩んだのはその夢のおかげである。僕らにとっての重大事は、ここに詩人と革命家との区別をみることではなく、区別しうべからざるものをみることでなければならぬ。その能動的心情の純潔さを愛することでなければならぬ。それは「自分は人類がよくも悪くもなるとは思わぬ」という大人の悟達からとおく、青年の素朴な夢に似ていてもいい。政治と文学の問題を今日考えようというならば、この素朴にして純潔な夢想の上にそれをおく以外にはない。それこそがいちばん現実的な態度なのだ。

二、政治からの逃亡

夢想の純潔性を考えうるものは、また夢想の悲劇にも思いを到さねばならぬ。すぐれたリアリスト・作家は、夢のために文学を憎悪し、何故文学などするのであろうとひとたびは政治の陣営に身を近づけた。逡巡と動揺と懐疑とをもちながら、恰かも夢の破れるのを恐れるかのように、おずおずと近づいてゆく。さもなければ、昂揚の刹那にドン・キホーテのごとく自らを狂信にまで変化させる。これは、同じ芸術的気質の二様のあらわれにすぎない。トルストイもドストエフスキイもゴーリキイも、ゲエテもハイネもバイロンも、すぐれた芸術家たちは、いつかは政治に身を近づけ政論をかいた。それはどんな党派の命令でもなく、強制でもなく、単に彼らの自発的な意志であったのだ。終局的にみて彼らが文学者として現われる場合にさえ、

彼らはまっしぐらな道を進むことなく複雑な迂回を試みている。その迂回の一端一端が、あるときには自然科学であり、他のときには商業であり、はげしい時代には政治となる。芸術自身といえどもこの迂回する曲線の彼岸にはない。つまり芸術家はいかなる意味においても専門家ではなく一の綜合的人間であり、その対現への執拗な侵透がかくさせるのである。それは関心の深さだ。また夢の深さでもあろう。しかもその迂回のひとつひとつに停止しえないところに――もし停止すれば彼は芸術家でなくなる――作家の危機とその悲劇とが存在する。政治と文学の場合にもそうだ。政治は社会的な党派の問題であるだけに、文学者がそこに払う犠牲もまた大きい。僕らにとっての最大関心は、リアリストたちがあえて政治に身を近づけながら、どこで、いかにいかにして政治から離脱するかという一点である。

一言で云うならば、あらゆる作家が、それに向って熱狂しているところの現実自体の仕業である。現実が彼らに復讐を試みるのだ。現実の所謂実際政治家ども、その愚劣な冷血漢どもが、夢をもてる作家たちの夢をふみにじってしまうのだ。逆に云えば、作家自身がその夢のために自分をふみにじってしまうことだ。僕らはあらゆる場合に理想的状態を考えることは出来ない。僕らの周囲が、いつもハイネとマルクスのごとく、ゴーリキイとレエニンのごとくには行くものではない。いな、そのような最高の人々のあいだですら、事柄は必ずしも円満に行っていない。完全な自己犠牲と、鉄のような意志と、冷静な分析と、それを一身にそなえたレエニンの姿が、ある日のゴーリキイには芸術の否定者として、冷血漢として映ったのである。一七年前後、彼らのあいだにくり返された「喧嘩」を想起せよ。

「私が余りに人生を単純化すると云われましたね。この単純化ということが文化の破滅をもって威嚇するでしょうか……」

「労働者とインテリゲンチュアの結合、そうでしょう？悪くはありませんよ。でも彼らが我々の方へ近づいてくるように言って下さい。あなたの考えによると、彼らは心から正義のために尽しているそうじゃありませんか。一体どう云うことなんです？」

「一体インテリゲンチュアが我々に必要でないとでも私が云ったのですか？」

これらは悉く、レエニンのゴーリキイに対するはげしい駁論の口調である。一九一七年の只中にあって、みじめな智識人をまもれ、その美しい文化的遺産をまもれ、ボルシェヴィキはあまりにも粗暴だと、悲鳴をあげたゴーリキイへの駁論である。私には敍情的な回答しか出来なかったと、ゴーリキイはその回想録のなかにのべている。夢想にとりつかれたものは、そこへ到る冷やかな過程を事実上計算することが出来ないのである。僕は、レエニンを心のなかで憎悪したであろうゴーリキイを想像してみる。やりきれなくなって政治から逃亡をくわだて、国外の宿にあって

悔恨の筆をしずかに走らせている彼を。しかし、憎悪しながらレエニンの方へひきつけられて行った力とは、一体なんであろう。きびしい非難ののち、君は文学をやれ、政治へ手をふれるなと、それを言ってくれた巨大な革命家の言葉に、われしらず政治へ手を出してしまう人のふしぎな心を考えてみよ。現実の冷酷な進行のために堅く抑制された夢を、レエニンのうちにみたとき、貪慾な良心はそれをしも自分自身のものとしたかったのであろう。二人の巨人はおなじ夢想をもち、その夢想のために「喧嘩」したのだ。もしゴーリキイがはじめから文学の書斎に止っていたならば、そこにどんな論争も動揺もなかったであろう。もしそうであったなら彼は巨大な作家として僕らの心をひくこともなかったであろう。彼もまたハイネのごとく、ペンをしずかににぎりしめていることとの出来ない人、つまり理想に憑れた人であったのだ。美しい憧憬を拒否したところに、どんな政治も文学も未来性あるものとして成り立たない。ゴーリキイが文学を一筋に追う瞬間は、動揺と誤謬にまみれたものではあれ、とにかく政治そのものの夢を追求した瞬間に他ならない。彼が政治への憎悪を告白し、政治からの逃亡をくわだてるときは、実際的なことのために失われがちな夢をはげしく求めたときである。求めるときの彼こそはまさに傲慢そのものであったといえよう。

ひるがえって僕らの周囲に眼を放とう。実際の政治家は、たとえ社会的理想の為に戦う人でさえ、こまやかな神経をもつ場合がじつに稀である。命令とテーゼによって芸術家が束縛されてたまるものか。政治家は大きらいだ、という憤激が起りうるだけの根拠がこの国の左翼文学に実際存在していた。所謂政治主義の弊害というものを、ここにくり返しのべてみてもはじまらない。だいじなことは、そのような欠陥にも拘らず能動的な作家の幾たりかがそこに身を処し、あるものは文学を捨て、あるものは中途に倒れ、多くのものは脱落してしまったという事実である。「転換時代」のなかに、ひとりの作家がはげしい政治生活に入って行く心理が描かれているが、始めこの新しい生活は、小さい時誰が一番永く水の中にもぐっているかという競争をした時のような、あの堪えられない、何んともいえない、胸苦しさを感じはしたが……、という一節がある。一日を廿八時間に働いても疲れをしらないタイプに自らをきたえあげようとした人の言葉だ。どこまでが命令であり、どこまでが自発的意志であったか、それを穿鑿したくない。が、こういう心理にこまやかな芸術的神経は一体堪えられるものなのか。堪えつつ永続するものなのか。党派の一員となり、騒擾軋轢の中に日を送ることは詩人を殺すと、ゲエテの叡智はまさに正しいのではないか。それを知りはっきり打算してみて、それでもなお一度はそこへ出かけて行くのが理想につかまれる人の謂であるならば、理想につかまれるとはまさに発狂することではないか。そこを平然とのり越えてゆくものは既に芸術家ではない。そこ

に眼をつぶって平然としていられる奴も芸術家ではない。そこへ身を処してうちひしがれ、さいなまれ、悲鳴をあげるものがほんとうの芸術なのだ。これが廿世紀の試練というものかしら。しかし、人は苛酷に問うであろう。同じ社会的理想にむかって戦いながら、芸術家の場合だけ脱落することが、悲鳴をあげることが正しいのか、と。ひとたび政治へ身を近づけると作家といえども社会的公人としての節操を問われねばならぬ。作家だけは無節操であっていいのかと。が、かような追究は往々にして、すべての作家活動を文学以前に解消せしめる危険をもつ。作家は云うであろう。自分は政治家となるべくあまりにもこまやかな神経をもっている。自分は実験によってそれを知った、自分はいま文学へ帰る。それもまた男子一生の仕事とするに足るであろうからと。

けれども、その当然の自覚が、平和ならぬ時代にあっては何によってよびさまされるのであろう。性格と才能を反省してみたのちの、自発的な自覚の喜びとともに、人は強権の前にうちひしがれた己をより重く感ずるに相違ない。堪えねばならぬものに堪えることが出来ない。してみれば、ただ文学への愛を説くときが、いちばん自己欺瞞のいりまじってくる瞬間でないと誰が確言できよう。良心は、まず全力をあげて傷つくべきものに傷ついたがいい。不得手な政治に身をもたせかけたのは自己の錯誤であろう。それとも自己をそこへおびき出した夢想というものの復讐なのだろうか。敗退を時代のみじめさのせいなどに帰することなく、一切の自己合理化を排したのち、あからさまな自我についての沈静な省察と咀嚼の時間が始る。破れた夢は何によって償われるのか。ロマンティクな情熱が、冷やかな現実との軋轢に堪えかねたならば、人は再び理想に溺れる心を避けようとするだろう。が、一体避けられるものなのか。彼は自我に耳を傾けつつ再びペンをとり、胸の苦しさを訴えるであろう。政治か文学かと、そこを苦しみぬいてきたものの眼はたしかに広く深いにちがいない。それを描こう——が、一旦政治的に喪ったものを、ただ文学的に回復しようというのは甘ったるい自己弁護ではないのか。しずかにペンをとる窓の外に、嘗つて貧しき人々のうめきが絶えたことがあるか。反省の極致は人を一時絶望へ追いやるかもしれぬ。しかし、政治における絶望が純潔であればあるほど、それからの逃亡が悔恨であればあるほど、そのような心の内部には、ふたたびあらたな夢想の希みが純潔に芽生えるものではあるまいか。かかる低迷のうちにたとえば村山知義の「白夜」が生れ、低迷をつきぬけたところに林房雄の「青年」が生れたのだ。その作品のよしあしは別として時代を生きた人々のおびただしい血液を僕らはそこにみないだろうか。作家が自らそれを口にしてはなるまい。が、事実上彼らが政治を越えて時代の良心となるのはこのときだ。芸術家が政治家になろうなどとは一種の空想にすぎない。諸君は政治から断乎として逃亡せよ、た

だ経験によってその悲痛を知れと、彼らは、僕らに教えている。政治か文学かと、それを問うごとき心はけっしてけっして幸いあるものの心ではない。まことに二兎を追うものの痴愚かもしれぬ。芸術的気質としての政治慾とは、政治への憧憬に始って政治からの逃亡に終る、そのくり返される循環線であろう。その上をさ迷うことがどうにも出来ない良心の宿命なのだ。しかし夢想は未来において現実に復讐することを忘れないだろう。

（一九三四・八・三）

冬を越す蕾

宮本百合子

十一月号の「改造」と「文芸」のある記事を前後して読んで、私はなにか一つ大きい力をもったシムフォニーを聴いたときのような感情の熱い波立ちをおぼえた。「文芸」で大宅壮一氏が「転向讃美者とその罵倒者」という論文を書いている。一方、カール・ラデックがこの八月、第一回全連邦ソヴェート作家大会で行った報告演説が「プロレタリア芸術の課題」という見出しで翻訳されて「改造」にのっている。

二つの論文は、互にもつれ合い、響きあってその底にだんだんと高まる光った歴史的現実の音波を脈打たせているという印象を、私の心に与えたのであった。

今年の夏の末ごろのことであった。ある友達が私のしびれている脚に電気療法をしながら、その男兄弟が、

「どうもこの頃は弱るよ。転向なんぞした奴だからというのを口実に、執筆をことわる人間ができて来て……」

といって述懐したという話をした。そのときも、私はさまざまな意味で動的な人の心持の推移がそこに反映している実例として、それを感じた。

中村武羅夫氏や岡田三郎氏によって、いわゆる転向作家に対するボイコットが宣言されたとき、私は、ふとその友達の話を思い出したのであった。そして誰の目にも明らかなように、反動的な動機から呈出されている両氏のいい分のかげに隠されているものに対して、注意をひかれたのであった。何故なら、もし一般の人々の感情が、ひと頃のように、プロレタリア作家の間でさえいわゆる転向しない者は間抜けのように見られていたままの弛緩し切った状態であったならば、両氏は、転向作家ボイコット提唱を可能にする社会的感情のよりどころを、つかむことはできなかったであろうから。また、転向が否定的な意味をもって一般

の問題となってくるからには、当然他の半面に立つものとして、抵抗をつづけている者たちの、この社会における存在が、再び見直され、かつそれに対する評価は、ひところとちがって来ていることを暗示しているのではないであろうか。私はそれらの錯綜を興味ふかく思うのであった。

この二三ヵ月は月評につれて小林・室生両氏をはじめ、二宮尊徳について書く武者小路氏まで、この問題にふれている。「新潮」の杉山平助氏の論文、「文芸」の大宅氏の論文を熱心に読んだのは、恐らく私ひとりではなかったであろうと思われる。二人の筆者は、いわゆる転向の問題賛否それぞれの見解を今日の現象の上にとりあげ、内容の分類を行い、問題の見かたをわれわれに示した。

そもそも転向作家に対してその行為を批判し得るのは、抵抗しつづけている者だけであるという結論に至るらしい大宅壮一氏の意見はもっともであるとうなずかれた。

転向という文学が今日のような内容をふくんで流布するようになったのは、正確には去年の初夏以来であり、（佐野・鍋山・三田村その他共産党指導者たちが従来の帝国主義侵略戦争に反対するコンムニストたる立場をすてて、日本の中国に対する侵略行為に賛成し、支配権力に屈伏した時から）プロレタリア文学運動との関連で実際的内容をもつようになったのは特に今年になって、プロレタリア文学者・戯曲家その他の屈伏があらわれてからのことであると思われる。基本的にいかなるものから、どう転向したかということを明確に判断し得ないのであり、文学運動の面についてこの問題をとりあげるとすれば、ブルジョア文学においてではなく、問題の本質はプロレタリア文学の問題であると考えた。

大宅氏は、嘗てのプロレタリア評論家たちが、この問題を自身の問題として真面目にとりあげず、転向謳歌者の驥尾に附している態度を慨歎している。杉山氏は硬骨に、そういう態度に対する軽蔑をその文章の中で示しているのである。

プロレタリア文学の運動は、昨今、非常に意味ぶかい第二次的な発展的時期に入っているということは、広い目で見ると、逆に大宅、杉山両氏によって摘発されたもとの指導的評論家の退転という事実そのもののうちにも察しられるように思う。急激なテンポで進む情勢は、階級的文学をひどい勢で推しつつある。現在は、タイプとしてプロレタリア文学の活動家がまだ全貌を現すところまで成熟せず、健康な伝統と影響とは、勤労大衆のうちに文学的に未熟なものとして保有されている。いろいろな雑誌に対する読者からのこまかい反応を観察することによって、その事実は確信されるのである。

ところで、転向作家についての諸家の意見は、ある特殊な動機をもつもの以外に、大たい雅量と常識とをもって対する態度であるが、どの文章の中にも二つの 共通した点が、強調されてあった。それは、これまでいわゆる転向に

関しての作品を発表した幾人かの作者たちが、その作品の中で肝心なものであるはずの転向の過程と、それ以後の思想的傾向を明らかにしていないということである。

いつからとなく私の心に生じている疑問と探究心とは、これらの注意によって一層鋭くされるのを感じる。本当に、文学における才能や作家としての閲歴のある村山、藤森、中野、貴司その他の人々が自他ともに大きい……（二三字伏字）経験の中から、どうして人の心を深くうち、歴史というものをまざまざ髣髴せしめるような制作をしないのであろうか。

先頃立野信之が「友情」という小説を書いた。それを村山が評した言葉のうちに、主人公の態度を全運動とのつながりにおいて批判していない点が不足であるという意味のことがあったのを覚えている。けれども、村山も自身のことになると、転向しても立派な小説が書ける、だがそれには「あらゆる弱点をすっかり自己の前にさらけ出し切ってしまわなければ駄目なのだ」「赤裸々生一本のものとして現実に向い、文学に向って行かなければ駄目なのだ」と、どちらかといえば主観的なものごしで良心を吐露している。そして過去の運動がその段階において犯していたある点の機械的誤謬を指摘することで今日の自分がプロレタリア作家として存在し得る意義を不自由そうに解明しているのである。（作家的再出発）

プロレタリア文学運動が成熟すればするほどその裾は幅広く、襞は多いものとなって前進してゆくであろうから、もとより私は自分をもこめるさまざまの作家が、それぞれの可能性の上に立って、たっぷり仕事をやってゆき、その質を高めてゆくことを自然であると信じている。

もっとも正直な打ちあけ話をすると、私はある初歩的な時期、一つの疑問をもったことがある。それは、どうしてプロレタリア文学運動の中では、一例をあげれば職場でのストライキが高潮に達した時にあぶなっかしい幹部として監視をつけられたというような話のある人や、左翼の政治的活動から自発的に後退の形をとってきたような人が、組合にいたとか、組織についていたとかいうその出身や経験を評価され堂々と通用しているのであろうかと、けげんに思った時代があった。そのような素朴な、歴史を見ない誤った至上主義的理解からは、幸い久しい以前にぬけでているのであるが、やはり転向作家のことはプロレタリア文学の発展の上に個人的であるとともに普遍な問題を含んでいると思うのである。

実際の場合について見れば、なるほど転退は一人一人の事情によって、それぞれのやり方で個人的になされたであろう。けれども私は、杉山氏のように「村山はそんな立派な人物ではなかったから止むを得ない」という風にいっただけでは十分自身にむかって満足できかねるのである。

「白夜」は、作者が客観的情勢の否定的暗さとともに自身の暗さを摘出しようと試みた点で、ある評価をうけた。そ

れゆえ、「再出発」についての文章の中でも、村山は知ってか知らずか、時に自身の暴露ということを強く云っているらしく思われるけれども、個人的な性格解剖の限度内で、いかほど自身の暗さを露出しても、プロレタリア文学の大局に、はたしていくばくのプラスであろうか。更に進んでよしんば、自身の弱点のすべてを、インテリゲンチアの小市民性によるものと結論し糺弾したとしても、現実の本質はつかまれたという感じを、私たちに与えないであろうと思う。

私たちの切に知りたいのは、性格にそのような動揺する暗さ明るさをもったインテリゲンチアの一団がその青年期のあるときにいろいろの矛盾を背負ったまま階級的移行をしたのは、歴史的にどのような必然によるものであったのか。そして、それから十年にわたる彼らの活動は、どんな歴史的特色をもっていたが故に、今日の困難な情勢の下に彼らが挫折しなければならないように、その内的矛盾を激化したものか。

そのいきさつが知りたいのである。ヨーロッパにくらべると二十年余もおくれてイデオロギー的に大衆化するや直ちに複雑多岐な暴力にさらされなければならなくなった日本の若いマルクス主義の活動家たちと、転向の問題とは骨肉的な関係で結ばれていると思う。運動が合法的擡頭をした時代に階級的移行をしたインテリゲンチアが、文学上の名声という特殊性もあってまだ十分自分らを階級人としてこね直しきらないうちに、情勢の方はさきまわりして客観的にはそれらの人々がすでに一つ前の時代のタイプとなり、その破綻が転向という形態で、今日現わされてきている。

従って、問題はいわゆる転向したプロレタリア作家たちの良心の上にだけかかっているのではない。われわれみんなの上に、大衆の上に問題となる。何故なら、私たちすべては、何らかの形で今日そのようなものとしての切り口を見せている歴史をうけつがなければならず、しかもそこから健やかな革命的教訓を最大の可能において引き出して来なければならないのであるから。

率直に感想を述べると、私には村山や中野の話の中に、何か腑に落ちず、居心地わるい心持を与えられるものがある。あのようにいい頭といわれる頭をもっていて、自分たちが、転向するようになった気持が自分にもよく分らないといってそれを押すのは、事情もあろうがなぜなのであろう。私には村山のように皮肉にだけ思うことができない。細いこと、筋のとおったことは分らないが、とにかく……（五字伏字）得だという点だけには悟りが早かったのだという意地わるい言葉が通用するであろうか？ 私はくちおしい気がするのである。

谷崎潤一郎氏が「春琴抄」を書いて、世評高かった頃、その作品を読み、私はある人から見たらおそらく野蛮だといわれるであろう一つの考えにとらわれた。それは、谷崎

氏のように精力的作家でも、日本の作家は初老前後となれば落ちつくさきはやっぱりここかという失望である。

佐藤春夫氏、谷崎潤一郎氏は深いきずなによって結ばれている二人の作家であるが、作家としての性質は違った二つのものであると思っていた。谷崎氏が日本文学に構成力が薄弱であることを不満とし、自身の抱負を文章によって述べていた頃の肪のきつい押し、あるいは、初期の作品が内包していた旺盛な生活力と「春琴抄」が示しているいわゆる完成の本質とをくらべて見て、私は大谷崎という名で呼ばれる一人のすぐれた作家でさえ、文学の手法や傾向をとおして支配している日本封建制の根強さに、新たな反省を呼びおこされたのであった。

ブルジョア・インテリゲンチアの作家でもロマン・ローランやジイドは老いてますます叡智と洞察とをひろめ、恐れを克服し、人生の真理に肉迫して行っている。それと対照して、日本の大作家は壮年期の終りにもう「描写など面倒くさくなり」（谷崎）知的発展においては勇気を失い、隠居をしてしまうのは（――窪川の言を借りれば――）自己の喪失に陥るのはどういうものであろう。日本でいう大作家の風格というものの内容は、古い文人時代の内容から、社会性においてそう大して新しくなっていると思われないのである。あのような文学的発足をした谷崎氏にあってそうであるとすれば、その他の日本の代表的ブルジョア作家が、はたしてどの程度にインテリゲンチアとして今日の封建性に対する筋骨の剛さを実際力として備えているか疑わしいと思う。

大宅氏は「文芸」の論文で腹立たしげな口ぶりをもって、「日本の文化全体を支配している安価な適応性の一つ」として、転向の風に颯爽と反抗するプロレタリア作家の見えないことを痛憤している。階級的立場のはっきりした人物は今日、加藤勘十が見得を切っているような風にはふるまえない。そういう情勢であるからこそ、いわばかつて個人的な作家的自負で立っていた時代のプロレタリア作家が、心理的支柱を見失って転落する必然があるのであろうか。

それにしろ、日本のインテリゲンチアが特殊な歴史的重荷をもっていることは争えない事実であると思う。おくれた資本主義国として、半封建のまま忽ち帝国主義に発達するテンポの早い歴史は、日本のインテリゲンチアに敏捷な適応性を賦与していると同時に、勤労大衆の日常生活をきわめて低い水準にとどめている封建的圧力そのものが、インテリゲンチアの精神にもきびしく暗黙の作用を及ぼしている。

中途半端に帯からくさって落ちた自由主義の歴史に煩わされて、日本のインテリゲンチアは、十九世紀初頭の政治的変転を経たフランスのインテリゲンチアとは同じでない。対立する力に対して、人間の理性の到達点を静にしかし強固に守りとおし、その任務を歴史の推進のために光栄あるものと感じ得る知識人らしい知識人さえも、日本にお

いては数が少いのである。
無理がとおれば道理がひっこむ、といういろは歌留多の悲しい昔ながらの物わかりよさが、感傷をともなった受動性・屈伏性として、急進的な大衆の胸の底にも微妙な形に寄生している。プロレタリア作家が腹の中でその虫にたかられている実証は、「白夜」その他同じ傾向の作品の調子に反響している。
もし、おのおのの主人公をして事そこに到らざるを得ないようにした錯綜、また……(三字伏字)配置された紛糾混迷などを描き出して、せめて悲劇的なものにまで作品を緊張させ得たら、人は何かの形で、今日の現実に暴威をふるう権力の害悪について真面目な沈思に誘われたであろうと思う。けれども、これらの作者たちは、いい合わせたように、現実のその面はえぐりださず、自身の側だけを、ああこうと取上げ、その関係において、中心を自分一個の弱さ暗さにうつし、結局、傷心風な鎮魂歌をうたってしまっている。
動揺のモメントが共産主義や進歩的な文化運動への批判、個性の再吟味にあるという近代知識人的な自覚は、その実もう一重奥のところでは、土下座をしているあわれなものの姿と計らず合致していると思うのである。
私がさっき村山や中野に連関してくちおしいといったことの中には、私たちの現実として負わされているこの革命的階級性以前の自己の弱さ、自分ながら自分の分別の妥協なさに堪えかねるようなところに彼らがうちまけている。それがくちおしいという意味もふくんでいるのである。
だいたい転向作家の問題は、勤労大衆とインテリゲンチアに対し、急進的分子に対する不信と軽蔑の気分を抱かせるために、たくみに利用されていると思う。大衆の進歩的な感情を少なからず幻滅させ、部分的にはそれへの嫌悪の感情にかえた。その責任は自覚されなければならないと思う。舟橋聖一氏が昨今提唱する文学におけるリベラリズムの根源は、そういう反動的憎悪とかつて進歩の旗のにないてであったものへの報復的アナーキーの危険の上にたっているのを見て、私はつよくそのことを考えるのである。
ロシア文学史は、どの時代をとって見ても面白いが、私はこの間その中でも感銘ふかい一節を読んだ。丁度ロシアにマルクス主義が入った一八九〇年代の初めに、ロシアの二十県に大饑饉が起ったことがあった。八〇年代の農奴制度の欺瞞的な廃止やその後に引きつづいて起った動揺に対して行われた弾圧のために消極的になった急進的な若い分子は、この饑饉の惨状の現実をモメントとして民衆悲惨の問題を再びとりあげて立った。ゴーリキーがまだ二十一歳ぐらいでニージュニイで自殺しそこなった前後のことである。初期のマルキシストをふくむ急進的インテリゲンチアは、饑饉地方に出かけて行って、その救護や闘争のために全力的援助をした。饑饉が終るとコレラが蔓延し、一揆が

あちらこちらで起ったが、このとき、怒った大衆の標的とされたのは誰あろう、ともに餓えて疫病と闘った急進的知識人と医者とであった。

　このからくりに采配をふるったのは、ツァーの有名な警視総監である大官ポベドノスツェフであった。そして、この奸策を白日のもとに明かにしたのは、もちろんポベドノスツェフではなく、足をすくわれた後、立ち上ったロシアのマルキシストたちであった。

　私は、日本プロレタリア文学史の中でも、こんにちのさまざまな現象が、やはりそのような視角から明らかにされる時のあることを想像して、尽きない興味を覚えるのである。

（一九三四年一二月「文芸」）

創作方法と世界観との相互浸透

甘粕石介

芸術に於ける世界観は一方では芸術の内容である。芸術家は特定の作品に於ける特定の題材によって、自己の世界観を吐露しているのだ、と見ることが出来る。芸術家の世界観は彼の社会生活、それまでの理論的、創作的実践をも含んだ実践の総括であって、それらのものはすべて彼の最後の作品の中に表われている。

　だが芸術家の世界観は、一方には芸術創作の方法でもある。如何なる題材を選び、それを全体との如何なる関連に於いて取り上げるか、それの現代に於ける政治的、道徳的意義を如何に見るか、ということは芸術家の世界観が決定するところであって、狭い意味の創作方法、リアリスチックに描くか、アイデアリスチックに描くかということによっては少しも決定せられない。リアリスチックに描くということは、それだけでは盲目であって、放っておけば何でも手当り次第にその特質である克明さを以て描くことになる。重要なことは何を如何なる見地から描くか、である。このことはただ芸術家の世界観によってのみ決せられることである。そして芸術作品に於いては、単に克明に描いてあるか、幻想的に描いてあるか、ではなく、それが如何なる題材を如何に取り上げているかが、芸術的価値を決定する本質的なものである。このことから芸術に於ける創作方法に対する世界観の優位性の生れることは前章に述べた通りである。全く芸術の欠陥は本質的には芸術家の世界観の欠陥から起っているのである。このことは従来の芸術理論家が誰しも云い得なかったことで、彼等にとっては世

界観は芸術以前のもので、多くは芸術の内容でさえもなく、それが芸術創作の方法のうちに滲透していることなどは、少しも意識しなかった。世界観は創作方法の本質的契機である、ということを強調するのは現在極めて重要なことである。

しかしこのことから芸術の創作方法を世界観のうちに還元してよいということには決してならない。世界観は芸術の本質的内容であり、本質的方法ではある。だがこれは同時に哲学、道徳、宗教の内容や方法でもあって、決して芸術特有のものではない。一定社会のあらゆる文化の共通内容としての世界観は、ただ芸術家のうちに芸術的に形象化されて存在し、哲学の方法ではなく芸術の方法として具体化される場合にのみ、「芸術に於ける世界観」となる。一つの芸術作品の本質的欠陥はその作者の世界観の欠陥にあるからと云って、何時でもその作者の世界観の欠陥、不十分さのみを指摘している批評家は、間違っている。これは二重の誤りである。なぜなら一つには彼は世界観ばかりで芸術が出来ると思っているから。また一つには前章の終りにも述べたように、芸術家が如何に科学的に世界観を完備しても、彼の才能や技術上の制限のため、それをそのまま芸術作品のうちに現わし得るものではないのだから。優れた批評家は、創作家の世界観の不備を、いきなり科学的に示すのではなく、その作品の芸術的な欠陥に対する芸術的な批判を通じて、それの根拠である世界観の論理的欠陥にまで必然的に導いてゆくように教えなければならぬ。（註一）

要するに芸術の創作方法を世界観の問題に還元せしめることは誤りである。創作方法の問題を論ずると云いながら、実は徹頭徹尾世界観としての唯物弁証法のことしか云っていないプロレタリヤ理論家があるが、彼がしまいに例えば、「こんなわけで、プロレタリヤ文学の方法すなわち唯物弁証法は、世界を単に解釈するだけでなく、それを変革するところの方法である」とか、「それではいったいどういう意味でプロレタリヤ文学は階級闘争の武器であるのか。それはほかでもない。プロレタリヤ文学が、現実を変革する具体的な道を――しかりそれは具体的な道であって、抽象的な観念的な道ではない――を指示するからである」、というようなことを叫んでいるのは、如何にも念入りに、「プロレタリヤ」芸術理論家的頭の悪さ加減を示したものに外ならぬ。プロレタリヤ文学の方法が、世界を変革する方法であったり、「現実を変革する具体的な道」を指示したりして、何か政治上の指令のようになっていることは、兎も角として、この場合プロレタリヤ文学、乃至その方法という言葉を、世界観という文字で置き換えても可笑しいどころか、却ってそうして始めて、この文句の可笑しさが全部ではないが余程なくなるというのは、この文章の筆者が芸術の方法と世界観との区別を少しもつけていないことを示したものである。筆者にとってはしかも、この

世界観が、特殊な芸術家の世界観——即ち芸術の内容としての世界観、芸術の方法に滲透している世界観——ではなく、世界観一般になっている。芸術の方法を問題にすると云いながら、われわれは唯物弁証法の講義を聞かされる仕掛になっているのだ。芸術の方法は決して世界観一般には勿論のこと、芸術に於ける世界観のうちにも還元することは出来ない。創作方法は芸術家の世界観に対して、本質的にはそれから制約されながらも、一応の独立性を有っており、それに逆に作用し、それを導く場合があるのだ。

註一　これについて森山啓氏は次のように云っている。

『世界観に於いては相当徹底したものをもちながら、作品を書かせると、てんで目鼻のある人形をしか描けないというような作品に向っても、適当な技術上の指導をする代りに又もや問題を「世界観」に還元してしまう。こんなやり方では、実践において確乎としたものを持った労働者にも、彼がヴァイオリンをひくのを学びたいときに、青いインテリゲンチャが弾奏の技術を教えずに「唯物弁証法」の命題をあたえるかも分らない。』(「芸術上のレアリズムと唯物論哲学」二五頁)。これは方法の世界観への還元論者に対しては極めて有力な反証であるが、ここには反対にまた創作技術は世界観とは全然別箇のものだ、と人々に思わしめる危険が十分ある。創作技術もやはり根本的には世界観の制約の下にある。或る程度まで音楽の技術などは世界観と別箇の領域のものとして研鑽出来るが、或る程度まで上達すれば、必ずや世界観の如何が技術の上に何らかの影響を及ぼさないでおかないだろう。のみならずまた「実践に於いて確乎としたものを持った」恐らく相当の年輩になっているだろう労働者が、例えばわが国の現在のような状勢の下で、他の芸術ではなく、音楽を、しかもその弾奏者も聴衆も極めて一部のものに限られている器楽を、かような年になってから始めて練習しようとすることに対しては、世界観の説教をすることも必要だろうじゃないか、とも、この場合云いたくもなる。

これはいささか揚足とりの傾きがあったが、ここで云おうとするところは、創作方法、技術上の欠陥を頭から世界観上の欠陥に還元しようとする考えに対しては、創作方法、技術が世界観とは別個のものだと云って反対すべきではなく、どこまでも世界観はそれらのものに対して優位を有っているのであるから、ある芸術家の世界観上の欠陥を指摘する芸術批評家は、その作品の創作方法、技術上の欠陥に対する芸術的批評から押しつめて行って突き当るものだけに一応止めねばならぬ、と云って反対すべきであろう。

創作方法はそれがリアリスチックなものである限り、逆

に世界観に作用する。私はさきに芸術家の世界観の形成者として、芸術家の生活と科学的研究と創作実践との三つを挙げたが、リアリスチックな創作態度は、芸術家に於いては、丁度科学者の実験のように、従来の世界観の誤りを正し、単に概念的に得られた点を実証して、世界観を更新してゆく唯一の有力な手段なのである。この限りに於いては創作方法は芸術家の世界観の主体的モメントとしてそれに対して優位性を有っている。これが創作方法としてのリアリズムの威力である。

だが世界観への創作方法の還元が誤りであるが、創作方法を世界観から切り離すことは一層の誤りである。極く厳密に云えば、例えばリアリズムというようなよき創作方法でも、世界観からそれだけが切り離されるならば、そこには何でもかまわず手当り次第に克明に写すという働きが残るだけで、創作どころか単なる記録さえ出来るわけのものではない。だがこれほどまでに今は踏みこむことを止めると、例えば創作活動が芸術家の生活の全部であって、これによって芸術家の世界観が制約されると考えたり、世界観などは創作の桎梏になるだけで無用のものだ、芸術家的な眼と筆とがあれば、世界観を意識することもなくとも、よき作品が作れるというような考えがある。これらはすべて創作方法を世界観から切り離した考え方である。やはりかかる意味からリアリストであることが芸術家の全部であると主張するのは、林房雄氏である。氏は昨年二月の新潮の「作家とリアリズム」なる文章の中で、リアリズムとは芸術家の力量の問題である、リアリストのゾラや、モーパッサンやストリンドベルヒなどが生涯リアリストであり得なかったのは、どこまでも現実と格闘することに疲れたためである、最後まで格闘する力量が彼等になかったからである、と云っている。そして氏はこの事実を「時代の制約性というような言葉で片づけたくない……これは作家の悲劇である」とも云っている。現実にリアリスチックに立向うことに疲れ、俗見との衝突に耐えがたくなったものは、「通俗作家」や「職人」や「神秘」に逃れ込むと云うのである。これは全く中々の真理を含んだ言葉である。殊に作家の力量、才能ということなど少しも考慮しないで、「時代の制約性」、「世界観の制約性」などを、すぐに持ち出す芸術史家などは、大いに反省させられる筈の言葉である。だがそれにも拘らずこれはやはり間違っている。

第一に作家の創作方法をリアリズムだけと見るのは事実でない。偉大な芸術家的力量を有った芸術家で始めからリアリスチックでない方法でその作家生活を開始しているものがある。例えばシルレルの如きである。彼をリアリストであるということはやはり無理だと思う。リアリズム、アイデアリズムと二つの対立する方法に、創作態度を分つことは、慎重を要することであり、間違って理解している人人が中々多いが、やはりアイデアリスチックな創作方法か、リアリスチックな創作方法に原理的に対立して存して

いると見なければいけないと思う。そうすればかかる作家は始めから力量のない作家だということになる。
第二に、過去のリアリスト作家が一定限度に至ると、観念論化するということは、作家的力量というものを極めて広く解すると、それを力量のせいにしてよい場合が絶対にないとは云えぬだろう。例えば十九世紀以後の、社会の運動法則が科学的に明らかにされた時代に住む芸術家の場合がそうである。だがそれ以前の芸術家はどうであろうか。そこでは社会はつねにそれ自身の矛盾として科学者、哲学者、芸術家の前に問題を提起しているが、この現実的矛盾の必然的運動法則は、従ってまたその現実的な止揚条件は、科学に於いてすら、部分的にのみその関係が明かにされているにすぎず、不明の領域は最もリアリスチックな科学者と雖も、それを観念的に説明せざるを得ない状態にあった。まして芸術家は如何に優れた直観の力を有し、如何に先入見に捉われることがなく、如何に批判的な情熱を有するとしても、社会の矛盾を飽くまでリアリスチックに解決し終えることは出来ないわけである。彼が真に改革者的情熱に燃えた芸術家であれば、なおさらそうである。恐らく彼は現実の社会の矛盾に、自己の理想を観念的に対置して、一応の解決を見出すであろう。(シェレー、バイロン、ユーゴー)。また逆にかように矛盾せる社会にあって飽くまでリアリストとして止ることは、多くは社会的にはその社会の追随的な擁護者として止ることであり、芸術家個人にとっては自己の矛盾を解決しないでおくことである。かかる状勢に於いて一個のリアリストが神秘に陥ったということは、彼が自己の問題をその生活から生れた世界観の範囲内で、自己流に解決したということに外ならぬのだ。
例えばゲーテは一方では偉大なリアリストであると共に、他方には古典主義者として、リアリストでなくなっている。これは宮廷にあったことから起ったことだとも云えよう。そして彼がアウグスト公の招きに応じて宮廷に這入り、宮廷的世界観を有ったということは、彼の聡明さの不足即ち個人的な過誤であったと解し得ぬこともなかろう。だが彼が宮廷的生活に属さなかったとしたらどうか。恐らくフランクフルトの貴族化した商人として止ったであろうが、しかしかかる階級に属したゲーテはリアリストとなり得ただろうか。リアリストではなかったろうと考えるのが誰が見ても妥当である。彼がたとえ未曽有の「力量」を有して、自己の芸術家的完成のために、如何なる社会層に、生活の地を求めて行ったにしろ、当時の「みじめなドイツ」に於いては、絶対にリアリスト作家と称し得られるようなことはなかったろう。だがもとより人間は勝手に自己の所属する時代や境遇を選び得ないのだ。このことは今日に於いてもまた事実である。一人の芸術家がリアリストであるか、リアリストでないか、彼が最後までリアリストであるか、途中でそうでなくなるかは、本質的には、彼の力量では如何ともしがたい時代や社会階級のもつ制限性によって

決まることである。詳しく云えばそれらの時代、社会階級の制限された世界観によって起ることである。

そうでなければ林房雄氏始め現在のわが国のリアリスト作家は、もしこのまま生涯リアリストに止るならば、単にそのことだけで、ゾラ、ストリンドベルヒ、ハウプトマンよりも偉大なる力量の所有者だということになるだろう。

第三に、氏はリアリストたることは芸術家的力量の問題である、と云っているが、自然主義作家もリアリストであり、即物主義者、「意識の流れ」派もそれぞれ「現実」を忠実に描写するリアリストであり、更にまた社会主義的リアリズムもある。これらのあらゆる種類のリアリストの間の価値を見分けることこそ大切なのであり、リアリズムは作家の永遠の悲劇であると云っていたのでは、何事も解決出来ないのである。

一般に世界観は不用だという作家も、必ずそれまでの生活によって得られた何らかの世界観を有っている。そうでなければ、或る題材を選び、それを何らかの視点から取り上げ、そこに何らかの傾向を織り込むことは出来ないのである。それに対して純粋に何らの主観をも混えず、現実を描くならば、何らの世界観をも要しないと反対されるかも知れぬが、この時は彼は既に客観主義、無批判的実証主義、現代の擁護等々の哲学的、政治的見地に立っていることを証明している。バルザックがそのリアリズムによって、自己の封建的な政治的見解の框を破ったというエンゲルスの言葉は、創作方法の世界観からの独立という意味に多く解釈されたようであるが、このことはリアリズムは生活や科学的討究と並んで芸術家の世界観の形成者だ、という意味にとらねばならぬ。この時のバルザックのリアリズムは彼の政治観の框を破って、独り歩きをしていたのではない。この時にバルザックの政治観は事実の圧力によって、より正しいものに発展せしめられていたのである。政治的見解は根本的には生活が変らなければ、変化しないものであるから、彼が創作をやめて現実の生活に帰った時は、また元の政治的見解に戻ったかも知れない。恐らくそうであろう。だが彼が創作に当って、そのリアリズムによって接していた限りでは、一時的とはいえ、正しい世界観の上に立脚していたのだ。世界観を離れ得るのではなく、否応なしに正しい世界観に導くこと、これが「リアリズムの勝利」である。

（一九三〇年五月唯物論全書「芸術編」より）

社会主義リアリズムと革命的（反資本主義）リアリズム

——前者の中野・森山的歪曲に対して——

久保栄

前書

主として森山啓による社会主義リアリズムの機械的な移入と、その歪められた観念論的な理解とを批判した小論「迷えるリアリズム」（都・一月二〇—二三日）は、私自身、予期したとおりの反響をよぶことが出来た。そして、ソ同盟のこの新鋭の創作理論をいかに学びとるべきかという、吾々にとっての「生と死との問題」について、溌剌とした大衆討議の機運が、最近の一般的無関心のなかから生み出されようとしていることは、何よりの喜びである。

だが、「迷えるリアリズム」において問題の再提出を敢えてした私の論拠は、単にこれまでに翻訳され、さまざまな場合に引用された社会主義リアリズムの諸文献のみを源泉とするものではなく、ひろく吾々の芸術運動の国際的経験のうえに立ち、国際的決議に正しく照応しようとするものである。

それゆえ、本誌の三月号で、中野重治と森山啓とが彼らの主観主義的な批評によって誤り伝えているような、たとえば私が社会主義リアリズムを「モスクワから移し植えられた空想上のあだ花」と眺めて、吾々の芸術理論を「世界的・現代的水準から引き下げよう」と試みたり、「プロレタリア文学の階級的独自性の抹消」を企てたり、または「芸術に於ける原則的創造方法がソ同盟と日本とで根本的に変らねばならぬ」と主張したなどという、根も葉もないお伽話とは、前述の私の論文は、全く無縁である。逆に私は、国際的命題に忠実であろうとする「迷えるリアリズム」の内容が、中野・森山の眼にいま述べたようなものとして映ったという事実のなかにこそ、後に説くような国際革命芸術運動に対する彼らの知識の欠如、創作理論と組織論との弁証法的統一についての彼らの無理解を指摘しなければならないのである。この標題にもかかげた「反資本主義」という用語に対する彼らの抗議なぞも、おなじくこの側面の知識の不足に基くものである。（森山啓は、三月号の私への反駁文を、さすがに自分でも不充分だと認めたそうで、四月号に再び駁論を書き改めてはいるが、この二つの文章の間には、後に指摘するような見のがし難い論理の矛盾がある。）

もし社会主義リアリズムの中野・森山的理解が、人びとの間に正統として認められるならば、吾々の芸術運動は近い将来に大きな躓きと逸脱とを苦がく経験しなければなら

ないであろうことを、飽くまで私は確信し、警告する。
　以上のような観点から、「迷えるリアリズム」を敷衍して述べる私の意見は、従ってこれまで貴司山治、長谷川一郎、佐分武、最近では小堀甚二、北厳二郎の人々と、森山乃至中野との間に闘わされた論戦とは、少しく趣きを異にするであろう。だが、私は、前文に引き続いて、森山啓の理論が「口には芸術に於ける世界観の優位を説きながら、しかも客観的にはその過小評価に陥っていた」根拠を衝こうとするのであり、それゆえ森山啓に対する反対論者たちの、或は敗北的な、或は機械論的な結論には絶対に反対しても、しかも彼等の間に、森山の理論からいま述べたような害悪的な印象を受け、その誤謬を突き崩そうとするよき意図が、皆無であったとは決して考えられないのであるから、その限りに於いては、私の意図も、貴司その他の反対論者たちと合致するところがある。
　では、中野・森山による社会主義リアリズムの歪曲は、どこにその本質をさらけ出しているだろうか？　私は、諸君の精読を期待する。

1　ソ同盟の「文学・芸術の再組織」は、プロレタリア芸術の国際的方向転換の一環である

言うまでもなく、その基礎のうえに社会主義リアリズムのスローガンが唱えられたところの、一九三二年四月以来のソ同盟に於ける「文学・芸術団体の再組織」は、決して社会主義国の一国的現象としてとどまるものではない。スターリンによって、この「再組織」が日程に上せられたのと殆んど時を同じくして、これと密接な連関をもって、資本主義のもとに於けるプロレタリア芸術運動の広汎な革命的（反資本主義）芸術運動への発展的な方向転換が、国際的機関によって決議され、今や実践に移されつつあるのである。すなわち、ソ同盟の「再組織」は、人類の前衛が「社会主義時代」に踏み入った世界史的意義をもつ時期にあたって、プロレタリア芸術の国際戦線の上に企てられた画期的な方向転換の一環として、その先頭的部分として理解されなければならない。
　少くとも、社会主義リアリズムについて発言しようとする人々にとっては、これはすでに常識である。ところが、「迷えるリアリズム」の結語で、私がこの国際的転換に言い及んだのに対して、中野・森山は本誌三月号に峻烈な反対意見を述べている。中野は怒気を含んで、「そんな方向転換が誰によって出されているであろう。」と言い、不当にも国際的決議は、私の私案による「わが身勝手な方向転換」として葬り去られようとしたのである。
　中野は言う。「『資本主義のもとに於けるプロレタリア芸術運動』こそ広汎な反資本主義芸術運動を展開し得、それを正しく発展させるものであることは、弱点にみちた日本

の芸術運動の過去も明らかに示している。」(一六六頁)と。

すなわち、中野によれば、「再組織」はソ同盟一国の現象にとどまり、資本主義のもとでは、旧態依然たるプロレタリア芸術運動が単独部隊を形づくって、四分五裂した反資本主義芸術運動を引きしたがえることこそが正しい方針であり、今もし吾々の芸術団体が再組織されるとしたならば、それは、過去の経験に徴しても明らかなごとく、旧ナルプの如き、旧プロットの如き組織形態をとるものでなければならないということになる。

森山は言う。「(吾々は)ブルジョア民主主義獲得以前の国における、プロレタリアートの文学の具体的な任務と農民及び小市民の革命的文学との同盟について、語り得るし、又知り得る。」(一七一頁)と。すなわち森山にあっては、わずかに「語り得」たり「知り得」たりする程度にとどまっていて、国際的決議が要求するプロレタリア芸術と革命的芸術との組織的結合は、全然顧みられていないのである。

革命的芸術運動という言葉の国際的定義をすら知らないらしいこの二人にとっては、プロレタリア芸術運動のそれへの発展的転換が、直ちに「プロレタリア的ヘゲモニーの清算」(中野)を意味し、「階級的独自性の抹消」(森山)を意味するのであるらしい。

では、私の理解の正しさを証明するために、例を「国際労働者演劇同盟」(略称ムルト・IATB)の「国際革命演劇同盟」(略称モルト・IRTB)への発展的転換にとろう。

「再組織」の決議から半年を経て周到な準備のもとに開催せられた全ソ作家同盟組織委員会の最初のプレナム(十月二九日—十一月三日)——この議席で、社会主義リアリズムが、大衆討議に移された——のあとを受けて、おなじ「十月」の十五周年カムパニアのうちに、「モルト」も第二回拡大プレナムを召集した。(十一月十一—十四日)。モルト書記局の報告にもあるとおり、このプレナムに於いて「全ソ共産党中央委員会の『芸術戦線の再建』に関するソヴェート演劇の任務」と、「国際労働者演劇運動の再検討とその任務」とが、密接な連関をもって討議されたという事実について、私は中野・森山の注意をうながしたい。このプレナムの歴史的意義は、つぎのように強調されている。(旁点は、すべて引用者。)

「プレナムは、国際革命演劇運動の一系列の再建をめざして行われた。プロレタリアートの階級闘争の現段階において既に発展しつつある革命的職業劇団からの、プロレタリア劇団の沈黙・孤立・分離は——(中略)——革命的職業劇団の将来の発展を阻害せざるを得ない。」(「プレナムの成果に寄せる。」)

「モルトは、勤労大衆の自主的活動と革命的芸術インテリゲンチャの職業的芸術を統一する強力な大衆的文化組織へ転じつつある。」(ポドリスキー)

「決定的なことは、吾々が特殊性をつくるためにではなく、新しい創造的幹部と革命的専門芸術家との潑剌たる結合のために協力しなければならないということの確認である。これこそ文化戦線の強化・拡大・深化に着手しようとするレーニン的な新しい課題である。自立的芸術・専門芸術家・演劇集団および観客組織（たとえば『青年民衆劇場』）は、一箇の統一的全体を形づくり、没落するブルジョア演劇文化に対抗するプロレタリアートの戦線の一部を形成し、そうして吾々が批判的にわがものとするところの文化的遺産の擁護者となるのである。」（ピスカトール）

ただこの「新しい課題」のためにのみ、プロレタリア演劇と革命的演劇との組織的結合が、国際的に決議され、IATBはIRTBへの発展的転換を、ソ同盟の「再組織」のするどい拍車と鼓舞のもとになし遂げたのである。国際革命作家同盟（モルプ）の内部に於いても、すでに三〇年度のハリコフ会議に、この質的転換の萌芽としての革命的作家の「組織的参加」の問題が取り上げられており、さらに三二年度に於いて、広汎な組織的再編成が日程に上ったことについては、旧ナルプの諸君のほうが、私よりも詳しい筈である。ソ同盟の「再組織」を「国際的転換」の一環として見ていない中野・森山に対するときほど、「樹を見て森を見ない」という比喩がぴったり当て嵌まる例を、私は知らない。それゆえ、つぎに見るように、彼らは広汎な複雑な「森」のなかの道案内者とはなり得ないのである。

吾々の知るとおり、ソヴェート芸術における宗派的封鎖主義の清算は、同伴者作家とラップ員との間の創作理論上の原則的な差別が、すでに「硬化した用語上の残滓」となり、それが歴史的現実に矛盾して、ソヴェート作家の「最大限の動員」を妨げる組織的障壁に転化したためである。自立的芸術の開花と、芸術的インテリゲンチャの圧倒的多数の移行とによって、そこにはソヴェート芸術にたずさわる主要大衆の、ただ一つの統一的戦線のみが存在し、彼らはすでにペンをもって、無階級社会の建設に協力しているからである。演劇について言えば、「単に芸術家たるにとどまらず、市民ともなったロシアの俳優の巨大な文化的発展」（ランスキー）が達成されたからである。

だが、これに反して、資本主義のもとに於けるプロレタリア芸術家の革命的芸術家からの自己隔離は、なぜセクト主義を意味するであろうか？　ソ同盟に於いてのように、プロレタリア芸術が、すでに「扶助的な制限的な枠」をもたないでも、芸術創造の主要大衆のうえに、政治的・イデオロギー的指導を保持し得るまでに強力になったからであるか？　遺憾ながら、勿論そうではない。だが、吾々のもとに於けるこの二つのものの結びつきこそは、基本的には新しい発展段階に立っての「多数者獲得」の命題に添おうとするためであり、また「ブルジョア芸術の瓦解が生んだ世界的危機の情勢のなかに、プロレタリアートの勝利の日のために　ありとあらゆる生活力ある創造的芸術の力を正

当に有効に保存するという最も切実な歴史的任務」（ポドリスキー）のためである。

ラデックは、彼の「世界文学について」のなかで、世界恐慌と五カ年計画の偉業とは、これに先立つあらゆる発展よりも、世界大戦よりも「十月」よりも、強烈な影響をブルジョア文学に及ぼし、今や吾々はブルジョアジーの世界文学の内部に、第二の分裂を目撃しつつあることを述べている。プロレタリア芸術が、一定の段階に成長するまでは、吾々の働き手の地位を鞏固にするために、また吾々とは無縁な諸要素の影響から身を護るために、吾々の芸術運動は独自の「枠」を必要とした。すでにこの「枠」の儼存によって、否その以前から、ブルジョア文学は独占権を失っていたのであるが、資本主義の世界的危機と社会主義の巨人的な展開とを反映したブルジョア文学の第二の分裂は、すでにこの「枠」が吾々にとって狭隘な制限的なものに転化したことを教えているのである。なぜなら、吾々は世界的規模に於いて、自立的芸術の新しい芽生えと共に、広汎な層の、吾々の側への転換」を、「大いなる社会的高揚の予言者として「人民大衆のなかに準備されつつある「昨日は中立的か敵対的であった古いインテリゲンチャの集団的移行の象徴」「前兆」として注目しなければならないからである。この現象は、吾々にとって極めて情勢の不利な日本の芸術界にも現われている。そしてラデックは、新しいプロレタリア文学の道は、「吾々の側に来ている古いインテリゲンチャのすぐれた作家たちとプロレタリア作家との組織的結合を通じて生れるであろうことを、深く確信」しているのである。（傍点、引用者。）

こうして、資本主義体制下のプロレタリア芸術家のまえには、きわめて困難な、きわめて輝かしい課題が横わる。今や狭隘な「枠」をとり払わなければならない吾々の作家たちは、しかも広汎な革命的芸術運動の一般的レベルへ決して解消することなく、自己の指導的地位に対する深い階級的自覚をもって、この統一戦線のなかの先頭的一部隊として活動しなければならないのである。すなわち、さまざまな思想体系とさまざまな発展段階とを含む革命的芸術家に対して、生活的真実をさまざまな度合で部分的に反映する反資本主義的リアリストに対して、個々の成熟した形象の総和によってではなく、これを統一づける社会的モメントの優位の視角からのみ、綜合的な生活的真実を描き得るということを、典型的境遇のもとに於いてのみ典型的性格が全幅的に形象化され得るということを、その創作的実践と理論的誘掖を通じて教えなければならないのである。自明のことだが、芸術家は芸術家としての誠意をもって芸術家を育てなければならない。「彼に命令してはならないし、彼を芸術的に急き立ててはならない。」（ラデック）嘗て旧ナルプや旧プロットを害していたような、中間的芸術家の技術を利用したり、彼らをむやみに赤化させようとしたような機械的な不誠実な態度は、勿論改められなければ

ならない。モルトの決議は、この道を進もうとする吾々に、「まだ社会民主主義に酔わされている労働者および勤労民の要素を獲得するために闘争」しなければならないことを、「革命的芸術インテリゲンチャをいろいろに区別するとともに、それらの種々な階層を吾々の部隊に引きつける際の、明確に区別された方法」が必要であることを教えている。（ボドリスキー）と同時に、吾々は高慢であってはならないというレーニン・スターリンの戒めにしたがって、吾々の側に来つつある作家たちのすぐれた技術を学ばなければならないのである。

革命的芸術運動をこのようなものとして理解するとき、たとえそれが中野・森山の主観主義的な眼にはどう映ろうとも、この一語のなかにこそ、吾々の芸術運動に於けるプロレタリア的ヘゲモニイの大いなる羽搏きを、吾々はするどく見出し得るのである。吾々は、この革命的芸術運動の地盤のうえに、創作理論と組織論との弁証法的統一のうえに、ソヴェートの新鋭の芸術理論をうけとり、これを吾が物としなければならない。ルナチャルスキーらのいうとおり、綜合的スタイルとしての社会主義リアリズムの内部には、さまざまな「等差」があり得るが、彼らは社会主義現実の偉大な教育的な力によって、理論と実践の統一に於いてか或いは「経験的」（キルション）にか、マルクス・レーニン主義的な反映論を吾が物とし、またしつつあるのである。これに反して、吾々の革命的リアリズムの内部には、さまざまな思想体系（たとえば、反ファシズム的自由主義・人道主義、現代に於ける空想的社会主義、等々）と、そのさまざまな階層とが内包される。これをただ一つの「社会主義リアリズム」のスローガンによって統一づけようとする機械的な公式主義は、革命的インテリゲンチャの「種々な階層」を引きつける際の「明確に区別された方法」についての国際的テーゼを踏みにじるものではないか。

「吾々の反資本主義リアリズムは、決して社会主義リアリズムではあり得ない。プロレタリア作家と同伴者作家の区別づけが、すでにそれ自体セクト主義であるまでに客観的条件の成熟した国では、社会主義リアリズムは、広汎な創造的な層を指導する統一的な方法論であり得る。もし資本主義体制のもとに於けるプロレタリア芸術運動から広汎な反資本主義的な芸術運動への発展的な方向転換の時期にあたって、このことを正しく見きわめないならば、社会主義リアリズムがラップの理論よりも発展的水準に立つのに対して、吾々の理論は、進歩的芸術の最低レベルへまで低下するほかはないのである。」（「迷えるリアリズム」）

私はここで、社会主義リアリズムを直線的に吾々のもとへ持ち込もうとする機械論と、また吾々の方向転換を革命的芸術一般へ引きもどそうとする危険性とに対して、このように警告を発しているのである。この文章のどこに「階級的独自性の抹消」があるであろう。もし、革命的リアリズムを、伏字を避けて——これには、政策的な意味がある

――反資本主義リアリズムと言い換えることを不当とするならば、中野・森山はキルポーチンに向っても、私に対するように、彼の用語は「ファシストから自己を科学的に分っていない」と指摘するがよい。なぜなら、キルポーチンは、有名な「新段階に立てるソヴェート文学」のなかにも、「吾々は自己の読者を人類のよりよき未来のための、プロレタリア（空白）の（空白）と確保のための（空白）の潑剌たる精神をもって（空白）するところの我々の作品の反（空白）的、反資本主義的性質を念頭に置いている。」（傍点、引用者）と書いているではないか。Anti-kapitalistisch（反資本主義的）という字は、私の新造語ではなくして、国際文献に散見するのである。吾々は、マルクス主義者の誇りを以て、社会主義という言葉を、科学的社会主義の意味に用い得るように、資本主義下のプロレタリア芸術家の最大の誇りと権利とを以て、吾々のリアリズムを「反資本主義リアリズム」と呼び得るのである。

2 「唯物弁証法的創作方法」のアンチテーゼとしての「社会主義リアリズム」の内容と形式

このように述べて来れば、「社会主義リアリズム」が「唯物弁証法的創作方法」のアンチテーゼではなくして、単に「芸術創作方法について理論の誤謬と偏向とから清められた発展である」という中野重治の反駁が、錯覚的なものであることは、すでに明らかであろう。この両者の間には、画然とした質的飛躍がある。このことを、私は、社会主義リアリズムの内容と形式の二つの側面から考察しよう。

「迷えるリアリズム」でも言い及んだように、ソ同盟のプロレタリアートは、国内工業化と農業の全域集団化と階級としての富農の清算という主要方針のもとに、中農と結びつき集団経営の農民大衆に支持されて、「ロシア資本主義に対する最後的闘争」を遂行しつつあった。「この勝利的行進の基礎の上に立って、吾々は社会主義時代に踏み入ったのである。」（スターリン）すでに、一九三〇年の第十六回党大会は、このことを確認した。すなわち、新経済政策の時代に、資本主義扇形に対する主導的なものとしてそれと並存した社会主義扇形、この全面的な闘争を通じて、支配的な生産諸関係に転化したのである。社会主義リアリズムは、この生産諸関係を直接的な社会的基礎とするところの、「社会主義時代」の芸術の基本的方法であって、それはすでに他の諸階級がプロレタリアートに同化しつつあり、観念論哲学の母胎であったところの精神労働と肉体労働との区別が拭い払われつつあり、プロフェッショナリズムとしての芸術活動の概念が克服されつつある特定の社会的発展の段階に応じた、ソヴェートの全同盟的全民族的規模に於ける、芸術創造の基本的大衆をあまねく包容し、統

一づけるリアリズム芸術である。「その発展の最後の段階に於いて形成された限りに於いての、唯一の芸術的方法のための闘争を展開せるラップの運動は、客観的には作家の創作的創意性と幻想の拘束、制限、圧迫を結果した。中央委員会の決議はすべての創作的水門を開き、ソヴェート作家に完全なそして広汎な創作的自由を附与した。ここに二つの方針がある。ここに――対立がある。」（ラージン。傍点は、引用者。）これが、アンチテーゼでなくて何であろう。

中野・森山は、イデオロギーとしての社会主義芸術に対する、この下部構造の基本的な規定を、殆んど無視しているかのようである。森山啓は、嘗ての段階に、社会主義リアリズムを定義してつぎのように書いている。

「社会主義的リアリズムは、社会主義的現実（世界の『プロレタリアートの生活』）の発展過程の客観的に真実な芸術的表現へ導く創造方法である。」と。――ここで、彼は、資本主義的現実のなかに実在的「可能性」として存在する社会主義を「現実性」と見誤まり、観念体系と経済体系とを混ぜこぜにして考えている。

つぎの段階に、彼は言った。「社会主義的リアリズムなるものを、創作実践のための合言葉として理解するならば、又『社会主義的現実』なるものがソヴェート的現実は世界の（空白）の一部であると理解するならば、創作に於ける『社会主義的リアリズム』の道は世界を貫き得るものであろう。」と。――ここでも、同じ指摘が繰返されるばかりでなく、また「第二次五カ年計画の開始に於いて、ソヴェート文学の前に立てる新しい諸任務の有機的な表現」（ラージン）であるところの社会主義リアリズムのスローガンを、きわめて一般的・抽象的に「創作実践のための合言葉」としてしか理解していないために、それが今ただちに「世界を貫き得る」という非弁証法的な結論に彼は到達したのである。（以上、森山からの引用は、「文化集団」二巻四号。）

本誌三月号に於いても、彼は「けだし、社会主義的プロレタリアートの存する所、その文学は社会主義的性質を持たざるを得ない」（一七二―一七三頁）というように、社会主義リアリズムの内容を規定して、社会主義をその観念体系との差別と統一のなかに見ていないのである。

だが、四月号に至って、森山啓は、社会主義リアリズムの生み出された社会的基礎が、ソヴェート体制であるということを言い出している。そして、「吾々は狂人でもなければ」と前提した一連の文章のすえに、彼はこう書いている。「もとより社会主義的経済体系の基礎の上に立っているという意味での『社会主義的リアリズム』が、日本に今存在し得るなどとは考えていない」と。「だが何故、他の国におけるプロレタリア・リアリズムを特徴づけるために、『社会主義的』という言葉を使ってはならないのか？」と、さらに彼は反問しているのである。（一〇四頁。）

これによれば、恰も森山啓は、そもそも彼が社会主義リアリズムについて発言した最初から、それの経済的基礎との関係を正しく理解していたかのようである。だが、果して彼のいう通りであるとするならば、吾々は森山啓を狂人と呼ばなければならないかも知れない。なぜなら、森山は嘗て長谷川一郎と論争したときに、社会主義生産諸関係の上に立っていないという意味での、彼の謂ゆる「社会主義リアリズム」が日本に存在し得るということを、社会主義諸関係の上に立っているという意味での、キルポーチンらの理論の引用によって立証しようとしたからである。理論家は自己の誤謬に対して率直でなければ、このような論理の矛盾に陥るということを、私は自他の戒めとしたい。

こうして今や吾々のまえには、スターリン・ゴーリキイ・キルポーチン的命題に於ける「社会主義リアリズム」と、森山啓の個人的提唱にかかる「社会主義リアリズム」との二つが立っている。そこでこのリアリズムの冠する「社会主義」という言葉について、さらに考察を進めれば、もとより本誌四月号に森山啓が、「空想から科学へ」を引用して言っているように、近代社会主義は、「資本家社会における生きた経済的事実における矛盾の思想的反映」にほかならない。だが、三月号に於いては、彼は何と主張していたであろうか？　「若し『社会主義的リアリズム』の土壌が単にその社会主義的経済的基礎にあり、一定の文学的方法の本質を規定するものが、それを生んだ社会の経済体系のみにあるとすれば、あらゆる資本主義国に於けるリアリズム文学は、『資本主義的リアリズム』の文学と呼ばるべきである」（一七一頁）と。そこでは森山は、資本主義経済の内的矛盾の観念的反映が、反資本主義文学の発生の基礎であり、その内容的本質であるということを全く理解していなかったのである。彼が印象批評的に私に加えようとした「社会主義思想は、資本主義国では現実的な経済的な基礎もなしに、ただ頭の中でくすぶっている観念体系であるかの如くだ」という評語は、かえって三月号の森山にこそ当嵌るのである。それはそれとして、吾々の理解に於ける社会主義とは、今も言うとおり、資本主義経済に於ける生産力と生産関係との矛盾対立の観念的反映として発生し、マルクス・エンゲルス・レーニンの認識によって正しく導かれ、今やソ同盟の社会主義的生産諸関係の基礎の上に思想としての最大の発現を見ようとしている科学的社会主義を措いてほかにはない。スターリン的命題に於ける社会主義リアリズムは、この社会主義思想によって貫かれたものであり、吾々もまた同じ思想の上に立って、しかも国際反資本主義芸術運動の「レーニン的な新しい課題」にしたがって、「社会主義リアリズム」をでなく「反資本主義リアリズム」をとなえなければならないという私の主張は、すでに述べたとおりである。森山的命題に於ける「社会主義リアリズム」は、前にも言ったように、吾々の国際的テーゼに背反するものであり、おそらくこれは森山の言う

「糞リアリズム」に該当するものであろう。
社会的発展の段階の違いを無視し、下部構造の上部構造に対する基本的な規定を無視し、創造方法を組織問題から切り離して問題にしたいならば、なぜ森山啓は「コミュニズム的リアリズム」をとなえないのか？　なぜなら、彼の周囲の作家たちは、「生産手段の社会的所有を防衛しつつ労働の平等と生産物の分配に於ける平等とを保証する」ところの社会主義社会ばかりでなく、その社会主義社会がそれの前提的な段階に当るところの「能力に応じて各人から取り、必要に応じて各人に与える」コムミュニズム社会について、決して思想的に無関心ではない筈だからである。ソ同盟の作家たちも、勿論、そうであろう。しかも彼らが、一定の社会的・芸術的発展の段階に即して、「社会主義リアリズム」をとなえているのを見れば、吾々もまた吾々の発展段階に応じて、「反資本主義リアリズム」を主張しなければならないことは、今や明白であるであろう。
つづいて私は、社会主義リアリズムを形式の方面から見ていこう。「空想から科学へ」の冒頭に、エンゲルスはこう言っている。
「近代社会主義はその内容よりすれば、一方現代社会に於ける所有者と非所有者、資本家と賃労働者との階級対立の、他方生産に於ける無政府状態の認識から生まれたものである。しかるにその理論的形式よりすれば、それは最初十八世紀の偉大なるフランスの啓蒙学者達が確立した根本原理の、一層展開せられたるもの、一見その当然の継続として現れる。あらゆる新たなる理論と同様に、近代社会主義も亦た、先ずそこに見出されたる思考材料に結びつかざるを得なかった、その根が如何に深く経済的事実に根ざしていようとも。」
すなわち近代社会主義は、内容から見れば、資本主義経済の内的矛盾の思想的反映であるが、理論的形式の史的出発点は、フランス啓蒙学者の学説であったのである。この定式と照らし合せて言えば、社会主義リアリズムは、その内容からすれば、社会主義的現実の（したがって社会主義的思想の）芸術的イデオロギーへの反映であるが、その表現形式は、これに先行するソヴェート・プロレタリア芸術・同伴者芸術或は世界の現代芸術の諸形式と必然的に結びつかざるを得ないのである。（勿論、他のイデオロギーとの間の複雑な依存関係を見落してはならないが。）ここでも私は、上部構造の内容と形式の相関関係に対する、森山啓の無理解を指摘しなければならない。彼は、「文学や芸術をはじめ、もろもろのイデオロギーと経済的基礎との間には、『直線的・直接的なつながりは無い』」ということを先ず強調する。――「直線的な直接的関係は存在しない」（ローゼンタール）というべきではないのか？　社会主義芸術の諸原理が発生した「直接的な、そして社会的基礎」は、ソヴェート体制であるというユージンの言葉は誤りなのか？　――つづいて彼は、芸術は下部構造との関係よりも

「それまでの文学遺産とこそ、より直接の関係を持つ」と述べている。――内容が、現実と結びつくよりも、形式が先行芸術と結びつくほうが、より直接的だとは何のことか？内容が主導的ではないのか？――さらに森山は語を継いで「社会主義的リアリズムは、現実において如何に社会主義的実践とプロレタリア世界観に結びついているにしろ、否、それゆえに、それは全人類の『文学史からの概括、総計、結論として研究』され得たものである。」（四月号・一〇五頁、旁点は引用者）と書いている。――社会主義リアリズムは、理論としてもいま一応のきわめて輪郭的な体系づけを（それが、どれほど見事にしろ）終っただけではないのか？「吾々がなお正確な輪郭を見ていないところの、しかも現象のあらゆる巨大さを感じながら、社会主義リアリズムと呼んでいるところの一切のもの」（エレンブルク）が、すでにもう研究されつくしたとでもいうのか？

繰返して言うが、社会主義リアリズムは、内容に於いて社会主義時代の現実のなかにどれほど深く根をおろしていようとも、また芸術と他のイデオロギーとの間の発展の食い違いからどういう影響をうけようとも、その芸術的形式に於いては、これに先行する諸芸術を「史的発展の出発点」とせざるを得ないのである。しかも「世界史は、厳密に言って、必ずしも世界史的結果として歴史のうちに現われるものではない」（マルクス）とすれば、これらの先行芸術も、必ずしも芸術史的な綜合的成果として現われてはいないのである。たとえば、ソヴェート・プロレタリア文学は、「唯物弁証法的創作方法」という誤まったスローガンのもとに、その発展の道を辿りつつあったのである。「吾々は、芸術発達に於ける自己の歴史的道程の出発点に立っているに過ぎない。それゆえ吾々の芸術が、極めて大きな欠陥をもっていることは全く自然である。」（キルポーチン）そのためにこそ、社会主義リアリズムが、先行芸術から継承した表現形式を、新しい内容によって急速に発展させるためにこそ、芸術的上部構造の下部構造への順応を最大限に促進させるためにこそ、全世界の芸術的遺産の綜合的再検討とその余すところのない批判的摂取との問題が、ソ同盟に於いて、世界の芸術史に嘗て見ない重要さをもって日程に上されているのである。もちろん吾々はこのことを、下部構造のイデオロギーに対する基本的な作用のなかに見るばかりでなく、その逆の作用、すなわち芸術が経済的基礎に及ぼす変革的作用を念頭に置いていなければならない。基本的には、経済的基礎に依拠しながらも、芸術は特殊の法則にしたがって発展するものであり、他のイデオロギーとの間に複雑な相互作用をもつとともに、「また経済的基礎に対して影響を及ぼすのである。」（エンゲルス）「人間の意識に於ける資本主義的残滓の清掃」の過程に於いて、社会主義芸術に課せられた、大衆の意識性の引上げという重大な任務は、無階級社会の建設に対する要因の一つに数えられる。そして、そのためにこそ、レーニン主義的

な反映論の具体化としての、言葉、形象、テーマ、コムポジションなどの精煉が、芸術にとって何よりも必要なのであり、この「創作的再建」の道は、世界の芸術的遺産の無限の宝庫を源泉とすることなしには、決してなし遂げられないのである。「方法は実践に於ける世界観である」（アウェルバッハ）というラップの理論は、芸術のこの特殊的方面、芸術の主体的要因、それの経済的基礎に及ぼす屡々「優位的」な役割について、正しい解答を与え得なかったのである。このような意味に於いて、嘗てマルクス・エンゲルス・レーニンが「哲学史からの概括、総計、及び結論たるごとき唯物弁証法的論理学の設定を求めた」ように、「社会主義的リアリズムも、同様に文学史よりの総計、結論として研究することが必要」（ローゼンタール）なのであり、決して森山のいうような「全人類の『文学史からの概括、総計、結論として研究』され得たもの」ではないのである。（傍点は　引用者。）

「社会主義的リアリズム——それは芸術的創造の最高段階であり、それは人類の芸術的発達に於ける一歩前進であり、それは文芸の新しい社会主義的質である。」（ラージン）社会主義リアリズムを唯物弁証法的創作方法のアンチテーゼではないという中野重治の誤謬は、ここに至って、いよいよ明らかである。

こうして社会主義リアリズムによる「創作的再建」は、「科学的再建」と並んで無階級社会の建設のための強力な戦線を形づくらなければならない。したがって、吾々は社会主義リアリズムの理論のなかに、いちじるしい「技術」への鼓舞を見出すのである。（傍点は、すべて引用者。）

「プロレタリアの国家は、幾千の優秀な『文化の技術者』『心の技師』を養成しなければならない。」（ゴーリキー）

「スターリンは、社会主義社会の建設に最も必要な課題は、技術の把握ということだと言っているが、これは、文化のすべての領野に対しても適用されるスローガンである。」（カーメネフ）

「ゴーリキーがかくも特殊な注意を文学的技術の問題に向けているのは偶然ではない。『必要なのは——とゴーリキーは常に強調している——創作の技術を知ることである。』社会主義的リアリズムは、そしてそれのみが、形式の問題を『頭から足の上に』立たせるのである。」（ラージン）

「必要なことは、ブルジョア芸術を研究して吾々の敵を、単に吾々の芸術の内容や思想をもってでなく、その芸術的質や、吾々に於いては未だしばしばブルジョアジーのそれに劣っている技術によって鞭打たねばならぬことだ。」（キルション）等、等、等。

社会主義革命の発展の鎖に於ける現段階の決定的環であるところの「技術を摑め」という基本的スローガンは、このように芸術の領野へも反映しているのである。だが、中野重治は、社会主義リアリズムは、「強い世界観を要求する作家の実践的努力の問題」であり、「技術に力点なぞは

置かれていない。」と主張する。（三月号・一六四頁）それならば彼は、「吾々が最短期間に技術的方面において先進資本主義諸国に追いつき追い越すか、それとも吾々が圧し潰されるかだ。」或は、「再建期に於いては、技術がすべてを決定する。」或は「社会主義社会の建設に最も必要な課題は技術の把握である。」というスターリンの言葉が、ただ政治経済の領野にのみ適用されるものだとでも思っているのであろうか。或は、彼はスターリンのこれらの言葉に対しても、世界観の過小評価を指摘しようというのであろうか。――否、人類最高の世界観の発現であるところの無階級社会の建設のためにこそ、経済部門のみならず、あらゆるイデオロギーの部門に亙って、技術の把握が、今や「決定的環」なのであり、一国社会主義の建設に対する内的矛盾は、これなくしては克服し得ないのである。そして、その外的矛盾を解くものこそ、芸術に於いては、吾々の反資本主義芸術運動の展開であり、「国際社会主義の革命文学」（ラデック）の成長以外にはない。

中野が、社会主義リアリズムについて、「強い世界観を要求する」ことと、「技術に力点を置く」ことと背馳的に考えるとき、彼は社会主義時代という高い社会的発展の段階にあっては、この二つのものが、吾々のもとに於けるように、二元的に分裂しないということを全く理解していないのである。中野は、「人間の解剖は、猿の解剖の鍵である」というマルクスの有名な定式を忘れ、低い社会的形態に於ける事象を抽象化して一層高い社会的段階に当嵌めるならば、高い段階の現実の歪曲、その特殊な諸矛盾の抹殺に陥るという唯物弁証法的観点を見失っているのである。すでに見るとおり、社会主義芸術の特殊な矛盾は、世界史的意義をもつソ同盟の社会主義時代への進入に際して、その社会主義的現実が生み出す新しい内容に対する芸術形式の著るしい立遅れであり、新しい形式的質の創造なくしては、作品の「思想的充実」をも、「社会主義の精神による勤労大衆の思想的改造」の任務をも果し得ないまでになったところの、芸術に於ける内容と形式の、著るしい発展の食い違いである。もしソヴェート芸術のこの特殊性を無視して、社会主義リアリズムのスローガンを機械的に直線的に吾々の反資本主義芸術運動のプラットフォームのうえに持ち込もうとすれば、社会主義芸術の内容と形式との関係に於いて強調されていた技術への鼓舞が、吾々のもとでは忽ち比重を失して、逆にそのスローガンの内容は、芸術に於ける世界観のおびただしい過小評価と形式主義への転落とを生み出すほかはないのである。こうして、森山啓の社会主義リアリズム論は、退却的なものとなり、すでに述べたとおり吾々のプロレタリア芸術と革命的芸術との当面の具体的任務に対して何らの指標をも与え得ないまでに無力化したのである。「国の工業化、技術の発達、新しい生産の獲得、自然的富の獲得――すべてそれは（空白）な階級闘争の情勢のなかに人間の新しい社会主義的性質を生み出

し、彼の中に労働に対する、物に対する、財産に対する、機械に対する、周囲の一切に対する新しい態度を呼び起している」というほどの急激な社会状勢の変化は、吾々のもとでは経験されなかったのであり、しかも吾々の芸術運動には、逆の方面から支配的イデオロギーが常に働きかけているのであるから、世界観の一般的公認を得つつあるソ同盟の場合と較べて、世界観の確保についての特殊な闘争形態が必要であり、その基礎のうえに立って、吾々は創造方法を砥ぎ澄ましてゆかなければならないのである。そしてその限りに於いては、「社会主義リアリズムの理論から、吾々はきわめて豊かな教訓を汲みとることが出来るのである。」(迷えるリアリズム」)

吾々はソヴェート理論の助けを借りて、吾々の作家に対する「ナ・リト・ポストウ」的な棍棒の威嚇を、官僚主義的な命令と叱咤とを取りのぞいた。だが、これに代るものが、芸術に於ける個人主義・小市民的自由主義の認容であってはならない。すでに言うとおり、反資本主義芸術運動の指導的地位に立たなければならないプロレタリア作家は、「内部的統一と内部的規律によって拘束されない様な戦闘部隊は存在しない」(ラデック)ということを、その階級的自覚によって知らなければならない。また「芸術の党派性」「主題の積極性」「素材の社会的意義」等の諸命題に対して、飽くまでも誠実であるように力めなければならないのである。

私は、この蕪雑な文章が、吾々の反資本主義芸術運動の基本的方向を明らかにするために、少しでも役立つことを願っている。旧ナルプの諸君は、私がここに一端を伝えた国際的経験の基礎の上に立って、再出発することが必要である。吾々の演劇の領野に於いても、国際反資本主義演劇運動について正しい理解を欠いた秋田雨雀・村山知義らの「新劇合同論」によって、吾々の方向転換の意義は全く押し歪められ、今日の混乱を招くに至ったのである。ここでも、再出発がなされなければならない。

後記――文中に引用してあるカーメネフとカアル・ラデックの言葉は、前者はアカデミーの出版計画についての、後者は全ソ作家同盟・第一回大会に於ける報告演説者としての、公認された発言の範囲を出ていない。

(一九三五年五月「文学評論」)

国際反ファシズム文化運動(序説)

新村猛

象牙の塔、芸術のための芸術、象徴主義、このような言葉が十九世紀のフランスで生れたことは、フランス近代文学の紹介と移植が盛んであり、フランスに美術や音楽を学ぶものが多く、またフランス映画の輸入が近年激増し、ひいてはフランス文化に関する知識と理解とがとみに高まっているわが国では、ひろく知られている事実であると思う。そうしてわれわれが鑑賞し研究する機会の最も多いフランスの芸術や文学から、いな哲学からさえ受ける印象は典雅・洗煉・微妙・細緻などの言葉で表現されるのが常である。実際、われわれの高い評価となみなみならぬ讃美に値するマラルメやヴァレリの詩、ドビュッシやプーランクの音楽、ルネ・クレールやフェデの映画が創り出されるまでにはその背後に長くて豊かな芸術の歴史が尾をひいていることは今ここで述べるまでもない。しかしながら、これほど洗煉の極致に達したフランス文化の将来はどうであろうか。このままで停滞し或は頽廃してしまうのであろうか。殊に、始まってから既に久しい世界恐慌から、他国より遅れたとはいえ、手痛い打撃を社会の各分野が蒙っているフランス、外部からはイタリアのエチオピア侵略、ドイツのフインランド進駐、最近ではスペインの内乱をめぐる軋轢、こういう切迫した国際政局の及ぼす脅威に直面するフランスの知識階級はどういう態度をとっているか、自国の文化の将来についてどういう見解を抱いているか。こういう状態にあって、いわゆる六人組の名で知られる少壮作曲家たち、超現実主義（スュルレアリスト）・野獣派（フォヴィスム）・立体派（キュビスム）・未来派（フュチュリスト）など多くの流派に細分された絵画の現状はどうであるか。ひところ喧伝された前衛映画の行方はどこにあるか。また、超現実主義派の詩や純粋詩論はどうなっているか。更に、学者、殊に科学者はトルストイの芸術論を反駁したアンリ・ポワンカレのように科学を説いているかどうか。

　私の右のような疑問の幾つかに答える意味をも含めて左に現代フランス文化運動について述べるのは、近年に至って日本民族の将来の文化の建設を単に過去の封建文化、しかもある時期の文化の讃美や模倣によって阻もうとする潮流がいよいよ甚しいのに対し、本来、自国の民族文化の発展のためには、世界諸国の民族文化を摂取することを半面に欠いてはならないという見地に立って、豊富かつ複雑なフランス文化を研究している一学徒の切なる憂慮に発するものであることをまずしるしておきたいのである。

　伝統の擁護と進歩への衝動とが不思議に調和を見せているフランスでは『生ける過去』ということがしばしば言われ、フランス現代文化について語るに当ってもその過去に多少溯って触れないわけにはゆかない。

　フランス現代文化の基礎は十八世紀の末におこなわれたフランス大革命によってすえられたとする見解は動かせぬ定説と言えよう。そしてこの変革を思想の領域で準備したモンテスキウ、ヴォルテール、ルソー、ディドロらの如き十八世紀文学を代表するとみなされる人びとは純文芸より

も概して社会制度・法律制度・政治形態或は哲学や自然科学等に関する著作を多く残し、この時代は文学者や芸術家が政治に最も深い交渉を有していたのである。このような傾向は次の十九世紀の中頃にナポレオン三世が第二帝政を布き、自由思想を抱く学者や作家たちを迫害するようになる時期まで続くのである。例えば、ナポレオン三世の支配した時代に抑圧を受けた学者には、人間としてのキリストの伝記を書きソルボンヌ大学の教壇を追われたエルネスト・ルナン、作家には一八五二年十二月のクー・デターに敢然反抗し「刑罰集」を書いて皇帝小ナポレオンを弾劾したヴィクトル・ユゴー、画家には「草上の昼餐」を展覧会場から撤去させられたエドゥアール・マネーを挙げることができる。それに先だつ十九世紀前半から中葉にかけては、フーリエ、サン・シモン、コント、プルードンの如き社会思想家が輩出し、他方、七月革命（一八三〇年）、二月革命（一八四八年）はヨーロッパ諸国に深甚な影響を及ぼしたのである。更に溯れば、カントやヘーゲルの如き哲学者、ゲーテやシルレルの如き作家、或はベートヴェンの如き作曲家の著述や作品の根柢に一七八九年——九三年の社会変革の及ぼした影響を無視するのは誤りであるとさえ言うことができる。いわゆるユートピヤ社会主義を唱えた思想家の学説については述べないとして、七月革命がドラクロワにあの自由の女神を先頭に立てた市街戦の絵を描かせ、詩人ハイネをして躍る胸を抑え切れずライン河を越えてパリに赴かせたことや二月革命がロマン派の詩人ラマルチーヌを政治の渦中に暫らく投げ入れ、「悪の華」の作者ボードレールに共和主義の新聞を発行させたという事実を忘れてはならない。

要するに、前世紀中葉までのフランスは旧封建制度の桎梏に苦しんでいた他の諸国の進歩した知識人にとっては第二の祖国として慕われていたのである。世紀の末葉に近づく頃でも決してフランスのそういう地位が消え失せたのでないことを知るには、ハイネに加えるに、西欧主義者として異端視され、遂に祖国ロシアを去ってパリに移り住み、フロベールなどと親交を結んだツルゲーネフを想起すれば足りるであろう。ところが、上述の通り、第二帝政樹立以後、情勢は漸く変って来て、後期のフロベールや高踏派の詩人たちの作品に窺われるように、芸術家や文学者は以前抱いていた社会の改良、人類の進歩に関する信念、オプチミスムを捨て始めた。このような動向は、普仏戦争でフランスが敗北し、他方、自然科学や技術が著しく発達し、これと並んで暗いペシミスムの思潮が勢いを占めるようになった一八七一年以後に至ってますます強く、芸術家は創作に、学者は研究に没頭するよりみちがない、またそれで足りるとする気分や態度が生じて来た。十八世紀以来の社会的関心は急激に薄らぎ、文学の主流も現実を冷静克明に描写することを主眼とする自然主義と、醜悪卑俗な現実から逃れ観念と心像との絶妙な世界を創造しそこに自適しよう

とする象徴主義との対立する二つの流派に分れた。

ただ、十九世紀の末葉に起り今世紀の初頭まで数年の間続いたドレフュス事件に際しては、作家の多くは象牙の塔から出、ゾラ、アナトール・フランス、レオン・ブルム、アンドレ・ジードはドレフュス大尉派即ち左派に、ブリュヌチエール、ブールジェ等は右派に、それぞれに就いて熾烈な論戦を交えた。しかしこれは例外であって、――その後、政界に名を成したバレスとモラスの場合を除き――政治といえば何かしら学問や芸術を汚すもの、天分を滅すものと考えられがちであった。こうして世界大戦に及ぶのであるが、戦勝国となったフランスでは主戦論を唱えた保守主義者や国粋派が自然地歩を固める結果を生み、それに反して、従来与えられていたさまざまの価値や権威が戦線で或は銃後で崩潰するのをまのあたり目撃した若い知識人たちは却って社会的現実の嫌悪、それからの脱出逃避に誘われ唆かされた。ダダイスム及び超現実主義の運動若しくは主張が起ったのはこの頃、一九一七――二四年の頃のことである。

目下、スペインの内乱に際し、列強に対して不干渉協定を提議したフランスが大戦末期にロシア革命が起ったとき英伊チェコなどと提携して武力干渉をおこなったことがある。このとき、フランスでこれに反対を唱えた作家はロマン・ロランぐらいなもので、ロランに従う知識人は殆どいなかった。奇妙な現象であるが、この対露武力干渉を支持し鞭撻したフランスの保守派や右翼の諸新聞が今日では欧洲の平和のためにスペイン政府に援助せず厳正中立を守るべしと大童になって弁じている有様である。それほど当時の知識人は政治に冷淡だったのである。

一九二一年末――二二年春、昨年モスクワで客死したアンリ・バルビュスがアナトール・フランス、マルチネなどの助けを得、自作の小説の標題にちなんだ「クラルテ」運動と呼ばれる国際的平和運動を起し、左翼知識人の間に急進的なバルビュスら政治中心主義派とロランやツワイクら『精神の独立』擁護派との対立を暫くの間ひき起した。この運動は成熟した条件に恵まれなかったため、とかく論戦が多くて差し当り収穫が少なかったと言うほかはない。それ以後三〇年あたりまでは極端な精神的並びに社会的沈滞期ということができる。ロランとバルビュスもこの頃はキリスト、トルストイ、ガンジーの教説に魅力を覚えるのを禁じ得なかったのである。そしてマラルメを継ぐ主知主義的象徴派詩人ポール・ヴァレリ及び犀利緻密な心理分析小説「失われし時を求めて」の作者マルセル・プルーストの声価が漸次高まったのはこの時期であり、アンリ・ベルグソンのフランスの大学における評価についても同じことがいえる。今日なお世界の青年の精神的指導者の一人として仰がれているアンドレ・ジードが現在の如き立場に到達したのは一九三〇年前後であることを考えれば、大戦後三〇年頃までの一般思想界の風潮は察するに難くないではない

か。

さて、一九三〇年に近づくに従い、われわれを苦しめている世界恐慌の徴候は漸くしるく、やがて遅れてフランスに打撃を加え始め、しかも、学問や芸術に携わる人びとの身にも徐々に及ぶようになった。不景気が継続しその影響が深刻になるに伴い、一時退潮を示していた社会運動は再び活潑になり、罷業・暴動等社会不安の種は繁く、国内では種々の階級や党派団体の間の対立、国際政局では、国と国、民族と民族の葛藤が激化し、もう二度とおとずれるおそれはあるまいと多くの人のかつて考えた戦争の危機が迫って来るのが感じられ始めた。戦禍に未然に備えるため、一九三二年の夏、反戦反ファシズム大会がアムステルダムで開かれた。大会を提唱し議長になったのはアンリ・バルビュスであり、ロマン・ロランも檄を作製し、アンドレ・ジードも手紙で賛同の意を表わした。なかんずく、世界屈指の数理学の泰斗ポール・ランジュヴァン教授の参加は注目に値する。

これより先き、同じ年の三月には、作家や芸術家が自由に作品を創作し発表する権利を奪うファシズムに抗しその危険を斥けるように尽力したいと願うフランスの作家と美術家中の有志が集って「革命的作家美術家連盟」を創設した。この連盟は必ずしもファシズム反対を標榜するに止まらず、創作と出版活動の条件を改めその範囲を拡げ、進んで才能ある若い作家の指導と養成に当り、更に文化から遠ざけられている大衆にそれを享受する機会を与えようという意図をもつものであり、三〇年の秋にハリコフで開かれた作家大会の決議に基づいて設立を見たといわれるが、特定の立場にある文化人ばかりでなく、上述の趣旨に賛する人は閲歴のいかんを問わず加盟することができるようになっている。この連盟の設立に参画した作家のうちには故アンリ・バルビュス、その親友ヴァイヤン・クーチュリエ及び超現実派の代表的詩人の一人であったルイ・アラゴン、同派の詩人若干（ジョルジュ・サドゥール、ピエール・ユニック、故ルネ・クルヴェル）、この夏セバストポリで病死したダビ等を数えることができる。また同連盟の美術部の結成に貢献したのはアンデパンダン展の創始者で点描画の祖として聞えたポール・シニャック（昨年八月歿）であり、今日ではアンドレ・ロートを始め新しい画風の少壮画家は大抵この部（後述「文化の家」美術部）に属している。こうして四年半余り前に誕生した「作家美術家連盟」は設立後しばらくは文化の上から見て大きな活動をおこなわず、その存在もよく認められないくらいであった。従って同連盟の存在と活動とがわが国では今まで殆ど知られていないのである。

翌一九三三年一月の末、ドイツではヒトラー一派が遂に政治権力を掌握し、隣国フランスを狼狽と混乱に陥れた。言うまでもなく、ファシズムと戦争とは概してドイツに対する恐怖・反感に結びついてフランス人の心に映し出され

る。ナチス・ドイツの脅威は同時に自国におけるファシスト独裁樹立の脅威に対する懸念となってあらわれ、フランスの知識人の動揺は顕著になった。ランジュヴァン教授やジードの署名のはいったビラがパリ市街の壁に貼られたのはこの年の初夏のことであった。既に前年夏の反戦大会に賛成者の一人になっていたアンドレ・ジードは生れて始めて、労働者を混じえたファシズム反対の示威集会にダビ、ヴァイヤン・クーチュリエらと共に出席し、「ファシズム」と題して演説を試みた。ジードが「新フランス評論」誌上に発表した「日記抄」を読むと、社会問題や殊にソヴェート・ロシアに対する強い関心、寧ろ同情があらわれている文章は一九三二年以後の日附を持つことは興味ある事実である。

翌三四年の二月の上旬にパリとウィーンとに相ついで騒擾が起り、ウィーンでは社会民主党系の労働者はカトリック社会党中心の政府の手で抑圧され、パリでは議会の腐敗や疑獄事件に対する一部市民の憤激に乗じて右翼団体がファシスト独裁を布こうとする陰謀は、ウィーンと反対に主として労働者の力で挫折した。要するに民主主義はオーストリアでは敗れ、フランスでは勝ったといえるわけであるが、このとき始めて、今までファシズムはあたかもドイツやイタリアだけにかかわるものであるかの如く対岸の火災視していた科学者や芸術家も愕然として眼を覚まし、研究と創作との自由にまで迫った脅威を除くためには何らかの行動に移らなければならないと期せずして考えるに至った。そういう人びとの先頭に立つ団体として二月六日事件後ほどなく生れたのがパリのトロカデロ博物館長民俗学者ポール・リヴェー教授を会長に、前に述べたランジュヴァン教授とわが国でも知名の思想家アランを副会長に推す「反ファシスト知識人監視委員会」であって、広く参加者を求めると共に、「勤労者に対する宣言」を起草し、新聞雑誌（右翼系は掲載を拒絶）に公表する一方、会長リヴェー教授、幹事ピエール・ジェロームは自ら労働組合の集会に赴き、これを朗読してまわった。この宣言の要旨は「憎むべきファシスト独裁を防ぐために自分たち知識階級と労働階級とは互いに提携しなければならない」というに尽きる。この別名「リヴェー委員会」は、設立後、各方面の卓越した人士が続々加入し、昨年のなかごろ会員約八千名を算した有力な団体で、人民戦統の一翼を形づくるものである。会員のなかには正副三名の会長のほかに、原始社会学者リュシアン・レヴィ・ブリュール教授、化学ノーベル賞受領者ジャン・ペラン教授、イレーヌ・キュリー又びフレデリック・ジョリオ夫妻等の錚々たる科学者、作家ではロラン、ジードはいうに及ばず、ブロック、ゲエノ、マルロー、ダビ等の中堅作家たちを網羅している。同委員会は啓蒙的な講演会を開いたり、「ファシズムに面する青年」「ファシズムの社会的主張」「ファシズムとは何か」「火の十字架団、その首領、その綱領」「ファシズムと農民」

等の小冊子を刊行し、設立の目的の貫徹に努めている。これと並んで、ランジュヴァン、レヴィ・ブリュール両教授のほかにソルボンヌ大学生物学教授マルセル・プルナン（「マルクス主義と生物学」の著者）を戴く学術団体「ファシズム研究所」が一昨三四年の中ごろ創立された。その活動は詳らかではないが、監視委員会の理論研究部に相応するのではないかと推測される。

ここで誤解を避けるために一言留意を求めておく必要の感じられるのは、今まで地位や姓名を挙げて来た科学者や芸術家が学問においても創作においても凡庸で、政治団体を組織したりそれらに関係したりしてわずかに名声を保ち或は揚げるより能のない人では断じてないことである。そのためにこそ地位と共に努めて業績をしるしたのであって、例えば昨年の秋から文部省後援のもとに刊行中である「新フランス百科全書」の総監修者リュシアン・フェーヴル教授にしても各部門の監修者やその他の執筆者にしても概ね「作家美術家連盟」か「リヴェー委員会」の加入者なのである。すなわち、これらの人びとは研究或は創作を抛棄して街頭や集会に出ているのではなくして、研究と創作に専念し得る条件を確保し伸長するための行動が人類社会の将来の利益と一致しているという揺がない自覚と確信をみなひとしく持っていることを強調しなければならない。

翻ってまた、如上の科学者や芸術家の態度について考察を加えるならば、この人びとはみな孤高を捨てて提携と団結を唱え、それにとどまらず民衆との接触によって鼓舞され、啓発されようと謙虚に望んでいるのである。けれども団体を組織し民衆と提携したからといって忽ち良い作品が生れるとか、学問の成果があまねく民衆の間にゆき渡るとは単純に考えず、文化の後退を防ぎ、その進歩と普及のために闘いつつ、すべての人が文化に浴することのできる土壌をつちかうのに努めているように思われる。

（一九三六年九月京都放送局から「現代フランス文化の動向」と題して放送したときの草稿に加筆したうえ、竜谷大学刊行雑誌「宗教と芸術」第十七巻第一号に寄せたもの）

認識論としての文芸学

戸坂潤

文芸学の対象は云うまでもなく文芸である。尤も従来の日本語の習慣によると、文芸は又文学とも呼ばれている。文学という言葉は通俗語として、又文壇的方言として、特別なニュアンスを有って来ている。単に文芸全般を意味する場合ばかりではなくて、却って小説とか詩とかいう特定

の文芸のジャンルを意味したり、又はそうでなくて、一つの作家的乃至人間的態度を意味したりもしているのである。丁度詩という言葉が文芸の一つのジャンルを意味すると同時に、文芸全体に亘る一つのエスプリを指す場合があるように、文学という言葉も亦、往々にして芸術の一領域ばかりでなくて文芸創作の精神を指すようだ。そしてこの文芸的精神が、日本の社会の与えられた文化事情の下では、時に「小説」（実は小説＝ロマンというよりも「短篇小説」・エルツェールンク・ノヴェル＝「中篇小説」なのだが）又は精々「詩」＝ポエムというジャンルとなって発現する処から、小説や詩というジャンルが即ち文学だというような潜在観念を産んでくるのである。文学すると云うような場合、案外この文壇的な潜在観念が働いているのであり、又文学以前と云う時には、愈々この潜在観念が明らかになるだろう。

だが、文芸全体を意味したり或いは特定の一つ二つの文芸ジャンルを意味したりするよりも、文芸創作（乃至之に直接して享受）のエスプリ・精神・を意味する方が、文学という言葉として高く買われていいだろうと思う。なぜというに、文学が暗に、小説とか詩とかいう特定ジャンルを指すかのように思うのは、勿論視野の狭い見地を告白するものであって、他の事柄についての見識までが疑われる底のものであるし、又文芸全体を依然として文学と呼ぶことは、折角文芸という科学的な言葉があるのに、非常に観念のハッキリしない言葉をわざわざ使うことになるからである。

なぜ文学という言葉がハッキリした観念を云い表わさぬか。日本語の固有な慣例はとに角として、少くとも国際的な用語としては、文学は一般に文筆作品を意味しているのであって、科学上の文献や文書までも含むのだから、文学は必ずしも文芸に限定されないわけなのだ。それ故時に芸術的文学だけが、所謂文学というものに当るということになって、芸術領域の問題に関する限りは（精神の問題に関しては別として）、文学という言葉は無用な混雑を惹き起こすものに過ぎないからだ。

東洋乃至日本には、文芸と文献（フィロロギー）との区別は概念上あまり判然としない伝統が存在している。夫は文芸作品自身が社会にとって多分に教訓的な意義を有っていた一種の封建的・文化政治的・イデオロギーの結果であったかも知れない。文芸作品はこの場合、暗誦訓詁すべきものとしての古典とされ典拠とされた。だから之は一つの文化史的な知識に還元されて了う。かくて文芸は文献学（フィロロギー）に帰するわけだ。文人とは一種の学者である。それが文学者となるのである。――文芸はこの伝統に基いて、文学という何か学問のような言葉で呼ばれることとなる。勿論今日の文学なるものは実質に於て文芸自身を指すものであって、毛頭、文献学や何かを指すのではない。それであればこそ、文学作家の教養不足ということも

問題になるわけで、つまりここで教養と呼ばれるものは、文献学的知識の類だと考えられているのである。だが文芸が文学と呼ぶ習慣はこうして出来たというのだ。

そこで、この文学という言葉を別に活かすために、文学は文献学を指す言葉にしたらばどうか、という意見がある。それによると、例えば支那仏教のテキスト・クリティックによる解釈の体系などが、文学というものになるわけだ。それは悪くはないが、併しこういう点をまず考えて見る必要がある。支那仏教の過去に於ける文化的思想的内容は、今日の支那をも日本をも本当に文化的・思想的・に規定しているのではない。なる程一部の文化財の遺産としては勿論何等かの現代文化の要素にはなっているが、併しそれは現在の支那や日本の文化的・思想的・進歩の力となっているのではない。それに独力の力があるとすれば寧ろ復活的・反動的・な力に過ぎないのが、今日の事実だ。僧侶の社会理論の如きがその好い例だろう。処でここに文献学なるものの権限が、おのずから明らかになるのである。つまり文献学なるものは、それ自身では何ら時代の実際問題の解決を与えることの出来るものではない、ということなのである。文献的知識は文化的・思想的・課題にとって欠くことの出来ない一つの歴史学的手段ではあるが、もしその手段が独立して支配的な認識方法となるなら、途方もない思想文化の姿が現前することになる。文献学はそういう制限を持った一つの手段科学だ。吾々は支那仏教（一般に仏教でもいい）のカテゴリーを以て現下の資本主義社会の何物をも分析出来ないだろう。

処が之を文学と呼べという。そういう命名法は恐らく多分に不満を呼び起こすに相違ない。文学という言葉はなる程文芸という言葉に席を譲ってもよい。だがそれであるからと云って、文学を今云ったような文献学だとして了わねばならぬ理由は、まだない筈だ。――でそう考えて来ると、要するに「文学」とは、文芸創作を通じて受け取ることの出来る文芸のエスプリだ、ということにすれば、いいのである。之が文学という実際の用語を、最も親切に生かしたものとなるのではないかと思う。

だがそうすれば又、文学なる言葉を単に文芸という芸術の一種類・一領域・のエスプリだけに限定する必要もなかった筈だ。なぜなら、文芸に於て働くエスプリと云われるこの輪廓が空間的に限定され得ないような一種の気体は、一体美術や工芸や音楽に於けるエスプリと原則的に隔離出来るものだろうか。一切の芸術はその時代の精神を反映すると云われる。その時代の思想・文化・を表現すると云われる。このことは単に、同時代の諸芸術の間に社会的乃至歴史的な連関があって同じ傾向で貫かれている、というだけではない。諸芸術のエスプリそのもの・イデー自身・に共通なもののあることを指すのである。して見れば、文芸に於けるエスプリだけを他の諸芸術の夫から、原則的に隔離して了うことは出来ない筈だ。ロダンは多分に卑俗な世

界観を、乃至芸術観をさえ、持っていたが、その彼にしても、彫刻の内に一切の芸術や哲学や宗教を見ると云っている。ましてエスプリが諸芸術様式の間に有っている共通性・流動性・は、常識にぞくすると云ってもいいようだ。

でもし、文学というものをば文芸に於けるエスプリだと見るなら（そして事実そういう風にも日本語では用いられている）、寧ろ之を芸術全般に亘るエスプリと見るのが、首尾一貫したことなのだ。之を芸術全般に亘るイデーと云っても思想と云ってもいい。ただそのイデーなり思想なりが、能動的な工作力や推進力を持った生きたものだとしてであるが。

だがそうすれば更に、エスプリとしての文学は、実はもはや芸術全般だけを蔽うものでさえなくなって了わねばならぬ。芸術に於けるこのエスプリなるものが、哲学や科学を原則的に除外するということは、受け取れないことだ。して見れば芸術・哲学・科学の文化内容の一切を貫く一つの精神とでも云うべきものが、即ち文学だ、ということになりそうである。そう云って云えないことはないかも知れないのだ。

併しこう云って来ると、文学という観念はほしいままに徒らに拡大された観がなくはあるまい。文学は何と云っても文芸を中心にして出来ている観念だったのだ。それが哲学や又更に科学にまで直接するとなると、もはや文学という言葉の特殊の利き目がなくなって了う。こうした用語の拡大は無意味であるようにさえ見えるかも知れない。

事実、文学という言葉は、こういう結果になる程にさえ、曖昧なものなのだ。だから文学という言葉の代りに文芸という言葉を使うことが、何より便宜であったのだ。併しこの曖昧な処が案外色々の関係を説明出来るものを含んでいるということを、今注目しなければならないのである。と云うのはつまり、思想のエスプリとしての文学なるものは、文芸と科学とに亘って之を一貫しているもののように考えられるからであって、二つのものを結びつけて考えさせるものが、この文学という一つのそれ自身は曖昧な併し効果から云って有力な、切札であるだろうからだ。まだ特別に文芸という芸術のジャンルの態をなしていないような科学的な論文やエッセイも（所謂科学や評論の各ジャンルの如き）、なお且つ文学的な意義を持つことの出来る場合が多いという事実から、「科学と文学（実は文芸）」との関係は極めて重大な問題になるからである。処でここで役に立つのは、文芸という芸術の一領域・一種類・一ジャンル・や、科学という一文化領域ではなくて、こうしたものの背景に想定される処の一つの思想的力・文化的エージェンシー・としての文学という精神なのだ。

吾々は例えば文芸と科学とを徒らに分類学的に区別して見た処で始まらないのであって、必要なことは両者の本質的な同一と差別にある筈だ。そのために役立つものを、恰もこのエスプリとして理解されている文学なる通俗語が、

云い表わしているというのである。
それ故、この意味に於ける文学は、文芸という言葉があるにも拘らず、「文芸界」にとって、矢張依然として重大なカテゴリーでなくてはならぬ。勿論文芸学は芸術学乃至美学の一部分であって、この芸術学としての文学は重大な意義を持つわけだが、実際問題から云って、こうした場合にまで之を文学と呼ぶことには、一応の説明の責任を負う必要がありそうで、自然そうした用語例はあまり見当らない。文学は特に文芸に於て、思想的エージェンシーを最も自然に云い表わす。そうすれば、文学というカテゴリーは、時にうした思想的エージェンシーとしての文学は重大な意義を文芸学にとって、愈々意義の深いものとなるだろう。

文芸学の根本的な課題の一つは、単に文芸が何であるかだけではない。と云うのは、文芸という芸術種類に這入る文化現象の社会的説明や歴史的叙述だけが、その根本課題ではない。文芸学は、文芸に於ける、又文芸と直接する芸術種類や芸術外の文化領域やとの関係に於ける、文学的なものが何か、に答えるものでなくてはならない。少くとも文芸は文芸学によって、まずこの観点から分析・省察・されることが必要だ。文芸は文芸である。之を一つの芸術の領域と見て了う限り、文芸は文芸以上の何ものでもない。だが、文芸が文芸たる所以である処のその文学的な本質は、恰もそれが科学と同じに、一種の認識だという処にあるのである。で、認識としての文芸、それがこの場合「文学」と呼ばれている処のものであった。だからこの際、文学をば一種の認識能力のようなものと考えてもいいだろう。一種の認識の意慾や野心、エネルギーやセンスやタレント、そうしたものが文学的なものと考えられる。文学的な眼や文学的な真実や文学的な価値という言葉も、ここから生きて来るのだ。

だが旧く古典的理論に於て、芸術が一般に自然の模倣だと云われるように（その自然がまたイデヤの模倣であるかどうかは問題外として）、今日の芸術理論の最高結論から云っても、一切の芸術は実在の模写乃至反映に他ならない。少くとも芸術理論上のリアリズム（スタイルとしてのリアリズムではない）に立つ限り、そう云わざるを得ない。仮にそうだとして、処が一般認識理論上亦、リアリズム（唯物論）に立つ限り、一切の認識は実在の模写乃至反映である。それ故、この推論から行けば、一切の芸術が認識に他ならぬということになる。独り文芸だけが認識であったのではないこと勿論だ。

認識論上の模写説、即ち唯物論だが、この模写説によると、一切の文化が何等かの条件と制約との下に於ける実在の模写反映であった。かくて宗教は一つの倒錯した実在反映であった。では芸術はどういう規定による反映か、又特に文芸はどういう形をとった反映であるか。だがそれより先に、この際倒錯した反映だとか（或いは歪められた模写だとか）何とか云うためには、一定の規準があってそう云

えるわけだが、その規準になるものは何か。夫は取りも直さず科学的乃至理論的な認識なのである。実際、科学的理論（特に自然科学の夫）は認識の普遍妥当性に於て一等発達した認識の様式だったのである。認識という時、だから科学的理論的認識を尺度とするか足場とすることによって、話しは始まるわけだ。宗教についてもそうだが、芸術についてもこの点、少しも変りはない筈である。（道徳についてもそう云えるので、道徳なるものの認識論的意義を、かつて私はほんのわずか触れたことがある。）

芸術をば科学的認識によって推し計ることは以ての他の間違いだ、と抗議するものがいるとしたら、吾々は反問しなければならぬ。では何を規準にして芸術と科学との連関を見つけ出す心算か、それとも二つのものは全く無関係な絶縁された文化形象ででもあるのか、と。芸術を他の文化領域との内部的連関を絶って孤立させて取り扱うことを、最初から誤りだと吾々は考える。この誤りを犯さぬためには、要するに科学的認識を規準として、認識としての芸術を分析する他はない。芸術理論上のリアリズム（必ずしもスタイルとしてのリアリズムではない）とは、他でもない、この経緯を指して呼ぶ名である。

さて芸術一般がそうだとして、その内で特に文芸は、認識として或る一つの特権を持っている。特権というのは勿論科学的認識という規準から割り出した特権なのだ。と云うのは、文芸は云うまでもなく主に言語表象による芸術であり、その意味では概念を乗具とする芸術であるが、処が科学的認識こそ、言語表象乃至概念を乗具とする認識であった。そこで文芸は、他の芸術様式に較べて、科学に特別近い近親関係を有っているわけなのだ。文芸が認識である所以は、美術や音楽が認識であるよりも、より以上に、認識が一等組織的に発達したために認識原型の意義を有っている科学的認識に、本質的に接近している、と云うのである。

文芸が言語表象による芸術であることはよいとして、夫が概念を乗具とするとは受け取れないと云うかも知れないが、併し言葉によって云い表わされるものは、さし当り何であれ概念なのだ。ただ問題はその概念が如何なる表象機能を以て登場するかにあるのであって、文芸に於ては概念は文学的表象として機能するが、併し決してただの概念的表象としては働かない、という迄である。

かくてともかく文芸は一種の認識である、而も科学的認識と本質的に近親関係にある認識である、ということが判る。それが一種の認識であり又芸術の中でも特権ある認識であるが故に、文芸と科学との連関は極めて密接で、この連関を除いては文芸の文学的本質は遂に捉えることが出来ない。――ここに文芸学がまず認識論でなければならぬ理由がある。なぜなら、それは丁度、科学論がまず認識論でなければならぬと、全く平行することだからだ。

文芸学という観念は旧くからあったものではない。主と

して近代ドイツの文学史家の手によって造り上げられた概念であるように見える。（之まで存在する殆んど凡ての文芸学なるものは、ブルジョア文芸学であった。フランツ・シルレルはF・メーリンクから唯物論的文芸学の出発点を導こうとしている。）之は今の処大体に於て、文芸史論と大して別なものではないようだ。――だがこれが歴史記述又は歴史的要約であるからと云って、文芸の認識論でなかったということにはならぬ。文芸史論とは認識の歴史の論理的洗練のことだ。一体論理乃至論理学というものが歴史の結論以外の何ものでもない。価値の観点は歴史の事実が原則を結論する処に発見する、それが論理というものだ。認識の歴史的発展とそれから結果するこの論理的結論とを媒介するものが認識論というものであった。

処でこういう意味に於ける認識論、というよりも寧ろ論理学は、芸術に関しては今日まで多くは美学の名を以て呼ばれて来た。美学を形式的な美的情緒の問題に集中しようとするT・リップス風の偏極や、美学を美術乃至美術史に固有な因縁あるものとする日本帝大的習慣を別とすれば、（尤もこうした傾向はいずれもカントの「美」の観点――それは「崇高」の観念からさえ区別されたごく極限されたものである――に由来するので、本来意味のあることだが）、今日まで多くの美学は大半芸術の論理学とも云うべきものだった。H・テーヌの芸術の社会的考察も実は芸術的価値の問題をねらっていたわけで（少くとも「イギリス文学史」の序説はそうだ）ギュヨーによって一応その論理学としての目的が果された（ギュヨーは美的価値そのものが社会的な本質を有つと考える）。ただテーヌもギュヨーも、社会に於ける階級的対立が芸術価値に及ぼす関係を充分に見抜くことが出来なかった。処で之に反してフリーチェの「芸術社会学」はとに角階級対立を中心とした芸術の社会学であったが、これも実は当然なことながら芸術の論理学を目標にしていたわけで、この点批判的に展開されて、今日のサヴェートの芸術理論となっているわけだ。之が今日の芸術の認識論に相当するものである。そして、ヘーゲル（及びT・フィッシャー）の「美学」が正に芸術の認識論の名にも値するということは、多言を要しない。

芸術の認識論、それは芸術史から抽出された芸術の論理学とも云うべきものである。芸術の社会学から導き出された芸術の論理学も亦、ここに一致しなければならぬ筈のものである。つまり芸術の歴史的社会的発展構造の論理的結論が夫だ。――だが大切な点は、このことが、芸術の認識機能の分析を抽象抽出しそして更に夫を根抵におくのでなければ、不可能なのだ、ということである。つまり、芸術的認識に於ける模写機能の特性についての分析が、根抵におかれ得るように、分析を展開しなければならない。という点が今大切なのである。それがなければ、芸術史や芸術社会学や又芸術学ではあっても、また充分に芸術の認識論ではない。正当な意味での美学と呼ぶことも出来ないだろ

う。

さて処で、特に文芸に関する芸術の認識論、それが文芸学の最も重大な意義でなくてはならなかった。文芸学は単なる文芸史の展開やその経験的要約に止まってはならない、文芸史の原則の論理学的要約でなければならぬ。だがそれだけではなく、文芸的認識に於ける模写機能の特性についての分析が根抵におかれ得るように、その分析が進められるのでなければならぬ。文芸学がまず文芸の認識論でなければならぬというのは、この意味だ。「文学」という言葉もかかる認識論的なカテゴリーとして、初めて理論上の意義を有つものである。

文芸学を文芸の認識論と見る時、第一に問題になるのは、夫と科学に関する認識論との相互の連関だろう。或いは同じことだが、この広汎な意味での認識論に於ける、文芸学と科学論との関係だ。或いは同じく、文芸と科学との関係なのである。――従来認識論と云えば、殆んど凡て科学乃至理論に関するものに限定されていた。それは前にも云ったように、今日まで実際問題として見ても、科学特に自然科学の認識が最も組織的で単一義的で統一的な発展をして来たので、之が凡そ認識なるものの典型となっているからだ。それに、なぜ又科学特に自然科学がそういう特別に恵まれた条件を持てたかと云うと、全く、自然科学に最も特有である処の、実験と産業との直接関係という、この認識に於けるマテリアリズム乃至リアリズムのおかげなのだ。だが史的唯物論の成立によって、社会科学の認識が初めて自然科学の夫に平行した単一義性と統一性を有つようになった。そこで社会科学についての認識論が積極的に展開出来るようになったと共に、夫と自然科学に関する認識論との間に、一元的な統一が可能になったのである。従来のブルジョア認識論は単なる判断論理学の延長か、さもなくば精々自然科学の認識論か、そうでなければ専ら自然科学と社会（文化・精神・）科学とを二元論的にしか処理出来ない認識論であった。――処で今度は、この認識論が、唯物論的な文芸学の成長と一緒に、文芸に関する処にまで拡張されねばならぬ点へ来ている、と私は考える。

マルクス主義的認識論と雖も、今日まで、ブルジョア認識論と同じく、殆んど凡て科学乃至理論に就いての認識論に限定されていた。之はブルジョア認識論にとっては当然なことだったのである。なぜならブルジョア認識論は科学に関しても実践的な模写説は取らず、又ブルジョア文芸理論は模写説としてのリアリズムを取るための必然的な論拠を有っていなかった。従って文芸理論と所謂認識論との間にはブルジョア的理論にして見れば、何等、思いつき以外の共通の地盤は見当らなかったわけだ。処がこの点、現代唯物論は全く条件を異にしている。現代唯物論による認識論は、首尾一貫して模写反映の理論に立脚する。処が現代唯物論による文芸理論も亦同じく首尾一貫して模写反映の理論だ。それが文芸学の哲学的カテゴリーとしての（前にも

云ったようにスタイルとしてではない）リアリズムというものだ。（ミールスキー「リアリズム」——熊沢復六訳——を見よ。）文芸は世界の・時代の・自然の・社会の・反映だ。文学は鏡である（レーニン「ロシア革命の鏡としてのレフ・トルストイ」を見よ。）だからして唯物論によって初めて、科学の認識論が文芸の「認識論」にまで拡大延長され得る条件が発生したのである。文学なる概念もこの認識論に於て初めて、科学的カテゴリーとなることが出来る。

而も一旦この条件が発生した以上、もはや吾々は認識論を科学だけに就いてのものとして限定しておくことを許されないだろう。認識論は文芸に就いても延長展開されなければならぬ。そうしなければ文芸が認識である所以も、文芸の認識が本来の意味でのリアリズムである所以も、そうした文学の根本的な規定を、理解する緒口は、全くなかった筈だからである。——でもし仮に、例えばリアリズムという問題が今後の文芸学の何より重大な根本問題であるとしたなら、（私は夫を疑わないのだが）、文芸学はまず第一に、みずからが認識論である点を、実質的に明らかにせざるを得ないだろう。そしてその時、問題はおのずから、文芸と科学との認識論上の連関へと運ばれて行くに相違ないのだ。——だが今日の唯物論的文芸学は、この方向ではまだそこまで話しを進めていないのではないかと、私かに考える。

（文芸と科学との認識論上の関係について、（その間に道徳がはさまった）私は以前少しばかり分析を試みて見たが、今ここに展開し直すだけに新しく進んだものをまだ持ち合わさないから、さし控える。なお又、文芸に限らず芸術一般について、認識論的課題を押し拡げることは、私には当分出来そうもないことである。すでに宗教についての認識論的検討は多くの人によって基礎をおかれているのだが。）

（一九三七年一月「唯物論研究」）

「日本文芸学」批判

本間唯一

一

岡崎義恵教授の「日本文芸学」の説が、学界に取り上げられ、問題にされる様になってから、岡崎教授自身も云っているように（「改造」三六年十一月号）「今日では最早こ

の日本文芸学の中に、数種の著しい学派を認める事が出来る程になって居」る。「日本文芸学」説内に於ける学派の簇生という事に就いては、聊か、岡崎教授の思い過ごしがある様に思われるが、併しとに角、「日本文芸学」説を巡っての何らかの論議が俄然、国文学界の中に捲き起されたことは事実である。私は先に（第一章）「日本文芸学」の提唱は、国文学界に於ける研究方法のファッショ的姿態であると云った。事実、文献を漁って見ると、「日本文芸学」（必ずしも「文芸学」とは云わないが）の説は、石山徹郎、風巻景次郎、高木市之助等の諸氏によって、昭和四五年頃から云われていたのである。にも拘らず、それ等の説が岡崎教授が得た程の人気はおろか、学界の中に今日程の渦を捲き起すものとはなり得なかったのである。この事情の中に、現在問題にされている「日本文芸学」の性格が、或る程度考え合せられるのではないかと思うのである。即ち、何故、現在、学界ではこれをかくの如く魅力ある（？）テーマとして取り上げたのか、それから又、岡崎教授の「日本文芸学」にして、何故かくの如く現在問題にされたのか、之等の問いに答えることが、謂う所の「日本文芸学」の本体を明かにするものとなるだろう。それには先ず従来の国文学者に依る「文芸学」論議について一瞥しなければならない。

先にも見た様に石山徹郎氏は、昭和四年に「文芸学概説」なる著書を公けにしている。だが併し之は、国文学者の「文芸学」への関心というより以上に「日本文芸学」への説としての内容を持っていない。これは一般に、文芸を研究する学問的科学的立場を昂揚する為の問題の提案であった。尤も、その中には、国文学者としての教養を多分に含むものではあったのだが……。その後昭和六年になって、風巻景次郎氏は「日本文芸学の発生」なる論文を発表（「国文学誌」）している。従来の国文学界の文献学的・印象主義的・研究、批評に、不満を述べ、歴史的認識の方法を強調して、国文学の学的・知的・研究の必要を述べ、その点に「日本文芸学」の発生の要点を認めている。次いで、高木市之助氏、氏は「国語と国文学」昭和七年一月号に、先ず「日本文芸学」の語義の詮索から論を進め、「日本文芸学」を「日本――文芸学」と理解し、「日本文芸」よりも、「文芸学」に重点をおいて、「日本文芸学は反覆縷説したように、要するに一の文芸学である。随って、よしんばそれが他のどの文芸学よりも、より多く日本文学に関心を持つとしても、猶且つ、これが当の目的は先ず文学自体でなければならない。なんとなれば、もしそうでなくなるならば、その学は文芸学でなくなるからである。国文学と日本文芸学とはかくの如く対立的関係に解釈する事が可能である。」（傍丸、原文）と云っている。これから見ると、氏の「日本文芸学」は「国文学」と対立するものであり、日本文芸を対象とした「文芸学」の謂いに他ならないものであった。

以上に見た様に、従来の「日本文芸学」論議は、同様に「国文学」的方法のアンチテーゼとして問題を発展せしめているのではあったが、未だ必ずしも、日本文芸の「日本的なるもの」への反省と重点とをおいていなかったものであった。それは、「日本的」範疇に拘泥する事なく、とに角にも、国文学研究の新方法、方向への模索という一点から問題が論じられていた。之等の論者は等しく、国文学への学的反省、研究の科学性の獲得という方向に説を立てていたのである。風巻氏の言によると、我が国の国文学は、震災を契機として活況を呈して来たという事である。氏はその理由として「大正時代に於ける指導的な文化層が全体として保守的に推し移って来て居った結果、芸術・思想・学術の全分野にわたって、古典文化への共感又は憧憬が隠微の裡に醞醸されて居ったのであって、大震災のため多くの文化的遺産が灰燼に帰した結果、それが刺戟の一つとなって自国文化への愛着が急激に表面化して来たという に外ならぬのである。」(「国語と国文学」一九三六年四月号所載、「新古今集研究の方法的特性」)と云っている。成程、震災の翌年大正十三年五月には雑誌「国語と国文学」が創刊され、国文学界の専門的雑誌として刊行されて居り、十五年十一月には、新潮社から「日本文学講座」の第一巻が出ている。かかる雑誌の刊行その他は、国文学界の活況と共に、他方国文学の対一般との連関ということも当然考え合わされることである。国文学が、その限られた範囲からはみ出して、「日本文学」として一般の批判の前に公開されたものと一応考えてもいいだろう。だが、公開された国文学は、従来の儘の研究方法で満足したかどうか。第一、「公開」ということそれ自体が、公開するに至った程の活況を内に持った国文学界に、何らかの方法上の豊富さを予想せしめることであったし、「公開」によっての対一般との連関ということの上に、已に何らかの国文学特殊の存在に対する反対的なものを見出しはしないかと思われるのである。方法論上の問題が、それ以後屢々繰り返されたということは故なしとしないのである。風巻氏は、震災を契機としての国文学界の活況を、古典文化への共感憧憬の念が文化的遺産の灰燼に帰した現実から、鬱勃として強められた結果と見ているが、この言葉を更に言い換えて見ると、古典文化への共感、憧憬ということが所謂「国文学」の仕事であり、「国文学」は古典憧憬的教養の中に成立する学ということを裏書きしている様である。国文学がもしその様なものであったとすれば、その籬の外にある一般への共感、その連関から来る方法上の新見解は、多かれ少なかれの非「国文学」性を持っているだろうことは想像に難くないのである。だから、折角、「文芸学」という見解を立てても、それが「国文学」的な方法としては顧られなかった傾向が見えるのである。高木氏は、「国文学」と「文芸学」とを対立的に見、「日本文芸学」をその中間的な存在として区別している。その限り、「国文学」

者」を以って自任している者の、日本文学を文芸学的に研究するという事は、凡そ想像し難いことであったろう。

けれども、その研究方法に、学問性、知性、科学性を要求したという事は、震災後、我が国資本主義進展の上に於ける社会的動向の何らかの刺戟に依ったものであるのだが、それはそれとして充分注意していいことであろう。

国文学界の活況は、一面に於て、新進学徒をして、その科学性への途を希求せしめたと共に、他面に於て「古代の素朴な精神の中に人間の真精神を見出し、日本人の真の相を見出して、それに復ろうとする精神」（藤村作、「日本文学研究の真意義」＝「日本文学講座」第一巻）を強調する層が存在していたのである。そして、学界の主流が、前者にあったのではなくして後者にあり、それが、活況を呈したという事は、震災後、漸く帝国主義的様相を鞏固にして来た我が国アカデミーの姿態として、充分注意しなければならない所である。と同時に、我が国に於けるプロレタリア文学運動がこの震災を前後として、「種蒔く人」（大正十年十月創刊）、「文芸戦線」（大正十三年六月創刊）などの出現を見、已に、平林、青野等による科学的文学理論が注意を惹いていたことも忘れてはならない。日本に於ける文化運動の階級的対立の深化は、震災後益々顕著なものになって来た。国文学の新進学徒が、その研究に科学性を要望したことも故なしとしないのである。国文学者による「日本文芸学」の提唱は、かかる雰囲気の中に生れている。が併し、先に見た様に、それはまだ「日本的なるもの」に拘泥しない、「国文学」と対立するものか、乃至「国文学」と「文芸学」との中間に位するものとしてであった。云う迄もなく、古典文化への憧憬的教養が「国文学」の世界をなすものであるとすれば、「文芸学」は、到底「国文学」と同列に位することは出来ないだろう。日本文学を対象としての、文学の科学的研究、それは遂に、国文学者の問題とはなり得なかったのである。何故なら、国文学者は、「国文学に親しむことに由って、常に日本国民たる生命を新たにして行く」（藤村作、同上書）ことであったのであるし、日本を離れてはその方法はないのである。だから折角の科学への関心も、実際には、彼等の従来の方法を如何に科学的（？）に（と云うのは、時代向きにと云うことだ）扮装しようかと云うことに過ぎなかったのである。文献学、原典批評、その他に、如何にかかる努力がなされたことか。が、それはとも角として、従来の「日本文芸学」の説はかくの如くして、現在のそれの様に学界の問題たり得なかったのである。それが現在かくの如く問題にされるということはどうしたことか。しかも、国文学界のみならず、或る層の文壇者迄、それに共鳴しているということはどうしたことか。岡崎教授は、十年来、「日本文芸学」の問題を頭においていたという。その十年の結晶が、「日本文芸学」の一書となって発表されたのである。教授の十年来の無言の思索の往来が、「国文学」と「文芸学」との結

合をもたらしたというのである。恐らく、この結合は、十年来の思索の結果でなく、最初からそうなっていたものだろう。だが確信を以って公けにし得たのは、実に十年後の今日だったのであったのだろう。
しからば教授にこの確信を抱かせたものは何か。我々は十年後の今日の社会的動きに徒らに目を閉じて、この現象を見ることは出来ない。

二

「日本文芸学」論議が進化するにつれて、岡崎教授をして、「数種の著しい学派を認めることが出来る」と云わしめた現象が発生している。だが、教授のかかる自負にも拘らず、それは決して「日本文芸学」の中に於ける諸学派の発生ではない。成程、教授の「日本文芸学」の提唱から、再び、自己の方法の科学的（？）反省という事は、各人それ相応に行ったことは、事実である。が併し、まだ必ずしも、自己の方法を捨てて、「日本文芸学」の傘下に統一されたとは云われない。只一つ、こういうことは云われる。岡崎教授の「日本文芸学」の提唱から、「日本的なるもの」を前面に出し、その各自の方法の上に、日本精神の確立ということを色彩濃く意識し出しているということである。恰かも、謂う所の科学性とは、「日本的なるもの」であるかの様に。例えば、原典批評論者西下経一氏は　原典批評と日本文芸学とのキッパリした対立、抉別を論じ乍ら、尚「日本文芸学」提出の功績として「日本精神」の高称を数え上げている。尤も、氏にあっては、真の「日本精神」の掘り下げ、宣揚は、却って文献学的・原典批評的立場に於てこそ出来るものであるとしているのではあるのだが（「文学」三六年二月号、「国語と国文学」同年四月号）。して見ると、岡崎教授の「諸学派」と云うのは、「文芸学」的方法による「諸学派」ではなくして、「日本的なるもの」によって結ばれた諸学派であることになりはしないか。尤も、文芸学は、文献学や原典批評や、それらのものと並立的に対立する単独の学ではなく、それらを補助科学とする複合体であるから、文献学者の説も、解釈学者の説も、夫々に文芸学の一流派と見ることが出来るだろう。が、そう見るとすれば、尚更「日本文芸学」から見る「諸学派」は益々この「日本的なるもの」の一点によって補助科学たり得る資格を持つものと考えられるのである。
岡崎教授の十年来の思索の結果得た科学は「日本精神」と云うことにあったのである。教授は、「国文学」と「文芸学」の方法の結合を、「日本精神」の中に見出そうとするのである。
「我々は学術体系の確保の為に、研究対象としての日本文芸というものの持つ意味を、とにかく考慮する事なしには出立すべからざるものである。そしてその第一歩として先ず、文芸の概念を包括的な位置に置き、日本の概念を其中

に収めた。」＊ と云う教授の言葉の中に、遺憾なく、その事実が物語られているではないか。

＊岡崎義恵「日本文学」三八頁。

教授は先ず、高木市之助氏が「日本——文芸学」として定義づけた「日本文芸学」を「日本文芸―学」とおきかえて問題を発展させる。即ち「文芸学」が問題なのではなくしてより一層「日本文芸」が問題なのである。更に文芸を吟味し、「文芸は文芸としての意味の見出される所にのみ存するのである」とし、そこから文芸性を引き出し、「文芸作品としての認識は文芸性の認識のない所には無いのである」と云い、続いて「たとえ文芸性の認識はあっても、何等かの意味で日本的という点の認識が存するのでなければ、日本文芸という対象は摑めない」（「日本文芸学」三七頁）と云うのである。明かに、以上のことは、その研究対象たる「日本文芸」は、先ず「日本的という点の認識」を強要するものでなければならなかった。更に進んで教授は、「日本文芸という一の統一体は、文芸様式の一特殊相と考うべきものである。それは其限りにおいては、分割すべからざる或る統一体であるに相違ない」（同上書、五五頁）とし、さて文芸様式について「様式とは或対象が、その内部の構成要素において一定の共通な性質を持ち、同時にその共通性が、他の対象に対しては、其対象の特殊性を示すものである事を意味する。外に向っては個性として内に対しては一般性として見らるべき或性質が様式である。」（同上書、四七頁）それ故に、「文芸現象としての日本は実に文芸の一様式である」（同上書、五四頁傍点著者）となり、「古来日本文芸の上に現われた諸種の風体を統制して、一の日本風というものを見ることが出来るならば、それこそ実に文芸学的に認識された日本様式であると云い得る」（同上書、五七頁）とし、更に「この風又は体の生まれる根源的な力として、道という如きものを考え、これを日本的な文芸意志であるとするならば、これこそ前に述べた文芸とは何かの問題を、日本的形態において捉え得たことになるであろう」（同上書、同上頁）と述べているのである。之を要するに、岡崎教授の「日本文芸学」は、「日本文芸」の文芸性を究めることであって、その方法は、様式学であり、その両者ともに、「日本的なるもの」を除外しては考えられないものであったのである。

教授は、文芸学を、理論的（体系的）なものと歴史的なものとの統一として理解している。だがこの両者の統一は、教授にあっては、「文芸性」＝「日本的なるもの」の中に於てのみ可能であったのであり、だから、この両者の統一を要請する文芸学は、教授にあっては、必然的に「日本的なるもの」であらざるを得なかったのである。教授の「文芸学」の究極は、日本文学の文芸性を、体系的に意味づけて行くことにあるのだが、この全く、観念的な形而上学的な方法が、歴史という概念を振り返って見る時、同様

にその歴史は、「日本」という範疇に、或いは「類型」という教授自身の思惟に上った様式の中に、全く機械的に考え合わされたそれである。

教授は、文芸に於ける一類型を考える。その類型は民族風土国家と無縁なものでない。だが、民族という丈けではまだ歴史的範疇ではないと教授は考える。それが歴史的性格を帯びる為には、日本民族という「日本」なる規定が入る時に始めて可能であるとする。何故なら、教授は「外に向っては個性として内に対しては一般性と見るべき或性質」が、様式であり、それが本質に於て類型なるものであると考えているのであり、かかる類型は、民族一般、文芸一般では解決がつかない。これが「歴史的個性化的意義」を持つ為には、どうしても「日本」なる規定性を持たねばならないというのである。已に教授は、「文芸現象としての日本は実に様式である」と断わっている。そして今や、教授の予想する歴史への反省は、再び「日本」なるものに帰せしめざるを得ないのである。ここに於て、従来の国文学者が、「国文学」と「文芸学」と合一する能わずとしたものが、氏によって見事に(?)結合せしめられたのである。即ち、屢々繰り返した様に、「日本的なるもの」の強調によって、この手品が完了された訳なのだ。

併し乍ら、かかる「日本的なるもの」への結合は、岡崎教授の方法の非科学性を忌憚なく暴露しているし、氏の予想する「文芸学」とは殆んど一致しないものであり、却ってそれは従来の儘の「国文学」の方法だったのである。文芸研究の科学性を要望してい乍ら、それは却って科学への閉め出しを用意しているものである。教授はその方法として、「風又は体の生まれる根源的な力として、道という如きものを考え、これを日本的な文芸意志であるとするならば、これこそ前に述べた文芸とは何かの問題を、日本的形態において捉え得た事ともなるであろう。」と述べ、道という全く神秘的な言葉を突如として、持ち出しているのである。教授は勿体ぶって風、体という。何故之を様式論として提出しないのか。教授にあっては、様式論よりも、「風体論」の方が日本的な文芸研究の道に叶っているのかも知れない。この教授の「日本的な文芸意志」=「道」説は、維神の自然の道を説いた国学の風貌に髣髴としているではないか。そして国学の進展が文献学であったとすれば、*岡崎式「文芸学」も、「国文学」から、歩を一歩進め得たものと見ることは早計なことと云わねばならないだろう。だからこそ、岡崎教授による「日本文芸学」の提唱は、充分に「国文学」の問題となり得たし、同時に、彼等の各方法内に於てその方法の再整備という事に刺戟を与え、この提唱から受けつぎ得て役立て得たものは、他ならぬ「日本的なるもの」への反省だったのである。国文学者の岡崎批判によると、「日本文芸学」は何かしら新しい方法の提唱の様に思われるが、併し別に「日本文芸学」でなくっても、従来の儘のものであってもよかったのではなかったかという

風にして提議されている。(例、藤田徳太郎「日本文芸学への考察」—「短歌研究」三六年十一月、その他) 事実、それに相異はなかったのである。

＊芳賀矢一「日本文献学」参照。

岡崎教授が十年来思索し来ったものは、実にこの「日本的なるもの」であった。同様にこの「日本的なるもの」への反省さしめたものが、日本教授をして発表の確信を得を強要せしめる社会的現実だったのである。文学博士藤村作氏は、三六年六月創刊の「解釈と鑑賞」の冒頭、「われらの主張」に曰く、「われわれは、われらの君国に奉ずる任務は、日本文学の研究、普及を措いてはないとするものである。われらの広く日本精神を知らしめんとする運動は、敢えて咽喉を涸らして叫ぼうとするのではない。日本文学をして、自ら日本精神を語らしめ、その優美雅馴なる香と、芳醇甘美なる味とに依って、大方をして自ら把握せしめようとするのである」と。これを以って国文学界全般の風潮とは云わない。が併し、国文学界のみに限らない全般を通じての風潮の一に「日本的なるもの」への反省が強固に瀰漫していることは、改めて説明する迄もないことだろう。さてこそ岡崎的「日本文芸学」の存在の現在的意義があったのである。

三

岡崎教授の「文芸学」は、日本民族＊と日本風土と、日本国家と、凡そ「日本」なるものを離れては成立し得ない「文芸学」であった。この実際を徹かないで、教授の説から、何らか誠らしい「文芸学」的意味を汲みとろうとしたり、或いは、その批判に於て、之を尤もらしい「文芸学」として立ち向おうとしたりすることは、馬鹿気た話と云わねばならない。岡崎的「日本文芸学」は、その言葉の如何に拘らず、まともな「文芸学」ではなかったのである。凡そ文芸の科学的研究に於て、「日本文芸学」とか、「××文芸学」とか規定して、それに独自な方法をもたせること、それ自体が、問題なのである。科学に於ける民族主義の強要は、それ自体ファッショ的色彩を帯びているものだ。そこに真の科学的精神が発揚し得ないのは言う迄もないことであろう。

＊岡崎教授は、「文芸学と文芸鑑賞」(「改造」三六年十一月) に於て、公共圏という様なものを持ち出し、「若し『日本文芸学』というものの成立する根拠を考えるならば、『日本文芸』という一の民族的文芸公共圏の上に立つ或る文芸の層を認めるのでなければならない。」と云っている。

岡崎的「日本文芸学」の真意は、「国文学」の方法のファッショ的変形であり、尚進んでは、「国文学」の各方法の「日本主義」的統制・整備であり、それ以上の何もので

もなかったのである。この事実を無視して、あれこれその言葉の枝葉に拘泥して詮索することは、ついにその批判も又徹底することを得ず、却って、「日本的なるもの」の雰囲気に包まれて了う結果に陥るだろう。そして、方法の如何より、かかる雰囲気への吸収こそが、実に「日本文芸学」の思う壺だったのである。我々は、熊谷孝その他二氏による、勝れた「日本文芸学」批判を持っている。(「文学」三六年九月）だが惜しい哉、氏等はこの点の排撃に目を冥っている。それ故にこそ、岡崎教授は鑑賞の問題を再びひっさげて、その所論の展開を行っているのである(「改造」三六年十一月)。鑑賞主義の排撃は行い得ても、日本主義と鑑賞との連繋の点を衝かない限り、岡崎教授は決して、その独自の「文芸学」を引き込めないであろう。却って、マルクス主義崩れと同一視されて抹殺の憂目を見るのが落ちである。と同時に、そう見られても仕様のない程の公式主義的論法が、氏等の言説に浮き上っているのである。＊それは他ならぬ、「日本文芸学」の本質の見定めの不徹底より来ているのである。

＊鑑賞主義が排撃されると同時に、歴史主義、客観主義も排斥されねばならない。鑑賞主義と作品の正当な鑑賞という事との混同も、同様に批判されねばならないだろう。

見定めの不徹底は、反面に於て、岡崎教授の美意識についてとか、謂う所の「日本的美」についての所説への留意とかに意義を認めようとするものを、発生せしめている。だが、之は深刻そうであって、問題の「日本文芸学」批判には、案外皮相でペダンなものを持っているのである。この見解については、何よりも先に「日本文芸学」が、依然として「国文学」の延長であったことを知ればそれでいいので、文芸学と岡崎的美学とが何らかの連関を持っていると考えるのは、同様に「日本文芸学」の魔術にかかった徒輩の寝言だったのだ。

最後に石山徹郎氏は、「国語と国文学」三六年十二月号に「文芸学と日本文芸学」なる一文を寄せている。この嘗ての「文芸学」提唱者が、岡崎的「日本文芸学」を如何に見ているかは興味がある。氏は「日本文芸学に、国文学（日本の文芸を研究する学）の領域において、あまり大きな役割を期待し得ない」と云い、「文芸学」と「国文学」との境界線を認めている。その上で、「日本文芸学」を批判しているのであるが、その批判の限りでは、肯づかせるものを多く持っている。だが、併し翻って、氏の「文芸学」なる観念を見る時、先に（第二章）見たように、「それは文芸史とは根本的にその性質を異にするものである」とし、「大体それは、文芸の特性・機能・様式というようなことを考察の中心とし、それらに関する知識を整理することを、その主たる職分とすると考えられる」と云い、「その対象は、数学や物理学の対象が超現実的なるが如く、超現実的なものである」と論じ、文芸学から歴史を除き、対

象を極めて抽象的なものの中においている。この見解は、已に氏の「文芸学概説」にも見えたものであり、なお高木市之助氏の見解も之と略々同様である。云う迄もなく、ここには数学や物理学の対象を超現実的と思惟せしめたと同様な「文芸学」への不理解が暴露されている。「文芸学」に於ける歴史と理論との弁証法的統一が理解に上り得たものであったら、氏の「日本文芸学」批判は、「国文学」との限界線だけではなしに、もっと熾烈に、徹底したものとなったであろう。

以上は、岡崎批判の一二の例であるが、その他の国文学者によってなされる批判者は大部分、方法の批判と同時に自己の方法を「日本的」線に迄進めて来ている。「日本文芸学」の批判は、まことにこの現象に迄、そのメスを進めて行かねばならなかったのである。即ち、その説自体よりも寧ろその説を発生せしめたその当の社会的物質的土台を窮める処迄進まなければならないのである。かかる根底から出発して初めて正しい批判が可能になるだろうことは、ここに断る迄もないことだろう。

岡崎教授の「日本文芸学」の正体は、日本文学者としての教授が、十年来、その間屢々研究の科学性を標榜して提唱されたにも拘らず、無言で過して来た思索の結晶として、提唱され、「日本」を離しては、その成立を見出し得ない摩訶不思議な「文芸学」だったのである。それは一面、文芸科学の「日本」への従属の強制である。実に、「日本文芸学」の出現こそは、「国文学」の方法の「日本主義的」統制・整備形態であったのだ。我々はこの現象に無意味に追随してはならないのである。

（一九三七年一月「唯物論研究」）

日本国民文学の確立

（読者層編成替えの上に現れた明治文学発展の経路と、文学大衆化のキソとしての国語・国字の問題）

高倉テル

一

尾崎紅葉の「金色夜叉」が読売新聞に現れたのが明治三十一年、日清戦争の後始末がよーやく着いて、日本の経済界が未曽有の活気に満ち満ちていた時だ。その同じ年に、恐らくわ日本の小説で最も広く読まれたであろー徳富蘆花の「不如帰」が国民新聞に載りはじめているのわ、非常に興味ある事実だ。

当時、硯友社わ日本文壇の中心であった。その硯友社の事実上の主宰者である紅葉が畢世の努力お挙げた「金色夜

叉」わ、誰の目からも当時の代表的な芸術品として認められた。よしんば、樗牛のよーに、作品としてこれお一葉の諸作に劣ると云った批評家があったにしたところで、結局わ、それも、「金色夜叉」お代表的な芸術品と見たからこその不満であった。ところが、一方、「不如帰」になると、これわ一様に低級な通俗小説と見なして、一人としてまじめに取りあげた批評家わない。しかも、そーゆう見方わ今に至るまでずっと続いていて、明治大正の文学史の著者たちも、ぜんぶ同様の取り扱い方おやっている。

一見、これわ非常に奇妙な現象のよーに見える。「金色夜叉」が芸術小説で「不如帰」が通俗小説だとゆうよーな考え方わ、今から見れば、およそ意味のないものだ。題からして、一方わ、金ゆえ女に見かえられて高利貸の手代になったから「金色夜叉」であり、一方わ、泣いて血お吐くから「ほととぎす」だとゆうよーに、内容からいえば、似たりよったりのものだ。カルタ会で三百円のダイヤモンドに驚く場面のよーな、あれほど低級な描写わ、反って「ほととぎす」にもない。それに、一つわさも芸術品であるよーに有りがたがられ、一つわ全く芸術の圏外にあるよーに考えられた、その原因わ一体どこにあるのだろーか？

ぼくわこれお次のよーに考える。

この二つの作品がかくも大きな芸術的差異お持っているよーに考えられた根本の原因わ、決して作品の内容から来るものでなく、実わ二つの作品のそれぞれの読者層の差から来たものであった。「金色夜叉」の読者わ、江戸末期の文学からずっと系統お引いた、主として都市の、伝統的な読者が中心であった。「ほととぎす」の読者わ、それらと全然別個に、当時の社会状勢から新しく進出してきた、新興の読者層であった。「金色夜叉」の読者わ、近松、西鶴お理解し、仮名垣魯文、春のやおぼろお読み、紅葉の戯作者的要素お十分に玩味することのできる、つまり文学のクロートであった。「ほととぎす」の読者わ、近松も、西鶴も、魯文も、春のやも知らず、知っても更にその味が分らなかった。したがって、それわ、一ぱんに文学のシロートとして認められた。この読者層の差がすぐに作品の芸術的価値の差として認められたものなのだ。一つの例おあげて見よー。「ほととぎす」が最も広く読まれたのわ工女のあいだであったとゆう事実がある。

現在、繊維工業わ日本資本主義の中軸となっているものだ。日本総輸出額の七割以上が毎年それらの製品によって占められている。その繊維工業が現在の位地に達するための発展の最大のモメントとなったものが実に日清戦争だ。殊に紡績業わ、明治二十八年から九年えかけて、その製品の輸出が一躍七倍するとゆう驚異的な発展お遂げている。その結果わ、必然的に工女の驚くべき年次的増加とゆう現象お現した。

今でもそーであるとーり、工女は殆ど例外なく農村の出身だ。農村婦人として、彼女たちわ、それまで全然文学に

参加することが出来なかった。それが今や、工場労働者となることによって、初めて文学読者層に進出した。彼女たちわ、直接江戸文学から系統お引いた明治初期の文学についてわ、何の知識も持っていない。仮名垣魯文や、成島柳北や、春のやおぼろや、二葉亭四迷やわ、その名さえ聞いたことがなかったに相違ない。たまたま作品を読んでみても、さらに面白みが理解できなかった。

そーゆう彼女たちの前えトツゼン現れたものが「ほととぎす」であった。忽ちそれわ不思議な魅力おもってスッカリ彼女たちの心お拘えてしまった。身も世もあられぬよーに彼女たちの胸おしめつけ、実際に声おあげてドウコクさせた。彼女たちにとって、それわ一つの奇蹟だったに相違ない。生れて初めて彼女たちわ、かくも文学の作品から心お打たれ動かされるものだとゆう、実に不思議な事実お経験した。こーして、彼女たちわまるきり夢中になってこの作品に同化し、「浪さん」の悲劇のために惜しむところなく涙お流したものである。

ここで「ほととぎす」のテーマについて考えて見る必要がある。それわきわめて単純なものだ。たがいに愛しあっている若い上流の夫婦があった。美しくて弱い妻わ、古風でガンコな姑のために、いじらしい苦労おしている。そのうえに、彼女わ肺病にかかる、そのために、海軍軍人である夫の出征中に離縁になり、そして遂に血お吐いて死ぬ。

「ほととぎす」の悲劇が生れるための直接の原因となっているものが二つある。一つわ、浪子お、あれほど愛しあっている夫の手からムジヒに引きわける、封建的な家族制度であり、他の一つが、浪子の命お奪う肺病だ。

日本資本主義わ、封建制おキソとして、その土壌のうえに成長した、特殊な資本主義だ。したがって、日本の社会にわ、今なお非常に多く封建制のカスが残っている。その代表的なものが農村だ。日本の農民わ今もって封建制そのままの土地制度から全く解放されていない。その固いソクバクの上に依然としてほそぼそと「零細農経営」とゆう、あの奇妙な、世界でも最も古い農業生産お続けている。したがって、そこほど多く封建制からの野蛮な遺風の残っている所わどこにもない。工女わその農村から出た、そして、その封建的なシッポおそのままに引いて近代マニュファクチュア的工場にはいった。繊維工場が日本現在のあらゆる工場のなかでも最も多く封建的な要素お保存している特殊な工場であるのわ、実にこれが為である。監禁にちかい寄宿舎制度、今なお年季半季の徭役制にちかい賃金の支払法、製糸工女の場合のザンコクな賞罰制、それらわ世界的に云っても極めて類例の少いものだ。殊に、紡績工女の場合の勤続平均年限わずかに一年半とゆう統計わ、彼女たちがそこでどーゆう待遇お受けているかとゆう事実お何より雄弁に語っている。

肺病わこの繊維工場の発展お重要なひとつの契機として全国的に広がった病気だ。それまで殆ど肺病の名さえ聞い

たことのなかった辺鄙の農漁村にまで、工場からいまわしい胸の病お抱いて帰って血おはいて倒れる工女がヒンピンと現れだした。肺病とゆう名わ、それお聞いただけで、彼女たちおセンリツさせるに十分であったが、それだけに、そのなかにわ、彼女たちにとって、一種特別に清新な魅力がひそんでいた。

ひっきょー、「ほととぎす」の悲劇の要素わすぐそのままに読者である彼女たち自身の悲劇の要素だった。しかも、そーゆう悲劇わ、彼女たちとわ天と地とほど違っている、貴族の、しかも絶世の美人の場合として描かれている。普通ならば、夢にも共通した点お見いだすことのできない、女主人公の地位え、こーして初めてヒシヒシと自分自身お引きよせることができ、したがって、彼女たち自身の悲劇が、実は彼女たちの社会上の地位から来るものであるとゆう事実お全然わすれ、あたかもそれが社会全体の人々の悲劇の原因ででもあるよーな、甘美な錯覚のうちに溺れこんで、酔ったよーになってただ不幸な女主人公と一緒に泣き悲しんだものである。

二

次に「金色夜叉」の場合お考えて見よー。これわ内容もしごく簡単なものだ。

やはり互いに愛しあっている若い男女があって、ほとんど結婚のまぎわになっている。そこえ突然ひとりのブルジョワが現れる。女も女の家庭も急にそのほーえ傾いて、学生である男わ捨てられる。失恋から絶望の極に達した男わ、学業も将来の社会的地位もすべて擲って、高利貸の手代になる。

第一に、主人公が官立の学校の学生である点に注意する必要がある。そして、それが失恋のけっか学業も未来の社会的位地もすべてホーテキするとゆう所に、さらに大きな意味がある。この作品の書かれたのが、学校お出れば必ず社会の支配的な位地につけるとゆう時代であり、なかでも官立学校とゆうものが社会一般から特別に尊敬の目おもって見られていたとゆう事実、及び、この作が概してそーゆう当時の支配層のあいだに読まれ歓迎されたものだとゆうことお、いかにも明瞭に知ることができる。同時に、それらの読者が江戸文学からの正しい伝統おもつ読者であって、新興の「ほととぎす」の読者層と明かに対立お持つものである点に、さらに重要な意義がある。「ほととぎす」に「れっきとした士族の出身」とゆう言葉が何度もくり返されているのわ、反ってその読者の多くが士族でなかったことお証明するものだが、この作に、

「亡き人常に言いけるわ、苟くも侍の家に生れながら、何の面目あって我子貫一をも人に侮すべきや、彼は学士となして、願わくば再び四民の上に立たしめん」

とあるのわ、当時まだ日本の資本主義的発達がきわめて

若く、「大学校」お卒業して「官員」になり「四民の上に立つ」者わ依然としてほとんど「士族」であって、資本主義的支配層の地位にある者が封建的支配層からそのままに受けつがれたものである、その不自然な痕跡がロコツにここに現れている。

坪内逍遥の「書生気質」が「文学士春のやおぼろ作」と「文学士」の肩書おつけたことがこの作の社会的に大きなセンセーションお起す重要な原因であったが、「学士」の士が「士族」の士であるよーに、この「文学士」のなかにも多分に「士族」の要素がふくまれている。

文学の作品わいかなる場合でも作者と読者との暗黙の握手のうえに成りたつものだ。だから、読者の質が作品の内容お決定する重要な役目お果す。それわ「金色夜叉」と「ほととぎす」の場合にもはっきり現れている。

「ほととぎす」の悲劇の原因となっている、封建的家族制でも、肺病でも、これわ当時の社会としてほとんど人為的に避けることのできない事柄だ。ところが、「金色夜叉」の場合わ、まるで違う。もし主人公に対する女主人公の愛さえ揺がなければ、「金色夜叉」の悲劇わ全然おこらない。つまり、この作の基調となっているものわ、個人の心理だ。「ほととぎす」とわまるで違う、個人主義的な要素と、したがって手法としての心理主義がこの作にある。個人主義わ資本主義社会の支配的な観念だ。そして、その頂点に達したものが自然主義文学だ。当時の日本の社会の資本主義的発達がすでにこの作にはっきりイデオロギー的な影響お与え、したがって、ある程度の自然主義的要素お持たせたとゆうこと、及び、この作がそーゆう当時の社会の支配的な位地にあった人々の文学であったとゆう事実お、ここに明かに見ることができる。

日本で最初に現れた自然主義的な作品わ二葉亭の「浮雲」だ。これが明治二十年に出たとゆうことわ、実に驚くべき事実だ。だが、二葉亭に「浮雲」お書かせたものわ、当時の日本の社会の発展よりも、主として外国文学の影響であった。だから、文学としてわ最も早くヨーロッパの先進資本主義文学に追い迫ったものであったにもかかわらず、未だ日本文学の主流となることができなかった。その根本の原因となったものわ、むろん当時の社会の底に根づよく横たわっていた封建的要素であるが、その直接の現れとしてわ、当時の読者層が主として「士族的」な封建身分層のうえに立てられたとゆう点にある。だから、当時の文学の主流わ、依然として、封建文学からのシッポお長く引いた、春のやや硯友社の作品であった。「金色夜叉」がすでに個人主義的な、したがって心理主義的な要素お重要なモメントとしているにもかかわらず、ついに自然主義的なものえ高く追い迫ることのできなかった原因わ、これらの「士族的」な読者層の封建的なイデオロギーに強く引きとめられたからに外ならない。

当時、「金色夜叉」が「ほととぎす」よりもはるかに優

れた芸術品と思われた最大の理由わ、ただこの個人主義的、心理主義的要素があるとゆう、それだけの事であった。そしてそーゆうものがあるかないかとゆう原因わ、実わそれぞれの読者層の差から来ていた。今日、「金色夜叉」が芸術品で「ほとゝぎす」が通俗小説だとゆうよーな考え方が、非常にコッケイで、ほとんど不可解に思われるのわ、今やそれらの読者層が少しも分離しておらず、全く同じ層のなかに溶けこんでしまっているからに外ならない。

とにかく、これだけの事実お見ても、日清戦争が一大転機とする日本資本主義の飛躍的な発展が、在来の伝統的な「士族的」の読者層のほかに、新興の「平民的」な読者層お生みだし、それお最初に吸収した重要な作品が「ほとゝぎす」であって、そこに大きく文学読者層の編成がえが行われつつあったとゆう事実わ、明かにこれお認めることができる。この場合もっとも重要なことわ、それらの編成がえが依然として封建的身分層おキソとしてその上でなされたとゆう事実だ。これわ尚おズッと後まで続いた。

三

夏目漱石の「我輩わ猫である」が雑誌「ホトトギス」に出たのが明治三十八年で、ちょーど日露戦争の終った年だ。それからずっと一年ずつ、「坊ちゃん」、「虞美人草」、「三四郎」、「それから」、「門」以下の作品お、主として朝日新聞にのせている。

当時これら漱石の作品わ非常に広く読まれたにもかかわらず、ほとんど全く文壇からの正式の批評にあわなかったとゆう事実わ、今から見れば実に奇妙に思われる。殊にこれら漱石の作品が当時の文壇から一種の通俗小説として見られていたのわ、今日の若い読者の目から見れば、何の事だかわけが分らないに相違ない。だが、事実わ正にかくの如くであった。

当時の文壇の主流となっていたものわ自然主義文学だ。二十年まえに「浮雲」で先駆された自然主義の作品が、ここまで来て、初めて文壇の中心となることができたとゆう事実わ、この頃やっと日本資本主義が先進ヨーロッパ資本主義に追いつくことが出来たことお語っている。だから、花袋、泡鳴、藤村、秋声等の自然主義作家の作品が文壇論議の中心となり、それらとわ全くちがう特色のうえに立つ漱石の作品が全然度外視されたのも一応わ自然のことだと云える。だが、その頃の文壇の代表的作品であった、花袋の「生」、「妻」、「縁」の三部作が、ほぼ同じ頃の漱石の三部作「三四郎」、「それから」、「門」より芸術的に優れていると考える読者わ、今日ほとんど無いだろー。ここに明かに一つの顚倒がある。

ここでぼく達わもー一度まえの「金色夜叉」と「ほとゝぎす」の場合と全く同じ実例に出あったわけだ。そして、

この奇妙なる事実お解くカギお、すでに前の場合に持ちあわしている。

自然主義作家と比較して漱石が全く違った特色のうえに立ったとゆう、その特色わいったたい何であろーか？　それおぼくわ道徳だと考える。道徳とわ、この場合むろん封建道徳お意味している。漱石の初期の作品には必ず道徳に非難お受くべき人物が現れる。例えば、「猫」の鼻の大きなブルジョワ夫人、「坊ちゃん」の赤シャツ、野だいこ、「虞美人草」の藤尾、小野さん等がそれだ。そして、読者わいつでも道徳的非難お加えるほーの側に立たされる。これわ、これらの作家および読者がほとんど完全に封建的イデオロギーお清算しつくしていることお語っている。これーゆう事実わ自然主義の作家たちの作品には全くない。それわ、私通、姦通その他それに類似の男女のあいだの醜いカットーだ。漱石の作品にわ殆どそーした事実が取りあげられていない。取りあげられた場合わ、必ず道徳的批判の対象となっている。それが当時彼の作品が文学青年に対立する他の教養ある層に愛読せられた重要な原因であった。ここに漱石の読者にわまだ甚だ多く封建制の背景お残していた事実おはっきり認めることができる。

「猫」の人物わ主として士族だ。「坊ちゃん」にも、「虞美人草」にも、「それから」にも、士族がたくさん出る。わざわざ士族と断わってある場合が多いが、断わってない場合でもちゃんとそー分るよーになっている。これわ自然主義諸作家の作品にわ殆どない事だ。ことに面白いのわ、「金色夜叉」の士族わ、荒尾その他上級官吏や外交官のよーな社会上ひじょーに重要な位地についているのに反して、漱石の士族わ、下級官吏、教師、会社員とゆうよーな、明瞭に中間層の人間になっている事だ。ここに社会の動きと封建的要素の変遷と の関係を見る 重要な実例がある。

そーゆう点で、漱石の作品が日露戦争お重要な契機として広く読まれるよーになったとゆう事実にわ、特別に深い意味がある。日本資本主義わいつも戦争お重要なモメントとして発展した。社会の発展が戦争の原因となり、その戦争がまた次の発展の原因となった。日露戦争お契機として時に飛躍的な発展お遂げた二つの実例お上げて見る。一つわ私立大学お中心とする学校の驚異的な増加発展だ。それまで、私立大学と官立大学とのあいだにわ、実質的にも、社会的にも、明かに大きな差があった。その差がこの時にほとんど無くなってしまった。同時に、それらの学校から洪水のよーに押し出された夥しい卒業生が一度に社会ぜんたいにハンランした。その結果わ、必然的にプチブル層の恐ろしい膨脹とゆう現象お生み出した。漱石の人物が、教師であるか、学生であるか、或わ卒業生であるか、とにかく何かの意味で学校と密接な関係おもつ人間に限られているのわ、彼自身がもと教師であったとゆう事実以外に、彼

の作品が主としてそーゆう新興プチブル層のあいだで読まれたとゆう事実お何より雄弁に語っている。

他の一つが新聞業の発達だ。日本の新聞紙わ、日露戦争お通過して、初めて真に社会的のものとなった。殊に、大阪朝日、大阪毎日の二大新聞が今日の大お成すキソわ、全くこの時に固められた。漱石の作品が朝日新聞に載ったとゆう事わ、その点で特に大きな意味お持つ。日本の新聞が発展のための最大のキソとしたものがこれらプチブル層であった。この新興のプチブル層お文学の読者として第一に吸収したものが実に漱石の作品だったのだ。

これら新興読者層わ、ここでもシロートの読者として待遇されている。自然主義文学わ、秋声その他が直接紅葉の門から出たよーに、硯友社の文学から正しく発展した、実わ伝統の文学であった。したがって、その読者も、伝統的なクロートの読者と見なされた。漱石の初期の作品が、「新小説」、「中央公論」、「早稲田文学」等の重要な文学雑誌のどれにも載らないで、全く局外の一俳句雑誌「ホトトギス」に載ったとゆう事わ、そーゆう意味お好く現している。主としてこれらシロートの読者に愛読せられた彼の作品わ、内容として封建道徳の要素お多分にふくんでいたことお重要な理由として、当時の文壇から通俗小説と見なされた。今日こーゆう芸術的評価がほとんど無意味なものになってしまったのわ、当時わ明かに分立していた、自然主義文学の伝統的な読者層と、新興の漱石の読者層とが間もなく同じ一つのプチブル読者層として溶け合ってしまったことお意味している。それわすでに漱石自身の作品において、三部作以後ほとんど封建道徳の要素がなくなり、自然主義的作品と少しも差のないものになっている点に、これら新興読者層が急激に進歩して伝統的な読者層と一致しよーとしている傾向お明かに認めることができる。

だが、ここまで来ても、まだ日本資本主義わ若かった。これら新興プチブル層となるための直接の原因わ主として封建制からの遺産であった。親が官吏であるか、地方の地主であるか、或わ高利貸的小資本の所有者であるか、とにかく封建制からの遺産の所有者でなければ、学校にはいってプチブル層に入るための教養お受けることわ殆どできなかった。漱石の読者がまだ長く「士族的」なシッポお引きずっているのわ、実にこれが為であった。

ちょーど同じ頃に（明治四十年）藤村の「破戒」が出ているのわ、とくに意味が深い。この作品でわ意識的に部落民の問題お取りあげ、封建的身分層とゆうものお中心テーマとして取扱っている。水平社の運動が勃興したのわそれからずっと後であったが、それわ今でもまだ大きな問題お社会ぜんたいに投げかけている。

ここで現在の日本の戸籍にまだ「士族」とゆう封建的身分層の奇妙な残存があるとゆう事実お思いあわして見よー。これわ世界的にも実に稀に見るコッケイな事柄だ。ぼく達わ或る場合に華族になることができる。しかし、士

族にわ絶対になれない。かつて法律家江木衷が、部落民の問題お解決する方法として、出征軍人おぜんぶ士族にしろとゆう運動お部落のあいだから起せと云ったのわ、とくに意味がふかい。日本資本主義がヨーロッパの先進資本主義に殆ど追い迫ることの出来た、日露戦争以後になっても、まだこれほど大きな封建的身分層の根が深く残っていたとゆう事わ、日本の社会のあらゆる現象お理解する為に、特に重要に記憶して置く必要がある。

以上、日露戦争お中心とする日本の社会の劃期的な発展からそこに再び広汎な文学読者層お生み出し、それによる封建的身分層の再編成が行われたが、その場合においてもやはり封建的身分層の要素が非常に深くそのキソとなっていたとゆう事実お、だいたい知ることができたと思う。

四

ところが、その後になって、こーゆう文学読者層の編成がえが、それまでのものとわ比較にならないほど、トホーもなく大規模に行われる機会が、とつぜん日本の社会お訪れた。それがヨーロッパ大戦だ。それまで文学の読者わまだ極めて一部のプチブル層に限られていたのお、その時まるで嵐のよーな勢で文学わ他の一ぱん勤労者層のなかえ這入って行き、もっとも文学とわ縁の遠かった農民の一部おすらこの中に獲得した。そーゆう恐ろしい勢で発生した文学読者層お目標として生れたものが例の大衆文学だ。

この新興の読者層がいかに前例のないほど力強いものであったかわ、次のよーな事実お見ても分かる。それまで機会あるごとに発展してきた、そのときどきの新興読者層わ、しだいに文学的訓練お受けるにつれて、いつか伝統的な読者層に吸収されていく傾向お持っていた。ところが、今度の場合わ、逆にこの新興読者層が伝統的な文学者自体お自分たちの層え吸収するとゆう奇現象お呈出した。純文学の名で呼ばれていた伝統的な文学の作者であった、菊池ヒロシ、久米正雄その他多くの作者たちが、忽ちこの読者層に吸いよせられて、大衆文学の作者にくらがわりおしてしまった。

大衆文学わ通俗的で、したがって低級であり、純文学わ芸術的で、したがって高級だとゆう考え方わ、その当時において一つの常識であり、今でもそーゆう古い考えから抜けだせない読者わまだ相当ある。だが、そーゆう評価が実わ読者層の対立から生れた何の意味もないものであることわ、前にあげた二つの場合とちっとも違いわしない。事実、今日でわ、純文学の作家に対する読者からの芸術的評価わ異常な勢で下落しつつある。それわ、この二つの読者層が今や互に接近しよーとする重要なモメントに達していることお意味している。だが、現在の場合においてわ、これまでとわ全く反対の非常に重大な一つの傾向が現れている。これまでわいつでも新興読者層が伝統的な読者層に吸

収せられて来た。ところが、現在の場合でわ、ちょーど純文学の作者が大衆文学の作者に吸収せられたよーに、伝統的な読者がかえって新興読者層のほーえ吸収されよーとする明瞭な傾向お示している。その重要な例証として、最近中間文学とでも名づくべき特殊な文学が発生しはじめた。たとえば、武田リン太郎の「銀座八丁」、片岡鉄兵の「花嫁学校」、尾崎士郎の「人生劇場」その他がそれだ。これらわ純文学とわ云えないが、さりとて大衆文学でもない。ちょーどその中間にあるものだ。そして、これらの作家がいずれも純文学の側から来たもので、ひとりも大衆文学の側から来たものがない点に、いかにもよくその方向お示している。伝統的な純文学の読者のうちにわ、一足とびに大衆文学に行くことお潔しとしない、思いきりの悪い読者がまだ相当ある。だが、いかに思いきりの悪い読者にだって、今の純文学的作品わ決して深い感銘お与える物でわない。そーゆう要求お満すものがこれら中間文学だ。しかし、これらわやがて厭でも応でも大衆文学のなかに埋没する必然的な運命お持っている。

以上、文学読者層編成がえの上に現れた明治文学発展の経路おだいたい見ることができた。文学の発展わ文学の大衆化とまったく同義語だ。明治以後における日本文学大衆化の経路わこーゆう方向のもとに行われた。そして、この場合もっとも重要なことわ、これまでいつも読者層編成がえのための重要なキソとなっていた、日本の社会に大きく残存した奇怪な封建的身分層の要求わ、ここまで来て、初めてほとんど振り落されてしまったとゆう事実だ。今や文学読者層のあいだに士族的要素わもうほとんど無い。

今日、純文学と称するものわ日に日に痩せ細って行きつつある。恐らくそれわも一永久に栄える時わないであろー。なぜかと云うに、これまで純文学わ、いつもプチブル読者層おキソとして、その上で栄えて来た。今やそれらプチブル層わ、日本の社会の急激な資本主義化とともに、異常な速度で転落しつつある。純文学のうえに最後の鐘がますます高く鳴るのわこの為だ。

それでわ、文学全体わ一体どーなるか？　この純文学凋落の現象の上にこそ、真に大衆のための新しい文学が異常な熱と力とおもってその下から生れ出よーとしている姿がありありと見て取れるとぼくわ考える。

五

どこの国においても、文学発展の、したがって文学大衆化の重要な一つの段階として、国民文学の確立とゆう時期がある。現在ソヴェート同盟で読まれている文学書の統計お見ると、この国のプロレタリアートのあいだでプーシキンやゴーゴリが今でも非常に広く読まれていることが分かる。ロシアの国民文学お確立したものが実にプーシキンであり、続いてゴーゴリであった。同様に、フランス文学の

ユーゴー、イギリス文学のバイロン、ドイツ文学のゲーテなどわ、どーゆう意味でかで国民文学的要素お非常に多くもっている。それわ社会のあらゆる層お通じて読まれ、愛され、社会全体に非常に大きな影響お与えている。

国民文学の確立とゆう事実わ、どこの国の場合においても必ず産業革命と直接の関係お持っている。それまで、すべての芸術わ封建社会の支配者である貴族や武士の手に独占されていた。産業革命お通じて生産の実権が一ぱん市民層の手に移った。この市民層の歴史的な発展にともなう社会全体の偉大な高揚、フランス革命お代表とする民衆の劃期的な精神的発展、その必然的な結晶として生れたものが国民文学の確立とゆう現象だ。ここで初めて文学が一ぱん市民層の手に解放された。だから、文学大衆化の最初の歴史的なキソわ、どこの国の場合でも、必ずこの国民文学の確立によって固められた。

原則として国民文学わ資本主義文学だ。資本主義社会の生産の実権おにぎる一ぱん市民層おキソとして成立する。まもなくその市民層がブルジョワとプロレタリアの二つの敵対した階級に再び分裂し、そこでプロレタリアが偉大な任務おもって歴史の舞台に登場する。そこでプロレタリアの文学が発生する。

だから、国民文学わプロレタリア文学の母胎だ。プロレタリア文学わ、国民文学の胎内から生れながら、しかしこれに対立する文学として成長する。したがって、国民文学の確立とゆう現象なくしてプロレタリア文学の発展とゆう事わ、原則的にあり得ない。もしあったとしたらば、少くともそれが非常に変則的なものである事だけわまちがいない。

これわ、ソヴェートの文学の場合お考えて見れば、よく分かる。プーシキン、ゴーゴリによる国民文学の確立があった。その上に、ゴンチャーロフ、ツルゲーネフ、ドストエーフスキー、トルストイ、チェーホフ等の文学が成長した。そして、それから生れながら、それに対立するものとして発展したものが今日のゴリキー、パンフョーロフ、ショーロホフ等のソヴェート文学だ。これら優れたソヴェート文学がただソヴェートであるが故にこれほどな発展お遂げることができたと考えたならば、それわ根本から誤っている。この場合、すぐれた国民文学的の遺産お摂取し吸収した事がいかに重大な原因となっているかとゆう事お深く記憶しなければならぬ。

日本にわ国民文学の確立とゆう現象がなかった。今やぼくたちわこの事実お時別の重大さお持って取りあげる必要がある。そして、文学に関するすべての問題おここから展開して行かなければならない。

国民文学の確立わクラシック文学おさえ大衆化した。シェークスピアや、セルワンテスや、ゲーテや、ダンテでさえが、かくして初めて広く読まれ愛された。それが日本の場合においてわどうか？「万葉」、「源氏」その他の日本

のクラシック文学がどの程度に大衆のなかに這入っているか？　それわ、トルストイやドストエーフスキーに比較してわもとより、或わ「ハムレット」や「ドン・キホーテ」や「ファウスト」の程度にだって読まれていないのでわないか？　市民層のための最初の文学である。近松、西鶴、一九等の作品だって、一体どの程度に今日の大衆に読まれ、愛されているか？

明治十年から二十三年の国会開会にいたる自由民権運動の時代わ、日本の歴史にかつて前例のない国民的高揚の時代だ。本来ならばこの時に当然国民文学確立のキソが置かれていなければならぬ。ところが、あれほど猛烈であったこの運動の結果として生れた当時の文学わ、「自由の凱歌」や「西欧血汐夜嵐」のよーな低級で猥雑な翻訳小説か、或わ同様に俗悪な「佳人の奇遇」や「雪中梅」のよーな翻訳的作品に過ぎなかった。したがって、これらわ、それ以後の文学が生れるためにほとんど何の役目も果していない。一方、伝統的な文学わ、これらの民衆的な運動とわ全く何の関係もないものの如く、依然として幕末の戯作者的な痴夢のなかに浸っている。これわ一体いかなる理由によるのであろーか？

ここで一つの事実お考えあわして見る。自由民権の運動わ、あらゆる民衆に政治的自由お与えろとゆう要求であった。しかし、実際にこの運動に参加した者がほとんど全部「士族」であったとゆう事実、及び、その運動の結果として選挙権お得たものが、直接国税十五円以上お収める、極めて小部分の地主にすぎなかったとゆう事実が、それだ。

明治維新の変革わ、産業革命の要素お殆んど持つことができなかったか、或わ、持ってもほんの僅かに過ぎなかった。その結果わ、資本主義形態お具えた日本の社会に封建的な要素お非常に深く残存させた。それが為に、封建的身分層わそれから以後も長く日本の社会から消えることがなかった。日本国民文学確立のための最大の障害となったものが、実にこの封建的身分層であった。

日本の封建社会においてわ、身分層によってそれぞれ別個の芸術お持っていた。そしてその場合その層お越えて流通しあうとゆう事わ殆んどなかった。たとえば、文学と直接結びついた音楽の場合お考えて見る。ある層わ、ショウ、ヒチリキ、琵琶等による「雅楽」とゆう音楽お持っていた。他の層わ、笛や太鼓による「諸楽」とゆう音楽お持っていた。今ひとつの層わ、三味線による「長唄」、「浄るり」とゆう音楽お持っていた。「雅楽」の層が「浄るり」お弄んだり、「浄るり」の層が「雅楽」や「能楽」お楽しむとゆうよーな事わ殆んどない。それわ、或る場合にわ、死刑その他の重い刑罰おもって脅かされた。この場合、楽器までも全然別個であったとゆう点に特に注意する必要がある。こーゆう事実わ、ほとんど全世界の歴史にも類例のない事だ。したがって、日本封建制が、いかに厳密な身分層おキソとして、その上に立った特殊なものであったかと

ゆう、重要な証拠となるものだ。

元祿・貞享わ、日本封建制の下で徐々に発達した資本主義的要素がもはや社会の全面に押しだされ、一大飛躍お遂げよーとした時だ。手工業、家庭工業わ、すでに西陣その他に現れているよーに、明かにマニュファクチュア的形態に発展しよーとする傾向お示し、したがって、市民層わ異常な勢で勃興し、江戸わその後まもなく事実上ロンドンに次ぐ世界第二の都会となっている。近松、西鶴、芭蕉わ、これら新興市民層の文学として発達したものに外ならない。もしも当時のコーカツな支配者たちが、彼らのために最も都合のいい、鎖国とゆう形態おとる事がなかったらば、急激に発達した日本資本主義わ、当然産業革命の要素お持つよーになり、したがって、ここに国民文学確立のキソが置かれるに至ったに違いない。もしもそーゆう事情のもとで書かれたならば、例えば一九の「膝栗毛」の如きわ、或わ「ドン・キホーテ」にもはるかに優る世界的名作となっていたかも分らない。あの中にわ、すでに新興市民層の明朗性と積極性が明瞭にあらわれている。それがあのよーな浅薄な内容しか持つことができなかったのわ、鎖国による封建的身分層が、依然としてこの作の読者お極めて少数の都市町人層に局限したからに外ならない。

身分層によって別々の楽器お持ったと同じよーに、身分層によって又それぞれの詩形お持った。漢詩、和歌、俳句、川柳とゆうのがそれだ。そして、それわ今に至るまで遂に統一される事がなく、統一されないままに既に亡びよーとしている。

これだけの事実お見ただけでも、封建的身分層が、いかに日本の芸術お分裂させ、混乱させ、国民文学の確立お妨げて、文学大衆化の為のいかに大きな障害となったものであるかとゆう事実お、実に明瞭に知ることが出来る。

六

ここで、国語、国字の問題が、非常な重要性おもって、ぼくたちの前に現れる。

今や、日本の社会にかくも深く根お下していた封建的身分層わ、根底から解消せられよーとし、したがって、文学が全く新しい姿おもって日本の全大衆のあいだに解放されよーとする、その時がもートックに来ている。それに、どーして今までそれが行われなかったか？　それわ、それの妨げとなる最も大きな原因が実際にまだ日本の社会に残っていたからだ。それが日本現在の国語と国字だ。

和歌、漢詩、俳句、川柳とゆう風に、封建制の身分層によってそれぞれ詩形お別にしたとゆう事実のための重要な原因として、それらの身分層の言葉が違っていたとゆう事実がある。今でもカブキの芝居でわ、武士と町人でわ、第一に発音の仕方からして違っている。いわゆる「切口上」とゆうものわ、武士だけが使う。また、「貴殿」だの「身

共」だの「いざ参れ」だの「許しつかわす」だのとゆう言葉わ、町人わ決して使わない。武士が実際にこの通りの言葉お使ったかどーかわ問題としても、身分層の差によって、言葉わ、音の上からも、又単語の上からも、ずいぶん違ったものであったとゆう事実がここに現れたものである事だけわまちがいない。

音楽の場合も同じ事だ。歌謡わ各時代によって違っている。だが、その違いわ、むろん単に時代だけの違いでわない。時代によって支配権力の移動が行われ、その支配者の言葉がそれぞれ違っていたとゆう事が、根本の原因だ。奈良朝や平安朝のウタイ物も、当時の支配者であった、ヤマト地方やヤマシロ地方の貴族の言葉がキソとなっており、鎌倉時代のそれわ、当時新しく政権お握るに至った、武士の言葉がキソとなっている。そして、それわ、決して単にそれだけに止らず、同時にまた、文学の形式お決定する重要な役目お果している。「源氏物語」と「太平記」の違いわ、実にこーして生れたものだ。

徳川期に、武士の「謡曲」に対して、町人の「浄るり」が生れたのも、全く同じ理由によるものだ。手工業・家庭工業の発達、商業・貿易の増大等、これら日本資本主義の初期的発展に伴って、市民層の社会的地位が急に高まった。だが、もしも、それら市民層の言葉が武士のそれと非常に違っていたとゆう事実が無かったならば、「浄るり」とゆう全く新しい音楽・文学の形式が要求され、発明されるとゆう事わ、決して無かったに相違ない。ここで、特に注意しなければならない一つの事実がある。それわ、この身分層によって言葉が違うとゆう事実のために、漢字が非常に重要な役割お果している事だ。

漢字が日本に這入って来たそもそもの最初から、当時の支配者たちわ、それによって、翻訳的な一種の「文語」お作り出している。それわ、当時に於てさえ、極めて僅かの人間だけのあいだで使われ、理解されたもので、一ぱん大衆わ耳にした事さえ無かった。以後、支那の文献がますます多く這入って来るにつれて、こーゆう翻訳的な「文語」わ一そーふえている。だが、いつまで立っても、それわ、ただ支配者たちの特権と誇りと遊戯とであるに止って、生産者大衆とわ何のエンも無かった。漢語わ元より、日本語に翻訳されたものでも、「そもそも」とか「いわんや」とか、「願わくば」とか、「さも有らば有れ」とか、「あに図らんや」とか云うよーな言葉わ、今に至るまで、大衆わ決して使いわしなかった。そして、彼らがそれお使わなかった理由わ、決して彼らの無智によるのでわなく、使う必要がなかったからだ。つまり、これらの文語わ、生産の必要から必然的に生れたものでなく、当時の支配者が、その身分お守る為に、生産以外の必要から、故意に生み出したものだったのだ。

戦国時代お通じて、封建的中央集権が完成され、云わゆるアジア的絶対主義が確立されるに至って、そーゆう傾向

わ一そーひどくなった。絶対主義的支配お揺がさない為にわ、支配者わ、土地その他の基本的な生産手段お独占する事お必要とした。言葉や文字わ重要な生産手段だ。そこで、支配者たちわ、文字の殆ど全部と言葉の一部とお独占した。そーして、生産者大衆わますます無智に追いやられた。大衆が無智である事が、封建制の支配者にとってわ、絶対に必要だったのだ。日本の歴史の本である「大日本史」や「日本外史」が、わざわざ日本語でない漢文で書かれたとゆう、フシギな現象も、実わ、こーした所から来たものだ。

そこえ、明治維新が来た。そして、普通教育お通じて、文字が初めて日本の大衆のあいだに普及した。それまで、手紙一本書くにも、きっと庄屋かダンナ寺の和尚かどっちかの厄介にならねばならなかった百姓までが、或る点まで新聞などお読むよーになった。すると、今度わ、そこに全く新しい別の混乱が起きて来た。

前に云った通り、明治維新わ、封建制の基本的な経済ソシキお殆ど破潰しなかった。ヨーロッパの先進資本主義のシゲキから、あわてふためいて資本主義国家となった日本の社会わ、したがって、そのための準備が全くできていなかった。そこで、高率な地代や或る種の徭役制度のよーな封建的な要素お殆どそのままに保存し、反って、その上に、それおキソとして資本主義お発達させるとゆう、実に珍しい不自然な現象お呈出した。だから、政治的に云って、封建的な政治権力お倒した直接の原動力わ、やっぱり封建制の支配者であった武士の一部であったよーに、経済的にも、封建制の支配層が殆どその儘に新しい資本主義の支配層として乗り移り、生れ替った。それがつまりあの奇妙な「士族」だ。「学士」の士も「博士」の士も、「技士」の士も「弁護士」の士も、「弁士」の士も、「代議士」の士もみな「士族」の「士」だ。当然亡ぶべきであった封建的身分層わ、こーして根強く資本主義社会に生き残り、長くその醜いシッポお晒す事になった。

封建的身分層わ、それぞれ別の言葉お持つ事が、重要な一つの特色であった。又、支配層わ、曽て文字お独占した。だが、今や、身分層が残っていると云っても、それわ、もはや昔のシッポに外ならない。世襲的意味も、強権的な意味も全く無くなり、平民も町人もドシドシ支配層のあいだえ割りこんで来る。まさかにもー「切口上」で威張ってる訳にわ行かない。「切口上」わ、僅かに「演説」の場合にだけ残って（これわ今でもまだ残ってる）、普通の口語からわ全く消えてしまった。つまり、ここまで来て、それまで身分層おキソとして分裂していた、日本語のタテの差別が、殆ど無くなり、日本語が標準日本語として大衆的に統一される重要なキソが置かれたわけだ。

次に文字だ。それわ、それらの支配層が自分たち自身の手でつくった普通教育で、或る程度まで大衆化してしまった。今更もー一度これお独占するとゆうわけにわ行かな

い。
だが、「士族」わ、今でもまだ昔どーり言葉お区別し文字お独占したい、親ゆずりの気分お十分に持っている。一方、また、新しく支配層に進出した平民にわ、初めて自分たちに開放されたそれらの特権お、やはり封建的な特権として使いたいとゆう、極めて子供らしい欲望がある。この二つのものが結びついて、そこに、実に変な、同時にまた、日本の社会に長く云い知れぬ害毒お流す現象お生み出した。つまり、一ぱん大衆にわ到底理解のできないよーな非常にムズカしい言葉や文字おコトサラに使い、それに依って、支配層としての特権お保ち、威厳お示そーと云うやり方だ。その為に、それまでにも無かったよーな非常にムズカしい奇妙な無数の「漢語」が俄かに作り上げられ、また、英語お主とする外来語がそれら支配層の言葉のなかに不自然に夥しく取り入れられた。明治二十年代における、依田学海の作品と、春のやおぼろの「書生気質」とわ、それらの実例お無数にぼく達の前に提出する。

それまでに「役所」だの「役人」だのと云う言葉があった。それが「官庁」、「官吏」とゆう言葉に替えられた。この後から生れた言葉の方が、言葉としても、また文字から云っても、ズッとムズカしくなっている所に、非常に重大な意味がある。「逓信省」の「逓」「郵便」の「郵」わ、外にわ決して使わない、只だこれだけの為に覚えなければならない。実にヤッカイな文字だ。大衆と一ばん関係の深いこーゆう仕事に、なぜ選りに選ってこんなメンドーな文字お使ったかと云えば、そーしなければ官庁としての威厳が示せないと、当時の支配層わ考えたのだ。

実際に農業お営んでる百姓わ、昔も今も、「種マキ」、「草トリ」、「トリイレ」、「コヤシ」、「桑ツミ」と云う言葉お使っている。ところが、政府や農会の技士や農業者やわ、それとわ別に必ず「播種(ハンシュ)」「除草(ジョソー)」「収穫(シューカク)」「肥料(ヒリョー)」「採草(サイソー)」と云う言葉お使う。「蘿蔔」(ダイコン)、「胡蘿蔔」(ニンジン)「牛蒡」(ゴボー)「萵苣」(チシャ)、「甘藍」(タマナ)、「土当帰」(ウド)、「石刁柏」(アスパラガス)と云うよーな字お知ってる百姓わ一万人に一人もありわしない。ところが、農業の教科書わ今だに皆こんな奇妙な文字お使っている。それらの作り方わ好く知っていたけれども、文字お知らなかった為に、農学校の生徒が危く試験に落第しかけたとゆう。ウソのよーなコッケイな話が実際にある。

誰でも「炭がハゼる」と云う言葉お使う。ところが、林業の技士わ必ず「爆跳(バクチョー)」と云う。そして「カマ」にわ、きっと「窯」の字お当てる。

医者の本にある「上顎竇」、「尾骶骨」「顳顬骨」などとゆう字がマトモに書ける者わ、学者にだってメッタに有りわしない。

哲学の「止揚」(前にわ「揚棄」と云った)とゆう術語わ、それがドイツ語の‘aufheben’の訳語だとゆう事お

知っている者だけに、初めて正しく理解される。

ポルトガル語の"gibão"から来たのだから、カナで只「ジバン」と書けば好さそーなものお、わざわざ「襦袢」と誰も知らないムズカしい漢字お当てる。

現在小学六年間に教えている漢字の数わ千三百六十五文字だが、卒業生が実際に覚えているのわその半数にも達しない。ところが、現在一ぱんに使われている漢字の数わ約一万と報告されている。それだけでも、現在の一ぱん大衆がいかに完全に読書圏外に置かれてあるかとゆう事実お、明かに知ることができる。そこえ、個々の漢字の勝手な結合に特別の意味お持たせた、これら無数の奇妙な新造「漢語」が、いかに日本語と日本の文章お混乱させ、困難なものにしたかわ、想像に難くあるまい。身分層によって言葉お差別し文字お独占した、封建制の野蛮な風習が、こーしてもー一度別の形で資本主義社会に持ち越された。そして、すべての文化の大衆化お飽くまでも妨害した。

のみならず、そこにわ、もっと重要な事実がある。これらの不自然に作り上げられた「漢語」わ、目で見た意味だけお主にして、言葉としての音お全く考えに入れなかった。今でも、「シバイ」と云うよりわ「演劇（エンゲキ）」と云った方が、「ケンブツ」と云うよりわ「観客（カンキャク）」と云った方が何となく優れた言葉であるよーに、漫然と一ぱんに考えられている。だが、言葉の本質としての音の点から見れば、それわ全く逆だ。「演劇」「観客」「文学」「学術」「劇場」「大学」などと云う言葉は、音として凡そ劣等な言葉だ。「帝国劇場」だの「日日新聞」だのと云う名前が、最も多く大衆に接する機関に附けられているのわ、むしろ一つのフシギだと云える。（だから、大衆わタイテイの場合、「テイゲキ」、「ニチ」と略語ですましている。）更に、そーゆう現象が一そー極端になって、「時許局」またわ「時許可局」などと云う、実際に日本人の口でわ発音のできない官庁が実際にあるとゆう、コッケイ極まる事実まで生んでいる。

元来、日本語わ、音韻的に云って、世界でも最も進んだ言葉だ。古代の未開人や、また現代の野蛮人に特有な、あの困難きわまる発音や、複雑きわまる音の種々相やわ、現代の日本語にわ殆ど無い。音わ、世界のどの言葉よりも、単純化され、また平易化されている。少くともその点の限りでわ、日本語わヨーロッパの諸国語よりも遥か進んだ言葉だ。「古事記」や「万葉」のよーな古代の文献わ、明かにその頃わまだ困難な発音が非常に多く残っていた事お示しているから、今のよーな進化した日本語に発達させるまでにわ、ぼく達の祖先わ、実に何千年もの長いあいだ無意識のうちに異常な努力お積んで来たわけだ。ところが、日本資本主義の支配層わ、あの奇怪な無数な「漢語」お作り出す事によって、セッカク世界のどの国語よりも進んだ日本語お、もー一度困難きわまる野蛮人の発音に押しもどし、それに依る無数の混乱おコトサラに生み出した。セッ

カク身分層による言葉の差別が解消され、標準日本語統一の輝しい通が開けよーとしたのお、それに依って、もー一度かたく塞いでしまった。

こーして、つい近頃まで持ち越された封建的身分層のシッポわ、二重にも三重にも、実に云い知れぬ大きな害毒お、日本の社会全体に持ち来した。日本国民文学の確立が今まで妨げられて来たのも、実にその一つの現れだったのだ。

七

だから、日本国民文学の確立わ、大衆の立場からの標準日本語の統一とゆう国語の問題と、それお書き現す手段としての国字の問題と、この二つの問題と固く結びついて居り、その解決おキソとして、その上に初めて成り立つものだ。

明治以後において、それらお望んでやまない大衆の意識しない要求が最も大きく社会の表面に現れたものが、あの「言文一致」の運動だ。

それまで、すべての文学作品わ、あの不自由きわまる文語体で書かれていた。云うまでもなく、文語体わ、封建制の支配者である武士貴族の表現様式だ。それに対して、資本主義による新興の市民層が彼ら自身の表現様式お持とーとしたのが、この「言文一致」運動だ。これわ、恐らくわ、日本文学大衆化の道に於て、最も大きなエポックだったと云える。

初めて口語体で「古今集」の序お訳した物集高見の「言文一致」が出たのが、明治十九年で、事実上正しい口語体で文学の作品お発表した最初のものである。二葉亭の「浮雲」が出たのが、その翌年の二十年だ。「浮雲」が、日本の資本主義的作品の最初のものであると同時に、かねて、日本の資本主義的表現様式の最初の作品として現れているのわ、余りといえば余りにもフシギな一致だ。

この二葉亭の「のだ調」に対して、美妙の「ありません調」の最初の小説「夏木立」が出たのが、ほぼ同時であり、更に紅葉の「のである調」による「二人女房」が現れたのが、やや遅れて明治二十四年だ。しかし、当時において、この口語体の運動わ決してハカバカしく発展しなかった。その以後になっても、第一に紅葉自身が、「金色夜叉」その他お、会話だけわ口語体で、他の文わ依然として文語体で書いているのお見ても、その間の事情が好く分る。殊に「金色夜叉」が優れた芸術品として推賞された重要な一つの理由として、あの塩原の場面に使ったよーな、文語体による文章の妙とゆう事実がある。「士族的」な表現様式がいかに抜きがたき根拠お当時の社会に持っていたかとゆう事実が、ここに好く現れている。

のみならず、この口語体の運動が、今に至ってもまだ徹底していないとゆう事実お、時に重要に考える必要があ

る。しかも、更にフシギな事わ、常に文化や文学の大衆化お口にしてやまない、進歩的な文化人や文学者のあいだでさえ、そーゆう問題が全く注意されていない事だ。その実例わ、どの著書のどのページお開けても、きっと直ぐ見つける事ができる位だが、ここにわ極めて分りやすい二三の例だけ挙げて見る。

レーニンに例の「何お為すべきか」とゆう著書がある。この、表題の原語「シュトー・チェーラチ」わ、英語の"what to do"で、ふだん誰でも使う言葉だ。十九世期末に、ロシアの社会が非常な混乱に陥って、インテリゲンチアがスッカリ目標お失った事がある。その時、一体どーしたら好いかと云うので、チェルヌイシェーフスキーがこの題で小説お書いたのお、一九〇五・六年の日露戦争後の極端な反動期に、レーニンがそのまま取って彼の著書の表題としたものだ。

ところが、これお日本語に訳した場合の「何お為すべきか」わ、決してふだん誰でも使う言葉でわない。明かにこれわ一種の文語体だ。内容の翻訳に使ってある言葉も、したがって、非常に多く文語体の語脈お残していて、原著の代表的に平易で簡明な文体と実に奇妙な対照おなしている。

「黎明」とゆう言葉がある。徳永スナオの「黎明期」、島木健作の「黎明」、貴司山治の「西の黎明」等、プロレタリア作家わ妙に「黎明」とゆう言葉が好きだ。だが、この「黎明」も決して大衆が実際に使う言葉でわない。「もー黎明だ」などとわ誰だって云いわしない。この場合、誰でもきっと「夜あけ」とゆう言葉お使うに違いない。明かに「黎明」も「士族的」な「漢語」の一つだ。それにこの場合、プロレタリア作家までが、なぜ、大衆が実際に使う「夜明け」とゆう実に好い言葉のかわりに、誰も実際にわ使わない劣等な「黎明」とゆう「漢語」おわざわざ使ったかとゆうと、やっぱり、「夜あけ」よりわ「黎明」のほーが何となく優れた言葉であり、意味が深いよーに考えた、古い「士族的」な考え方から脱し切れずにいる事が、根本の原因だ。

山田盛太郎の「日本資本主義分析」お読んだ者わ、恐らく、誰でも、世界じゅーにこれほどムズカしい言葉で書かれた本があるかどーかとゆう疑問お持ったに相違ない。事実、ヨーロッパの著者たちにとって、こんなムズカしい言葉で物お書くとゆう事わ、絶対にできない。なぜかとゆうに、ヨーロッパのどの国語にも、第一こんなムズカしい言葉そのものが無いのだ。だから、もしも誰かがこの本お先ずドイツ語に訳し、それからまた日本語に訳したならば、きっと何層倍も読みやすいものになるに違いない。

この原因お知るために、次の事実お考え合して見よー。今日、日本の読者お大体二つの層に分ける事ができる。一つわ「中央公論」・「改造」によって代表せられるものであり、他の一つわ「キング」・「日の出」によって代表せら

れるものだ。「キング」・「日の出」わ、だいだい普通教育お終っただけの読者が主であり、「中央公論」・「改造」わ、少くとも中学以上の教育お受けた読者が主になっている。前に云った通り、現在の普通教育だけでわ、第一に文字の点で、普通の著書お読む力が全くない。

それらお読むためにわ、どーしても中学以上の学校に行かなければならない。だから、「中央公論」・「改造」にわカナが振ってないが、「キング」・「日の出」にわチャンとカナが振ってある。カナお振って貰ってヤッと「キング」や「日の出」の読める程度の読者にわ、よしんばカナお振ったって、「中央公論」や「改造」わ断じて読めない。なぜかと云うに、カナのお蔭で読みだけわ読めても、そこにわ、彼らがかつて習った事のない、したがって、とーてい理解する事のできない、無数のムズカしい言葉が並んでいるからだ。

ここで、今でもまだ日本でわ、ある種の言葉や文字が極めて少数のインテリ・プチブル層の手に独占せられていて、一ばん大衆のあいだに解放されていないとゆう事実お、いかにも好く知る事ができる。そして、そのインテリ・プチブル層が、つい近頃まで封建的な「士族」のシッポお長く引いた者であった事わ、前に云った。今でもまだ、「中央公論」や「改造」なら喜んで書くが、「キング」や「日の出」その他の大衆雑誌に書くのわ何となく恥のよーに思っているプチブル作家や批評家わ、可なり居る。それわ、昔の「士族」が「平民」と同席する事お心よく思わなかったのと全く同じ心持から来るものだ。そしてそーゆうシッポが進歩的な作家や批評家の場合にまで残っている。

例えば、自他ともにプロレタリアの文学雑誌と思っている「文学評論」にも「文学案内」にも、現在カナが振ってない。大部分のプロレタリア作品も、みな同様だ。結果において、これわ、それらの読者お極めて少数のインテリ・プチブル層に限定し、それ以外の一ぱん大衆が読者となる事お、故意に拒んでいるものだ。単にそれにカナお振っただけでわ、それらが決して現在の生産者大衆に理解できるものでない事わ、前に云った通りだ。カナも振らず、カナお振っても大衆に理解できないよーな「士族的」な言葉や文字お平気で使いながら、文学の大衆化お叫ぶ事が、いかにコッケイな事であり、又、そんな大衆化の運動がいかにマヤカシ物であるかとゆう事お、もはや総べての文化人がハッキリ知らなければならない。

かつて、小林多喜二があの劃期的な「不在地主」お書いた時に、あの作品が「荒木又右衛門」や「鳴戸秘帖」のよーに広く読まれるよーにと、ワザワザ書き添えてある。だが、「不在地主」わ決して「荒木又右衛門」や「鳴戸秘帖」のよーに読まれわしなかった。小林の誤りわ、「荒木又右衛門」と「不在地主」とわ、違う読者層の上に立っており、その層の限界お越えて読者お獲得する事がいかに困

難な事であるかとゆう事お知らず、その困難に打ちかつ為にわ、第一に作品の書き方からして全く変えて行かなければならないとゆう事実に気がつかなかった所から来たものだ。

八

今や、明治二十年代に起ったあの「言文一致」の運動お、全く別の方針で徹底しなければならない時が来ているのだ。それでわその別の方針とわ何か？

前に云ったよーに、言葉や文字わ、最も基本的な生産手段の一つだ。したがって、それわ、生産点においてのみ正しく発達する。生産点で、生産の必要から、生れ、発達したものが、最も進化したものであり、それこそ最も尊敬すべきものだとゆう事実お、特に重要に考える必要がある。これまで、その全く逆の事が考えられていた。それわ、みな、あの「士族」のシッポのさせた、反動的な魔術だ。今や総べての日本人がその魔術から抜け出さなければならない。日本語も、日本の文字も、そこで初めて、正しい発達の大きな道が開けて来る。

漢字が、支那でも、日本でも、遂にあの野蛮な「象形文字」以上に発達することのできなかった根本の理由わ、それが、生産から遊離した、極めて少数の人間の手に独占されていたからだ。日本語が、その時々の支配層の意志によって、いかに正しい発達お妨げられ、常に甚しい混乱に陥れられて来たかわ、前に云った通りだ。

今や、それらの封建的な身分層が日本の社会から全く姿お消そーとしている。今こそ標準日本語が正しく確立さるべき時期に初めて日本の社会が達したのだ。その将来の標準日本語のキソとなるものわ、絶対に、生産者大衆が現に口から耳え伝えている、その日本語だ。この生産者大衆の「口語」おキソとして、あらゆる支配者的な儀礼、遊戯、装飾の要素からキレイに洗い上げられた、滑らかな、澄みきった、したがって、実に単純化された、真の日本語お統一確立しなければならない。そして、同時に、そーゆう日本語お書き現すための文字の問題お、正しく解決しなければならない。あの野蛮な漢字お一日も早く日本の社会から追い出し、将来の大衆的な標準日本語お書き現すのに、最も適した、最も進んだ、ローマ字が、一日も早く全日本の大衆の文字となるよーに、あらゆる努力おしなければならない。

現在、日本の文学が非常な混乱に陥っているのわ、結局、封建的な身分層が今や全く解消せられよーとして、それによる文学読者層の編成替えが更に根本的に行われよーとしている、実わその一つの現れに外ならない。だから、それこそ、反って、日本の文学が今や飛躍的な大発展お遂げよーとしている、その頂点にある事お示しているものだ。

だが、文学読者層わ、いつの時代でも、決して文学読者層として存在するのでわない。それわ、再編成せられた時に、初めて新しい読者層として成立するものであり、その再編成お行うものが文学の作品に外ならない。作家が、大衆の体の底に隠れている、基本的な要求お見つけ出して取り上げ、これお具体的に躍動させ、解決してやり、そして、それお大衆の最も要求する「書き方」で表現する時、そこに初めて、その作品お中心として、読者層の編成替えが行われる。それこそが、文学の大衆化であり、文学の発展だ。

しかも、日本現在の場合に於てわ、作家がそーゆう新しい「書き方」おする事わ、すぐに、大衆のための標準日本語の確立と、国字の解決と、この二つの実に大きな問題と固く結びついている。この事お理解しないで、作家がこの広汎な新しい読者層お再編成するとゆう事わ、絶対にできない。現在の作家に、これまでとわ丸で違う、実に大きな意義と責任が要求されるのも、また、国語・国字の問題に対する正しい見通しの方針が要求されるのも、全くこの為に外ならない。

これまで、すべての文化人から、あれほど卑俗なものとしてケイベツされ無視されて来た、生産者大衆の「口語」お、こーゆう方針のもとに正しく取りあげ、整理し、それおキソに新しい文学の用語お作り上げる。現代の良心ある総べての作家が、何よりも先にしなければならぬ事わ、実にそれだ。そして、それこそ、新しい標準日本語建設えの、最初の、そして最大の、第一歩ともなるものだ。

こーゆう作品のなかで、初めて自分自身の言葉に出あった、生産者大衆わ、恐らく非常な驚きと、喜びと、また、かつてケイケンした事のない親しみとお、同時に感じるに違いない。そして、そこから大きな確信と勇気とお生み出す。自分たち自身の言葉こそが、実に現代の最も進んだ日本語であり、それおキソとしてのみ、将来の標準日本語お確立する事ができるものだとゆう事実お、初めて知って、そこで、大衆が積極的に新日本語建設の運動に参加する。

同時に、それこそが、日本の国字問題お根本的に解決する、やはり最大の第一歩となるものだ。なぜかと云うのに、生産者大衆の言葉わ、常に口から耳えと伝わる。だから、それわ、言葉の本質である「音」おキソとしている。よしんば、そこにわ尚お多少の漢語が混りこんで居たとしても、それわ、多くの場合、すでに耳で聞く音の言葉として淘汰されている。だから、消化されておらない無数の漢語から成り立っている、インテリ・プチブル層の言葉が、「表意文字」である漢字で書き現すことお絶対に必要とするに反して、これら生産者大衆の言葉こそ、「表音文字」である、文字として最も進んだ、ローマ字で書き現すのに、最も適したものであるからだ。

今や、全日本の大衆わ、かくの如き大衆の為の標準日本語の確立お、国字問題の根本的な解決お、それに依る新し

い国民文学の確立お、そして、それおキソとしてそれ以上の発展お、意識的にか、無意識的にか、或わ半ば意識的にか、とにかく、実に飢えカワクよーに求めている。そして、今よーやくそれらが為し遂げらるべき時が日本の社会に来た。そーした正しい見通しのもとに、大衆の体の底ふかく隠れている、それらの熱望お見出だし、取り上げ、いかなる困難にも打ち勝ってそれらお為し遂げよーとする、それだけの誠意と熱意とに溢れた作家のみが、現在の文学お背負うに足るものであり、したがって、そーゆー作家のみが次の時代に生き残る資格お持つ。

（一九三六年八月号・九月号「思想」）

III

詩・短歌・俳句

春を告ぐるモスクワ河の流氷

秋田雨雀

この小さな自由詩を、私の詩作の欲望を刺戟して呉れた渡辺順三君に献じます。モスクワ河の流氷期は四月末だと記憶します。

一

銀色のモスクワの空は鋭いナイフで縦横に断ち切られて、
それから——
輝き出る幾本も幾本もの光の投げ鎗！　やがて、おさえきれない、光の大洪水！
街々、家々の小窓から人々の楽しげな声の交響楽
春が来たぞ、街へ出ろ！　街へ出ろ！
クラスナヤ・プロスチャジが太陽で輝いている！　太陽で輝いている！
ニーナも、コーリャも、ミーシャも、ワーニャも薄い外套に着かえて街に出ろ！　街に出ろ！
工場から職場から、学校から、食堂から、
そっくり、そのまま街へ出ろ！　街へ出ろ！

二

アレクセイ・マクシモイッチはもうモスクワへ帰って来る、長い「忍苦」の友、アレクセイ・マクシモイッチ！
ソヴェート民衆のやさしい教師、ソヴェート文学のきびしい父のアレクセイ・マクシモイッチ！
そう、君はゴーリキイの愛読者だといった。外国の友達、
君はモスクワで彼を迎える義務がある。
もうじきだ。
何うだ。この強烈な太陽の光！
君はこんなに強い、こんなに明るい太陽を見たことがあるか——太陽の国の友達？
「太陽の根源」——とピリニヤークは君の国のことをいった。
私はそれを疑うものでない——新しい太陽は民衆の中にいつでも、その根源を持っているから。
イリイッチのマウゾレイ（レニン廟）——何うだ、あの長い人間の行列！　君はあの人達と話すためには、百の国語を知っていなければならない。
勿論好奇心の群もいよう、また腹黒い国際スパイ群もい

よう。だが、そんなことは何うでもいいのだ、私にとっては。
イリイッチは最も人間らしい人間だった。また人間のうちの最も偉大な人間だった。
外国の友達——
これは人類の運命のために遠慮すべきではない！
君は、いつか、ロープノイ・ミエスト（昔の刑場）の中で鉄の鎖を見たといったね。
今では、あの鎖は取り去られている、あれは博物館の中にある。
それ、スパスカヤ・ワロータの時計が鳴っている——
一つ、二つ、三つ……
ワシリイ寺院の横から坂を下りてモスクワ河へ行こう
——おおモスクワ河が白く呼吸している、いそいで河へ行こう！

三

流氷、流氷——モスクワ河へ来た私の流氷だ！
外国の友達よ、君はいいところへ来た。
私はモスクワにいて、永い間流氷を見なかった。
見給えあんな巨きな氷が流れに来る！
ぶつかりあい、軋みあい、重りあい、はねあがり、渦巻いて、白い飛沫がはかない反抗を太陽にむかってつづけている！
私は昔ヴォルガの岸で「ロシアの母」といわれたヴォルガの岸で、
たった一人の姉と、このような流氷を見たことがある。
アレクセイ・マクシモイッチのいた町——
ニジニー・ノヴゴーロド、
姉はマーニャといって、君のような小さな身体をしていた、
やさしくて、そして、私には、世界で一番美しい女であった。
姉は「十月」の二年前に、田舎の小さな学校の宿舎で小さな児童達に取り囲まれながら死んで行った。
その頃、私達の国では、私達の田舎では医者を呼ぶことが出来なかった。喜んで呉れ、私の姉はかがやかしいサューズ（組合）の布に包まれて死んで行った！

その時——
姉は流氷を見ていたが、私を固く抱きかかえて言った
——
私達は流氷にさからい、ヴォルガをのぼって行くような気がしない、コーリャ？
私は呼んだ——
マーニャ、私は怖いよ！
私は流氷の上にたった二人で立っているような気がして

やさしい姉の胸にしがみついたのをはっきり覚えている。

四

それ、私達は今モスクワ河を河上の方へのぼって行くような気がするだろう。
だが、あまり、視つめるのはよせ、君は眩暈がするといけない。
何うだ、この河岸の人の群れ——糧をはこぶ蟻のようだ
——私達はまた一匹の蟻になっているのだ。
これは、トウエルスカヤ街の継続だ、キタノ・ゴーロドの継続だ。
工場の、職場の、学校の、ムゼイの図書館の継続だ。あすこに、赤い鼻をしてユダヤの画家のアリトマンが立っている——クレームリンのその室でイリイッチの横顔を描いた男だ。
だが——
今、私達は話しかけるのはよそう——彼は一人でいる方がよさそうだ——それに何か仕事を見つけているかも知れない。
おお、水の中をボートを漕いでいるものがいる！
危い、危い！　氷に触れようものなら粉微塵だ！
勿論、冒険だ、然し、わが国のあらゆる技術家はこの冒険を敢えてしている。
これこそ、自然を征服しようとする人間の健康な意志の表現だ。
あれは、有名な二人のスポーツマンだ、あの人達の技術は多分北氷洋の征服に役立つであろう。
見給え、一人は女のスポーツマンだ——女は流氷と流氷の間を危く通り抜けた！
ああ、白い飛沫の煙幕の中に呑まれてしまった！
心配しないでもいい——そら、女の櫂が太陽にむかって可愛いピオニールの掌のように、手招きしている。

五

絶え間ない注意ぶかさで、つづけられる白昼の冒険！
胸甲のように張りきった女の胸から蛇のように自由に動く白い二の腕、緊張しきった指の把握力！
橋の上の群集は烈しい拍手を送っている。
ブリエクラースノ！　ブリエクラースノ！
今、二人のスポーツマンは橋梁の下を矢のように疾走して行った。
片側の群集は他の側へ一勢に雪崩を打った——民謦は手をあげて群集を戒めている。

六

もう、スポーツマンの姿は、私達のところから見えない
——
然し、流氷は後から後から流れて来る。
いつまでつづくか私には解らない。
然し、もう、モスクワに春が来たのだ！
流氷の上に火が燃えている。つい先刻まであの上に人が
　いたのだ。
君は、この河の沿岸に、沢山の立派なコルホーズの出来
　かかっているのを知っているか？
いや、トルストイのコムミューンではない。
馬に乗ってゆくコムミューンではない。
然し、タンクとトラクターのコルホーズだ。
あの大食な農民、労働者、全勤労者を養う偉大な共同耕
　作だ！
いつか、よく晴れた日、私は君をコルホーズの春を見に
　つれて行こう。

燈台

金子光晴

一

そらのふかさをのぞいてはいけない。
そらのふかさには、
神さまがめじろおししている。
飴のようなエーテルにただよう、
天使の腋毛。
鷹のぬけ毛。
青銅(からかね)の灼けるような凄じい神さまたちのはだのにおい。
秤(かんかん)
そらのふかさをみつめてはいけない。
その眼はひかりでやきつぶされる。
そらのふかさからおりてくるものは、永劫にわたる権力
だ。

そらにさからうものへの
刑罰だ。

信心ふかいたましいだけがのぼる
そらのまんなかにつったった。
いっぽんのしろい蠟燭。
――燈台。

二

それこそは天の灯守(あかしもり)。海のみちしるべ。
（こころのまずしいものは 福(さいわい) なるかな。）
包茎。
禿頭のソクラテス。
薔薇の花のにおいを焚きこめる朝暾の、燈台の白堊にそうて辷りながら、おいらはそのまわりを一巡りする。
めやにだらけなこの眼が、はるばるといただきをながめる。
……三位一体。愛。不滅の真理。それら至上のことばの苗床。ながれる瑠璃のなかの、一滴の乳。
神さまたちの咳や、いきぎれが手にとるようにきこえるふかさで、

燈台はただよい、
燈台は、耳のようにそよぐ。

三

こころをうつす明鏡だというそらをかつては、忌みおそれ、
――神はいない。
と、おろかにも放言した。
それだのにいまこの身辺の神の、いましめのきびしいことはどうだ。うまれおちるということは、まず、このからだを神にうられたことだった。おいらたちのいのちは、神の富であり、犠とならば、すすみたってこのいのちをすてねばならないのだ。
……………………。
……………………。
つぶて、翼、唾、弾丸(たま)なにもとどかぬたかみで、安閑として、
神は下界をみおろしている。
かなしみ、憎み、天のくらやみを指して、おいらは叫んだ。
――それだ。そいつだ。そいつを曳ずりおろすんだ。

だが、おいらたち、おもいあがった神の冒瀆者、自由を
　求めるもののうえに、たちまち、冥罰はくだった。
雷鳴。
いや、いや、それは、
燈台の鼻っ先でぶんぶまわる
ひとつこい蠅ども。
威嚇するように雁行し、
つめたい歯をむきだしてひるがえる。

一つ
一つ
神託をのせた
五台の水上爆撃機。

しゃべり捲くれ

小熊秀雄

私は君に抗議しようというのではない、
――私の詩が、おしゃべりだと
いうことに就いてだ。
私はいま幸福なのだ
舌が廻るということが！
沈黙が卑屈の一種だということを
私は、よく知っているし、
沈黙が、何の意見を
表明したことにも
ならない事も知っているから――。
私はしゃべる、
若い詩人よ、君もしゃべり捲くれ
我々は、だまっているものを
どんどん黙殺して行進していい、
気取った詩人よ、
また見当ちがいの批評家よ、
私がおしゃべりなら
君は何だ――、
君は舌足らずではないか、
私は同じことを
二度繰り返すことを怖れる、
おしゃべりとは、それを二度三度
四度と繰り返すことを云うのだ、
私の詩は読者に何の強制する権利ももたない。
私は読者に素直に
うなずいて貰えればそれで、
私の詩の仕事の目的は終った、

私が誰のため調子づき――
君が誰のために舌がもつれているのか――
若し君がプロレタリア階級のために
舌がもつれているとすれば問題だ、
レーニンはうまいことを云った、
――集会で、だまっている者、
それは意見のない者だと思え、と
誰も君の口を割ってまで
君に階級的な事柄を
しゃべって貰おうとするものはないだろう。
我々は、いま多忙なんだ。
――発言はありませんか。
――それでは意見がないとみて
決議をいたします、だ
同志よ、この調子で仕事をすすめたらよい、
私は私の発言権の為めに、しゃべる
読者よ、
薔薇は口をもたないから
匂いをもって君の鼻へ語る、
月は、口をもたないから
光りをもって君の眼に語っている、
ところで詩人は何をもって語るべきか？
四人の女は、優に一人の男を
だまりこませる程に、
仲間の力をもって、しゃべり捲くるものだ、
プロレタリア詩人よ、
我々は大いに、しゃべったらよい、
仲間の結束をもって、
仲間の力をもって
敵を沈黙させるほどに
壮烈に――。

（一九三四年九月「詩精神」）

ヴォルガ河のために

ヴォルガ河よ、
わが友よ。
流れよ
私は君を見たこともなければ
また君の流れの響をきいたこともない。
ただ君が悠々たる水のかたまりを
睦続として、
どこからともなく下流にむかって、
押しだしていることを知っている、
しかも君は我々の住む同じ星の下にあってである、
星、瞬くものは数億であって

君の流れの響きもまた無限である、
ヴォルガよ、
春はここに一片の花を押し流して
岸辺、岸辺に、その花を寄せ、
また岸から引離して
水と花びらとは気の向いたままに
連れ立って行くであろう、
そして君の水面をすべる船には
見るからに質朴で頑丈な船人が
じっと水面をいつまでも見ながら
あるときは君にさからい、
あるときは君に柔順であるだろう、
もりあがるヴォルガの感情
それに答え得たところの
ここに平凡な様子をした男が
偉大な河に竿さして
降るのを私は想像する、

ああ、ヴォルガ河よ、
君はかつて幾度か裂けたであろう、
君はきっと怒りとウメキのために
立ちあがったであろう、
あの時銃は沈み
河底の泥に今でも深く突立っている

ムセ返る火薬の匂いは
君の流れの上に
かげろうのように漂った
うなだれて逃げる百姓の群を追って
肥えた馬にのった騎兵の一隊は
ヴォルガの岸辺で百姓達を
ことごとく滅ぼしてしまったであろう、
そのときヴォルガよ、
お前は、それらのことを目撃した、
お前は怒った、
歴史を流す河として
さまざまな事実を正しく反映した、
いまヴォルガ河よ、
沈着な河として
私達の喜びをお前に披露することができる、
岸に倒れた百姓は
ロシアの百姓であって
またロシアの百姓ではなかった、
世界の百姓として――、
ヴォルガ河を枕として永遠に眠った。
すでにして月は
イルミネーションとして君を飾る
君の沿岸に咲く野花の
なんとことごとく君の為めの花輪であろう、

すべてを冷静に眺めてきたヴォルガよ、
沈着な河、ヴォルガよ、
君はいま歴史を貫く国を、
貫いている、
正義の河と言えるだろう。

（一九三五年五月「詩精神」）

鶯の歌

それを待て、憤懣の夜の明け放されるのを
若い鶯たちの歌に依って
生活は彩られる
いくたびも、いくたびも
暁の瞬間がくりかえされた、
ほうほけきょ、ほうほけきょ、
だが、唯の一度も同じような暁はなかった。
そうだ、鶯よ、君は生活の暗さに眼を掩うなかれ
君はそこから首尾一貫した
よろこびの歌を曳きずりだせ
夜から暁にかけて
ほうほけきょ、ほうほけきょ、
新しい生活のタイプをつくるために
枝から枝へ渡りあるけ
そして最も位置のよい
反響するところを
ほうほけきょ、ほうほけきょ、
谷から谷へ鳴いてとおれ
既にして饑餓の歌は陳腐だ
それほどにも遠いところから
われらは飢と共にやってきた
悲しみの歌は尽きてしまった
残っているものは喜びの歌ばかりだ。

伏字

さかい・とくぞう
（発表名　世田三郎）

×「名乗れ！　そこの覆面の奴！」
○「名乗れと？　おまえこそ云え。おまえが名乗れば云って聞かせぬでもない」
×「何だと？　うん、そうか。おれは『××』だ」
○「『××』？　そんな名前はない。だが、それでいいなら、おれも明かせる。おれは『〇〇』だ」

×「『〇〇』？　そうか。それじゃ、わかった。おまえとおれとで『××〇〇』だわかったか」
〇「おや。あいつは何だ？
　同じ覆面で
　あの暗がりに立っている奴！」
×「気味のわるい奴だ、とっちめてやれ！」
〇「やい、おまえは何だ？　名乗れ！」
×「覆面をとれ！」
△「おお、ねむい。おれか？　おれは『△△』だ。
覆面は御免だ。
これ以上は云えぬ。以下ならいつでも」
×「お。まだ、覆面が。名乗れ！」
〇「名乗れ、そいつ！　そこの汚い奴！」
…「名乗れと？　汚い奴？　ハハハハ　御自分の面は、
どうだ？　覆面め！
聞かせてやろうか？　おれは『…………………………。
…………』
おどろいたか？　ハハハハ」
×「アキレた奴だ」

…「今の、はやりっ子だ！」
〇「アキレた奴だ」
（一九三六年五月「百万人の哄笑」より）

青酸カリ時代

坊ちゃん嬢ちゃんも昆虫標本の
漂白に使う青酸カリ。
紅茶にもって一瞬間
三千円奪った青酸カリ。
一日で捕まりはしたが効果はテキメン。

これを世界に名もたかい
徳川伝来のハラキリ国、

情死ずきの、自殺ずきの
ヤマトの国の善男善女が
呑んでは死に、呑んでは死ぬ。

三原山ゆくには波があれる
アソの火口は汽車賃がカサばる
ケゴンの滝はもう首だよ、

ボクも、アタシも青酸カリ
今をときめく青酸カリ時代。

田園にうちつづく凶作こそ
「政治」の調合する青酸カリ
街頭にルンペンさせる失業こそ
「経済」の処方する青酸カリ
暮らしに泣かせる貧乏こそ
「社会」の呑ませる青酸カリだ。

こんな青酸カリを吐き出さず
こんな青酸カリを投げすてず
「ボクにも青酸カリ」
「アタシにも青酸カリ」
呑んで死に、呑んでは死ぬ
ハラキリ国の善男善女。

（一九三六年五月「百万人の哄笑」より）

英語ぎらい

壺井繁治

ある朝、新聞読んで驚いた
P・C・Lの有名な唱い手が
月給日の帰り途
さるバーで
カンカンの国粋団員にぶん殴られた
一杯機嫌で
お得意の唄を英語でうたったのがもとで

どうも物騒な世の中になったもんだ
ところが、どうだ
その国粋主義者共も
国粋的でないビールを
きこし召しての上だから面白い

僕はこの記事を読みながら考えてみた
この野郎共
そんなに英語がきらいなら

一つ仇討ちか武者修業の積りで
日本国中隅から隅まで
英語を喋る人間を
片っ端からぶん殴って歩いてみたらどんなものだろうと
差向き奴等の仇は英語の先生だ
けれど土地こそ狭けれ
日本はなかなか教育の盛んな国柄なので
英語教師の数も千や二千に止まらぬだろう
だから如何に筋金入りの国粋主義者の腕と雖も
それはなかなか骨だろうて

僕は思い出す
神田の仏英和女学校が
香りゆかしく白百合女学校と改称されたのを
「非常時」前まではその女学校も
元の名前で通ったものだが
仏が頭で
英が胴で
肝心の和が
足になり下っているのが怪しからぬとて
遂に白百合女学校と改称されたそうな
おお、この筆法論理で行けば
一体字引の名前はどうなるのだ
和英辞典は先ずよいとして

英和辞典はどうなるのだ
呪われたる英語よ
フランス語よ
ドイツ語よ
ロシア語よ
その他一切の外国語よ
即刻日本から消えてなくなれ
そうすりゃ
あの国粋主義者共も安心して
バーでゆっくりとうまいビールが飲め
酔いの廻るにつれて
英語の唄になんぞ邪魔されず
浪花節でも何でも唸れるだろう

誰だ？
バーは英語だと野次る奴は！
それには酒場という立派な日本名があるじゃないか？
そんなら
君達が今飲んでるビールは？
これは麦酒だ
いや、ムギザケと国粋流に読むんだよ。

横光利一の洋行

遠地輝武

いつの間にか私も神様の列に加わり
とかく手足をのばすのが
俗な日本ではやりにくくなった。
ああ　なぜ斯うも日本人は神様が好きで
『春は馬車にのって』陽気な感覚にうかれて来た私をまで
『純粋小説』の神様なんぞ　というのだろう
　どこのポーズが私に純粋であるか
誰が私を神がかりだとふれ歩くのであるか
　それは讃め言葉であろうか
或は私を金しばりにする捕吏の手錠でもあろうか
容易ならぬ敗残のあせりが
私の気分をかきむしりに来るようだ
手には脂がしみている
眠れば悪汗をおぼえる
こりゃ本当に私も
神がかりの地獄におっこちたのかな
いいや、ここで私はとり乱してはならぬ
この永年守って来たポーズをくずしてはならぬ
だが、こんなにも街頭いたるところに神様の宣伝がなされたのじゃ……
うむ、しばらく避難しよう
恰度、年配からいっても休息のほしい年頃だし
ここいらで赤毛布——
ちょっぴりはめをはずすのも新しい神様に似合の手だて
……

かくてわが横光利一はパスポートの下付を願い出る。
下界の切符を買う
わが純粋小説界はしばらく神無しの寂寥さに壊滅する。

（一九三六年四月「詩人」）

朝へ行く

平林彪吾
（発表名　松元　実）

午前六時
私はアングルにまたがる

クレーンはアングルをよこす
私はつかんでひきよせる
リベットはやける
鉄と鉄をしめつける
それは私の仕事だ。

午前六時
私は言う
集会と云うのがたたかいだ
「異議なし」と闘く
私は誇る、
仕事は進む、
「異議あり」という
仕事は練れる
夜更け
昂奮の顔を風に冷やして帰る
夜更け
今日の思想を消化し
明日の仕事に輝いて帰る

歩く足、大地につけて
一歩も一歩も
私は進む、夜明けに連る道
十二時、私は眠る
明日の仕事が寝て来いという
私は眠る、私は眠る
疲労が逃げて、朝が起す

午前六時
私はアングルにまたがる
だが、位置はちがう
おとついのアングルは縦に立ち
きのうのアングルは横に架る
そして今日
私は胴腹をしめる
仕事は進む、夜明けに連る道を
私たちは進む
おお、棟上げは迫る。

（一九三四年十月「詩精神」）

鋲打工

田木繁

手早く鋲孔へ持って行く。下から当盤あてがう。ニューマチクの乱打。がもう次の奴が背後まできているのだ。び

ゅうと風を切って。ぷんと焼鉄の匂いをあたりに撒きちらして。間一髪、俺は身をかわす。左手をあげて受止める。油断も隙もあったものでない。がかわせばかわすほど、ますます意地になってくるお前だ。ますます激しく飛来する焼鋲の数だ。こうして俺の努力が、ただお前を意地にさせるだけの努力だとすれば、俺にとってはもう頭を割らせてやる外に、手はないに違いない。所詮ぶち割られてしまう外はない俺の頭に違いない。よし、そんなにそれを望むお前なら、それで気の晴れるお前なら、見事、焼鋲受損じてやろう。頭の一つ位、割られたところで何であろう。額にで、熱気を頰に感じて、今度は振りかえらぬ。頭をわざわざその方へ持って行く。望みどおり俺を傷つけ、ほっと息焼型ついたところで、何であろう。既に焼鋲の匂いを嗅いづくお前の顔を思い浮べながら。

（一九三四・六・一五）

帯鋸

一分間九百廻転、水も止まらず斬っておとす帯鋸。それと交る直角の一点狙って、紙一重の厚さに角材の木口を喰らわせる。それからさきは端取りのお前まかせ。テーブルの向側に待構えたお前の掘り加減引き加減。一等品になるか二等品になるか。私はするする引かれて行く、角材に乗りかかって。私の身体もお前にまかせた、生かそうと殺そうと。ただお前への信頼のために、この廻転する白い歯へ近づいて行く。コロリ、五本の指を削りおとす位、わけはない。力をこめてお前はひききる。ひきじりで軽く鋸の背を衝く。憂然！　忽ちはねあがる帯鋸、天井高く。返す刀で真向から斬ってかかる。鼻筋から胴体へかけて。声もあげ得ず、私はその場へひっくりかえる。割目からさっと血しぶきを迸らせながら。

（一九三四・一〇・二五）

極めて家庭的に

木村好子

すそを吹き上げる
北風は凍り
おおいのない、野天の井戸
洗い物をしぼる手はまっ赤

お前は温順
お前は過去の女
ぱっと冷いしぶきがとびかかる

私は空を仰いだ
くらくらと瞼をおおう
おもい冬空

生活はつづく
新しいものと
古いものが
ごっちゃになってどんでんがえり
新しいモラルの前では
或る女たちが特権を以て針を折り
ひしゃくを投げすて
昨日のくびきをふりほどく

そこには
栓をひねればお湯がとび出す
手をよごさずとも
夫に清潔なカラーをつけさせることが出来る
御馳走も思いのままに……
ゆたかな温床が用意されている

特権をもたない女たちは悲惨だ
自我を失い
個性を失い
文化に背を向けて
パチパチ炭火を煽って飯をたき
あかがね色の庖丁で
菜っぱをきざむ
己れをきざむ
古いわだちにすべりこみ
極めて家庭的な荊棘の冠をいただかねばならない

お前よだがほこりもて
家庭の女よ
やさしく、つよく
冬空の下で、洗え
洗え……
日本の女の無知と曚昧を――

（一九三六年三月「詩人」）

河

北川冬彦

雨にくもる河、河は、息をひそめまるで流れるのをぴったり止めたようだ。

雨のスダレ越しの向う岸の村で、またも銃声が起った。

嗚呼、悲しいことだ、

悲しいのは河づらを叩く雨の音ではない、悲しみは、村の家々に打ち籠められたのだ、壁にしみとおるほど。

泥まみれになりつつ人々は、歩きつづけている、銃を杖に、どこまで歩みつづけねばならんのだろう。

雨にくもる河、カラリと霽れ、

帆を垂れた船の上に、人が髓のような首をかしげ、

ポカンと口を開けて、青い雲間に見入っている、

耳底に薄気味のわるい銃声をのこして、

この人、河を下る途々いく度びこんな経験に出会したことだ！

河はまた雨にくもり、くもり、暗くゆったりと流れている。

稲作挿話

宮沢賢治

あすこの田はねえ
あの種類では窒素があんまり多過ぎるから
もうきっぱりと灌水（みず）を切ってね
三番除草はしないんだ
……一しんに畔を走って来て
　青田のなかに汗拭くその子……
燐酸がまだ残っていない？
みんな使った？
それではもしもこの天候が
これから五日続いたら
あの枝垂れ葉をねえ
斯ういう風な枝垂れ葉をねえ
むしってとってしまうんだ
……せわしくうなずき汗拭くその子
　冬講習に来たときは
一年はたらいたあととは言え

まだかがやかな苹果のわらいをもっていた
　いまはもう日を汗に焼け
　幾夜の不眠にやつれている……
それからいいかい
今月末にあの稲が
君の胸より延びたらねえ
ちょうどシャツの上のボタンを定規にしてねえ
　葉尖を刈ってしまうんだ
……汗だけでない
　泪も拭いているんだな……
君が自分でかんがえた
あの田もすっかり見てきたよ
陸羽一三二号のほうね
肥えも少しもむらがないし
いかにも強く育っている
硫安だってきみが自分で播いたろう
みんながいろいろ云うだろうが
あっちは少しも心配ない
反当三石二斗なら
もうきまったと云っていい
しっかりやるんだよ
これからの本当の勉強はねえ
テニスをしながら商売の先生から
義理で教わることでないんだ

きみのようにさ
吹雪やわずかの仕事のひまで
泣きながら
からだに刻んでゆく勉強が
まもなくぐんぐん強い芽を噴いて
どこまでのびるかわからない
それがこれからのあたらしい学問のはじまりなんだ
ではさようなら
……雪からも風からも
　透明な力が
そのこどもに
そそぎくだれ……
昭和二年七月十日（作品一〇八二）
　附記　これは故人が農事相談所などを中心に
働いていたころの作品である。

もうろくずきん

――おやじが家出をする。出稼ぎとは話が好すぎる――

萩原恭次郎

「達者でのう……」
「達者でのう……」
寄って来た隣り近所のもうろくずきんにかこまれて、五十のおやじは野良着を首からつるしたさしこの手袋をはずして押入れから年に幾度も着ない胴着を出して身ごしらえをする。
庭には麦ふみに出かける足を休めて、黙り勝ちに囁き合っている近所の女達。やはり厚ぼたい黒い布をかぶっている。
家の中では切ないかみさんやむすこ等が障子のかげや冷い炉ばたでちぢかまり、「行って来てくんろ」とはなをかんでいる。
「うん、うん」おやじは誰の顔も見ないで陽に焼けたひげ面だけちょこんと出して、野良もも引にまといつくキモノのしりをはしおる。
「達者でのう……」
「達者でのう……」
庭に出たおやじを、たくさんの女や男のもうろくずきんが一度にどやどやととり巻いて言った。
「後はのう……」
「後はのう……」
出来るだけ世話をやるよと心に誓いながら女らは肩に手をかけるようにして言った。
おやじはひげ面だけ動かして、何かに衝たれ通してやるような顔をしている。たおたおした毛の馬はおやじに引かれて馬小舎から出る残りのかいばをもぐもぐ食っている。長い尾が風に吹かれる。
おやじと男女の見送りのもうろく達が畑を越して坂に別れて、一人おやじが坂角に消えたとき、
「後はたのんまあす……」というしわがれ声が、みなの頭を貫ぬいた。
その声は冬になるともうろくずきんに筒砲半纏、氷る暗い四時には肩にふとんをあて、生木かつぎ出しにゆく、その肩になんとひびいたか。雪嵐に吹かれつつ一里二里の山深くで松葉かきする。そのひび割れた太い手になんとひびいたか。夜は荒縄ないその硬ばったてのひらに何とひびいたか。もうろく達はつむじ風のように、おやじの後を追って行った。

（註）もうろくずきん……厚ぼったい木綿の紺や黒の頭布兼襟巻。冬になると私の生れた地方（百姓）は、これを唯一の防寒具とする。雪の日なぞも傘も持たず、もうろくの上に雪をつもらせて、馬を引いたりして行く。

コップ酒屋にいる男の群

伊藤　和

町に行きコップ酒屋のノレンをくぐる
安い酒を一杯　注文する
土間をあらいざらい電灯が照している
萎びた瓜漬を噛んでは牛のように舌を出し醬油のジャミた唇を舐め
百姓の仲間がいる、土方の仲間がいる、馬車挽の仲間がいる
おいらはみんな安い酒一杯や二杯では酔わない唇を舐めずる
なにしろ腹の虫がおさまらない
モウ一杯から　二杯となり五杯六杯と重ね酔ってくる

コップ酒屋にいる男の群！
おいらをヤクザ者と告げるお定りのりんしょく共はここにはいない
あいつ等はたぶん貯金をする話をし政府をほめながらあいつ等の家にいる
何も持たないヤクザ者には困るとあいつ等が云う、そしておいらはコップ酒屋の腰掛にいる
そうだここにおいらが酔っている
馬のように達者で、いくらでも呑みたい唇を舐めずり空なるコップを冷笑し
また　腕と腕が唸りミケンから血を流すそんな喧嘩もやり
おいらの眼はあいつらが震えるほど坐っている
全く　それならば何の喧嘩をさせるのかなんて理窟はヤボなことだ
喧嘩でもなんでもやるときにはやる
酒がむかつく　コップ酒
コップ酒屋に来て見て驚く奴には毒だ
おいらが酔っている
で、結局　血を拭ってまた呑み直しおいらは大いに笑う

船方　一

ふるさとへの歌

おれの故郷は隅田川

そのふるさと　隅田川を
見ぬこと――七年
お前　隅田の流れは　その河岸は
いかに変ったことだろう

石川島造船所の機械のひびきが耳をうち
クレーンの動きが瞼にうつる稲荷橋の下
そこにつながれた五十噸たらずの石炭船
「山本丸十三号」
それはおれにとって忘れることのできない
「揺籃」だ

七年――この歳月は　くるしい闘いの明けくれは
一人の船頭の子に　くらしに屈せぬものを
くらしのこくのある味を
ねっとりとたたきこんでくれた
赤銅色のこのからだに　はらわたに

闘いへの道は揺れ　気もちはうきしずみ
仕事のあてはないこのごろ
せめてはむかしの想い出にひたるとき
思うともなくうかんでくるのは　ふるさとのこと
お前――隅田川のこと

のぼりくだりの小蒸汽の警笛　伝馬船の櫓のきしみ
行商船のよび声　河岸のともしび・電車のひびき
あかあかとたかれた寒さをしのぐ石炭の火
千住大橋から永代橋までの数々の橋　無数の枝河
しずかに眼をとじ　ねころべば
これらむかしのありさまが
腹の底から眼頭へまで
なまあたたかいものとなって
ながれだしこみあげてくる

ごみや流油　木片やわらむしろ
犬や猫の死骸　ときには人間の死骸
さまざまの道具やそのこわれ切れっぱし
水にうかぶありとあらゆるものの流れ

川のにおい　川の呼吸
吸う息――上げ潮六時間
吐く息――下げ潮六時間
二十四時間ふた呼吸
その呼吸――その流れによって
かまや茶わんがあらわれ　米がかしがれ
たき木がつくられ　お茶がわかされ（註）
仕事着やからだがあらわれてゆく
そこにはおれたち船頭のあらあらしい
またものかなしい河から河へのくらしが流れてる

酒とばくち　女郎買と浪花節
ときにはおなじ労働者からさえ
さげすまれ　わらわれる
無智そのもののような船頭たちのくらし
だがその船頭たちも「京浜船夫労働組合」をつくりあげ
くらしを守るたたかいの旗をかかげ
ときにはいくつかの勝ちどきをあげた
一九三一、二年ごろの
あの歴史的な闘いの浪のたかまりと共に

いまかつての反抗や憤懣は夢のごとく
もくもくと櫓を押し棹をさしている船頭たち
なりをひそめて流れる隅田川

だがおれは信じる　信じたい
お前の河面に旗ひるがえる日のくることを
お前の流れに歌声なりひびく日のくることを

川よ　隅田川よ　ふるさとよ　なかまらよ
その日のために　そのために
おもいをかため　ほりさげて
「いばらの道」をふみしめぬこう
今日のくらさのなかに生きぬこう

一九三五・一

註　水上生活者は河に流れている木ぎれをひろってたき木にし、買うことはほとんどない。また大正五六年頃までは、隅田川の吾妻橋より上流へ行くと川の水がのめたものである。

附記　船頭は隅田川を大川とよんで隅田川とよばないが、ここでは隅田川としておく。

船底修理

松永浩介

いきなり　梯子(タラップ)を降りて行く
瞳孔奴、めんくらってお先まっくら。
むッと鼻をつくいきれた空気。
ぶらぶらする肩の道具袋。
すべる足もとたしかめ、降りて行く汽罐場(かまば)

ぐわん、ぐわん、ぐわん、
鉄橋を叩く音がまともにくる。
——通風筒(ベンチレーター)から落ちてくる風
ボイラーを掃除する火夫
石炭倉庫(コールバンガ)をつくろう製罐屋
——まるでうごめいている虫だ。
俺のも顔あんなにどす黒いかな？　埃と汗で
——眼がなれて来た。

「ぐずぐずするねい、日が暮れるぞ！」
道具もおろさぬ先に俺達は煽りつける

だが、奴等はすましたもんだ
「大工ッ！　急いでは事を仕損じる……」
笑いが何処かでおさえられている。
明日の出帆　やり切り仕舞いの仕事だ。

コロコロコロとふいごからほうられる
有がたくもねえまっかなリベット、汗の原料。
素早く穴へさしこむが早いか
まちかまえたハンマーが交互に打ちおろされる
はじかれまいと懸命なボーシン
はずされまいと必死にふんがまえる当盤(あてばん)
けちりんのすきもない四人の呼吸
ひしがれた生活(くらし)の怒りか？
ひきしまったその時の仲間の顔
そこにこそ、奴等の着実を見出そう。
もりあがった肩にペットリ吸いつくシャツ
——光明丹がしみついて——

百十度　流れる汗
いきれと疲労でみんなだまりこむ
ひとしきり
鉄板のわめきが船底をこだまする
ボー　ボー　ボー
警笛をならし

おっつけ迎えの蒸汽(ふね)がくる
夕日が泳ぐ波の上

涼風にはだけた胸をなぶらせて
猥談に一日の疲れを笑いとばす
夏の沖仕事の帰りはごくらくだ
仕事の山も見えて、終業(へげ)間近。
——ぶざまな顔に笑いが浮ぶ
「さあ、もうひと息がんばろうぜ」
互いに示しあわせて
さて……
次の仕事にと移る仲間達。

サガレンの浮浪者

広海太治

ただようてくる温(あ)ったかい三平汁(さんぺいじる)の香(におい)
堪え兼ねて牧草の束に顔を埋める
しのび寄る背筋の冷さ
浅い眠りの夢は破れる
ああ！　一杯の飯を食いたい

赤い毛布(けっと)を巻きつけた　むくんだ足
寒気は骨(しん)の中まで突き通す
伸び放題の鼻ひげに
呼吸(いき)は霜をたくわえ
鼻孔はきんきんとひからびる

破目板の隙間から躍り込む風
小屋に舞う雪神楽
やがて粉雪はうず高く層を重ねる
辛うじて乾草の小屋に宿り
打ち震え闇の中に聞く
猛けるサガレンの夜の吹雪

凍(しば)れる大地の呻きを聞き
凍傷の指先にガンジキの紐結び
北極星の白い光を仰ぎ見た幾夜か
たった一尾の干鱈を盗む為に
野良犬のように漁場の闇に足音忍んだ
沢の百姓のささくれた手から馬鈴薯(じゃがいも)貰い
露命支えた幾日であったか

とど、えぞの生え繁る山々
深い熊笹の峯々

背丈より高い蕗の密生する沢の湿地で
、、、た棒頭の、、が嚇し続ける
豊真鉄道工事場で精根枯らして働き倒れる章魚人夫

朝霧が山襞に立ちこめる頃
露に光る虎杖の群落踏み折り現場へ送られ
鶴嘴とスコップと畚(もっこ)と
口汚ねえ棒頭の罵声と
ぴんたと棒に追い捲くられ
星屑戴いて飯場へ戻る裸体(はだか)の章魚人夫

片言の日本語　一言云うた
――ヤボ！返事ぬかすか生いうか
棒頭の拳が唸り
へたへたと草の上にへたばった朝鮮人　金
吹きだす二筋の血汐
ぶち折られた前歯
唯　ぎろりと睨み返す
終業(しまい)が他の現場より遅いと云うただけなのだ
流れる鼻血に怯え声挙げて泣きだした少年金の弟

嶽土を掘り崩しトロで運び
山のどてっ腹へ風穴開ける
雲突く橋脚(ピーヤ)の足場組立

綱を結んで丸太つたう瞬間(とき)
ぐらつく頂上(てっぺん)から芋虫の様に転落した仲間
叩きつけられ腹は裂け
おんこの幹に肉片が散らばった
血は倒れた蕗の葉に生臭い斑点を浴せ水溜りにとけた
不様(ぶざま)に潰れた肉体が土饅頭と変り果て
雑草の根にからまれ白骨となってしまっても
あいつの肉親は何にも知る事は出来ない

シベリア嵐が丸太小屋を揺がし
軒の氷柱が伸びては太り
節くれだっては崩れ落ちる章魚部屋で
白樺(がんぴ)の根っこいぶし
若芽と馬鈴薯(じゃがいも)、塩鱒の汁も食い倦きて
又来る南樺太の四月
兎は残雪の谷間に木の芽立ちをさがし
野地(やち)だもの梢もふくらんだ
雨が雪をとかし夜の寒気に又凍(しば)れるサガレンの春
未だ絞り残した肉体が俺達にはあったのか
古い仲間と欺されて来た新しい章魚と
砂と岩石と土埃と
棒頭の、、と

日を追うて枕木(スリッパ)の数はふえ鉄路は伸びた

隧道は骨をしゃぶって口を開け
鉄橋は血をすすって谷を跨いだ
章魚は建設車で奥地へ送られ
土砂を担い崖土を崩し
岩盤砕きトロッコを押し
俺達の足が折れ
腕が千切れ
盲目となり
血へど吐いて棒頭の丶丶を頭で殴った

毛だらけの腕振り廻し喧嘩する俺の相棒
鶴嘴の利く事が得意で
トロを威張り指で五寸釘曲げて力む
――俺の肋骨一枚骨だで弾丸だて通らぬサ
夜の飯場で胸板ひろげる奴
奴の女房へ着かないだろう手紙書いてやる俺
上りを片っ端から焼酎にしぷんぷん臭い顔すりつける奴
だが
バットの一箱そっとくれ
むくれた俺の足をさすり
小廻りの荷駄手伝ってくれた奴
滝の沢口の隧道で
崩土にやられた仲間達の中に

地下足袋片っ方引っ懸けて掘り出されて来た奴
唇は紫に破れ血はへばり
傷だらけの胸にはもう動悸が無い

真夜中の飯場の外で唸き声が聞える
樺太犬が鈍く吠えた
飛丁だぞ！
棒頭達がどたどた崩れ出た
暗闇の中に丶丶が峯を揺った
逃げ遅れ窓下に這いつくばった仲間
きれぎれに悲鳴を挙げた
ならならと並べられた逆釘の板莚
疲れ切った俺達の脳髄へ針を突き通す
夜っぴて谷底から聞えてくる呻き
明け方の草の上に伸びている
水漬けされた仲間の死骸

豊原と真岡の市街地の空に煙火打ち挙げ
鉄道事務所は日章旗で飾られる
鉄道開通だ　開通祝賀会だ
未開の宝庫が開かれた
豪商　請負者　利権政治家　庁と庁鉄の高官達が新線の
　車窓に乾杯する頃
土塊の様に投り出された章魚人夫

歯車一枚二枚で宗谷海峡は渡れない
サガレンの慌しい秋が去って
季節の風はカムチャッカから
シベリヤから雪と氷をともなった

今更がつがつと残飯を貰い
ぼろマントに逃げ去る体温を止めなければならないのか
何故この積雪の上に循環不順の心臓を破裂させ
人間の脱殻をぶち捨てて仕舞わないのだ

雪は陸と海を覆い
昆布一切れも見えぬ海端
ゴメと烏はひらひらと流氷の上を飛び交い
ぬくもりのない光を反射する太陽
赤ただれた雪盲はまぶしく
水腫れた足を曳ずる

流氷の張りつめた海原の雪に
俺はガンジキの足跡残す
はるかな氷流の下をひたひたと洗う潮
青空を流れゆく白雲
振り返る陸(おか)は低く連り
点接する白樺の裸木
豊真線の雪をけって

俺達の俺達の鉄路に
汽車はひえびえと警笛をひびかす

氷塊の間隙に水音たてるのだ
病み疲れた肉体
ゆらゆらと漂流している俺の肉体
氷下魚(かんかい)は死屍に群り
雪はうず高く覆い
潮は打ち寄せては凝結し
真白い氷の棺となり
潮流にのせて海峡を北へ葬送するのであろうに

ああだが！
荒み果てた俺の心の隅っこにも
せめぎ切れぬ人の面影
海峡二つの彼方の内地には
齢老いたお母あが居るのだ
俺を此のどん底へ追いつめた生活のきずながあるのだ
今はもう畑一切れもないさびれた故郷の村があるのだ

水平線の果て波浪は輝(きらめ)き
赤々と沈む太陽
焼ける雪　たぎりたつ波
照り返す　波と雲と

落陽と氷流と
とろける赤と金色
生きている！
陸も海も　天地いっぱい
ああ何にも生きている世界だ

ぼろっ切れを投げ捨てろ
胸を　胸の皮引き剝がして仕舞え
ぐっと胸突きあげてくるもの
そいつが空いっぱい氾濫するのだ
今！
大陸へ沈む太陽
赤い翼翻ってシベリヤを越え
ロシヤの空に暁の訪れをするのだ

俺は大口開き頰すじ落ちる涙をなめて
せまる思いの胸をはだけ
夕焼の光をぐっと呑み込む

明日の為に！　此の傷いた身心を曳ずろう
何処までも何時までも曳ずって行こう
ぶたれけられてもしつこく生き伸びてやろう
生きる為に体温をくわえ
大地の氷の解ける春を待とう
サガレンの赤い夕焼を死んで行った仲間達に代って
生れ変った浮浪者の肉としよう
呻いている　生きている　戦っている
無数の労働者の為に血に変えよう

註　ガンジキとはズックの履物の一種。
　氷下魚とは結氷の下にセイソクする小魚。

鉄骨工事場

大元清二郎

ガンガガガ。
恐ろしい勢で犇めきあってついてくる。
空気槌（ニューマチック）で頭を叩くたんびに、ぱちぱちと弾ぜる。かかめられると黒く冷えて無表情に縮こまる。鋲（リベット）。
空気槌（ニューマチック）を押す男の腕に、陽が照り焦げる。もれあがって躍動する血管。白く浮いている顔をしかめる響と轟。

大きな鉄骨にへばりついて労働く男達。巨大な建築も小
さな蟻がたてるのだ。

仕事が終ると男達の眼は空間を睨んでいる。
「阿呆みたいな顔だ。耳が遠くなっているからである。
錆どめの光明円と汗で赤い模様を書いているシャツ。
油と埃とでどす黒い顔も。
熔鉱炉で焼かれた。鋲。鋏で放りあげられる。
「やっ」
石油錐をへしまげて作ったミットがそれを受ける。鉄板
と鉄板の合せ目の穴へ差込まれる。空気槌が噛みつい
てゆくのだ。まるで狂犬みたいに。

光明円の赤い色が眼の底でじりじり焦げる。痛い灼けつ
いてくる。太陽。ふいてもふいても流れるしずく汗。
汗。
鋲付をやっている男達に、汗を拭く時間を与えてやりた
い。
氷水の一杯も飲ましてやりたい。
自ら集団となって欲するものを要求するがいい。怒れる
如く歯を噛みしめて、空気槌をささえて打つ男達。
今日も鉄骨工事場の日は。
暮れようとしているぞ。

(一九三四、五、一七作品)

この詩は田木君との競作で、田木君の詩は僕が自分
働いている職場へ連れてきた後、作ったものです。
労働者とインテリが同じものを作った事について併
せて読んでもらえるとうれしくまたたのしい。

「書き終って」

浜辺

鈴木浅五郎

ホーッ、吐く息が今朝も白々煙を上す
熱い麦飯をおつけと香々で食う旨さ
千切った新聞紙詰めて、地下足袋はき
車のかじ棒しっかり握って、始まる俺の生活、あっちに
もこっちにも
漁師町は労働者の洪水、新しい魚
腐りかけた魚の血の臭が、はんらんし
浜は鰯の大漁だ、屈強な男どもは
めいめいに訳のわからぬ事をわめき
走り止り右往左往する女房共は

負けずにゴム長をはいて、口々に怒鳴り合い、叫び声を
　あげながら立廻る

岸壁につけた伝馬舟、舟べりが水にひたひた漬かり相、
　つるに布を巻きつけた大馬穴
胴迄はいたゴム長が腰迄ふんごむ鰯の山だ
女房共が、かつぎ下す空籠
馬穴四杯で一杯だ、替りだ替りだ
籠一百余り下しとけ
年々歳々幾隻かの舟と、たくましい赤銅の肌、幾つかを
　のみ込む川口は、白龍の舌
乗り上げ易い暗礁は、明神様だ、
川口を入る船は、必ずパラパラと得物を振りかけて敬遠
　する

両岸から追った防波堤、二隻横へは並べぬ狭さ、其処を
　目がけて突進する舳
ずんぶり漬って切る波、船脚に馬力半分減ってる嬉しさ
櫓を押さえて狭口近く待機する買手の伝馬群
旗立てて入り来る船へ、一せいにたったっと波を刻む、
　入り来る舟の舳先に立って、制止する太い潮風の声も
　聞かばこそ、正面より円陣つくり
餌に集う魚の様に、ひたひたと漕ぎ寄せるすき間ない伝
　馬群の包囲に進路迷った
舟はかじ取りの迫った絶叫と共に、避けそこねて狼狽す
　る、一隻とても無く、めりめりと突き進める
速力の緩んだ其のひまに、もやひ綱持って飛移り、かえ
　り見上げようともせぬ彼等、

目前の利欲にのみ心する買手
岸より乗り込んだ舟主と相場の折衝
舟主はどてら着込み、ユラリと落ち着いて唯黙して居
　る、買手は銀鱗のぎっしり詰った舟艘をにらみ焦り、
　唯いたずらに利益を遠ざけ、相場のみ競り上げる
ギリギリ切り詰めて、之こそはいささかの手違いあれば
　立ちゆかぬまでに追い込んで、
其処で始めて気の合う彼等だ、舟主は肥え買手はやせる
さて買って岸壁にぎっしり並んだ籠、
其処から直ぐに俺等の番だ、天びん通してかついで積ん
　で、車がらがらきしりに軋る
昼飯あ一時になろうと三時だろうとかまわねえ
焚場に崩した鰯の山々、網場近けりゃキラキラこぼれる
　し、網場遠けりゃグジャグジャ腐る
血汁が、煮汁が、鱗がへばり、赤さび黒さびもも引じゅ
　ばん、夫婦揃って鉢巻細帯
今日も夜明し一玉五銭、二人で一百焚こうぜ、ふんば
　れ、煮湯たぎらせ、薪は俺らの物じゃあねえ。

（一九三六年一月「詩人」創刊号）

走れ！　トロッコ

赤石　茂

カラリと晴れた青い空
遠く葦の穂が白く波打っている
此の河原はトロの現場だ
向い岸では五噸の機関車が走り
エキスカが土堤をえぐり
浚渫船が逞しい腕を振り上げている
新河工事だ

磧から土堤まで五六丁
捨場の近くは
肩を入れねば上らないトロだ
相棒はすばやくスコをさしこみ歯止をする
俺は箱をでんぐりがえし
トロの車体に手をかける
さあ！　やろうぜ……
掛声もろとも　砂をぶちあける

ガタン！
車輪とレールのかち合う音は鋭く
太い溜息と共に思わず我にかえる
箱を乗せ歯止のスコをほり上げると相棒の奴
その中でお客さん面してやがる
仕方のねえ野郎だ！
うんと一押力を入れりゃ
ガアガアガアトロはカーブを切って走り出す。

底へ行く程河原の砂は
水を喰って重いのだ
相棒も一心不乱に　トロの土取（どとり）だ
「工営所じゃ工事が捗らんと吐かして　来月から請負や
　そうな」
「そうすれや工事は安上りで　奴ら甘い汁が吸えるて肚
　だろう」
「そのかわり俺らにゃ　出面は下るし亦馘首が半分程出
　るぜ」
今朝箱番の小使に聞いたと云う
三番トロの新公の話
――おい三番トロ、盛りが少いぞ――
何時の間に来たのか親爺のガンガラ声
「ごてくさ云うねえ　親方は日の丸だ」
何時にない新公の凄い鼻息

親爺もこれには顔負けだと笑ってやがる
　朝は早よから居残りまでも
　トロでミキサの砂はこび
　俺らは積役運び役
　　親爺は現場で睨み役……

一町たらずの小作では
飯の食えない俺達
秋の収穫(とりいれ)もそこそこに
豆撒き大根ひきは女房子供にまかしきり
米の相場は上っても
水害(みそ)や害虫(むし)にやられた田は
今年も不作だ。

此の寒空に年の暮を控えて
仕事をとられりゃどうなるだよ！
裸一貫の人夫じゃねえ　小作百姓のこの苦悩(くるしみ)二重のかせ
よ！
お天道様はここばかりでねえ！
其れですませられるかよ
グラついている己の首も知らねえで
ソダをくみガンダを担ぎ　セメントを背負って立つ仲間
達
俺はやけにトロを走らせる。

トロよぶつかれバラスの山へ
憎い彼奴の横腹までも……

西の山はいつか入陽に黒ずみ
河面は黄金色に波打ち
白い葦の穂がゆれている
このがらんどな河原　人影のない現場
――明日は勘定日だなァ……
――そうやそうや
――明日の晩に皆で一杯呑んで　その時に相談じたらど
うや
――早い方がええなァ――
俺と新公はトロの線づたいに歩いている
向い側の団平船の仲間
杭打の女達
橋梁工事のコンクリ屋
築堤の兄弟！
皆な一ッに腕組めば
ごついもんだぜ！

話しつづける俺の心ははずむ　紅い夕陽の帰り道
そここにだらしなくひっくり返ってるトロッコ
まだぶすぶすいぶっていやがる丸太ぎれ
新公は其奴を力一杯蹴上げる

おお飛散する火花のすさまじさよ
未来を照らす火と燃えろ
この細い二本のレールは俺らの生活(いのち)
鋼鉄の意志た！
馘切　賃下げ蹴飛して走れトロッコ
このレールを滑るトロッコこそ
明日の歓喜を乗せて走るだろう。

（「詩人」第二号より）

陳述

神保光太郎

山があり、河があった。丘が白い波頭(はとう)のようにひろがっていた。髪は蓬(ほほ)けてしまった。あの日もこの日も昨日のように遠退(とおの)いて行った。

——おまえは党に資金を提供したか。

——しました。

——確信をもっていたか。

ああ。熱情に慄(ふる)えながら足袋跣(たびはだし)で赤旗(せっき)を把(と)ったあのときの自分がどこにある。雨垂(あまだれ)がじめじめと痩せ細ったからだにつたってきた。

——ひきずられておちこんだのです。

世界は今、爆音を立て、後景に陥落する。眩(くら)む眼。わななく手足。山は崩れ、河は彼をめがけて奔騰(ほんとう)してきた。丘はもう埋没して、見渡す限り寒々(さむざむ)とした荒海(あらうみ)となった。

——おまえはいまにしておまえの蒼白さを知ったか。

——不憫な奴だ。

革命とは何であったか。生き抜いた五十五年とは何か。そして信念とは、昨日の風景は今日の悲劇でしかなかったのか。石を積んではくずされて行く子供達の姿。

——私は敗けたのです。

蝕(むし)ばれた壁に蛆虫が一匹匍(は)っている。もう秋だ。高窓から薄(すすき)をわたって白っぽけた風が吹きこむ。

大江満雄

アディスアベバの老母
私は新聞の写真を見ながら考える

かれらは
ハラール戦線へゆく
ただ一つの　フランコ・エチオピア鉄道で

アディスアベバの駅を　はなれて
なだらかな丘陵をゆく
ユーカリ樹の林をあとにして
嶮しい山谷をぬって
愛国の歌をうたってゆく

老いた　おっかさんは
その兵士たちの中から
息子　ゴーゴリを見つけようとして
ゴーゴリやゴーゴリやとさけび
素足でおっかけ

汚ない財布から
小銭をとりだし
涙ぐみながら　息子の手に
――行っておいで！
たぶん　そういってわたしただろう

どこの国のおっかさんも
子供は可愛い
、、、
別れたくはない
が　祖国をまもるため
愛するエチオピアのために
行っておいで、そういい
行かないでおくれ
そう思いながら
悩んだことだろう

アドアも陥落した
その烈しい空襲を　おそれず
行く息子たちの列車をみつめ
涙ぐみながら
これが　ほんとうか
これが　ほんとうの世界かと

考えこんでいただろう。
――海からあがった狂った魚
イタリヤは何が欲しいんだろう
グレート、リフトプアレーが欲しいんだったら
エチオピアが欲しいんだったら
ダイヤモンド　金　白金　銅　ラヂウム
それから石油
谷底にある宝庫を
ステファニ湖から　ツァイ湖
それから、ツァナ湖まで
アディスアベバを　かこんでる
エチオピアの宝庫の谷を
そっくり　もって行けばいい
エチオピアは重いよ
エチオピアは盗まれないよ
エチオピアは死にもしないよ――と
私は泣きなら　胸の中でくり返している
エチオピアのお母さんたちの耳に
ささやきたい
ウガングから流れる白い水と
エチオピアから流れる青い水が
流れ合って縞をつくる青ナイルと白ナイルのように
世界の心の流れにも二つあるんですよと

空は赤く焼けて

植村　諦

秋の陽は屋根の波の向うにおちて
空の夕やけの
何という……赤さであろう
爛れる血のような
世の終りの前兆のような

このゆうべ街にいて
空のことなど気にしているのは
私だけではないのか
人々はただ憑かれたように
駅から街へ　街から駅へ
肩と肩とを摩して広場をなだれている
群衆が醸し出す騒音の
あわただしさよ、わびしさよ
私は群衆の中に茫然と立って
夕刊の鈴の音に聞入りながら

四方から私を包んで来る
この名状しがたいものに心奪われている

われらはこの群衆の流れに抗ってきた
群衆がわき立っているときわれらは沈黙していた
群衆がはげしく流れ出したとき
われらはその方向の誤りについて叫んだ
そしてこの数年――
群衆は前進をとどめ
方向を失い
孤疑し、逡巡し
後へ、後へとなだれてきた
情勢の不可抗という言葉がわれらの耳を塞ごうとしたが
われらはその声に耳傾けず
不可抗に抗して立った
なだれに身を投げた

そして今日――
組織は破れ
同志ら皆四散し
私は群衆の中に立って
赤い夕やけを見ている
群衆よ　群衆よ
わが魂の揺籃よ

そして今群衆にとって異邦人の人に過ぎないわが孤独よ
私は鈴の音にひかれるように
一枚の夕刊を手にした
三段抜き大見出しで
同志の捕われた写真が出ている
その写真は微笑を湛えている
同志よ
あの日別れて以来始めて見る君の顔だ

同志よ！

すべては終ったのだ
夕やけが四方から私を包むように
私の四方から圧倒して来るものが何であるか！
流れ行く群衆よ
怪しく赤い夕やけよ
われらに対する群衆の恐怖と憎悪は益々はげしくなるだろう
聡明な批評家の聡明な批判が街にあふれるだろう
そして同志よ
明日われらを待っているものはもっときびしい孤独の道だ
そして――

この赤い空の色がいつまでも忘れられない私の記憶となるであろう

（一九三五年一二月）

第十六回メーデー

秋山　清

驟雨の通ったあとの街に
つめたい風がふき
メーデーの行列はちかづいてきた
スローガンを先頭に立て
つづいて赤と黒の旗がゆく
今年は沿道の見物人がすくない
例年のように、行進にはいれなかった者が
旗と足なみをそろえて歩道をあゆむ
あのあふれた示威もみえない
五百万の東京市民たち
いま東京の中心をメーデーの列がゆく
君らはこれをなんと見たか
もう駄目だとおもったか
メーデーも労働者も左翼もダメだとおもったか
そんな船来はもうはやらぬとおもったか
そんなお祭りさわぎの時じゃないとおもったか
女車掌たちが弁当箱や夏みかんを提げ
黄色い声をはりあげる
「守れメーデー労働者」の歌ごえを軽蔑したか
総同盟のダラ幹どもに排撃された
ボルとアナの組合の
あの小人数の行列を軽蔑したか
要するにこれはただお祭りだとそうおもい
それだのに
熱狂して揉みあって殴られて額から血のたれている汚れて元気な顔たちをあざわらわなかったか
今年のメーデーはさびしかった
だだっぴろい昭和通りに行進の人数は去年よりもすくなく
歌ごえもつかれていた
五百万市民のなかのたった三千人
今日も銀座のレストランに昼食のナイフをあやつること常の日に同じ
デパートにはバスから地下鉄から人がつづく
それら善良な、換言すれば無恥な手前勝手な市民等のなかを
たった三千人が
旗をふり

労働歌をさけんで通る
その今年のメーデーを何とみたか
あの抗議をなんとみたか
五百万の市民、その一人一人が自分の生活と自由とを考慮せよ
五月にはめずらしい冷たさのなかの風の街をゆく労働組合
それをみて没落メーデーをわらう君ら
プロレタリア
無産階級
失業者
その何れでもないツラをしている者
反撥することもしらず反省することもしらず
角のとれた山羊みたいに従順な
あわれな君ら
反動の時代
進歩の波が逆流するとき
その奔濤のなかに大地をふみしめて
メーデーの行進は
いま『終』と書いた旗を最後として目の前をゆく
赤い旗　赤い旗　赤い旗　赤い旗
黒旗　黒旗　破れ組合旗
ふりたて　ふりたて
市従
東交
総評
江東一般
朝鮮東興
全国労働組合自由連合
その他
君らは世界的反動の日に敢然たるもの
進行し　闊歩する
常に平和をのぞみ
先ず　今日の米と自由のために

（一九三五年五月）

註　この第十六回以後メーデーは一九四一年まで禁止された。

ある朝

——昭和十一年二月二十九日

ぞろぞろと人がつづく。
ゆく人、かえる人、出あって話しあう人。
電柱にはられた告示や号外のまえにあつまる数十人。
——省線電車は全線停止

——バスもまだうごかない。
朝の街路のうえを動きまわる
学生やサラリマンや絆天やトンビや女達。
納得できずに駅まできて引きかえしてゆく。
プラットホームはしろくかわき
レールがつめたくひかっている。
屋根屋根には残雪が凍りつき
雲を割ってうすい陽がさした。
街つづき一里の彼方に
バリケードがあり
銃口が対峙し
まさに火を発せんとし
このあたりひとびとは平常の服装であるいている。
ひとびとは家にかえり
ラジオで哀愁のこもった告諭*をきいた。
また道ばたに立ってそれをきき
ある者は涙ぐんでさえいた。
ラジオは刻々に動静を報じて
しだいに平静になりつつあるとくりかえした。
ひとびとはかえってそわそわとおちつかなかった。
いつものように出かけねばならないとおもい
ひとびとは生活がふだんにかえることを待ち望んだ。
ひとびとは何がおこり何が鎮まったかをほんとにはしら
なかった。

それがなぜおこったかもかんがえなかった。
大勢は電車がうごきだすと改札口に殺到した。

＊　天皇告諭として放送された
「兵に告ぐ。」

旧作

川崎むつを

四・一六同志の妻のつくりたる笑いにまなこ外らしたるかな

ハンガーストに出でたりという獄中の結核の友を思う灯の下

ハンガーストに出でたりという同志らに泪ながしぬ暗き灯の下

（一九三四年七月号「短歌評論」）

風船はり

矢代東村

一日四百個。
一日四百個と、あの無器用な手が
風船をはる
今日もはってるだろう。

×

こんな事にも
糞ッ、負けるもんかと
風船はる
彼奴（あいつ）らしさ
自然とほほえまれる。

×

昨日も今日も
そして明日も、いやそれどころか
一年二年三年もぶっとおしに
毎日風船はり。

×

この風船を
誰が買うだろう。
突くだろう。
そんな感傷なんか吹っとばし
今日も風船はり。

×

出所（で）るときには
それでも二三十円位の賞与金は
溜めて見せると、
彼奴あんな所でも
がんばり通す。

（一九三四年十一月号「詩歌」）

死んだ同志

和沢昌治

囚われて八十余日
ああ遂に、
大地も踏まで逝きし君かな。

×

誰一人、看護(みと)るものなき
留置場で
逝きし君ゆえ、胸張りさくる。

×

君が屍、よし冷ゆるとも
君が恨み、君が憎しみ
吾が胸に生く。

（一九三四年八月号「短歌評論」）

貧農の唄

萩原大助

田がほしい！
田からは米がとれるのだが
その田さえない、貧農よ俺は。

×

ひと月前
車に積んで持っていった
小作米の俵が、目さきにちらつく。

×

売れるものは
みな売りつくし、食えるものは
食いつくした村に、低い雪空。

病床

石井光

バイブルの

上に手をおいたガリレオが
地動説の真理を拒否せねばならぬ。
×
地動説を
ローマ裁断庁が拒否しようと、
地球は動いていたのである。
×
牢獄で
読めばぴたりと胸に来た
ガリレオ裁断の暴虐の腕。

（一九三五年二月号「短歌評論」）

工場から

岡村浄一郎

仕事はじめだ。
機械に油さしながら、
やたらに
おしゃべりしたくなってくる。
×
お願いします――
やあ、宜しく！　と

元気いっぱいな
仕事始めの、朝の挨拶。

鉄錠の音

大沢久明

挙手をしてにっこり笑ってひかれ行く妻よ
妻よ　俺は格子戸の中
五年ぶりの青森警察の監房の昔に変らぬ鉄錠の音

（一九三五年三月号「短歌評論」）

橋梁舗装工事

青江龍樹

西に六甲
東に生駒をのぞみ
この大河の橋に今舗装工事す。
×
橋上にトロ押しだし

トロ押しながら
秋冷の青空仰ぎ、深く息吸う。
×
この時代を生きぬくおれらだ！
鉄とコンクリの中に
燃える意慾　深くひそめて、
×
リフトの中に
鍋をひきあげ、ひきおろし
からからとウインチは
晴れた秋空に鳴る。
×
飽くことなく
呑み、練り、吐きつづけるミキサーの
このミキサーの
エネルギッシュな面。

（一九三五年十月号「短歌評論」）

京浜工場地帯

渡辺順三

近代的工場地帯は区劃整然と
運河あり、鉄道あり、
クレインは高く。
×
百五十尺、
二百尺の煙突が立ちならび、
黒煙吐くよ
今日の秋空に。
×
林立する煙突が吐く煤煙は、
うずまき流れ
秋空を蔽う。
×
毒々しく
黄褐色の煙り吐いているは
化学産業の工場か
遠くはるかに。
×
浅野造船の門前に立ち
出てくる職工らの
背骨の曲りに、すぐ目をとめる。
×
「関金」の労働者がここに殺到し
喊声あげた日よ、
思いはるかに――。

（一九三五年十一月号「短歌評論」）

海猫によせて

坪野哲久

労働者の
歌ごえは消されてより久しければ
砲身鍛造場の煤煙かなし。

×

六郷川の
夕空をとぶ飛行機に
追いすがる海猫の執拗さを愛す。

×

地区の空を
わがものがおに飛び翔ける
海猫の自由
われらは持たず。

×

軍需品製造工場の広場には
トラックがなに積んでいるか、
海猫は見るだろう。

×

海猫は
「富士製鋼」の真上を飛び
はるか羽田の海にねむると思う。

×

びょうびょうと煤煙なびき
海猫の光りとぶだけ――
胸とどろかす闘いはなし。

（一九三五年十月号「文学評論」）

南葛の空

渡辺順三

今日の空は
晴か曇りか見わけもつかず、
ここ南葛の工場地帯は。

×

「南葛の労働者」の名も
いまはむなしく
秋空になびく、煤煙の暗さ。

×

胸を張り
工場を出てくる若者らの
面構えはやはり

「南葛労働者」か。

×

大島製鋼、東洋モスリン、小倉石油と、
江東の空に
うずまく煤煙。

×

一せいに
煤煙なびく江東地区の、
今日の静けさは、いつまでつづく。

×

東洋モス――
かの大ストライキの喊声は、
いまも耳朶にあれど
　今日の静けさ。

（一九三五年十一月「短歌研究」）

速水惣一郎

国境の町

獄を出て
国境・海辺の町に来て
やけつく砂に
身を伏す。今は――

×

海越えて
ここに来たことも嘘のような、
錠前のひびきは
耳朶になおある。

×

山海関――
この風雲の町を驢馬に乗り
出しにゆく手紙は
ずしりと重い。

×

アンダーラインの
赤き線をば強く引く、
久し振りにみた
言葉のたしかさ！

北京の印象

五・三〇
波立ちさわいだあのころの
楼門の太字は
削りにけずった！

×

列寧（レーニン）、斯達林（スターリン）――
その名も曾ては早口の

支那語の中に
飛び出していたが。
×
京漢線——
この皺深き老機関手は
あの血のゼネストを
心裡に秘むるか。
×
ボロディンのカラハンの叫びは
空しく消えたと
おもう者はおもえ
北京大学！

（一九三五年五月刊歌集「世紀の旗」）

冬と春

赤木健介

現実の暗さ冷たさ
その中で
灰の暖(ぬく)みに手を翳(かざ)す冬
×
ヴィヨンの詩に
「去年(こぞ)の雪いまいずこ」と
あったのを想う——生活の冬に
×
渦を巻く嵐の中に
一灯の
揺がないのを凝視(みつ)めて過ぎた
×
省電の下の溝瀆
肥船(こえぶね)が少しは動く
停車のあいだ
×
生きること
吹きつける雨に濡れること
みんな愉しい
生きてゆきたい

網走

津村駿

雪の山幾重なみよろう地の果の網走の獄火を守る人忘れめや

前も山うしろも山右も左もまた山そこに七年を刻むというか

昭和十六年六月十六日までの住家なりと事もなげに書けり蔵原惟人は

地の果てを今吹雪く朔風針の如く肌刺す独房に腕組みいるか

面会

中島亮子

綿入れの赤と青の囚衣重ね着て着ぶくれし夫よ健かに生きしのぎ給え

人よりは一時間早く起きて本読むと云う夫の言葉うれしく聞きぬ

囚衣着た父の顔まともには見ず怖しげに泣き声あげてわれにすがる子

一ヵ月封筒張りつづけた賞与金がたった四十銭と聞くは痛まし

やはりわれになくてはならぬ人なりと思いつめつつ別れ交しぬ

（一九三七年六月号「短歌評論」）

職場の歌

水原蓮

ニューマチックの素晴しい響(タッチ)だ、
鉄板の上に
目もくらむばかりに
燃えあがる夏。

×

鉄板はしん底冷たい――
霜やけの手を
のばし、ちぢめる
女工の一群れ。

×

腰も冷えろ！
手もこごえろ！　と
日給六十銭を手ばなせぬ女工等
錆掻きつづける。

生活から

小原猛雄

徳永直も、ここで育ったのか
百にあまる
輪転機がうなる、ものすさまじく。

×

すばらしい鉄骨があり
滑車が鳴る
鶴見港湾の、繋船のきしみ

×

どぶり　どぶり
船腹を打つ　波のゆれ
滑車がひびき、起重機あがる

鞭に抗する

西原正春

みぞれ降る朝の鋪道に曳かれつつ晴々と鳴らす口笛の音！

この留置場(へや)に若きローザを吾れみたり織維の同志の紅き唇

うすらうすら検事の諫みを聞きており釈放の朝の心うれしみて

厚みある調書の隅に拇印押せばにたりと笑みし検事の顔よ

（一九三六年五月刊歌集「集団行進」）

労働抄

後藤順一郎

からからと鳴るパイプの音
霜おりた朝だ。
尖った屋根が深呼吸のようだ。

×

コンプレッサア――
轟々と唸り、つりあがる指針(メーター)か
腹一杯の空気を吐き出す。

×

赤々と灼けた鉄塊がさめてゆく――
さめてゆく鉄塊に投げる
　わびしい感情。

×

ドリル
ドリルの刃尖
グラインダーにかけ
燃えよとばかり火花散らせる。

×

鉄板が燃え――
作業が燃え――
炎天にさらす肉体が
あかあかと灼け。

兵営生活回想

剛一志

青黒い
死の奔流だ　牡丹江(ムータンチャン)
赤腕章の屍が
舞い流れ去り――

×

匪首捕獲!
行動開始の昂奮を
思い出すものもない、
疲れ果てては――

×

この川が「国境」だという東部掃匪地区
うすくらがりに
あひるら遊ぶ

×

鏡泊湖匪
攻めれば去り　引けば寄せる

かの渤海の血を
引いてか否か！

鉄路に唄う

福島和人

声たかく　ふりあげる鶴嘴に
朝陽きらめき
赤石山脈は　今日も
たかく晴れている。

×

遠くとおく　うねった線路に
霜はかがやき
労働の掛声は、溪間にひびく。

×

昼飯終えて土手にねそべり
青空に
遠い闘いの日の回想を
投げつける

一九三六・五・一

佐藤吉之助

千九百三十六年、昭和十一年の
べらぼうな五月
メーデーがない

×

昭和大通り
かぜ吹きとおりつつがなし
千九百三十六年五月一日

×

メーデー歌今日はひびかず
昭和通り
ひろびろとして風吹き過ぎる

雷雨

南龍夫

降りしぶく雷雨の窓に

胸おしつけ
生きて甲斐ある時代と思う。

×

堰を切って
奔流の如く降りくる雷雨よ、
ああ　かかるこころよさに我は饑えていた。

×

この膝に来て坐れ吾が子よ
やがてこの雷雨も
遠く過ぎ去るだろう。

冬の唇

この口は
あくびする口　唾のむ口
言いたいことも今は言えぬ口。

×

大学に浪花節研究会を作るという
新聞記にも
もう驚かず。

独房集

鍋井利

よびかける点検の声――
ゆるされた
たった一つの朝の挨拶。

×

肚からつきあげる
朝の挨拶だ、
今日も健在をたしかめあう。

×

こおろぎの声は僕の呼吸である
暗い壁に坐って
麻を綯いつぐ。

市井事

梅田順二

そこだけ
大東京の生活から隔離されている
刑務所の壁を　車窓から覗く。

×

看視塔に一人立っていて動く影
どこか見ている、
朝の曇りに

×

扇形に展けた空地が運動場だろう。
一隅には
秋草の花も咲いていよう。

×

檻房の生活に腰を据えて読んでいる
書冊の量に
おもいめぐらせる。

×

おもいきり腹たててみて
うれしかった。
気まぐれではない、この激情は。

朝霧

萩原大助

明けがたの　つめたい霧だ！
どぶ川ばたに
もうよろめいてゆく浮浪者の姿。

×

支給された
あたらしい冬の制服に
この朝の霧はしみると思う。

×

天王寺公園の木立が
見透せる坂道に
つめたく光りだち　市電の軌道。

×

電車の車掌のくらしに
いじけてなるものか！
この朝の霧だ　目に冷やかな。

×

初発電車が
もう馳けだしてゆくきしり音
踏切ちかく　朝霧を吸う。

（一九三七年六月刊歌集「生活の歌」）

橋本夢道

砲口が静かに動くを重い圧力から別の意識で拝鑑してい
た

三十五六年の危機が黒龍江へ形容できない侵略図を流れ
る

渦も秋の黒龍江を想う私の生活へ生還のない戦争が胸を
しめつける

好むも好まぬも万死の毒瓦斯が草も枯れた黒龍江はもう
口がきけない

夜あけのすき戸からそっと資本主義社会の新聞を入れる
音だった

ぐったり垢が浮いて少年工も老人のその体の曲りからも

肩で烈げしく笑い合いここでくらしの息ついている春の
浴槽

ファッショ異変（二・二六事件）

殺ばつな後報や陸相の顔に粛然とひげがあって妻は読む
でもない

資本主義社会の童話しかない国の絵本さがしている

予備召集

この銃口から父がおろおろ小作稲刈る手もとが見えた瞬
間

渡満部隊をぶち込んでぐっとのめり出した動輪

どよめきから部隊をもってゆくレールの鉄錆も五月

屋根も腐った町を突き抜けてゆく〇〇部隊

歴史的に部隊が西へ行くこの国の資本がふくれてくる夏

小作田を縦横にのたうって牛と生き六月の農民

百姓の生きのすがた終身囚の如く老いこけて笑わぬ故郷

妻よ　一職工も抱けば嬰児がやわらかい

鉄臭いわが掌の嬰児かかる社会（よ）を知らず
銭湯に嬰児もまた資本主義社会に育ちゆけ
潜水服を着て降りん赤ん坊は生れたろうか
かくて社会（よ）にこの子等がどんな日記を書くだろう

栗林一石路

毒茸のような気球がひょろひょろと生えている街
糸値が上れば下ればの幾年の煙突が曲っている
冬の陽あたる議事堂と凶作地方へ澄む空と
刈らぬまま枯れたうちの田の氷を走る鼠か
思想が氷結したような月夜のビルヂングが直角
街のどてっ腹を掘りぬいて君たちが唄いながら出てくる
がちりと嚙んだタイムレコーダーから放たれてきた

それよりほかないことは知っていて村の青年
人間が爆発しそうな出勤電車でちらとさくら
太陽にむかなくなったかたくなな日まわりの筋肉
ここら凶作地方みんな出て田を植え畦に子を置き
渡航人夫をぶちこんだ船底からエンジンがひびいてくる
花
家が家に積み重なり小樽は多喜二が生きていたところ
樹海のくらさわずか空が見えていて樹を伐るべからず
刈田の足あとも冷えびえと兵隊にとられてゆく年
　一九三七年、軍縮条約期限満了　二句
太平洋が明けっぱなしになるという元日の飯食う
大砲が巨きな口あけて俺に向いている初刷
枯草のもう赤い芽の一月二日一月三日

唸って世の中が素通りする風に農民の顔
窶れそうな地べたから店をたたみひっ舁いでゆく

神代藤平

いつのまにか鉄砲弾作る工場となって交替の夜の汽笛
陽のめも見ずに戦争屋の機械にへばりついている
食らえども雪は糧にもならず藁燃す
やっと楽が出来たという死顔に霜が降っている
その日までこんなに用意が必要で圧力計がふるえている
野良にも戦争の噂があり日に焦(や)かれて草とる
巨大なるグレンの手が船腹から軍需材料を掴み出している朝
電灯ひきずりおろしぶすりぶすり継ぎはぎする襯衣(しゃつ)

金が無いのが原因(もと)だったらしい患者達に白い診療室の扉がある
啾啾と泣く子を抱き壁ににじめる母の影の暗さ
窓から暗いドブがにおってきて薬に水をぶっこんでいる
水薬の濁ったるをさげて暗い路次のドブ板ふんでゆく音
それが社会(よ)の不用というなら何でも持って来ねい俺らゴミヤだ
村は山にへばりつき村も山も吹き曝され
すさべる陽は地に影もおかず背を丸め藁打つ
山に日が落ちくれば風吹くにまかせ炉火焚き生きる
酔えばそのうすき唇もれて唄うはアリラン
アリラン哀し両足ちぢめて眠ろうとするだけ

横山林二

戦争がはじまりそうな明日へ輪転機が唸ってる

新井夜雨の死

ぎっちり闘いの字がつまって君の最後の日記か

明日へ鉄を築く人たちが空の一角

日の丸の旗たてている街のどこにも職がない

ほんとうに戦争があるのという子と空には鳶が舞ってい
る

血走った目が騰る軍需株へここにどろどろ腐っている時
間

轟々と彼奴らの表情のタンクが這いずり畳った街の底

こんなボロ工場が秘密に作るものの炎を散らし草が枯れ
立ち

赤く爛れた鉄が生命を奪うもののかたちに冷却してゆく
深夜

彼奴らどうしの戦いの日はじりじりと静かな水平線だ

壱銭から集めて作った太い機翼が或る事に飢えている

貯水池に身売りする部落の表情が枯れそめる

ひっからまり枯れておれたちの飢えのごとく草

まぶためくればにくしみがかっと死んでいる眼球

食うと飯場を出て炎天の断崖にとっつく

野天から糞を自由にながしては渦巻いて鳥光る

林冬二

（長山林二郎）

食えないで死んでいった女の死体がひややかに検視され
ている

奉仕作業の日の丸の旗たてた起重機へひっぱり出されて
いる

地の底へも小使をつれてくる役人の方へ炭車をぶっ放してやる

仕事着ひっかぶせたまま炭塵だらけの死体が横にされている

ここ三千尺の地底で生きて炭掘り炭運ぶ

土地国有の日の夢へ小作地へ降りつづく雪

検視調査一枚で片付けられた鉱夫のばらばらな手と足

地の底から上ってくる顔のどの顔も眼ばかり歯ばかり

地の底にもこんな事務所があって呼びつけられている

保育所へ火のついたように泣く子をおっぽり出して坑へ急ぐ

ぼろ着につぎあてる仕事もって薄暗い鉱夫長屋へ住みなれている

売店へ通帳ぶらさげてゆく母へもう雪がきている炭山（やま）

地の底へもきっとくる明日を信じ炭掘る炭運ぶ

地の底がりがり炭噛る圧搾機に堪えている

坑から二人三人と曳かれていった足跡が雪にくいこんでいる

貧乏を生きぬこう君といて夜の冷えが迫りくる

藤田秋泉（港）

鉄をうちに生れてきたか少年工の白い歯

万年床へめざましのねじを巻けというのが御主人で

草にも階級があってよれよれになって光る葉

蟻のようにとりついていたった一日の糧食へ作製の戦争の鑑か

表から裏が見える生活へ嫁がくる来ないの黒い畳を掃く

客を笑いころがすおもちゃをならべ生活に必死な顔

この選挙演説がうそかほんとかわからない聴衆で汗ばんで聴く

死蚕捨てる気力さえなくて寄り合うて濡れ桑を干している土間

おろおろ死蚕捨てにゆく父のうしろからは声をかけまい

ぎちぎちのくらしの二銭の風鈴へ風がきている

田中　順

防　空　演　習

百姓の若者達の何んの警報を待って尖る眼ぞ

圧縮された感情の万歳の叫びとなってめっきり黙ってゆく送列

軍用道路となる工事場に雪雲垂れさがり吼えるミキサー

山も村もまくしたてて雪雲のひた覆いくる

ある出獄の同志へ

なんとこの身体が三年の牢獄の寒暑に耐えたか

蹴るべき椅子へ倒すべき相手へ冷たく何かを見すえている

阪神防空演習

もちきれなくなった不平を役場へどかどかと上り込んできた

潮のように大部隊が発って馬糞と泥濘の村だけになった

歩かされている一隊の兵卒の見れば一人一人の顔

朱に組合旗を染めた昔もある父の棺の前

すずき・ゆきひと

捨蚕した夜のゆとりがもの悲し句帖を前

秋繭売り払った夜は塩鱒の赤い二切れ三切れ

朝の凍てた地べたへ爪たて土橇曳っぱる声

縞の消えた野良着を壁に掛け書こうこともない日記をひらく

繭車ひっぱってここに集ってくるどの顔も汗

人間を売る部落へべっとり枯れている径草

更に牛を売り空っぽな厩に薪割っているひとり

腹ニ籾ガチクチクスルボロ着テ稲扱キハッライナア

不合格俵の前におしだまった小作人の顔からほとばしるもの

バクハツしそうな小作人の感情おさえ雪照りまぶしく

三浦成一郎

もそもそパン食む君に俺にあいつの公判が近づいてきた

電車が驀進していったガード下の一枚の出稼ビラ

バッタリ遮断機を下ろされた民衆の一人として止まる

仕事へえらみ出されていったあと寒むざむ白い息吐いて散った

打鋲機響けば火花散る鉄骨の中に人いて

貧民長屋の水道でやっぱり朝鮮恋しいと米磨ぐ

昔　昔のめでたい腐れ柱に旗立てた

高射砲ぐるりと向きを変えた方から凶作の手紙

いよいよ戦争がはじまりそうな片足人形

斎藤武男

ちらつく雪にどうしようもない生活の小作畑

空は工場の煤煙がおおいて裏町を咳してゆく

肥おく時がきてどうしようもなく桑が芽をふきだした

これという仕事があるのでなく陽へ顔ほしている

空へ屋根と屋根が暗い裏町を鰯売がよろけそう

肥を手に不平つのり来　肥倉の壁

そのいかりが雑草をひきぬき　畑の中

やせこけた子をだき貧しく手仕事の屋根草の茂り

小山一平

それでも豚売れて塩鮭の切身が焼かれている

これが国の為に死んだ骨壺でかろくなってきた

売らされた畑にもうでかい字で立看板が鐘紡敷地

遠く冬稼ぎに出ている兄へ来て置いてある賀状

母と木枯(こが)れ拾いの山から父もいる河川工事が見えて

藤村がうたった千曲川も冬枯れて軍用道路とか

樺口赤子

弟の澄みきっている瞳がおかしいほどの貧乏ぐらし

水がぶがぶと飲んでいれば飯の音に似て

生地獄を見にきたお役人の足もとから荒れている田圃

鉄砲玉にあたって死ぬ子が生れたという話きかされている

カットされた新聞ににぎり飯をつつむのです

浜口彌十郎

万歳万歳で列車を通して田圃が荒るるばかりで

牛を売った娘も売った万歳万歳で徴(と)られていった

大陸へ着いてポンとやられて村葬にされてしまった

万歳万歳で運ばれてゆく山のさくらとなった
勲章の仏飯も下げては食べる水と稗めし

伴　栄

アパート生活點描図　三句

空へ空へアパートの土のないくらしはみだしてゆく
十銭ガス三四日持たすほどに馴れて誰れ彼れの顔に馴染んでくる
夜逃げしたという十三号室のボロ道具がひっそりと畳の焼けこげ

三浦成一郎君上京

雪の国から雪崩のような君の闘志が駅へ下ろされた

二・二六事件

目に見えない大きな力が跳梁する空気の振動を感じている

市木千尋

飢えて君の眼が黙って故郷を離れてゆく汽車
死んだ息子も浮ばれるとちっぽけな勲章飾ってある
人手が足りなくて嫁貰うた話も田植の畦
暴風の中の故郷の姿に似た部落を行軍する
股ぐらに手を突っこんで売る物のやすい水洟

中村怒濤

繭をこれっぽちの金にしてきて酔っている父か
埋立地の烈風の鮮人長屋でそれでも正月は来ている
ほすすきもって小作人の子同志の汚れた顔
機械の音が今日も唄う君のうたごえと揺れてくる

虫なく夜の壁につるし月賦の服

新井夜雨

減米はねつけられてコホコホ月に咳こぼしてゆくのです
こんなちっぽけな記事が生埋めになった土工達の死だ
夜の壁を二人のナッパ服さがり二人病んでいる
日ざし寒い壁にはりついているより他ない人たちか

清内路二

踏まれても切られてもみみずよ生きていたか
浅間は焔(ほのお) おいらはオルグ三日月や鎌だ
夜明けの夢を一ぱい孕んで朝焼けのしている土蔵
筆を奪われ意志をもて胸に刻みし牢獄の記録

井形春一

給食児童の並んでいる顔へ鰯が焼けてくる
船の大きなどてっ腹から今日の仕事をかつぎ出した
煤けた土間へうずくまりばさばさの手へ膏薬を焼込む
高い空へクレーンが歯ぎしりして鉄をかみあげた

北原良子

働いて今日だけの米の重みを手に
ロシアは飢餓でこの国は幸福という月夜の放送がはじまっている
糸が切れてばかりいる機械から眼を窓のさくら
あの娘も遠い街の商品となってしまって枯田の霜

伊藤棒地

めちゃくちゃに降る雨の地べたへ東北振興のビラが落ちた
なにか考え日独協定のできた新聞を投げ込んでいった

尾去澤事件　二句

いまにも思想がとび出しそうな労働者の死体
掘り探すシャベルの無骨な音たてて坑夫の髑髏だったり

登死男

その自由の日へ汽罐（かま）へ石炭ぶちこんでいた
眼に闘いの光をこめて機械みがき俺もみがく
ちぎれるほど振った旗だった五月の空だった

柳京次

何かすればくたばれといわれる生活の中で育っている
モッコへ土を盛りあげコキッと草鞋め凍ててけっかる
皆無作の田の向うで今日もパリパリ機関銃をうっている

山口羊仙

弱きものが食われるのでこうろぎの死によう
小作調停がむずかしくてすがれた芋の葉
俵は七とこしばるだとさ夜の縄なっている

水野敏

村には用もないレールが海までのびて兵隊を運んでいる
泣くまいかみしめた歯はコスモスの幼年工
汗と鉄さびを親子の体臭として寝ている

横山梨青郎

生きなくてはいけない肩をたたかれ挨たてる服だ

貧乏を部屋へちょっと射しこんで二階の太陽が落ちてゆく

木島青天

スチームの下がる音たてるヒーターで居残りの仕事

せめて夢の中の地主となって手足のばしていたか

黒崎草生

くちゃくちゃになってポケットにいたか履歴書

柳田千矢

この世の中をじっとこらえている俺と日暮の土間の臼

清水源恚

或る感想で窓口からずっと銀行の内部が見える

飯にありつきたい顔がこんなにも日なたにかたまっていた

百瀬菜穂吐

炭がまをはなれ働きぬいた顔と眼とめし食う

黒い手と顔と山に生き馴れた土間の火

斎藤継子

冬川へ来てバラス掘り農救のおとこおんな

雪晴れた黒土の塩辛売が塩辛売っている

葭刈りよりほかに仕事がない葭刈っている
そこのふきのとうには目もくれず藥背負ってくる

軌　道　閃

満州へ兵たいを送るのがうれしくて婦人会長の白粉しろき
日の丸の紙のみ旗でざわざわと満州へおくられる兵

殿　村　兵　衛

団結しなければとおもい道で辛夷の白い花
階級がある世のこの藥屋に住み味噌汁の匂い

信　濃　馬　一

うまやにもびんぼうぐらしの馬の顔をおき十五夜

なんでもやってのける力のでかい手のまめだ

山　村　雪　夫

長いものには巻かれろと母はささげむいている
またはきそくなった股引がかぶせつぎだらけだ

岸　田　椋　十

工場地帯には鴉だけで又降りそうな雪空
除夜の鐘はラジオからもきこえてきて僕はまだ夜業です

大　蔵　宏　之

回転ドアにここに社会がうごいていたぞ
見れば歴史の歯車だって回転するドアだ

一瀬鉄平

ぶちこわされた組織を思えば歯車のやつがやけにまわる
まっ青な海だ風だ俺たち組織を守るもの

石橋辰之助

除雪夫の雪に耐え住む顔きびし
除雪夫の寝姿炉火と凍み果つる
乳足らぬ農婦の嘆き旱の夜
大旱の疲れ農婦の寝てにおう
秋風に食えよ食器に音をさせ
工場へ吹き秋風のぶつかれる
工場の火の落ち京浜線ひかる

石田波郷

鉄をうつ背に凍て低き航空路
バスを待ち大路の春をうたがわず
軍事郵便春昼懈きとき来たり
熱帯魚みなしずかなり値たかく
首夏の家英霊還り電車より見られ
夜涼の坂英霊車来る如何にせん

日支事変はじまる

秋風に立ち号外を日々手にす
霹靂軍靴のあとを日々とゞめ

応召軍装の兄と相会う

わが手に穂草兄は軍刀のことのみ言う
秋の宿兵士の手記を遺したり

東京　三
（秋元不死男）

入営の楽ゆき娼婦老と戯れ
冬空をふりかぶり鉄をうつ男
ルンペンら火を焚き運河薔薇色に
クリスマス地に来ちちはは舟を漕ぐ
肉フライ造船工の帰路に盛られ
護送囚徒あわれ草鞋を足に穿き
胃散買い帰る背に鳴る高射砲

古家榧夫

世をいかる心秘めたりタイレスに
暗んずるダス・カピタルの一句タイレスに
タイレスの脇に国禁の書をいつも
いきどおりまなぶたにありて働けり
子よ父よ反動の下に生き抜こう
ほろび行く民族（たみ）の哀歌を春の灯に
吾子貧しその肌着みな破れて小さく

藤田初己

口あけて汗の兵士の列ながし
増税の町の夕日に酒を欲り
夕美（は）しき工場葬を見つつ耐う
青服のさむき手を垂れ工場葬
日和雲日日に捷報ありてかなし

富沢赤黄男

さぶい夕焼である金銭（かね）借りにゆく
きょうも熱き味噌汁すすり職を得ず
美しきネオンの中に失職せり
わがこころ鎖と錆びて海に垂るる
貧乏にまけそうになる水をのむ
生活の流氷響たててゆく
生活の氷柱は青く背をつらぬく
潤子よお父さんは小さい支那のランプを拾ったよ
やがてランプに戦場のふかい闇がくるぞ
秋風のまんなかにある蒼い弾痕

篠原鳳作

胸底に灰色の砲車くつがえる
ルンペンの早きうまいに夜霧ふる
台風をよろこぶ血あり我がうちに
しんしんと肺青きまで海の旅
蒼穹にまなこつかれて鋲打てる
たくましき光にめしい鉄はこぶ
青空ゆ下り来し顔が梅干（うめ）はめり
昇降機吸われゆきたる坑におう
太陽に襁褓かゝげて我が家とす

病中

夏痩せの胸のほくろとまろねする

加藤楸邨

麦を踏むけわしき眼何をにくむ

寒日の歯車ぞ二つ噛みあえる

枯れゆけばおのれ光りぬ冬木みな

青田売はじまりつつも蚕を飼えり

水盗む荒魂も失せ青田売

せんすべもなくてわらえり青田売

黍負えば百姓となりぬその手足

籾を摺り摺りつつぞいう世のさむさ

梶田二溪氏出征

天の川かくて饒舌の世にならず

中西秀夢氏出征

中村草田男

凍道やむかし防人に歌ありき

我は

外套を脱がずどこまでも考えみる

蟾蜍(ひきがえる)長子家去る由もなし

降る雪や明治は遠くなりにけり

某月某日の記録（二・二六事件）四句

此日雪一教師をも包み降る

頻り降るこれ俳諧の雪にあらず

紅雪惨軍人の敵老五人

世にも遠く雪月明の犬吠ゆる

外套の釦手ぐさにたゞならぬ世

炎天の号外細部読み難き

錫曇百姓の背は野に曲る

ひろし・ぬやま

獄中作（編笠）より

血(あけ)にそむ虱三十四十五月雨(みそよそぢさつきあめ)

與志の老いたる母を想うて

菊活けてお茶などめせな初時雨

身にしみて人参午蒡のうまさかな

秋深し汁にこもれる芋の味

父を失いし重治に

そぞろさびし白髪見えそむ冬日かな

いづみ・はらよりたよりあり。骨壺は今も本おく棚の上にありなどかきてあわれなれば

菜の花に亡き稚子思ふ夫婦(めおと)かな

かぶりつく鼻にトマトのしずくかな

廊下にて寝をかたぶけて笑うひとあり、それと気付ままに振り返りたる時は早や遠くかなたに去りぬ。與尚栄のうしろでさびしく

一重まく帯も空色秋の暮

病みて

白粥のあつさとうとし土用入

としよりより綿入の差入ありければ

着ぶくれて三重巻く帯二重かな

百合子より菊の差入ありければ

菊の香の壁にしみ入る狭さかな

同じひとより張子の虎を染めぬきし手拭をケンジと揃いにと差入れありければ

手拭を額に見立てゝ冬籠

見知らぬひと屋に移ろわむとする頃

水かえて菊活けかえるあしたかな

病舎にて

瘦せ枯れて腰湯使うや花曇

冬

飢えて臥す身は北風の餌食かな

枯芝も凍りて寒むし水あかり

江口渙

山梨県某製糸工場争議所見

応援米の旗が来る見えて野路の雪晴れ

歳末

赤旗の歌につく餅よ蒸籠の湯気の輝き

（二句　昭和六年作――補遺）

解説

野間　宏

一

この巻には一九三五年（昭和十年）より、日華事変のはじまる前一九三七年六月までの期間を取扱う。

この期間は独占資本主義の国家独占資本主義への移行の時期である。そして準戦時体制の確立された時期である。この移行の時期は二・二六事件が起され、準戦時体制が言われた一九三六年(昭和一一年)とされている。

「危機における日本資本主義の構造」（井上晴丸、宇佐美誠次郎）によれば、大恐慌によって非常にけわしくなった危機は、日本の場合には、「満州」侵略によって一応出口先がつくられ、これによって列国よりも先に大恐慌の泥沼からはいあがることができたのである。しかしそれは決して危機が消え去ったことにはならなかった。危機は解消しないばかりか植民地経済を含めたいままでよりもさらに大きな規模において深まった。そしてそれを解決しようとして、日本の資本主義は一層侵略の手をのばすこととなったのである。

「満洲事変」ブームの頭打ち、豊作ならば「豊作飢饉」凶作ならば「凶作飢饉」とつるべ打ちの国内

農業恐慌、一九三二年（昭和七年）以後の一時的沈潜期を脱けでても盛り上りはじめた労働攻勢、小作争議の一途の激増、これらの危機進展の情勢と、他方における次の情勢、すなわち「満州」侵略によってひき起された軍備の拡張、財政膨脹、国家資本の活動領域の拡大、独占資本の国家資本とのなれ合いの増進等によるいわゆる「非常時」経済の情勢、この二つの情勢は一九三六年（昭和一一年）に至って、二・二六事件と準戦時体制とに集約されて現われた）のである。

この一九三六年とつづいて来る日華事変の年、一九三七年を国家独占資本主義へ移行をはじめるエポックと見るのである。しかしこの移行の時期がいつかということについては、いろいろ議論があり、満州事変開始の年とみる見方もあるわけである。

「このエポックを『満州』侵略開始の年、一九三一年におく見方もあるが、それは国家独占資本主義における国家を取りこんだ資本の運動法則の変形の特質が充分に明らかにされていない場合に起きる見方であると思う。もちろん移行の開始は一せいに行われるものでなく、一九三六―七年以前においても移行の胎動を把まなければならないが、いまだそれをもってエポックとするには不充分である」。（「危機における日本資本主義の構造」）

この期間に軍需産業は非常に拡大されている。重工業に於ける労働者の数は急激にふえ、失業者の数は減少する。しかし労働者の賃金は低下し、実質賃金がインフレによる物価高のために引下げられ、生活はいよいよその困難をまして行った。このような生活の圧迫のなかで労働運動がつよめられるのは当然のことなのである。一九三六年には労働争議ははげしくなり、その数も非常にふえ、ひろく全国にひろがって行く。農業危機もまた解決されることなく、いよいよ深まり、小作争議は数を増し、きぼも大きくなりひろがって行く。労働運動、農民運動はともにこの上なく高まってきたといえるのである。

このなかで行われた一九三六年二月の総選挙には、社会大衆党を中心とした無産政党の進出が著しか

った。しかし政府のこれに対する弾圧もまたいままでよりもはるかにつよくなり、計画的になってきた。政府は五月一日のメーデーを禁止し、さらに官業労働組合禁止を命じた。弾圧体制は治安維持法とその死刑法への強化によって、つよめられ、予防拘禁法と保護監察法などを制定することによって、完備されて行く。このようなファシズム、軍国主義体制の前進のなかで、二・二六事件をひきおこした国家主義者青年将校たちの国家主義運動もまた急激に力を集めてきたのである。

ファシズムは決して日本にだけ前進したのではなく、イタリー、ドイツ、スペイン等国際的に前進してきている。このファシズムの前進のなかでファシズムに対抗してたたかうことのできるたたかいの方式がとりあげられたが、それが人民戦線戦術である。人民戦線戦術は一九三五年七月から八月にかけてひらかれたコミンテルン第七回大会に於て決定されたものである。その戦術は反ファシズム統一戦線についての主報告を行った。ディミトロフ、さらにピーク、トリアッチ、トレーズ等によって理論づけられ、総括されたものである。ファシズムとの闘争の体験はこのようにはやく国際的に検討され、総括されたのである。この人民戦線戦術の決定こそは、世界の共産主義運動の歴史のうちで、全く劃期的な意味をもっている。それは従来の主義運動にともないがちであったセクト主義の欠陥をきびしく批判し、具体的にその原因を一つ一つつきとめ、それを徹底的にとりのぞくことがなければ、ファシズムとのたたかいのなかで勝利をうることはできないということを示している。ファシズムの第一の目標は共産主義であり、ファシズムは共産主義の弱点のなか深く攻撃の矢をうちこみ、組織をばらばらにしてくるのである。この大会の執行委員会活動報告のなかでピークは、共産主義インタナショナルのもっとも重要な支部の情勢についてのべ、反ファシズム統一戦線の新しい方針によって、勝利の道をすすむことができると激励している。日本共産党に関しては短いが適切な次のような部分がある。

「日本共産党は、異常なテロルの重圧下に活動しつつ、日本帝国主義の中国侵略にたいしてボルシェ

ヴィキ的に闘争し、中国勤労大衆に大きな援助をあたえた。しかしながら官憲のテロルと挑発者とによって、その勢力は非常におとろえている。日本共産党が今後成功するためには、党はセクト主義のかすを一掃し、あらゆる合法的機会を利用して労働者階級の日常利益を擁護するために闘争しなければならない。同時にこれは、党を政治的、組織的につよめ、勤労大衆をひきいて、反動にたいして闘争させることができるであろう。」（共産主義インタナショナル第七回執行委員会活動報告）

二

一九三六年二月、このコミンテルン第七回世界大会の決議と国際情勢の具体的分析にもとづいて、党の戦術的方針を是正し、一層適確なものにすることを指示したのは、『日本の共産主義者への手紙』であった。これは当時モスクワにいた野坂参三、山本懸蔵の書いたものであって、反ファシズム統一戦線のための闘争を展開する日本共産党の任務を述べたものであった。

「日本のファシズムが、自分の大衆政党をもっていないという事実は、ファシストの有する危険性を少しも減殺するものではない。天皇制そして特に軍部が国政上に特権をもっているために、日本のファシズムは、軍部ファシスト独裁によって勝利することができる。すなわち、軍部は陸海軍に対して独裁権をもち、また搾取階級のみならず都市並に農村の広汎な小ブルジョア大衆の間に其影響を拡大せんとしており、更に労働者の間にさえ侵入して、幾多の労働組合を彼等の側に引入れることに成功している。現在の反動政府は、軍部の侵略的ファシスト分子とある程度の意見の相違を有しながらも軍部ファシスト独裁樹立のために準備している。」と手紙はいっている。手紙はこの軍部ファシスト独裁の脅威とたたかうために次のような具体的な任務を示すのである。

「労働階級の統一行動、および反ファシスト人民戦線のための闘争において、わが党は次の如き任務を有するものと考える。

一　共産主義者と其の支持者は、勤労層のあらゆる合法的大衆団体、第一に労働組合や農民組合に加入しなければならぬ。しかして其所属団体とともに現存の無産大衆政党に加盟すべきである。そしてこれらの団体間において、積極的活動を行い、会員の大多数、および、全組織を階級闘争の方向に左翼の潮流に引き込む様に努力し、かくして中央及び地方で組織された全無産者の反ファッショ統一人民戦線を作りあげるように努力すべきである。其他水平社、産業組合、平和団体、青年団、在郷軍人会等々の如き大衆団体内においても、共産主義者は会員大衆や、地方組織をファシズム、反動戦争反対の人民戦線の側に獲得するために闘わなければならぬ。共産主義者は社会大衆党内の左翼分子と緊密な関係をもつと同時に、其反動的指導者に反対して闘争し、彼等を孤立化するように努力すべきである。

このことに関連して、社会大衆党其他の大衆団体から左翼の地方組織を分裂させ、或は社会大衆党と対立する無産政党を新しく組織せんとするような企てに対しては、だんことして反対せねばならぬ。共産主義者は全力をつくして労働組合、社会大衆党、其他の労働者団体の合法的存在と、それらの統一とを防衛しなければならぬ。」

この手紙は日本の共産主義者の眼をひらき、その新しい道をひらいたのである。しかし日本に於て人民戦線戦術は、共産主義者のなかでも、なかなか理解されがたく、人民戦線支持者は「人民戦線」という軽視的な名によってよばれるなどということがつづいたのである。それ故に最初から人民戦線戦術を全くうけつけようとしないもの、うけ入れることはうけ入れても、戦術に習熟することが困難なためにすぐあやまりにおちいるなどということがあった反面、一方党の確立なくして、人民戦線を展開することができるなどというあやまった考えが生れてきて、そのために人民戦線運動は党を確立することなく

展開されたということができるのである。

当時共産党は弾圧のために非常に打撃をこうむっていたが、一九三六年夏日本共産党関西地方委員会は、「統一戦線樹立」を労働者階級によびかけ、反ファシズム戦線統一の重要さをうったえた。これによって人民戦線結成の動きは、次第に活溌になりはじめたが、関西地方委員会内に於ても、人民戦線結成を促進すると同時に、党下部の組織の結成をすすめるという点で意見の一致をみることができなかったために、下部に於ける党組織はつくられず、共産主義者のグループの形をとることになってしまい、そのために人民戦線は中核を失い、正しい形をとって発展する力を失って行ったといえる。一九三六年一二月人民戦線の動き全体に弾圧が加わり、党の再建が行われないうちに全国的な検挙をうけなければならなくなった。このようにして日本の人民戦線運動は広汎な戦線をひろげることはできなかったのである。従って反ファシズム闘争はついに成功しなかったのである。

このように人民戦線運動は大きく展開することができなかったが、人民戦線の思想は多くの労働者、農民、インテリゲンチャのなかに浸透して行き、一時人民戦線勢力はかなりの強さをもつにいたったといえる。

人民戦線運動をすすめる役割をになったのは全評、東交等の左翼組合であった。当時のその構想は、社会大衆党を中心にしてファッショ反対の旗の下に全人民的な階級的な勢力を全部統一し、左翼労働組合、農民組合、全国水平社、協同組合、文化団体をその統一戦線に参加させ、次第に労働者農民、市民、勤労インテリゲンチャの統一行動を組織して行くところにあった。しかし人民戦線戦術に習熟しなかったためと社会大衆党そのものが右翼社会民主主義者でしめられていたため、社大党は反ファシスト人民戦線戦術にたいしては、門をひらこうとしなかった。一九三六年五月岡山地方無産団体協議会は社大党支部結成をはかり、反ファシズム政治戦線統一を主張した。一九三六年七月反ファシズム闘争の共同闘

争組織「労農無産協議会」が結成され、社大党以外の無産団体をすべて組織し、全無産団体の共闘によって反動勢力とたたかうことを宣言し、社大党が門戸をひらくならば、即時解散合同すると宣言したが、社大党はあくまでこれを拒否したのである。そこで労農無産協議会は統一戦線結成の方針をすて、「日本無産党」に改組し、ついに日本に於ける労働運動内の戦線統一闘争はこれをもって終ることとなったのである。このように「共産主義者への手紙」の示した政治戦線の統一をあくまでも、うむことなくおしすすめることが中途でなげだされるにいたったということに、この運動の弱さがあらわれているが、共産党の確立なくして人民戦線がすすめられたということが、この結果を生んだといえるだろう。

三

人民戦線の運動は文化の領域に於ても展開されたということができる。もちろんこれをはっきりと人民戦線運動とよぶことができるかどうかには疑問がある。それほど文化の領域に於ける動きは、互に孤立しており、結びつきがなく、また種々さまざまの形態をしていたのである。そしてそれはまた当然のことだったといえる。強力な人民戦線が労働者階級を中心としてつくられているならば、文化運動もまたそれと併行して、またそのなかで、政治との関係をたちきるなどということなく、生々と展開されると考えられるが、当時日本に於てはそれは全く望むことのできないことであった。しかし戦争をおしすすめ、軍国主義教育をおこない、日本精神をとき、民族主義を主張するファシズムが進行するとき、進歩的文学者、思想家だけでなく、多くの自由主義的文学者、文化人はファシズムの文学芸術に対する圧迫に抵抗し、思想の自由をまもろうとしたのである。一九三二年の「コップ」に対する弾圧によって、検挙され、出獄して転向を主題とする作品によって、自分自身の行動を徹底的に反省し、新しい道を見

出そうとしはじめていたプロレタリア文学の作家たちも、この動きのなかで、新しく文学活動をおしすすめることとなったのである。

転向文学は、自分の転向の意志を表明し、思想的に転向して新しい思想を求める文学ではない。あくまでも共産主義運動マルクス主義思想の正しいことを信じ、それに前進しようと考えるが、自分自身の弱さを振りかえり、たたかい破れた自分を徹底的にみきわめ、自分の限界をさだめて、その限界内に於てあくまで良心をまもり、生きて行こうという決意にいたる自覚を追求した文学である。

この転向文学を通じて、作家同盟解散後出獄してきた作家たちは、そのたたかいの敗北のあとをふりかえり、政治的には没落しようともプロレタリア文学はすてることなく、作家としてたたかいつづけるという、心をとりかえして行くのである。転向文学にかぞえられる作品は一九三四年に於ては藤沢桓夫「世紀病」金親清「裸の町」島木健作「癩」「盲目」立野信之「友情」*村山知義「白夜」「劇場」*窪川鶴次郎の「風雲」*徳永直「冬枯れ」藤森成吉「雨のあした」等である。なかでも島木健作の「癩」立野信之の「友情」村山知義の「白夜」は転向文学をみちびいた有名な作品である。一九三五年には中野重治の「第一章」「鈴木・都山・八十島」*「一つの小さい記録」「村の家」「小説の書けぬ小説家」（三六年一月）等があり、間宮茂輔の「夕焼けの窓」*さらに高見順の「故旧忘れ得べき」「嗚呼いやなことだ」*（三六年六月）平林彪吾の「鶏飼いのコンミュニスト」*などがある。上野壮夫の「内部」も注目すべき作品である。その他一九三六年八月には石坂洋次郎の「麦死なず」のような作品もあった。

転向文学はマルクス主義文学者が、自分自身の政治的な没落である転向を前にして、自分自身の全体を文学によってもう一度検討するところに文学の動機をおいている。そしてプロレタリア運動からははなれたが文学者としてプロレタリア文学運動からはなれないし、あくまでもプロレタリア文学を信じその前進を心にちかうのである。しかしこの自分自身の全体を検討するということは、マルクス主義文学

理論から考えれば、その社会的階級的な検討によってはじめてなりたつものである。しかしそのようなマルクス主義文学理論にみちびかれて、自分自身を文学的に検討しつくそうとしたものは少なかったといえる。多くの転向文学はマルクス主義文学理論をつきやぶって、私小説のただなかへ、自分とともに自分の文学をもつきすすめて行ったといえる。もちろん当時すでにソヴェート文学に於ける社会主義リアリズムの理論がはいってきており、これまでの日本のプロレタリア文学理論に対する信頼は、次第におちてきていたのである。それ故にこれまでの文学の創作方法に対する疑いが、一挙に転向作家たちを私小説に結びつけたということも考えられるのである。しかしこれは（後でとりあげるように）社会主義リアリズムのあやまった理解にもとづくものなのである。

中野重治の「鈴木・都山・八十島」はその少い異例の一つであり、これによって、自己検討を通じて人間を社会階級的にとらえ、描く文学が一つの実りをもとうとしていたといえる。しかしそれは未完の作品となってしまった。一九三七年六月に生れた中野重治の「汽車の罐焚き」は、このような文学の努力の上につくりだされたすぐれた結晶である。しかし中野重治自身「村の家」「小説の書けぬ小説家」等の方向をそのなかにもっているのである。もっともこのような方向、「村の家」のような方向を通じて、自己検討をはたすために自分を社会的とはいえないまでも客観的にとらえ、描く文学の実りを得ることが不可能だとはいいきれないようである。なお島木健作は人民戦線を主題とした作品「再建」をかくことによって、一つの道をひらこうとしていたが、それは政治的にも熟していないといえる。それはこれまでの芸術理論のきびしい批判の上に創造されたとはいえないのである。佐多稲子の「くれない」がそれである。また徳永直はこれまでの創作方法に対する検討ののち「彼岸*」のようなすぐれた作品に到達した。江口渙の「人生のいり口*」（三五年七月）もまたきびしい人生に対する考えを、新しくとりだそうとして苦しみのなかにかかれている。このような動きのなかで葉山嘉樹は、その独自の文学の力を

失うことなく、自分の生きる新しい場所を求めて作品を書いている。なお高見順の「故旧忘れ得べき」や「嗚呼いやなことだ」などは転向の文学であるとともに、当時の不安の文学に通じるものがあることをいっておかなければならない。

評論によって転向を考えようとしたものに、林房雄・亀井勝一郎等があるが、林房雄はついに転向を文学によって考えつくすということなく、ファシズムの沼のなかに身をひたしてしまうのである。貴司山治の「文学者に就いて」について書いた中野重治の『「文学者に就いて」について』*のなかには、次のような言葉がある。「僕が革命の党を裏切りそれに対する人民の信頼を裏切ったという事実は未来にわたって消えないのである。それだから僕は、あるいは僕らは、作家として新生の道を第一義的生活と制作とより以外のところには置けないのである。もし僕らが、自ら呼んだ降伏の恥の社会的個人的要因の錯綜を文学的綜合の中に肉づけすることで、文学作品として打ち出した自己の批判を通して日本の革命運動の伝統の革命的批判に加わったならば、僕らは、その時も過去は過去としてあるのではあるが、その消えぬ痣を頬に浮べたまま人間および作家として第一義の道を進めるものである。」（傍点伏字）この言葉はすでに多くの人に知られているが、転向を考える文学者の考えの一つの基本を示したものといえる。そしてこの言葉の実現は、「村の家」の方向ではなく「鈴木・都山・八十島」の方向においてみられようとしていたのである。このような転向文学のなかで、転向することなく生きた宮本百合子は「乳房」*のような力のこもったすぐれた作品によって、プロレタリア運動の前進を勇気づけようとしたのである。

四

ナルプ解散後のプロレタリア文学者、転向作家、さらに自由主義の立場にたつ文学者はつよまってくるファシズムを前に、良心をまもる立場を見出そうとして、その最後の力を集めようとした。ちょうどその頃、フランスに於てファシズムに対して文化をまもろうという文化擁護国際作家大会がひらかれ、ファシズムに断乎反対する宣言をだしたのである。この報道が日本の文学者にあたえた影響は大きかった。またジイドやマルロオがコンミュニズムに転向したその歩みもまた、日本の多くの文学者、インテリゲンチャの心を動かした。その外国に於ける反ファシズム文化運動の動きは、雑誌によって報道され、ヒューマニズムの主張は次第に日本の文学者の間に起ってきたのである。

ヒューマニズムこそは、せまってくるファシズムに対して抵抗するために、よびだされた言葉であった。すでにプロレタリア文学はその組織を失い、集団としては旗を下してしまっている。ヒューマニズムこそは、多くの文学者の統一を、はかることのできる立場であった。そこでヒューマニズムとは何かその理論づけがされはじめた。三木清、青野季吉等がそれを行った。それは次第にたんに理論の上だけではなく、感情の上でも、日本の文学者のうちに、しっかりと確立されてくるようにみえた。しかしファシズムの進行ははやくインテリゲンチャの不安動揺ははげしかった。さらにまた政治的な警戒心から、極度に政治運動と関係を結ぶということがさけられるようになっていた。そのためにヒューマニズムが主張されながら、一人一人が組織として集るということがなく、従ってその主張も力を生みだすことができなかった。文学者の孤立は、まるで文学そのものにそなわるものであるかのように考えられたのである。

一九三二年創刊された「文学界」は一九三六年一月改組し、村山知義、森山啓、島木健作等の転向したプロレタリア作家を加入させたが、それはのしかかってくる戦争とファシズムの空気のなかで、文学をもってヒューマニズムをまもろうとする考えであったといわれる。しかし「文学界」がこの改組によ

って、フランスに於けるように反ファシズムのたたかいを実現する文学者の集りになったとはいえないのである。なぜといってそれはフランスに於けるように文学者が反ファシズム政治戦線を結合していなかったし政治に参加する意志も持っていなかったからである。

宮本百合子が「冬を越す蕾*」等に示される明確な立場をもちつづけることのできた唯一人のすぐれた作家として、このようなヒューマニズムの主張に対してきびしい批判を示したのは、当然のことであり、正しかったといわなければならない。中野重治は「文学界」へ参加することを拒絶した。これもまた一つの正しい見透しの上に於てなされたといえる。しかし転向作家全体の行動の統一を支える、新しい運動理論はまだそこには、生れていなかったといえるのではないかと思う。しかもファシズムははげしい勢で前進したのである。

「人民文庫」は一九三六年二月創刊された。武田麟太郎を中心として高見順、新田潤、堀田昇一、間宮茂輔、湯浅克衛、田宮虎彦、本庄陸男、田村泰次郎、井上友一郎等が集った。これは反ファシズム人民戦線の任務をいくらかでも文学を通じてはたそうとしたものである。散文精神を主張したが、これはファシズム、軍国主義の非合理をリアリズムをもって冷静にみつめ分析しとらえようとするのである。これは「文芸懇話会」のような官僚による文学者の集りの結成に反対するためにつくられたといわれている。そしてファシズムに対する抵抗を完全な形ではないが作品として結晶させたといえる。「人民文庫」に関係はないが同じように散文精神をもってファシズムに対して抵抗しつづけた作家として、広津和郎の名をはっきりしるしておかなければならない。「人民文庫」の運動、及びその関係のなかから生れてきた作品としては、新田潤「煙管」荒木巍「渦の中」渋川驍「龍源寺」等がすぐれている。

行動主義文学が提唱されたのは一九三三年であるが、一九三五年に再びこの主張は行動的ヒューマニズムの思想を中心として、行われはじめた。行動主義文学を理論づけようとしたのは小松清である。小

松清はフランスのマルロオの文学思想その社会的行動にその根拠をおいたのである。阿部知二、舟橋聖一、十返肇などがこれに参加し、インテリゲンチャの心をとらえてはなすことのない不安を、行動に於て解決することを考え、不安の文学に一つの社会的な出口をつくりだそうとしたといえる。

さらにファシズムに反対し、野蛮を拒否し人間性をまもるヒューマニズムの文学を主張した人たちには、前にも書いた三木清、青野季吉のほか阿部知二、中島健蔵等があり、ヒューマニズムこそは軍国主義に抵抗する日本の文学者の最後の場所であった。しかしこれはまた人間性を追求する文学者として当然立つべき場所であったのである。青野季吉はファシズムの前進に対して、かなりはっきりした見透しをもち、はやくからヒューマニズムの文学を強調したが、ここには「文化擁護国際作家大会」の影響、直接ではないが、間接の結びつきがみられる。

反ファシズムの国際的な文学運動を日本に報道し、日本のインテリゲンチャを、人民戦線に組織しようというはっきりした意図のもとに一九三四年創刊された「世界文化」の運動は、東京中心の文壇の文学の動きに対する批判、プロレタリア文学理論及びその芸術理論に対する批判をもって行われた。中井正一、新村猛、和田洋一、久野収、真下信一等がこれに参加した。新村猛はフランスの反ファシズム文化運動を、和田洋一はドイツの反ファシズム文化運動を、きわめて正確に次々と紹介し、若いインテリゲンチャの心をみたした。中井正一の芸術理論は、客観主義的なプロレタリア芸術理論にたいする批判としてだされたが、それはせまってくるファシズムとたたかう生々として柔軟な芸術運動とその芸術主体とを支える目的をもっていたのである。中井正一はこの運動のなかから週刊文化新聞「土曜日」を発行したが、それはフランス人民戦線の発行する新聞「金曜日」に示唆されたものであった。しかしこのような反ファシズムの文化運動も、弾圧により、参加者が全員検挙され、ついに中絶しなければならなかった。

しかしファシズムの進行のなかで、ドイツ・ナチスの焚書事件に抗議する文化人の集会が、「学芸自由同盟」となったことは、大きな意味をもち、その会長に徳田秋声がついたことはまた特別にとりあげるべきことと考えられる。文学と直接に関係はないが、戸坂潤を中心として唯物論全書が計画され組織されたことは注目すべきことである。全書中の戸坂潤の「認識論」甘粕石介の「芸術論」は文学理論の前進に光をもたらしたといえる。高倉テルは独自に文学と民衆とのつながりをさぐり、それを理論づけようとしたのである。

演劇に於ても同じように力の集りがみられ、「夜明け前」「雷雨」「同志の人々」「群盗」などの公演が行われ、そのなかで久板栄二郎の「断層」「北東の風」が生みだされた。つづいて日本のプロレタリア演劇のなかに大きくそびえる「火山灰地」が演劇運動のなかで転向することのなかった久保栄によって創造され、逆に人民戦線の動きに力をあたえるのである。

五

日本プロレタリア文化連盟の運動が、一九三一年四月に発表された「政治テーゼ草案」によって、直接にみちびかれたというように考えることはできない。しかし日本の農業革命の問題を正確に分析し、正しく革命の展望を示すことができず、大きなあやまりをおかした「政治テーゼ草案」は一年余りの間、訂正されることなく、日本の革命運動を動かしたのである。文化運動も決してその外にたつということはできはしなかった。日本プロレタリア文化連盟の運動も、この情勢分析の上にたって、展開せられたと考えることができる。このことは否定することのできないことである。

もちろんこの草案に対する反対、疑問が当時共産党内になかったのではない。ことに野呂栄太郎はこ

の草案には始めから反対であったといわれる。野呂栄太郎ははやくから日本の農業問題研究をすすめ、三二テーゼが発表される以前から日本に於ける寄生地主的土地所有制の桎梏の下に残存する半封建的農業生産関係について明にし、一九三一年夏、すでにその見解の下に「日本資本主義発達史講座」の発行を計画しているのである。それ故に日本プロレタリア文化連盟が結成された頃には、その加盟団体の一であるプロレタリア科学同盟内に於て、ようやく日本に於ける封建制の問題が明にせられようとしていたと考えられるのである。その研究はさらにすすみ、三二年テーゼが発表される頃には一定の水準に達していたと考えられる。しかしそれはなお「三一年政治テーゼ草案」のあやまりを正すことができるほどの成果をもたらさなかったし、そのような力ももちはしなかったのである。

この問題は日本プロレタリア作家同盟のなかでも考えられなかったはずはない。しかしそれは作家同盟に於て正しくとりあげられはしなかった。これが正しくとりあげられ、考えられるようになったのは、「三二年テーゼ」の発表後である。(三二年テーゼをもっともはやくうけ入れ、具体化することのできたのは、野呂栄太郎であるが、文学理論のなかで具体化しようとしたのは、宮本顕治、久保栄である)このことは重要である。「当面の時期における国内階級の力関係、日本における来るべき革命の性質と任務は、封建制の異常に強大な諸要素と独占資本主義のいちじるしく進んだ発展との結合あるところの、日本の支配体制の特殊性を顧慮し分析せずしては正当に評価しえない。」と三二年テーゼはいっている。しかしこのような日本の支配体制の特殊性を顧慮し分析するということは、作家同盟に欠けていたのである。

このことはどういう結果をもたらしただろうか。先ず第一にそれは同盟者としてのプロレタリア文学者以外の文学者との結合について、正しい方針をたてることができなかった。第二にそれは日本に於けるブルジョア民主主義革命の運動を反映した日本近代文学の正しい評価を十分行うことができなかっ

た。第三には文学作品、プロレタリア文学以外の作家の作品だけではなく、同じ陣営内の作家の作品を十分正しく評価し、それを正しくのばすことができなかったことである。この三つは互に関連し合っていて、一つ一つをきりはなすということはできないが、この三つの欠点こそは、軍国主義の前進するなかで日本の文学者の大きな統一戦線を結成するのをさまたげることとなったと考えられる。それ故にこの点について少しくわしく検討しなければならないと思う。

これらの欠点は日本に於ける民主主義革命の正しい展望が欠けていたところから生れてきたものである。もちろん正しい革命の展望は、「二七年テーゼ」によって明にされている。そしてそれは「三二年テーゼ」に発展したといえる。しかしなお三一年政治テーゼ草案が出されたということからも考えられるように、それは必ずしも日本の革命運動全体のなかに、生々といきづいていたということはできないのである。三二年テーゼによって非常に具体的に革命の性格が明にされ、これに従って文学運動のなかに於ても、これまでの方針に対する批判、反省が生れてきたが、弾圧ははげしくなり、その批判をくぐりぬけて、新しい方針のもとに、日本の文学運動を統一し、力をあつめて行くということはできなかったのである。

六

第一の同盟者との結び合いが十分考えられることがなかったというのは、まさに「社会主義革命への強行的転化の傾向をもつブルジョア民主主義革命」という革命の展望が文学運動のなかで、十分具体化されなかったからである。プロレタリア文学運動は当時の日本の文学者を、被抑圧階級、階層に属するものと考えず、ただちにブルジョア階級に奉仕するものと考え、結合をはかることをしなかったが、こ

れは社会主義革命への強行的転化の傾向をもつブルジョア民主主義革命という革命の性格を考えるとき、あやまりであることは明である。プロレタリア文学運動が、非常に広汎にひろがりながらなお日本の各階層の文学要求をみたすことができず、小ブルジョア農民の文学要求をプロレタリアートの文学要求にかたく結びつけ、日本人の人間としての文学要求をほとんどすべて抑圧する天皇制権力に対抗する大きな人間としての力としてあつめることができなかったのは、このためである。

第二の日本近代文学の正しい評価が行われなかったということも、同じところに原因が考えられるが、さらにこれは、プロレタリア文学の文学理論の不十分さにもとづくといえる。もちろんその文学理論は決して質的に低いものではなく、非常に高いものであった。しかしなお文学芸術の特殊性を十分明にすることはできなかったのである。従って文学芸術に於ける発展の相対的な独自性がはっきりととりだされることがなく、その故に政治と芸術文学との関係も、ただたんに従属関係が明にせられるというにとどまり、文学芸術の相対的な独自性を通じての従属である点がようやく追求されようとしながら、なおあいまいなままにのこされてしまったのである。それでは日本に於ける文学芸術の発展を歴史的にあとづける必要が十分みとめられるというわけにはいかなかったのである。これがなされていれば、プロレタリア文学はその同盟者となるべき他の多くの作家たちが、日本文学の歴史的な発展のなかで、どのような位置をしめるのかということも、はっきりしてきたにちがいないのである。（中野重治がこの異例とされることは、すでに小田切秀雄が第一巻の解説でとりあげているところである。）また日本近代文学の発展を研究して行くならば、文学の特殊性を明にしようとして、すでに坪内逍遥や二葉亭四迷たちが、全力をふりしぼっている姿がみいだされ、ここからプロレタリア文学も多くのことを得ることができたにちがいないのである。

ソヴェート文学に於てみちびきだされた唯物弁証法的創作方法の考えは、日本の文学理論（蔵原惟人

の芸術論）に、そのままとり入れられるなどということはなかったが、やはり文学芸術の特殊性、独自性が十分明にされることがなかったために、唯物弁証法を自分のものにすることによって、作家がすぐれた作品をかくことができるという考えは、多くの作家を支配し、あやまりにみちびいたのである。

第三のプロレタリア文学以外の作家の作品にたいする評価が十分正しく行われなかったということは、第一、第二に明にした点に原因があるが、同じ陣営内の作家の作品を十分正しく評価できなかったのは、どこに原因があると考えるべきだろうか。例えば宮本百合子の「亀のチャーリー」（六巻収録）の評価などの問題である。もちろんここに於ても二つの原因が考えられ、その一は日本に於ける革命の性格が正しくとらえられており、その展望のなかに文学運動が正しく具体的にすすめられていたとすれば、「亀のチャーリー」を一連の非プロレタリア的作品として評価するあやまりにおち入るなどということはなかったろうと考えられる。さらにまたその二は、文学作品に於ける階級性の表現は、具体的な人間像を人間関係のなかに形象をもって創造するところに行われるということが明にされ、文学芸術の本質が十分追求されていたならば、この作品の批評はもっと、亀のチャーリーの人間像に即してその欠陥を明にするものとなったであろう。『亀のチャーリー』一篇を読んで最も強く印象されることは『亀のチャーリー』という中年の男が全く孤立的に書かれていることである。生活的な面では住んでいるアメリカのプロレタリア大衆とも故国日本の革命的大衆ともなんら切実な交流を持っていない。ポッツリ切りはなされている。亀のチャーリーという男が、ニューヨークには、ほかの日本人労働者も学生も商人もいるであろうのに、それとはちっともかかわりなく、またアメリカの労働者、その前衛とも何の有機的結合も示さず、ひたすらアメリカの子供に向って公式的な宣伝教育をしてはせっせとピオニイルにしてゆくことが書かれている。――これは全く著しく変であると思った。」と宮本百合子は書いている。

たしかにこのような欠陥がこの作品にはないとはいえない。この主人公が孤立して描かれているのは、

不自然であり、この人間の組織的なつながりがもっと正確にとらえられなければ、ピオニイル養成の革命的な運動のほんとうの姿は描くことはできない。この宮本百合子の指適は重要である。しかしそれにもかかわらず、東洋人に対する人種的偏見のまきちらされているアメリカで、その帝国主義の圧迫の下で、失業と侮辱に見舞われて生きてこなければならなかったこの日本人の孤独と哀しみとは、亀と共にくらす主人公の人間像のなかに、しっかりと描きだされているのである。失業と労働のチャンポンの長い生活ののち、失業と孤独のなかにおとしこまれ、最後には失業者仲間と一緒に安い部屋に住んで、射的の店をだして、日をすごす中野は、その圧迫のなかでつくりあげた労働者的な心の動きによって、孤独をやぶり、子供と結びつかずにはいられないのである。たしかに主人公中野―亀のチャーリーには、ルンペン・プロレタリアの要素があり、大人たちの世界に身をのばすことのできないゆがんだ人間性がある。しかしこのようなゆがんだ人間性をもちながら、子供たちとつながることによって主人公は、そのゆがんだ人間を解放する方向をみいだし、つくりだして行くのである。これは人間の真実であり、人種的偏見と失業に圧迫された人間の真実である。たしかに宮本百合子のいうように「亀のチャーリーがピオニイル養成という現実の仕事の理解に対して示している機械的な卑俗的な安易さ」が、ないわけではない。しかしそのような欠陥をつきやぶって、この人間の真実は、私たちにせまってくる。亀のチャーリーが失業と侮辱のなかから、子供たちにむすびついて行き、ピオニイル養成という役割をはたして行くところにこそ、一つの日本人移民労働者の人間像があるのである。批評はこのような人間の形象のなかにはいり、その形象をとらえて、具体的に行われなければ、ほんとうの批評ということはできない。しかし当時批評はそのようには行われず、批評家が頭のなかにもっている考えを、批評しようとする作品に外からおしはめて行くというやり方で行われることが多かったのである。宮本百合子のようなすぐれた評論を書くことのできた人さえも、この時期に於てはこのような欠陥をまぬがれることはでき

の一があったといってよい。

日本プロレタリア作家同盟を中心にした文学運動の欠陥を以上三つに要約したが、この三つのうちの第一の同盟者との結合に当然ふくまれるものではあるが、特別にとりあげて考えなければならないことは、社会民主主義の立場に立つ文学者との結合についてである。もちろんこの結合は不十分であるばかりでなく、全く結合をたちきり、互に対立し合うという状態にあったのである。しかしそれは小林多喜二の作家同盟第五回大会の報告中にある次のような方針から考えて当然のことであった。

「ブルジョア文学組織内に於ける『反対派』活動に対して今迄殆ど方針が樹てられていなかった」という指摘である。「これからうける弱さは、例えば『文戦』の分裂の際にあらわれている。我々は彼等のうちに反対派を残すことによって、外からの攻撃と共に内から彼等を壊滅させなければならなかった。」これは当時の労働組合の戦術方針と同じであり、それによったものなのである。当時の労働組合の戦術は、今日赤色労働組合主義として、そのあやまりを批判されているが、それはプロフィンテルン(赤色労働組合インタナショナル)一九二九年一月のストラスブルグ会議の決議によってもたらされたものである。この決議に対しては、一九三五年七月にひらかれたコミンテルンの第七回世界大会で、ピークが具体的に批判しているところである。それはもちろん共産党と社会党の統一戦線によってファシストの攻撃をしりぞけたフランスのプロレタリアートの闘争の成功からみちびきだされてきたものである。ピークは改良主義的労働組合に対してこれまでおかしてきた共産党のあやまりについて書いている。いまその一つの点をあげると、「労働者大衆をふるい労働組合組織に結びつける伝統的勢力を軽視した結果、またわれわれの活動の重心が赤色労働組合の強化と革命的反対派の組織をつくることに移った結果、共産主義者は数年にわたり、やろうと思えばやれたはずの改良主義的労働組合内の活動を無視

させるにいたった。こうしたことが必然的に組織大衆のあいだにわが党の影響がひろまるのを大いに阻害したのはもちろんである。」このようなあやまりがあっては、統一戦線は生れることはできない。しかしこのようなあやまりは、日本のプロレタリア文学運動のうちにも、同じようにあらわれている。それは社会民主主義の立場にたつ葉山嘉樹その他の文学者との関係のうちにあらわれ、プロレタリア文学運動の大きな統一的なひろがりを失わさせたのである。もちろんこれは当時の国際的な戦術によって、生みだされたものであるが、このあやまりを克服することができなかったということは、やはり特別に考えなければならないことと思える。

七

社会主義リアリズムが日本にとりいれられるに際しておこったいろいろな混乱は、このようなところから生れたと考えられる。社会主義リアリズムが、ソヴェート文学芸術の基本的な方法として採用されたのは一九三四年八月の第一回全ソ作家大会である。しかし社会主義リアリズムはそれ以前すでに理論的に明にされていて、日本でも一九三三年二月「プロレタリア文学」に紹介されているのである。しかもこの社会主義リアリズムをよりどころにして作家同盟を解散しようという動きも生みだされてくる。

社会主義リアリズムがもし正しく日本にうけ入れられたならば、それがナルプの解散をすすめる一つのよりどころとなるなどということにはならなかったのである。作家同盟の運動方針、文学理論、その組織にいろいろ欠陥があろうと、創作方法と組織活動を統一することによって、集団的な文学創造をひらこうとしてきた作家同盟を否定して、社会主義リアリズムが生かされるなどということはありえない。徳永直は「創作方法上の新転換」(一九三三年九月、六巻に収録)を書き、作家同盟の方針に対する

きびしい批判をしたが、これは社会主義リアリズム理論に支えられて、集団的な文学活動を否定する考えにかたむいている。しかしこれは作家同盟の指導的な文学理論が芸術形象の本質を十分明にすることができなかったために、世界観とリアリズムの関係を明確に追求することができず、文学の創造活動をみちびく上で、欠けているところがあったので、それに対する作家の批判ともいうべきものであった。

日本に於ても社会主義リアリズムを採用することによって、プロレタリア文学を発展させることができるという主張をしたのは森山啓と山田清三郎である。宮本百合子は社会主義リアリズムのとり入れられ方のあやまりを指摘し、それが正しくとり入れられるために必要なことがらを明にした。「成果と欠陥との厳密な自己批判に立って……現在一部に現れているような理解、即ちそら見たことか、創作における唯物弁証法的方法のスローガンなんぞは全く誤謬であった、したがってプロレタリア文学の階級性の主張も誤っていたのだという考え方はプロレタリア文学運動のそれぞれの段階を、全体的な発展の上に見ることのできない清算主義的な態度であるし、またプロレタリアートの歴史的任務そのものの抹殺であると思います。日本において直ちに社会主義的リアリズムというスローガンをそのまま適用し得るかどうかということは、活溌な大衆的討論によって決定されるべき点でしょう。」（一九三三年一一月「文化集団」）

しかし森山啓は社会主義リアリズムを文学における階級性、党派性をぬいたような形でうけ入れるあやまちをおかしたのである。しかしこれに対して久保栄、神山茂夫は反対した。もちろん社会主義リアリズムそのものに反対したのではなく社会主義リアリズムを、ナルプ解散後の戦争に反対しファシズムに反対してすすむ、ひろい文学運動に於ける統一の創作方法として、そのまま日本に採用することに反対したのである。久保栄は「日本的現実を前にして吾々全体のリアリズムに、社会主義という字を冠することはできない相談である。」「資本主義体制のもとに於ける吾々のリアリズムはどこまでも革命的リ

アリズムであり、伏字をさけていうならば反資本主義リアリズムである」と主張する。神山茂夫はそれとは別個に当面かかげるべきスローガンは社会主義リアリズムではなく、革命的リアリズムであると主張した。これらの主張は当時まだ統一戦線の考えが日本においては十分確立されていなかったので、その理論づけに不十分な点があり、社会主義リアリズムを資本主義社会において採用することを全面的に否定しているように理解される面をもっている。中野重治は二人の主張を批判し「『広汎な反資本主義的芸術運動』とは反資本主義芸術運動からのプロレタリア的ヘゲモニーの清算にすぎない。ここで反資本主義的ということはファシストから自己を科学的に分けていないことを示している。『資本主義のもとにおけるプロレタリア芸術運動』こそ広汎な反資本主義芸術運動を展開し得る」(一九三五年二月「文学評論」)ものであるといっているが、これは正しい批判とは考えられない。中野重治はまた、神山茂夫が社会主義リアリズムをスローガンとすることに反対し社会主義リアリズムはスローガンだけではなく文学創造の基本的方法であるといっているが、この批判もまたあたっているとはいえないと思う。しかしこの社会主義リアリズム論争についての、結着は今日に於ても、なお明にされているとはいえない。それ故解説者の意見が一般に正しいとされているのでないことはもちろんである。しかしこれはできるだけはやく解決すべきことである。

予定の詩についての解説をすることができなかった。別の形でまとめたいと思っている。詩の選定については遠地輝武さんに、短歌の選定については渡辺順三さんに、俳句の選定については栗林農夫さんに、それぞれお世話頂いた。また大江満雄さん壺井繁治さんから詩の資料の点でお世話いただいた。

文中＊印のある作品はすべて本巻に収録されたものを示す。

一九三四年（昭和九年）四月—一二月

作品（『　』内は発表誌・紙、刊は単行本）

癩（島木健作）『文学評論』4
石油（大江賢次）『文化集団』4
雨の掲示板（塚原健二郎）『文化集団』4
鏡餅（中条＝宮本百合子）『新潮』4
私の『黎明期』（徳永直）『中央公論』4・『文学評論』7
餓鬼（藤森成吉）『改造』4
裸の町（金親清）『中央公論』4
蜜柑の皮（尾崎士郎）『中央公論』4
砂の上（荒木巍）『文芸』4
ゴールド・ラッシュ（小熊秀雄）『詩精神』4
『戯曲・斬られの仙太』（三好十郎）ナウカ社刊 4
評論集『新らしき出発』（徳永直）ナウカ社刊 4
評論集『レーニン主義文学闘争への

文学運動および関係事件

四月、ナルプ（日本プロレタリア作家同盟）の解体をめぐる論争起る。佐分武＝伊藤貞助「社会主義的リアリズムか—日和見主義的リアリズムか—」（『文化集団』四月号）、江口渙「作家同盟の解散」（同上）の批判にたいし、山田清三郎ナルプ解体およびその方法を弁護す「ナルプ解体問題をめぐって」（『文化集団』五月号）。その他ナルプ解体をめぐる発言多し。

同月、創作方法にかんする発言、論争活潑になる。

同月、雑誌『文学評論』「ナルプ解散に対する諸家の感想」を特集し、徳永直・藤森成吉・江口渙をはじめ徳田秋声・川端康成など文壇作家のアンケートをも収む。回答をよせた

政治的および社会的事件

四月、全協産別東京支部代表者会議は中央部排撃を決議し、関東地方協議会を結成す。

五月一日、分裂メーデーおこなわる。

同月、共産党中央奪還全国代表者会議の動きあり。

共産党「多数派」分派結成。

六月、文部省思想局設置さる。

同月、共産党機関紙『赤旗』一時停刊。

同月、フランス共産党イヴリーに全国協議会を開き、一切を反ファシズム統一戦線に集中する画期的方針を

道』(宮本顕治) 隆章閣刊 4
評論集『現代作家論叢』(片岡良一) 三笠書房刊 4
『書簡旅行記』(蔵原惟人) 文化集団社刊 4
『現代ソヴェート文学概論』(トリフォノフ・大竹博吉訳) ナウカ社刊 4
阿呆(藤森成吉)『文学評論』5
自然と人生について(橋本英吉)『文学評論』5
はげしい空(上田進)『文学評論』5
波の上(堀田昇一)『文学評論』5
恐怖(窪川=佐多稲子)『文学評論』5
『飢』(藤森成吉) 叢文閣刊 5
インフレに踊る(伊藤貞助)『文化集団』5
白夜(**村山知義**)『**中央公論**』5
プロレタリア文学とナルプの功罪(山田清三郎)『新潮』5
童児(平田小六)『文芸』5
白い壁(**本庄陸男**)『**改造**』5
夏(荒木巍)『改造』5
『短歌の諸問題』(渡辺順三) ナウカ社刊 5
『プロレタリア文学の新段階』(山田

プロレタリア作家中、解体を敗北として認め再出発の決意を語った者は佐多稲子ただ一人。
同月、『現実』創刊。亀井、本庄、田辺耕一郎らに保田与重郎、藤原定らが執筆。
同月より六月に亘りコップ再建の川内、松村、岩村ら検挙さる。
五月、『プロレタリア文化』廃刊。
同月、『テアトロ』発刊(テアトロ社)以後、新協劇団解散の四〇年八月(七巻七号、全七一冊)まで刊行さる。
同月、中野重治、出獄(懲役二年執行猶予五年の判決)。壺井繁治も同月出獄。
同月、雑誌『文化集団』「ナルプ解体に関する大衆的討論」を特集し、上原清三=神山茂夫「『左翼』作家への抗議」、北田正夫「旧ナルプ中央委員諸君」、銘康雄「ナルプ解体について」、他七篇のはげしい批判文を収む。
六月二日、山田清三郎『プロレタリ

決定。
七月八日、岡田内閣成立。
同月、共産党多数派分派機関紙『多数派』を発行。
同月、三・一五、四・一六党中央部控訴判決。
同月、フランスでは社会党と共産党とのあいだに統一行動協定成立す。
同月、『大原社会問題研究所雑誌』再刊。
八月、全協関東地方協議会弾圧のために弱化し、統一的活動は困難になる。
九月、関西地方大風水害を契機に、関西の労働運動はしだいに活潑化す。同、5日から東京市従業員のゼネ・スト行われ、十一日間におよぶ。警視総監の強制調停により十八日より就業。
十月、この頃より全評を中心とする組合戦線の統一論主張されはじむ。

清三郎）ナウカ社刊 5
『マルクス・エンゲルスの芸術論』（上田進訳）岩波書店刊 5
前夜（鈴木清）『文学評論』6
そだち（松田解子）『文学評論』6
繭（平林たい子）『文学評論』6
いのち（藤島まき）『文学評論』6
茂の一家（佐々木一夫）『文化集団』6
六郷河畔（緑川貢）『現実』6
牡丹のある家（窪川稲子）『中央公論』 6
陋巷（北川冬彦）『中央公論』6
大鍋屑（松田解子）『文芸』6
獄（橋本英吉）『文芸春秋』6
創作方法と唯物弁証法（森山啓）『唯物論研究』6
日本のプロレタリア・リアリズム（岡沢秀虎）『早稲田文学』6
創作方法論の考察（新島繁）『文化集団』6
リアリズム論検討（青野季吉）『報知新聞』6・5〜10
文学と政治（亀井勝一郎）『現実』6
村の地主（平田小六）『文学評論』7
鰊漁場（島木健作）『文学評論』7

ア文学の新段階』の出版記念会が新宿白十字で開かれ、プロレタリア文学関係者および政治家約九十名出席す。
同月、村山知義、プロット解体・新劇大同団結を提唱す。
同月、宮本百合子、母親の危篤のため淀橋署より釈放さる。同月、中国の演劇指導者欧陽予倩来り、日本の新劇関係者と会う。
七月、『進歩』創刊（現代文化社）
同　五日、ソヴェート友の会解体を声明。
同　一五日、プロット解体決議を発表。
八月一七日より九月一日まで、ソヴエート作家同盟第一回大会開かる。
同　二八日、同大会において土方与志「芸術は民衆のものだ」を報告し小林多喜二の虐殺について全世界の作家に訴う。このことにより、土方は爵位を剝奪さる。
同月、山田清三郎、市ガ谷刑務所に下獄す。

同月、多数派の指導者検挙さる。
同月、コミンテルン代表より第二インター代表へスペイン労働者救援のため戦線統一を提議。
同月、フランス共産党人民戦線を提唱。
同月、スペインの各都市で労働者は反ファッショ武力闘争に進出。
同月ごろから東北地方の凶作深刻となる。身売り防止運動にはたらいていた青年たち検挙さる。
十一月、日本労働組合全国評議会結成さる。
同月、第二インター執行委員会はコミンテルンの提案を拒否。
同月、中国共産党大西遷。
十二月、全協中央部弾圧で殆んど壊滅。

独り立ち（窪川稲子）『新潮』7
プロレタリア文学の現勢（森山啓）
『中央公論』7
帰郷（村山知義）7
盲目（**島木健作**）『**中央公論**』**増刊7**
添書（本庄陸男）『コギト』7
育つ（草刈六郎）『文化集団』7
技術の精神と文学のリアリズム（三木清）『読売新聞』7・20〜22
社会主義的レアリズムはソヴェート文学の基本的方法である（ユーヂン・ファヂェーエフ）『文化集団』7
銀座八丁（**武田麟太郎**）『**東京・大阪朝日**』**8〜10年**
赤剝げ（藤島まき）『文学評論』8
待機（阿蘇弘）『文学評論』8
秋（「没落後」続篇）（佐々木一夫）『文学評論』8・10
友情（**立野信之**）『**中央公論**』8
育くむもの（平林英子）『婦人文芸』8
凶作地帯（平田小六）『文芸』8
『牡丹のある家』（窪川稲子）中央公論社刊 8
『一婦人作家の随想』（窪川稲子）ナウカ社刊 8

同月、戸坂潤、思想不穏の理由により法政大学講師を免職となる。
同月、雑誌『文学評論』「プロ文学の動向を聴く」座談会を誌上に掲載。出席者、藤森・山田・平田・渡辺・林・窪川(稲)・徳永・中野・森山・大竹。
九月、創作集『われらの成果』発行さる(三一書房)。「小祝の一家」(中条百合子)、「白い壁」(本庄陸男)、「癩」(島木健作)など十七篇を収む。
同月、文芸懇話会、物故文士慰霊祭行わるるも、小林多喜二を除外す。
同月、新協劇団結成。中央劇場、新築地の一部、美術座の合同により、秋田・村山・滝沢・久保・長田・小沢・三島・細川・仁木・染谷らが参加。この夏約百回に及ぶ会合を重ねてようやくここにいたる。
同月、横光利一の「紋章」(『改造』連載)完結し、好評をはくす。青野季吉「『紋章』の世界について」を書き、この作品を絶賛す。
十月、『文学評論』「作品検討座談会」

芸術的方法と科学的方法についての小感及び論争についての雑感（森山啓）『文化集団』8
鈍根録（中条百合子）『改造』8
戯曲・雨のあした（藤森成吉）『文学評論』9
工場地帯を歩く（徳永直）『中央公論』9
加奈子（大谷藤子）『文学評論』9
『囚われた大地』（平田小六）ナウカ社刊 9
『転形期の文学』（亀井勝一郎）ナウカ社刊 9
苦悶（島木健作）『中央公論』10
炭坑（橋本英吉）『文学評論』10〜
新聞配達夫（楊逵）『文学評論』10
毒（木村滑治）『文学評論』10
『一九三四年詩集』（小熊秀雄他編）前奏社刊 10
社会状勢からの文学の乖離について（青野季吉）『新潮』10
反動期に於ける文学と哲学（戸坂潤）『文芸』10
モダニズム文学批判（戸坂潤）『行動』10
ダイヴィング（舟橋聖一）『行動』10

を誌上に掲載。江口・徳永・中条・亀井・窪川（鶴）ら出席。
同月三日、東京地方裁判所において蔵原惟人の第一審公判開かる。「日本の国体に対してどう考えているか」の問いに対し蔵原は、「共産党のスローガン（天皇制打倒）を私は支持します」と答う。
同月、中条百合子、『文学評論』誌上に「近頃の感想」というエッセイを発表し、プロレタリア文学の党派性の喪失と批評の立ち遅れを痛烈に批判す。
同月、舟橋聖一「ダイヴィング」『行動』に発表され、行動主義文学の論議ますます活潑となる。
十二月、この頃『新文戦』終刊。
同月、『知識』（『読書』改題・叢文閣刊）創刊。
同月、日本新劇倶楽部創立（三八年三月解散）
同月、中条百合子「冬を越す蕾」を『文芸』に発表し、転向ならびに転向小説を批判す。
同月、『季刊・理論』発刊（ナウカ社）

今日の文化の諸問題（中条百合子）『文化集団』10
政治と文学に就ての感想（壺井繁治）『進歩』10
最近の文学と自我の問題（窪川鶴次郎）『文化集団』10
工場へ（加賀耿二）『改造』10
山谿に生くる人々（葉山嘉樹）『改造』10
火の物語（本庄陸男）『文芸』10
『獄』（島木健作）ナウカ社刊 10
『文芸百科小辞典』（山田清三郎編）白楊社刊 10
「第三新生丸」後日譚（荘司重夫）『文学評論』11
医者（島木健作）『文学評論』11
イデオロギー的批評を望む（中野重治）『文学評論』11
転向文学・是々非々（窪川鶴次郎）『文化集団』11
文学と弁証法（三枝博音）『中央公論』11
土地（本庄陸男）『文化集団』11
養成工（杉山ナヲ江）『文化集団』11
労働者第一課（貴司山治）『文化集団』11

第一集リアリズム研究として森山啓らが執筆。
同月末、文化連盟所属団体六（プロキノ、P・M、プロフオト、科同、イーペ、戦無）約四三〇、未解体団体員（ナルプ、P・P、プロット）約一五〇、地協・地協準一四、約八〇〇名といわる。執拗な再建活動も相つぐ弾圧のため以後次第に壊滅にいたらしめらる。
この年、ナルプ解体の後をうけて、行動主義、知識階級論をめぐって多くの論議がかわされ、シェストフ、不完の文学などが流行す。転向作家により転向文学が盛んに書かれ、また転向をめぐってプロレタリア作家、自由主義作家、批評家の発言多し。

文学と社会及び今日の文学（ゴーリキイ・外村史郎訳）『文化集団』11
風雲（窪川鶴次郎）『中央公論』11
エピグラム（詩・森山啓）『中央公論』11
女優達（藤森成吉）『改造』11
嵐の朝（岩藤雪夫）『文芸』11
『文学は如何なる道に進むべきか』（ソヴェート作家同盟大会報告・討論＝外村史郎訳）橘書店刊 11
一九三四年度の文学における諸問題（森山啓）『文学評論』12
三四年度に活動したプロ派の新人たち（徳永直）『文学評論』12
本年度におけるブルジョア文学の動向（中条百合子）『文学評論』12
『全ソ作家大会報告』（『文評』編集部訳編）ナウカ社刊 12
熔鉱炉（大江賢次）『文学評論』12
行進図（松田解子）『文学評論』12
めらわど（平田小六）『改造』12
冬枯れ（徳永直）『中央公論』12
『地上に待つもの』（山田清三郎）ナウカ社刊 12
冬を越す蕾（中条百合子）『文芸』12

一九三五年（昭和一〇年）

牛車（呂赫若）『文学評論』1
スケッチ三題（徳永直）『文学評論』1
一つの典型（平林英子）『文学評論』1
回顧（片岡鉄兵）『文学評論』1
四壁暗けれど（島田和夫）『文学評論』1
第一章（中野重治）『中央公論』1
小鬼の歌（野上弥生子）『中央公論』1
断崖の下の宿屋（葉山嘉樹）『改造』1
通俗文学の問題（大森義太郎）『改造』1
桜（平林たい子）『新潮』1
母の手紙（村山知義）『新潮』1
転向者（細田民樹）『文芸』1
酔いどれの町（堀田昇一）『文芸』1
真実一路（山本有三）『主婦之友』1〜
彷徨える女の手紙（徳永直）『行動』1
行動主義理論（小松清）『行動』1

一月、雑誌『生きた新聞』創刊（三一書房）
同月、『文学評論』新人座談会を掲載。本庄陸男、平田小六、島木健作ら出席。
同月、久保栄、『都新聞』紙に「迷えるリアリズム」を発表、社会主義リアリズムの機械的な理解を批判し、いわゆる社会主義リアリズム論争の口火を切る。
同月、中条百合子、獄中の宮本顕治と正式に結婚す。
二月、大阪にコップ再建運動。
同月、第一次「唯物論全書」（全二四冊、三笠書房）の刊行はじまる。
同月、『文化集団』終刊（三巻二号、全二一冊）
同月、『世界文化』創刊（世界文化社）
同月、大森義太郎、行動主義にたいし活潑な批判をはじめ、論争くりかえさる。
同月二十日、小林多喜二をしのぶ会

一月二十三日、美濃部博士貴族院にて人権蹂躙を糺弾す。
同月、中国共産党、毛沢東の指導権を確立。
二月、貴族院各派有志、民主主義思想に反対する教育刷新決議案提出を決定。
同月、軍部、愛国団体、美濃部達吉博士の天皇機関説攻撃に狂ほんす。
同月、日本の国際連盟脱退効力を発生。
三月、国体明徴決議案衆議院にて満場一致可決。
同月、上海永安紡績セネ・スト起る。
同月、袴田里見検挙され共産党中央委員会壊滅す。
同月、ドイツ再軍備を声明。
同月、『労働雑誌』創刊。

『銀座八丁』（武田麟太郎）改造社刊 1

迷えるリアリズム（**久保栄**）『**都新聞**』1

プロレタリア文化戦線の見透し（**北巌次郎＝神山茂夫**）『**生きた新聞**』1

背服（貴司山治）『文学評論』2〜

底流（沙和宋一）『文学評論』2

早苗君の給料（竹内昌平）『文学評論』2

長男（安瀬利八郎）『文学評論』2

一時期（広津和郎）『中央公論』2

あらしの村（鈴木清）『中央公論』2

黎明（**島木健作**）『**改造**』2

文学の指導性と指導性の文学（青野季吉）『改造』2

妻恋行（三好十郎）『新潮』2

知識階級と文学（森山啓）『新潮』2

行動主義文学批判（**大森義太郎**）『**文芸**』2

戦うことと避けて通ることと（中野重治）『文芸』2

「文学者に就て」について（中野重治）『行動』2

「浪曼派」と「能動主義精神」批評（板垣直子）『セルパン』2

が神田神保町大雅楼でひらかれ、小林の家族、蔵原惟郭夫妻、宮本百合子、窪川稲子、中野重治ら二十八名出席す。

同月、北巌次郎（神山茂夫）の「社会主義リアリズムの批判」が『生きた新聞』に発表され、**社会主義リアリズム論争本格化す**。以後、中野・森山・久保・神山・金斗鎔・伊藤貞助らのあいだで、主として社会主義リアリズムの日本への具体化および文学運動のスローガンの問題を中心に論争さる。

同月、間宮茂輔出獄。

三月、『社会評論』創刊（ナウカ社）

同月、『新文芸』創刊。

同月、ナウカ社より「小林多喜二全集」の刊行はじまる。

同月、『日本浪漫派』創刊。

同月、ソヴェート作家同盟幹事会第二回プレナム開かる。

四月、『文学評論』三カ月にわたり「社会主義リアリズムの再検討」を特集す。

四月、美濃部博士の著書発禁となり司法省の取調べを受く。

同月、ルーズヴェルト大統領失業救済事業法案に署名、ニュー・ディールはじまる。

五月一日、分裂メーデー。

六月、瞿秋白逮捕され長汀にて銃殺さる。

七月二八日〜八月二〇日、コミンテルン第七回世界大会モスクワに開かれ、六五支部五三〇名参加、統一戦線と人民戦線・労働組合の統一とプロレタリア統一政党の問題を討議し**画期的な反ファッショ人民戦線の方針を決定す。**

同月、フランス人民戦線確立す。

八月、政府国体明徴声明書を発表。

同月、ソ同盟スタハーノフ運動開始。

同月　中共および中国ソヴェート政府は抗日救国統一戦線の宣言を発

故旧忘れ得べき（高見順）『日暦』・**『人民文庫』2〜7・11年3〜9**

社会主義的リアリズムの批判（**北畝次郎**）**『生きた新聞』2**

流れ（**立野信之**）**『文学評論』3〜8 未完**

楽園の片隅（細野孝二郎）『文学評論』3

梶川ツルの死（徳永直）『社会評論』3

『文学古典の再認識』（芸術遺産研究会編）現代文化社刊 3

文学に関する最近の感想（徳永直）『文芸』3

能動精神に関する論争に就て（舟橋聖一）『文芸』3

ポーシア（藤沢桓夫）『改造』3

ところはちぶ（橋本英吉）『文芸春秋』3

苦痛（片岡鉄兵）『文芸春秋』3

雪の夜の話（加賀耿二）『文芸』3

血縁（黒島伝治）『文芸』3

雨がえし（平田小六）『行動』3

洋燈（荒木巍）『行動』3

大森義太郎氏の所論を駁す（勝本清一郎）『中央公論』3

同月、『改造』に横光利一『純粋小説論』発表。

同月二十七日、メッカ・テンプルでアメリカ作家大会開かれ、アメリカ作家同盟成立す。

五月、宮本百合子、淀橋署に検挙さる。

同月、窪川稲子検挙さる。

同月十日、「文学評論」創刊一週年記念「ソヴェート映画とソヴェート・レコードの夕べ」が日比谷蚕糸会館で開かれ、秋田雨雀、徳永直らが講演をおこなう。

同月、「文学建設」廃刊。

六月二十日、今野大力死す。

同月二十四日、本庄陸男の短篇集『白い壁』の出版記念会が新宿白十字で開かれ、中野重治、武田麟太郎ら十八名出席す。

六月二十一日—二十五日、文化擁護国際作家会議パリで開かる。

七月一日、小熊秀雄の『小熊秀雄詩集』および『飛ぶ橇』の出版記念会が新宿オリンピックで開かれ、約八

表。

九月、美濃部博士起訴猶予となり、貴族院議員の辞表提出声明を発表。この声明を不満とする軍部は徹底糺明を叫ぶ。

同月、フランスCGTとCGTUの大会が同時に開かれ、労働組合の歴史的統一行わる。

十月、政府国体明徴に関する実績報告を発表。

同月、陸海両大臣首相と会見し、天皇機関説信奉者の徹底的処分を要求す。

同月、イタリー、エチオピアにたいし侵略戦争を開始。

同月、共産党多数派解体す。

十一月、中国共産党大遠征終り、延安に根拠地の建設はじまる。

十二月、劉少奇の指導下に北京の学生連合会を中心とする反帝救国の大デモ行われ、これに続き中国各地で

現代文学の進歩性（窪川鶴次郎）『中央公論』3
浄穢の観念（武田麟太郎）『中央公論』3
三つの問題についての感想（中野重治）『文学評論』3
社会主義的リアリズムの「批判」（森山啓）『文学評論』3
『砂漠の歌』（雷石楡）前奏社刊　3
汚辱の中（藤島まき）『文学評論』4・5・10
カンナニ（湯浅克衛）『文学評論』4
社会主義リアリズムの概念規定とわが国プロレタリア文学の基本的創作方法（小堀甚二）『文学評論』4
プロレタリア・リアリズムと社会主義的リアリズム（森山啓）『文学評論』4
社会主義的リアリズムを論ず（佐分武＝伊藤貞助）『やあ諸君！』4
乳房（中条＝宮本百合子）『中央公論』4
焰の記録（湯浅克衛）『改造』4
怨憎会（片岡鉄兵）『改造』4
文学と社会的関心（大森義太郎）『改造』4

十名出席す。
同月、『日暦』創刊。
同月、『文学案内』（文学案内社、貴司山治編集）創刊。
同月、著作権審査委員会創設され、著作権保護の名目による内務省の文芸統制が具体化す。
同月、文芸懇話会賞が横光、室生に受賞されるも、投票の結果は島木健作が第二位であったことが暴露され、文芸統制の具体的な表われとして論議の的になる。
八月、林房雄、刑期の三分の二で仮出所す。
九月、『文学評論』「文芸統制」をどう見る？　というアンケートを発し、回答を掲載す。
同月、林房雄「作家クラブのこと」と題する一文を『文学評論』に発表し、プロレタリア作家の再組織を提唱す。
同月、『行動』終刊。
十月、勝浦町文化サークルのメンバー二十三名検挙さる。

反帝デモ拡大す。
同月、アメリカCIO生る。
十二月、大本教第二次検挙おこなわる。
同月、無政府共産党検挙さる。

女史（村山知義）『文芸春秋』4
田園（平田小六）『新潮』4
各人各説（立野信之）『新潮』4
雪の夜の話（加賀耿二）『文芸』4
鈴木・都山・八十島（**中野重治**）『**文芸**』4
『市井事』（武田麟太郎）竹村書房刊4
雪明り（荒木巍）『経済往来』4
詩集『潮流』（森山啓）ナウカ社刊5
書記（竹内昌平）『文学評論』5
社会主義リアリズムと反資本主義リアリズム（**久保栄**）『**文学評論**』5
中条の『乳房』その他（**森山啓**）『**文学評論**』5
私の「黎明期」（徳永直）『社会評論』5・6
要求（島木健作）『社会評論』5
劇場（村山知義）『中央公論』5
水路（葉山嘉樹）『改造』5
創作に於けるゴルキー的方法について（徳永直）『改造』5
県会（島木健作）『文芸』5
地の楯（平田小六）『文芸』5
『**小熊秀雄詩集**』（**小熊秀雄**）耕進社刊5

同月、詩雑誌『太鼓』創刊。
同月十五日、林房雄出獄歓迎会が新宿白十字で開かれ、百三十数名出席す。
同月、平林たい子「林さんの提唱について」を『文学評論』に発表し、新組織をプロレタリア作家のみの結集とする林の主張に賛成す。
同月、島崎藤村「夜明け前」完結す。
同月、宮本百合子、治安維持法違反として起訴され、市ガ谷刑務所に送らる。
同月、「文学評論」賞設立さる。
十一月、『詩精神』終刊。
同月、諷刺文学研究会、中野、村山、窪川（鶴）、加藤悦郎等の発起で創立。
同月四日、サンチョ・クラブ結成さる（中野、窪川、森山、村山、坂井、江森、松山文雄らによる）
同月、森山啓、島木健作「文学界」に入り、その可否をめぐり、論議起る。
十二月十九日、独立作家倶楽部結成

『世紀の旗』（渡辺順三編の歌集）文泉閣刊 5
『文学論』（森山啓）三笠書房刊 5
智識階級論の一素材（平林たい子）『行動』5
一メンバー（窪川鶴次郎）『行動』5
村の家（**中野重治**）『**経済往来**』5
『冬枯れ』（徳永直）ナウカ社刊 5
『ダイヴィング』（舟橋聖一）紀伊国屋刊 5
『白夜・劇場』（村山知義）竹村書房刊 5
人間の値段（葉山嘉樹）『文学評論』6
けむり（本庄陸男）『文学評論』6
喉仏（打木村次）『文学評論』6
青春―「村の地主」後篇―（平田小六）『文学評論』6
反対論者達に答える（**森山啓**）『**文学評論**』6
社会主義的リアリズムか×××（革命的）リアリズムか（**金斗鎔**）『**文学評論**』6
文学に於ける偶然性と必然性（戸坂潤）『文学評論』6
最低の組織（徳永直）『新潮』6

（発起人・林、青野、江口、平林、武田。）

章魚（平林たい子）『新潮』6
鶏飼いのコンミュニスト（平林彪吾）『文芸』6
一過程（島木健作）『中央公論』6
現代の浪漫主義について（三木清）『中央公論』6
風迹（芹沢光治良）『中央公論』6
長雨（細田源吉）『中央公論』6
一袋の駄菓子（窪川稲子）『文芸春秋』6
技術と芸術の問題（三枝博音）『中央公論』6
進歩的文学者の共働について（貴司山治）『行動』6
反ファシズム文学の統一戦線（土方定一）『行動』6
『冬を越す蕾』（中条百合子）現代文化社刊 6
『マルクス・エンゲルス芸術論』（外村史郎訳）改造社刊 6
『黎明期』（徳永直）ナウカ社刊 6
『白い壁』（本庄陸男）ナウカ社刊6
『炭坑』（橋本英吉）ナウカ社刊 6
正義派（立野信之）『文芸春秋』6
暁前の死（加賀耿二）『文芸』6・7・8

観念の怪物（詩と漫画）（窪川鶴次郎・柳瀬正夢）『中央公論』6
臨時列車（武田麟太郎）『行動』6
谷底（荒木巍）『改造』6
詩集『飛ぶ橇』（小熊秀雄）前奏社刊 6
習志野つづき（金親清）『文学評論』7
苦力監督の手記（里村欣三）『文学評論』7
きれぎれの感想（中野重治）『文学評論』7
行動主義とプロレタリア文学（小松清）『文学評論』7
社会主義的リアリズムの擁護（川口浩）『文学評論』7
明治の社会小説と家族問題（玉城肇）『文学評論』7
『論議と小品』（中野重治）現代文化社刊 7
田舎者（平田小六）『新潮』7～12
行動主義文学批判（板垣直子）『新潮』7
朝子たち（村山知義）『文芸』7
横光利一論（戸坂潤）『文芸』7
一風景（島木健作）『行動』7

日月ホール（武田麟太郎）『改造』7
『童児』（平田小六）ナウカ社刊 7
渡辺崋山（藤森成吉）『改造』7〜
10
芸術の国民的評価と世界的評価（勝本清一郎）『行動』7
文学大衆化問題の再三提起（貴司山治）『文学評論』8・9
意欲の再建とリアリズムの変革（田辺耕一郎）『文学評論』8
文芸統制の問題について（中野重治）『文学評論』8
オンドル夜話（上田広）『文学評論』
8
壊滅後（島木健作）『文芸春秋』8
土生玄碩（貴司山治）『行動』8
下界の眺め（武田麟太郎）『都新聞』
8〜36・2
死に近く（島木健作）『経済往来』8
『今日様』（葉山嘉樹）ナウカ社刊8
『文学論争』（森山啓）ナウカ社刊8
戯曲・幽霊荘（三好十郎）『文学評論』9
台湾行（佐々木一夫）『文学評論』9
作家クラブのこと（林房雄）『文学評論』9

女の産地（徳永直）『中央公論』9
蒼氓（石川達三）『文芸春秋』9
後援会（武田麟太郎）文芸 9
破廉恥（大江賢次）『文芸』9
文化の擁護（ジイド）『文芸』9
人間再生と文化の課題（三木清）『中央公論』9
遺稿（武田麟太郎）『経済往来』9
独房文学論（林房雄）『経済往来』9
『浪漫主義者の手帖』（林房雄）サイレン社刊 9
おちかを廻って（上田進）『文学評論』10
戯曲・貧（蓮見大作）『文学評論』10
創作的論争のために敢て弓を鳴らす（金親清）『文学評論』10
プロレタリア文学に対する能動精神の立場（十返一）『文学評論』10
作家の世界観における一問題としての「必然」と「偶然」（森山啓）『文学評論』10
水（丁玲）『日本評論』10
突堤（中条百合子）『中央公論』10
同窓会（中野重治）『中央公論』10
負けた（葉山嘉樹）『中央公論』10
金君見舞（村山知義）『中央公論』10

鉄屑の中（窪川稲子）『中央公論』10
『悲しき愛情』（平林たい子）ナウカ社刊 10
『芸術論』（甘粕石介）三笠書房刊 10
血の鶴嘴（加賀耿二）『文学案内』10
〜
逆流に立つ男（徳永直）『文学案内』10
典型（島木健作）『中央公論』10
一つの転機（島木健作）『改造』10
起承転々（高見順）『文芸春秋』10
後退（立野信之）『文芸』10
弱虫（徳永直）『文学評論』11
鼬（陸中巌）『文学評論』11
父と子（木村清治）『文学評論』11
早産（平林彪吾）『文学評論』11
三代の分割（神庭与作）『文学評論』11
農民文学の意義、任務（高倉テル）『文学評論』11
女の問題（平林たい子）『改造』11
生活（島木健作）『文芸春秋』11
わが白痴（村山知義）『新潮』11
芸術の国民的形態と国際的形態（勝本清一郎）『新潮』11
戯曲・断層（久板栄二郎）『文芸』11

道筋（窪川稲子）『文芸』11
『逆流に立つ男』（徳永直）文学案内社刊 11
『転向作家の手記』（細田源吉）健文社刊 11
『啄木短歌評釈』（矢代東村）ナウカ社刊 11
『文化の擁護』（国際作家会議報告・小松清編）第一書房刊 11
再建（島木健作）『社会評論』11～中絶。
詩集『辛抱づよい者へ』（松田解子）同人社刊 12
水の上（本庄陸男）『文学評論』12
幹部（竹内昌平）『文学評論』12
戦慄（田中耕二）『文学評論』12
労働者作家の擡頭（徳永直）『文学評論』12
芸術外の芸術大衆化論（貴司山治）『文学評論』12
『中野重治詩集』（中野重治）ナウカ社刊 12
『子供と花』（中野重治）沙羅書店刊12
荒地（橋本英吉）『改造』12
リアリズムの一般的表象（久保栄）『都新聞』12

一九三六年（昭和一一年）

全線（上田広）『新文学』1・2・3
小説の書けぬ小説家（中野重治）『改造』1
くれない（窪川稲子）『婦人公論』1～5
長英の行きかた（藤森成吉）『文学評論』1
工場にもどって（岩藤雪夫）『文学評論』1
旋盤工（大元清二郎）『文学評論』1・2
黎明期・第二部（徳永直）『文学評論』1・2・3・4
リアリズム強化のために（長谷川一郎）『文学評論』1
農民文学の再建（大滝重直）『文学評論』1
『一九三五年詩集』（小熊秀雄他編）前奏社刊 1
現代小説に映じた朝鮮的現実・張赫宙論（金子和）『文学評論』1・2
朝鮮と文学（朴勝極）『文学評論』1
共同耕作（橋本英吉）『文学評論』2
朝やけ（大江賢次）『文学評論』2

一月、雑誌『詩人』（『詩精神』改題・文学案内社）創刊。
同月一九日、独立作家倶楽部創立総会開かる。会員約九〇名、席上、倶楽部をプロレタリア作家だけの組織にするという林、島木らの主張と、広く自由主義作家をも含めよという中野、間宮らの主張対立す。この問題はその後数カ月に亙って林『文芸時評――独立作家クラブの意義』（『文学評論』二月号）、中野『ある日の感想』（同三月号）などで論ぜられ、『文学評論』三月号は『独立作家クラブへの希望』を特集し、間宮、松田、新田、橋本、島木らの発言を収む。
同月、鹿地亘、上海に脱出す。
一月から一〇月まで『文学界』に阿部知二『冬の宿』連載。
二月、ナウカ社より『小林多喜二全

一月、日本共産党大阪地方組織検挙さる。
同月、スペイン、人民戦線成立。
二月、スペインに人民戦線内閣成立。
同月、二・二六事件起る。
同月、岡野・田中署名の『日本の共産主義者への手紙』公表さる。
三月、ドイツ軍隊ラインランドに進駐。
五月、イタリア、エチオピアを併合。
同月、フランス総選挙で人民戦線勝利。
六月、日本共産党中央再建準備会結成さる。
同月、フランスではブルーム人民戦線内閣成立。
七月、阪井徳三ら『時局新聞』関係者検挙さる。

アン・ヘエラ（張赫宙）『文学案内』2
若い環境（武田麟太郎）『中央公論』2
第一義の道（島木健作）『**中央公論**』2
『思想としての文学』（戸坂潤）三笠書房刊 2
プロレタリア文学の新世代（窪川鶴次郎）『新文学』2
夕焼けの窓（間宮茂輔）『文芸』2
『文芸学の発展と批判』（シルレル・熊沢復六訳）清和書店刊 2
『真実』の問題におけるゴリキイとジイドその他（森山啓）『文学評論』2
或る平凡な話（加賀耿二）『文学評論』3
小作三反（藤島まき）『文学評論』3
通俗文学と純文学その他（岡邦雄）『文学評論』3
日本ペン倶楽部とプロレタリア作家（青野季吉）『文学評論』3
芸術的方法と世界観の問題（窪川鶴次郎）『文学評論』3
生きんとする両人（荒木巍）『人民集』普及版の刊行はじまる。

同月、学生新劇倶楽部結成。

三月、新協劇団『夜明け前』（島崎藤村作）を脚色上演。

三月、関西独立作家倶楽部結成（会員約六〇名）。

同月、『人民文庫』創刊。武田麟太郎を中心に同人雑誌『日暦』と『日本浪漫派』に吸収されなかった『現実』の同人を結集。高見順、新田潤、本庄陸男、那珂孝平、田宮虎彦、堀田昇一らが執筆し、やや遅れて井上友一郎、田村泰次郎らも参加した。

四月、『唯物論全書』の第二次刊行（全二六冊）はじまる。

同月、日本政治経済研究所設立さる。

同月二五日、詩人クラブ第一回総会が新宿京王電車階上京王パラダイスで開かれ、高橋新吉、小熊秀雄、壺

同月、モロッコにファシスト軍反乱し、**スペイン内乱はじまる。**

八月、ジノヴィエフ、カーメネフら死刑の宣告をうく。

同月、パリ、ロンドンなどでスペイン共和国救援の大集会続々と開かる。

九月、スペインに共産党閣僚二名を含むカバレロ人民戦線内閣成立す。

十月、フランコ反革命政府の首班となる。

十一月、日独防共協定成立。

同月、フランコ軍はマドリッドを攻撃し、共和国政府はヴァレンシアに移る。

同月、第八回全同盟ソヴェート大会はスターリン憲法を採択。

十二月、西安事変。

同月、労働雑誌社関係十二名、政経関係者七名検挙さる。

同月、十五府県に亘り共産党関係者六三三名検挙さる。

文庫』3
癌（新田潤）『人民文庫』3
『小説の本質』（コム・アカデミー文学部編・熊沢復六訳）3
母（間宮茂輔）『文学評論』3
漁火（島田和夫）『文学評論』4
一つのタイプ（徳永直）『改造』4
マイナスの部分（堀田昇一）『人民文庫』4
新しき人民文学の建設（江口渙）『人民文庫』4
感情記録（那珂孝平）『人民文庫』4
『芸術学』（高冲陽三）ナウカ社刊 4
『文芸と社会』（青野季吉）中央公論社刊 4
流れ・第二部（**立野信之**）『**文学評論**』**5〜7**『**人民文庫**』**10〜37年・3完**
藻（宮川玄）『文学評論』4
地下道の春（浅井花子）『文学評論』4・6
詩集『百万人の哄笑』（世田三郎＝坂井徳三）時局新聞社刊 5
芸術についての断想（新島繁）『文学評論』5
蔵原惟人の一面（松本正雄）『文学

井繁治、中原中也、江森盛弥、草野心平ら二〇名が出席し、規約を決定す。
六月、マクシム・ゴーリキー死す。（モスクワ）。
同月二九日、中条百合子保釈出所す。
七月、ナウカ社へ弾圧。社員総検束さる。このため『**文学評論**』**は八月号**（**ゴーリキー追悼号**）**を最後に廃刊となる**（三巻八号、全三十一冊）。
同月一〇日、講座派の主要な理論家山田盛太郎、平野義太郎、小林良正ら検挙さる。いわゆる**コム・アカデミー事件**。
八月、『文芸』に石坂洋次郎の『麦死なず』発表さる。
一〇月、『詩人』廃刊。
十一月二十日、小野宮吉歿す。
十二月、雑誌『歴史科学』終刊。

評論』5

島木健作「一つの転機」批判（平八郎）『文学評論』5

描写の後に寝ていられない（高見順）『新潮』5

小説「一つのタイプ」について（中野重治）『文学評論』5

醜聞（渋川驍）『人民文庫』5

平和な方（松田解子）『人民文庫』5

『文芸の本質』（コム・アカデミー文学部編・熊沢復六訳）清和書店刊5

『獄中からの手紙』（トルラア・内山敏訳）芝書店刊 5

『集団行進』（歌集・渡辺順三編）文泉閣刊 5

地下室（新田潤）『人民文庫』6

鋼鉄はいかに鍛えられたか（オストロフスキイ・杉本良吉訳）『文学評論』6・7

文学的真実について（杉山英樹）『文学評論』6

『ロシア文芸批評史』（ルナチャルスキイ・浜野浩訳）ナウカ社刊 6

『トルストイをどう見るか？』（ソ連

アカデミイ文芸部編・大山達雄訳）ナウカ社刊 6

『近代日本文学評論史』（土方定一）西東書林刊 6

会議（竹内昌平）『人民文庫』7

蒙昧期（那珂孝平）『人民文庫』7

女の条件（上野壮夫）『人民文庫』7

雪の記録（沙和宋一）『文学評論』7

主観的作家（森山啓）『文学評論』7

『文芸のジャンル』（コム・アカデミー文学部編・熊沢復六訳）清和書店刊 7

人事興信所（堀田昇一）『人民文庫』8

マキシム・ゴーリキイの発展の特質（中条百合子）『改造』8

逝けるマキシム・ゴーリキイ（中条百合子）『婦人公論』8

マキシム・ゴリキイの風態―彼によって描かれた婦人（中条百合子）『文学評論』8

ゴリキイと日本文学（中野重治）『文学評論』8

獣神（村山知義）『中央公論』9

茛（湯浅克衛）『人民文庫』9

調停（竹内昌平）『人民文庫』9

悪鬼の譜（那珂孝平）『人民文庫』9
孤相（大谷藤子）『人民文庫』9
川（新田潤）『人民文庫』9
震撼された易者（平林彪吾）『人民文庫』9
ヒューマニズムの文学（青野季吉）『新潮』10
現代文化と思想的文学的傾向（窪川鶴次郎）『日本評論』10
『日本文学の世界的位置』（勝本清一郎）協和書院刊 10
三十年代一面（島木健作）『日本評論』11
女の子・男の子（本庄陸男）『人民文庫』11
『リアリズム』（文芸百科全書・熊沢復六訳）清和書店刊 11
悪夢（細野孝二郎）『人民文庫』12
世界観と創作方法との矛盾について（杉山英樹）『唯物論研究』12
『文学への道』（ギノグラードフ・熊沢復六訳）清和書店刊 12
『小説と論理』（三枝博音）野田書房 12
『思想と風俗』（戸坂潤）三笠書房刊 12

現代詩（武田麟太郎）『改造』1
伸びゆくもの（島木健作）『中央公論』1
雑沓（中条百合子）『中央公論』1
摩擦（片岡鉄兵）『中央公論』1
はらわた（藤森成吉）『日本評論』1
時雄とその母（村山知義）『日本評論』1
寒い廊下（村山知義）『新潮』1
ふいらんでや（平田小六）『新潮』1
仏壇（徳永直）『新潮』1
二人の母（島木健作）『新潮』1
若い職工と子供（窪川稲子）『新潮』1
逆光線（本庄陸男）『人民文庫』1
その日ぐらし（岩藤雪夫）『人民文庫』1
衆目（那珂孝平）『人民文庫』1
花霧荘（菊池克巳）『人民文庫』1
加代さんに就いて（高見順）『人民文庫』1
自由ガ丘パルテノン（**堀田昇一**）『**人民文庫**』**1〜3**
認識論としての文学（戸坂潤）『唯

三月、『インテリゲンチャ』創刊。伊藤整・森山啓・阿部知二ら執筆。三号で廃刊。

五月、新短歌クラブ発会式警視庁により不許可となる。

四月、第三次『唯物論全書』の刊行はじまる。

六月、国際ローマ字クラブ結成さる（山形）

同月、河上肇博士は三年九ヵ月の刑を終えて小菅刑務所を出た。そのときの歌三首のうち「岩清水あるかなきかに世を経てと詠み出でし人の心偲ばゆ」

同月、前進座演劇映画研究所創立。

同月、島崎藤村は芸術院会員を辞退。日本の文学は過去において政府の保護を受けずに自力で発達してきたのだから、ということを遠慮がちなこ

一月、パリでスペイン国民救援国際大会開かる**各国の民主主義者共産主義者は続々とスペイン政府軍に参加す。**

同月、トロツキストの反革命陰謀バクロされ徹底的な追究はじまる。

二月、ヒットラー支配下のドイツでもスペイン国民救援活動が非合法にすすめられ、ミュンヘン、アーヘンなどで多数が検挙さる。

二月、文化勲章制定さる。

物論研究』1
路傍の石（山本有三）『朝日新聞』1〜6
『小説の書けぬ小説家』（中野重治）竹村書店刊1
『機械詩集』（田木繁）文学案内社刊1
収穫以前（森山啓）『文芸』2
車中の四人（武田麟太郎）『中央公論』2
帽子（竹内昌平）『人民文庫』2
心躍る習慣（新田潤）『人民文庫』2
悲しい時代に（木本欽吾）『人民文庫』2・3
一つの世界（志摩雅夫）『人民文庫』2
『乳房』（中条百合子）竹村書房刊2
『日本文学原論』（近藤忠義）同文書院刊 2
『文芸評論』（宮本顕治）六芸社刊2
エルドラド明し（平林たい子）『中央公論』3
希望館（加賀耿二）『中央公論』3
父たち母たち（村山知義）『文芸』3
『東京市鑑』（竹内昌平）人民社刊3
不振のプロレタリア文学と其課題

とばのなかでのべている。

（青野季吉）『中央公論』3

文学に於ける日本的なるもの（中条百合子）『文芸春秋』3

文学に於ける新官僚主義（中野重治）『新潮』3

妻の問題（島木健作）『改造』4

七百二十六番（片岡鉄兵）『文芸』4

ヒューマニズムへの道（宮本百合子）『文芸春秋』4

『日本に於ける社会主義文学の擡頭期』（武田麟太郎編）人民社刊 4

『文芸学の方法』（文芸百科全書・熊沢復六訳）清和書店刊 4

戯曲・北東の風（**久板栄二郎**）『**文芸**』4

『昼夜随筆』（中条百合子）白楊社刊 4

飛行機小僧（**徳永直**）『**中央公論**』5

血の値段（平林彪吾）『人民文庫』5

あらがね（**間宮茂輔**）『**人民文庫**』5

〜

猫車（中条百合子）『改造』6

戯曲・地熱（三好十郎）『中央公論』6

汽車の罐焚き（**中野重治**）『**中央公論**』6

八年制（徳永直）『日本評論』6
『短篇・長篇小説』（文芸百科全書・熊沢復六訳）清和書店刊 6
『北東の風・断層』（久板栄二郎）竹村書房刊 6
『文芸学』（本間唯一）三笠書房刊 6
『再建』（島木健作）中央公論社刊、発売直後発禁 6

日本プロレタリア文学大系 7　定価一五〇〇円

一九五五年四月三十日 第一版発行
一九六九年七月三十一日 第二刷発行

編者代表　野間　宏
発行者　竹村　一
発行所　株式会社　三一書房
東京都千代田区神田駿河台二の九
電話東京（二九一）三一三一～五
振替東京　八四一一六〇番
郵便番号　一〇一
印刷　文栄印刷株式会社
製本　有限会社佐伯製本所

落丁・乱丁本はおとりかえします

全9巻　第8回配本

7

三一書房